

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集

田村遺跡群Ⅱ

第七分冊

第85集
二〇〇四・三

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県教育委員会

田村遺跡群Ⅱ

高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第7分冊

M～Q区の調査

大溝・流路

2004.3

高知県教育委員会

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集

田村遺跡群Ⅱ

高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第7分冊

M～Q区の調査
大溝・流路

2004.3

高知県教育委員会

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は高知空港再拡張整備事業に伴う高知県南国市田村に所在する田村遺跡群の発掘調査報告書である。本報告書は「田村遺跡群」の第7分冊であり、調査区M区からQ区と大溝・流路についての調査成果報告である。
2. 発掘調査及び整理作業は高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局と委託契約を結び、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査・整理作業を実施したものである。発掘調査は平成8年7月から平成13年12月迄行ない、引き続き平成16年3月まで整理作業を行なった。
3. 本書の編集は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが行なった。執筆は出原恵三、畠中宏一、坂本憲昭、吉成承三、坂本裕一、小野由香、久家隆芳、宮地啓介、松本安紀彦が行ない、本文中に執筆者名を記してある。また、「大溝・流路」については、弥生時代前期溝1 坂本憲昭、前期溝2 小野由香、前期溝3 出原恵三、大溝1・2 吉成承三、大溝3~6 久家隆芳、大溝7 吉成承三、流路1 坂本憲昭がそれぞれ執筆し、編集実務は吉成承三が行なった。
4. 調査体制等については第1分冊に記した。また多くの方々、諸機関からご協力、ご教授を賜った。ここでは逐一、芳名をあげないが感謝したい。
5. 出土遺物等の資料は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが保管している。また遺物の注記名は西暦の下二桁を頭に冠し、遺跡名略記号NTをつけている。調査は1996年から2001年迄実施しているところから、注記名は「96-9NT」、及び「97-1NT」から「01-1NT」となっている。
6. 遺物観察表は膨大な量のため、デジタルデータとして本書に添付したCDに収録した。
7. 本書に添付したCDには、本書のPDF及び遺物観察表を収録している。

本文目次

M 区の調査

1. M1区の概要	7
2. M1区縄文時代の遺構と遺物	8
(1) 遺構.....	8
(2) 遺物.....	8
3. M2区の概要	12
4. M2区縄文時代の遺構と遺物	14
(1) 遺構.....	14
(2) 遺物.....	14
5. M3区の概要	16
6. M3区縄文時代の遺構と遺物	19
(1) 遺構.....	19
(2) 遺物.....	20
7. M4区の概要	23
8. M4区の遺構と遺物	25
(1) 遺構.....	25
(2) 遺物.....	27

N 区の調査

N1 区の調査

1. N1区の概要.....	55
2. N1区弥生時代の遺構と遺物.....	56
(1) 竪穴住居跡.....	56
(2) 掘立柱建物跡.....	64
(3) 土坑.....	67
(4) 溝跡.....	80
(5) 包含層出土遺物.....	82

N2 区の調査

1. N2区の概要	87
2. N2区弥生時代の遺構と遺物	88
(1) 竪穴住居跡	88
3. N2区その他の時代の遺構と遺物	92
(1) 土坑	92
(2) 溝跡	92

N3 区の調査

1. N3区の概要	97
2. N3区古代の遺構と遺物	98
(1) 竪穴住居跡	98
(2) 溝跡	99
3. N3区中世の遺構と遺物	103
(1) 溝跡	103
4. N3区近世の遺構と遺物	105
(1) 土坑	105

O 区の調査

O1 区の調査

1. O1区の概要	115
2. O1区弥生時代の遺構と遺物	116
(1) 竪穴住居跡	116
(2) 掘立柱建物跡	117
(3) 土坑	120
(4) 包含層出土遺物	126
2. O1区古代の遺構と遺物	127
(1) 溝跡	127
(2) 包含層出土遺物	128

O2 区の調査

1. O2区の概要	135
2. O2区弥生時代の遺構と遺物	136
(1) 竪穴住居跡	136
(2) 掘立柱建物跡	142

(3) 土坑	149
(4) 包含層出土遺物	162
3. O2区古代の遺構と遺物	164
(1) 溝跡	164

O3区の調査

1. O3区の概要	171
-----------------	-----

O4区の調査

1. O4区の概要	177
-----------------	-----

P区の調査

P1区の調査

1. P1区の概要	187
2. P1区弥生時代の遺構と遺物	188
(1) 竪穴住居跡	188
(2) 掘立柱建物跡	195
(3) 土坑	198
(4) 溝跡	204
(5) ピット	204
(6) 包含層出土遺物	205

P2区の調査

1. P2区の概要	211
2. P2区弥生時代の遺構と遺物	212
(1) 土坑	212
(2) 溝跡	214

P3区の調査

1. P3区の概要	223
2. P3区弥生時代の遺構と遺物	224
(1) 溝跡	224
(2) 大溝	224
(3) 包含層出土遺物	227

P4 区の調査

1. P4 区の概要	233
------------------	-----

P5 区の調査

1. P5 区の概要	239
2. P5 区弥生時代の遺構と遺物	240
(1) 土坑	240
(2) 包含層出土遺物	241

Q 区の調査

Q1 区の調査

1. Q1 区の概要	251
2. Q1 区弥生時代の遺構と遺物	252
(1) 土坑	252
(2) 溝跡	255
3. Q1 区中～近世の遺構と遺物	257
(1) 掘立柱建物跡	257

Q2 区の調査

1. Q2 区の概要	263
2. Q2 区弥生時代の遺構と遺物	264
(1) 竪穴住居跡	264
(2) 掘立柱建物跡	276
(3) 土坑	280
(4) 溝跡	285
(5) ピット	286
(6) 包含層出土遺物	288
3. Q2 区古代～中世の遺構と遺物	289
(1) 掘立柱建物跡	289
(2) ピット	291
(3) 包含層出土遺物	291

Q3 区の調査

1. Q3 区の概要	297
2. Q3 区弥生時代の遺構と遺物	298
(1) 溝跡	298

溝・流路

溝・流路の概要.....	305
前期溝 1	307
前期溝 2	316
前期溝 3	340
大溝 1	347
大溝 2	367
大溝 3	392
大溝 4	398
大溝 5	398
大溝 6	418
大溝 7 a・b	428
流路 1	439

挿図目次

M区

- M区-1図 M区全体図
- M区-2図 M1～M4区地形及び遺物出土分布図
- M区-3図 M1区遺物取り上げブロック(SX1001)
- M区-4図 M2区遺物出土状況図
- M区-5図 M3区全体図
- M区-6図 M3区SK305
- M区-7図 M4区全体図
- M区-8図 M4区SK401～403
- M区-9図 M1区包含層出土土器
- M区-10図 M1区包含層出土土器
- M区-11図 M1区包含層出土土器
- M区-12図 M1区包含層出土土器
- M区-13図 M1区包含層出土土器
- M区-14図 M1・M2区包含層出土土器
- M区-15図 M2・M3区包含層出土土器
- M区-16図 M3区包含層出土土器
- M区-17図 M3区包含層出土土器
- M区-18図 M3区包含層出土土器
- M区-19図 M3区包含層出土土器
- M区-20図 M3区包含層出土土器
- M区-21図 M3・M4区包含層出土土器
- M区-22図 M4区包含層出土土器
- M区-23図 M1～M3区包含層出土石器
- M区-24図 M3区包含層出土石器
- M区-25図 M4区包含層出土石器

N区

- N-1図 I・N区遺構全体配置図

N1区

- N1-1図 N1区遺構全体配置図
- N1-2図 N1区基本層序
- N1-3図 N1ST101・102

- N1-4図 N1ST103
- N1-5図 N1ST104
- N1-6図 N1ST105(1)
- N1-7図 N1ST105(2)
- N1-8図 N1ST106(1)
- N1-9図 N1ST106(2)
- N1-10図 N1SB101
- N1-11図 N1SB102 SK105(1)
- N1-12図 N1SB103・104 SK116
- N1-13図 N1SK101(1)
- N1-14図 N1SK101(2)
- N1-15図 N1SK104
- N1-16図 N1SK105(2)・118(1)
- N1-17図 N1SK106・118(2)
- N1-18図 N1SK107・108
- N1-19図 N1SK109・110
- N1-20図 N1SK111・113～115・119(1)
- N1-21図 N1SK119(2)
- N1-22図 N1SK120
- N1-23図 N1SK121・122
- N1-24図 N1SD108
- N1-25図 N1区包含層出土遺物

N2区

- N2-1図 N2区遺構全体配置図
- N2-2図 N2ST201(1)
- N2-3図 N2ST201(2)
- N2-4図 N2ST202

N3区

- N3-1図 N3区遺構全体配置図
- N3-2図 包含層出土遺物
- N3-3図 N3ST301
- N3-4図 N3SD304～306・308・309・311
- N3-5図 N3SD301～303
- N3-6図 N3SK303

O区	O2-18图 O2SK209(1)
O- 1图 O区遺構全体配置图	O2-19图 O2SK209(2)
	O2-20图 O2SK209(3)・210・211
O1区	O2-21图 O2SK212
O1- 1图 O1区遺構全体配置图	O2-22图 O2SK214・215
O1- 2图 O1ST101	O2-23图 O2SK216・217
O1- 3图 O1SB101～103 SK104(1)・105(1)	O2-24图 O2SK221・222 / O2区包含層出土遺物
O1- 4图 O1SK101・102	O2-25图 O2区自然地形 畝状遺構
O1- 5图 O1SK103・104(2)	O2-26图 O2SD201～207
O1- 6图 O1SK104(3)	
O1- 7图 O1SK105(2)	O3区
O1- 8图 O1SK106	O3- 1图 O3区基本層序
O1- 9图 O1SK107・109	
O1-10图 O1区包含層出土遺物	O4区
O1-11图 O1SD101～103 / O1区古代包含層出土遺物	O4- 1图 O4区遺構全体配置图
	O4- 2图 O4SR402・403 SD401
O2区	P区
O2- 1图 O2区遺構全体配置图	P- 1图 P区遺構全体配置图
O2- 2图 O2区基本層序	
O2- 3图 O2ST201・202(1)	P1区
O2- 4图 O2ST202(2)	P1- 1图 P1区遺構全体配置图
O2- 5图 O2ST202(3)	P1- 2图 P1ST101
O2- 6图 O2ST203	P1- 3图 P1ST102(1)
O2- 7图 O2SB201・202・205・206 SK201・202・219・220	P1- 4图 P1ST102(2)
O2- 8图 O2SB201 SK201(1)	P1- 5图 P1ST103(1)
O2- 9图 O2SB202 SK202(1)	P1- 6图 P1ST103(2)
O2-10图 O2SB203・204	P1- 7图 P1ST104
O2-11图 O2SB205 SK219	P1- 8图 P1SB101・102
O2-12图 O2SB206 SK220	P1- 9图 P1SB103～105
O2-13图 O2SB207	P1-10图 P1SK101(1)
O2-14图 O2SK201(2)・203	P1-11图 P1SK101(2)
O2-15图 O2SK202(2)	P1-12图 P1SK102 P1002・1003
O2-16图 O2SK204・205	P1-13图 P1SK103～105
O2-17图 O2SK207	P1-14图 P1SK107・108
	P1-15图 P1P1001 / P1区包含層出土遺物

P2区

- P2- 1 図 P2区遺構全体配置図
- P2- 2 図 P2SK203
- P2- 3 図 P2SK201・202
- P2- 4 図 P2SD201～203・205～207

P3区

- P3- 1 図 P3区遺構全体配置図
- P3- 2 図 P2SD203集石遺構・床面ピット群
- P3- 3 図 P2SD203・204
- P3- 4 図 P3区包含層出土遺物

P4区

- P4- 1 図 P4区遺構全体配置図
- P4- 2 図 P2SD203・204
- P4- 3 図 Q3SD301・302

P5区

- P5- 1 図 P5区遺構全体配置図
- P5- 2 図 P5SK501～503

Q区

- Q- 1 図 Q区遺構全体配置図

Q1区

- Q1- 1 図 Q1区遺構全体配置図
- Q1- 2 図 調査区西壁柱状図
- Q1- 3 図 Q1SK101(1)
- Q1- 4 図 Q1SK101(2)
- Q1- 5 図 Q1SK102・103
- Q1- 6 図 Q1SD101、SR101(大溝2)
- Q1- 7 図 Q1SB101

Q2区

- Q2- 1 図 Q2区遺構全体配置図
- Q2- 2 図 Q2ST201

- Q2- 3 図 Q2ST202

- Q2- 4 図 Q2ST203(1)

- Q2- 5 図 Q2ST203(2)

- Q2- 6 図 Q2ST204

- Q2- 7 図 Q2ST205

- Q2- 8 図 Q2ST206

- Q2- 9 図 Q2ST207(1)・209

- Q2-10 図 Q2ST207(2)

- Q2-11 図 Q2SB201・202

- Q2-12 図 Q2SB203・204・SD208

- Q2-13 図 Q2SK208・210

- Q2-14 図 Q2SK211・215・217・220

- Q2-15 図 Q2SK224

- Q2-16 図 Q2SD206・207

- Q2-17 図 Q2P2006・包含層出土遺物

- Q2-18 図 Q2SB205・206・207

- Q2-19 図 Q2P2066・包含層出土遺物

Q3区

- Q3- 1 図 Q3区遺構全体配置図

- Q3- 2 図 調査区西・南壁柱状図、第 層出土遺物

- Q3- 3 図 Q3SD303・304

溝・流路

- 溝・流路- 1 図 溝・流路全体図

前期溝1

- 前期溝1- 1 図 C1SD101出土遺物

- 前期溝1- 2 図 E5SD101出土遺物(1)

- 前期溝1- 3 図 E5SD101出土遺物(2)

- 前期溝1- 4 図 E5SD101出土遺物(3)

- 前期溝1- 5 図 E5SD101出土遺物(4)

- 前期溝1- 6 図 E5SD101出土石器(5)

前期溝2

前期溝2- 1 図 前回調査区分を含む前期溝 2 全体図
前期溝2- 2 図 前期溝2・3全体図及びセクション位置図
前期溝2- 3 図 D2SD215
前期溝2- 4 図 E3SD310(1)
前期溝2- 5 図 E3SD310(2)
前期溝2- 6 図 E5SD105(1)
前期溝2- 7 図 E5SD105(2)
前期溝2- 8 図 E5SD105(3)
前期溝2- 9 図 E5SD105(4)
前期溝2-10図 E2SD201(1)
前期溝2-11図 E2SD201(2)
前期溝2-12図 E2SD201(3)
前期溝2-13図 E2SD201(4)
前期溝2-14図 C5SD501(1)
前期溝2-15図 C5SD501(2)
前期溝2-16図 C5SD501(3)
前期溝2-17図 C5SD501(4)
前期溝2-18図 C5SD501(5)
前期溝2-19図 C1SD105(1)
前期溝2-20図 C1SD105(2)
前期溝2-21図 C1SD105(3)
前期溝2-22図 C1SD105(4)
前期溝2-23図 C1SD105(5)
前期溝2-24図 C1SD105(6)

前期溝3
前期溝3- 1 図 C5SD504(1)
前期溝3- 2 図 C5SD504(2)
前期溝3- 3 図 C5SD504(3)
前期溝3- 4 図 C5SD504(4)
前期溝3- 5 図 C5SD504(5)
前期溝3- 6 図 E2SD206・E6SD612

大溝1

大溝1- 1 図 D1区SD1007・1009
大溝1- 2 図 D2区SR207
大溝1- 3 図 E3区SR301(1)
大溝1- 4 図 E3区SR301(2)
大溝1- 5 図 E6区SR601(1)
大溝1- 6 図 E6区SR601(2)
大溝1- 7 図 E6区SR601(3)
大溝1- 8 図 E6区SR601(4)
大溝1- 9 図 E6区SR601(5)
大溝1-10図 E6区SR601(6)
大溝1-11図 F5区SR503・SD504
大溝1-12図 F5区SR503
大溝1-13図 F5区SD504
大溝1-14図 B4区SD421(1)
大溝1-15図 B4区SD421(2)
大溝1-16図 B4区SD420(1)
大溝1-17図 B4区SD420(2)

大溝2

大溝2- 1 図 D1区SR112・D2区SR201・E3区SR302
大溝2- 2 図 D1区SR112(1)
大溝2- 3 図 D1区SR112(2)
大溝2- 4 図 D2区SR201
大溝2- 5 図 E3区SR302(1)
大溝2- 6 図 E3区SR302(2)
大溝2- 7 図 E6区SR602(1)
大溝2- 8 図 E6区SR602(2)
大溝2- 9 図 E6区SR602(3)
大溝2-10図 E6区SR602(4)
大溝2-11図 F5区SR501
大溝2-12図 F4区SR401・402
大溝2-13図 F4区SR401(1)
大溝2-14図 F4区SR401(2)
大溝2-15図 F4区SR402

大溝2-16図 F3区SR301
大溝2-17図 F2区SR202・L1区SR107(1)
大溝2-18図 L1区SR107(2)
大溝2-19図 L3区SR301A～C
大溝2-20図 Q2区SR201・SD203～205

大溝3

大溝3-1図 D1区SD1001(1)
大溝3-2図 D1区SD1001(2)
大溝3-3図 E7区SR702
大溝3-4図 E1区SD101
大溝3-5図 K1区SD103(1)
大溝3-6図 K1区SD103(2)

大溝4・5

大溝4・5-1図 D1区SR111(1)
大溝4・5-2図 D1区SR111(2)
大溝4・5-3図 D1区SR111(3)
大溝4・5-4図 E7区SR704(1)
大溝4・5-5図 E7区SR704(2)
大溝4・5-6図 E7区SR704(3)
大溝4・5-7図 E7区SR704(4)
大溝4・5-8図 E7区SR704(5)
大溝4・5-9図 E1区SR101(1)
大溝4・5-10図 E1区SR101(2)
大溝4・5-11図 E1区SR101(3)
大溝4・5-12図 K3区SD301・102
大溝4・5-13図 F・K区(1)
大溝4・5-14図 F・K区(2)
大溝4・5-15図 F・K区(3)
大溝4・5-16図 F・K区(4)
大溝4・5-17図 F・K区(5)
大溝4・5-18図 F・K区(6)
大溝4・5-19図 F・K区(7)
大溝4・5-20図 K3区SD301(1)
大溝4・5-21図 K3区SD301(2)

大溝6

大溝6-1図 セクション図
大溝6-2図 D1SD131
大溝6-3図 D2SD131
大溝6-4図 I2SD220(1)
大溝6-5図 I2SD220(2)
大溝6-6図 J4SR401
大溝6-7図 J5SR501
大溝6-8図 J7SR
大溝6-9図 O1SR101
大溝6-10図 O2SR202

大溝7

大溝7-1図 大溝7a(I区SD102)
大溝7-2図 大溝7b(I区SD103)
大溝7-3図 大溝7a(N区SD102・202)・大溝7b
(N区SD103・203)

流路1

流路1-1図 流路1
流路1-2図 流路1セクション図
流路1-3図 グリッド別遺物出土
流路1-4図 流路1C3区部分出土土器
流路1-5図 流路1C3区部分出土土器
流路1-6図 流路1C3区部分出土土器
流路1-7図 流路1C3区部分出土土器
流路1-8図 流路1C3区部分出土土器
流路1-9図 流路1C3区部分出土土器
流路1-10図 流路1C3区部分出土土器
流路1-11図 流路1C3区部分出土土器
流路1-12図 流路1C3区部分出土土器
流路1-13図 流路1C3区部分出土土器
流路1-14図 流路1C3区部分出土土器
流路1-15図 流路1C3区部分出土土器
流路1-16図 流路1C3区部分出土土器
流路1-17図 流路1C3区部分出土土器

流路1-18図	流路1C3区部分出土石器	流路1-31図	流路1C3区部分出土石器
流路1-19図	流路1C3区部分出土石器	流路1-32図	流路1C3区部分出土石器
流路1-20図	流路1C3区部分出土石器	流路1-33図	流路1C3区部分出土石器
流路1-21図	流路1C3区部分出土石器	流路1-34図	流路1B1区部分出土石器
流路1-22図	流路1C3区部分出土石器	流路1-35図	流路1B1区部分出土石器
流路1-23図	流路1C3区部分出土石器	流路1-36図	流路1B1区部分出土石器
流路1-24図	流路1C3区部分出土石器	流路1-37図	流路1B1区部分出土石器
流路1-25図	流路1C3区部分出土石器	流路1-38図	流路1B4区部分セクション図・ 出土石器
流路1-26図	流路1C3区部分出土石器	流路1-39図	流路1B4区部分出土石器
流路1-27図	流路1C3区部分出土石器	流路1-40図	流路1B4区部分出土石器
流路1-28図	流路1C3区部分出土石器	流路1-41図	流路1B4区部分出土石器
流路1-29図	流路1C3区部分出土石器	流路1-42図	流路1B4区部分出土石器
流路1-30図	流路1C3区部分出土石器		

表目次

M区

M区-1表	M3区土坑一覧
M区-2表	M3区ピット一覧
M区-3表	M4区土坑一覧
M区-4表	M区縄文土器観察表(CD)
M区-5表	M区石器観察表(CD)
M区-6表	M3区縄文時代石器組成表(CD)
M区-7表	M区実測図未掲載縄文時代石器計 測表(CD)

N1区

N1-1表	N1区竪穴住居跡一覧
N1-2表	N1区掘立柱建物跡一覧
N1-3表	N1区土坑一覧
N1-4表	N1区溝一覧
N1-5表	N1区弥生土器観察表(CD)
N1-6表	N1区石器観察表(CD)

N2区

N2-1表	N2区竪穴住居跡一覧
-------	------------

N2-2表	N2区土坑一覧
N2-3表	N2区溝跡一覧
N2-4表	N2区観察表(CD)
N2-5表	N2区観察表(CD)
N2-6表	N2区観察表(CD)

N3区

N3-1表	N3区古代溝跡一覧
N3-2表	N3区中世溝跡一覧
N3-3表	N3区近世土坑一覧
N3-4表	N3区土器観察表(CD)

O1区

O1-1表	O1区竪穴住居跡一覧
O1-2表	O1区掘立柱建物跡一覧
O1-3表	O1区土坑一覧
O1-4表	O1区古代溝一覧
O1-5表	O1区弥生土器観察表(CD)
O1-6表	O1区石器観察表(CD)
O1-7表	O1区古代遺物観察表(CD)

O2区

- O2-1表 O2区竖穴住居跡一覽
- O2-2表 O2区掘立柱建物跡一覽
- O2-3表 O2区土坑一覽
- O2-4表 O2区古代溝一覽
- O2-5表 O2区弥生土器觀察表(CD)
- O2-6表 O2区石器觀察表(CD)
- O2-7表 O2区古代遺物觀察表(CD)

O4区

- O4-1表 O4区土坑一覽
- O4-2表 O4区溝一覽

P1区

- P1-1表 P1区竖穴住居跡一覽
- P1-2表 P1区掘立柱建物跡一覽
- P1-3表 P1区土坑一覽
- P1-4表 P1区溝一覽
- P1-5表 P1区弥生土器觀察表(CD)
- P1-6表 P1区石器觀察表(CD)

P2区

- P2-1表 P2区土坑一覽
- P2-2表 P2区溝一覽
- P2-3表 P2区縄文土器觀察表(CD)
- P2-4表 P2区弥生土器觀察表(CD)

P3区

- P3-1表 P3区溝一覽
- P3-2表 P3区大溝一覽
- P3-3表 P3区石器觀察表(CD)

P4区

- P4-1表 P4区大溝一覽
- P4-2表 P4区弥生土器觀察表(CD)

P5区

- P5-1表 P5区土坑一覽
- P5-2表 P5区弥生土器觀察表(CD)

Q1区

- Q1-1表 Q1区土坑一覽
- Q1-2表 Q1区弥生土器觀察表(CD)
- Q1-3表 Q1区石器觀察表(CD)

Q2区

- Q2-1表 Q2区竖穴住居跡一覽
- Q2-2表 Q2区弥生掘立柱建物跡一覽
- Q2-3表 Q2区土坑一覽
- Q2-4表 Q2区溝跡一覽
- Q2-5表 Q2区古代~中世掘立柱建物跡一覽
- Q2-6表 Q2区觀察表(CD)
- Q2-7表 Q2区觀察表(CD)
- Q2-8表 Q2区觀察表(CD)
- Q2-9表 Q2区觀察表(CD)
- Q2-10表 Q2区觀察表(CD)

Q3区

- Q3-1表 Q3区溝跡一覽
- Q3-2表 Q3区弥生土器觀察表(CD)
- Q3-3表 Q3区石器觀察表(CD)

溝・流路

溝・流路1-表 溝・流路接統表

前期溝1

- 前期溝1-1表 前期溝1弥生土器觀察表(CD)
- 前期溝1-2表 前期溝1弥生土製品觀察表(CD)
- 前期溝1-3表 前期溝1弥生石器觀察表(CD)

前期溝2

- 前期溝2-1表 前期溝2弥生土器觀察表(CD)

前期溝2- 2 表 前期溝2石器觀察表(CD)
前期溝2- 3 表 前期溝2土製品觀察表(CD)

前期溝3

前期溝3- 1 表 前期溝3弥生土器觀察表(CD)
前期溝3- 2 表 前期溝3石器觀察表(CD)

大溝1

大溝1- 1 表 大溝1土器觀察表(CD)
大溝1- 2 表 大溝1石器觀察表(CD)

大溝2

大溝2- 1 表 大溝2土器觀察表(CD)
大溝2- 2 表 大溝2石器觀察表(CD)

大溝3

大溝3- 1 表 大溝3土器・土製品觀察表(CD)
大溝3- 2 表 大溝3石器・石製品觀察表(CD)

大溝4・5

大溝4・5- 1 表 大溝4・5土器・土製品觀察表(CD)
大溝4・5- 2 表 大溝4・5石器・石製品觀察表(CD)

大溝6

大溝6- 1 表 大溝6土器・土製品觀察表(CD)
大溝6- 2 表 大溝6石器・石製品觀察表(CD)

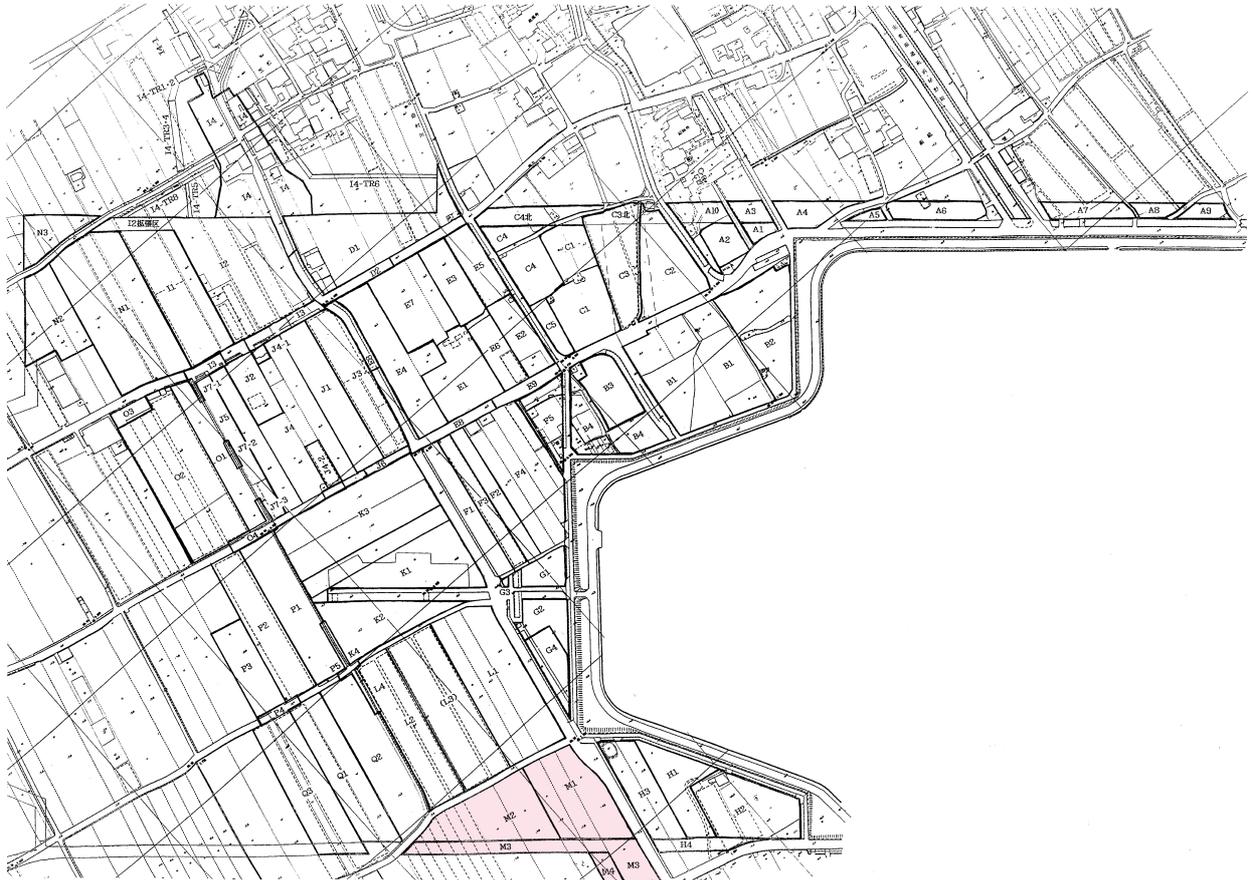
大溝7

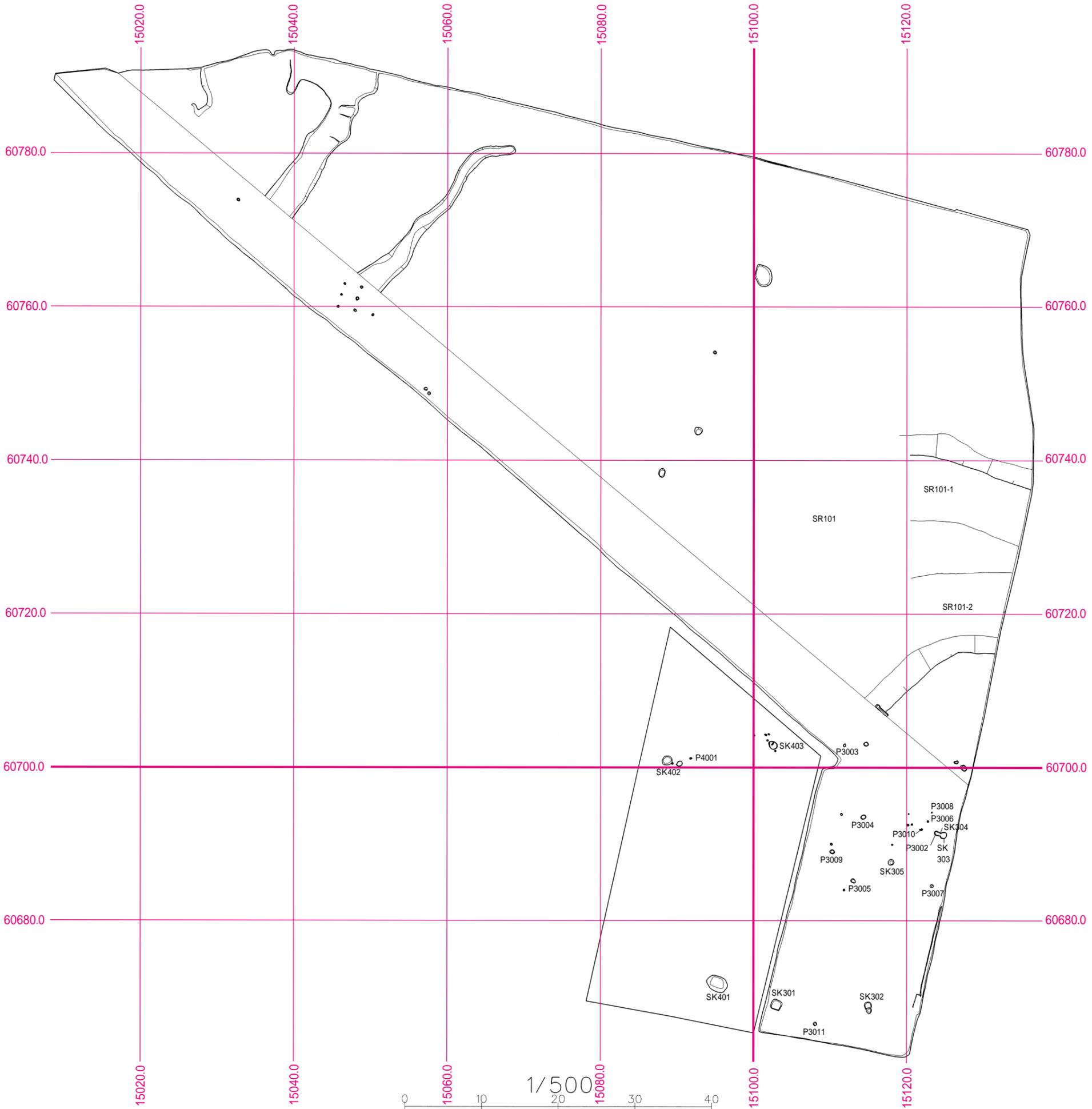
大溝7- 1 表 大溝7土器觀察表(CD)
大溝7- 2 表 大溝7石器觀察表(CD)

流路1

流路1- 1 表 流路1出土土器觀察表(CD)
流路1- 2 表 流路1出土石器觀察表(CD)

M 区の調査





M区 - 1 图 M区全体图



M区 - 2 図 M1 ~ M4 区地形及び遺物出土分布図

0 20m

1. M1区の概要

概要

M1区は全体調査区の中では南側に位置する。弥生時代集落の南限と考えられるL区の更に南側に位置しており弥生時代の遺構、遺物は確認できなかったが、縄文時代の遺物が出土した。

M1区の周辺の状況は、一次調査で縄文時代の遺物が出土したLoc.47と隣接し、今回調査で縄文時代後期土器が多く出土したH区ともLoc.47をはさんで近接している。また隣接地のM2・3・4区からも縄文時代の遺物が出土しており関係が注目される。

調査担当者	山本哲也、小島博満、武吉真裕
執筆担当者	坂本憲昭、松本安紀彦(土器)
調査期間	平成10年 8月～平成10年11月
調査面積	2,458m ²
時代	縄文時代後期
検出遺構	自然流路 2条 縄文時代遺物集中出土地点

2. M1区縄文時代の遺構と遺物

(1) 遺構

M1区では遺物がまとまって出土した部分をSX101～104として遺構番号を付け、遺物の取り上げをおこなった。遺物取り上げ後、精査をおこなったが遺構は確認できなかった。SX100～104は、ほぼ同一範囲と考えられることや、同一の性格を持つ遺物が出土していることからSX1001として一括する。

遺物の包含層からの出土状況はSX1001周辺を除いて散漫な状況でほとんど出土しない状況であった。包含層掘削後M1区の地形復元を行ったところM1区の中央部を斜行するような大きな落ち込みが確認でき、自然流路の可能性が高いと考えられる。この落ち込みは2条に分かれておりSX1001は南側の落ち込みの斜面に堆積したものが残存したものと考えられる。

(2) 遺物

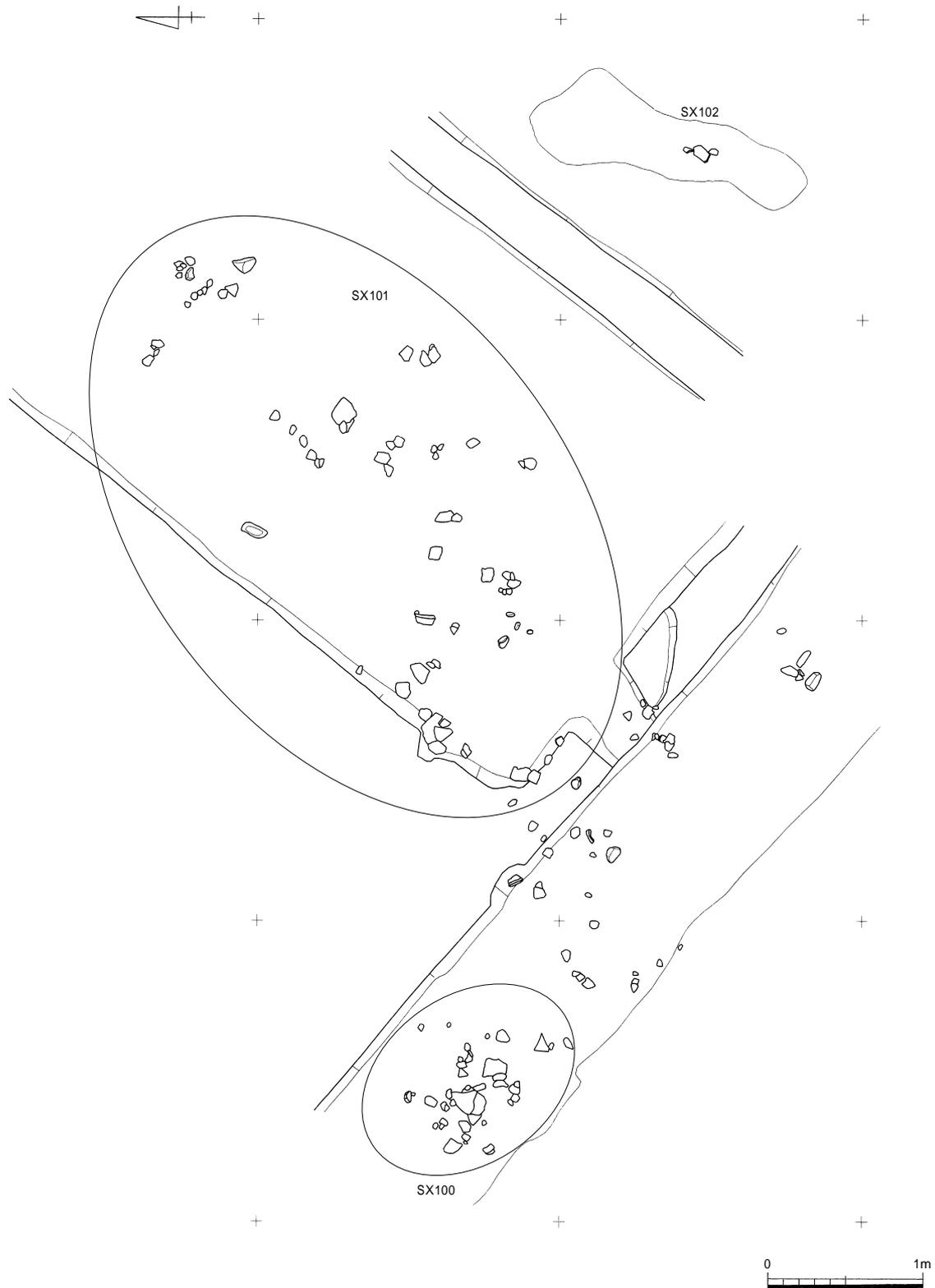
M1区出土の遺物は縄文土器と石器である。

土器

実測点数は54点を数えSX1001からの出土である。ここでは遺物取り上げの際に一定のまとまりを認めた出土地点ごとに(SX100～104)遺物をみていきたい。

SX100から出土した土器は量も多く、しかも器種に富んでいる。個別に土器を観察してゆくと口縁部片5点(9-1～5)、胴部片2点(9-6・7)、底部1点(9-8)を図化している。いずれも深鉢の破片である。9-3は外面にLR、9-1は外面にRLを有するものの、他の破片に関しては磨滅及び肥厚粘土の剥落等により不明ないしは無文である。9-2・3は同一個体の可能性がある。9-6・7はRLによる羽状縄文を有す。おそらく同一個体であろう。9-8は底部であり、平底である。深鉢のものと考えられ、外面及び底面は丁寧なナデで調整するが、内面は雑である。

SX101からは深鉢及びその器種に該当すると思われる部位に関しては21点図化し、頸胴部間が強くくびれ尚且つ口縁部及び胴部に縄文を有するもの(9-9～11、10-1)、頸胴部のくびれがゆるやかで壺型を呈し胴部に縄文を有するもの(9-2)、頸胴部間がほとんどくびれず尚且つ無文のもの(10-3)、そして各部位(10-4・5、11-1・6～8、12-1～4)に分けられる。9-9～11、10-1はいずれも口縁部及び胴部外面にRLを有する。9-9・11においては胴部に羽状縄文を有す。9-10・11においては口縁端部を強く面取り、9-11はそこにRLを有す。10-2は極めて精選された粘土を使用し、角閃石を多く含む。外面は磨滅が著しいゆえに調整は不明であるが、内面は板状工具痕ないしは二枚貝条痕そして指頭圧痕が一部残るものの、丁寧なナデで仕上げられている。特筆すべきは壺型を呈す器形と条の非常に繊細な一段Lを胴部外面に有することである。10-3は砲弾型を呈すと考えられ、胴部外面の一部に二枚貝条痕を残すもののそれをナデ消す無文土器である。粗製土器として考えられる。10-4・5は口縁部片で外面にRLを有す。11-1・2は内面ないしは上面にも文様を有する口縁部片であり、11-1は口縁部外面にLRと波頂部に太い沈線状のキザミを有する。11-2は外面にRL、内面には平行する



M区 - 3 図 M1区遺物取り上げブロック(SX1001)

2本沈線が下に向かって垂下していく。11-4は内面に右下りのキザミないしはRLを有するが、器面の荒れが著しいために口縁部内面を一周するものかどうか等詳細は判別できない。11-3は口縁部内面に平行する2本沈線を有す。11-5は口縁部内面に鋭い抉り状の沈線を有す。11-5に関しては薄手であり、砲弾型の器形を呈すと思われるため粗製土器として考えられる。11-7は口縁部内面に沈線と言い切るには極めて浅く、また沈線脇の粘土の土手ないしは、はみ出しもないために指等の面の緩やかな工具によるものと考えられ、凹線という表現が適当であろう。11-6・8、12-1・2に関しては器面の荒れや無文ゆえに深鉢の口縁部である以外に情報は得られない。12-3・4は胴部であり、12-3はRLを横方向と縦方向に交互に回転させることによって生じると考えられる羽状縄文を有す。12-4は一面にLRを有す。次に浅鉢ないしは鉢とされる土器であるが、8点図化している。そのうち皿状浅鉢(12-5~8)、胴部に強い屈曲を有する鉢(13-1~4)に分けられる。皿状浅鉢に関しては磨消縄文を有するもの(12-5~7)と無文(12-8)のものが存在し、12-5はRL地に沈線区画を行い、横位縄文帯と頭がスプーン上で尾がクランク状を呈する縄文帯を交互に配する文様構成をとるものと考えられる。文様下端は所々垂下すると考えられるJ字文を有する幅狭の縄文帯によってそれ以下の無文部と分けられる。調整は内外共にミガキであり、口縁部には焼成前穿孔を有す。12-6・7はいずれも幅狭の縄文帯をそれぞれ2本、3本の沈線で区画したものを外面に有す。12-8は極めて丁寧なナデ調整によるものである。13-1~4は屈曲上胴部に文様を有するもの(13-1・4)と無文(13-2・3)のものが存在する。いずれにしても胴部に強い屈曲を有するために上下が潰れるような算盤玉状の胴部から短い頸部が立ち上がり口縁部へと繋がる器形であり、深鉢・浅鉢そして“鉢”としての器形ヴァリエーションの一つとして存在することは明白であろう。13-1は口縁部外面直下及び頸胴部間に一条ずつ沈線を有し、上胴部文様は横走沈線と帯状沈線文を組み合わせる。器面の荒れが著しいために縄文の有無は不明であるが、沈線内には僅かな量であるが所々赤色顔料が遺存している。13-2は頸胴部間に浅い沈線を有する。13-3は磨滅が著しく器形以外の情報は不明である。13-4は上胴部に刺突を有し平行する押し引き状の沈線を施し、その間に左右から上下の刺突を繋ぐように斜行する沈線を施す。次に底部(13-5~7)であるが、13-7は極めて緩い凹み底でそれ以外は平底である。調整も際立った丁寧さも無いために深鉢であろう。

SX102からは深鉢口縁部(13-8)が図化しており、幅広に肥厚させた口縁部及び外面にキザミを有す。

SX103・104、SP28・29、TRは地点が不明であるがSX103からは深鉢口縁部(13-9)が図化しており、口縁端部に刺突を有するものの無文であるために粗製深鉢として考えられる。SX104からは底部1点(13-10)のみ図化している。凹み底であり、胴部は弱く内傾気味に立ち上がり大きく外傾しながら立ち上がっていく、深鉢の底部と考えられる。SP28・29、TRからは深鉢1点(13-11)のみ図化している。比較的薄手で、後からナデ消されているものの内面には二枚貝条痕が明瞭に残り、外面の一部にも残るが丁寧にナデ消されている。口縁端部は強い面取りを有す。後期の粗製深鉢の類型の一つになると考えられるが、今後の資料の増加による検証が必要である。

包含層一括取り上げ分では深鉢口縁部及び胴部3点(14-1~3)、浅鉢及び鉢口縁部及び胴部片6点(14-4~9)、底部2点(14-10・11)の計11点を図化している。14-1・2は外面にLRを有し、14-2は口

縁端部にもLRを有する。14-3は胴部片である。外面に粘土帯を貼付し隆帯を作り出している。隆帯上には沈線を2条及びその下には円形の刺突を有する。14-4・5は皿状を呈す浅鉢口縁部で外面に磨消縄文を有す。14-5は平行する比較的太い2本沈線で幅狭の区画を行い、その間にRLを有す。14-4は内外共に文様を有す。内面の口縁部直下に極めて節の細かいLRを有し、その下に平行する2本沈線を有す。外面の口縁部直下に平行する4本沈線を有し、沈線内に内面同様のLRを有す。その下は磨消部を挟んで複数本の沈線を有す。胎土はきめが細かい精選された角閃石を多く含む粘土を使用し、沈線内の一部にはベンガラと思われる赤色顔料が僅かに残る。14-6はボウル状を呈す浅鉢の口縁部である。外面に器面を一周すると考えられる沈線とその下に平行する2本沈線で曲線文を有す。胎土に角閃石を多く含む。14-7はボウル状を呈す浅鉢口縁部である。外面に垂下する2本沈線を二組有し、二組間は磨消になっているものの、そこ以外にはRLを有し、一部羽状縄文となっている。14-8はボウル状浅鉢ないしは注口付土器の胴部片であり、外面に3本以上の平行する沈線間に節の細かいLRを有す。14-9は外面に複数本の沈線を有し、それぞれの内に小さな刺突を有す。おそらく鉢の上胴部片であろう。次に底部であるが、凹み底(14-11)と平底(14-10)に分けられる。14-10は底面からすぐに外傾しながら胴部へと立ち上がっていく。14-11の底の凹みは緩やかでほとんど平底に近い深鉢のものであろう。

SX出土遺物に関しては大きな時期差はみられず、包含層一括出土遺物についても同様に縄文後期前葉～中葉にかけての時期である。

縄文地深鉢いわゆる“全縄文深鉢”が見られるのと同時に、口縁部内面に文様を有する深鉢が見られる。また胴部に強い屈曲を有する鉢も存在している。北九州の鐘崎式及びそれに前後する時期に類似するものが見られる。隣接した調査区であるM3・4、H区では鐘崎式土器が出土しておりその関係を検討する必要がある。

石器

石器と確認できたものでは石鏃、打製石斧、凹石、刃器、石錘の5種類である。石鏃は3点出土しており、いずれも凹基式の小型のもので石材はチャート製2点とサヌカイト製1点である。打製石斧は比較的大型の撥形のもので片岩製である。凹石は中央部に弱い凹みがみられ縁辺部にも敲打痕が残る。石材は砂岩である。出土量が少ないためM3区の特徴を導き出すことは不可能であるが、H区では砂岩製の石錘が多量に出土していることや石鏃の石材としてサヌカイトが卓越する状況とは異なった可能性が考えられる。

3. M2区の概要

概要

M2区は全体調査区の中では南側に位置しM1区とは隣接している。弥生時代集落の南限と考えられるL区の更に南側に位置しており弥生時代の遺構、遺物は確認できなかったが、縄文時代の遺物が出土した。

M2区はM1区の西側に隣接しており、M4区は東端部で隣接し南側にあたる。また、今回調査で縄文時代後期土器が多く出土したH区とも一次調査で縄文時代の遺物が出土したLoc.47をはさんで近接している。

調査担当者 山本哲也、小島博満、武吉真裕

執筆担当者 坂本憲昭、松本安紀彦(土器)

調査期間 平成10年8月～平成10年11月

調査面積 2,483m²

時代 縄文時代中期

検出遺構 自然流路4条



M区 - 4 図 M2区遺物出土状況図

4. M2区縄文時代の遺構と遺物

(1) 遺構

M2区では西端部で平面形、断面形とも不整形な溝状の落ち込みを2条と東端部でM1区で確認した自然流路SR101の延長と考えられる落ち込みを検出した。それ以外では遺構を検出することができなかった。SR101については縄文時代の自然流路と考えられ2条の流路は時期に差があるものと考えられる。また出土遺物は流れ込み堆積の可能性が高いと考えられM2区から北側のL区を含めた検討が必要になってくると考えられるが現在のところL区においては縄文時代の遺構、遺物は確認できていない。

(2) 遺物

M2区出土の遺物は縄文土器と石器であるが遺物出土量は少ない。しかし、出土した縄文土器は他の調査区出土のものと様相が異なっており注目される。

出土した遺物はすべて包含層出土であるが、出土地点はSR101の北側落ち込み周辺に限られ他の部分からは出土していない。遺物取り上げ時は小ブロックごとのまとまりを想定しSX201～204で遺物取り上げをおこなったが、いずれの部分もSR101の北側の落ち込み(SR101-1)の北側斜面にあたっており、出土状況は散漫な状態で表面剥離や摩耗しているものが多くSR101に向かったの斜面堆積の可能性が考えられる。遺物は北側斜面からのみ出土しており、SR101の北側落ち込み(SR101-1)の時期を反映している可能性が高いものと考えられ、SR101の2条の落ち込みの時期を考える資料となるものと思われる。

土器

土器については取り上げ時の小ブロックごとにみていきたい。

M2区での実測点数は10点を数え、SX201部分(5点)、SX202部分(2点)、SX203部分(3点)からの出土が見られる。SX201部分からは深鉢及びその口縁部片(14-12～15)が図化されている。14-12はキャリパー状深鉢の内湾する口縁部である。外面に3本以上の隆帯を作出し、各隆帯の上下を半裁竹管状工具による沈線を有す。沈線間には同じ工具による乱雑な擬縄文を有す。14-13・15は同一個体であり、比較的小型の口縁部が外傾する深鉢となろう。外面に鋭く挟りこむような細い4本の沈線を有し、その下部には撚りの大きな縄文地に鋭く挟りこむような細い多重の沈線で紡錘状弧文とそこから放射状に斜行する沈線文を有する。14-14は波状口縁を呈し、波頂部には複数のキザミを外面に有し、胴上部には3本の隆帯を作出した後からその上下に無数の刺突を有する。隆帯に関しては粘土帯を貼り付けた可能性があるが、接合面を観察できるほどの遺存状況ではないために判別できない。下胴部には円形隆帯文と垂下隆帯文を有し、隆帯間にはヘラ状工具等によって垂下する鋭い沈線を複数状有す。縄文の有無は遺存状況の悪さにより不明である。14-16は凹み底であり、接地する部位はかなり鋭角である。胴部へはすぐに外傾しながら立ち上がる。外面の底部付近には植物の茎などの、太さがバラバラの原体を束ねたようなもので圧痕を加えている。圧痕は器全体に及んでいた可能性があるが、その一部を残したままで、上部はナデ消されている。

SX202部分からは深鉢の口縁部及び胴部が図化されている(15-1・2)。15-1はキャリパー状深鉢の緩く内湾する口縁部である。外面に撚りの大きな縄文地に鋭く抉りこむような細い横走る沈線を複数条有し、その下に同じ特徴を有する沈線で紡錘状弧文を有する。口縁端部には刺突を有する。15-2は胴部で外面に撚りの大きな縄文地に鋭く抉りこむような細い多重の沈線で紡錘状弧文を有する。その下部は縄文そのままであろう。15-1においては文様及び胎土が一致するので同一個体と考えられる。

SX203部分からは口縁部及び胴部片が図化されている(15-3～5)。15-3は端部に刺突を有する深鉢口縁部で外面にそれぞれが等間隔で平行する多重の弧文を有す。原体としては二枚貝条痕等が考えられよう。15-4は平縁深鉢の口縁部外面に垂下する隆帯を貼付する。隆帯の断面は不定形であるが台形状を呈し、それぞれの面に複数の刺突を有する。平縁の外面には沈線文を有するがモチーフは不明である。15-5は胴部片でやや幅の広い沈線による文様を有する。

高知県中央部のみならず高知県において縄文中期の資料は小片で点数も極めて少ない。主体となる遺跡は皆無である。SX201・202部分からの出土資料は中期以外のものは含まれない。SX203部分は後期の可能性も考えられるが詳細については決め手がない。中期に関しては四国では香川県大浦浜遺跡(1988 香川県教委)が基準として利用できる。

14-12については遺存状況が悪く、隆帯上に施文があるかどうかは不明である。大浦浜遺跡出土例第 類に類似し、船元I式に相当する。14-13・14、15-1～3に関しては大浦浜遺跡第XV類に類似し、船元 式に相当する。14-15・16に関しては船元 ～ 式併行に相当すると考えられるが、今後の検討を要する。

以上のようにM2区の土器の様相は同じ斜面堆積と考えられるが縄文時代中期の可能性が高く、M1・3区で出土した後期のものとは様相が異なっており、SR101内の2条の流路(SR101-1・2)の時期差を反映していると考えられる。

石器

M2区で出土した石器は石鏃、磨製石斧、刃器の3点のみである。石鏃はサヌカイト製のもので小型の凹基式で抉りの深いものである。磨製石斧は緑色岩製で両刃で側辺も面をなしたもので、風化が進んでいる。刃器はサヌカイト製のもので長方形の平坦なもので両長辺に片刃状の刃部を作っている。表面の風化が進んでいる。

5. M3区の概要

概要

M3区は全体調査区の中では南側に位置している。周辺の調査区のM1・2・4区、H区、一次調査Loc.47などでは縄文時代の遺構、遺物を検出しておりM3区でも縄文時代の遺構、遺物の検出が期待されていた。

調査を行ったところ、表土直下に黒褐色粘性シルトの縄文時代の包含層が残存していたが、北側M1区と接している部分では堆積が薄く、南側に向かって堆積が厚くなっている状況であった。遺物の出土状況も同様の状況を示し北側部分では遺物の出土は少なく南側にむかって出土量が増える傾向がみえ、特に調査区南東隅に多い状況であった。

遺構では、土坑5基、ピット25個を検出しており、いずれも黒褐色粘性シルトが包含層となっており縄文時代の遺構と考えられる。遺構の分布は遺物とは異なり調査区北側の標高が高くなっている部分がみられ所在に偏りがみられる。

調査担当者 川端清司

執筆担当者 坂本憲昭、松本安紀彦(土器)

調査期間 平成11年10月～平成11年11月

調査面積 1,647m²

時代 縄文時代後期

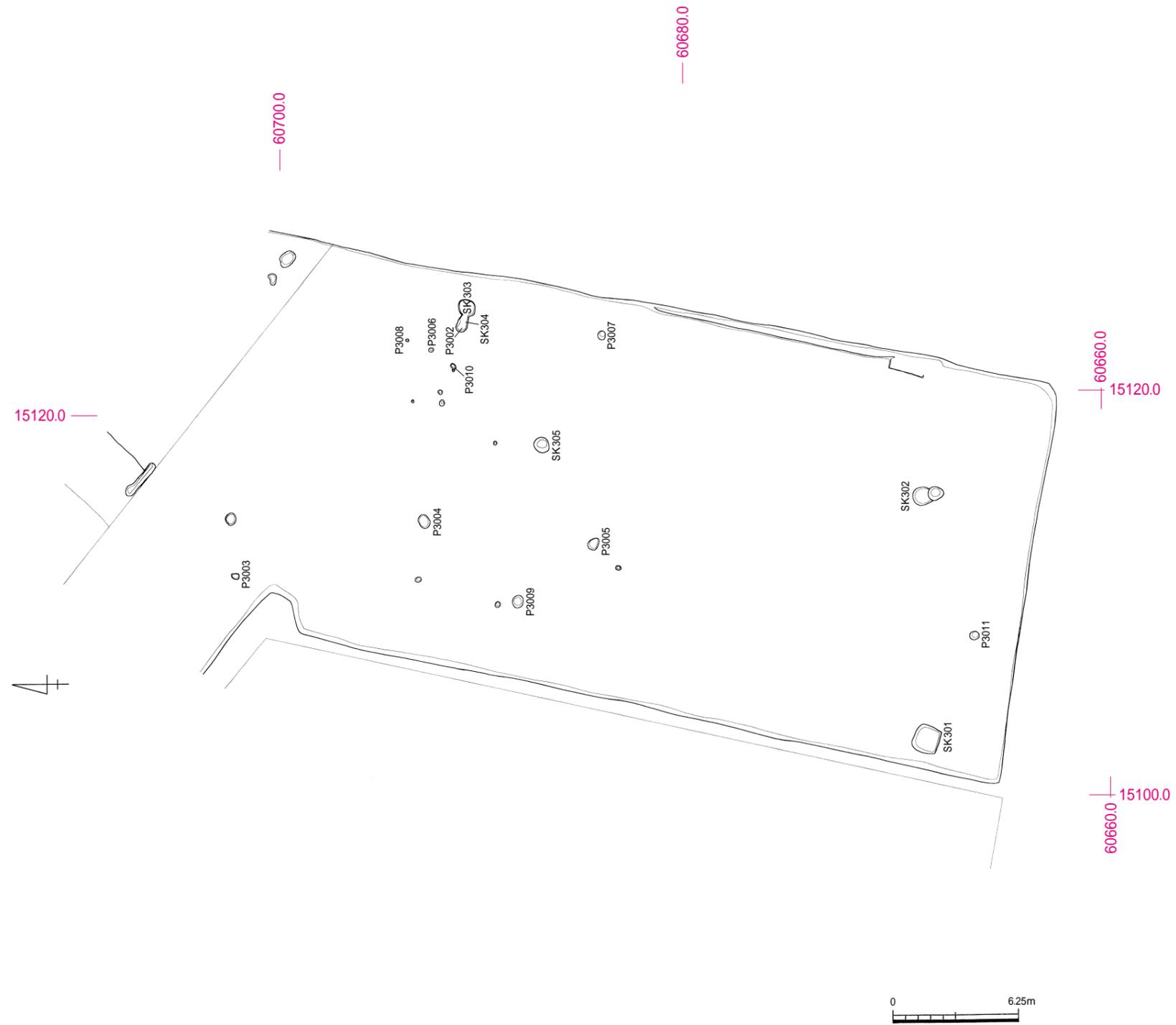
検出遺構 土坑5基 ピット25個

M区-1表 M3区土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	規 模			主軸方向	埋 土	切合関係	時期	備考
			長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					
SK301	楕円形	皿	[1.3]	1.3	8	-	黒褐色粘性シルト	-	-	-
SK302	楕円形	2段	1.6	0.8	24	N-18°-W	黒褐色粘性シルト	-	-	-
SK303	隅丸方形	-	0.85	0.8	5	N-12°-E	黒褐色粘性シルト	SK304に切られる	-	-
SK304	楕円形	-	[0.3]	0.5	4	N-69°-W	黒褐色粘性シルト	SK303を切る	-	-
SK305	楕円形	-	0.85	0.8	30	N-3°-W	黒褐色粘性シルト	-	-	-

M区-2表 M3区ピット一覧

遺構番号	柱穴形	直径(m)	深さ(cm)	埋土・概要	柱根/有・無	出土遺物(点数)	遺物内容出土状況	時期	特記事項
3002				黒褐色粘性シルト		縄文土器		縄文	SK304と切り合い消滅
3003	楕円形	0.4×0.3	8	黒褐色粘性シルト		縄文土器		縄文	
3004	楕円形	0.7×0.5	9	黒褐色粘性シルト		縄文土器		縄文	
3005	楕円形	0.7×0.5	7	黒褐色粘性シルト		縄文土器		縄文	
3006	円形	0.2	14	黒褐色粘性シルト		縄文土器		縄文	
3007	円形	0.4	30	黒褐色粘性シルト		縄文土器		縄文	
3008	円形	0.15	13	黒褐色粘性シルト		縄文土器		縄文	
3009	楕円形	0.65×0.5	15	黒褐色粘性シルト		縄文土器		縄文	
3010	楕円形	0.3×0.2	10	黒褐色粘性シルト		縄文土器		縄文	ピットと切り合う
3011	円形	0.4	10	黒褐色粘性シルト		縄文土器		縄文	



M区 - 5图 M3区全体图

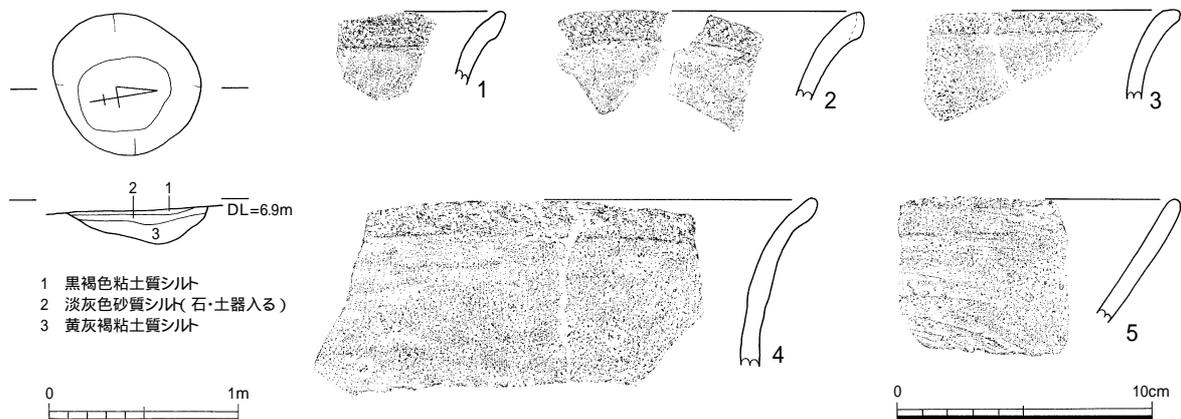
6. M3区縄文時代の遺構と遺物

(1) 遺構

M3区では、M1・2区とは異なり土坑5基、ピット25個を検出している。遺構は標高が高くなっていく調査区北側に多くみられM1区で検出したSR101とM3区南東隅の落ち込みの間の微高地に遺構が営まれていたと考えられる。

検出した遺構は残存状況が不良のものが多く、SK305のみが比較的残存が良好で図示し得たが他は埋土から出土した遺物も出土量が少なく細片であったため縄文時代の可能性が高いが時期を確定する事は困難であった。包含層中から出土した遺物は縄文時代後期中葉の遺物が出土しており遺構も同時期の可能性が高い。包含層出土の遺物は近接するH区出土の縄文時代後期中葉の遺物とやや様相を異にしており、一次調査Loc.47の状況に近いものでありH区よりやや後出する可能性が考えられる。また遺構の分布においてもH区でもっとも西側調査区であるH3区では西側になるほど遺構密度、遺物分布は小さくなるためM3区とは遺構が分布しない空間があった可能性が高くH区検出の遺構と一連の遺構である可能性は低いものと考えられる。

遺構の残存状況は不良なものが多いのは微高地上に営まれたため後世の削平による影響が大きかったためと考えられる。



M区 - 6図 M3区SK305

(2) 遺物

M3区出土の遺物は縄文土器と石器で調査面積に比して多く、土器が多くを占めるが出土比率では石器の割合は高く、特に打製石斧は可能性のあるものを含めて42点と多く出土していることは注目される。また、土器では鐘崎式が出土しているがH区に比べてその割合は少ない。また一次調査Loc.47出土の土器7図-13と接合する可能性の土器16-10が出土しており全体様相はLoc.47に近いものと考えられる。しかし、H区の鐘崎式土器との関係も今後の検討課題として重要である。

土器

土器については取り上げ時の小ブロックごとにみていきたい。

実測点数55点を数え、SK305、包含層一括取り上げの土器が見られる。包含層一括には北・南および地点の不明な土器が存在する。とりあえず南と注記されているものと、北と注記されるものに分け、北の土器が少数なために出土地点の不明な土器は北のものとして一括する。

SK305からは6-1～5が出土しており、6-1～4は深鉢口縁部である。6-2は外面にLRを有す。6-1・4はRLであると考えられるが遺存状況が悪い。他の破片に関しては遺存状況が悪いために詳細は不明である。6-5は皿状を呈す浅鉢の口縁部である。

包含層南からは49点を数え、深鉢口縁部(15-6～12、16-1～8)が見られる。15-7～10、16-1・4は口縁部外面にLRを有す。16-1・2は頸部に文様を有す以外は無文である。16-1は波状口縁で、波頂部にキザミを有し、その下の内外に垂下する梯子状沈線文を有する。16-3は波頂部内面に下向きD字状の深い刺突を有し、外面にRLないしは左下りのキザミを有すと考えられるが、遺存状況が悪いために判別できない。16-2は平行垂下する2本沈線間に下向きの矢羽状沈線文を有する。16-4・5は波状口縁を呈すと考えられる。16-4・6・7に関しては磨滅の可能性もあるが基本的に無文である。15-11、16-8は口縁部外面にRLを有す。15-11は波状口縁であり、16-8は縄文地に平行する2本沈線と下向きD字刺突を有する。それぞれ胴部が残るものの縄文種は口縁部に施されたものと同一である。16-9・10は深鉢胴部であり、16-9は縄文地深鉢で、RLを横・縦方向へ交互に施した羽状縄文を有す。16-10はボウル状胴部であり、磨消縄文を有す。沈線でブーメラン状のモチーフを描き、それぞれを上下で交互に向き合うように配す。ブーメラン状モチーフの中央には渦文を沈線で描き、その渦文内及びモチーフ外にRLを充填している。同様のものが一次調査Loc.47で出土しており、文様モチーフの類似性及び胎土の特徴より同一個体の可能性が非常に高い。17-1は深鉢口縁部の波頂部片と考えられ、刺突を中心に磨滅が著しいものの多重に円文を沈線で描く。次に鉢(17-2～8、20-1)であるが、17-2～4は口縁部外面及び胴部に縄文を有し、胴部においては縄文を横及び縦方向に交互に回転させたためにRL羽状縄文である。17-4は頸部に補修孔を有す。17-2・5・6は小型の鉢であり口縁部内面に沈線を有す。17-5・6は頸胴部間に沈線を有すが、17-5の胴部は沈線で方形区画モチーフを描くのに対し、17-6は節の細かいRLに2本沈線を有す。20-1は口縁部外面を肥厚させ、外面と上面に凹線を有する。胴部には同様の凹線で鋤状の区画文及び渦文を有す。沈線同士が入り組む様子はない。17-8は縄文地鉢の胴部でRL羽状縄文を有す。20-2～6はボウル状ないしは碗状を呈す浅鉢ないしは鉢であり、20-4以外は外面に文様を有す。20-2は多条の沈線を配し、1・6・7・8本目内に一部押し引きの可能性のある刺突を有し、補修孔を有す。20-3は口縁部直下に沈線を有し、

その下にLRを配すが遺存状況は極めて悪い。20-4は波状を呈し、波頂部に太いキザミを有す。20-5は比較的薄手で口縁は波状を呈し外面に磨消縄文を有す。波頂部下外面に4つの刺突を有し、そこから平行する沈線が発生している。沈線間は無文であるが、その外にはRLを有す。20-7～10は胴部に強い屈曲を有する。20-6は波状を呈し、波頂部に幅広の刺突を有す。外面には口縁部直下に沈線を有し、その下は斜行沈線を配す可能性がある。20-7は口縁部外面にLRを有し、屈曲上胴部に沈線でJ字状垂下文と帯状区画文を配す。沈線内に赤色顔料が遺存し、丁寧にミガキを施していることから浅鉢と考えられる。20-9は上胴部に沈線で平行四辺形状の帯状区画を有し、その外にRLを有す。小形で外面は丁寧なミガキを施すのに対し、内面は粗雑なものであるため、注口付土器の可能性を指摘しておきたい。20-8は屈曲上胴部に沈線による菱形文を有す。沈線外にはRLを有す。20-10は無文であり、算盤玉状の胴部で復元径は極めて大きい。調整は外面をミガキ、内面は粗雑なナデである。広口口縁の浅鉢ならば内面もミガキとなるはずであり、そうでないということはミガキ調整が及ばなかった可能性が考えられる。そう仮定すると口縁は小さいと考えられ注口付土器の可能性も指摘できる。ただし西日本の縄文後期注口付土器は東日本のと比べて大型とされるが、ここまで大きいものなのかどうかは今後の検討を要する。

19-1は鉢の上胴部と考えられ、胴部に強い屈曲を有するものと思われる。外面に沈線で粗雑な文様を描くが、モチーフは渦文であろう。19-2～4・6～9は橋状把手ないしは突起をまとめた。基本的に頸部を跨ぐように貼付されており、把手の貼付される口縁部では渦状沈線を有し、そこから口縁部上面へ派生していく沈線の端部にはキザミないしは短沈線を配す。注意すべきなのは19-6～8であり、19-6は平縁に鍋掴み状の把手を有し、そこに4つの焼成前穿孔を有す。把手と対応するように平縁には端同士が繋がらないリング状の沈線を有す。19-5は平縁であるが胎土等から19-6と同一個体であろう。19-7はリング状の把手であり、一対出土している。把手上には嘴状の突起が付き、表面に2個の円孔刺突、裏面に1個の円孔刺突を有す。19-8は幅広で薄手の把手であり、平縁部には端部に矢羽状の短沈線を配す。19-10～12は底部であり、19-10は平底でそれ以外は凹み底である。19-11は底部からすぐに内湾気味に胴部へと立ち上がっていく。

包含層北からは18-1～4が深鉢、18-5～8が鉢、21-1～4が浅鉢、21-5～8が底部である。18-1は無文深鉢で外面にケズリが目立つ。18-2は外面に沈線とその上に刺突を有す。18-3は縄文地深鉢である。18-5は口縁部外面及び胴部にRLを有す。18-6・7は口縁部内外にLRないしは左斜行キザミを有するが節が不鮮明で判別できない。その下に浅い沈線を配す。共に角閃石を多く含み、精選された粘土を使用している。18-8は頸部をまたぐ橋状把手を有す鉢で把手外面に刺突を有する。口縁部外面及び上面には沈線を有し、外面沈線下にはLRを有す。上面の文様は橋状把手上で2本の沈線を巴状に入り組ませ、それを左右から包むかのように多重の弧文を配す。胴部は赤色顔料が所々遺存する。沈線で渦文を中心においたブーメラン状の文様を配す可能性がある。縄文は確認できない。18-9は橋状把手で外面に沈線を有す。U字状の内文を有す。21-1はボウル状浅鉢で磨消縄文で、垂下する。蛇行沈線文と横走する多条沈線文を有し、1・8・9本目の沈線内には押し引き状を呈す刺突が見られる。8・9本目間は無文であるが、それ以外にはRLを有するようである。21-2はボウル状浅鉢の口縁部で、外面に多条の沈線を有す。21-3は21-1と同一個体である。21-4は皿状と考えられる

浅鉢ないしは鉢の口縁部で、外面に3条一対と考えられる鋭く細い沈線を有す。21-5～8は底部であり、深鉢のものと考えられるが、21-5のみ凹み底である。

M3区の出土縄文土器に関して総括すると、基本的に縄文後期中葉に位置付けられる。縄文種に関してはRL・LRいずれかの優勢については全体を把握してないために言及できない。縄文地鉢いわゆる“全縄文”に関しては縄文を横及び縦方向に交互に回転させる羽状縄文が主体であり、その種については原体の大きさに差があるもののLRが主体である。縄文後期中葉、型式で言うならば近畿における北白川上層2期以降に縄文のRL・LRの比率の逆転が発生し、LRが優勢になる(泉拓良1981「近畿地方の土器」『縄文土器の研究4 縄文土器』雄山閣)。16-1・2に関しては口縁部外面にLRを有し、頸部外面にも独立した文様を有す。16-2は矢羽状文があり、類例としては大分県佐知遺跡(1989大分県教委)出土例が挙げられる。16-1は内外に梯子状文があり、類例としては福田K式～松ノ木式が挙げられるものの、モチーフとしては高知県西分増井遺跡及び福岡県下吉田遺跡(1985財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室)が挙げられる。それぞれ後期中葉の所産である。16-10に関してはモチーフとしては瀬戸内海沿海部に分布しており、胴部文様や口縁部文様としても使用されるようである。類例としては岡山県津島岡大遺跡第五次調査(1994 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター)、福岡県石町遺跡(1992 福岡県教委)が挙げられる。20-1に関しては鐘崎式そのものである。しかし20-9のように一乗寺K式の注口土器や19-7のように異系統の要素が見られることから東からの影響も考慮にいれるべきである。

石器

M3区で出土した石器は石鏃、磨製石斧、打製石斧、刃器、槍先状石器、磨石、石錘、不明石器、サヌカイト石核である。各石器の出土点数は表6(CD)のとおりである。

M3区の出土石器でもっとも特徴的なことは打製石斧が多く石鏃、石錘が少ないことである。H区では石器で大きな割合を占めるのは石錘であるのに対して、M3区では石錘と打製石斧がほぼ2:1の割合になっておりその多さが際立っている。

石錘は多く出土している。個別にみるとH区出土のものがほとんど端正な小判形の扁平な砂岩製で両端打ち欠きのものが大部分を占める状況は同じであるが、石材に緑色岩や頁岩が目立ち端正な小判形のものが少なく不整形なものが多くなっておりH区の石錘とやや異なった状況を示している。

注目される遺物では24-15があげられ、赤色頁岩製で約3cmほどの大きさの分銅型のもので、丁寧な研磨により仕上げられている。赤色頁岩が石器に使われる例は高知県中央部では少なく形態的にも特異なもので人形を呈した可能性も考えられる。

石器の状況は、土器の様相と同様にH区出土の遺物と異なった状況を示しており、打製石斧が多く出土した一次調査Loc.47に近似した状況と考えられる。

7. M4区の概要

概要

M4区は全体調査区の中では南端部に位置しており、周辺の調査区のM区、H区、一次調査Loc.47などでは縄文時代の遺構、遺物を検出している。

調査は本体工事にかかる市道部分で当初トレンチ確認調査として行われ、M1・3区に隣接する部分で縄文時代の包含層を確認したためその部分を拡張し調査を行った。

設定したトレンチはTR1～4でTR1とTR4で包含層が残存しており、TR1では縄文時代後期の土坑、ピットを検出することができた。またTR4からは弥生時代前期の土坑1基を検出した。

M4区の地形はTR1とTR3が低くなっており低い部分に包含層が残存したのと考えられ、TR1はM1区で検出したSR101に向かって落ちてゆく斜面と考えられる。

調査担当者 森田尚宏、前田光雄、吉成承三、坂本憲昭

執筆担当者 坂本憲昭、松本安紀彦(土器)

調査期間 平成13年5月～平成13年7月

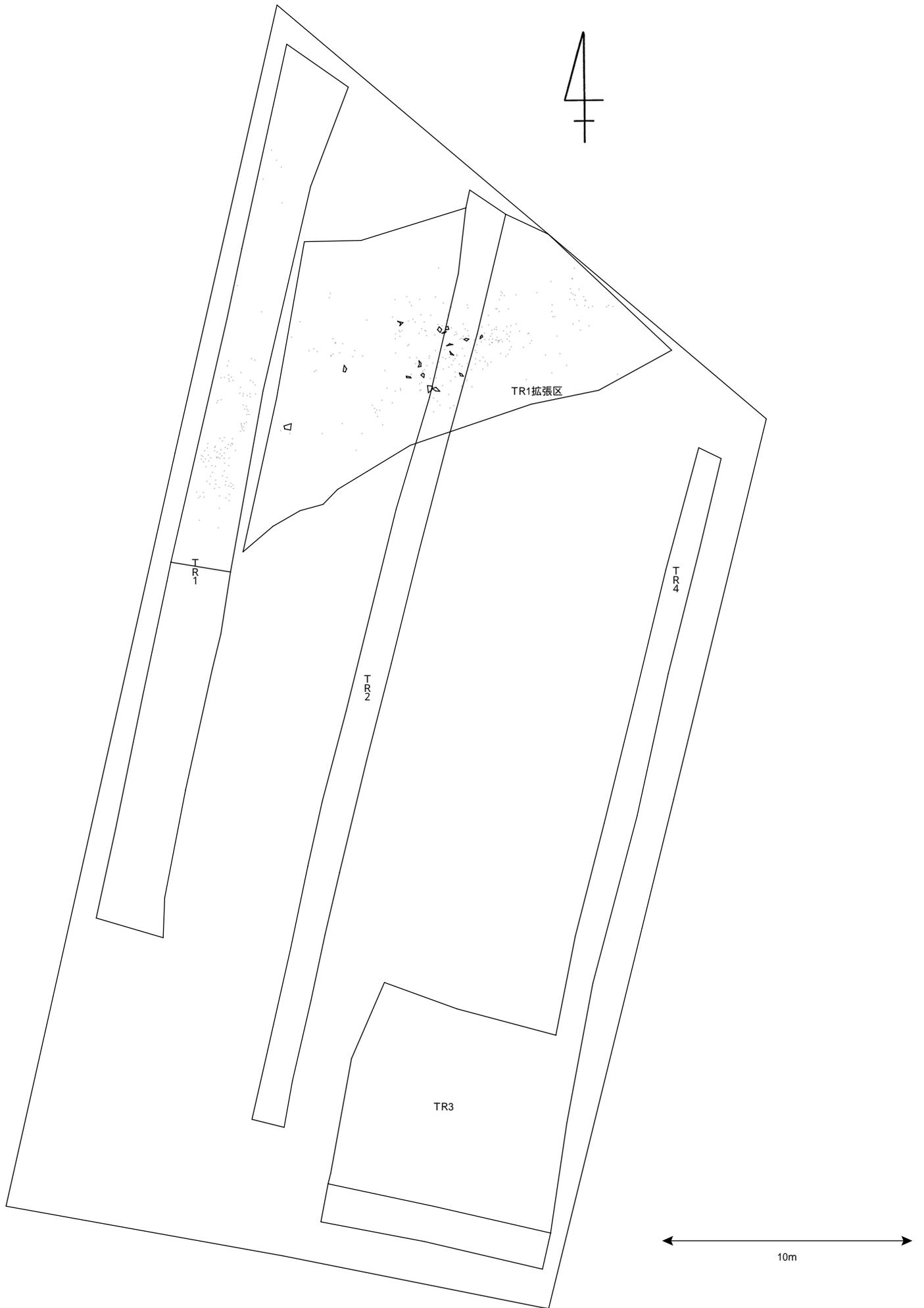
調査面積 405m²

時代 縄文時代後期

検出遺構 縄文時代 土坑2基 ピット10個
弥生時代 土坑1基

M区-3表 M4区土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	規 模			主軸方向	埋 土	切合関係	時期	備考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)					
SK401	楕円形	皿状	0.65	0.6	18	N-63°-W	黒灰褐色粘質土	-	弥生時代I期	-
SK402	円形	箱形	1.5	1.35	25	N-60°-E	黒色粘質土	-	縄文時代後期中葉	-
SK403	楕円形	箱形	1.25	1.0	35	N-53°-W	黒色粘質土	-	縄文時代後期	石棒状の石出土



M区 - 7 図 M4区全体図

8. M4区の遺構と遺物

(1) 遺構

M4区では縄文時代の遺構としてTR1拡張区から土坑 2 基とピット10個を検出している。その他TR3拡張区では弥生時代前期の土坑 1 基を確認している。

M4SK401(M区-8図)

時期；弥生I **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-63°-W

規模；0.65m×0.6m **深さ**；0.18m **断面形態**；皿状

埋土；黒灰褐色粘質土

付属遺構； **機能**；

出土遺物；弥生土器(鉢)

所見；SK401はTR3拡張区で検出した遺構で検出標高は約6.5mである。規模約0.65m×0.6m、深さ18cmの楕円形の土坑で弥生時代前期の土坑と考えられる。SK401を検出したTR3からは縄文時代の土器が出土しているが量的には少なく散漫な状況であった。当初SK401も縄文時代の土坑の可能性を考えたが、埋土を掘削したところ8-1の口縁端部に刻目突帯を持つ弥生時代前期前葉の東松式と考えられる鉢が出土し弥生時代の土坑と判明した。

遺構の埋土は黒灰褐色粘質土で炭化物が含まれていた。縄文時代の包含層も黒色土であるがSK401の埋土のほうが粘性が低く、若干色調が淡い特徴を持っており縄文時代の包含層と若干の違いがみられる。

田村遺跡群ではL区を南限に流路跡以外の遺構は確認されていなかったため、この土坑が田村遺跡群で検出した最も南に位置する土坑である。弥生時代前期前葉の集落は一次調査のLoc.17を中心とする東松木地区で検出しており、弥生時代前期前葉の集落の在り方を検討する資料を提供している。

M4SK402(M区-8図)

時期；縄文時代後期中葉 **形状**；円形 **主軸方向**；N-60°-E

規模；1.5m×1.35m **深さ**；0.25m **断面形態**；箱形

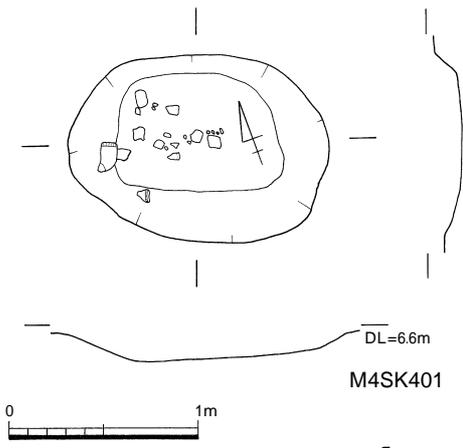
埋土；黒色粘質土

付属遺構； **機能**；

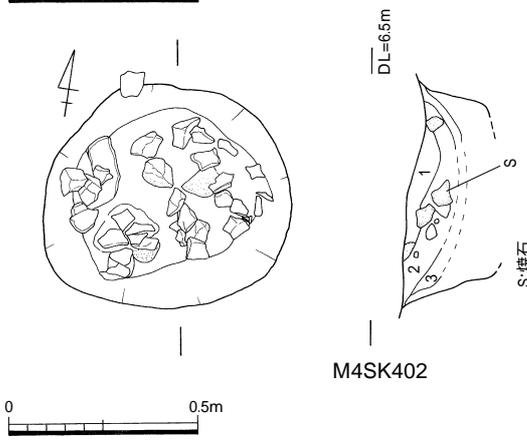
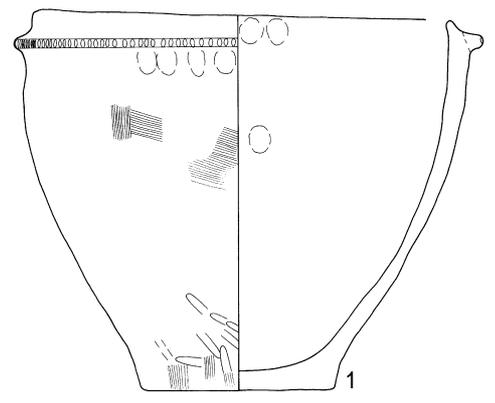
出土遺物；縄文土器(鉢)、焼石

所見；SK402はTR1拡張区の検出標高約6.4mの北側に向かって下がる斜面で検出した遺構である。土坑の規模は1.5m×1.35mで深さ約25cmの円形の土坑である。

埋土は黒色粘質土で埋土の上層には赤変した焼石とみられる石が出土しその下からは微量の骨片、炭化物が出土している。埋土中からは縄文土器も出土しており、8-3は残存が良好であった。8-3は、

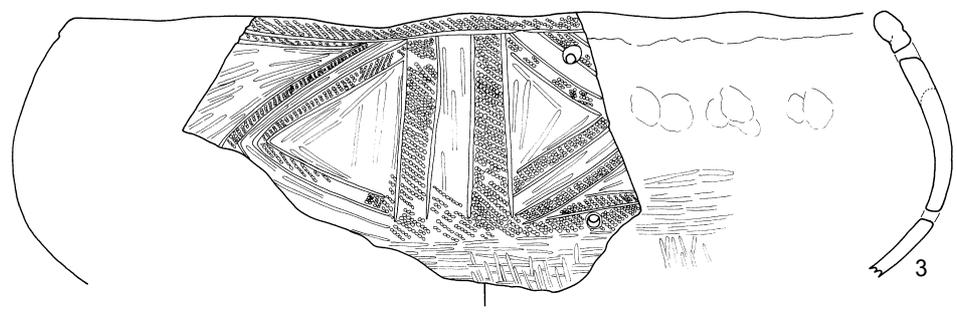
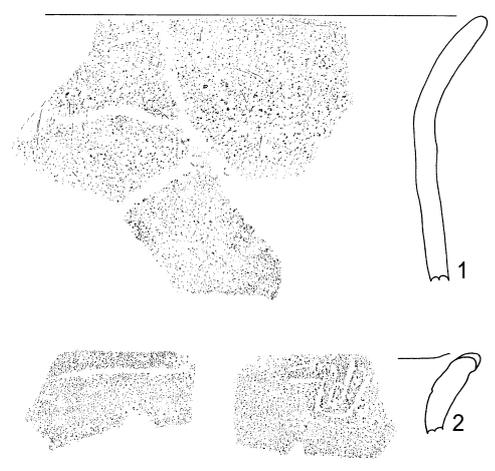


M4SK401

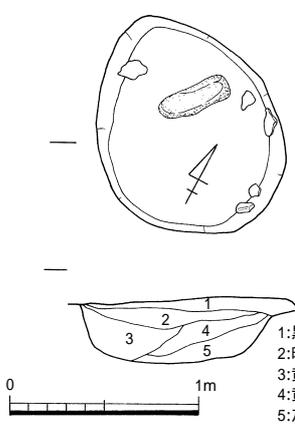


M4SK402

- S: 焼石
 1: 黒色粘土
 2: 明黒灰色シルト(灰・骨片含む)
 3: 黄褐色シルト



DL=6.4m
 M4SK403



- 1: 黒色土粘性シルト
 2: 暗褐色シルト
 3: 黄色シルト
 4: 黄褐色シルト
 5: 灰褐色砂質シルト
- } 炭化物・骨片 微量含む。

M区 - 8 図 M4 区SK401 ~ 403

口縁部がやや波状をなし、ポウル状の器形をなしていたとみられる。胴部には縄文時代後期の特徴を示す磨消縄文を沈線の間には施しており、主文様は菱形の文様である。時期は、H区で多く出土した鐘崎式より時期が下る北久根山式並行と考えられ、縄文時代後期でも中葉、高知県の土器形式では後期中葉の片粕式並行の可能性が考えられる。この鉢の外面には、赤彩が施されていた痕跡や補修孔がみられる。その他では縄文深鉢の口縁部8-1・2が出土している。8-1は無文で歪みが大きい深鉢口頸部である。外面に一部二枚貝条痕が残るがナデ消されている。8-2は波状口縁で、外面に抉るような沈線及び沈線によるクランク状の内文を有している。

M4SK403(M区-8図)

時期；縄文時代後期 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-53°-W

規模；1.25m × 1.0m **深さ**；0.35m **断面形態**；箱形

埋土；黒色粘質土

付属遺構； **機能**；

出土遺物；縄文土器、石棒状石器

所見；SK403は、長軸約1.25m × 短軸約1.0mであり、SK402より一回り小さな楕円形土坑である。掘方は断面箱形、深さは約35cm、埋土は黒色土であり、埋土中からは、土器、炭化物、細かな骨片が出土するが、出土量はSK402より少なかった。SK403で注目されるのは、幅約20cm、長さ約50cmの舌状の形態をした石棒の可能性が考えられる緑色片岩が出土したことである。出土状況は埋土の中層より横たわった状態で出土し、顕著な加工痕はみられない。他に大きな石は出土していないことなどから、直立した状態であった可能性は低いと考えられる。このほか土器では碗状を呈す浅鉢8-1が出土している。調整及び文様は磨滅により不明である。口縁は緩い波状を呈す。この土坑の性格としてはSK402と同様に、炉跡の可能性が考えられるが、石棒状の緑色片岩から墓壇の可能性も考えておかなければならないだろう。

(2) 遺物

M4区出土の遺物はTR1とTR3に大きく分かれTR4は包含層の残存も厚く出土量も多い状況であった。この状況は地形を反映しているものと考えられ、北東方向から南西方向にのびる舌状の微高地の南北斜面に残存したものと考えられる。出土した遺物は土器がほとんどで石器も出土するが少量であった。

土器

M4区では土器は実測点数17点を数え、SK401(1点)・402(2点)・403(1点)、TR4 層一括(13点)からの出土が見られる。土坑出土分については、各土坑の本文中で触れたためここでは包含層出土分のみを扱う。

TR4包含層一括には深鉢とそれの口縁部(21-9～12)、浅鉢口縁部と鉢とそれの各部位(21-13～15、22-1～3)、そして底部(22-4～6)を図示している。21-11は有文深鉢で胴部外面に沈線で縦置きMを対向に向き合わせるモチーフを呈し、文様内部は磨消し、文様外にRLを充填する。口縁部にも

縄文を有するように見えるが、磨滅により判別は出来ない。頸胴部の間には段が生じている。また、頸部には磨滅が著しいもののミガキの痕が残る。この段差は頸部を器形成形後に薄くする工程があったために頸胴部間の段差が生じたとも考えられる。21-12は縄文地深鉢で胴部外面及び口縁部外面にRLを有する。21-10は口縁部外面にRL、内面に2本の平行する沈線を有する。21-9は無文であるが、口縁部と頸部間に器厚差による段が生じている。この段は頸部を削ったために出来たように観察できる。21-13は皿状を呈す浅鉢の口縁部であり、外面に磨消縄文を有す。沈線で区画を行い、幅狭のRL縄文帯に磨消無文帯が挟まれ、上下の縄文帯は一定間隔で「工」字状のモチーフで繋がると考えられる。21-14・15は鐘崎式の口縁部と胴部である。21-14は遺存状況が悪いものの橋状把手が頸部を跨ぐように取り付けられている。把手には刺突以外の文様は不明であるが、上面の文様は左右からの沈線が絡みついている。平縁で外面及び上面に沈線を有し、上面の沈線の内端にはキザミを有する。21-15は鉢の上胴部片で、外面に沈線による鋤状及び渦状のモチーフを呈する磨消縄文を有する。沈線は一部に幅広の部分があり、沈線の基点には刺突を有する。22-1～3は胴部に強い屈曲を有し、上胴部に文様を有する鉢と考えられる。22-1は2本の沈線間に刺突を施すものを上下に持ち、その間は基本的に無文のようである。一部に上の文様帯から垂下するようにL字を横に寝かせたようなモチーフを沈線で描いている。22-3も同様の器形である。頸胴部間に浅い沈線を施し、上胴部には沈線内に刺突を有する沈線を上下に1本ずつ施し、その間に沈線内の刺突を左右から斜行させる沈線を施す。22-2も頸胴部間に沈線を施し、上胴部に沈線により多重弧文と带状区画文を配す。22-4～6は底部である。22-4・5は凹み底である。22-6は平底、22-5・6に関しては大きな差異は感じられず、深鉢ないし鉢のものと考えられるが、22-4に関しては底面中央がへそ状に凹み、その周囲を丁寧なナデで整えている。外面は被熱等により器面荒れが著しいが、内面は極めて丁寧なナデを有す。胴部へは外反するように立ち上がる。胎土には角閃石を多く含むことから浅鉢の底部として考えられる。

M4区出土の縄文土器は、TR調査のために全容の把握は困難であるが、SK402出土の鉢の時期がおおむねM4区の時期と考えられ後期中葉のものである。とりわけ22-1・3の土器に関してはM1・3区でも確認されており同調査区との近似性が確認できる。

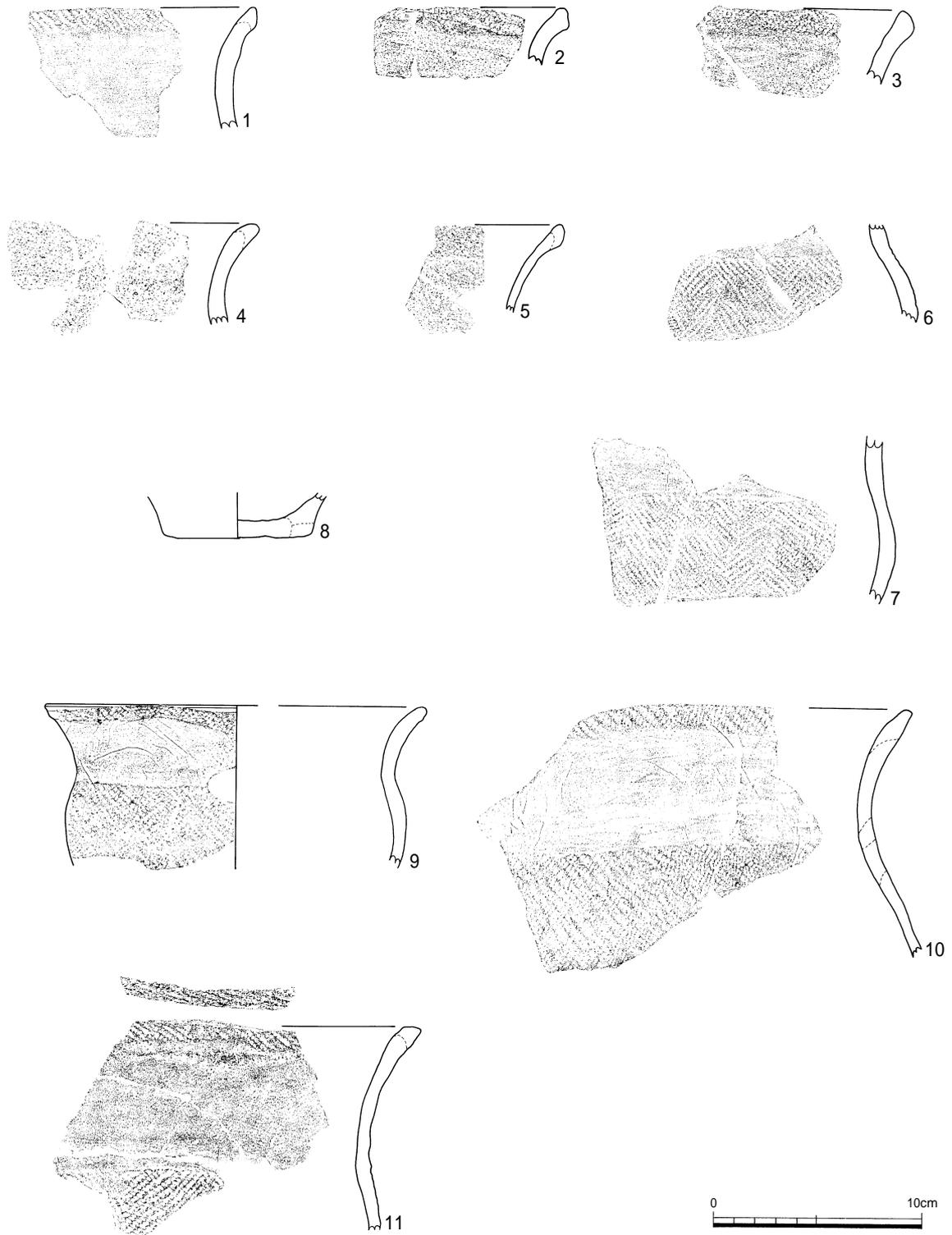
石器

M4区で出土した石器は石鏃、打製石斧、石錘である。石鏃は4点出土しており石材はチャート1点サヌカイト3点で、いずれも凹基式無茎石鏃であるが1点決りが浅いものがあった。

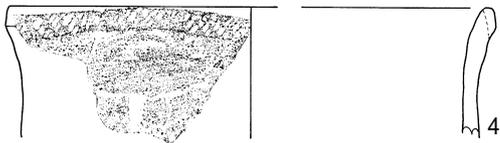
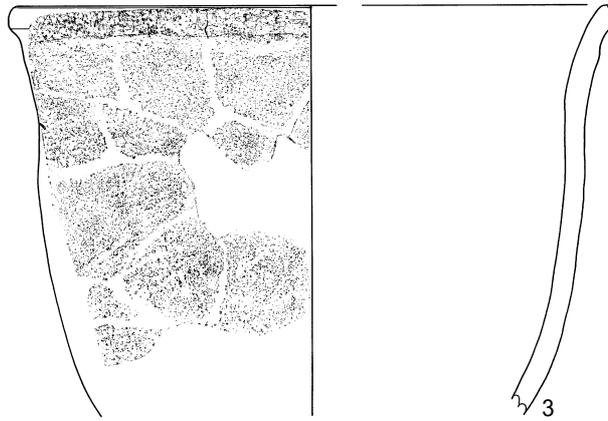
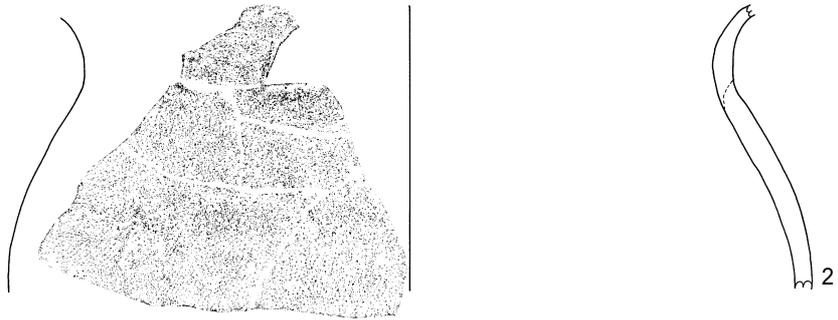
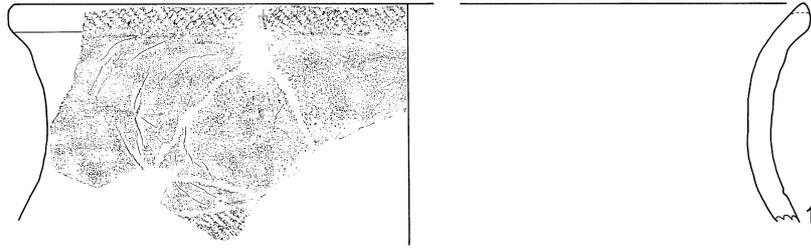
打製石斧は4点図化しており、分銅形2点、撥形2点を図化している。25-9の石材はチャートで他は片岩製のものである。チャート製の打製石斧は少なく今回調査でもこの1点が出土したのみである。

石錘では小判形のチャート製のものが出土している。

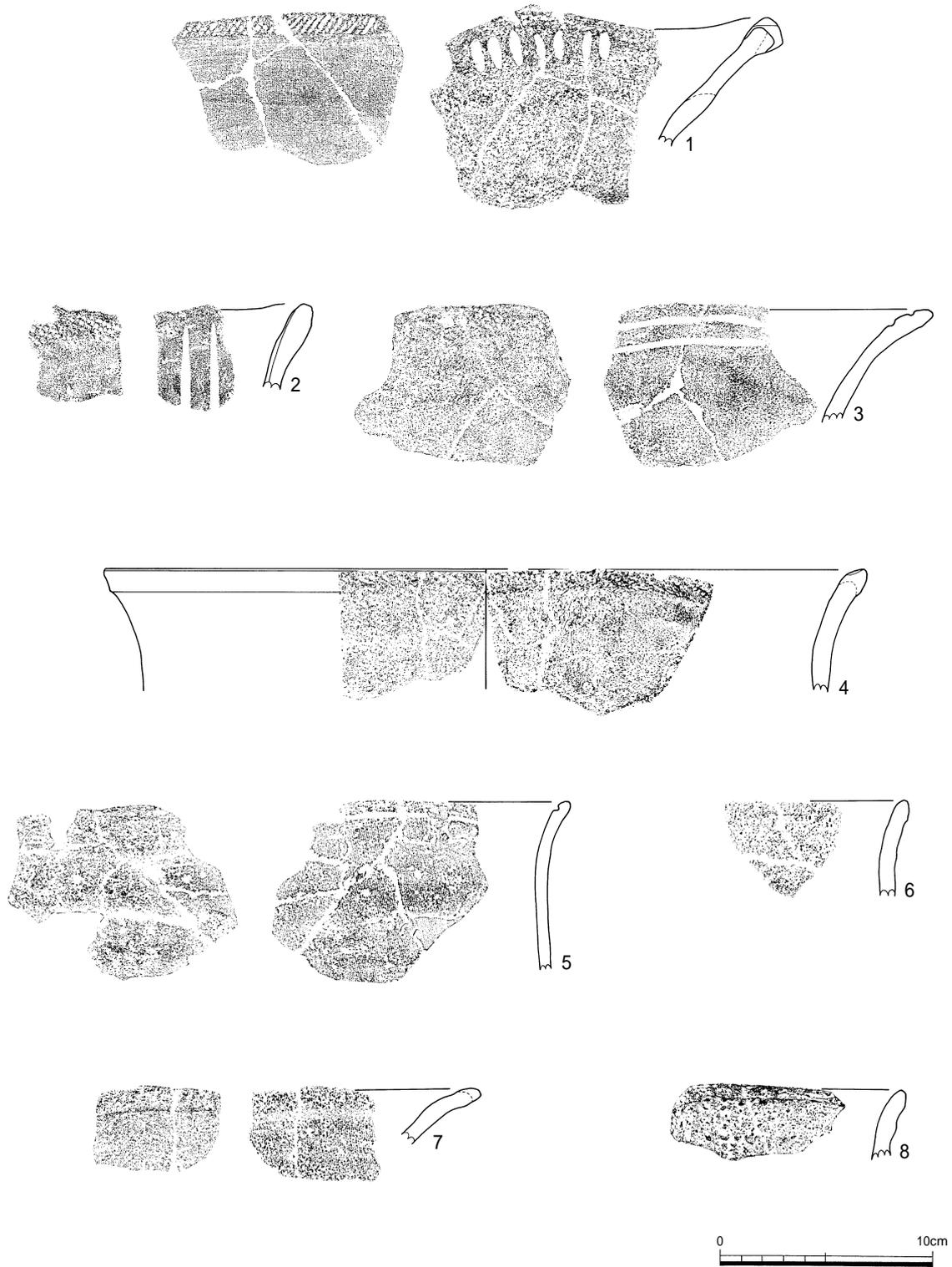
石器の状況は出土点数が少ないため遺跡の様相を反映していると言いが、出土点数に占める打製石斧の多さにその特徴が現れていると考えられる。



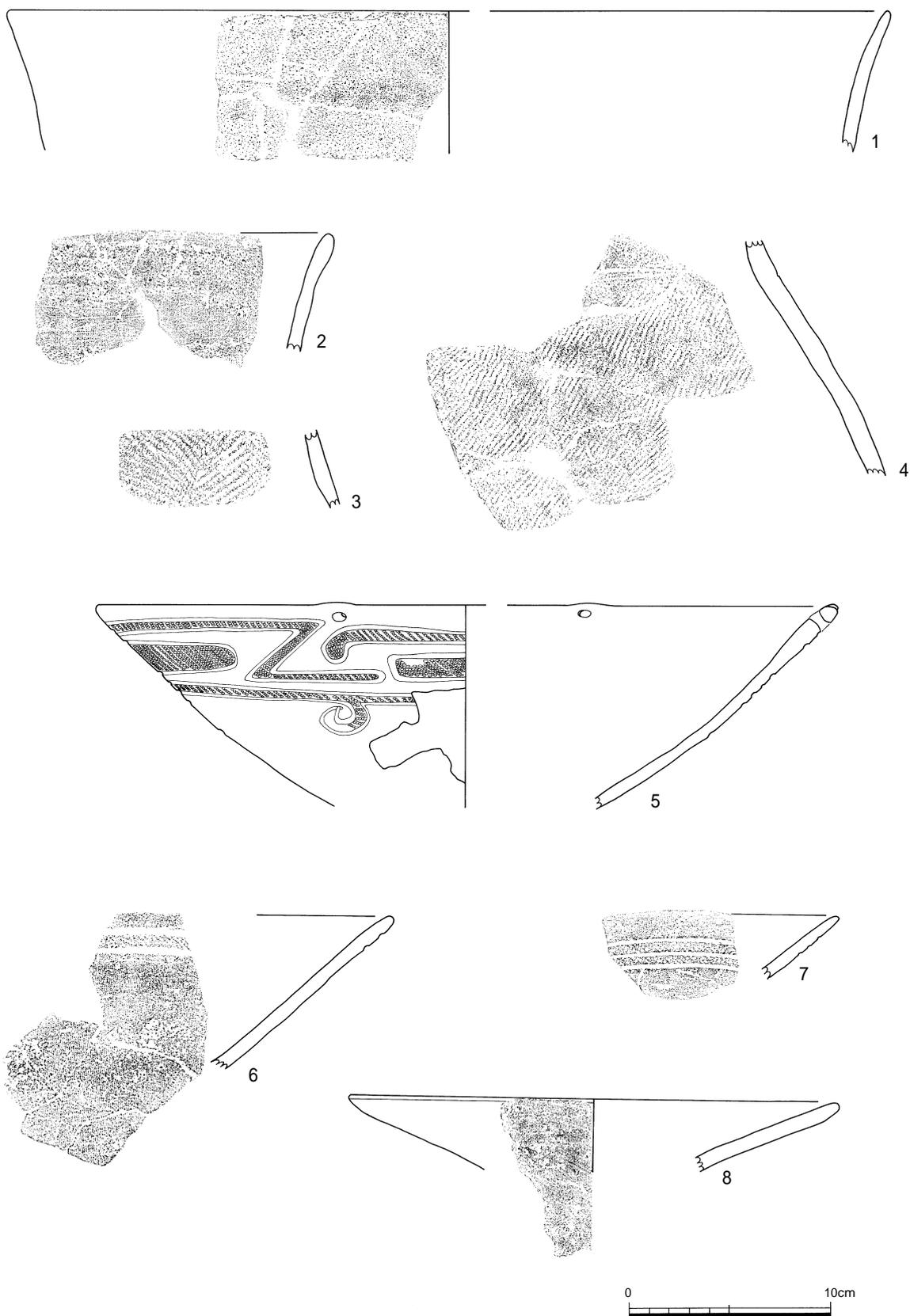
M区 - 9図 M1区包含層出土土器



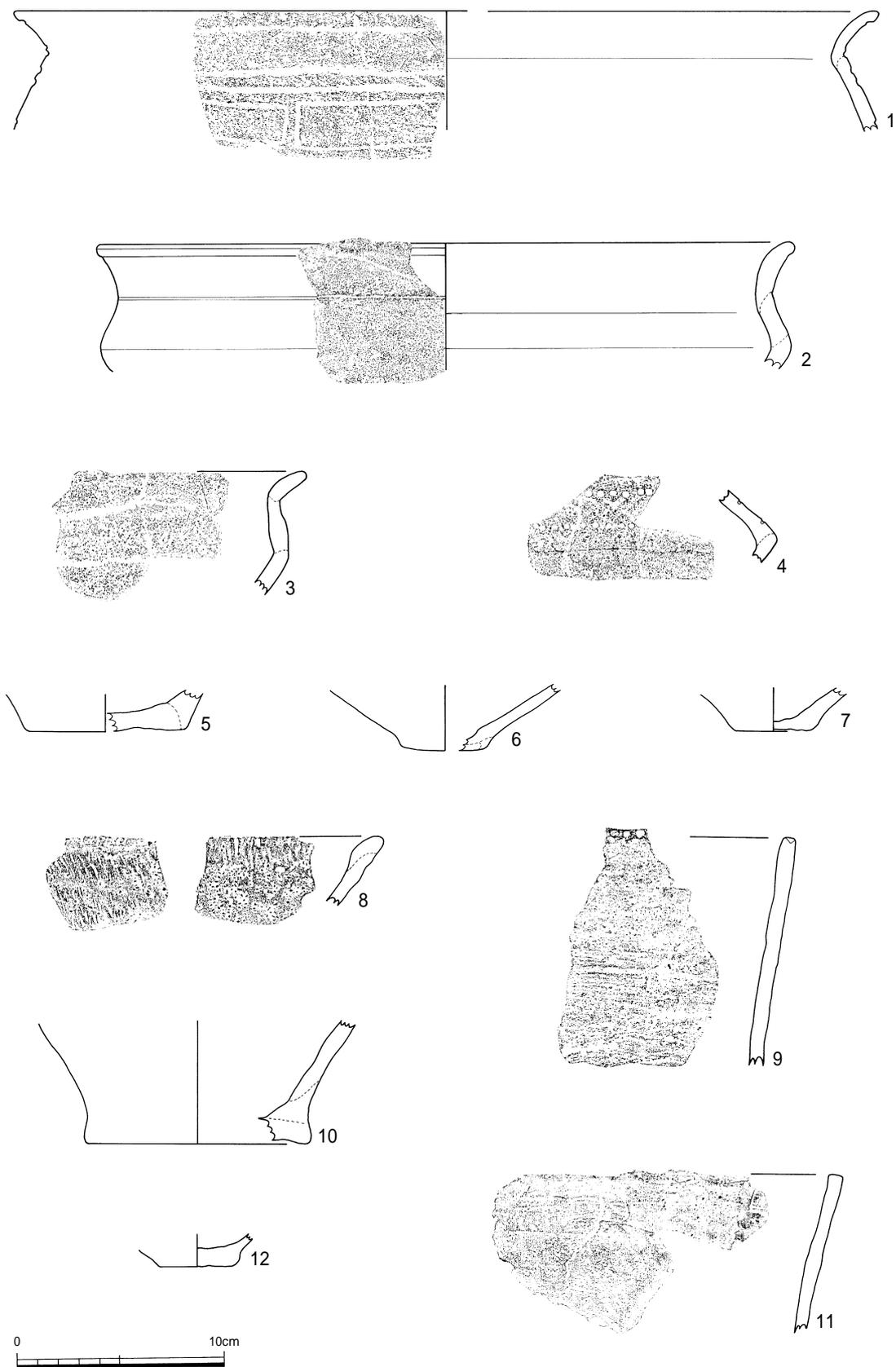
M区 - 10 图 M1 区包含层出土土器



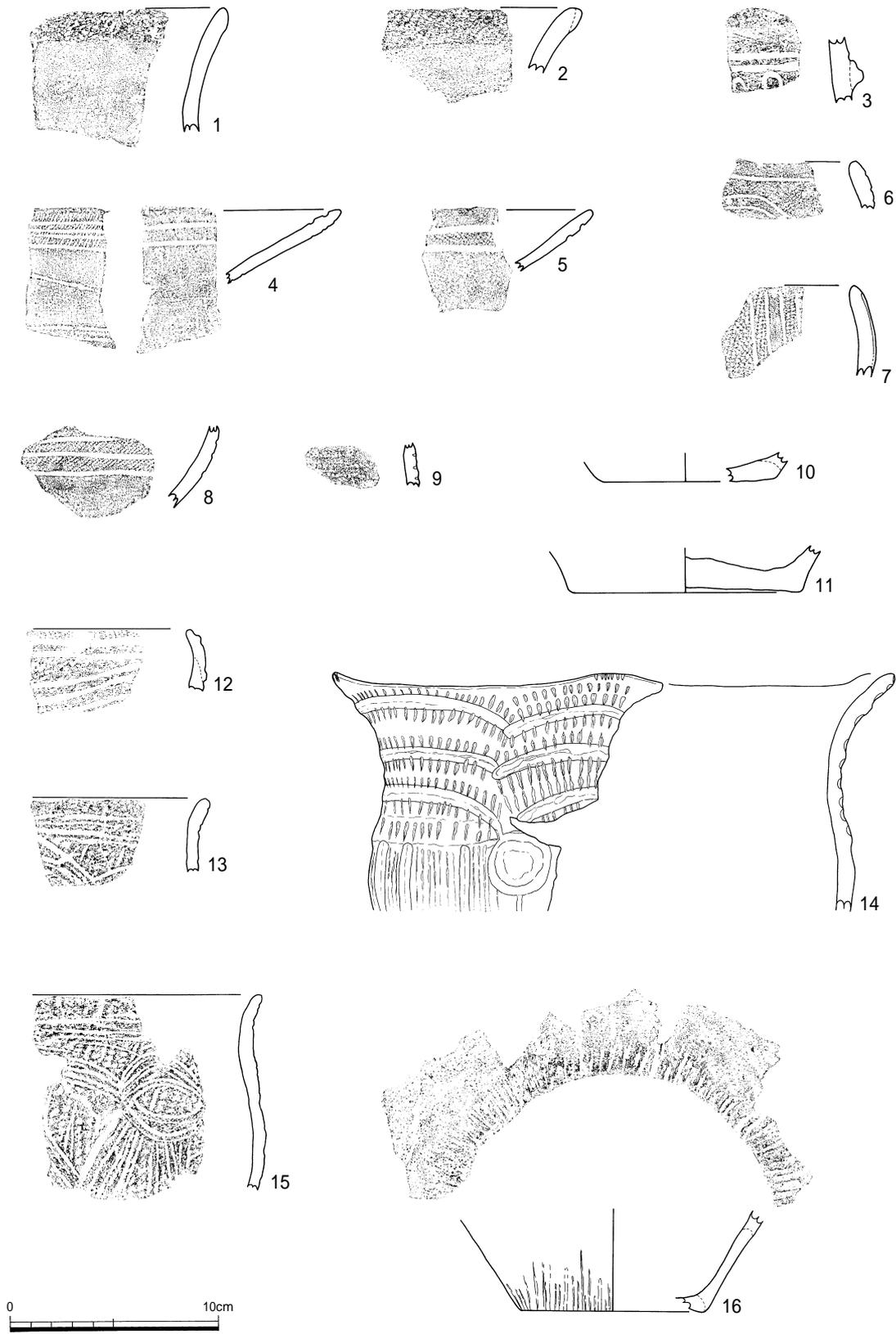
M区 - 11 図 M1区包含層出土土器



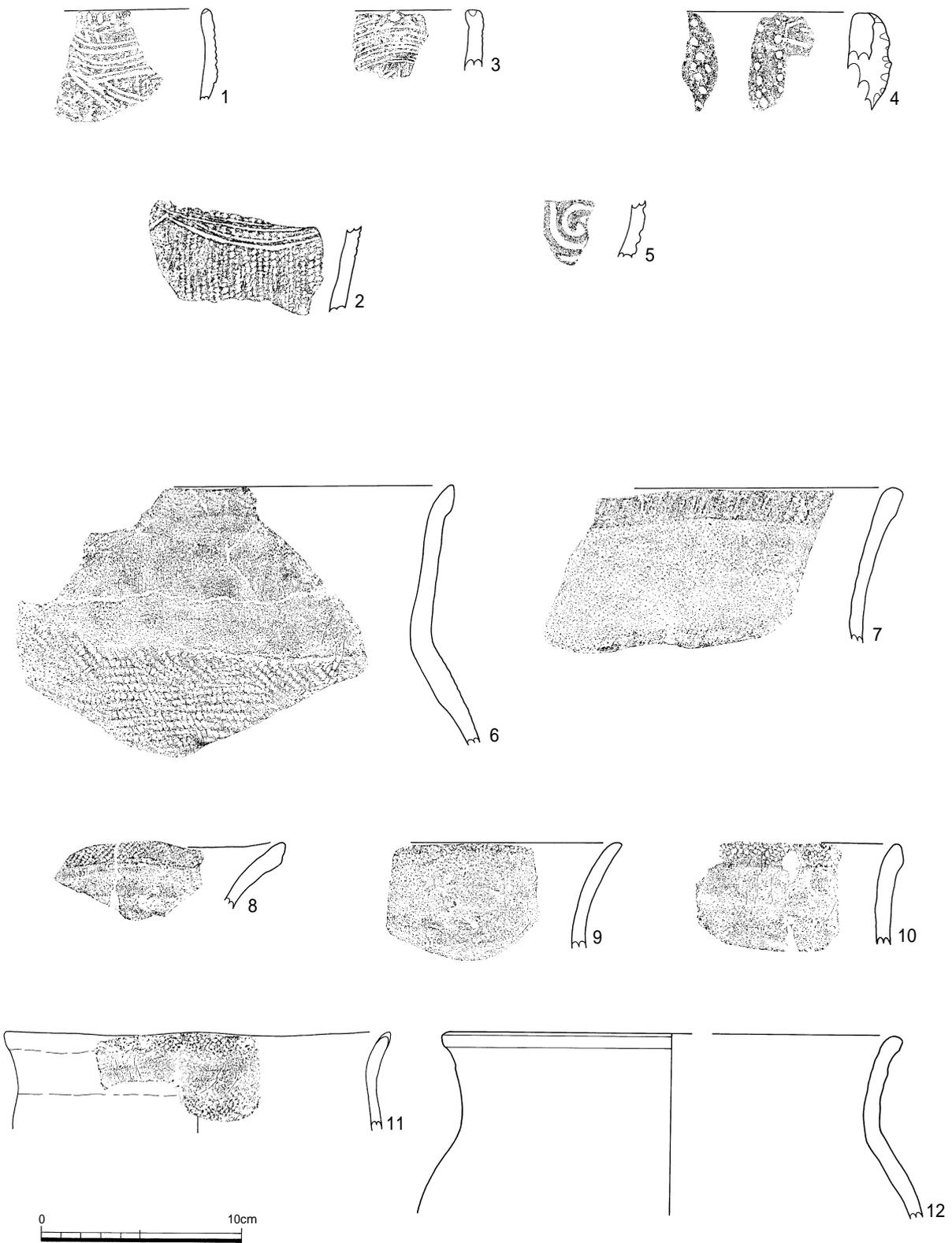
M区 - 12图 M1区包含层出土土器



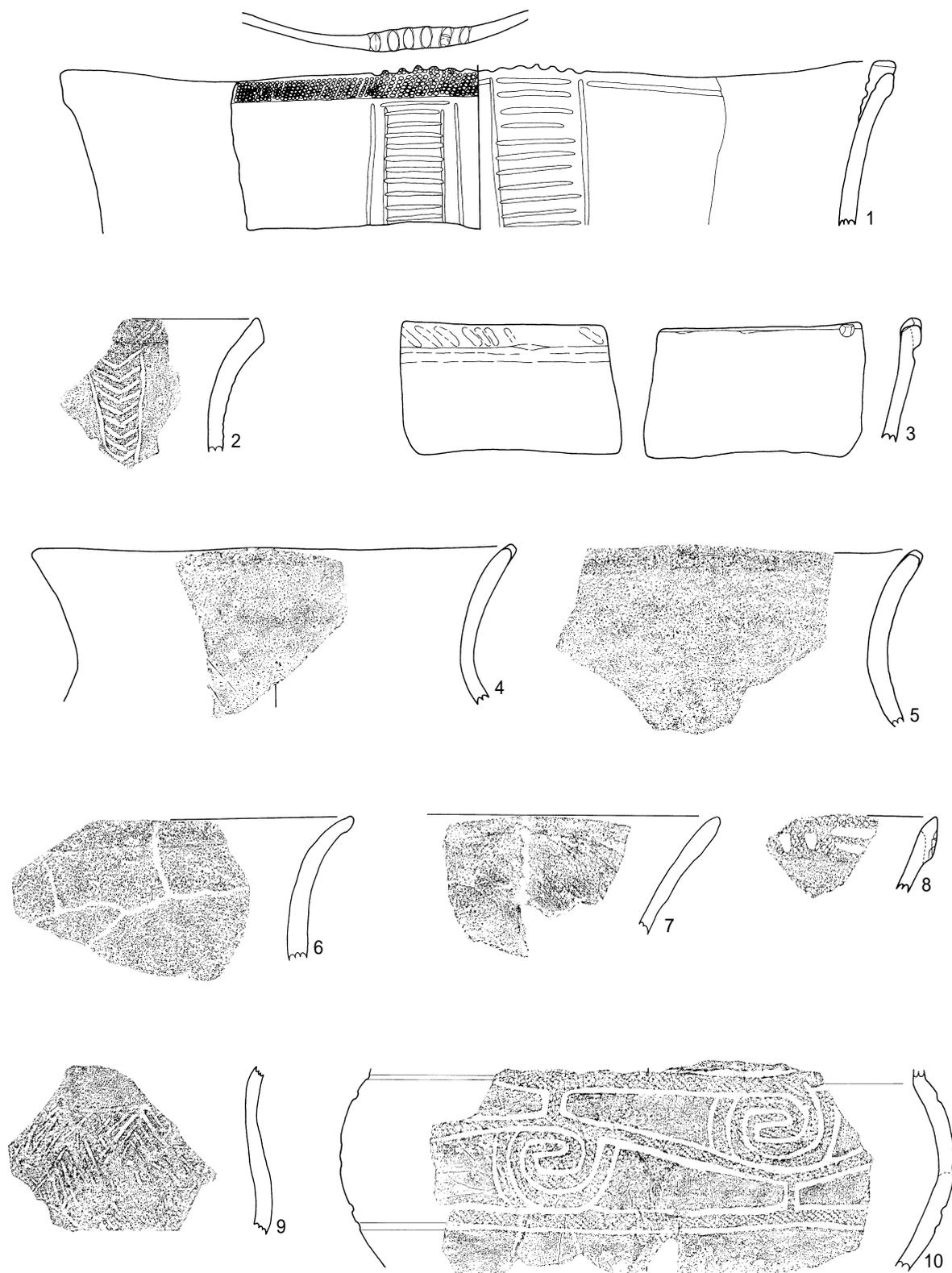
M区 - 13 図 M1区包含層出土土器



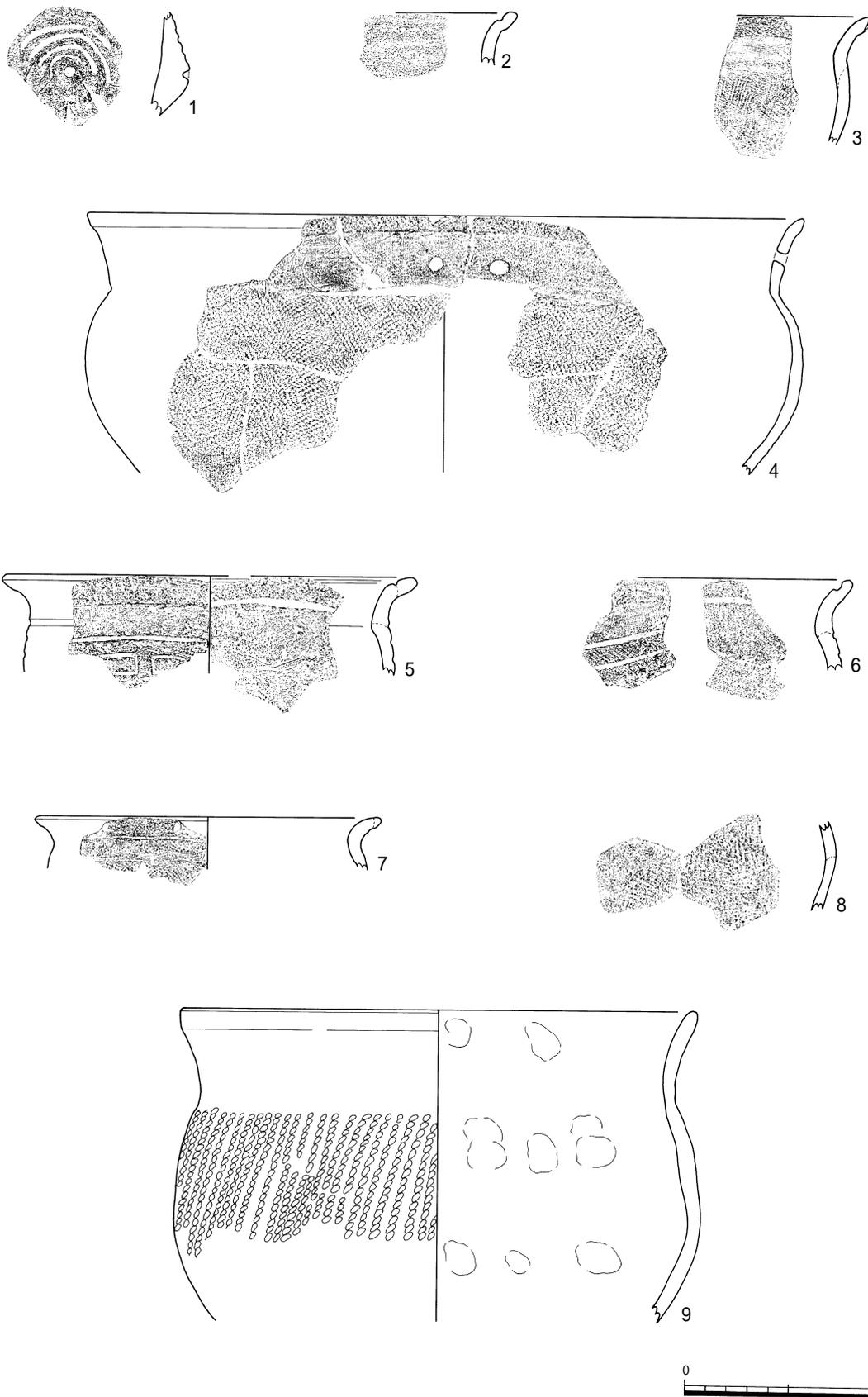
M区 - 14图 M1·M2区包含层出土土器



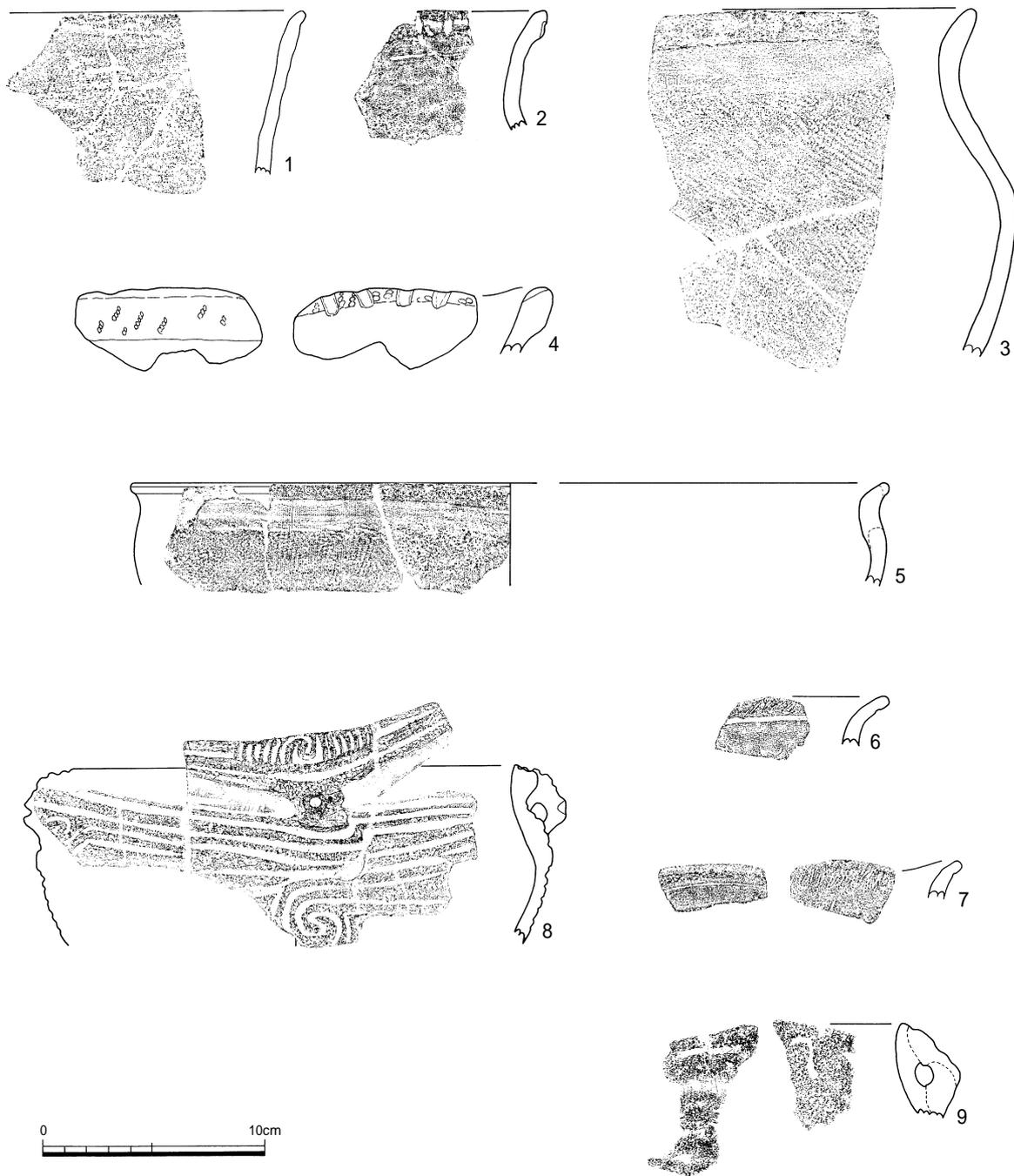
M区 - 15 図 M2・M3区包含層出土土器



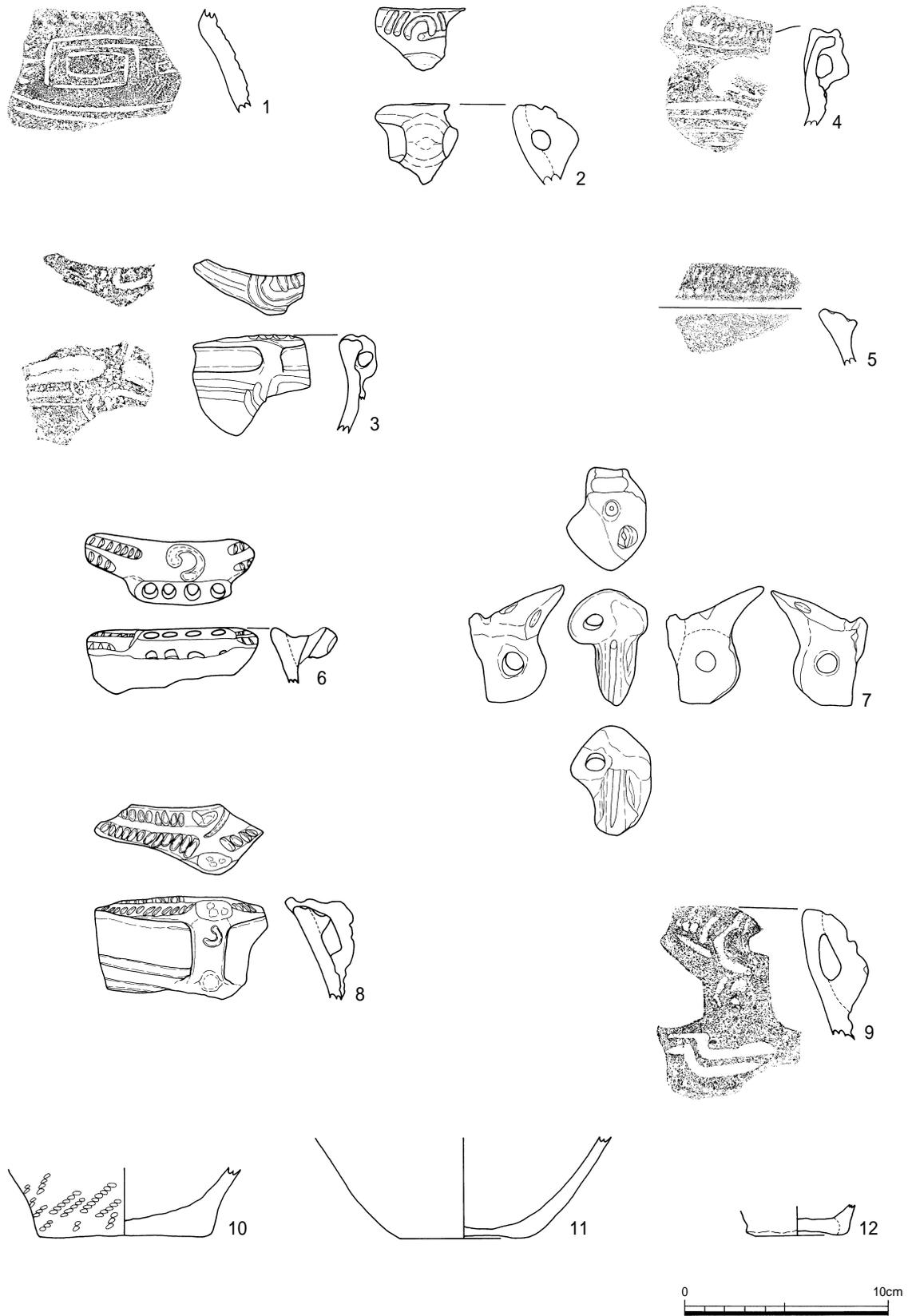
M区 - 16图 M3区包含層出土土器



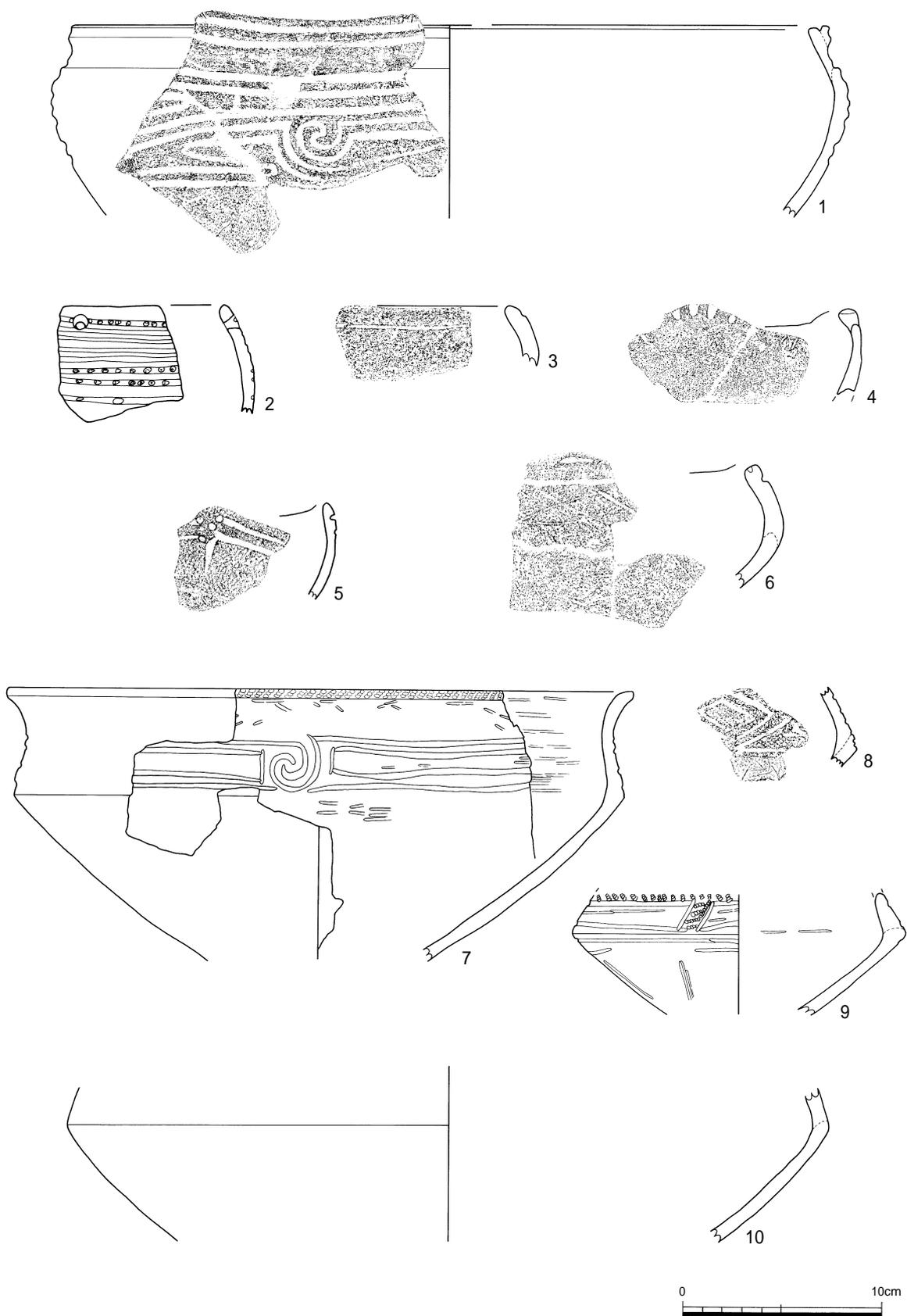
M区 - 17 図 M3区包含層出土土器



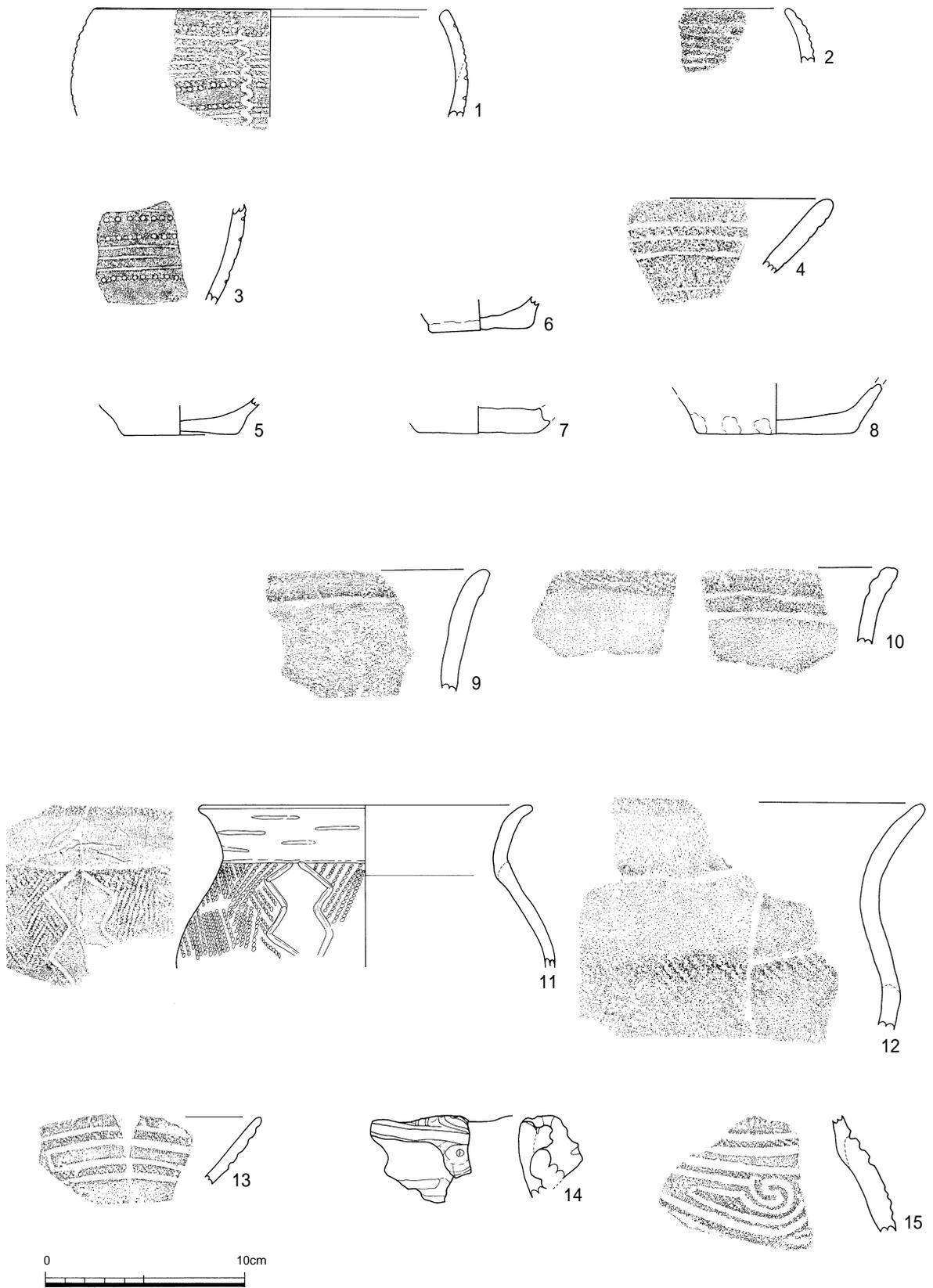
M区 - 18图 M3区包含層出土土器



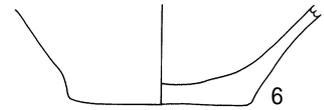
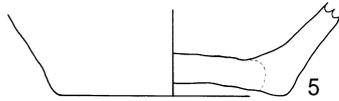
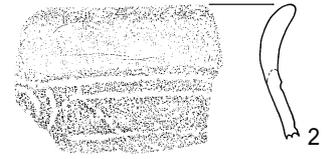
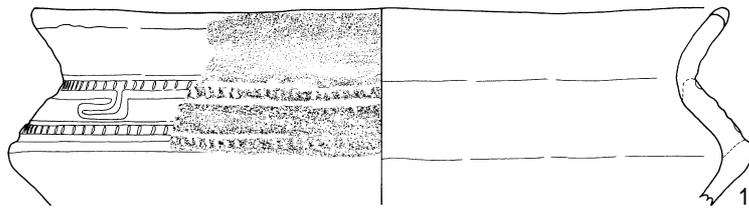
M区 - 19 図 M3区包含層出土土器



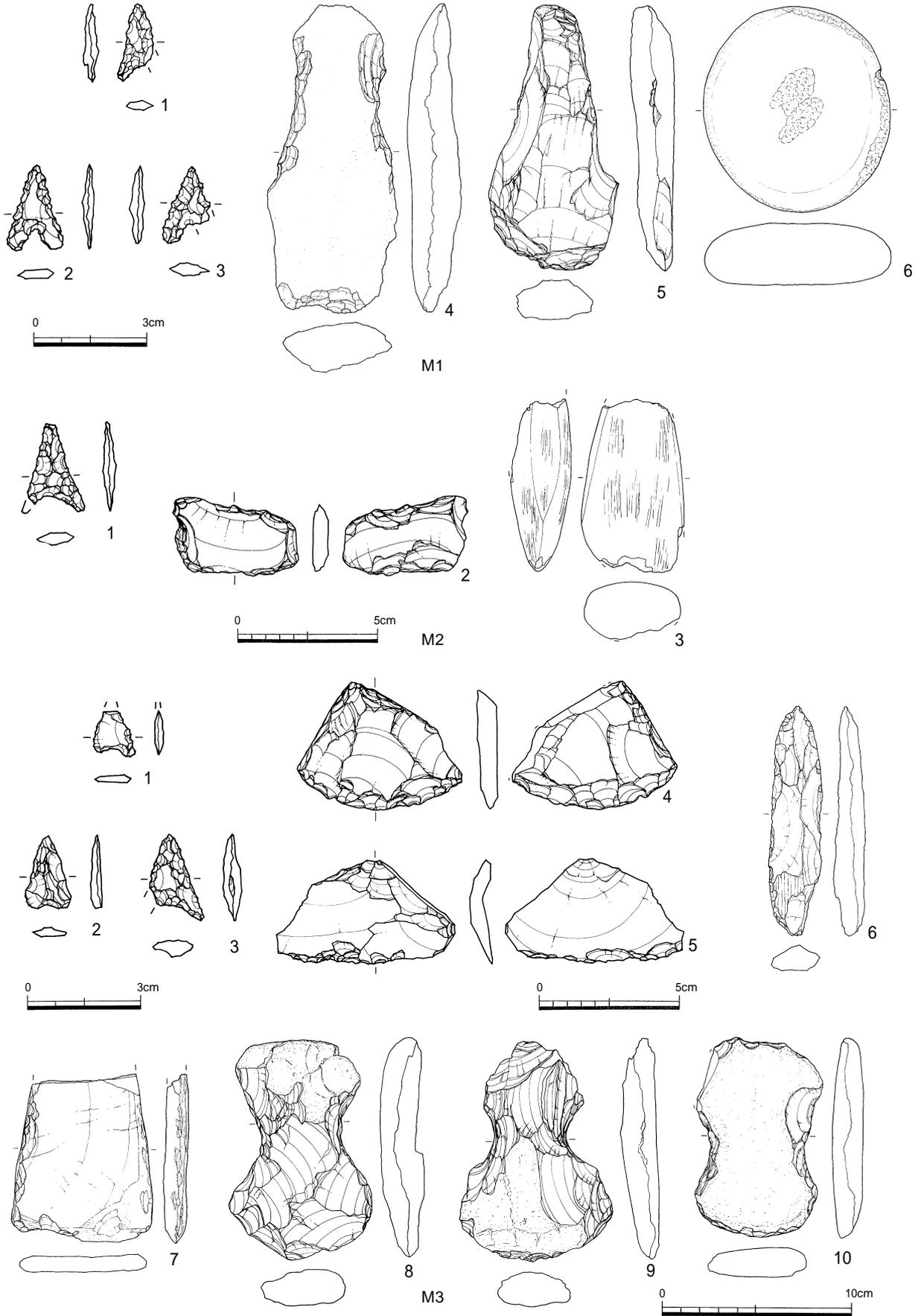
M区 - 20图 M3区包含層出土土器



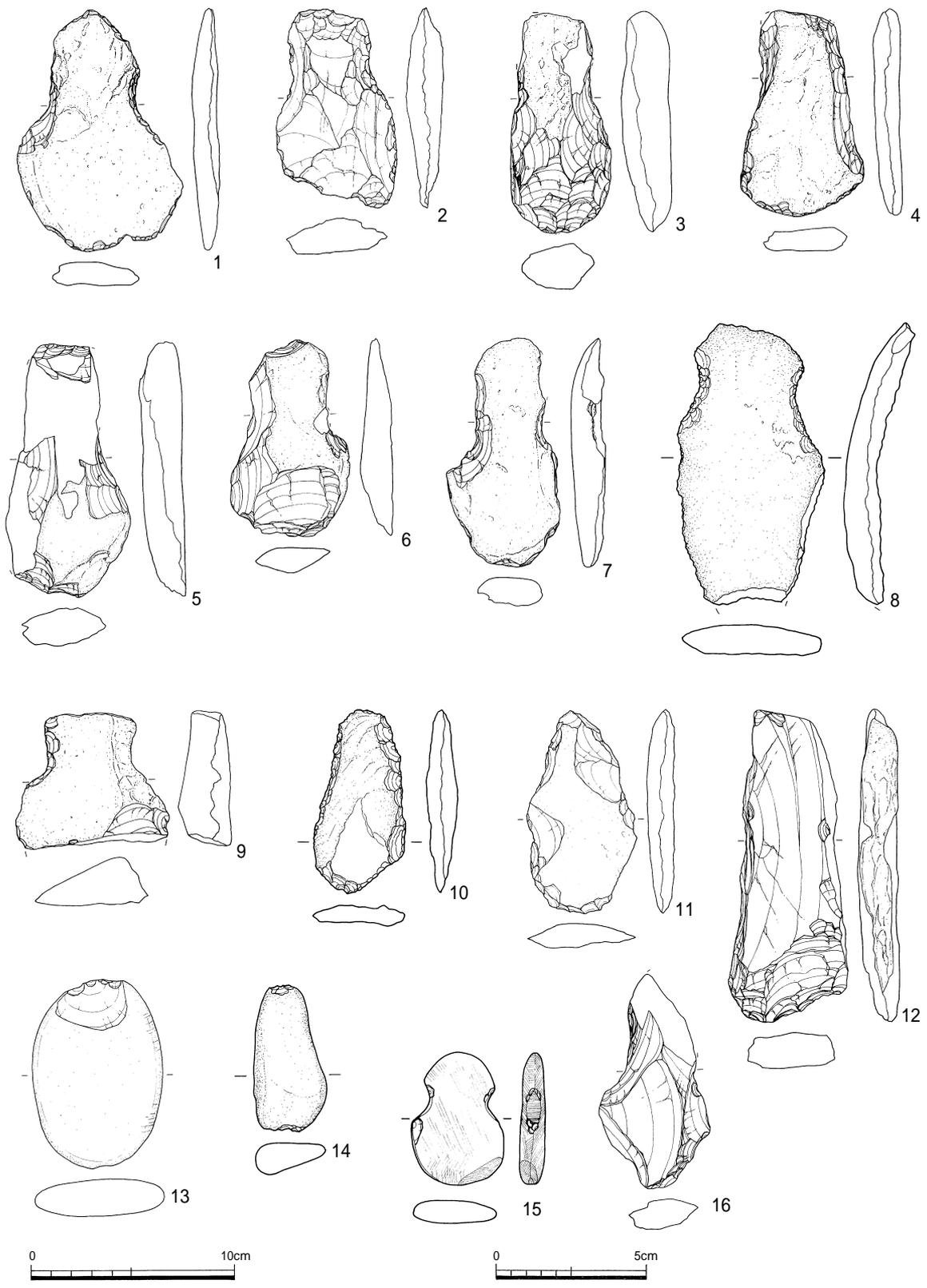
M区 - 21 図 M3・M4区包含層出土土器



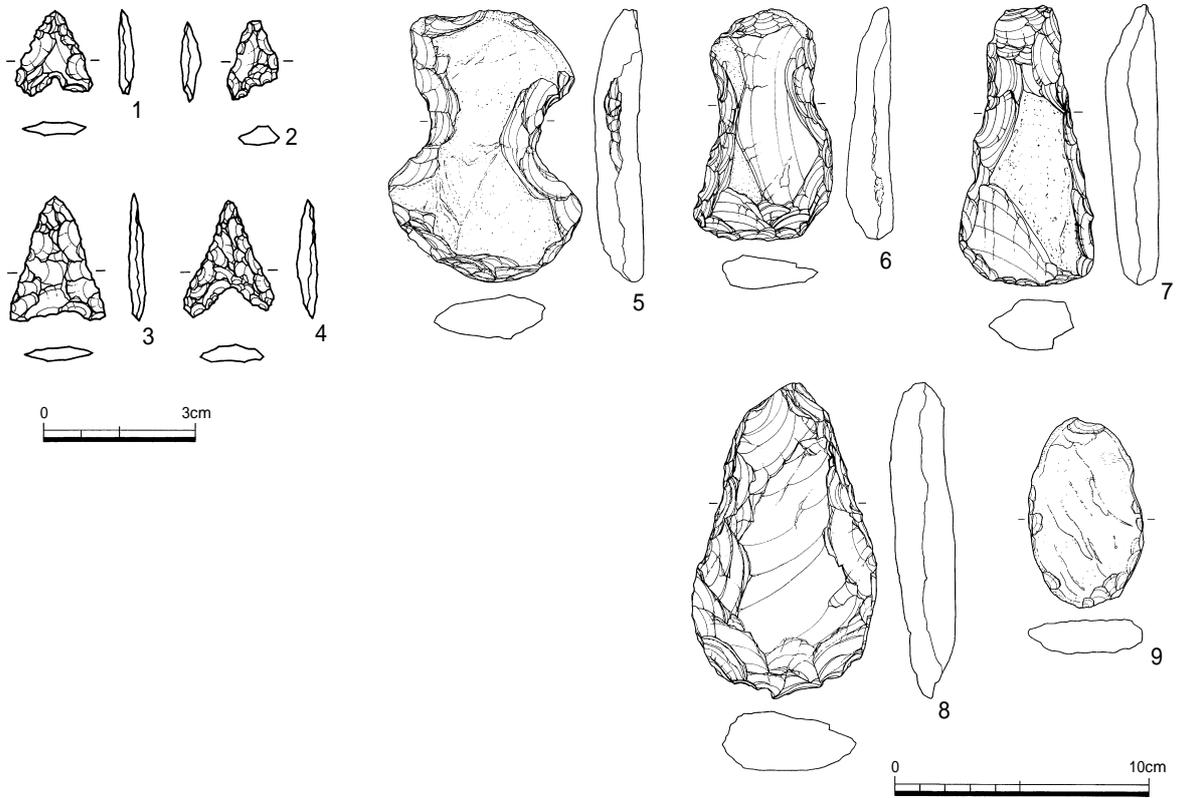
M区 - 22 图 M4 区包含层出土土器



M区 - 23 図 M1 ~ M3 区包含層出土石器

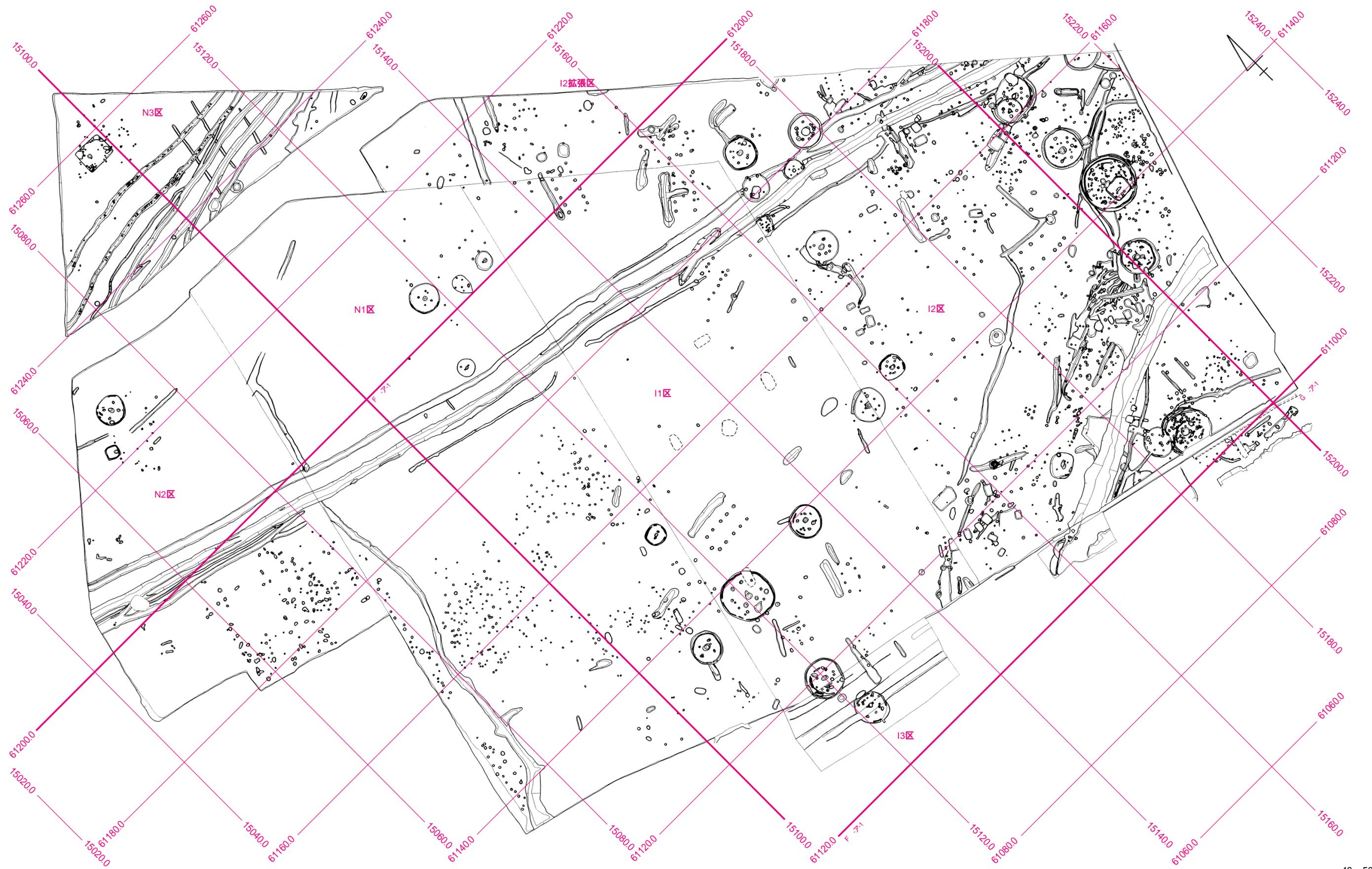


M区 - 24图 M3区包含層出土石器



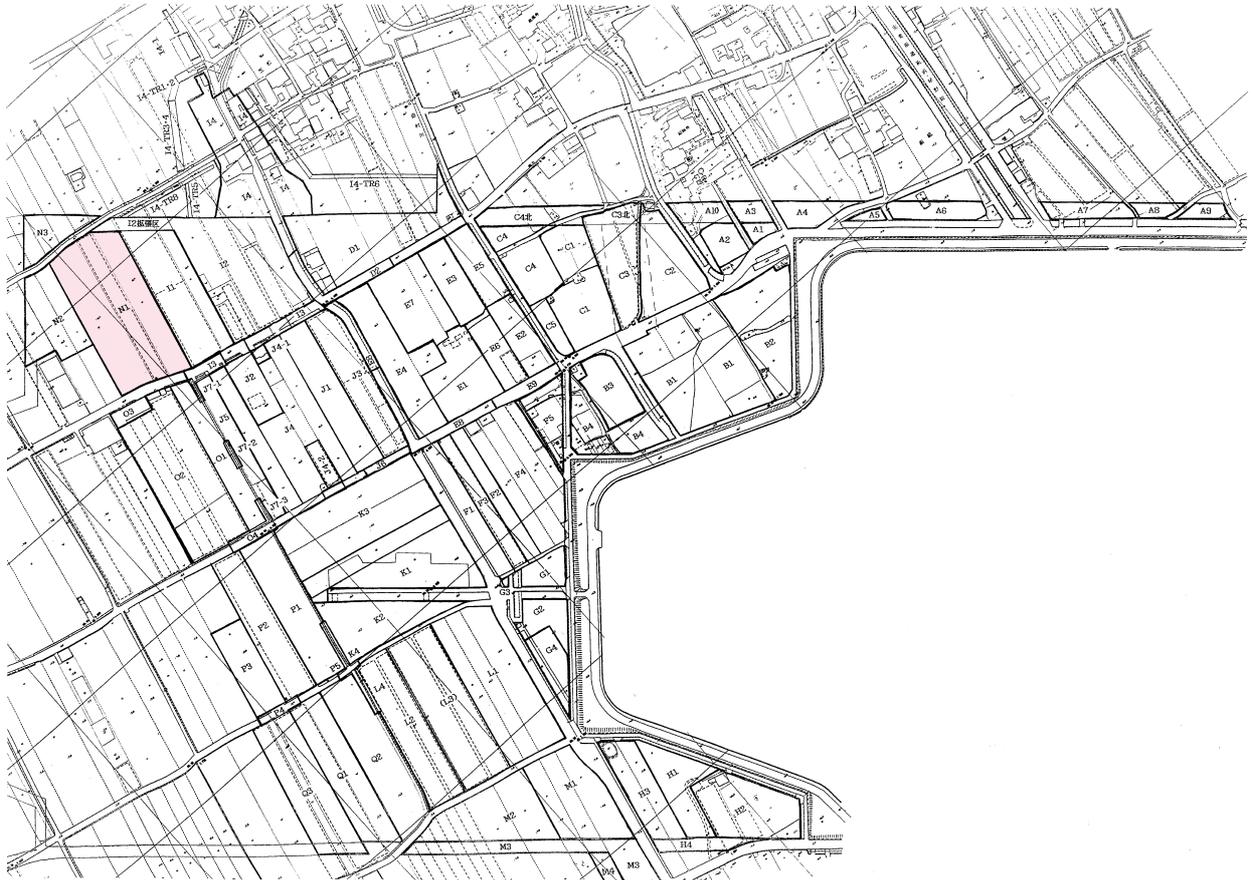
M区 - 25 図 M4区包含層出土石器

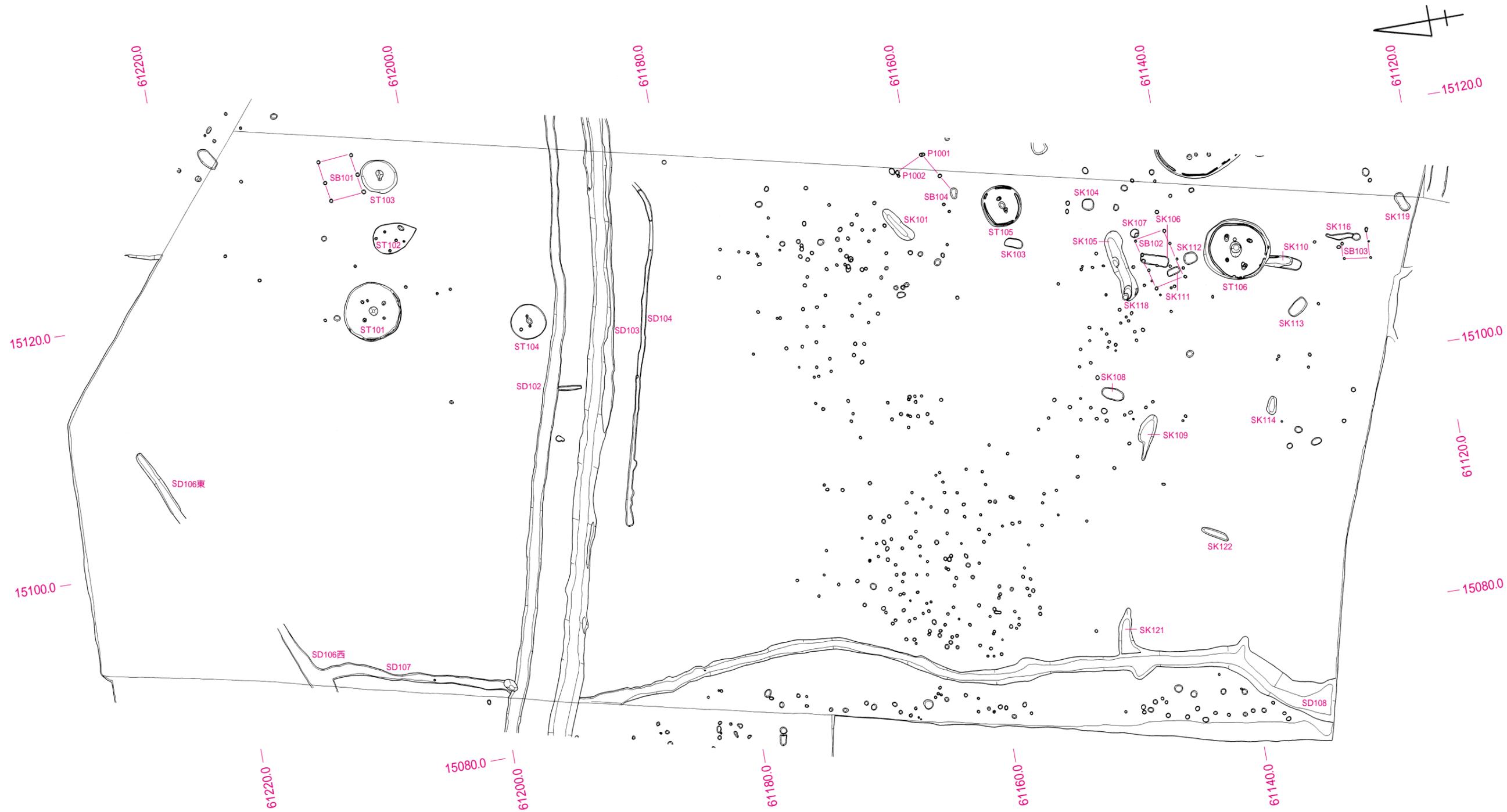
N区の調査



N-1 図 I・N区遺構全体配置図(S=1/500)

N1 区の調査





N1 - 1 図 N1区遺構全体配置図(S=1/250)

1. N1区の概要

概要

N1区(N1-1図)は今次調査の中で、調査対象区域の西側に位置し、東側をI1区、西側をN2区、南側に道路部分を隔ててO区と境を接する調査区である。基盤層は粘土質シルト層堆積であり、下層に礫層を確認している。調査区西側には縄文時代の包含層と考えられる黒色粘土層が広がりを見せ、落ち込みに沿う形で溝状遺構を検出している。弥生時代中期末～後期頃と考えられる集落の西側に位置していると考えられ、調査面積に対して遺構密度はやや低いが、調査区中央部では多数のピット群を検出している。また調査区を東西方向に並行しながら横断している2条の溝は、I区からN区を経て更に調査区対象区域の西側へ続いている大溝であり、計画性に基づいて構築された可能性が考えられる。

調査担当者 吉成承三、三橋麻里

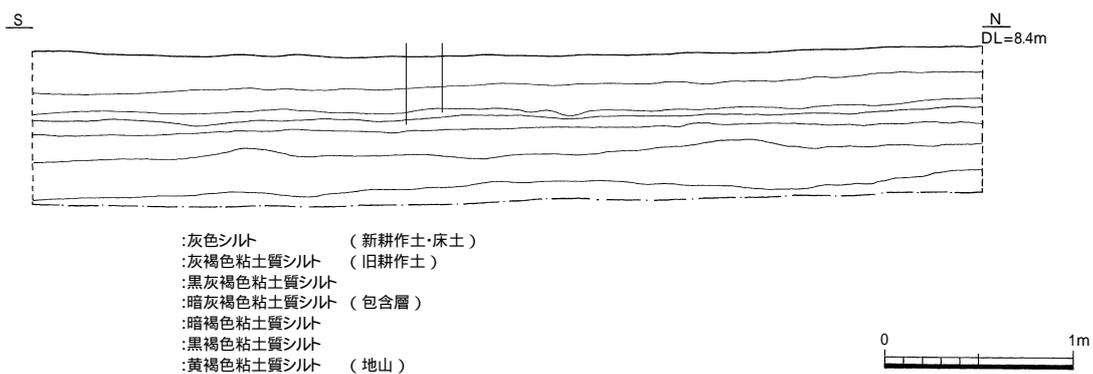
執筆担当者 宮地啓介

調査期間 平成9年12月4日～平成10年3月14日

調査面積 4,924m²

時代 弥生時代(前期末?)中期末～後期

検出遺構 弥生時代 竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡4棟、土坑20基、溝7条(大溝2条)、ピット約440個



N1区南西端から23～28m付近の調査区西壁セクション図

N1 - 2 図 N1区基本層序

2. N1区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

本調査区に於て竪穴住居跡は6軒を検出している。平面形態はST102を除いてほぼ円形状を呈し、規模は面積10㎡以下の小型のものや20㎡前後の中型の竪穴住居跡が殆どである。2軒は焼失住居と考えられ、ST106からは柱穴に垂直の状態に炭化した柱材を検出している。また2軒の「松菊里型」住居跡と考えられる竪穴住居跡を検出しているが、遺物から時期を判断することは困難であった。

N1-1表 N1区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(㎡)	平面形	主軸方向	時期	備考
N1ST101	4.75 × 4.60	0.38	17.2	円形	-	弥生 ~	
N1ST102	3.64 × 2.30	0.06	6.6	不整楕円形?	N-7°W	弥生 ~ ?	
N1ST103	3.08 × 2.60	0.28	6.3	円形	-	弥生 ~	
N1ST104	2.88 × 2.85	0.05	6.4	円形	-	弥生	松菊里型?
N1ST105	3.37 × 3.17	0.28	8.4	円形	-	弥生 ?	焼失住居跡 / 松菊里型?
N1ST106	5.48 × 4.83	0.44	20.8	円形	-	弥生 ~	焼失住居跡

N1ST101(N1-3図)

時期 ; 弥生 ~ **形状** ; 円形 **主軸方向** ;

規模 ; 4.75 × 4.60m **深さ** 0.38m **面積** 17.2㎡

埋土 ; 黒褐色粘土質シルト

ピット数 ; 5 **主柱穴数** ; 4 **主柱穴** ; P1~4

床面 ; 1面 **貼床** ; **焼失** ;

中央ピット ; 円形 **規模** 70 × 65cm **深さ** 22cm **埋土** 黒灰褐色粘土質シルト?

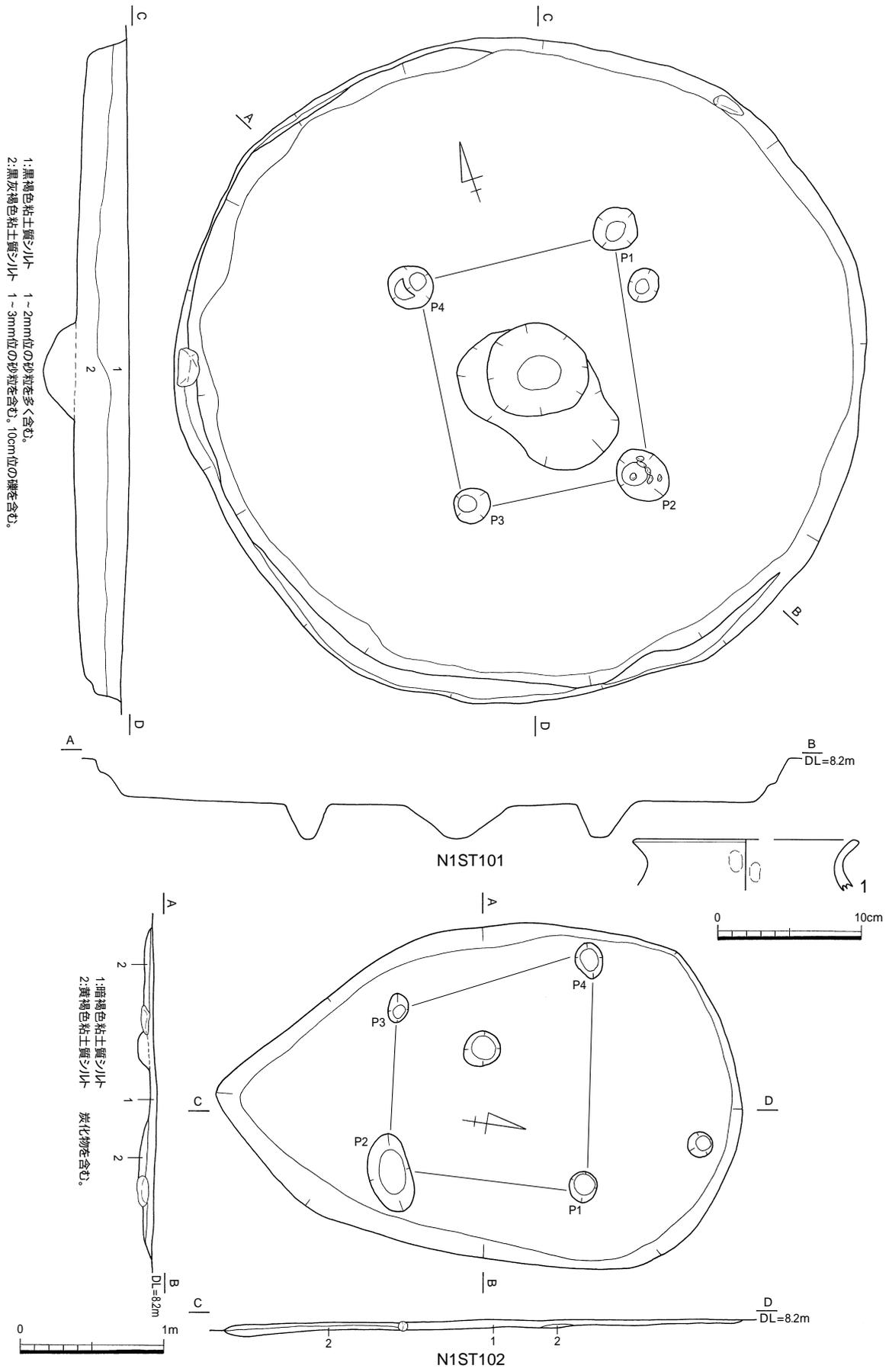
壁溝 ; **幅** **深さ**

出土遺物 ; 弥生土器(口縁部2点、細片約50点)

所見 ; 調査区F -ナ-19・20・24・25グリッドに位置し、平面形態は円形状を呈したやや小型の竪穴住居跡である。

主柱穴と考えられるのはP1~4で、径約28~40cm、それぞれ約15・26・28・26cmの深さを測る。埋土は黒灰褐色粘土質シルトと考えられ、遺物は出土していない。中央ピットはやや楕円形に近い円形状を呈し、周辺に不整形な浅い落ち込みを有している。埋土は黒灰褐色粘土質シルトと考えられ、遺物は弥生土器の細片が2点程出土している。壁溝は確認していない。埋土中から約10~30cm位の礫を検出しているが、遺構検出面では確認しておらず、堆積によるものか意図的に投げ込まれたものであるかは不明である。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。時期を判断する遺物が僅少であったが、弥生 ~ 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 期頃と考えられる甕(1)の口縁部である。



N1 - 3 ☒ N1ST101・102

N1ST102(N1-3図)

時期；弥生 ~ ? **形状**；不整楕円形？ **主軸方向**；N-7°-W

規模；3.64×2.30m **深さ** 0.06m **面積** 6.6m²

埋土；暗褐色粘土質シルト

ピット数；7 **主柱穴数**；4 **主柱穴**；P1~4

床面；1面 **貼床**； **焼失**；

中央ピット； **規模** **深さ** **埋土**

壁溝； **幅** **深さ**

出土遺物；弥生土器(口縁部2点、細片23点)

所見；調査区F -ニ-21・22グリッドに位置し、平面形態が不整楕円形状？を呈する小型の竪穴住居跡の可能性が考えられる遺構である。全体的に浅い遺構であるが、上面が削平を受けた可能性が考えられる。

主柱穴と考えられるのはP1~4で、径約21~54cm、それぞれ約5・4・5・8cmの深さを測り、全体的に10cm未満の浅い柱穴である。埋土は暗褐色粘土質シルトと考えられ、遺物は出土していない。中央ピット・壁溝等は確認していない。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。時期を判断する遺物が僅少であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

N1ST103(N1-4図)

時期；弥生 ~ **形状**；円形 **主軸方向**；

規模；3.08×2.60m **深さ** 0.28m **面積** 6.3m²

埋土；褐色シルト

ピット数； **主柱穴数**； **主柱穴**；

床面；1面 **貼床**； **焼失**；

中央ピット；不整楕円形 **規模** 103×44cm **深さ** 11cm **埋土** 褐色シルト？

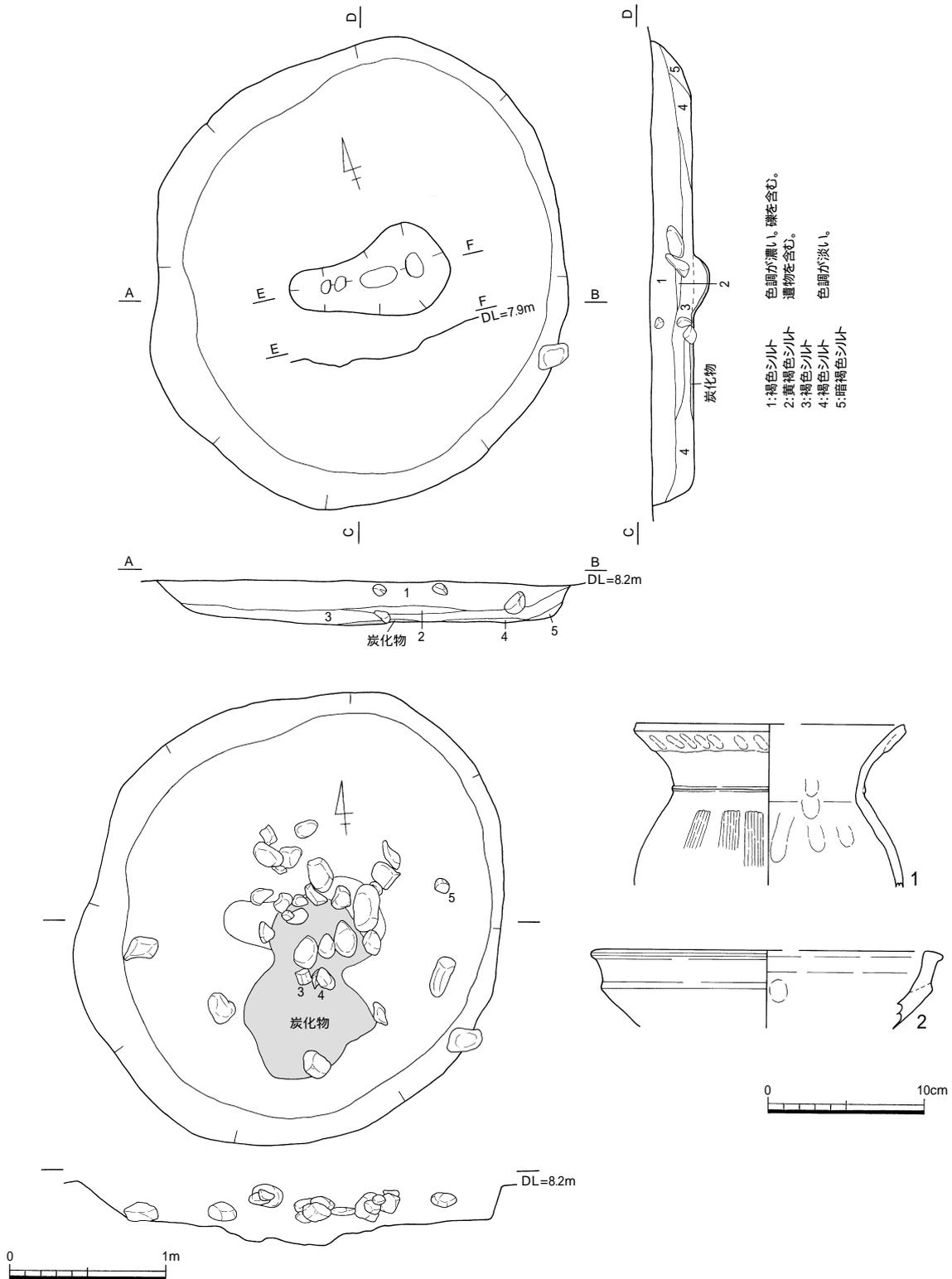
壁溝； **幅** **深さ**

出土遺物；弥生土器(口縁部8点、底部3点、細片約140点)、石器(打製石斧1点)？

所見；調査区F -ニ-22・23グリッドに位置し、平面形態がやや楕円形に近い円形状を呈する小型の住居跡の可能性が考えられる遺構であるが、竪穴住居跡に伴うと考えられる付帯施設に乏しく、柱穴等は検出できなかった。遺構の北側に掘立柱建物跡(SB101)を検出しているが、僅かに重複しており、同時期に存在していた可能性は低く、また前後関係も不明である。

中央ピットは不整形な楕円形状を呈し、ピット状の段部を有している。埋土は褐色シルトと考えられ、遺物は出土していない。中央ピットから南側の床面上にかけて炭化物の広がりを確認している。壁溝は確認していない。埋土中から約10~30cm位の集石を検出しているが、遺構検出面では確認しておらず、堆積によるものか意図的に投げ込まれたものであるかは不明である。3~5はチャートと考えられ、接合を確認している。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から弥生 期頃の遺構と考えられるが、口縁端部がヨコナデにより面状を成している遺物が多く、弥生 期頃の下る可能性を含んでいる。図示したものは弥生 ~ 期頃の「南四国型」と考えられる甕(1)の口縁部と、高杯(2)の杯部である。



N1 - 4 図 N1ST103

N1ST104(N1-5図)

時期；弥生 形状；円形 主軸方向；

規模；2.88×2.85m 深さ 0.05m 面積 6.4m²

埋土；黒褐色粘土質シルト

ピット数；3 主柱穴数；2 主柱穴；P2・3

床面；1面 貼床； 焼失；

中央ピット；楕円形 規模 57×44cm 深さ 18cm 埋土 黒褐色粘土質シルト？

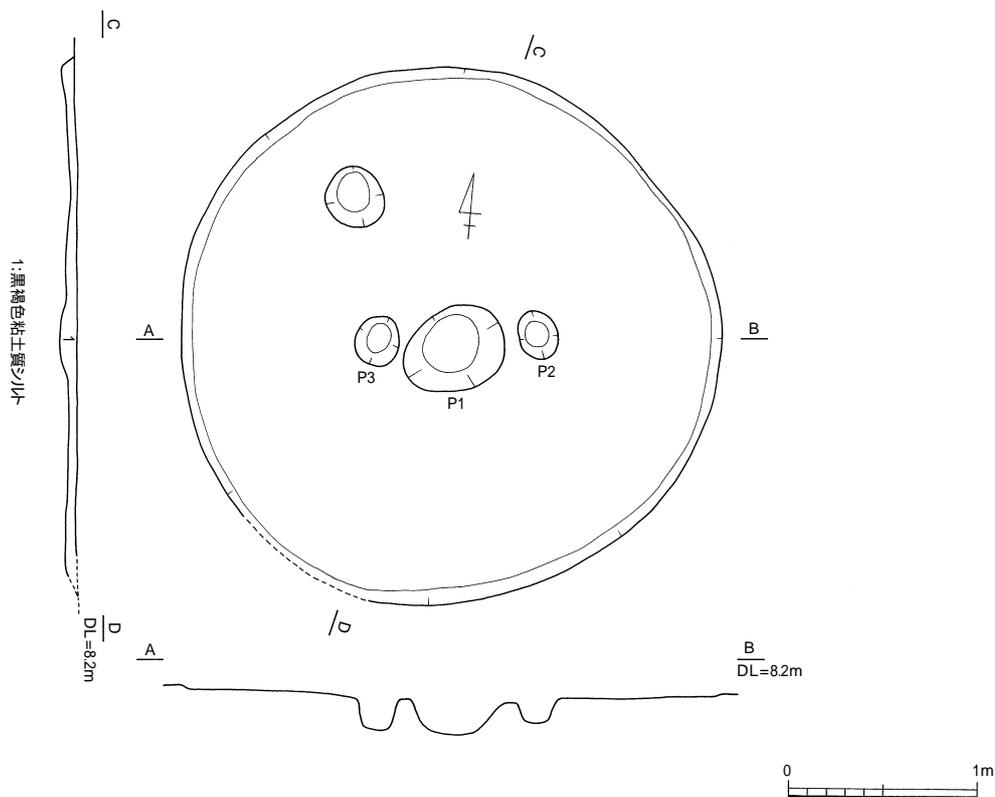
壁溝； 幅 深さ

出土遺物；弥生土器(細片 1点)

所見；調査区F -ア-9・14グリッドに位置し、平面形態は円形状を呈した小型の竪穴住居跡である。全体的に浅い遺構であり、上面が削平を受けた可能性が考えられ、南側の一部は壁面を確認できなかった。

主柱穴と考えられるのはP2・3で、径約25cm、それぞれ約13・19cmの深さを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトと考えられ、遺物は出土していない。中央ピット(P1)は楕円形状を呈し、両側にピットを検出している。埋土は黒褐色粘土質シルトと考えられ、遺物は弥生土器の細片が1点のみ出土している。壁溝は確認していない。ST104の特徴として、中央ピット周辺のピットの配置から「松菊里型」住居跡の可能性が考えられる。

遺物は殆ど出土しておらず、時期を判断することは困難である。



N1 - 5 図 N1ST104

N1ST105(N1-6・7図)

時期；弥生I? 形状；円形 主軸方向；

規模；3.37×3.17m 深さ0.28m 面積8.4m²

埋土；褐色粘土質シルト

ピット数；2 主柱穴数；2 主柱穴；P1・2

床面；1面 貼床； 焼失；有り

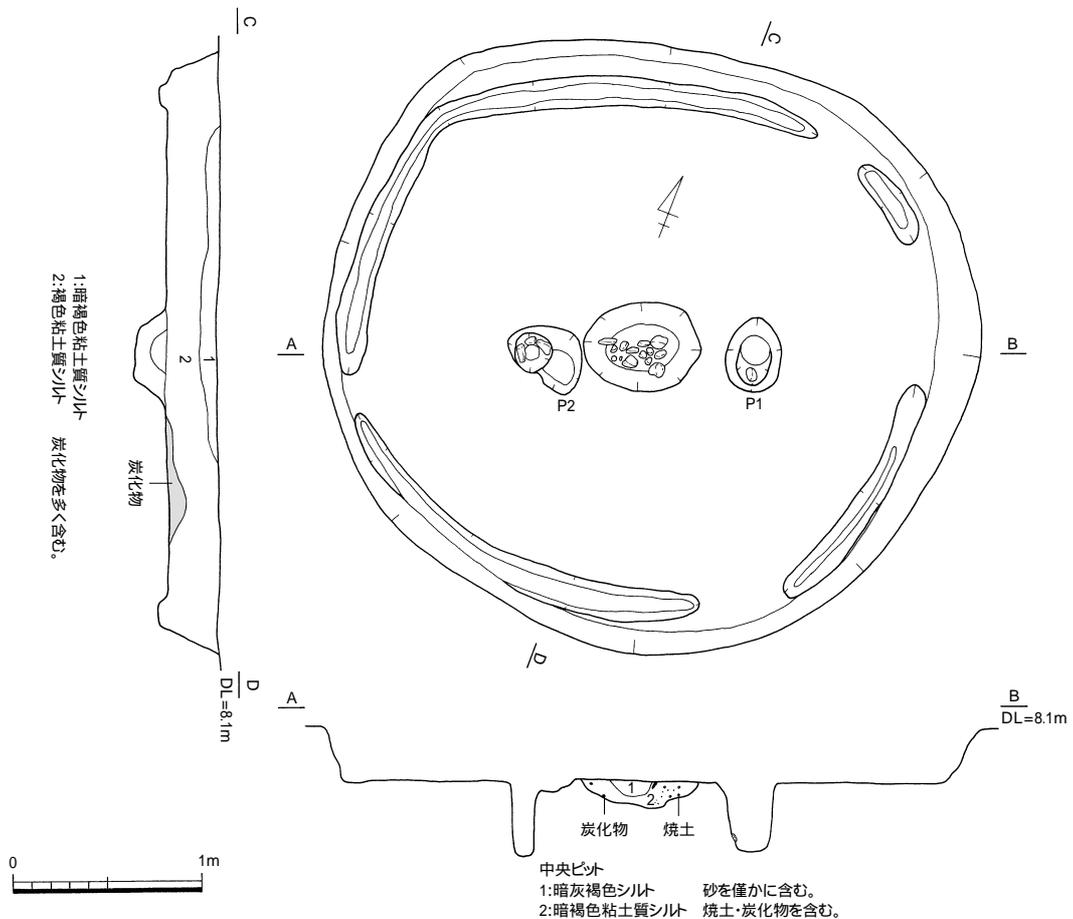
中央ピット；楕円形 規模57×47cm 深さ16cm 埋土 暗褐色粘土質シルト

壁溝；1条 幅15cm 深さ4cm

出土遺物；弥生土器(底部5点、細片約90点)

所見；調査区F -サ-9・10・15グリッドに位置し、平面形態はやや扁平な円形状を呈した小型の
 竪穴住居跡である。

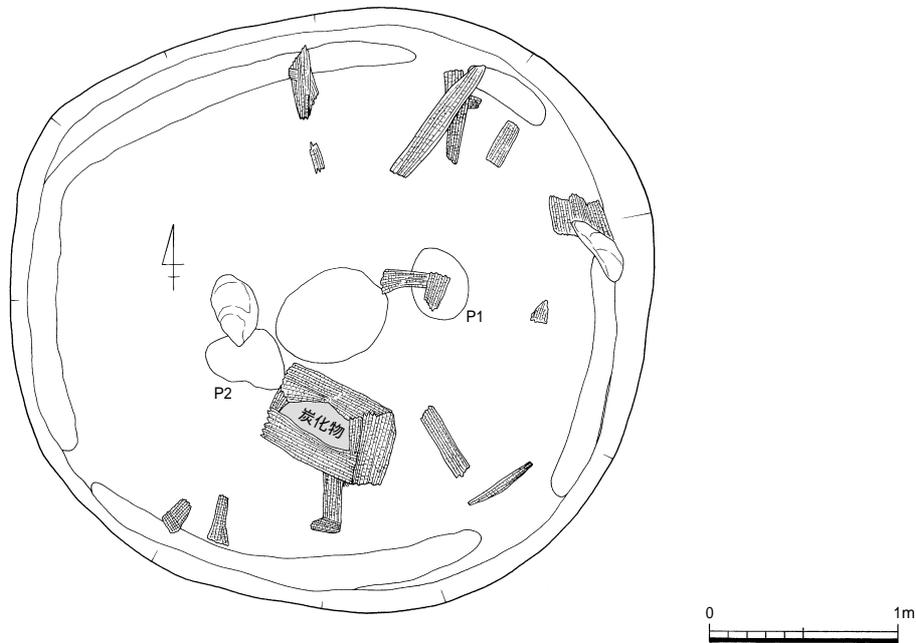
主柱穴と考えられるのはP1・2で、径約21~40cm、それぞれ約37・40cmの深さを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトと考えられ、遺物は出土していない。床面上から焼土・炭化材を確認し、焼失住居跡の可能性が高いと考えられる。中央ピットは楕円形状を呈し、両側にピットを検出している。埋土は黒褐色粘土質シルトと考えられ、焼土・炭化物を確認している。遺物は出土していない。壁



N1 - 6 図 N1ST105(1)

溝は壁際から部分的に1条を検出している。ST105の特徴として、中央ピット周辺のピットの配置から「松菊里型」住居跡の可能性が考えられる。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。時期を判断する遺物が僅少であったが、弥生I期頃の遺構の可能性が考えられる。



N1 - 7 図 N1ST105(2)

N1ST106(N1-8・9図)

時期；弥生 ~ 形状；円形 主軸方向；

規模；5.48×4.83m 深さ 0.44m 面積 20.8㎡

埋土；暗褐色粘土質シルト

ピット数；5 主柱穴数；4 主柱穴；P1~4

床面；1面 貼床； 焼失；有り

中央ピット；楕円形 規模 128×95cm 深さ 23cm 埋土 暗褐色粘土質シルト

壁溝；1条 幅 15~20cm 深さ 3cm

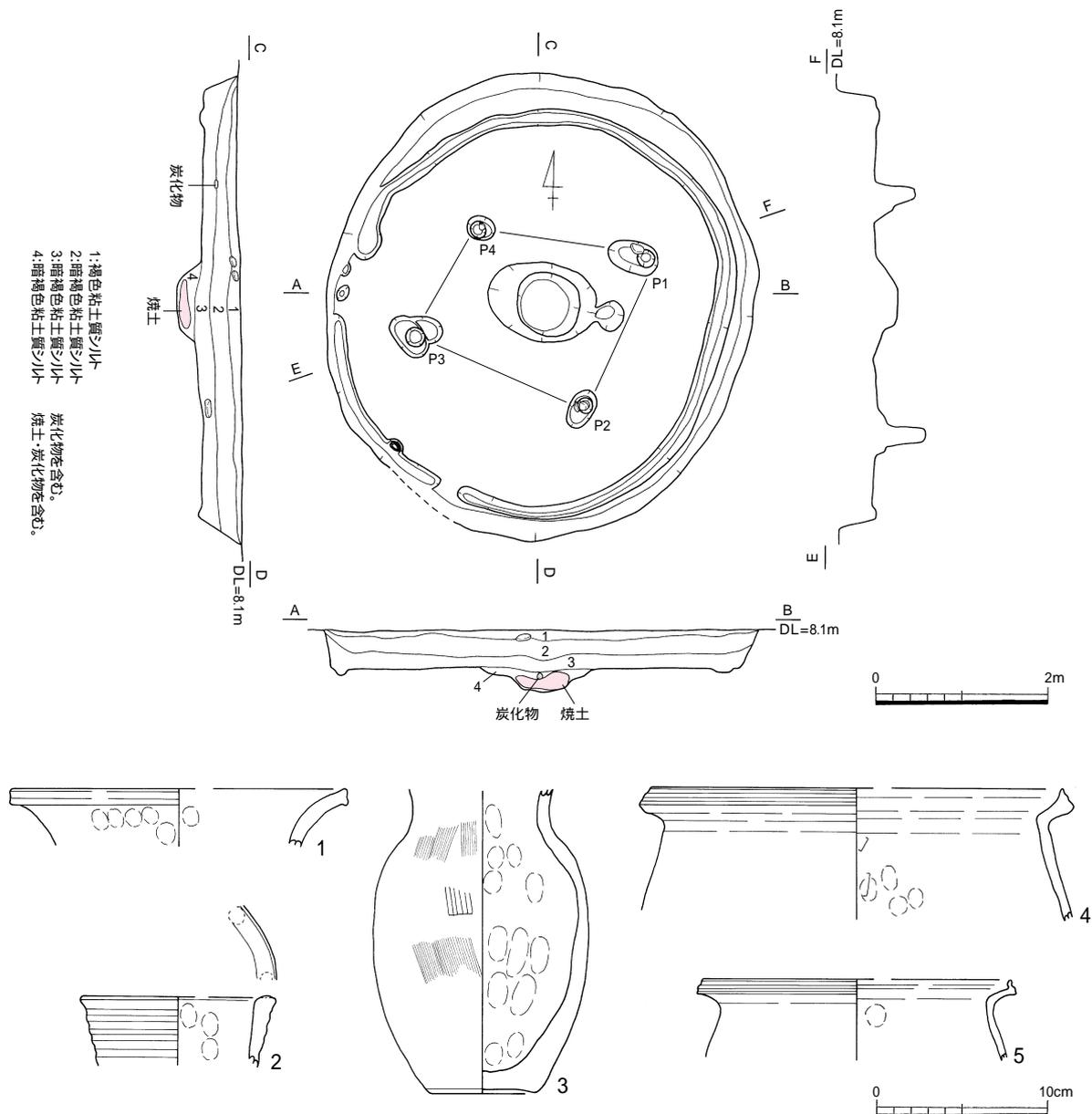
出土遺物；弥生土器(口縁部16点、底部3点、細片約300点)、石器(石包丁2点、砥石3点)？

所見；調査区F -タ-3・4・7・8・9グリッドに位置し、SK110に切られ、平面形態はやや扁平な円形状を呈した中型の竪穴住居跡である。

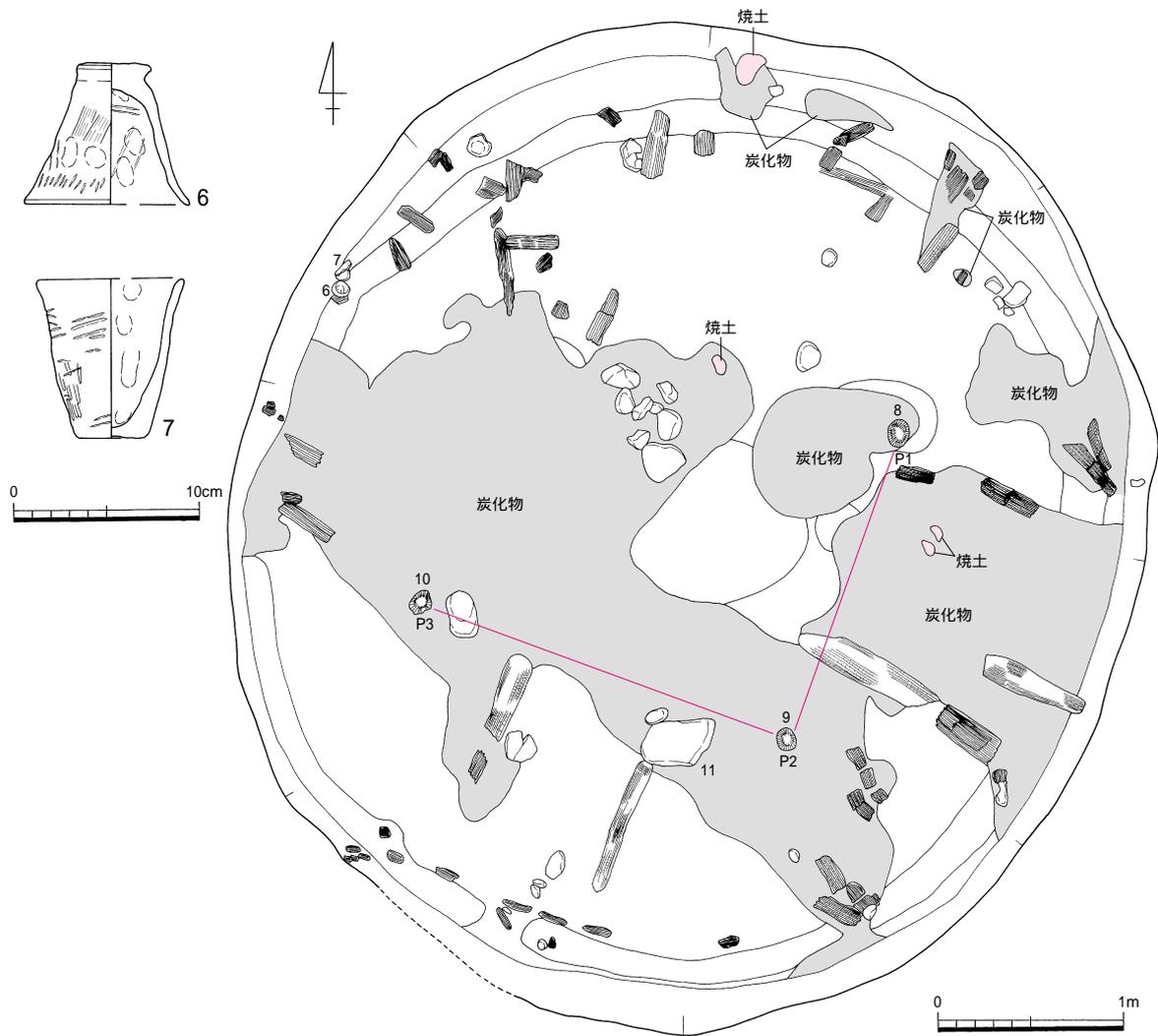
主柱穴と考えられるのはP1~4で、径約18~23cm、それぞれ約48・23・58・60cmの深さを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトと考えられ、遺物は出土していない。床面上から焼土・炭化材を確認し、焼失住居跡の可能性が高いと考えられる。8~10は炭化した柱材と考えられ、径約12~14cmを測り、柱穴に垂直の状態を検出している。それぞれP1~3からの検出であり、P4からは確認できなかったが、存在していた可能性が高いと考えられる。また壁際付近からも立った状態の炭化材を確認して

いる。中央ピットは楕円形状を呈し、段部を有して中央部が落ち込んでいる。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、炭化物と焼土塊を確認している。壁溝は1条が壁際乃至約30cm程離れてほぼ全周している。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、ハケ状原体による「ノ」字状列点文を施した土器片等が出土している。遺物から弥生 ~ 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 ~ 期頃と考えられる壺(1~3)、甕(4・5)の口縁部・底部であり、6は蓋の可能性が考えられる。7は杯状土器と考えられ、南西に位置するSK113から口縁部の一部が出土している。他に外湾刃半月形を呈した刃部打製(未成品?)の石包丁と砥石が出土している。また床面から数cm程浮いた状態で約35cm位の台石状の扁平な礫(11)を検出しており、石器として用いた可能性が考えられる。



N1 - 8 図 N1ST106(1)



N1 - 9 図 N1ST106(2)

(2) 掘立柱建物跡

本調査区に於て掘立柱建物跡は4棟を検出している。棟方向はほぼ東西方向であり、1棟には溝状土坑が伴うと考えられる。調査区中央部には多数のピット群を検出しているが、掘立柱建物跡等は確認できなかった。弥生時代中期末～後期頃と考えられる集落の西側に位置していると考えられ、同様に集落の端部に掘立柱建物跡群を配していると考えられるO区に於てもその傾向が窺えるが、棟方向及び検出棟数がやや異なっている。

N1-2表 N1区掘立柱建物跡一覧

遺構名	梁間×桁行 [間]	梁間×桁行 [m]	柱間寸法 梁間×桁行[m]	主軸方向	付属遺構	時 期	備 考
N1SB101	1×2	2.7×3.3	2.7×1.5～1.8	N-81°E	-	弥生～?	
N1SB102	1×3	2.5×4.2	2.5×1.1～1.6	N-75°E	SK105	弥生～?	
N1SB103	1×2	2.1×2.3	2.1×1.0～1.3	N-89°W	-	弥生～?	
N1SB104	1×2	2.3×4.2	2.3×2.0～2.2	N-64°-E	-	弥生～	

N1SB101(N1-10図)

時期；弥生 ~ ? 棟方向；N-81°E

規模；梁間1×桁行2 梁間2.7m×桁行3.3m 面積8.9m²

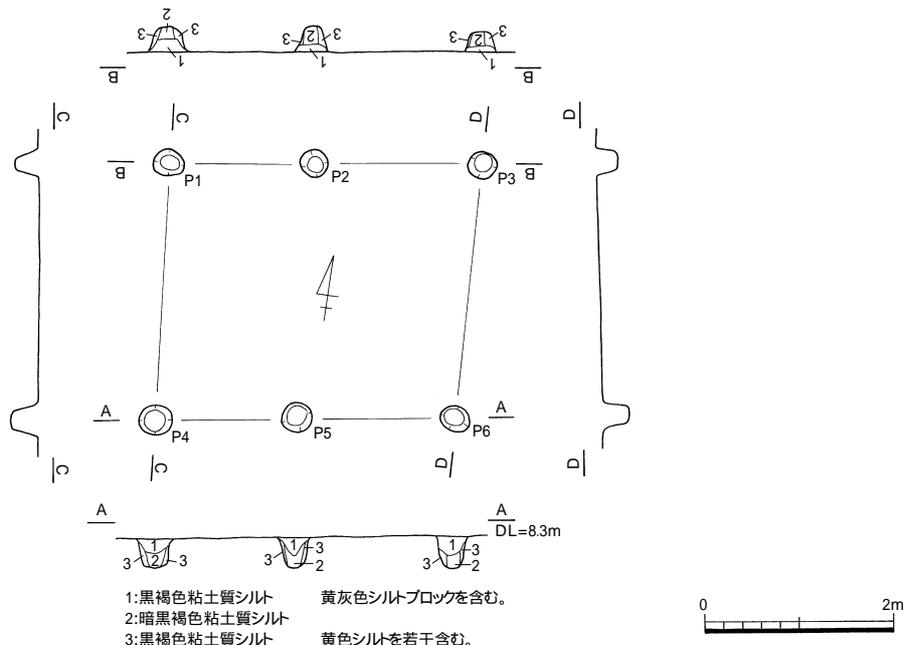
柱間寸法；梁間2.7m 桁行1.5~1.8m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；掘立柱建物跡 付属施設；

出土遺物；弥生土器 P6(細片1点)

所見；調査区F -ニ-17・18・22グリッドに位置する掘立柱建物跡と考えられる遺構である。棟方向は東西方向である。遺構の南側に竪穴住居跡(ST103)を検出しているが、僅かに重複しており、同時期に存在していた可能性は低く、また前後関係も不明である。柱穴の規模は径約28~34cm、深さ約23~36cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトであり、柱痕を確認している。遺物はP6から弥生土器の細片が出土している。遺物から時期を判断することは困難であったが、弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。



N1 - 10 図 N1SB101

N1SB102(N1-11図)

時期；弥生 ~ ? 棟方向；N-75°E

規模；梁間1×桁行3 梁間2.5m×桁行4.2m 面積10.5m²

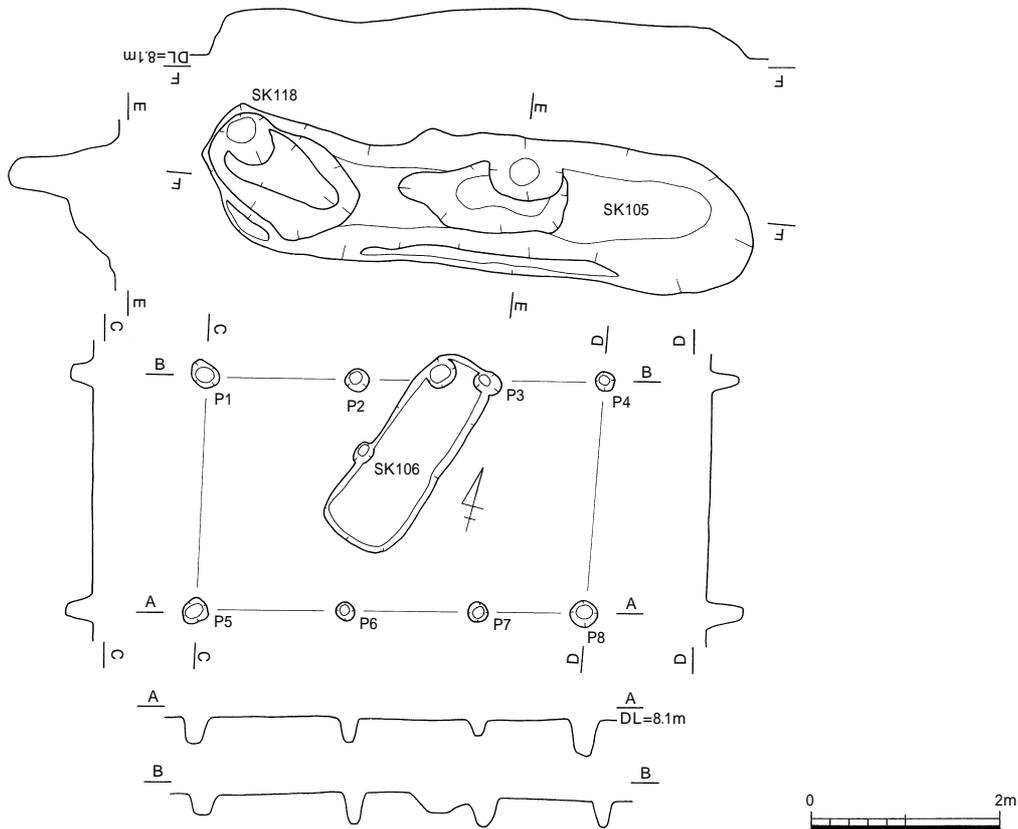
柱間寸法；梁間2.5m 桁行1.1~1.6m

柱穴数；8 柱穴形；円形

性格；掘立柱建物跡 付属施設；SK105

出土遺物；なし

所見；調査区F -サ-23・24、タ-3グリッドに位置し、SK106に切られ、溝状土坑(SK105)を伴う可能性のある掘立柱建物跡と考えられる遺構である。棟方向は東西方向である。柱穴の規模は径約18～32cm、深さ約15～38cmを測る。埋土はP1を除いて暗褐色粘土質シルトであり、P1は灰褐色シルトである。遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構(SK105)などから弥生～期頃の遺構の可能性が考えられる。



N1 - 11 図 N1SB102 SK105(1)

N1SB103(N1-12図)

時期；弥生～？ 棟方向；N-89°W

規模；梁間1×桁行2 梁間2.1m×桁行2.3m 面積4.8m²

柱間寸法；梁間2.1m 桁行1.0～1.3m

柱穴数；(5) 柱穴形；円形

性格；掘立柱建物跡 付属施設；

出土遺物；なし

所見；調査区F -タ-17・18グリッドに位置する掘立柱建物跡と考えられる遺構である。棟方向は東西方向である。柱穴の規模は径約16～38cm、深さ約12～20cmを測り、北側東端の柱穴は未検出の可能性が考えられる。埋土は暗褐色粘土質シルトである。遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生～期頃の遺構の可能性が考えられる。

掘立柱建物跡にほぼ直角の位置関係で重複する溝状土坑(SK116)を検出している。遺構との関連性は不明である。

N1SB104(N1-12図)

時期；弥生 ~ 棟方向；N-64°E

規模；梁間1×桁行2 梁間2.3m×桁行4.2m 面積9.7m²

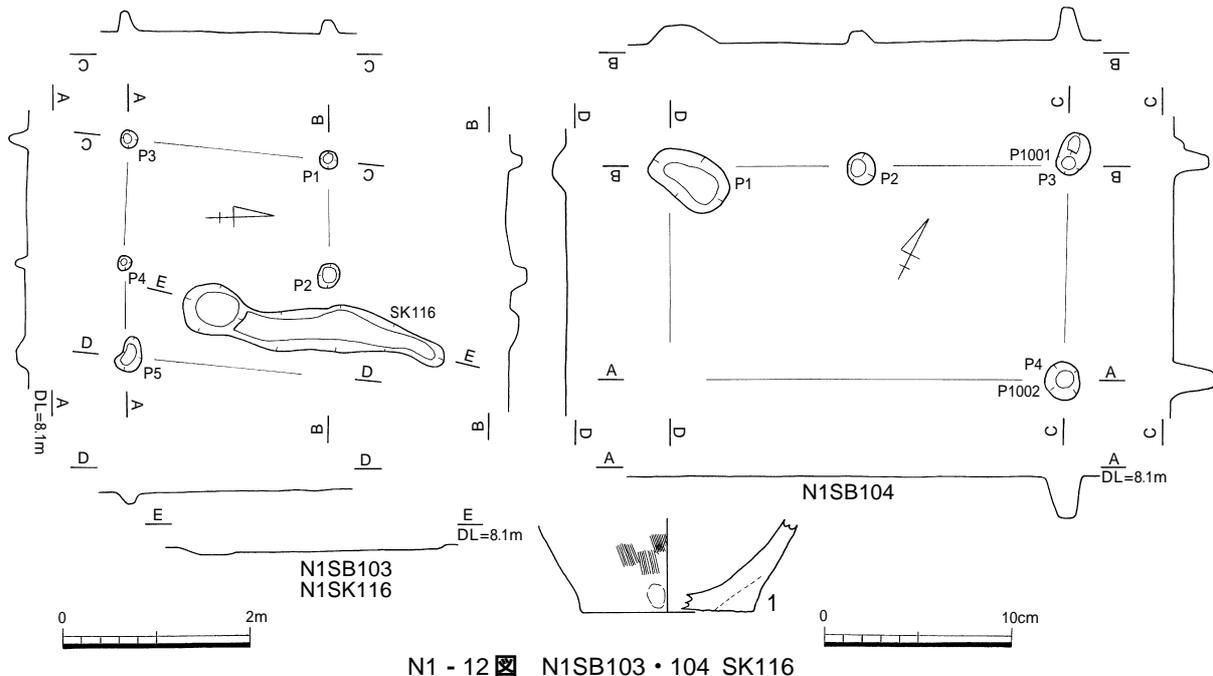
柱間寸法；梁間2.3m 桁行2.0~2.2m

柱穴数；(4) 柱穴形；円形

性格；掘立柱建物跡？ 付属施設；

出土遺物；弥生土器 P1001(細片1点)、P1002(口縁部2点、細片4点)

所見；調査区F -サ-5、シ-1グリッドに位置する掘立柱建物跡の可能性が考えられる遺構である。棟方向は東西方向である。柱穴は部分的に未検出の可能性が考えられるが、遺構の平面プランは脆弱であり、周辺ピット群の偶然的並びの可能性を含んでいる。柱穴の規模は径約33~88cm、深さ約12~44cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトである。遺物はP1001・1002から口縁部を含む弥生土器片が出土している。時期を判断する遺物が僅少であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構と考えられる。



(3) 土坑

本調査区に於て土坑は20基を検出している。何れも調査区を東西方向に並行しながら横断している2条の溝より南側から検出している。平面形態は長形状の土坑が多く、円形状の土坑は少数であり、埋土は黒褐色又は暗褐色粘土質シルトを基調としている。掘立柱建物跡に伴うと考えられる溝状土坑は、一端に深いピット状の落ち込みを有しており、同様の形態はI1・O2区でも検出している。(本調査区及びO2区に関しては切り合い関係等により別遺構として調査している。)また調査区中央部から多数のピット群を検出しているが、土坑に伴うと考えられるピットは確認できなかった。集落端部に於けるそれぞれの土坑の性格については不明である。尚、埋土の状態などから弥生時代以降の遺構の可能性を含んでいる土坑についても本項目に於て報告している。

N1-3表 N1区土坑一覧

遺構番号	平面形	断面形	規 模			主軸方向	埋 土	切合関係	時 期	備 考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)					
N1SK101	溝状	U字状	3.34	0.87	33.0	N-55°E	黒褐色粘土質シルト・他 / 2層		弥生 -2 ~ -1・2	
N1SK102	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I1SK113
N1SK103	長楕円形	皿状	1.49	0.47	13.0	N-19°E	黄灰色シルト / 1層		弥生? ~	
N1SK104	円形	逆台形	0.95	0.88	23.0	N-14°E	黒褐色粘土質シルト・他 / 2層		弥生 ~	
N1SK105	溝状	逆台形	5.64	1.36	44.0	N-88°E	暗褐色粘土質シルト・他 / 3層	SK118に切ら れる	弥生 -2 ~ -1・2	
N1SK106	長方形	箱形	2.29	0.78	17.0	N-20°E	灰褐色シルト / 1層	SB102を切る	弥生? ~	
N1SK107	円形	箱形	0.74	0.70	16.0	N-34°W	暗褐色シルト・他 / 2層		弥生 ~ ?	
N1SK108	楕円形	皿状	1.85	0.90	6.0	N-27°E	黒褐色粘土質シルト		弥生 ~ ?	
N1SK109	楕円形・ 溝状	逆台形	2.39 ~ 3.72	0.30 ~ 1.18	24.0 ~ 48.0	N-61°W	黒褐色粘土質シルト・他 / 2層	溝状土坑と切 り合い?	弥生 ~ ?	
N1SK110	溝状	逆台形	4.07	0.85	12.0 ~ 30.0	N-18°E	灰褐色粘土質シルト・他 / 2層	ST106を切る	弥生? ~	
N1SK111	楕円形	逆台形	1.12	0.53	15.0	N-18°W	暗褐色粘土質シルト・他 / 2層		弥生 ~ ?	
N1SK112	隅丸方形	箱形	1.12	0.93	13.0	N-10°W	黄灰褐色シルト / 1層		弥生? ~	
N1SK113	長方形	箱形	1.67	0.85	14.0	N-33°W	暗褐色シルト / 1層		弥生	
N1SK114	楕円形	U字状	1.46	0.62	25.0	N-75°W	暗灰褐色粘土質シルト・他 / 2層		弥生 ~ ?	
N1SK115	楕円形	逆台形	1.43	1.03	11.0	N-90°E	暗褐色粘土質シルト		弥生	集石
N1SK116	溝状	皿状	2.80	0.45	6.0	N-15°E	暗褐色粘土質シルト		弥生 ~ ?	
N1SK117	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I1区
N1SK118	楕円形	逆台形	1.68	0.97	45.0 ~ 116.0	N-68°W	暗褐色粘土質シルト / 1 層	SK105を切 る?	弥生 ~	
N1SK119	隅丸長方形	U字状	1.57	0.76	36.0	N-66°E	暗褐色粘土質シルト・他 / 2層		弥生 ~	
N1SK120	楕円形	逆台形	2.00	0.84	21.0	N-3°E	暗黄褐色シルト・他 / 2 層		弥生 ~	集石
N1SK121	溝状	皿状	[5.83]	1.03	12.0	N-79°W	黒褐色シルト / 2層	SD108を切る	弥生?	
N1SK122	長楕円形	U字状	2.33	0.56	25.0	N-33°E	黒褐色粘土質シルト・他 / 2層		弥生?	

N1SK101(N1-13・14図)

時期 ; 弥生 -2 ~ -1・2 **形状** ; 溝状 **主軸方向** ; N-55°E

規模 ; 3.34 × 0.87m **深さ** 0.33m **断面形態** ; U字状

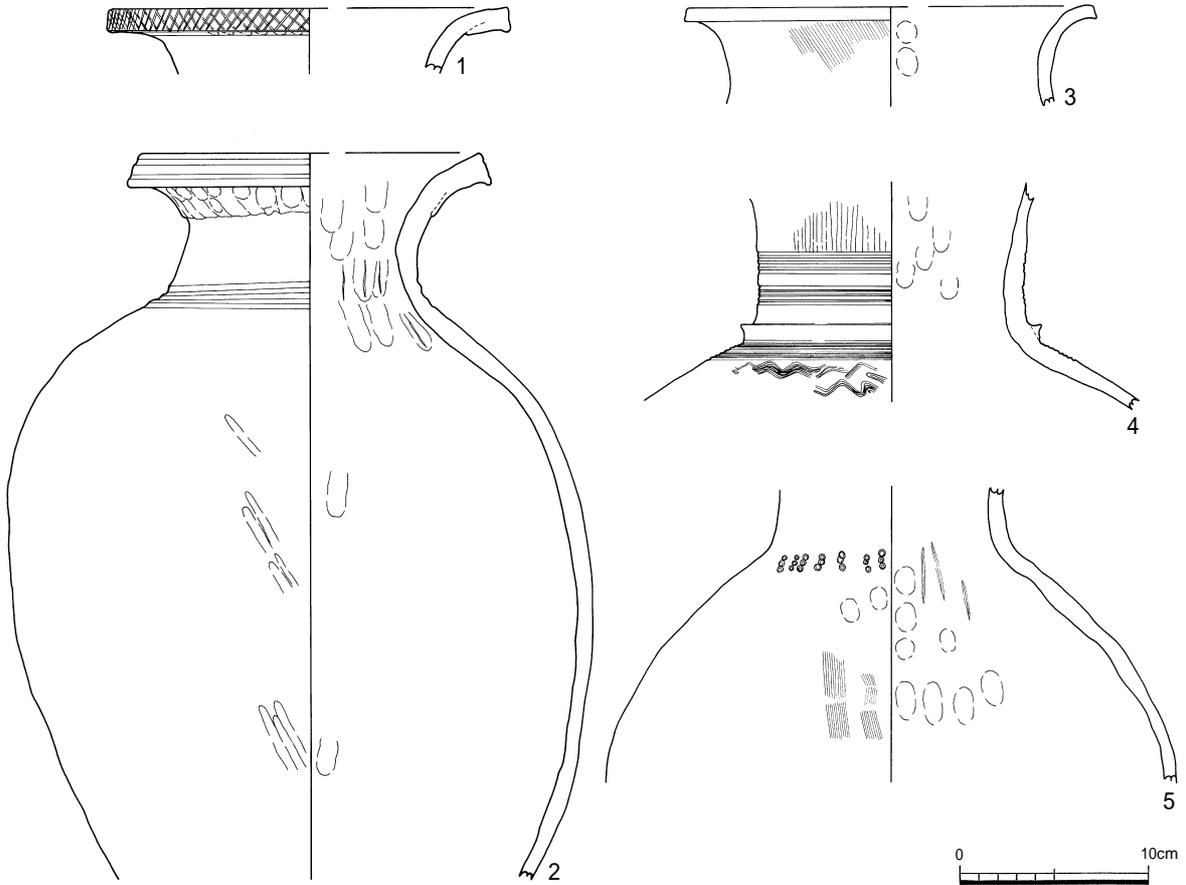
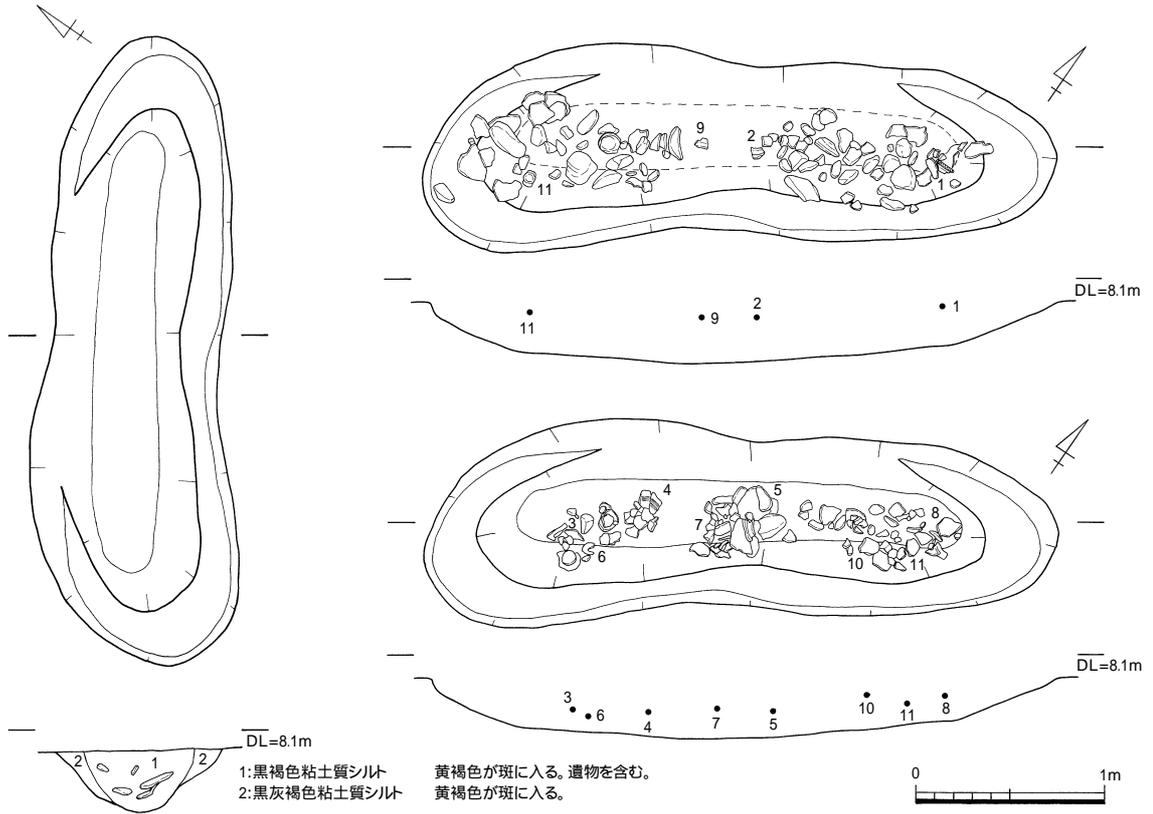
埋土 ; 黒褐色粘土質シルト

付属遺構 ; なし **機能** ; 不明

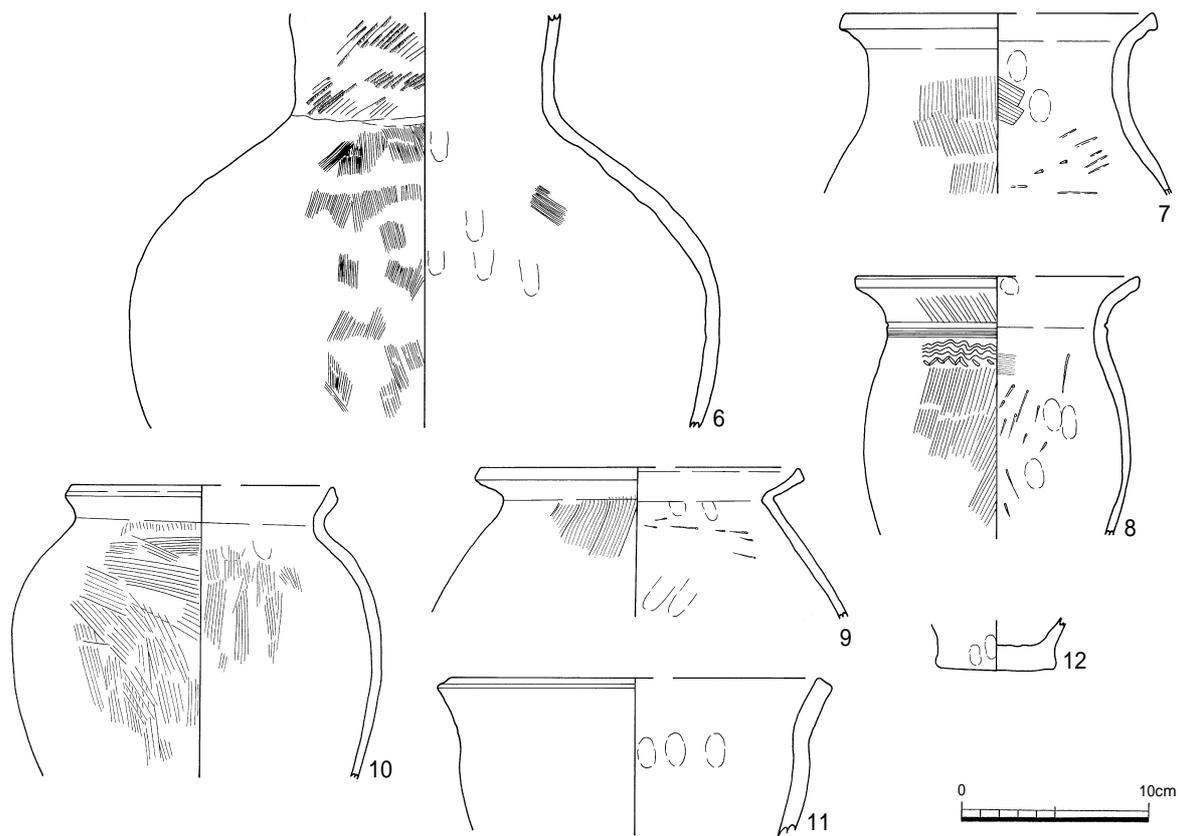
出土遺物 ; 弥生土器(口縁部23点、底部14点、細片約810点)

所見 ; 調査区F -カ-24・25グリッドに位置する溝状土坑である。平面形態は緩やかな傾斜を持つ段部を有し、中央部はU字状に掘り込まれている。

遺物の大半は埋土中からの出土であり、床面上にかけて出土状況を確認できた。遺物から弥生 -2 ~ -1・2期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 -2 ~ -1・2期頃と考えられる壺(1~7)、甕(8~10)、鉢(11)の口縁部などである。またSK119から出土している甕の胴部の一部が出土している。埋土上層から多くの土器に混じって約15~20cm位の礫を複数検出しており、自然堆積によるものか意図的に投げ込まれたものであるかは不明であるが、礫自体が何かに用いられた可能性は低いと考えられる。



N1 - 13 図 N1SK101(1)



N1 - 14 図 N1SK101(2)

N1SK104(N1-15図)

時期；弥生 ~ 形状；円形 主軸方向；N-14°E

規模；0.95×0.88m 深さ 0.23m 断面形態；逆台形

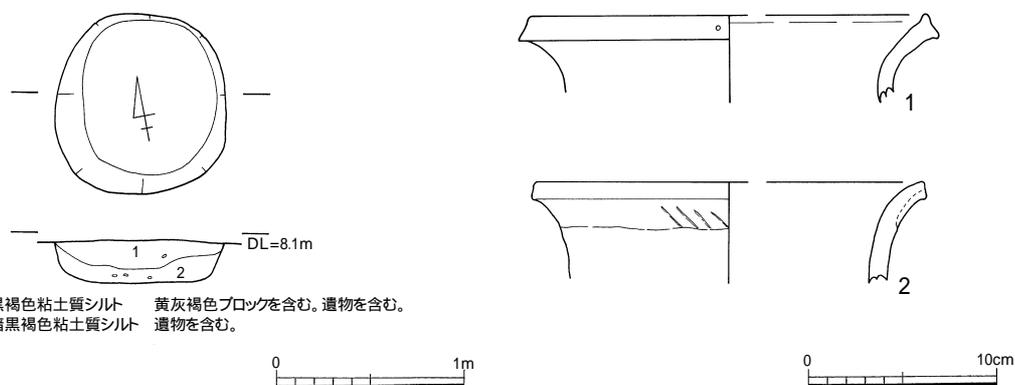
埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部 8 点、底部 1 点、細片 22 点)

所見；調査区F -サ-19・20グリッドに位置する土坑である。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から弥生 ~ 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 ~ 期頃と考えられる壺(1・2)の口縁部である。



1:黒褐色粘土質シルト 黄灰褐色ブロックを含む。遺物を含む。
2:暗黒褐色粘土質シルト 遺物を含む。

N1 - 15 図 N1SK104

N1SK105(N1-11・16図)

時期；弥生 -2 ~ -1・2 形状；溝状 主軸方向；N-88°E

規模；5.64×1.36m 深さ 0.44m 断面形態；逆台形

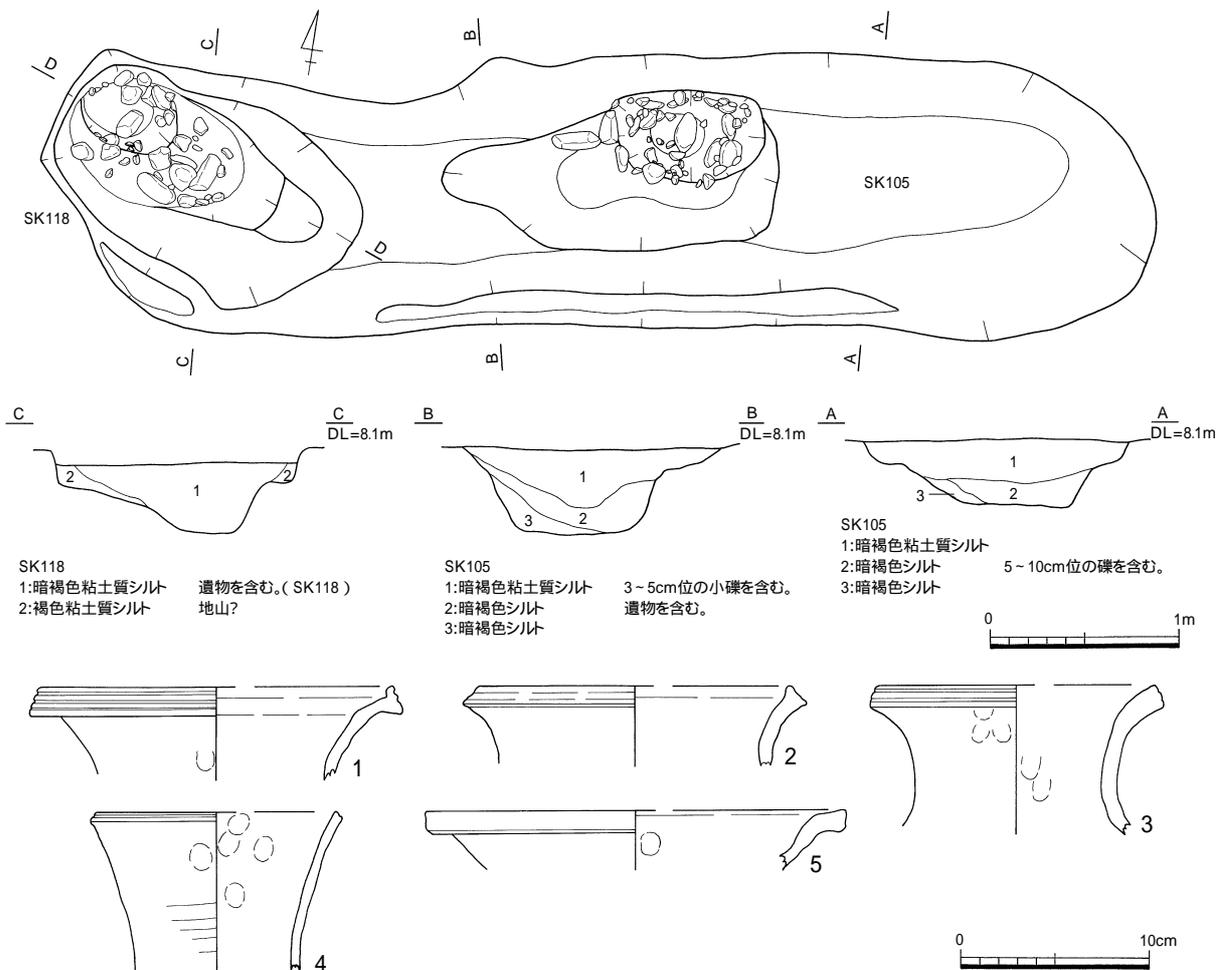
埋土；暗褐色粘土質シルト

付属遺構；SB102 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部10点、底部 4 点、細片約150点)

所見；調査区 F -サ-17・18・19・23グリッドに位置し、SB102に伴う可能性が考えられる溝状土坑である。平面形態は緩やかな傾斜を持つ段部を有し、中央部は逆台形状に掘り込まれている。遺構のほぼ中央の床面北側から長径約0.77m、短径約0.48m、深さ約64cmを測る楕円形状を呈したピット状の土坑を検出し、底面は下層の礫層まで達している。遺構の西端で溝状土坑を切ると考えられるSK118の床面からもほぼ同規模のピット状の土坑を検出している。SK118との切り合い関係は明確ではなく、同一遺構の可能性を含んでいる。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から弥生 -2 ~ -1・2期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 -2 ~ -1・2期頃と考えられる壺(1~4)、鉢(5)の口縁部である。



N1 - 16 図 N1SK105(2)・118(1)

N1SK118(N1-16・17図)

時期；弥生 ~ 形状；楕円形 主軸方向；N-68°W

規模；1.68×0.97m 深さ0.45~1.16m 断面形態；逆台形

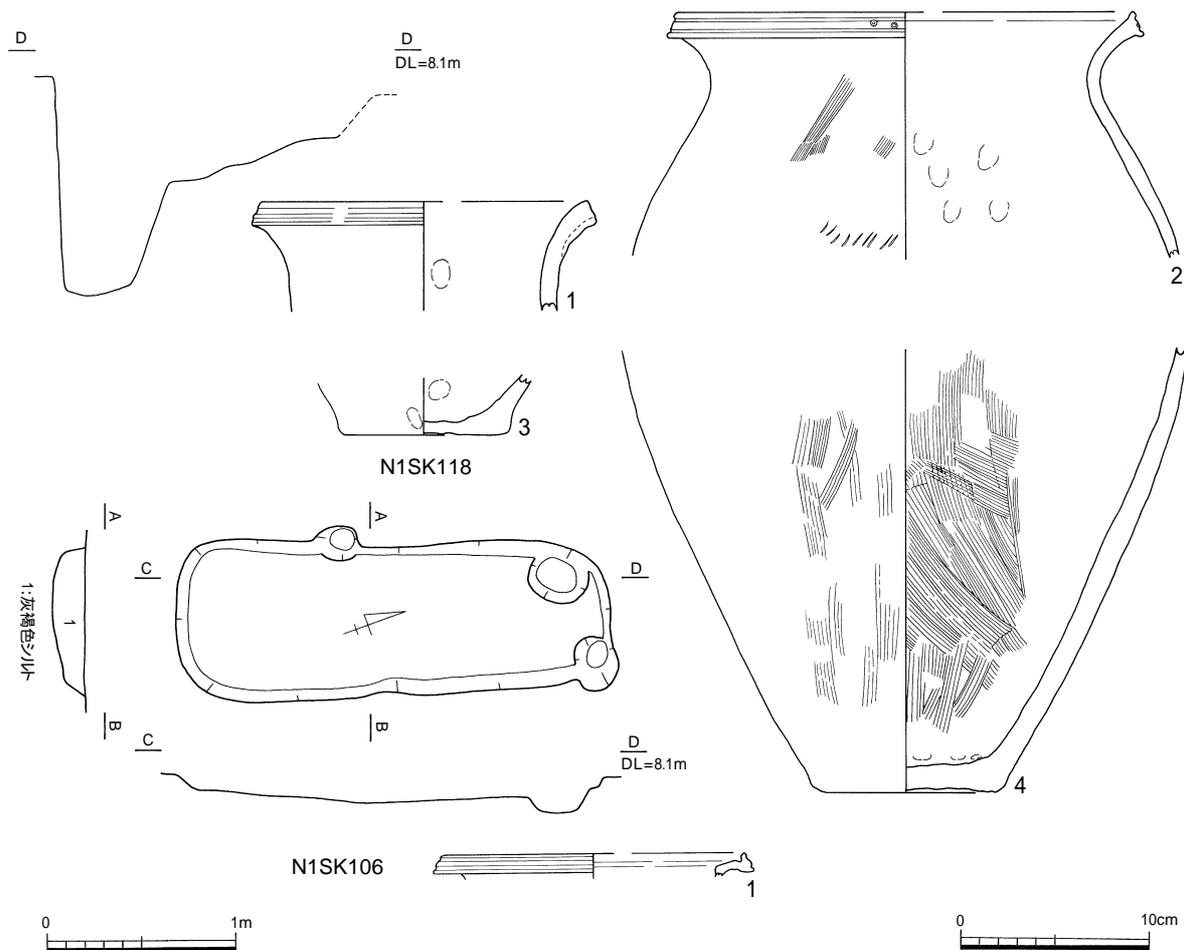
埋土；暗褐色粘土質シルト

付属遺構； 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部3点、底部2点、細片約40点)

所見；調査区F -タ-17・18グリッドに位置する土坑である。床面から長径約0.6m、短径約0.4m、深さ約60cmを測るピット状の土坑を検出し、底面は下層の礫層まで達している。SK118に切られると考えられる溝状土坑の床面からもほぼ同規模のピット状の土坑を検出している。溝状土坑との切り合い関係は明確ではなく、同一遺構の可能性を含んでいる。平面形態は垂直に立ち上がる北西部に対して南東部は緩やかに傾斜し、ピット状の土坑へ落ち込んでいる。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から弥生 ~ 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 ~ 期頃と考えられる壺(1)、甕(2・4)の口縁部・底部である。2と4はピット状の土坑から出土しており、同一個体の可能性が考えられる。



N1 - 17 図 N1SK106・118(2)

N1SK106(N1-17図)

時期；弥生？～ 形状；長方形 主軸方向；N-20°E

規模；2.29×0.78m 深さ 0.17m 断面形態；箱形

埋土；灰褐色シルト

付属遺構； 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部 1 点)

所見；調査区 F -サ-23グリッドに位置し、SB102を切ると考えられる土坑である。

出土した遺物は弥生～ 期頃と考えられる甕(1)の口縁部が 1 点のみである。埋土の状態などから弥生時代以降の遺構の可能性が考えられ、出土した遺物は混入の可能性を含んでいる。

N1SK107(N1-18図)

時期；弥生～？ 形状；円形 主軸方向；N-34°W

規模；0.74×0.70m 深さ 0.16m 断面形態；箱形

埋土；暗褐色シルト

付属遺構； 機能；不明

出土遺物；なし

所見；調査区 F -サ-24グリッドに位置する土坑である。埋土中から焼土・炭化物を確認している。

遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生～ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

N1SK108(N1-18図)

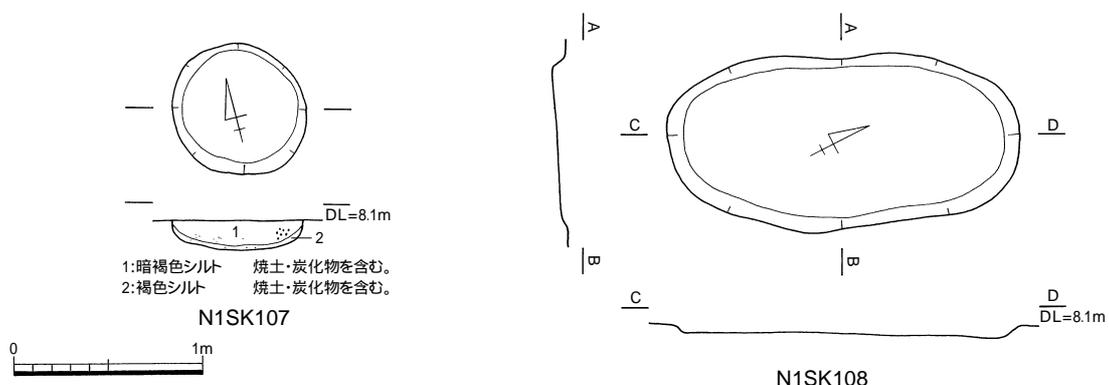
時期；弥生～？ 形状；楕円形 主軸方向；N-27°E

規模；1.85×0.90m 深さ 0.06m 断面形態；皿状

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構； 機能；不明

出土遺物；なし



N1 - 18 図 N1SK107・108

所見；調査区E -ソ-20、F -サ-11・16グリッドに位置する土坑である。全体的に浅い遺構であり、上面が削平を受けた可能性が考えられる。

遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

N1SK109(N1-19図)

時期；弥生 ~ ? 形状；楕円形・溝状 主軸方向；N-61°W

規模；2.39~3.72×0.30~1.18m 深さ0.24~0.48m 断面形態；逆台形

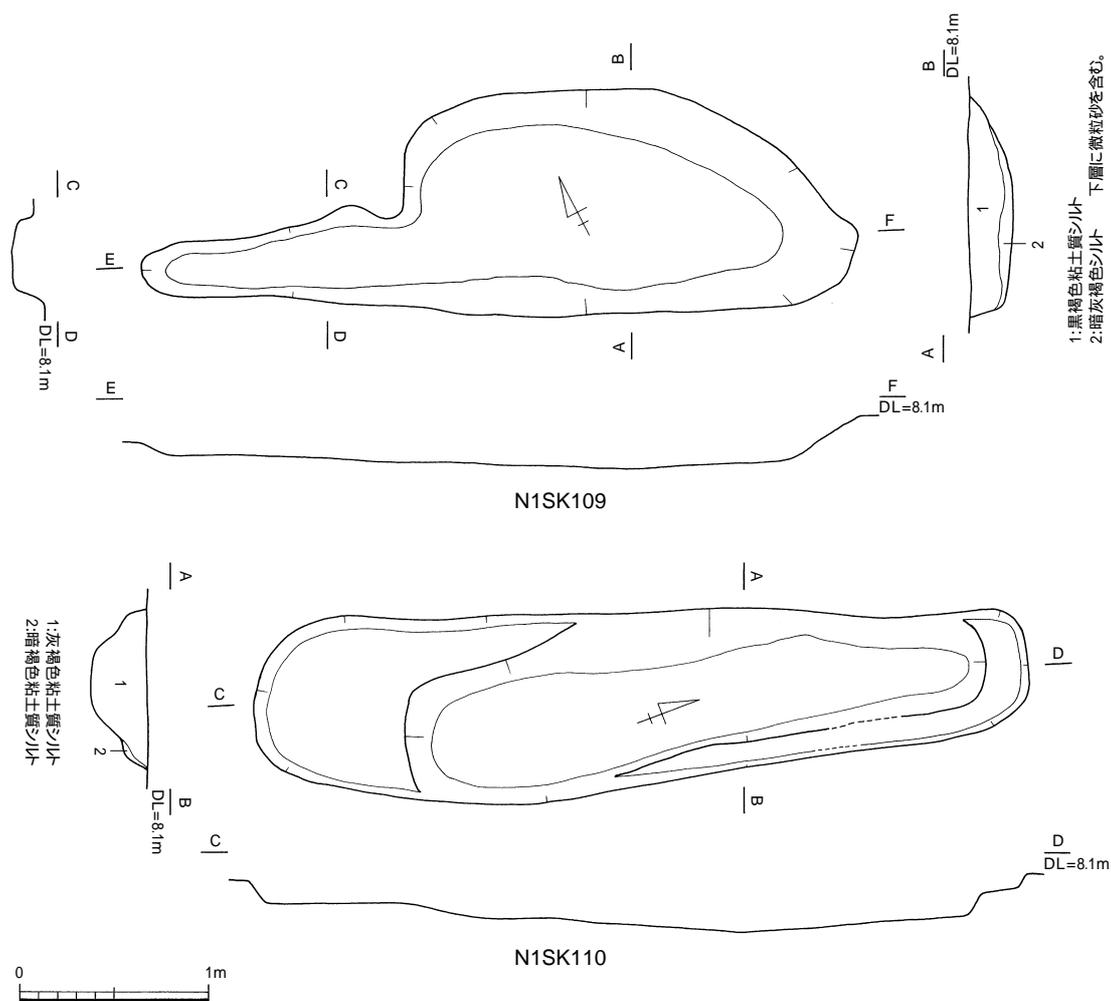
埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構； 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部3点、底部1点、細片約60点)、陶磁器(細片1点)

所見；調査区E -ソ-19・20グリッドに位置する土坑である。形状から2つの土坑が切り合い関係にあると考えられ、溝状土坑が切られている可能性が高い。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、陶磁器片は混入したものと考えられる。時期を判断



N1 - 19 図 N1SK109・110

する遺物が僅少であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

N1SK110(N1-19図)

時期；弥生？ ~ **形状**；溝状 **主軸方向**；N-18°E

規模；4.07×0.85m **深さ** 0.12~0.30m **断面形態**；逆台形

埋土；灰褐色粘土質シルト

付属遺構； **機能**；不明

出土遺物；なし

所見；調査区F -タ-8・12・13グリッドに位置し、ST106の上面を切る土坑である。平面形態は段部を有し、中央部は逆台形状に掘り込まれており、形状から2つの土坑が切り合い関係にある可能性が僅かながら考えられる。

遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、埋土の状態などから弥生時代以降の遺構の可能性が考えられる。

N1SK111(N1-20図)

時期；弥生 ~ ? **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-18°W

規模；1.12×0.53m **深さ** 0.15m **断面形態**；逆台形

埋土；暗褐色粘土質シルト

付属遺構； **機能**；不明

出土遺物；弥生土器(細片7点)

所見；調査区F -サ-23グリッドに位置する土坑である。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

N1SK113(N1-20図)

時期；弥生 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-33°W

規模；1.67×0.85m **深さ** 0.14m **断面形態**；箱形

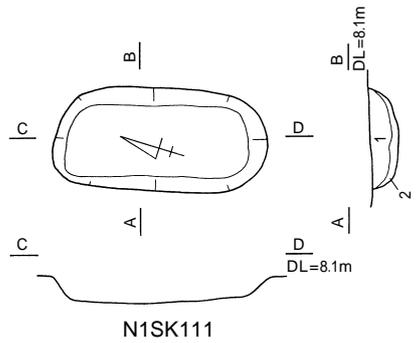
埋土；暗褐色シルト

付属遺構； **機能**；不明

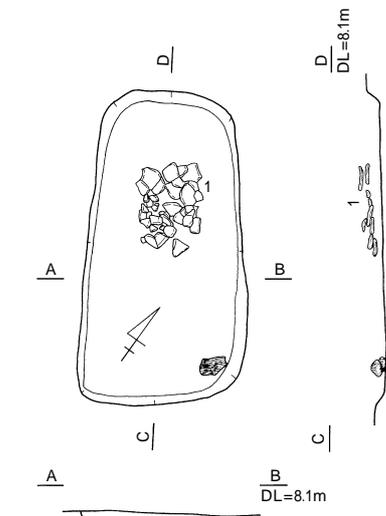
出土遺物；弥生土器(口縁部1点、底部2点、細片約30点)

所見；調査区F -タ-12グリッドに位置する土坑である。埋土中から焼土・炭化物を確認し、南西隅の床面上から炭化材を確認している。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、弥生 期頃と考えられる壺(1)の胴底部が纏まって出土している。また北東に位置するST106から出土している杯状土器の口縁部の一部が、1と共に出土している。遺物から弥生 期頃の遺構の可能性が考えられるが、弥生 期頃まで下る可能性を含んでいる。



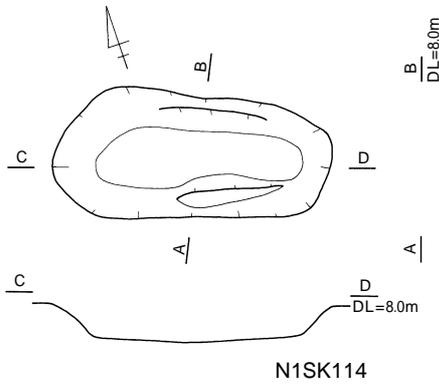
N1SK111



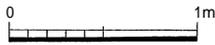
1:暗褐色シルト 焼土・炭化物を含む。

N1SK113

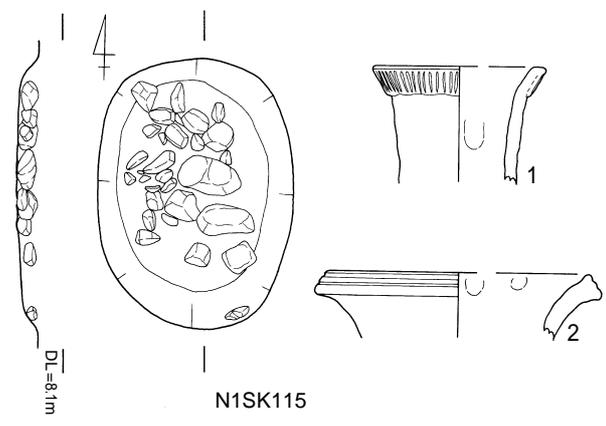
1:暗褐色粘土質シルト
黄色ブロックが混じる。
2:暗褐色粘土質シルト
1より色調が濃い。



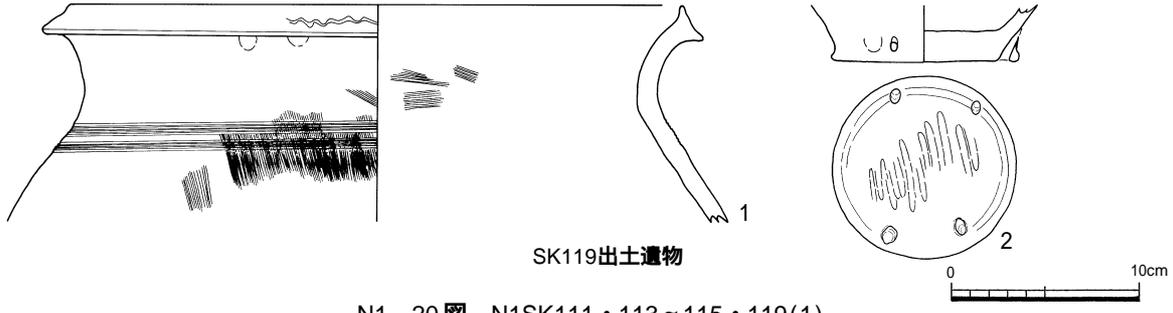
N1SK114



1:暗灰褐色粘土質シルト
2:暗褐色粘土質シルト



N1SK115



SK119出土遺物



N1 - 20 図 N1SK111・113~115・119(1)

N1SK114(N1-20図)

時期；弥生 ~ ? **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-75°W

規模；1.46×0.62m **深さ** 0.25m **断面形態**；U字状

埋土；暗灰褐色粘土質シルト

付属遺構； **機能**；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部 1 点)

所見；調査区E -ト-10グリッドに位置する土坑である。平面形態は僅かに段部を有し、中央部はU字状に掘り込まれている。

出土した遺物は弥生土器の口縁部が 1 点のみである。時期を判断する遺物が僅少であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

N1SK115(N1-20図)

時期；弥生 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-90°E

規模；1.43×1.03m **深さ** 0.11m **断面形態**；逆台形

埋土；暗褐色粘土質シルト

付属遺構； **機能**；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部 2 点、細片36点)

所見；調査区F -タ-10・15グリッドに位置する土坑である。床面上から集石を検出している。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から弥生 期頃の遺構と考えられるが、弥生 期頃まで下る可能性を含んでいる。図示したものは弥生 期頃と考えられる壺(1・2)である。

N1SK116(N1-12図)

時期；弥生 ~ ? **形状**；溝状 **主軸方向**；N-15°E

規模；2.80×0.45m **深さ** 0.06m **断面形態**；皿状

埋土；暗褐色粘土質シルト

付属遺構； **機能**；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部 1 点、底部 3 点、細片約40点)

所見；調査区F -タ-18グリッドに位置する溝状土坑である。南側に浅い落ち込みを有しており、形状から切り合い関係の可能性が考えられる。ほぼ直角の位置関係で重複する掘立柱建物跡(SB103)を検出しているが、関連性は不明である。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。時期を判断する遺物が僅少であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。図示したものは底部(1)である。

N1SK119(N1-20・21図)

時期；弥生 ~ 形状；隅丸長方形 主軸方向；N-66°E

規模；1.57×0.76m 深さ0.36m 断面形態；U字状

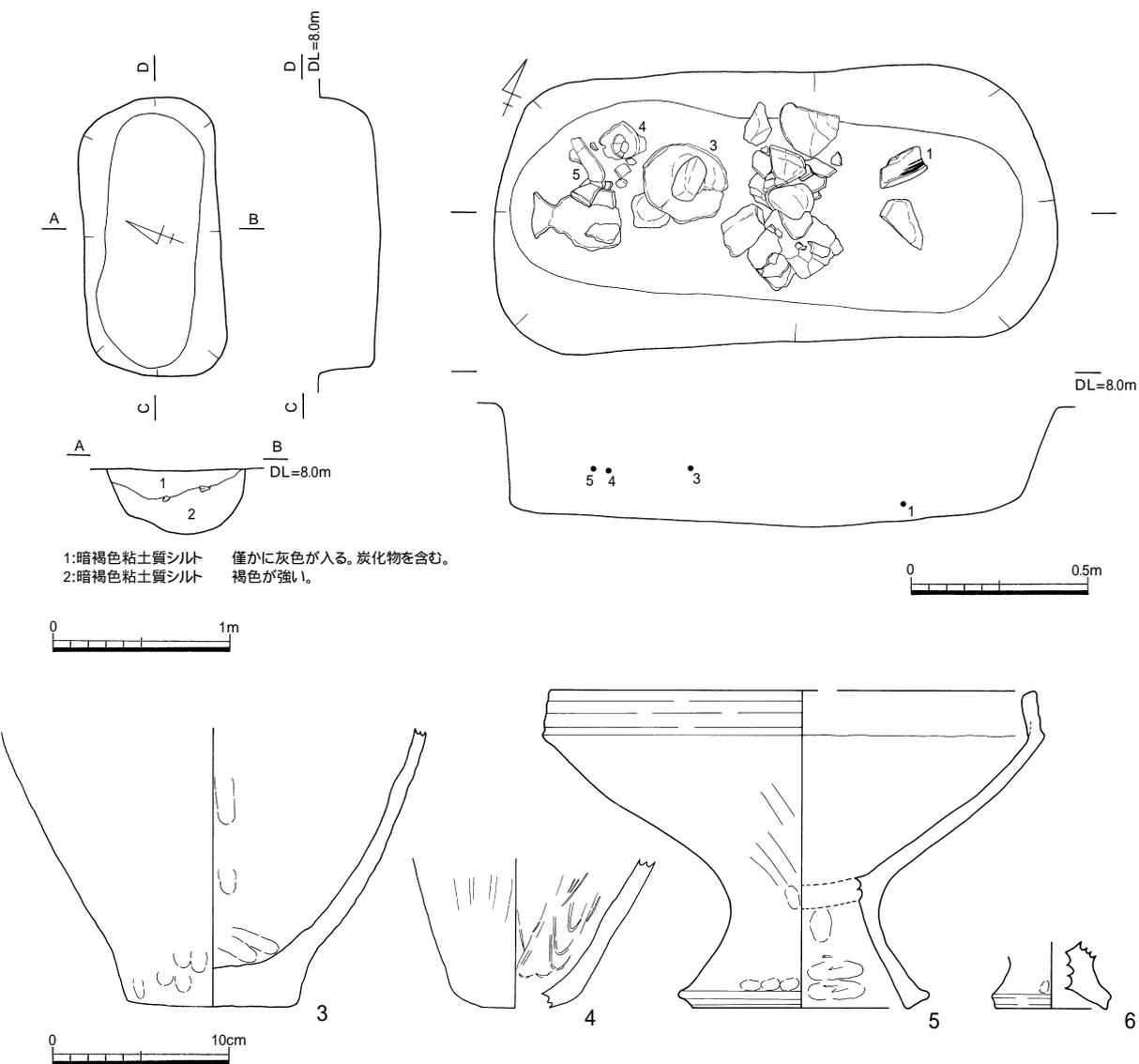
埋土；暗褐色粘土質シルト

付属遺構； 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部4点、底部5点、細片約260点)

所見；調査区F -タ-23・24グリッドに位置する土坑である。埋土1層目から炭化物を確認している。

遺物は下層～床面からの出土が多く、床面上から出土状況を確認できた。遺物から弥生～期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生～期頃と考えられる甕(1)の口縁部、高杯(5)などであり、1はSK101から胴部の一部が出土している。2は底面から底部側面にかけて4つの穿孔が認められる。また土器片(胴部)の中から拳大程の礫を検出している。



N1 - 21 図 N1SK119(2)

N1SK120(N1-22図)

時期；弥生 ~ 形状；楕円形 主軸方向；N-3°E

規模；2.00×0.84m 深さ0.21m 断面形態；逆台形

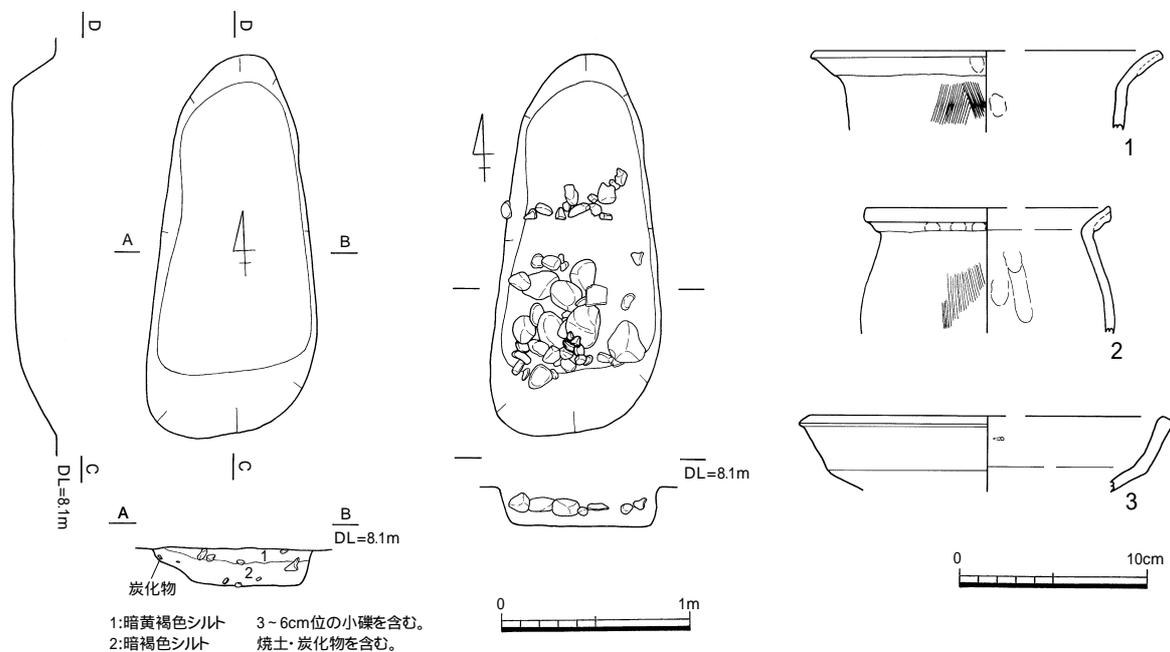
埋土；暗黄褐色シルト

付属遺構； 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部7点、細片約60点)

所見；調査区F -タ-5・10グリッドに位置し、I1ST104を切る土坑である。埋土2層目から焼土・炭化物を確認している。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、埋土2層目上部から集石を検出している。遺物から弥生 ~ 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 ~ 期頃と考えられる甕(1・2)の口縁部と高杯(3)の杯部である。



N1 - 22 図 N1SK120

N1SK121(N1-23図)

時期；弥生? 形状；溝状 主軸方向；N-79°W

規模；(5.83)×1.03m 深さ0.12m 断面形態；皿状

埋土；黒褐色シルト

付属遺構； 機能；不明

出土遺物；縄文土器(細片2点)

所見；調査区E -セ-15、ソ-11グリッドに位置し、SD108を切ると考えられる溝状土坑である。床面に土坑状の落ち込みを有している。

出土した遺物は縄文土器の細片が2点のみである。西端部は調査区西側に広がる黒色粘土層を掘り込んでおり、縄文土器片は混入の可能性が考えられ、遺物から時期を判断することは困難である。

N1SK122(N1-23図)

時期；弥生？ 形状；長楕円形 主軸方向；N-33°E

規模；2.33×0.56m 深さ0.25m 断面形態；U字状

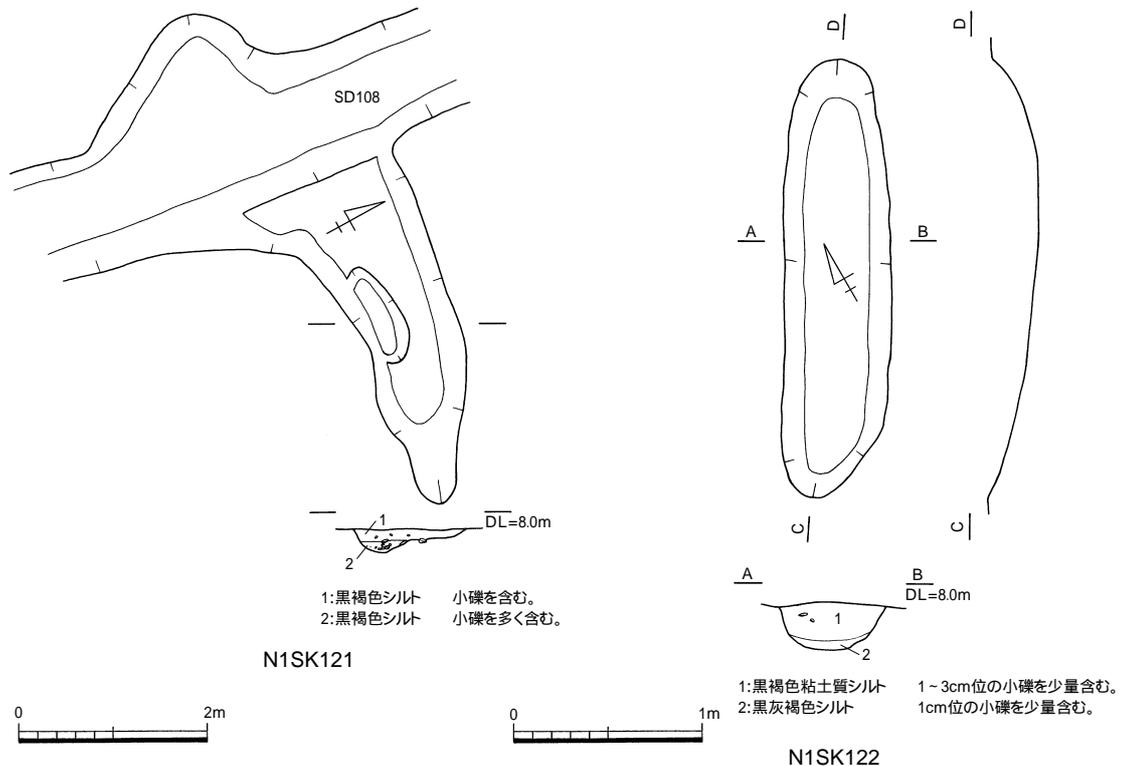
埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構； 機能；不明

出土遺物；なし

所見；調査区E -ソ-22・23グリッドに位置する土坑である。周辺の遺構密度は極めて低く、遺構の検出は認められなかった。

遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難である。



N1 - 23 図 N1SK121・122

(4) 溝跡

本調査区に於て溝跡は7条を検出している。調査区を東西方向に並行しながら横断している2条の溝は、I区からN区を経て更に調査対象区域の西側へ続いている大溝である。また調査区西側に広がる黒色粘土層の落ち込みに沿って検出している溝状遺構からは多数の弥生時代前期末頃と考えられる土器片が出土しており、西域に展開していたと考えられる水田との関連性及び時期を示唆している可能性を窺わせているが、断定するには至らず検討を要すると考えられる。

N1-4表 N1区溝一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	接 続	時 期	備 考
N1SD101	14.80×0.74～1.26×0.05～0.12	-	皿状	N-14°-E	I2SD216	弥生～?	
N1SD102	44.70×0.96～1.08×0.10～0.35	-	逆台形	N-75°-W	N2SD202	弥生	大溝7b
N1SD103	44.90×1.42～2.16×0.34～0.50	-	逆台形	N-75°-W	N2SD203	弥生	大溝7a
N1SD104	[25.30]×0.26×0.12	-	U字状	N-75°-W		弥生	
N1SD105	-	-	-	-	-	-	I1区
N1SD106	[11.80]×1.06×0.08	-	皿状	N-62°-E		弥生	
N1SD107	15.80×3.50×0.07	-	皿状	N-20°-E	N1SD106 N1SD108?	弥生	
N1SD108	61.50×0.68～1.25×0.20～0.44	-	逆台形	N-10°-E	N1SD107?	弥生I-5?	

N1SD108(N1-24図)

時期；弥生I-5? 方向；N-10°E

規模；61.50×0.68～1.25m 深さ0.20～0.44m 断面形態；逆台形

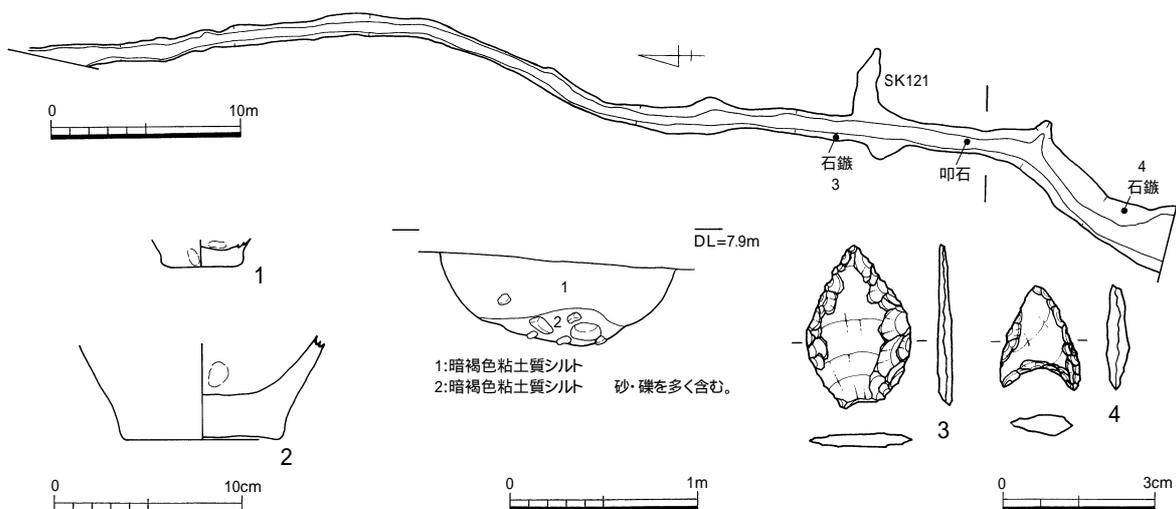
埋土；暗褐色粘土質シルト

床面標高；北端7.887m、南端7.313m

接続；N1SD107?

出土遺物；縄文土器(口縁部1点、底部2点、細片23点)、弥生土器(口縁部10点、底部11点、細片約760点)、石器(石鏃2点、叩石1点)

所見；調査区E -オ-6・11・16・17・21・22、ケ-20・25、コ-1・2・7・11・12・16・21、セ-5・10・15・20・24・25、ソ-1・6、テ-4・5・8・9グリッドに位置し、SD102・103に切られ、北端をSD107に接続する可能性が考えられる溝状遺構である。床面から検出している礫は流れ込みによる堆積であると考えられる。

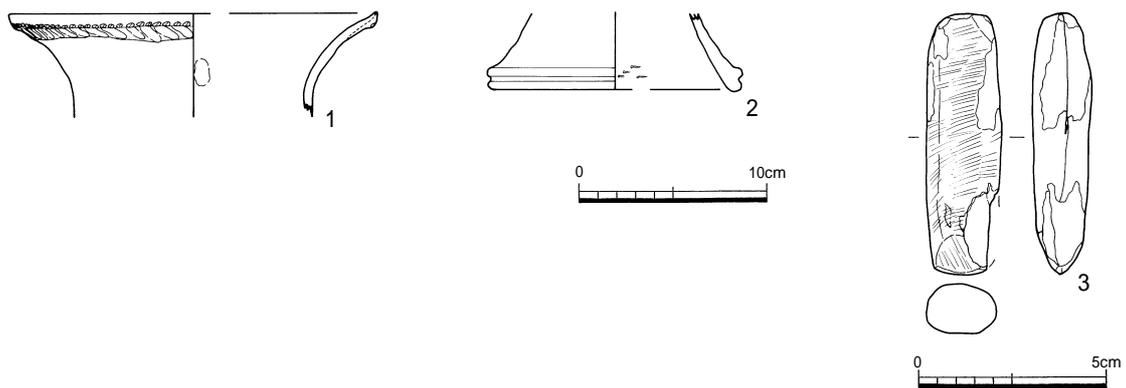


N1-24図 N1SD108

出土した遺物の大半は埋土中のものである。調査区西側に広がる黒色粘土層の落ち込みに沿って検出しており、混入の可能性が考えられる縄文土器が出土している。また弥生時代前期末頃と考えられる土器片が多数出土しているが、時期を判断することは困難であった。図示したものは弥生I期頃と考えられる底部(2)である。他に石鏃(3・4)と緑色片岩の叩石が出土している。

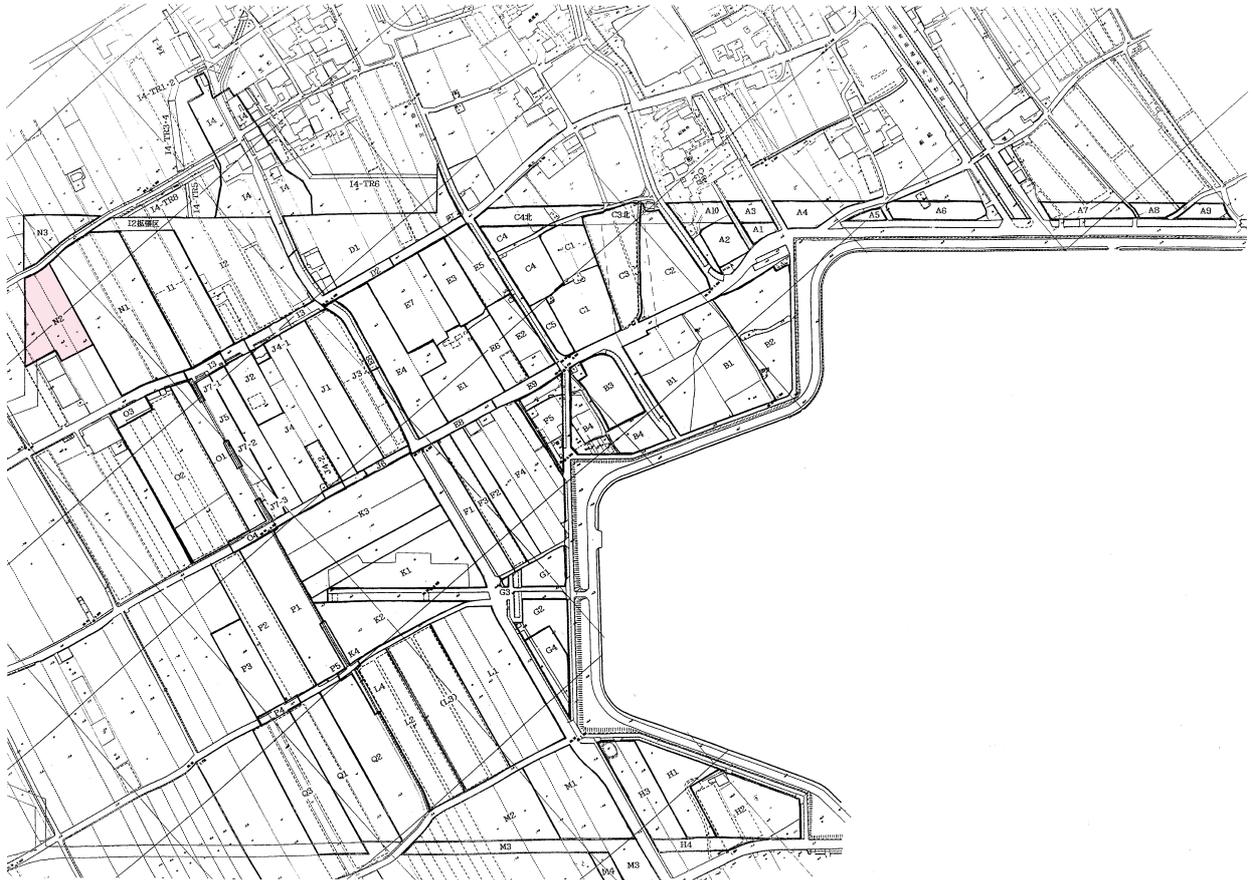
(5) 包含層出土遺物

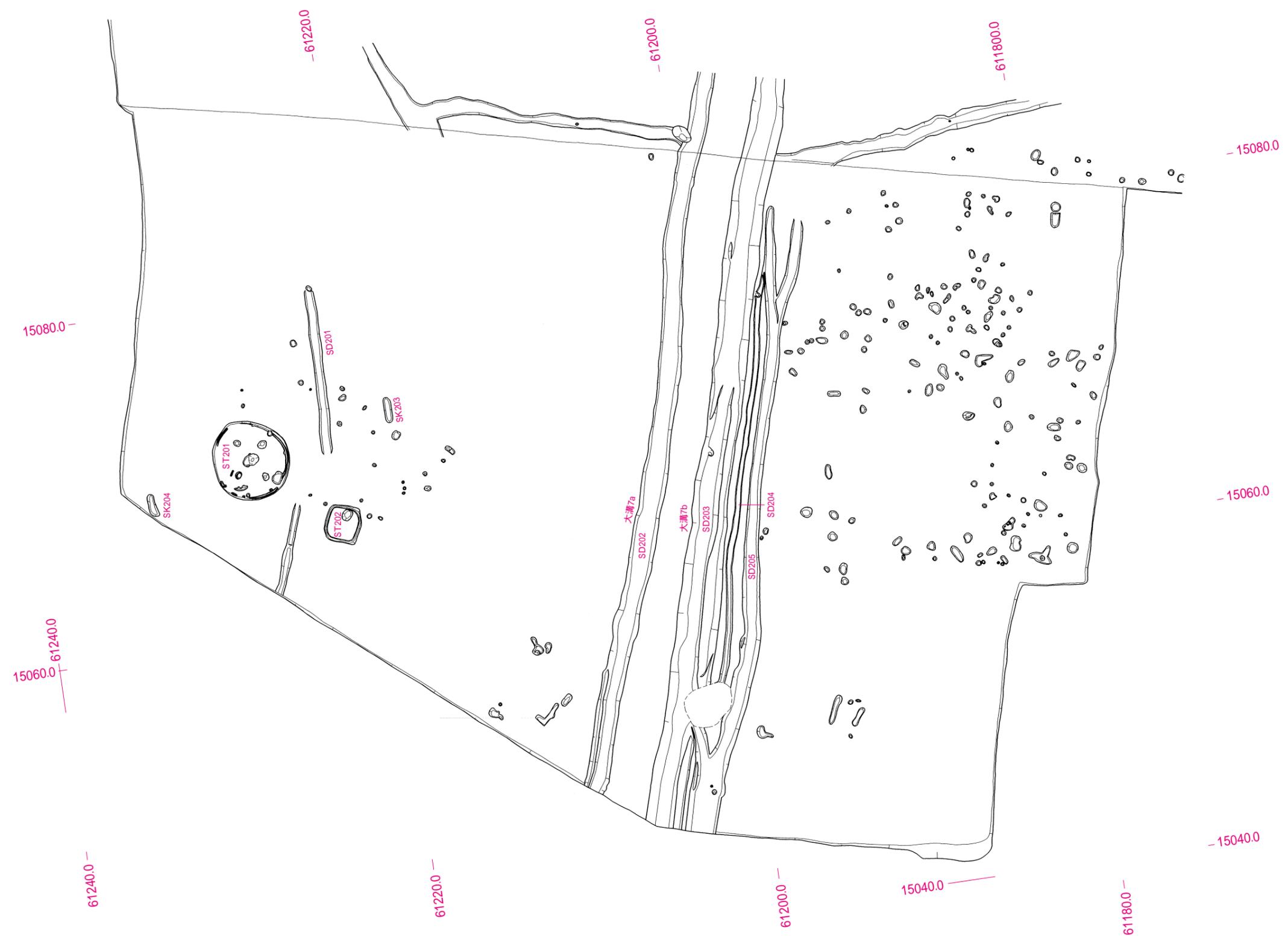
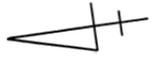
本調査区に於て包含層出土遺物は弥生時代中期末～後期頃を中心に口縁部7点、底部3点、細片約170点程を出土している。調査区西側には縄文時代の包含層と考えられる黒色粘土層が広がりを見せているが、縄文土器は出土しておらず、落ち込みに沿う形で検出している溝状遺構から口縁部・底部を含む縄文土器片が20数点程出土しているのみである。また黒色粘土層下から検出している調査区西端のピット群についても、弥生時代以前の遺構と断定することは困難であり、時期については不明である。図示したものはF-サ-10グリッド(ST105)付近で出土している弥生I期頃と考えられる壺(1)の口縁部と、F-カ-25グリッド(SK101)付近で出土している高杯(2)の脚部である。他にE-オ-16グリッド(SD108)付近で小型石斧(3)が出土している。



N1 - 25 図 N1区包含層出土遺物

N2 区の調査





N2 - 1 图 N2区遺構全体配置図(S=1/250)

1. N2区の概要

概要

今次調査の中で北西端部分に位置し、東側にN1区、南側にO区が隣接する。調査区の西側1/4を現代の攪乱によって壊されているが、竪穴住居跡2軒、土坑2基、溝5条の他、多数のピットを検出した。2棟の竪穴住居跡は弥生時代の遺構と捉えられるが、その他の土坑やピットは出土遺物がほとんどなく、時期は不明である。調査区中央部には隣接するN1区から続く大小の溝が東西方向に並行して4条流れる。その他の溝はいずれも削平を受け、底の部分がわずかに残るのみである。ピットの大半は溝の南側で検出されたが、遺物はほとんど出土しなかった。また、ピットの配置にも規則性がみられず、建物として確認できるものはなかった。本調査区はピット群以外は遺構密度が低く、集落の縁辺部にあたると思われる。

調査担当者 坂本裕一、小野由香、名木郁

執筆担当者 坂本裕一

調査期間 平成11年7月～9月

調査面積 1,954m²

時代 弥生時代中期～後期

検出遺構 本調査区での検出遺構は、弥生時代竪穴住居跡2軒、その他の時代の土坑2基、溝5条、ピット約200個である。

2. N2区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

N2区では調査区北西部で竪穴住居跡を2軒検出している。平面プランは円形のもの1軒、方形のもの1軒である。付属施設として円形のものには中央ピット(炉跡)、壁溝、貯蔵穴と思われるピットが検出され、隅丸方形のものには壁溝が検出されている。調査区内では他に竪穴住居跡は検出されなかった。

N2-1表 N2区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(m ²)	平面形	主軸方向	時期	備考
N2ST201	4.85×4.52	0.16	17.0	円形	N-18°-W	弥生 ~	
N2ST202	2.18×2.10	0.47	4.58	隅丸方形	N-67°-W	弥生	

N2ST201(N2-2・3図)

時期；弥生 ~ **形状**；円形 **主軸方向**；N-18°-W

規模；4.85×4.52m **深さ** 0.16m **面積** 17.0m²

埋土；灰黄褐色シルト

ピット；数4 **主柱穴数** 4 **主柱穴** P2 ~ 5

床面；1面 **貼床**；有

中央ピット；**形状** 楕円形 **規模** 97×69cm **深さ** 36cm **埋土** 黒褐色シルト

壁溝；1条 **幅** 8 ~ 13cm **深さ** 8cm

出土遺物；弥生土器(甕)、石包丁1、叩石2、石錘1、砥石1、軽石1

所見；調査区北西部に位置し、N2ST202が隣接する。埋土は1 ~ 6層で5・6層は張り床である。張り床は南西側が厚く、北西側が薄く行われている。床面遺構は張り床を除去後に検出したが、断面観察からは張り床上面から掘り込まれていたことが伺える。壁際には壁溝が巡るが、北側では、張り床と埋土の色調が同じであるため、未検出の部分もある。床面中央部分は中央ピットに向けて緩やかに窪む。中央ピットは楕円形を呈し、北西側に段を持つ。断面形は掘鉢状である。埋土中には炭化物、焼土を多く含む。落ち込み部分から被熱して赤色化した砥石が出土し、底には炭化物が堆積する。柱穴は四角形に配され、柱間距離は1.45 ~ 1.98mを測る。全ての柱穴で直径約16 ~ 22cmを測る柱痕が検出された。南西壁際のP6は長径72cm、短径55cm、深さ20cmを測り、底から叩石が1点出土した。貯蔵穴の可能性はある。

出土遺物のうち土器は細片が多く、図示し得たのは甕の口縁部片1点のみである(N2-2図1)。石器は3点を図示した(N2-3図2~4)。2は錐揉みによる紐を2個持つ磨製石包丁である。3の削器はサヌカイト製である。4は中央ピット出土の砥石である。表裏面と一側面が使用されている。

N2ST202(N2-4図)

時期；弥生 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-67°-W

規模；2.18×2.10m **深さ** 0.47m **面積** 4.58m²

埋土；黒褐色シルト

ピット；数 1

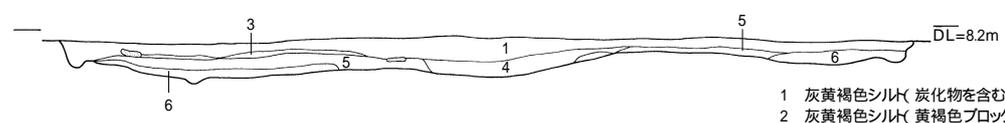
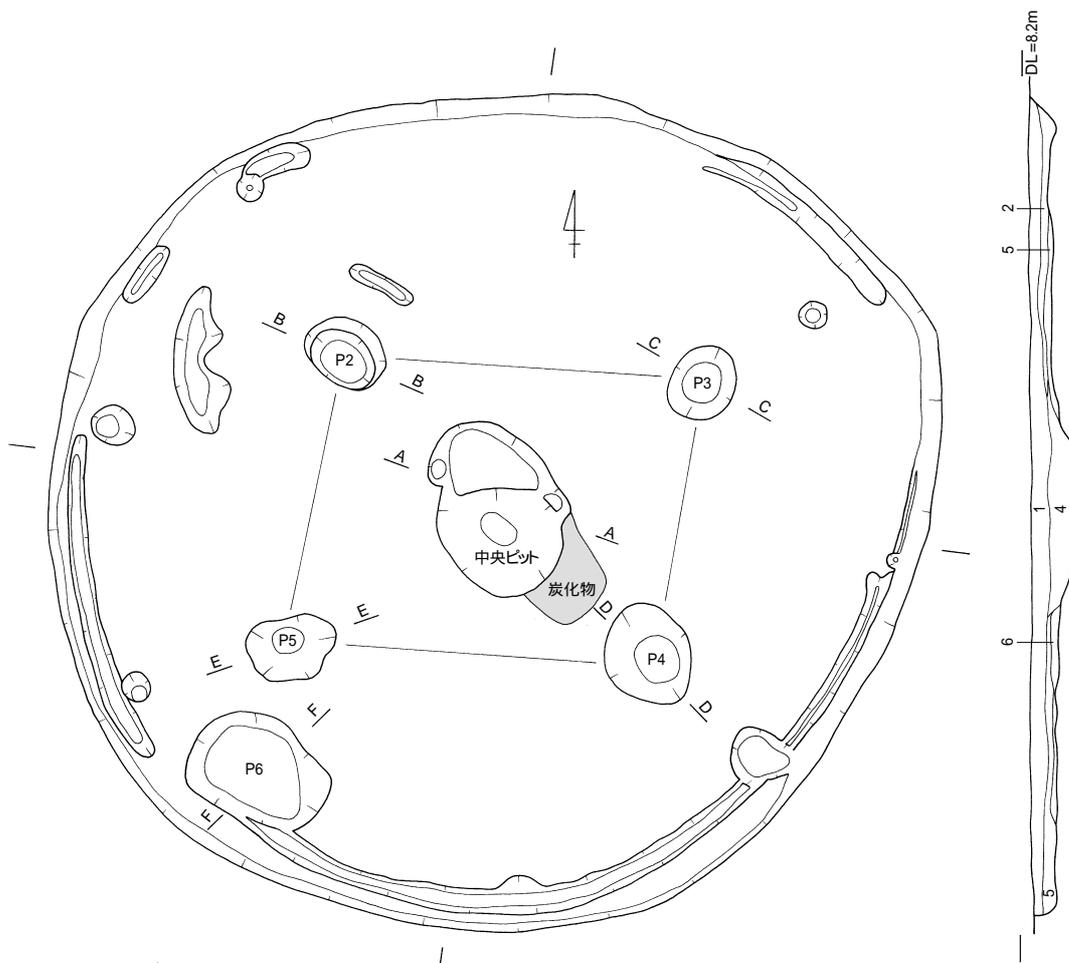
床面；1面 **貼床**；有

壁溝；1条 **幅** 10～16cm **深さ** 6～8cm

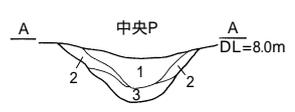
出土遺物；弥生土器(壺 1、甕 1)、釣り針 1、叩石 1

所見；調査区北西部に位置する。N2ST201南西側に隣接する。埋土は 1～4層で、4層は張り床である。張り床をされた床面はほぼ平坦で、壁際に壁溝が巡るが、柱穴は持たない。南壁際に長径 65cm、短径 20cm、深さ 20cmを測るP1を検出した。埋土は 1・2層であり、1層には炭化物を多く含むが、2層には認められなかった。炉の可能性もある。

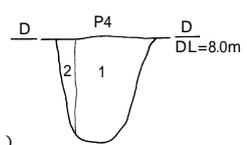
出土遺物のうち土器は細片が多く、図示し得たのは 3点である(N2-4図1～3)。1は床面出土の甕である。南四国型甕の特徴を持つ。2は壺である。頸部を欠き、縦に割れた胴部の1/2が残存する。3は壺の底部片である。鉄器は釣り針(N2-4図4) 1点で、P1上面で出土した。腐食が著しいが残りはよく、ほぼ原形を保つ。



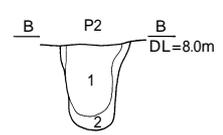
- 1 灰黄褐色シルト(炭化物を含む)
- 2 灰黄褐色シルト(黄褐色ブロック含む)
- 3 灰黄色シルト
- 4 黒褐色シルト(炭化物を含む)-中央Pit埋土
- 5 灰黄褐色シルト(黒褐色と灰黄色ブロック含む)
- 6 灰黄褐色シルト(灰黄色ブロック多く含む)



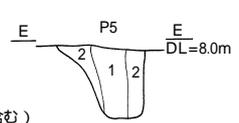
- 1 黒褐色シルト(3cm大炭化物、2cm大焼土粒含む)
- 2 暗褐色シルト(暗黄灰色シルト混じる、炭化物、焼土含む)
- 3 黒褐色シルト(暗黄灰色、黄褐色ブロック混じる、炭化物多く含む)



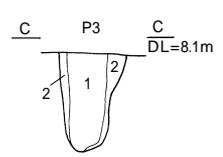
- 1 黒褐色シルト(黄褐色ブロック混じる)
- 2 灰黄褐色シルト(暗褐色ブロック混じる)



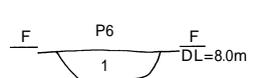
- 1 灰黄褐色シルト(にぶい黄褐色ブロック混じる、炭化物含む)
- 2 灰黄色砂質シルト



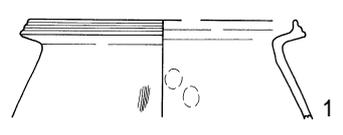
- 1 黒褐色シルト(下半分に褐色ブロック多く混じる)
- 2 黒褐色シルト(褐色シルト多く混じる)



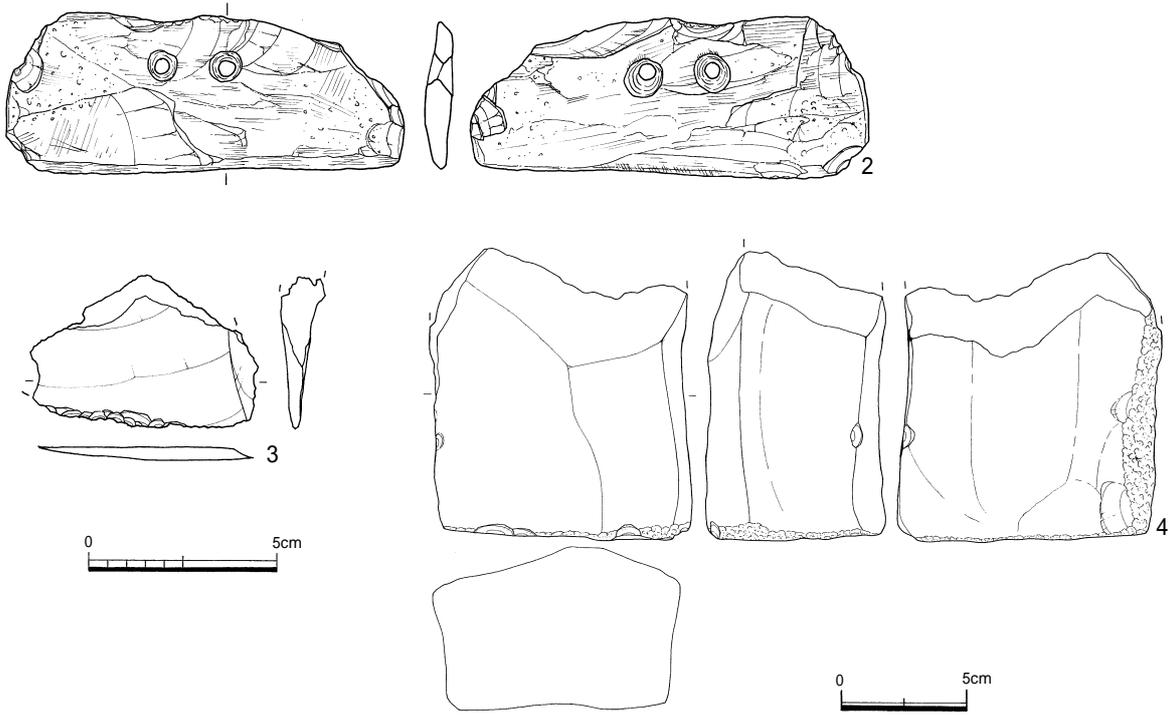
- 1 暗褐色シルト(黄褐色ブロック混じる、炭化物わずかに含む)
- 2 黄褐色シルト(灰黄色と暗褐色ブロック混じる)



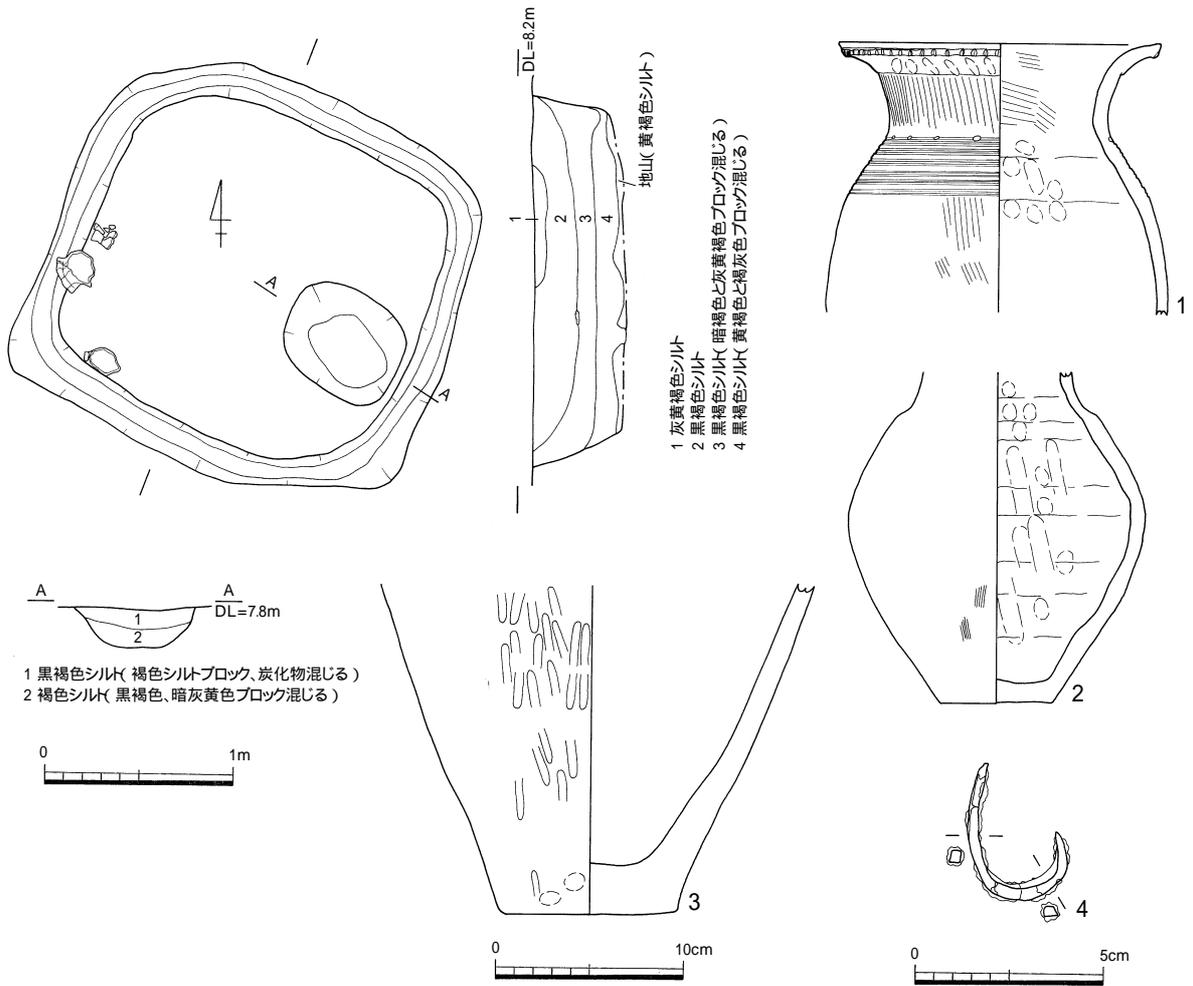
- 1 黒褐色シルト(3-5mm大の炭化物、焼土の粒を含む)



N2 - 2 ☒ N2ST201(1)



N2 - 3 ㊦ N2ST201(2)



N2 - 4 ㊦ N2ST202

3. N2区その他の時代の遺構と遺物

(1) 土坑

N2区では土坑を4基検出したが、そのうち2基は窪みであり、N2SK203・204を土坑として取り扱った。どちらも遺物の出土はなかったため、詳細な時期は確定できない。

N2SK203は調査区中央部北寄りで見出し、楕円形を呈する。長径150cm、短径42cm、深さ12cmを測る。長軸がN2SD201に並行するため、溝の深い所の残存部分の可能性もある。N2SK204は調査区北西端で見出し、一部調査区外であるため全体の規模は不明である。検出部分では長径84cm、短径40cm、深さ6cmを測る。溝の深い所の残存部分の可能性もある。

N2-2表 N2区土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
			長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					
N2SK203	楕円形	U字形	1.5	0.4	12	N-90°	黒褐色シルト			溝の残存部分か？
N2SK204	楕円形	U字形	(0.84)	0.4	6	N-83°-E	オリーブ褐色シルト			溝の残存部分か？

(2) 溝跡

N2区では溝を5条検出した。調査区北寄りに1条、調査区中央部ではN1区から続く平行した大小4条の溝を検出した。

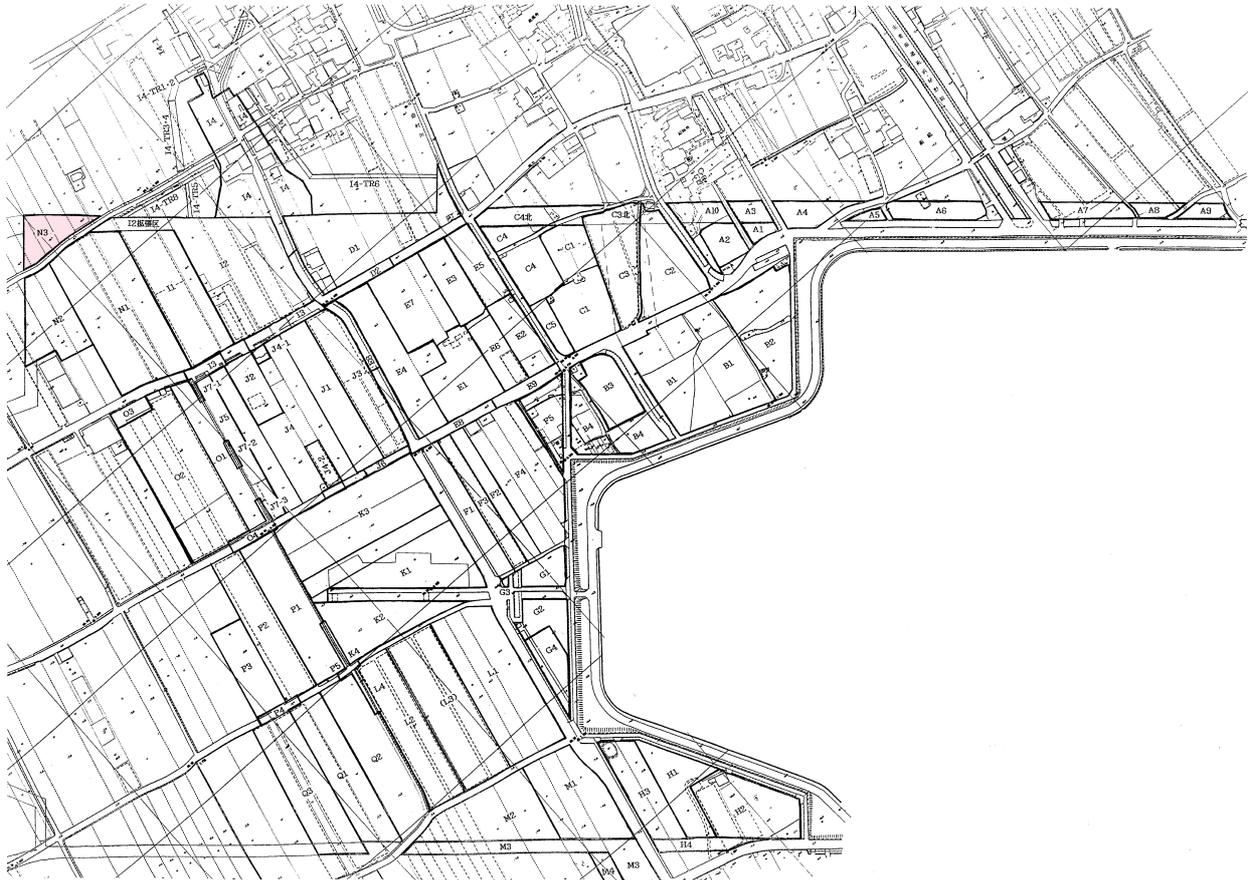
調査区北寄りで見出されたN2SD201は後世の削平を受け、中央部分以外はほとんど残存しておらず、検出面に酸化した鉄分が帯状に沈着していた。残存部分はほぼ東西方向に沿い、検出長9.4m、幅約0.5m、深さ5cmを測る。遺物は出土しなかった。

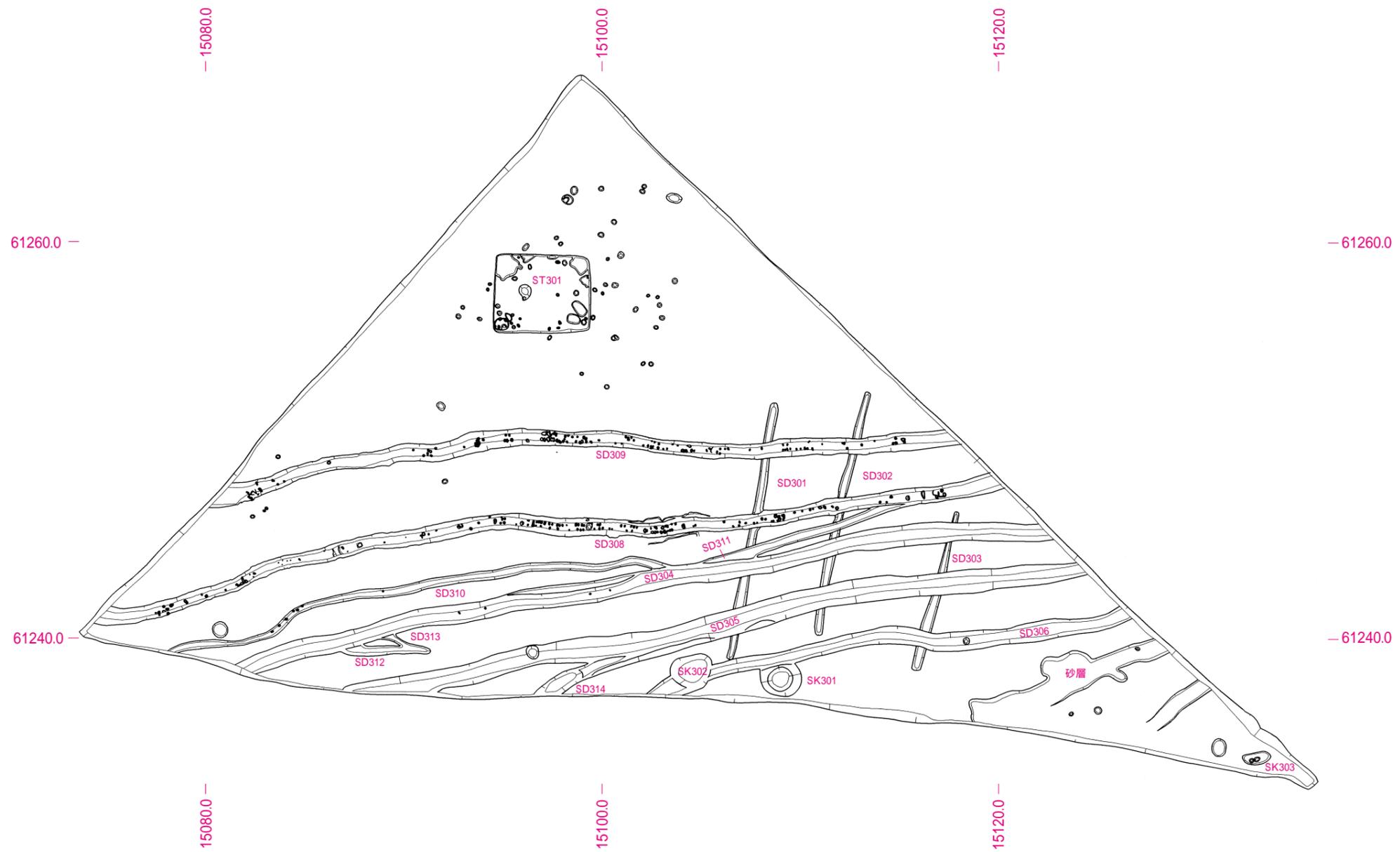
調査区中央部のN2SD202は大溝7a、N2SD203は大溝7bとして大溝の章で記述する。SD204～206についても大溝7に平行する溝として合わせて記述した。

N2-3表 N2区溝跡一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	断面形	主軸方向	接続	時期	備考
N2SD201	(9.5)×0.5×0.05	U字形	N-86°-E			
N2SD202	38.6×1.25×0.24～0.38	U字形	N-74°-W	N1SD102		大溝7a
N2SD203	41.0×2.0×0.5～0.6	U字形	N-74°-E	N1SD103		大溝7b
N2SD204	26.2×0.32×0.16	U字形	N-75°-E			
N2SD205	28.8×0.58～0.60×0.28～0.32	U字形	N-66°～78°-W			

N3 区の調査





N3 - 1 图 N3区遺構全体配置图(S = 1/250)

1. N3区の概要

概要

N3区は今次調査対象区域の北西端部、N1・2区の道を挟んだ北側に所在する。また平成13年度に調査の行われた、緑の広場整備事業に伴う発掘調査の対象区(B・区)のすぐ南に位置する。遺構検出面の標高は約8.5～8.6mを測り、南西端部に位置するQ3区とは約2.2～2.3mの高低差がある。調査区一帯の現況は水田であるが、本来はアップダウンの激しい地形であったと考えられる。

遺構は東端部を除き、表土層直下で検出した。N3区で検出した遺構のうち、主体を占めるのが古代の溝跡である。東西方向に10条を確認した。これらの溝跡は1～4mの間隔で、ほぼ平行に調査区を横断する。主軸方向は概ねN-79～89°Eの範疇に納まる。これら古代の溝跡は平成13年度調査B区、及び今次調査のI4区で検出した古代の溝跡と軸方向がほぼ一致しており、N3～B区～I4区と繋がる可能性が高い。

また調査区北部では古代の溝跡とほぼ長軸方向の一致する、方形の竪穴住居跡1軒を検出した。埋土からは古代の遺物が出土しており、当該期の遺構の可能性が高い。

調査区東部では、古代溝を切る3条の溝跡を確認した。これらの溝はほぼ平行に調査区を縦断する。N3SD302からは土師質土器が出土しており、中世の遺構と考えられる。

調査区東端部では包含層が狭い範囲で認められた。東端部では砂層が堆積するのを確認した。これは自然流路又は溝跡の基底面がかろうじて残ったものの可能性もあるが、プラン的にも不明瞭なため包含層とした。砂層の堆積及びその周辺からは、弥生土器、須恵器が出土した。N3-2図に示した遺物は、いずれも須恵器の杯(1・2)、甕(3)、杯蓋(4)である。

調査担当者 坂本裕一、名木郁、小野由香

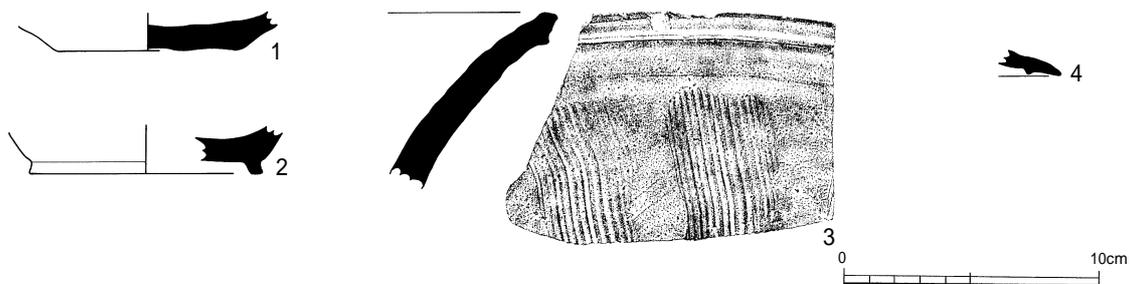
執筆担当者 小野由香

調査期間 平成11年8月27日～平成11年10月15日、下層調査 平成11年10月22日

調査面積 931m²

時代 弥生時代、古代～近世

検出遺構 竪穴住居跡1軒、土坑3基、溝跡13条、ピット32個



N3-2図 包含層出土遺物

2. N3区古代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

調査区北部で竪穴住居跡 1 軒を検出した。住居内には土師器、須恵器の他、混入とみられる少量の弥生土器が認められた。竪穴住居跡の長軸方向が古代の溝跡の方向とほぼ一致しており、同時期に機能した可能性も考えられる。

N3ST301 (N3-2図)

時期；古代？ 形状；方形 主軸方向；

規模；4.73×3.95m 深さ 0.08m 面積 18.7m²

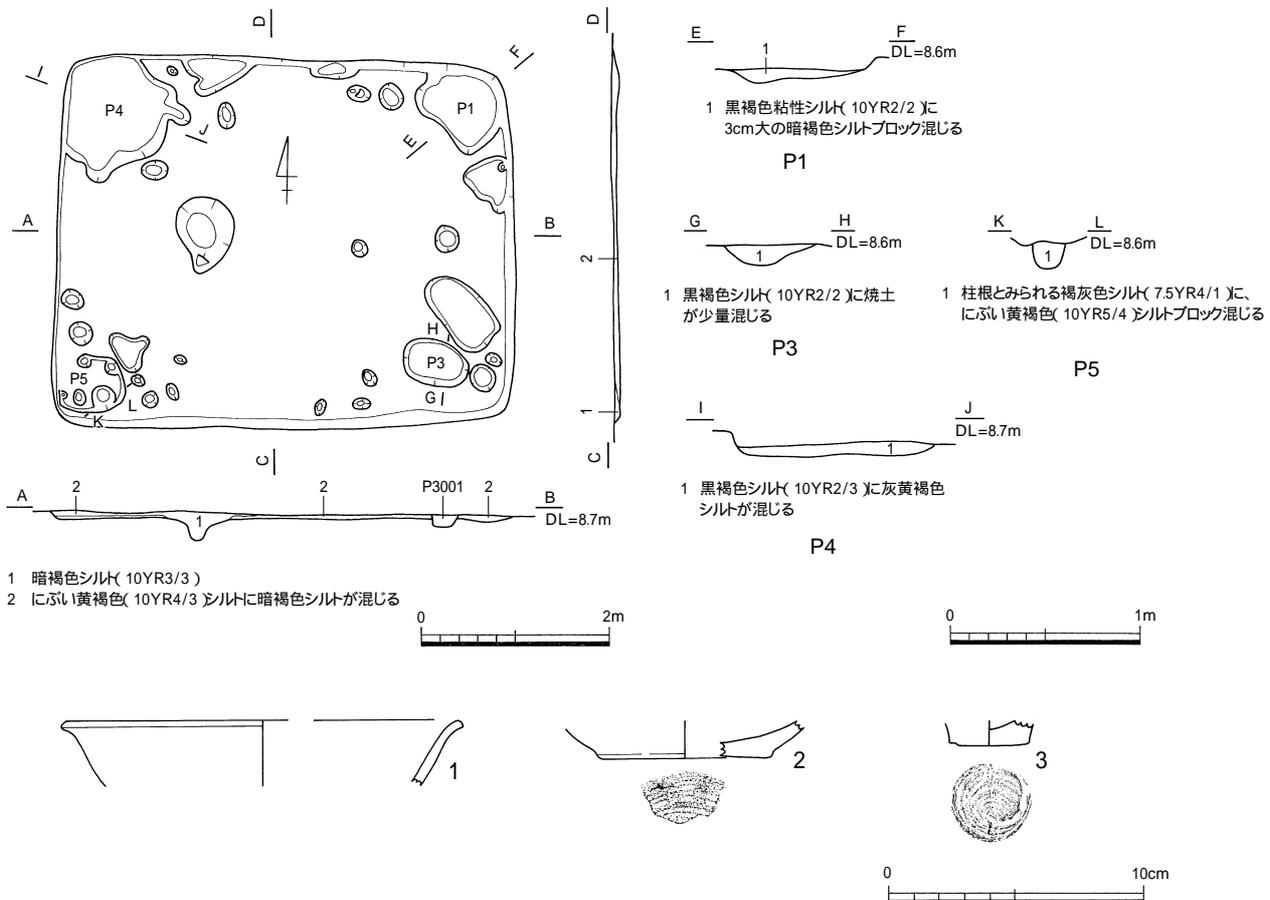
埋土；暗褐色シルト

ピット；数 7 主柱穴数 4？ 主柱穴 P1・3～5？

床面；1 又は 2 面

中央ピット；

壁溝；



N3 - 3 図 N3ST301

出土遺物；弥生土器、須恵器(甕)、土師器(椀)

所見；調査区北部で検出した遺構である。平面形からSTとしているが、性格は不明瞭である。非常に残存状態が悪く、検出面が遺構の基底面であった。埋土は暗褐色シルトで、一見すると弥生時代の埋土と色調が近似するが、出土遺物から古代の遺構とみられる。

主柱穴、炉跡など住居に伴う明確な遺構は確認できなかった。住居跡であるとすれば四隅に所在するP1・3～5が主柱穴である可能性が考えられるが、いずれも深さ10cm程度と浅く、主柱穴として機能したのか疑問が残る。ただしP3では基底面から更に柱痕とみられる掘り込みを確認した。埋土は褐灰色粘土質シルト主体で、本来あった柱根が腐植したものの可能性がある。

遺物は少量の出土にとどまる。主体を占めるのは土師器及び須恵器で、わずかにみられる弥生土器は混入とみられる。そのうち復元図示できたのは3点である。いずれも古代の椀で11世紀に比定される。1は赤彩で、3は柱状高台を持つ。

(2) 溝跡

調査区南半部で13条の溝跡を確認した。そのうち主体となるのがN3SD304～306・308・309の東西方向に延びる5条の溝跡である。また、これらの溝と接続する小溝が5条認められる(N3SD310～314)。溝跡の中には、壁面近くの基底面に交互に小ピット状の窪みがみられるものがある。これらの窪みは深さ3～4cmと浅く、平面プランは楕円形を呈するものが多い。護岸のための杭列などとは異なるようであるが、人為的なものか、とすればどのような機能を持つのかは不明である。また出土遺物の中には、他の溝の土器と接合する例がみられることから、これらの溝跡はほぼ同時期に機能していたものと考えられる。

N3-1表 N3区古代溝跡一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	接 続	時 期	備 考
N3SD304	(39.87)×0.98×0.45	-	逆台形	N-81°-E	N3SD310・311	古代	
N3SD305	(33.78)×1.3×0.34	-	逆台形	N-82°-E	N3SD314	8C後半～9C初頭?	
N3SD306	(23.55)×0.96×0.35	-	U字状	N-79°-E	-	古代	
N3SD308	(44.35)×0.73×0.47	-	U字状	N-89°-E	N3SD311	古代	
N3SD309	(35.3)×0.83×0.31	-	逆台形	N-87°-E	-	古代	
N3SD310	(25.1)×0.47×0.15	-	皿状	N-31°-E	-	古代?	
N3SD311	(7.77)×0.45×0.19	-	U字状	N-82°-E	N3SD304・308	古代	
N3SD312	(2.77)×0.48×0.10	-	U字状	N-88°-E	-	古代?	
N3SD313	(2.29)×0.34×0.09	-	U字状	N-53°-W	-	古代?	
N3SD314	(1.72)×(0.73)×0.17	-	U字状	N-53°-E	-	古代?	

N3SD304(N3-4図)

時期；古代 **方向**；N-81°E

規模；(39.87)×0.98m **深さ** 0.45m **断面形態**；逆台形

埋土；灰黄褐色・黄褐色シルト主体

床面標高；8.199～8.239m

接続；N3SD310・311

出土遺物；須恵器(杯?、甕)、弥生土器

所見；調査区南半部で検出した東西方向に延びる溝跡で、N3SD301～303に切られる。またN3SD310～313と接続するとみられる。溝跡は黒色シルト層を掘り込んで作られている。N3SD313は検出時にはN3SD305と接続するのを確認した。

遺物はほとんどが弥生土器胴部細片であるが、須恵器が若干認められる(1・3・4)。中には、平行に並んだ他の溝跡の遺物と接合する例がみられる。3・4は須恵器の高杯と甕で、いずれもN3SD305・309の遺物と接合した。

N3SD305(N3-4図)

時期；8C後半～9C初頭？ **方向**；N-82°E

規模；(33.78)×1.3m **深さ** 0.34m **断面形態**；逆台形

埋土；灰黄褐色シルト主体

床面標高；8.193～8.307m

接続；N3SD314

出土遺物；土師器(甕)、弥生土器

所見；調査区南半部で検出した、東西方向に延びる溝跡である。N3SD301～303に切られ、N3SD314と接続するとみられる。

遺物は比較的多く出土したが(2・3)、主体となるのは弥生土器胴部細片である。土師器は甕が出土した。その中には胎土に5mm大の石英、砂岩の角礫を含み、淡黄色の色調を持つ甕もみられる。これは具同中山遺跡群で類に分類した煮炊具の土器胎土に類すると考えられる。

N3SD306(N3-4図)

時期；古代 **方向**；N-79°E

規模；(23.55)×0.96m **深さ** 0.35m **断面形態**；U字状

埋土；灰黄褐色シルト主体

床面標高；8.299～8.365m

接続；

出土遺物；土師器、弥生土器

所見；調査区南半部で検出した溝跡である。N3SK301・302、N3SD303に切られる。基底面でピット1個を検出した。

出土遺物は5点にとどまる。いずれも胴部細片で、復元図示できるものはなかった。

N3SD308(N3-4図)

時期；古代 **方向**；N-89°E

規模；(44.35)×0.73m **深さ** 0.47m **断面形態**；U字状

埋土；灰黄褐色シルト主体

床面標高；8.268～8.323m

接続 ; N3SD311

出土遺物 ; 土師器、弥生土器

所見 ; 調査区南半部で検出した。N3SD301・302に切られ、N3SD311と接続するとみられる。溝の基底面では交互に小ピット状の窪みがあるのを確認した。これらの窪みは深さ3～4cmと浅く、平面プランは楕円形を呈するものが多い。埋土は溝の基底面のものと同色同質である。小ピット状の窪みは、調査区中央部で多くみられる。これらの性格は不明である。

遺物は土師器が少量と、弥生土器が出土した。これらは全て胴部細片のみのため、復元図示はできなかつた。

N3SD309(N3-4図)

時期 ; 古代 **方向** ; N-87°E

規模 ; (35.3)×0.83m **深さ** 0.31m **断面形態** ; 逆台形

埋土 ; 灰黄褐色シルト主体

床面標高 ; 8.282～8.407m

接続 ;

出土遺物 ; 須恵器(甕)、弥生土器

所見 ; 調査区中央部で検出した溝跡で、N3SD301・302に切られる。溝の西側では30cm以下の円礫が投げ込まれた状態でまとまって出土した。また溝の基底面では、交互に小ピット状の窪みが認められた。これらの窪みは深さ3～4cmと浅く、平面プランは楕円形を呈するものが多い。埋土は溝の基底面のものと同色同質である。これらの窪みが意図的に掘削されたものかは不明である。

遺物は少量の出土にとどまり、須恵器片、弥生土器が出土した。胴部細片が多く、復元図示できたのは須恵器の甕1点(4)である。これはN3SD304出土遺物と接合した。

N3SD311(N3-4図)

時期 ; 古代 **方向** ; N-82°E

規模 ; (7.77)×0.45m **深さ** 0.19m **断面形態** ; U字状

埋土 ; 灰黄褐色シルト主体

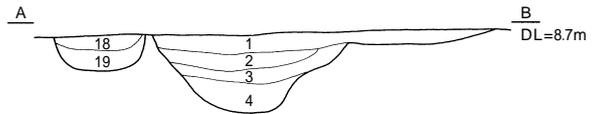
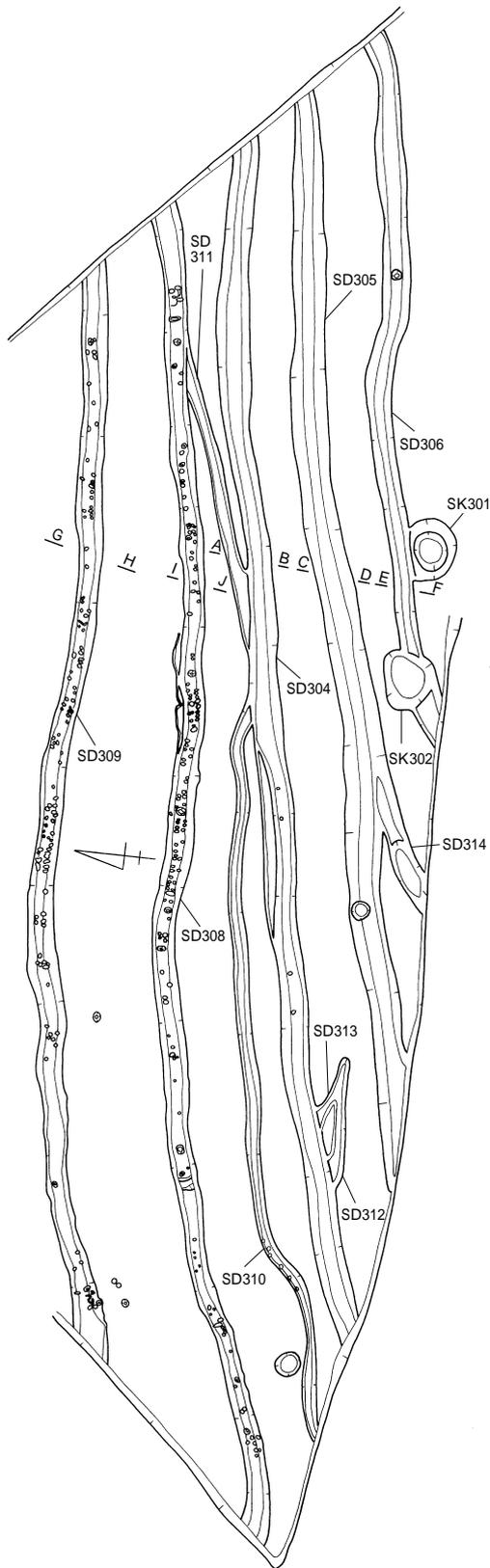
床面標高 ; 8.410m

接続 ; N3SD304・308

出土遺物 ; 土師器、弥生土器

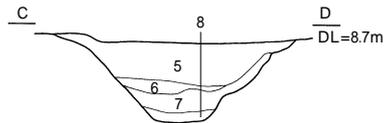
所見 ; 調査区南半部で検出した溝跡で、N3SD304・308と接続する。残存状態は悪い。

遺物は土師器、弥生土器の胴部片が出土した。いずれも細片のため、復元図示できるものはなかつた。



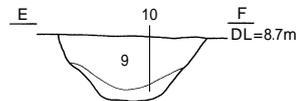
- 1 暗灰黄色シルト(2.5Y4/2)にぶい黄褐色シルト混じる
- 2 にぶい黄褐色シルト(10YR4/6)に暗灰黄色シルト混じる
- 3 暗灰黄色シルト(2.5Y4/2)にぶい黄褐色シルト混じる
- 4 にぶい黄褐色シルト(10YR4/6)に暗灰黄色シルト混じる
- 18 灰黄褐色シルト(10YR4/2)に黄褐色シルトわずかに混じる
- 19 灰黄褐色シルト(10YR4/2)にぶい黄褐色シルト混じる

N3SD304*311



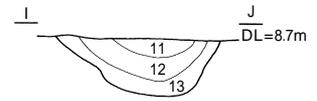
- 5 灰黄褐色シルト(10YR4/2)にオリーブ褐色シルト混じる
- 6 灰黄褐色シルト(10YR4/2)に黒褐色シルト混じる
- 7 にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)に黒褐色シルト混じる
- 8 にぶい黄褐色砂質シルト(10YR4/3)に黒褐色砂質シルト混じる

N3SD305



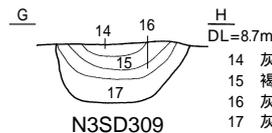
- 9 灰黄褐色シルト(10YR4/2)に黄褐色シルト混じる
- 10 暗褐色シルト(10YR3/3)に黄褐色シルト混じる

N3SD306



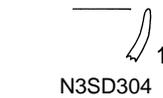
- 11 灰黄褐色シルト(10YR5/2)にぶい黄褐色シルト混じる
- 12 灰黄褐色シルト(10YR4/2)に褐色シルト混じる
- 13 灰黄褐色シルト(10YR4/2)に黒褐色・褐色シルト混じる

N3SD308

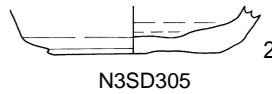


- 14 灰黄褐色シルト(10YR6/2)に灰白色シルト混じる
- 15 褐灰色粘土質シルト(10YR4/1)
- 16 灰黄褐色シルト(10YR5/2)にぶい黄褐色シルト混じる
- 17 灰黄褐色シルト(10YR4/2)にぶい黄褐色シルト混じる

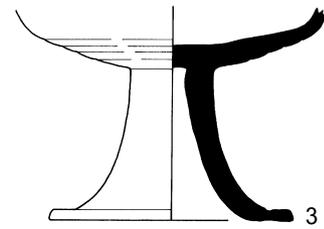
N3SD309



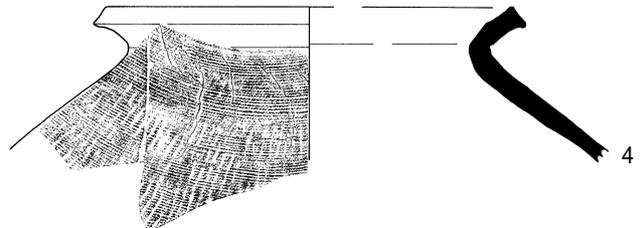
N3SD304



N3SD305



N3SD304*305



N3SD304*309



N3 - 4 図 N3SD304 ~ 306 • 308 • 309 • 311

3. N3区中世の遺構と遺物

(1) 溝跡

調査区東部では、東西方向の古代溝を切る溝跡3条(N3SD301～303)を確認した。3条の溝は南北方向に平行に配置されており、東西方向の溝とほぼ直交する。いずれの溝の埋土も黄褐色シルトが強いのが特徴である。遺物が出土しているのはN3SD302のみで、中世の土師質土器片が出土した。N3SD301・303からは遺物は出土していないが、古代の溝跡を切ること、埋土の色調及び主軸方向が一致することなどから、中世の遺構の可能性が高い。

N3-2表 N3区中世溝跡一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	接 続	時 期	備 考
N3SD301	13.1×0.59×0.18	-	U字状	N-9°-E	-	中世?	
N3SD302	12.4×0.49×0.13	-	U字状	N-10°-E	-	中世	
N3SD303	8.09×0.38×0.07	-	U字状	N-14°-E	-	中世?	

N3SD301(N3-5図)

時期；中世? **方向**；N-9°E

規模；13.1×0.59m **深さ** 0.18m **断面形態**；U字状

埋土；にぶい黄褐色シルトに黄褐色シルト混じる

床面標高；8.428～8.538m

接続；

出土遺物；

所見；調査区東部で検出した溝跡又は溝状土坑である。N3SD304・305・308・309・311を切る。非常に残存状態は悪い。遺物は出土しておらず、時期の特定は困難である。ただし古代の溝跡を切り、N3SD301・302と主軸方向が一致していることから、中世の遺構の可能性が高い。

N3SD302(N3-5図)

時期；中世 **方向**；N-10°E

規模；12.4×0.49m **深さ** 0.13m **断面形態**；U字状

埋土；褐灰色シルトに黄褐色・黒褐色シルト混じる

床面標高；8.435～8.602m

接続；

出土遺物；土師質土器、弥生土器

所見；調査区東部で検出した溝跡で、N3SD301の約3.5m東に所在する。N3SD304・305・308・309・311を切る。非常に残存状態は悪く、出土遺物は少量にとどまる。遺物は土師質土器片の他、混入とみられる弥生土器が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

N3SD303(N3-5図)

時期；中世？ 方向；N-14°E

規模；8.09×0.38m 深さ0.07m 断面形態；U字状

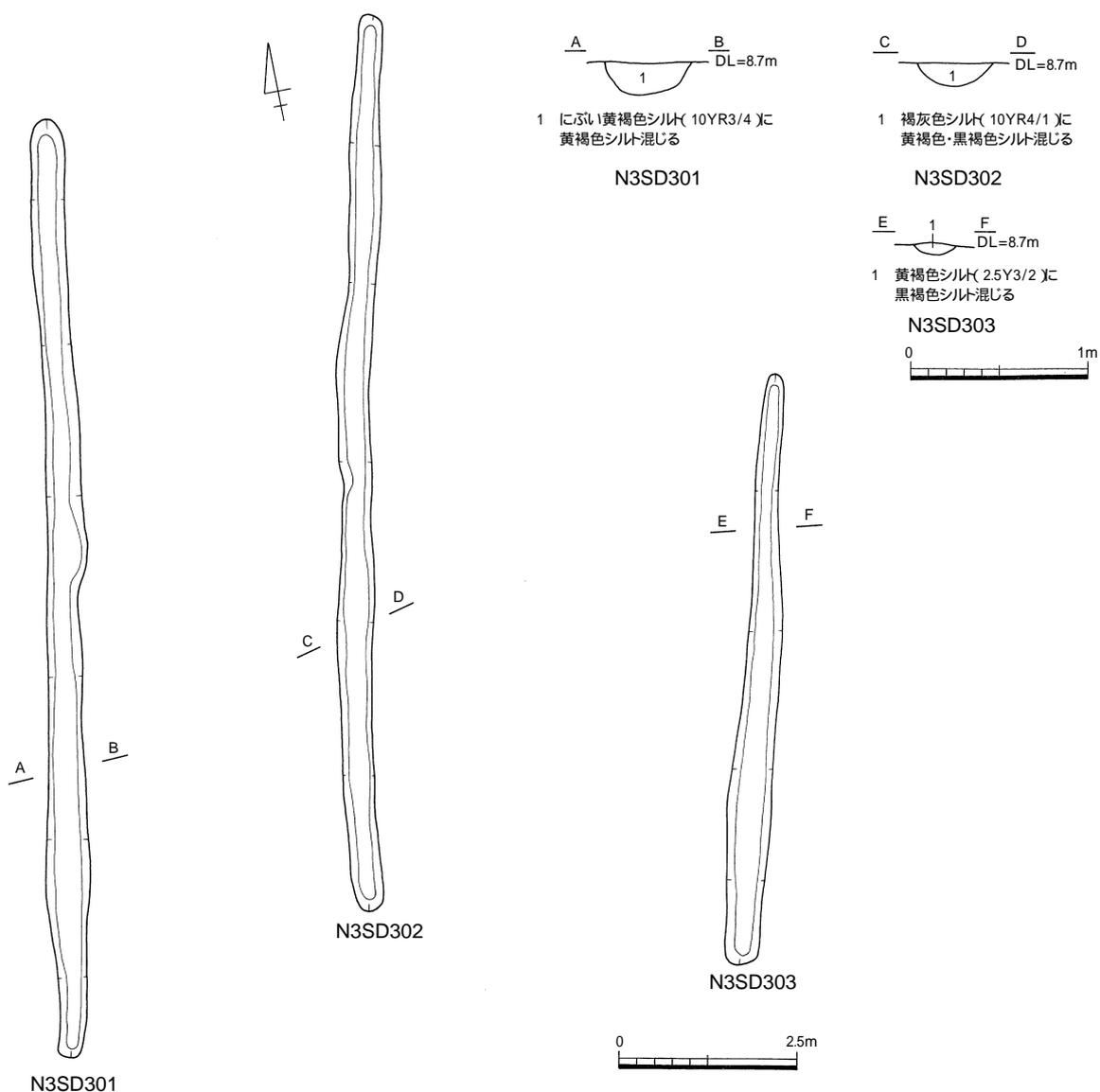
埋土；黄褐色シルトに黒褐色シルト混じる

床面標高；8.519～8.582m

接続；

出土遺物；

所見；調査区東部で検出した溝跡で、N3SD302の約5m東に平行に所在する。N3SD304～306を切る。非常に残存状態は悪く、深さ7cmを測る。遺物は出土しておらず、時期の特定は困難である。ただし古代の溝跡を切り、N3SD301・302と主軸方向が一致していることから、中世の遺構の可能性が高い。



N3 - 5図 N3SD301～303

4. N3区近世の遺構と遺物

(1) 土坑

N3区で検出した土坑は3基で、埋土及び出土遺物から全て近世の土坑と考えられる。

N3-3表 N3区近世土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
			長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					
N3SK301	円形	U字状	2.01	2.01	7	-	黒褐色シルト(2.5Y2/3)に3cm大のオリブ褐色・黒褐色シルトブロック入る。	SD306を切る	近世	
N3SK302	楕円形	逆台形	(2.00)	1.70	6	-	壁面に黄褐色土を貼り付ける。オリブ褐色シルト(2.5Y3/4)に暗オリブ褐色粘土質シルトがブロック状に入る。	SD306を切る	近世	ハンダ土坑
N3SK303	楕円形	皿状	1.36	0.55	8	N-83°-E	褐色シルト(10YR6/4)に褐灰色シルトブロック混じる	-	近世	

N3SK303(N3-3図)

時期；近世 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-83°E

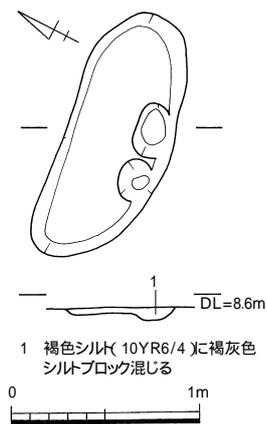
規模；1.36×0.55m **深さ** 8cm **断面形態**；皿状

埋土；褐色シルト主体

付属遺構； **機能**；

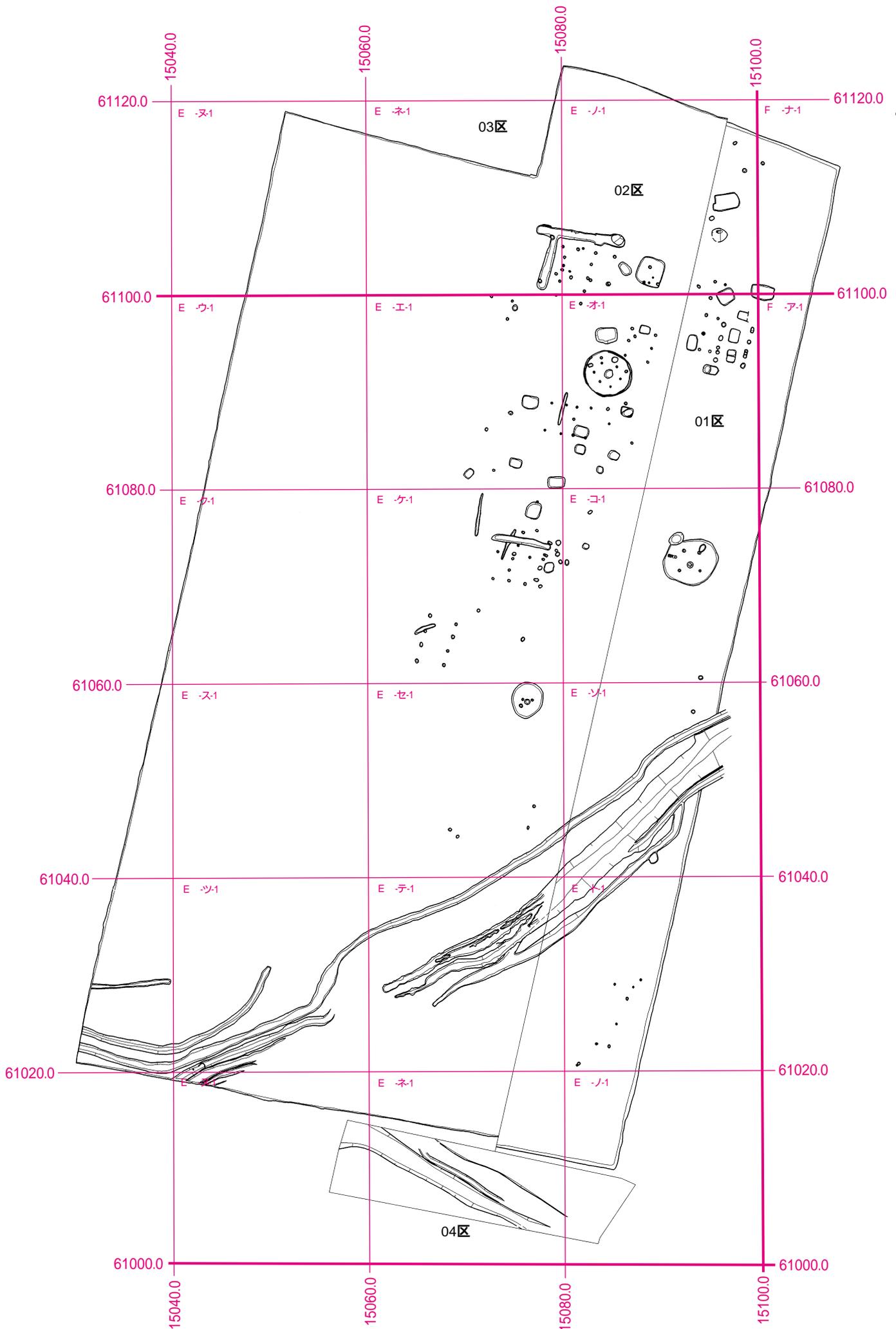
出土遺物；須恵器、磁器

所見；調査区東端部で検出した土坑である。非常に残存状態が悪く、深さ8cmを測る。基底面で2個のピットを検出した。出土遺物は2点である。細片のため復元図示できるものはなかった。



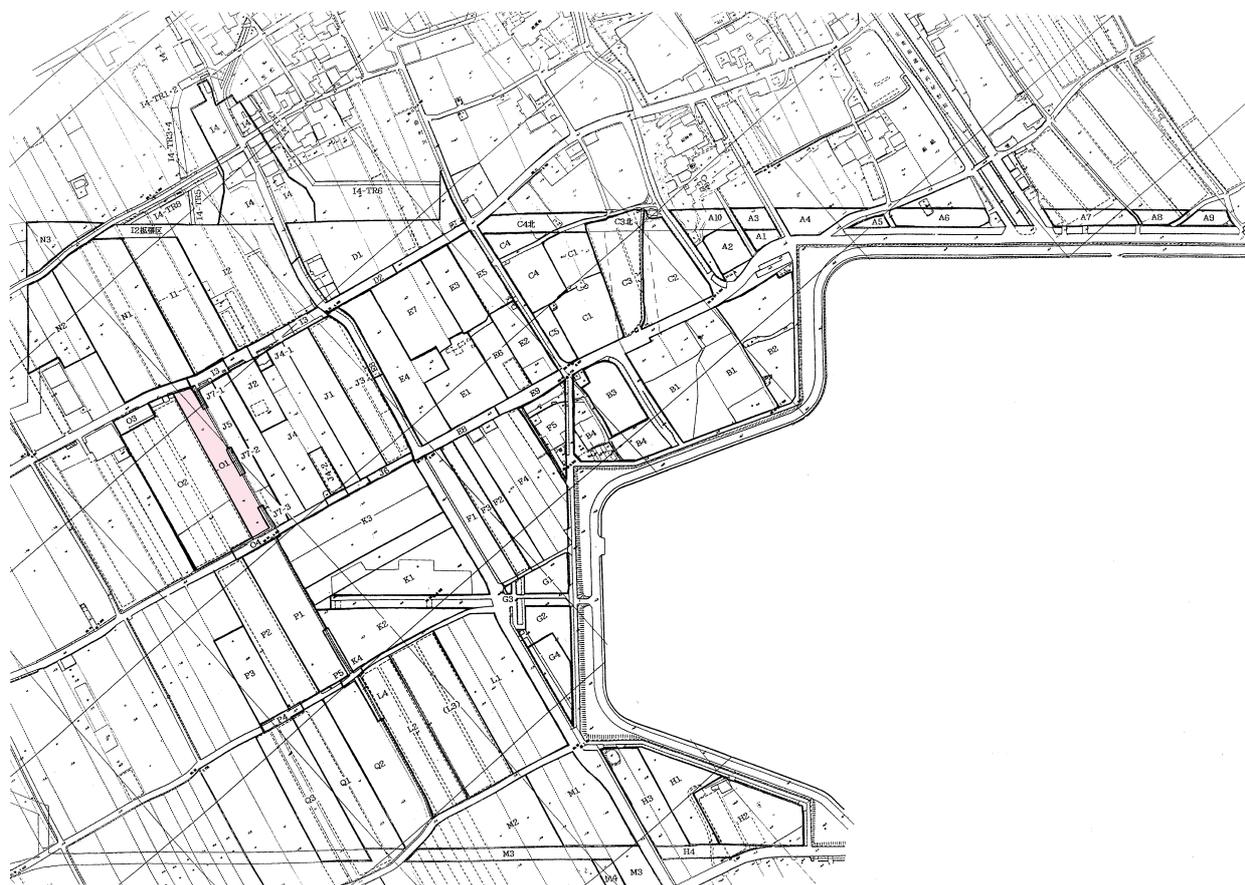
N3 - 6 図 N3SK303

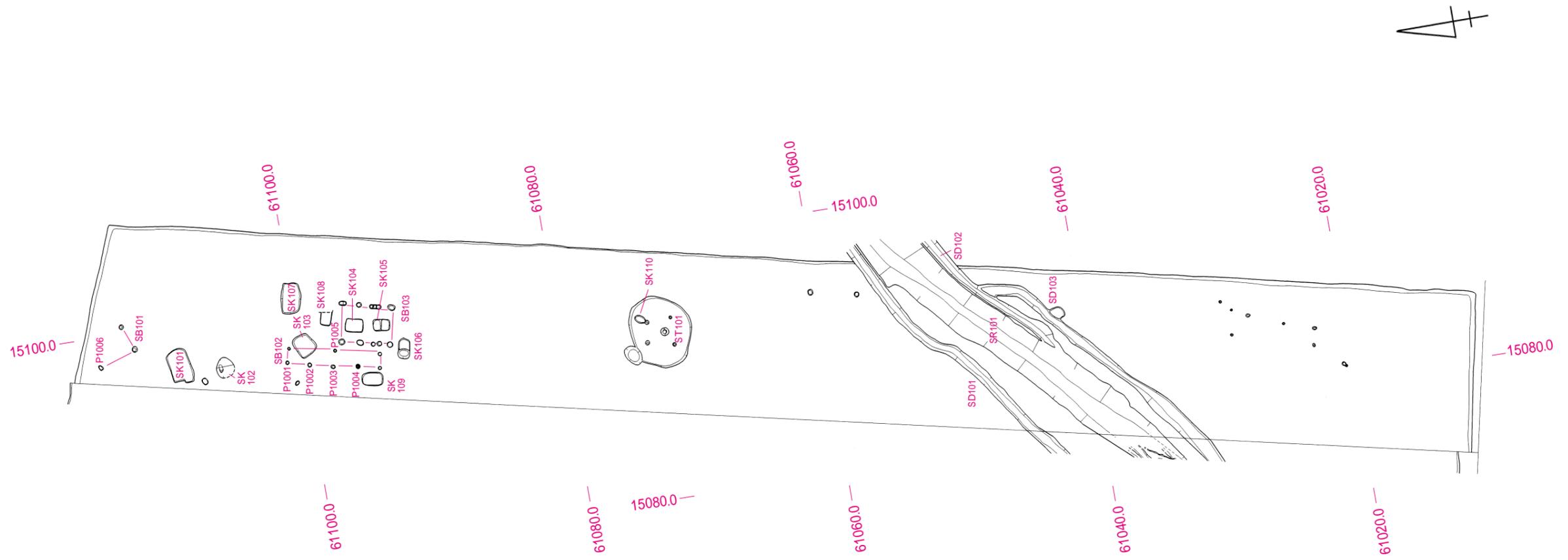
〇区の調査



○ - 1 図 ○区遺構全体配置図(S=1/500)

01 区の調査





O1 - 1 图 O1 区遺構全体配置図(S=1/250)

1. O1区の概要

概要

O1区(O1-1図)は今次調査の中で、水路部分(J7区)を挟んでJ5区とO2区の間位置し、北側に道路部分を挟んでN1区と境を接する調査区である。基盤層は北からシルト層、礫層、黒色粘土層であり、地形的には南西部の標高が低く、J区から続く大溝が北東方向から南西方向にかけて調査区を横断し、O2区に至っている。北側のシルト層・礫層の微高地に於て検出している遺構群が、N・O区を中心に展開している弥生時代中期末～後期頃と考えられる集落の西側に位置していると考えられる。

調査担当者 吉成承三、三橋麻里

執筆担当者 宮地啓介

調査期間 平成9年11月25日～平成9年12月19日

調査面積 1,278m²

時代 弥生時代中期末～後期、古代？

検出遺構 弥生時代 竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡3棟、土坑10基、大溝1条、ピット33個
古代 溝3条？

2. O1区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

本調査区に於て竪穴住居跡は1軒を検出している。調査区南側に位置する大溝より北側の礫層の帯状堆積地から検出し、隣接するJ5・O2区に於ても竪穴住居跡を検出している。集落の南西部に位置すると考えられるが、周辺の遺構密度はやや低く、時期は弥生時代後期頃に下ると考えられる。

O1-1表 O1区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(m ²)	平面形	主軸方向	時期	備考
O1ST101	5.64 × 4.73	0.22	21.0	楕円形	-	弥生V	焼失住居跡の可能性

O1ST101(O1-2図)

時期；弥生 **形状**；楕円形 **主軸方向**；

規模；5.64 × 4.73m **深さ** 0.22m **面積** 21.0m²

埋土；暗褐色粘土質シルト

ピット数；4 **主柱穴数**；4 **主柱穴**；P1～4

床面；1面 **貼床**； **焼失**；？

中央ピット；円形 **規模** 50 × 40cm **深さ** 15cm **埋土** 暗褐色粘土質シルト？

壁溝； **幅** **深さ**

出土遺物；弥生土器(口縁部3点、底部2点、細片約50点)

所見；調査区E -コ-8・9・13・14グリッドに位置し、礫層の帯状堆積地から検出している中型の竪穴住居跡である。平面形態は歪な楕円形状を呈しており、北西端の一部は攪乱され、上面は削平を受けている可能性が考えられる。

主柱穴と考えられるのはP1～4で、径約25～42cm、それぞれ約51・52・46・50cmの深さを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトと考えられ、遺物は出土していない。埋土中及び床面から炭化材を含む焼土・炭化物を多く確認しており、焼失住居跡の可能性を含んでいる。中央ピットはやや楕円形に近い円形状を呈し、焼土・炭化物等は確認していないが、炉跡である可能性が高い。埋土は暗褐色粘土質シルトと考えられ、遺物は出土していない。壁溝は確認していない。その他の遺構として北東側に長径約0.9m、短径約0.6m、深さ約10cmを測る土坑(SK110)を検出している。埋土は暗褐色粘土質シルトで、炭化物を確認している。遺物は口縁部を含む弥生土器片が約10点程出土している。図示したものは弥生 期頃と考えられる壺(1)の口縁部である。遺物から弥生 期頃の遺構と考えられ、竪穴住居跡に伴う遺構である可能性が高い。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から弥生 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 期頃と考えられる壺(1)、鉢(4)の口縁部・底部である。他に何かに用いたと考えられる約30cm位の方形の扁平な礫(5)を、床面から数cm程浮いた状態で検出している。

O1SB101(O1-3図)

時期；弥生 ~ ? **棟方向**；N-68°E

規模；梁間1×桁行1 ~ 梁間3.0m×桁行2.4~m **面積**7.2~m²

柱間寸法；梁間3.0m 桁行2.4m

柱穴数；(3) **柱穴形**；円形

性格；掘立柱建物跡 **付属施設**；

出土遺物；弥生土器 P1006(細片7点)

所見；調査区E -ノ-10、F -ナ-6グリッドに位置する掘立柱建物跡と考えられる遺構である。北端は調査区外にかかり未検出であるが、棟方向は東西方向であると考えられる。柱穴の規模は径約38~50cm、深さ約25~38cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、遺物はP1006から弥生土器の細片が出土している。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

O1SB102(O1-3図)

時期；弥生 ~ ? **棟方向**；N-13°E

規模；梁間1×桁行2~4 梁間1.1m×桁行7.1m **面積**7.8m²

柱間寸法；梁間1.1m 桁行1.7~3.5m

柱穴数；8 **柱穴形**；円形

性格；掘立柱建物跡? **付属施設**；

出土遺物；なし

所見；調査区E -ノ-24・25、E -オ-4・5・9グリッドに位置する掘立柱建物跡の可能性が考えられる遺構である。棟方向は南北方向である。東側に棟方向を同じくするSB103を検出しているが、規模等が異なり関連性は不明である。また位置的に重複しているSK103との前後関係も不明である。柱穴の規模は径約22~35cm、深さ約20~39cmを測る。埋土は暗灰褐色粘土質シルト又は砂質シルトであり、西側の柱穴列からはっきりとした柱痕を確認している。遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

O1SB103(O1-3図)

時期；弥生 **棟方向**；N-13°E

規模；梁間1×桁行3~4 梁間3.0m×桁行3.8m **面積**11.4m²

柱間寸法；梁間3.0m 桁行0.5~1.4m

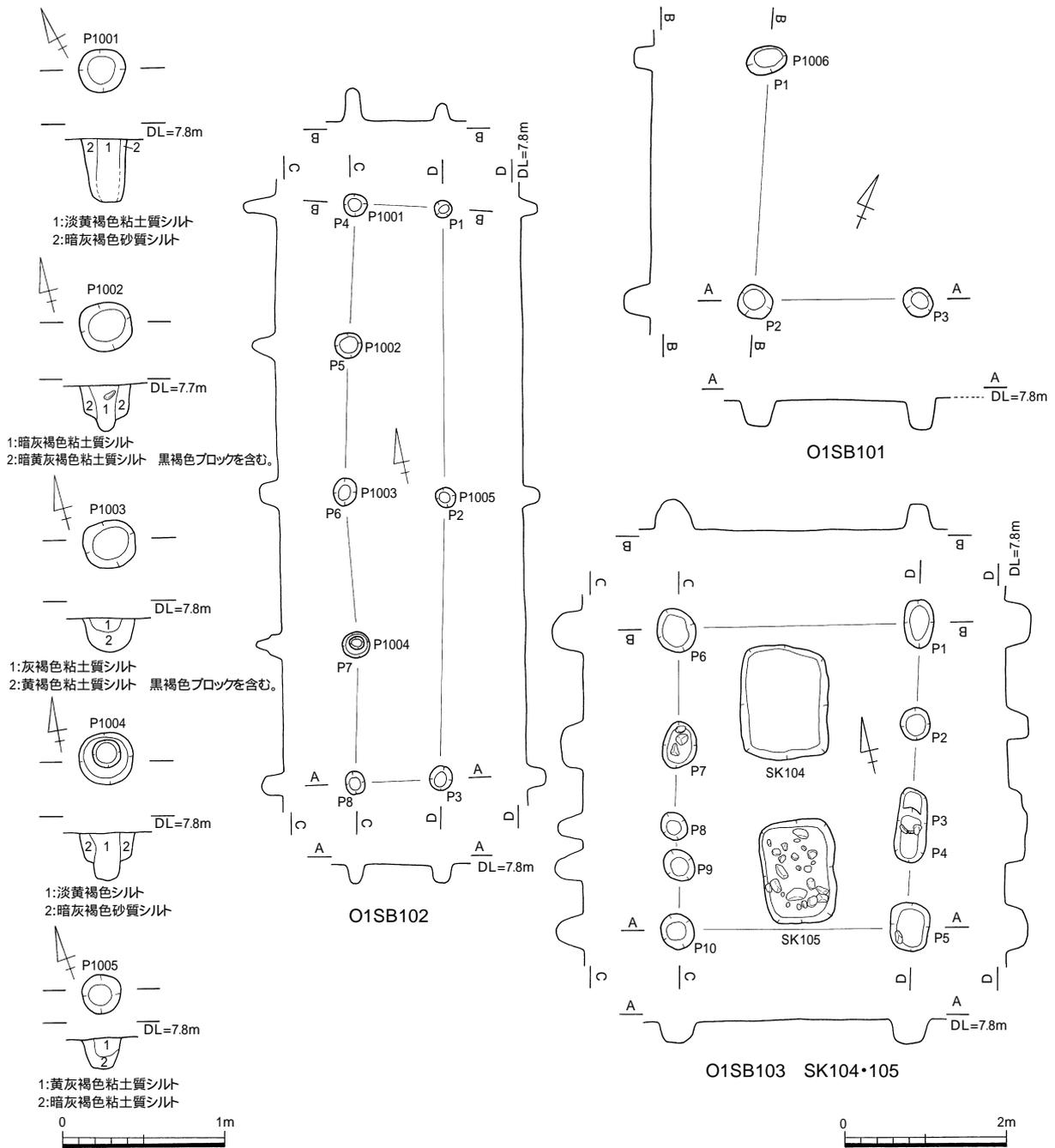
柱穴数；10 **柱穴形**；円形

性格；掘立柱建物跡 **付属施設**；SK104・105

出土遺物；なし

所見；調査区E -オ-5・9・10グリッドに位置し、土坑(SK104・105)を伴う掘立柱建物跡と考えられる遺構である。棟方向は南北方向である。西側に棟方向を同じくするSB102を検出しているが、

規模等が異なり関連性は不明である。柱穴の規模は径約34～60cm、深さ約23～37cmを測る。SK104を伴う掘立柱建物跡を構成すると考えられるのはP1・2・4・6・7・9である。南側の桁行の柱間寸法が等間隔ではないのは、SK105を伴うにあたって拡張・建て替え等が行なわれた可能性が考えられる。埋土は暗褐色粘土質シルトである。遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、付属遺構(SK104・105)などから弥生 期頃の遺構と考えられる。



O1 - 3 図 O1SB101 ~ 103 SK104(1)・105(1)

(3) 土坑

本調査区に於て土坑は10基を検出している。ST101に伴う可能性が考えられるSK110を除いて何れも調査区南側に位置する大溝より北側のシルト層堆積地から検出しており、平面形態は長方形状を呈した土坑を多く検出している。掘立柱建物跡に伴うと考えられる土坑(SK104・105)からは弥生時代中期末(様式)頃と考えられる遺物を出土しており、弥生時代中期末～後期頃と考えられる集落の比較的早い段階に存在していた可能性が考えられる。

O1-3表 O1区土坑一覧

遺構番号	平面形	断面形	規模			主軸方向	埋 土	切合関係	時 期	備 考
			長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					
O1SK101	長方形	逆台形	2.52～2.76	1.63	15.0	N-81°E	褐色粘土質シルト・他 / 2層	不明	弥生 ~ ?	
O1SK102	不整形	皿状	[1.56]	1.41	16.0	N-89°E	褐色粘土質シルト / 1層		弥生 ~	
O1SK103	隅丸方形	逆台形	1.71	1.49	22.0	N-64°E	褐色粘土質シルト・暗褐色粘土質シルト / 3層		弥生 ~ ?	
O1SK104	長方形	箱形	1.41	1.07	31.0	N-7°E	暗褐色粘土質シルト / 2層		弥生	
O1SK105	長方形	箱形	1.26	0.86	36.0	N-12°E	暗褐色粘土質シルト / 4層		弥生	
O1SK106	不整形	箱形	1.58	0.83	20.0～30.0	N-75°W	暗褐色粘土質シルト / 1層		弥生 ~	
O1SK107	長方形	箱形	2.36	1.54	22.0～29.0	N-75°W	暗褐色粘土質シルト / 2層		弥生 ~ ?	
O1SK108	長方形	箱形	[1.01]	0.82	22.0	N-74°W	暗褐色粘土質シルト / 1層		弥生 ~ ?	
O1SK109	隅丸方形	箱形	1.61	1.03	38.0	N-9°E	暗褐色粘土質シルト / 1層		弥生 ~ ?	
O1SK110	楕円形	皿状	0.88	0.60	10.0	N-44°E	暗褐色粘土質シルト / 1層	ST101P1	弥生	ST101に伴う可能性

O1SK101(O1-4図)

時期；弥生 ~ ? **形状**；長方形 **主軸方向**；N-81°E

規模；2.52～2.76×1.63m **深さ** 0.15m **断面形態**；逆台形

埋土；褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；弥生土器(細片約30点)、石器(砥石1点)

所見；調査区E -ノ-14・15グリッドに位置する土坑である。西側に僅かながら段部を有し、その形状から切り合い関係も考えられたが、セクション図等では確認できなかった。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。図示したものは高杯(1)と考えられる脚部である。東側の壁際から研磨面を下にした状態で、側面にも明瞭な研磨面が認められる長方形状を呈した砥石(2)が出土しており、作業場的な機能を持つ土坑の可能性が考えられる。

O1SK102(O1-4図)

時期；弥生 ~ 形状；不整形 主軸方向；N-89°E

規模；(1.56)×1.41m 深さ0.16m 断面形態；皿状

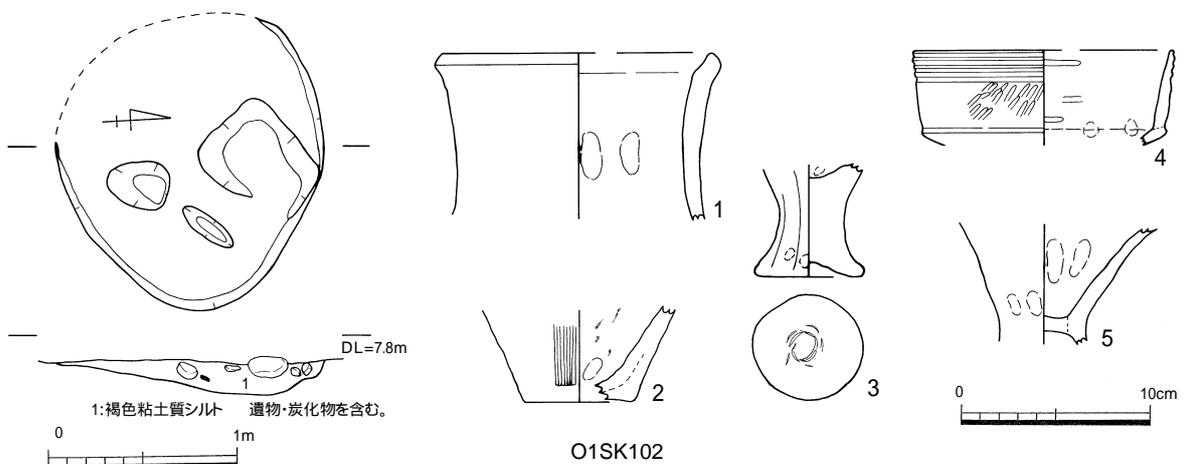
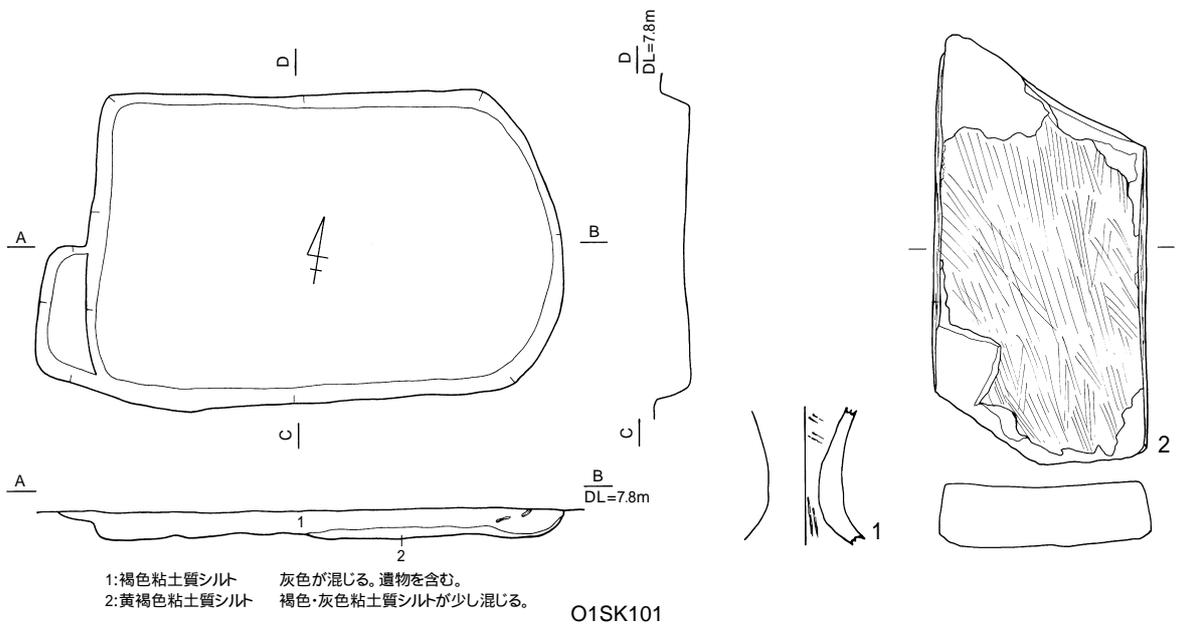
埋土；褐色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部3点、底部2点、細片約110点)

所見；調査区E -ノ-19・20グリッドに位置する土坑である。平面形態は不整形状を呈し、西側は不明瞭である。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、約20cm位の礫に混じって検出面上及び直下である程度の出土状況を確認できた。櫛描直線文の下に列点文を施した土器片等が出土し、遺物から弥生 ~ 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 ~ 期頃と考えられる壺(1)、高杯(4・5)の口縁部・底部などである。



O1 - 4 図 O1SK101・102

O1SK103(O1-5図)

時期；弥生 ~ ? 形状；隅丸方形 主軸方向；N-64°E

規模；1.71×1.49m 深さ0.22m 断面形態；逆台形

埋土；暗褐色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部1点)

所見；調査区E -ノ-24・25、E -オ-4・5グリッドに位置する土坑である。位置的に重複しているSB102との前後関係は不明である。

出土した遺物は弥生土器の口縁部が1点のみである。時期を判断する遺物が僅少であったが、口縁部は端部を下方に拡張して1条の凹線文を配しており、また周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

O1SK104(O1-3・5・6図)

時期；弥生 形状；長方形 主軸方向；N-7°E

規模；1.41×1.07m 深さ0.31m 断面形態；箱形

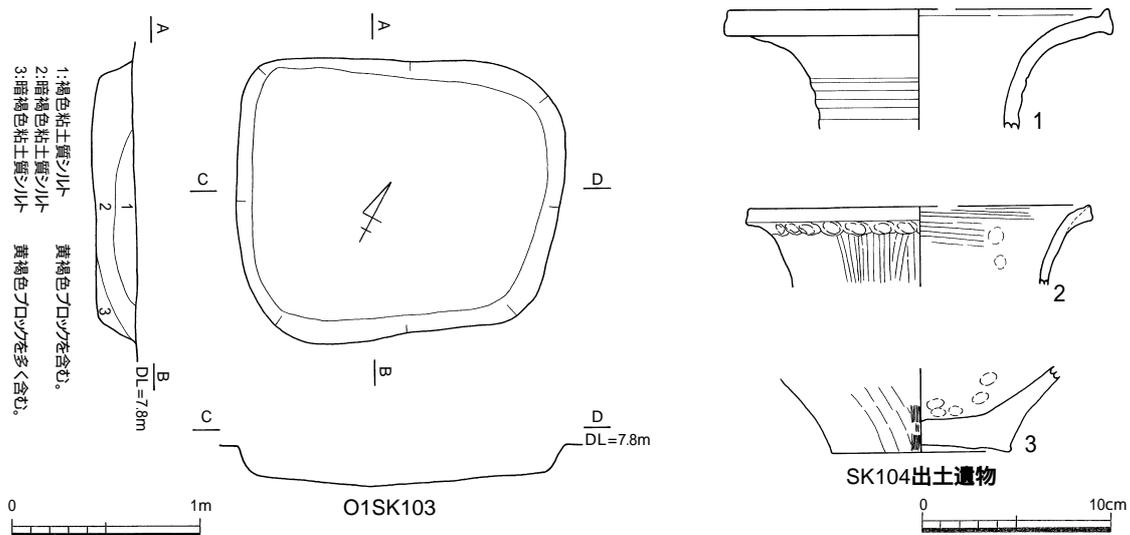
埋土；暗褐色粘土質シルト

付属遺構；SB103 機能；不明

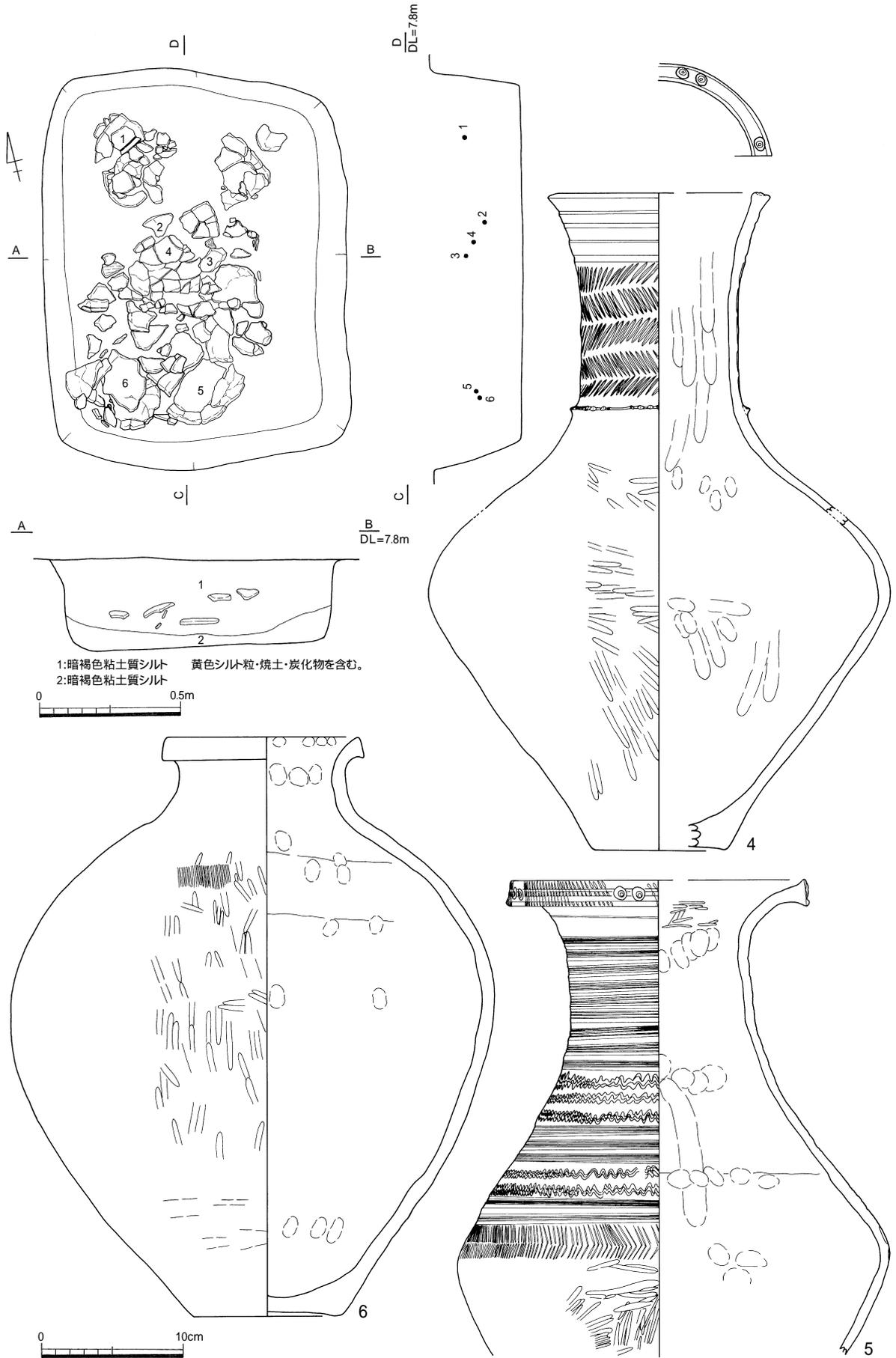
出土遺物；弥生土器(口縁部10点、底部11点、細片約720点)

所見；調査区E -オ-5・10グリッドに位置し、SB103に伴うと考えられる土坑である。南側に位置するSK105も同様の形態の土坑と考えられる。

遺物の大半は埋土1層目からの出土であり、出土状況を確認できた。遺物から弥生 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 期頃と考えられる壺(1~6)の口縁部・底部であり、個体分がある程度の纏まりを保ちながら、土坑内に散布・重複している状態で出土している。



O1-5図 O1SK103・104(2)



O1 - 6 図 O1SK104(3)

O1SK105(O1-3・7図)

時期；弥生 形状；長方形 主軸方向；N-12°E

規模；1.26×0.86m 深さ0.36m 断面形態；箱形

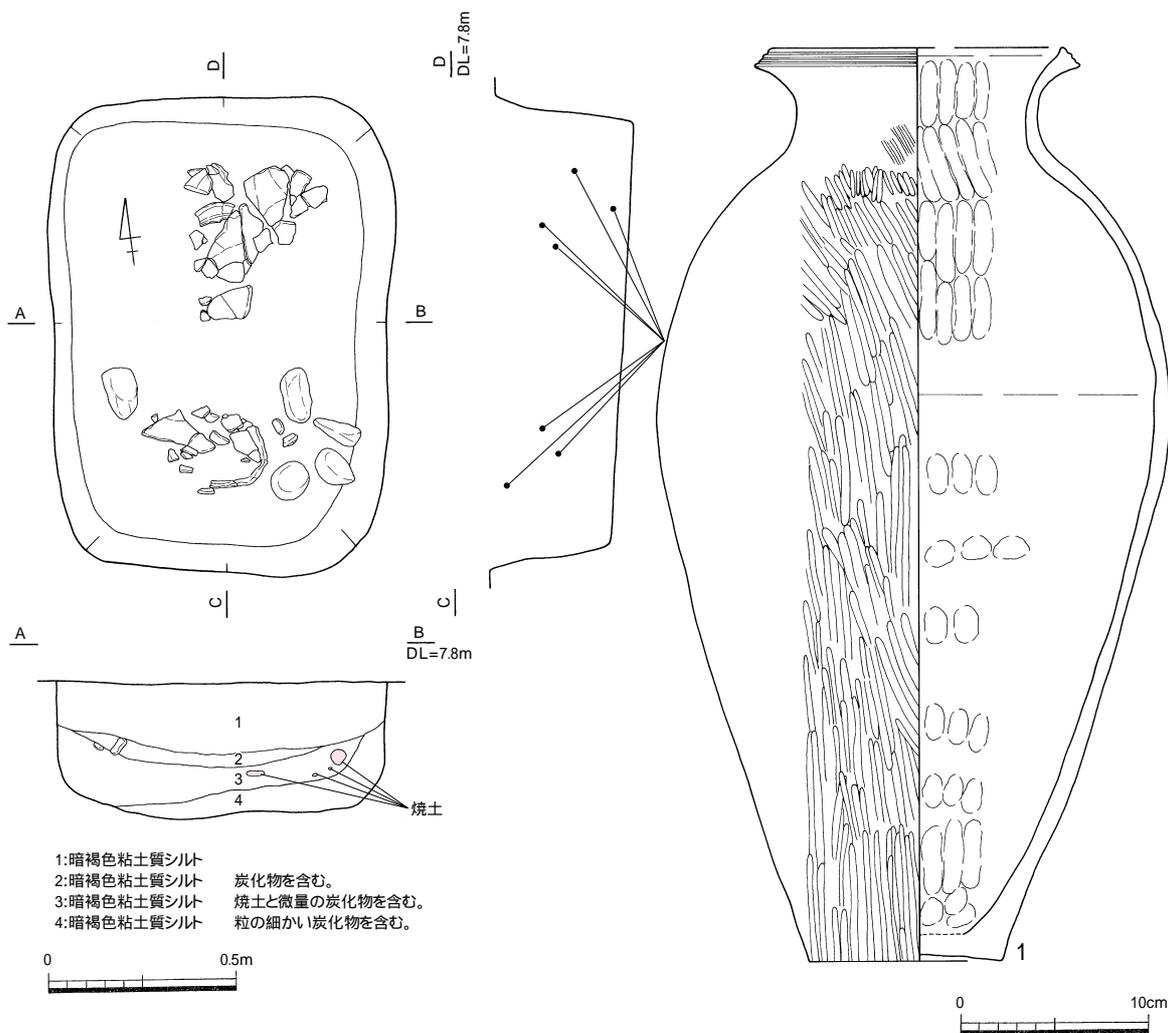
埋土；暗褐色粘土質シルト

付属遺構；SB103 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部1点、底部1点、細片約150点)

所見；調査区E -オ-10グリッドに位置し、SB103に伴うと考えられる土坑である。北側に位置するSK104も同様の形態の土坑と考えられる。様式的な時期差は見られないものの、掘立柱建物跡の桁行の柱間寸法が等間隔ではない部分があり、位置関係から本遺構に伴う拡張・建て替え等の可能性が考えられる。下層(埋土2~4層目)から焼土・炭化物を確認している。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、出土状況を確認できた。遺物から弥生 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 期頃と考えられるほぼ完形の壺(1)であり、土坑内の広範囲から土器片が出土している。またSK104から胴部の一部が出土している。



O1 - 7 図 O1SK105(2)

O1SK106(O1-8図)

時期；弥生 ~ 形状；不整形 主軸方向；N-75°W

規模；1.58×0.83m 深さ0.20~0.30m 断面形態；箱形

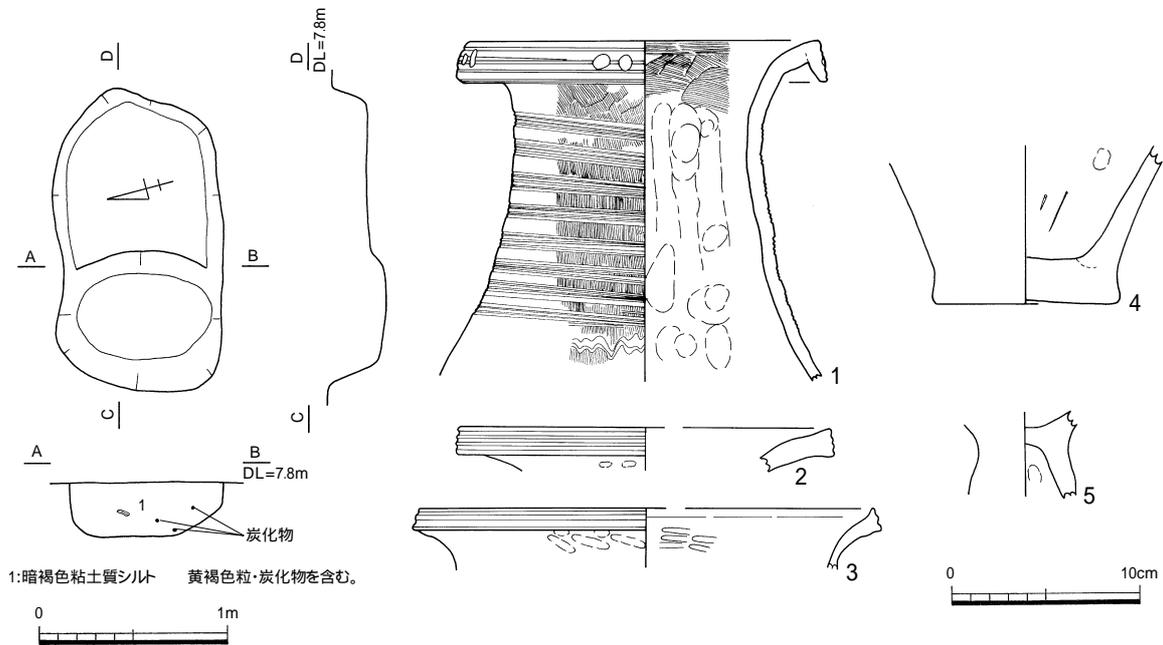
埋土；暗褐色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部1点、細片約20点)

所見；調査区E -オ-9・14グリッドに位置する土坑である。やや不自然な平面形態を呈し、西側の床面に落ち込みを有しているなど、2つの土坑による切り合いの可能性を含んでいる。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から弥生 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 ~ 期頃と考えられる壺(1~3)の口縁部・底部などであり、1は西側から出土している。



O1-8図 O1SK106

O1SK107(O1-9図)

時期；弥生 ~ ? 形状；長方形 主軸方向；N-75°W

規模；2.36×1.54m 深さ0.22~0.29m 断面形態；箱形

埋土；暗褐色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；なし

所見；調査区E -ノ-25、E -オ-5、F -ナ-21、F -ア-1グリッドに位置する土坑である。一部が試掘坑により削平を受けている。

比較的しっかりとした掘方の遺構でありながら遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

O1SK109(O1-9図)

時期；弥生 ~ ? 形状；隅丸方形 主軸方向；N-9°E

規模；1.61×1.03m 深さ 0.38m 断面形態；箱形

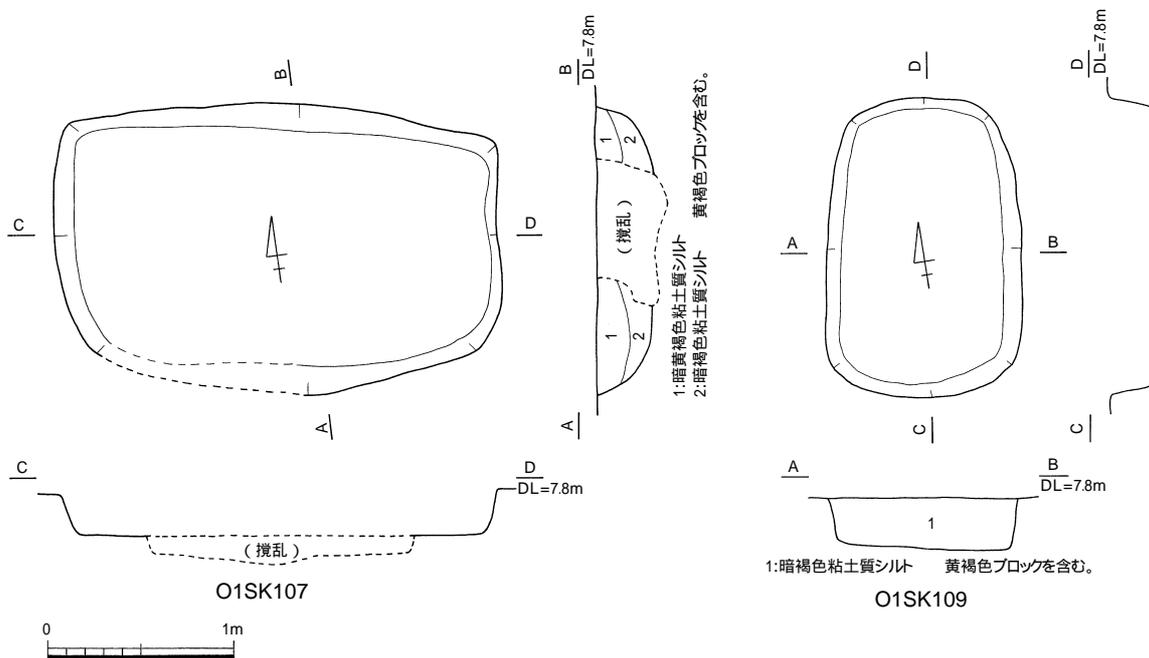
埋土；暗褐色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；なし

所見；調査区E -オ-9グリッドに位置する土坑である。

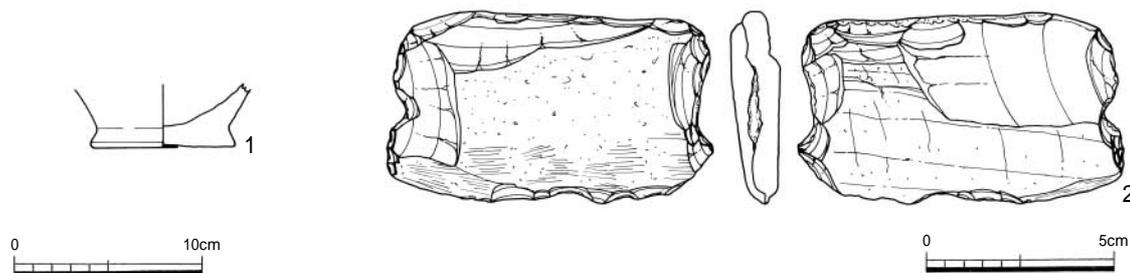
比較的しっかりとした掘方の遺構でありながら遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。



O1 - 9 図 O1SK107・109

(4) 包含層出土遺物

本調査区に於て包含層出土遺物は、大溝周辺から弥生時代中期末～後期頃を中心に口縁部10点、底部6点程が出土している。口縁部に凹線文を施す土器片は殆ど確認できず、多くはヨコナデにより面状を成している。図示したものは大溝周辺から出土した底部(1)と礫層の帯状堆積地の遺構検出面から出土した石包丁(2)である。



O1 - 10 図 O1区包含層出土遺物

2. O1区古代の遺構と遺物

(1) 溝跡

本調査区に於て古代の溝跡は3条を検出している。時期を判断する遺物が僅少であったが、埋土の状態や弥生時代後期中葉頃まで存在していたと考えられる大溝の上面から検出していることなどから、古代の溝跡の可能性が考えられる。また接続する可能性が考えられるJ5・O2区に於ても同様の溝状遺構を検出している。尚、O1-11図に図示している遺構平面図は完掘状態であり、調査区西壁の断面図により大溝を切っている状態が確認できる。(大溝については別分冊で取り上げている。)

O1-4表 O1区古代溝一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	接続	時期	備考
O1SD101	18.25×0.75～0.90×0.30～0.45	-	U字状	N-54°-E	O2SD201	古代?	
O1SD102	20.30×0.70×0.25～0.50	-	U字状	N-50°-E	O2SD207	古代?	
O1SD103	[13.00]×0.75×0.12	-	皿状	N-48°-E	O2SD206	古代?	

O1SD101(O1-11図)

時期; 弥生 ~ ? 方向; N-54°E

規模; 18.25×0.75～0.90m 深さ 0.30～0.45m 断面形態; U字状

埋土; 灰褐色シルト

床面標高; 東端 7.380m、西端 7.367m

接続; O2SD201

出土遺物; 弥生土器(口縁部6点、底部1点、細片12点)

所見; 調査区E -ソ-4・8・9・12・13・16・17グリッドに位置し、西端をO2SD201に接続すると考えられる溝である。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から弥生 ~ 期頃の遺構と考えられるが、埋土の状態やO2区に於て大溝の上面から検出しているなど、時期については古代にまで下る可能性を含んでいる。図示したものは弥生 ~ 期頃と考えられる壺(1)の口縁部と高杯(2)の脚部である。

O1SD102(O1-11図)

時期; 古代? 方向; N-50°E

規模; 20.30×0.70m 深さ 0.25～0.50m 断面形態; U字状

埋土; 明灰褐色シルト

床面標高; 東端 7.322m、西端 7.060m

接続; O2SD207

出土遺物; 須恵器(口縁部1点)?、弥生土器(口縁部1点)?、石器(石鏃2点)

所見; 調査区E -ソ-14・18・19・21・22・23、テ-5、ト-1グリッドに位置し、SR101の上面を切

り、西端をO2SD207に接続すると考えられる溝である。

出土した遺物は埋土中のものである。遺物から時期を判断することは困難であったが、埋土の状態などから古代の遺構の可能性が考えられる。図示したものは石鏃(1・2)である。

O1SD103(O1-11図)

時期；古代？ **方向**；N-48°E

規模；(13.00)×0.75m **深さ** 0.12m **断面形態**；皿状

埋土；明褐色シルト

床面標高；東端 7.516m、西端 7.440m

接続；O2SD206

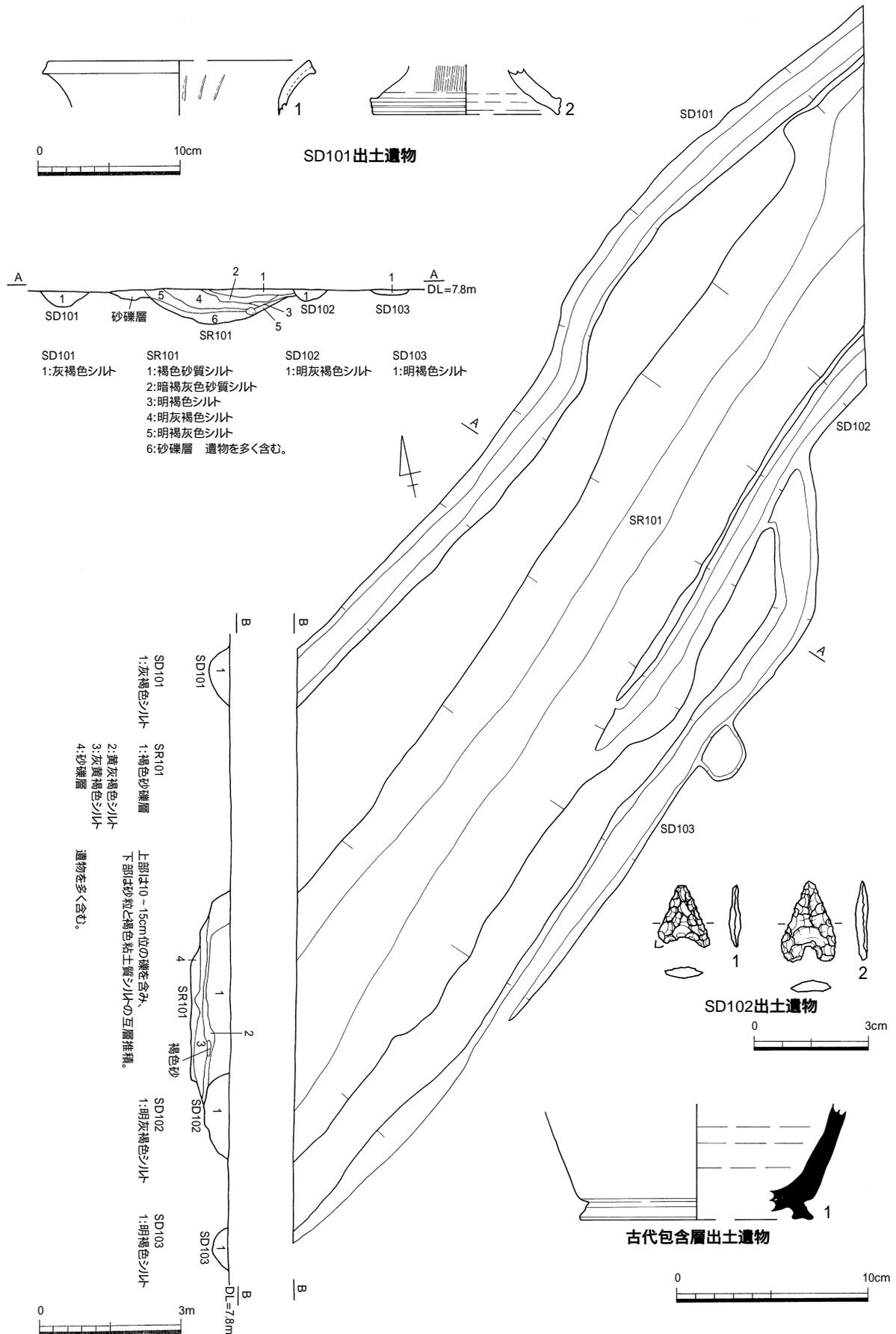
出土遺物；須恵器(口縁部1点)？、弥生土器(口縁部1点)？

所見；調査区E -ソ-18・19・22・23、テ-10・11、ト-1・2グリッドに位置し、SD102と切り合い、西端をO2SD206に接続すると考えられる溝である。SD102との関連性は不明であるが、切り合い部分で検出を終えている。

出土した遺物は埋土中のものである。遺物から時期を判断することは困難であったが、埋土の状態などから古代の遺構の可能性が考えられる。

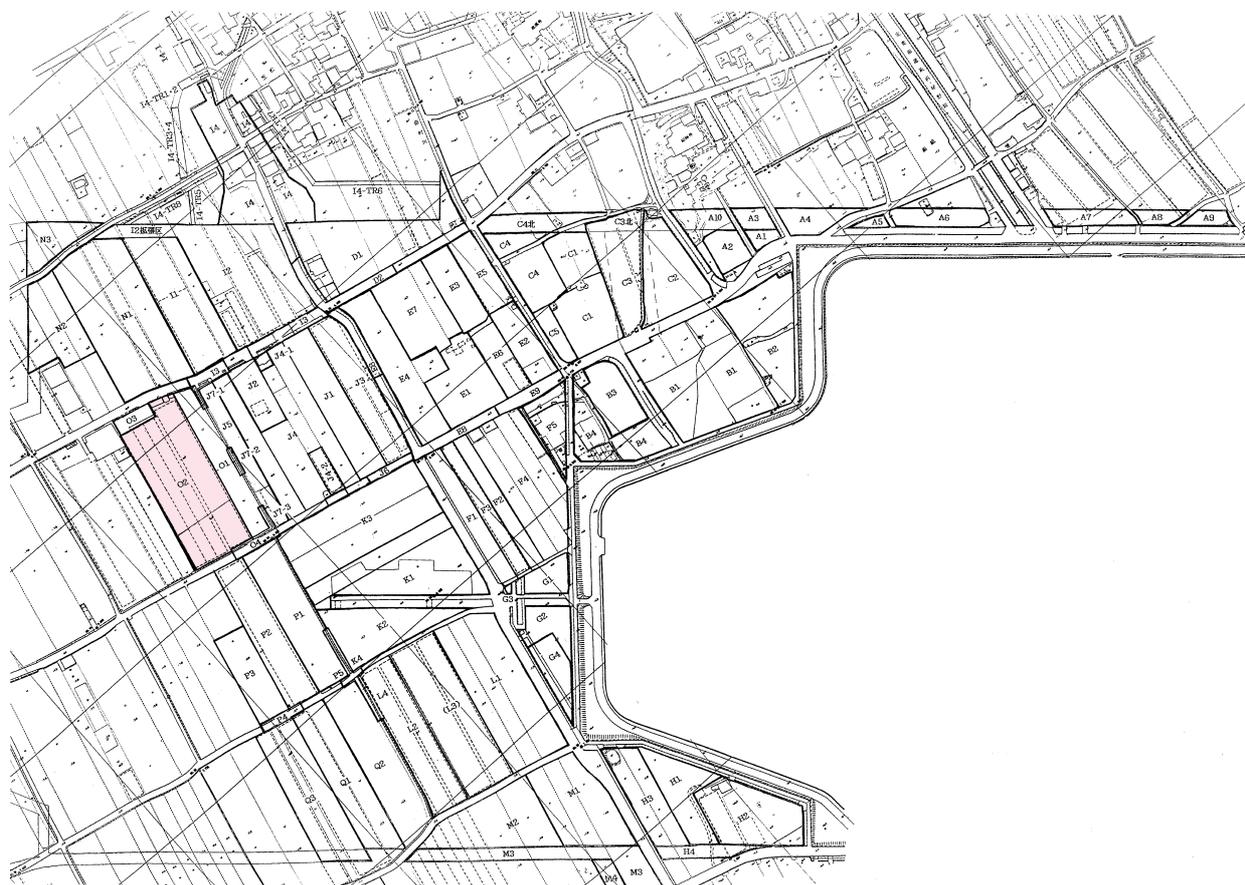
(2) 包含層出土遺物

本調査区に於て古代を示す包含層出土遺物は、大溝の上面で出土した須恵器片が数点のみである。図示したものは須恵器の壺(1)の底部である。



O1 - 11 図 O1SD101 ~ 103 / O1区古代包含層出土遺物

02 区の調査



1. O2区の概要

概要

O2区(O2-1図)は今次調査の中で、調査対象区域の西端部に位置し、東側をO1区、北側をN1区、南側はO4区を隔ててP区と境を接する調査区である。基盤層は北からシルト層、礫層、黒色粘土層である。地形的には南西部の標高が低く、調査区以西に生産域としての水田が展開していた可能性が考えられる。O1区から続く大溝が北東方向から南西方向にかけて調査区を横断し、また南側の低地部分で数条の溝状遺構が展開しており、水田に対して用排水路としての機能を果たしていた可能性が考えられる。西側一帯の黒色粘土層から遺構は確認できず、北側のシルト層・礫層の微高地に於て検出している遺構群が、N・O区を中心に展開している弥生時代中期末～後期頃と考えられる集落のほぼ西端に位置していると考えられる。

調査担当者 浜田恵子、坂本憲昭、山田和吉、堅田 至、小島恵子

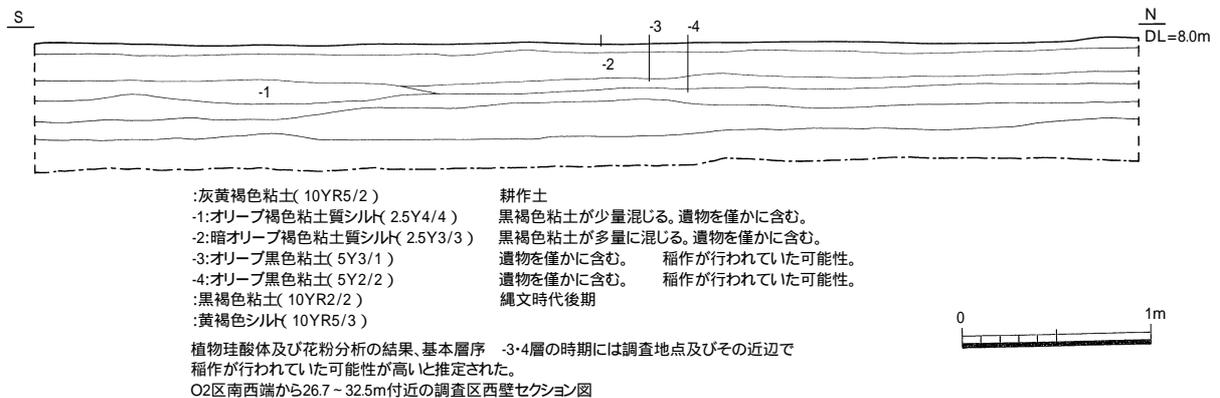
執筆担当者 宮地啓介

調査期間 平成11年1月21日～平成11年3月4日、平成11年6月16日～平成11年8月24日

調査面積 4,522m²

時代 弥生時代中期末～後期、古代？

検出遺構 弥生時代 竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡7棟、土坑23基、ピット86個 古代 溝6条？



O2 - 2 図 O2区基本層序

2. O2区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

本調査区に於て竪穴住居跡は3軒を検出している。何れも調査区南側に位置する大溝より北側に展開し、2軒(ST201・202)がシルト層堆積地から、1軒(ST203)が礫層の帯状堆積地から検出しているが、耕作面直下で遺構が確認できた状況は、僅かながら上面が削平を受けた可能性を含んでいる。何れも弥生時代中期末～後期頃の遺構と考えられ、隣接するN1・O1区に展開する遺構群との関連性が考えられる。尚、平面形態が隅丸方形状を呈する小型のST201には竪穴住居跡に伴うと考えられる付帯施設に乏しく、平面形態から大型の土坑の可能性も考えられる遺構であるが、住居跡の一形態として本調査区では取り扱うこととする。

O2-1表 O2区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(m ²)	平面形	主軸方向	時期	備考
O2ST201	2.90×2.66	0.20	7.7	隅丸方形	N-21°E	弥生 -2～ -1?	大型土坑の可能性
O2ST202	4.94×4.68	0.44	18.2	円形		弥生 -2～ -1?	
O2ST203	3.77×3.15	0.24	9.3	円形		弥生 ~ ?	

O2ST201(O2-3図)

時期；弥生 -2～ -1? **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-21°E

規模；2.90×2.66m **深さ** 0.20m **面積** 7.7m²

埋土；暗オリーブ褐色シルト

ピット数；2 **主柱穴数**；2 **主柱穴**；P1・2

床面；1面 **貼床**； **焼失**；

中央ピット； **規模** **深さ** **埋土**

壁溝； **幅** **深さ**

出土遺物；弥生土器(口縁部3点、細片約120点)、石器(石包丁1点)

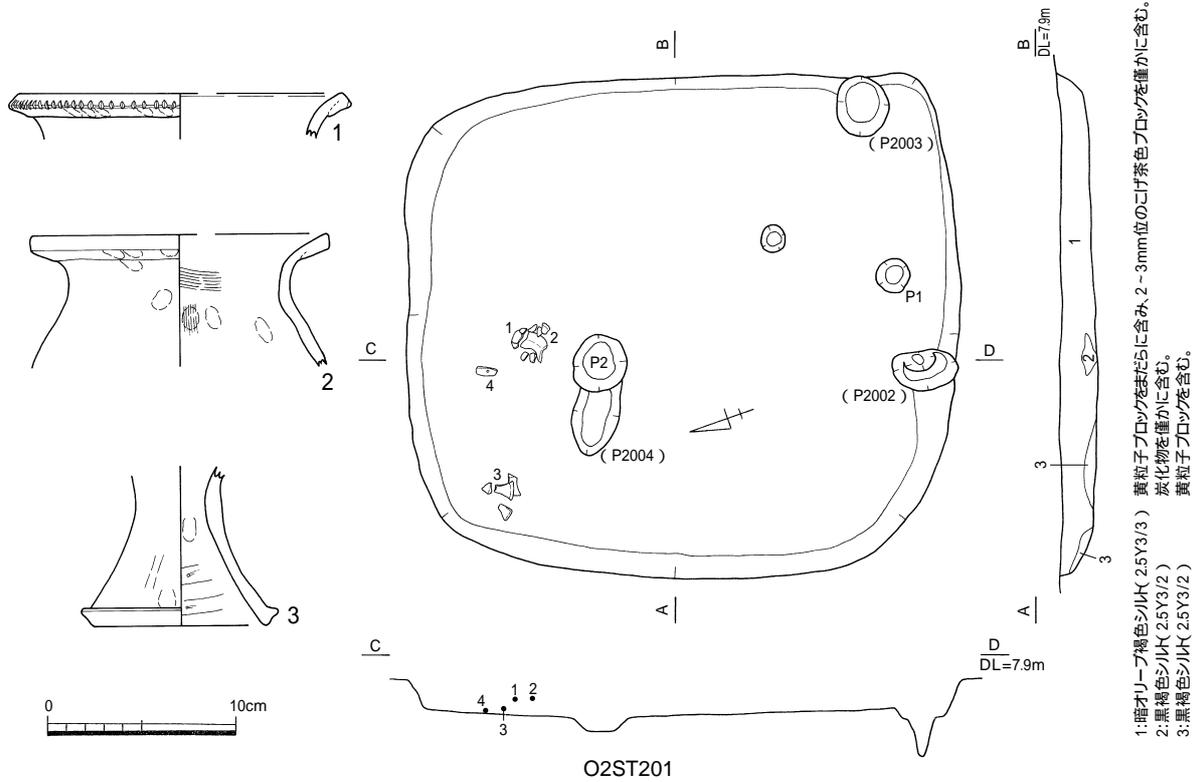
所見；調査区E -ノ-22・23グリッドに位置し、平面形態が隅丸方形状を呈する小型の竪穴住居跡の可能性が考えられる遺構であるが、付帯施設に乏しく、大型の土坑の可能性を含んでいる。

主柱穴と考えられるのはP1・2で、径約18～31cm、それぞれ約9・7cmの深さを測る。埋土は砂粒を多く含む黒褐色粘土質シルトであり、遺物はP2から弥生土器の細片が1点出土している。中央ピット・壁溝等は確認していない。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、櫛描直線文の下に列点文を施した土器片等が出土している。遺物から弥生 中期末頃の遺構と考えられるが、弥生 中期末頃まで下る可能性を含んでいる。図示したものは弥生 中期末頃と考えられる甕(1・2)の口縁部と高杯(3)の脚部である。他に石包丁(長方形状を呈し、中央に1つの紐部を穿孔した完形品)が床面直上から出土している。

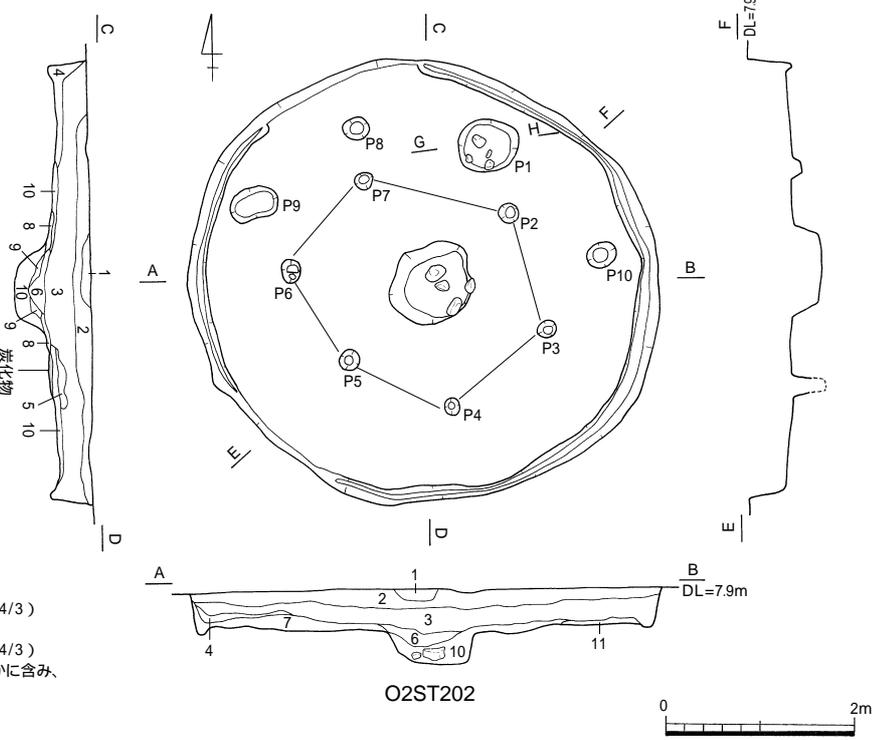
住居跡の上面からP2002～2004を検出している。埋土は何れも黄色粘土であり、遺物は出土して

いない。P2002の平面形態は隅丸形状を呈し、比較的しっかりとした柱痕を有しているが、対応するピットは確認していない。P2002~2004は上面から掘り込まれたピットであり、住居跡には伴わないと考えられる。



- 1:暗オリーブ褐色シルト 細礫を多量に含み、明黄褐色粘土質シルトが混じる。
- 2:暗オリーブ褐色砂質シルト
- 3:黒褐色砂質シルト(10YR3/2)
- 4:黒褐色砂質シルト(10YR3/2)
- 5:灰色砂
- 6:黒褐色シルト質砂 黄色シルト粒を含む。
- 7:褐灰色シルト質砂 炭化物を少量含む。
- 8:暗灰色砂 炭化物を多量に含む。
- 9:灰色砂
- 10:暗灰色砂 僅かに炭化物を含む。
- 11:褐灰色砂質シルト(10YR3/2) 黒褐色粘土質シルトが混じる。

- P1
- 1:にぶい黄褐色砂質シルト(10YR4/3) 暗褐色シルトを僅かに含む。
 - 2:にぶい黄褐色砂質シルト(10YR4/3) 黄色・暗褐色シルトブロックを僅かに含み、1に比べやや細砂を多く含む。



O2 - 3 図 O2ST201・202(1)

O2ST202(O2-3～5図)

時期；弥生 -2～ -1? **形状**；円形 **主軸方向**；

規模；4.94×4.68m **深さ** 0.44m **面積** 18.2m²

埋土；暗オリーブ褐色砂質シルト・黒褐色砂質シルト

ピット数；10 **主柱穴数**；6 **主柱穴**；P2～7

床面；1面 **貼床**； **焼失**；

中央ピット；不整形 **規模** 95×83cm **深さ** 33cm **埋土** 暗灰色砂？

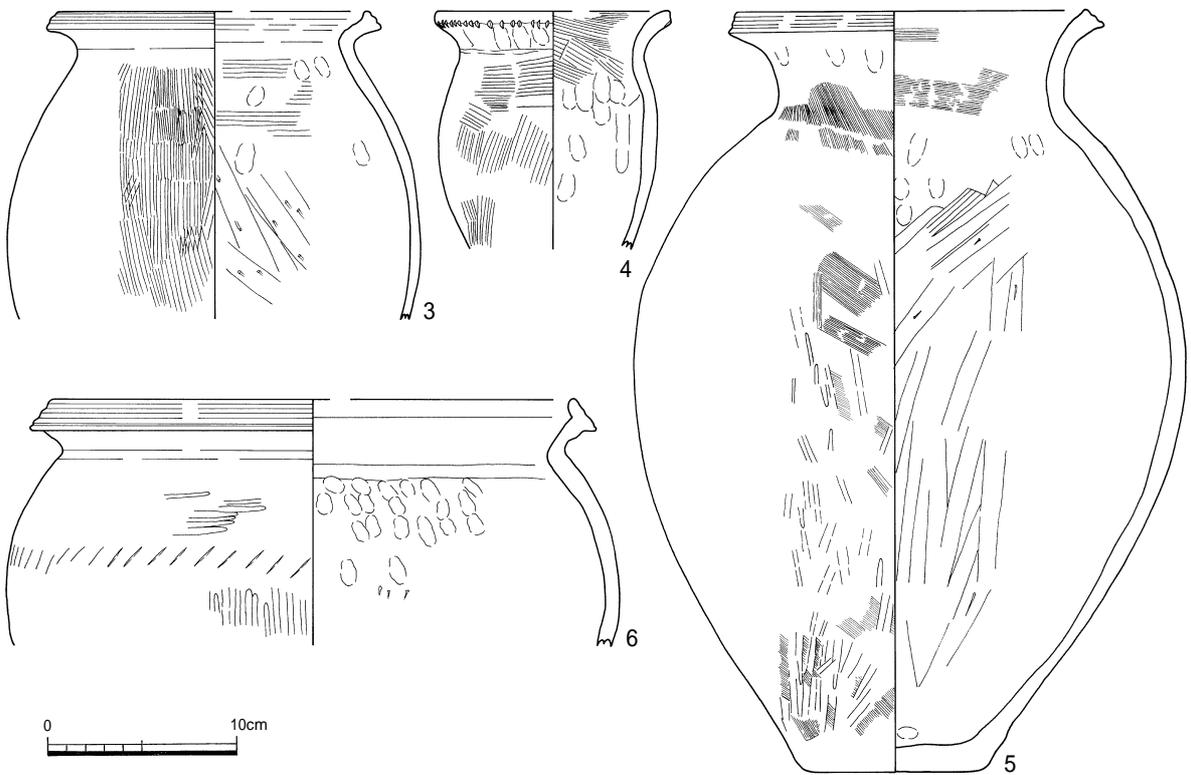
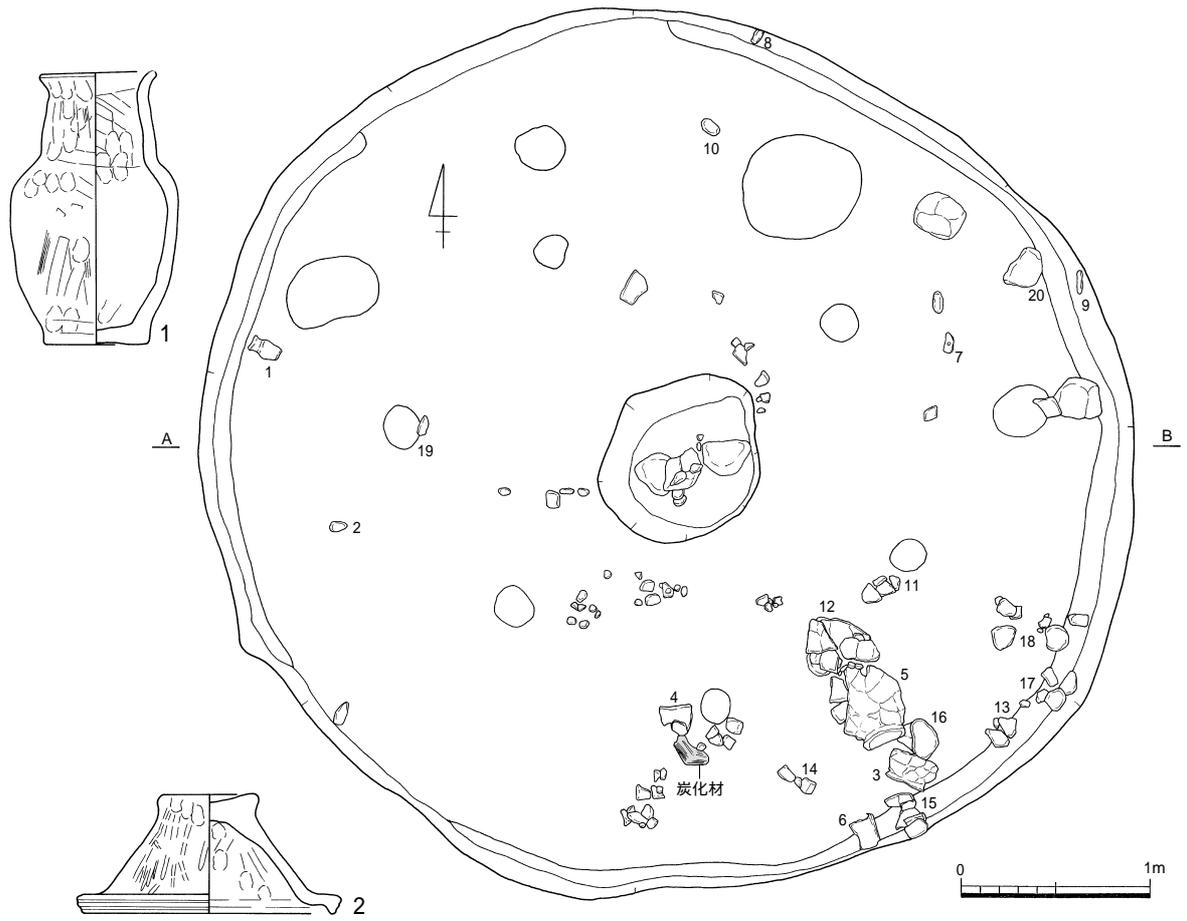
壁溝；1条 **幅** 5～13cm **深さ** 8cm

出土遺物；弥生土器(口縁部14点、底部5点、細片約650点)、石器(石包丁4点、叩石2点)

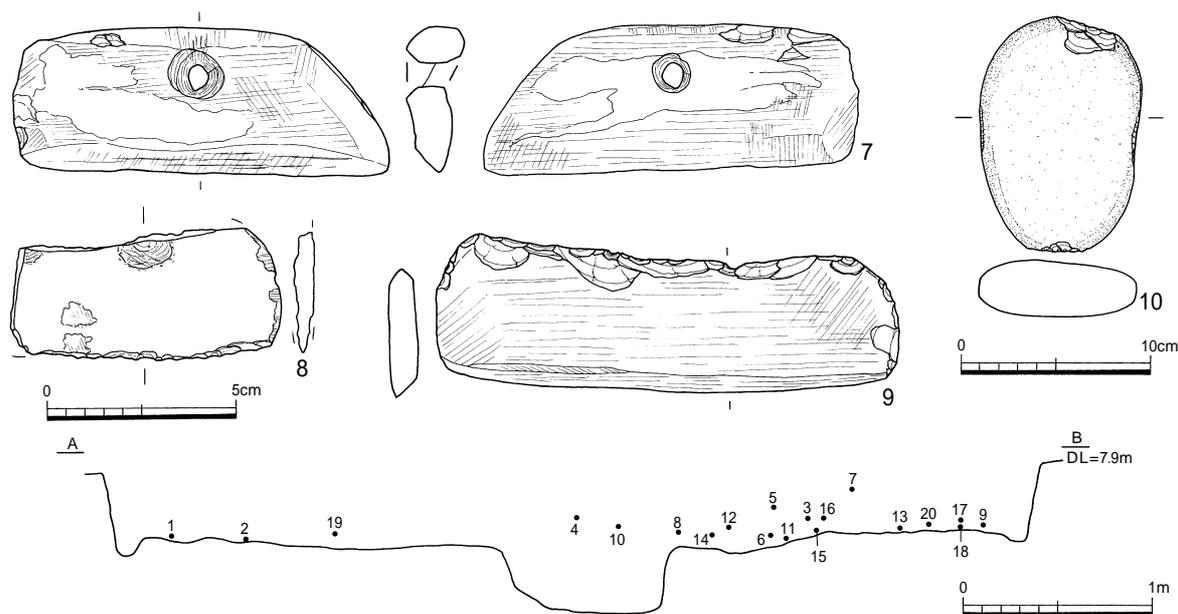
所見；調査区E -オ-6・7・11・12グリッドに位置し、平面形態は円形状を呈したやや小型の竪穴住居跡である。埋土は上層が暗オリーブ褐色砂質シルト、下層が黒褐色粘土質シルトである。

主柱穴と考えられるのはP2～7で、径約19～21cm、それぞれ約13・15・20・30?・6・15cmの深さを測る。埋土は暗褐色シルト質砂に黄色シルト粒と褐色粘土質シルトが混じり、P6からは炭化物を確認している。埋土中及び床面から部分的に炭化物を確認しているが、焼失の可能性は低いと考えられる。中央ピットは不整形な楕円形状を呈し、周辺部は堅化して黒色～赤褐色に発色している。遺物は上層から弥生土器の細片が数点と、最下層から弥生 期頃と考えられる壺の口縁部を含む細片が約10点程出土している。他に礫を数点程検出している。壁溝は壁際から部分的に1条を検出しているが、南東側の壁溝は確認していない。埋土は暗灰色砂に黒褐色粘土質シルトが混じり、遺物は弥生土器の細片が4点程出土している。その他の遺構として北東側に径約57cm、深さ約18cmを測るP1を検出している。遺物は出土していないが、貯蔵穴の可能性が考えられる。

遺物は下層～床面上からの出土が多く、上層からは底部を含む弥生土器片を十数点程確認するのみである。遺物から弥生 ～ 期頃の遺構と考えられる。図示したものは1～10である。1は壁際から出土した小型土器と考えられるほぼ完形の壺であるが、器形は不明である。2は蓋である。3は緩やかな「く」字状に外反する口縁部に凹線文を施した弥生 ～ 期頃と考えられる甕であり、仕上がりは丁寧であるが在地産と考えられる。4は「南四国型」甕の可能性を残している甕であり、未接合ながら底部を出土している。5は器高約40cmを測り、ほぼ完形に近い状態で出土した甕である。最大径が胴部中央に位置しており、弥生 期頃と考えられる。6は「く」字状に外反する口縁部に凹線文を施した甕の可能性が考えられ、11と同一個体である。12は未接合ながらほぼ一個体分の胴底部を出土している。13は下胴部内面に縦方向のヘラケズリを施した甕の胴部である。14は口縁部に凹線文を施した壺と考えられ、15と同一個体である。16・17・18は壺の胴・底部と考えられる。他に石包丁(7・9)が出土し、19は未成品と考えられる。また石包丁転用の可能性が考えられ、先端部に刃部状を有する石器(8)が壁際から出土している。10は石錘である。北東側の壁際に床面から約5～10cm程浮いた状態で数点の礫を検出し、20は石器として用いた可能性が考えられる。



O2 - 4 図 O2ST202(2)



O2 - 5 図 O2ST202(3)

O2ST203(O2-6図)

時期；弥生 ~ ? 形状；円形 主軸方向；

規模；3.77×3.15m 深さ0.24m 面積9.3m²

埋土；黒褐色シルト質粘土

ピット数；6 主柱穴数；2 主柱穴；P1・3

床面；1面 貼床； 焼失；?

中央ピット；円形 規模57×51cm 深さ20cm 埋土 黒褐色粘土質シルト

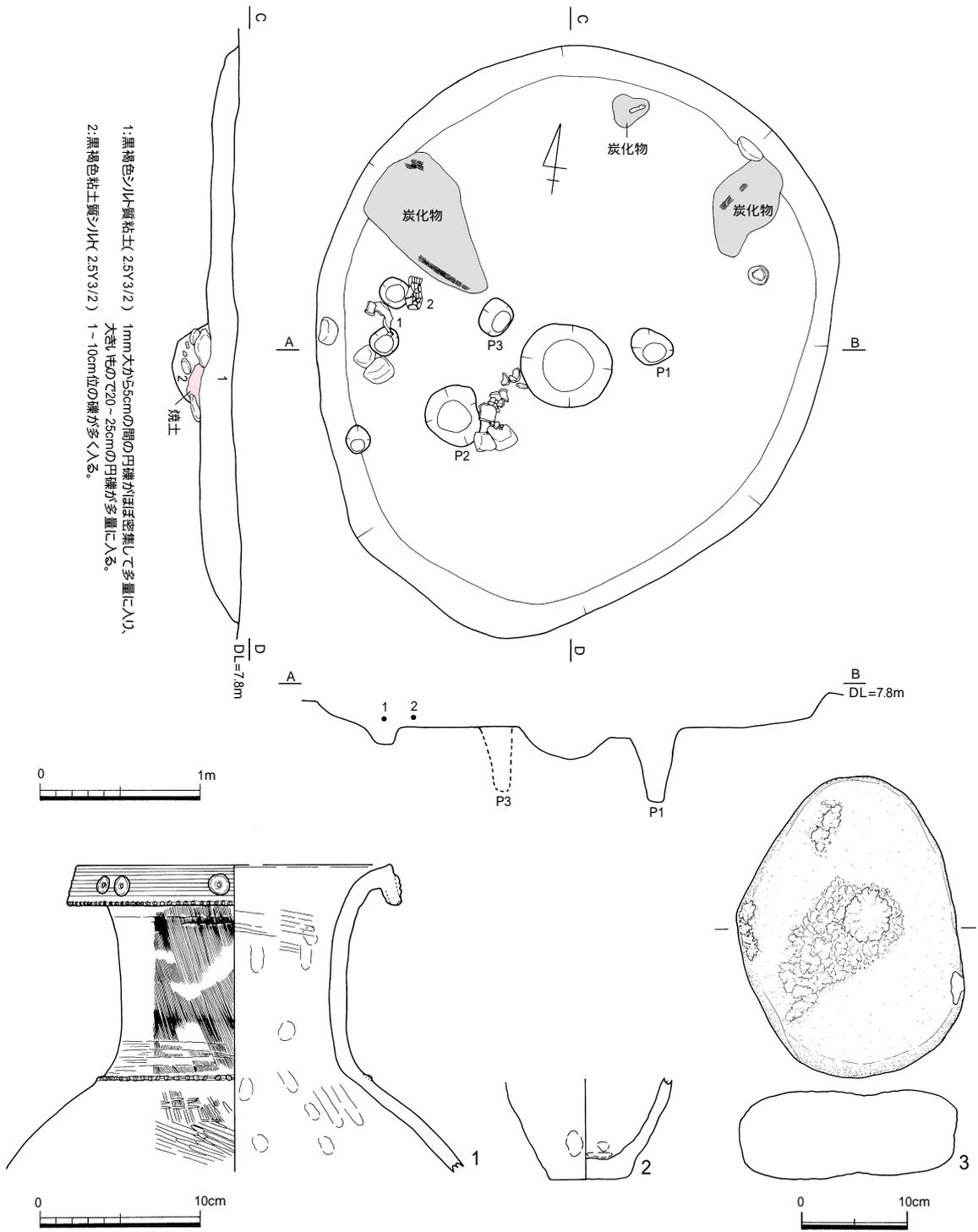
壁溝； 幅 深さ

出土遺物；弥生土器(口縁部4点、底部4点、細片約320点)、石器(叩石1点)

所見；調査区E -セ-4・5グリッドに位置し、礫層の帯状堆積地から検出している小型の竪穴住居跡である。平面形態はやや楕円形に近い円形状を呈している。

主柱穴と考えられるのはP1・3で、径約22~26cm、それぞれ約44・42cmの深さを測る。埋土は不明で、遺物は出土していない。北側を中心に埋土上層から下層にかけて炭化物塊を部分的に確認し、床面の炭化物がP2の西側の肩口から流れ込むような状態で確認しているなど、本遺構は焼失住居跡の可能性を含んでいる。中央ピットはほぼ円形状を呈し、検出面上から落ち込むように焼土塊に重なった状態で台石(3)を出土している。下層からは弥生土器の細片が9点程出土している。壁溝は確認していない。

遺物の大半は床面付近からの出土である。遺物から弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。図示したものは弥生 ~ 期頃と考えられる壺(1)である。2はほぼ完形の状態で出土した小型土器と考えられる壺であるが、約100点程の細片となり、全体を復元することは困難であった。またSK209から出土している壺の胴部の一部が、1と共に本遺構から出土している。



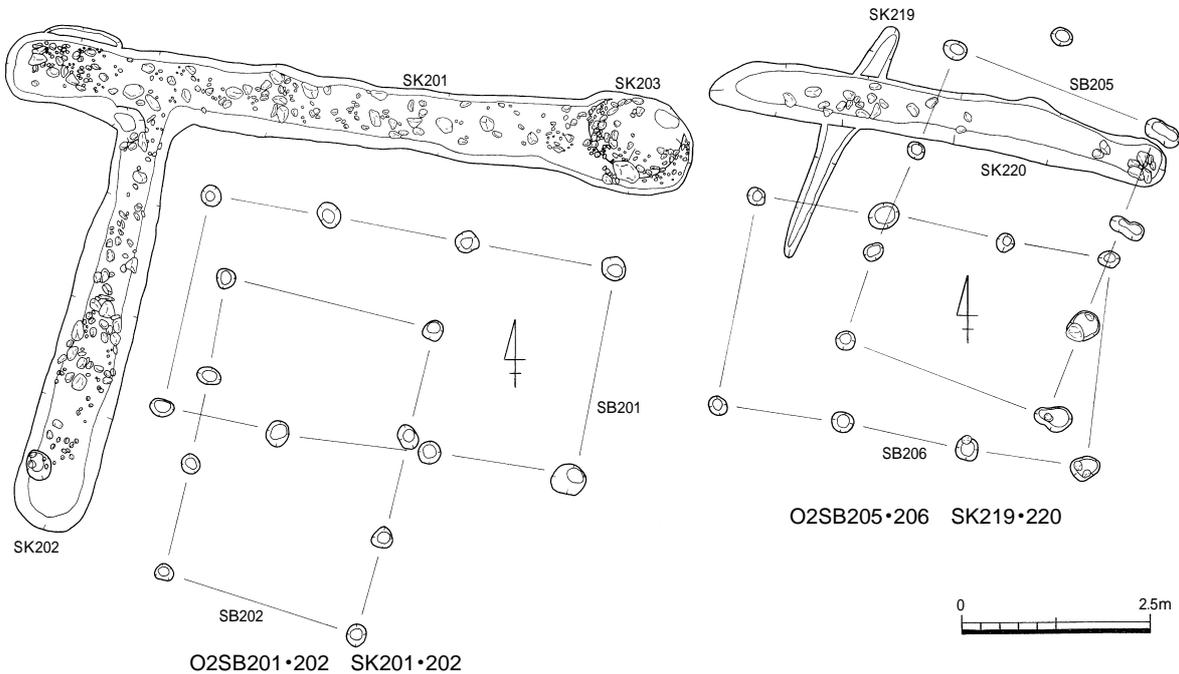
O2 - 6 図 O2ST203

(2) 掘立柱建物跡

本調査区に於て掘立柱建物跡は7棟を検出している。多くは梁間1間、桁行3間の掘立柱建物跡である。3棟は東西方向にN-79°Wの範囲で検出し、4棟は南北方向にN-14°Eの範囲で検出している。溝状土坑を伴うと考えられる掘立柱建物跡は4棟で、2棟ずつ南北・東西方向で重複(O2-7図)し、それぞれの溝状土坑の切り合い関係により間接的ながら南北方向(SB202・SK202)が東西方向(SB201・SK201)に切られ、また東西方向(SB206・SK220)が南北方向(SB205・SK219)に切られる状況を確認しており、棟方向だけで同時期の遺構とは断定できないと考えられる。何れにせよ弥生時代中期末～後期頃と考えられる集落の西端部に位置しており、これより以西は水田域の可能性が考えられる黒色粘土層が広がっている。

O2-2表 O2区掘立柱建物跡一覧

遺構名	梁間×桁行 [間]	梁間×桁行 [m]	柱間寸法 梁間×桁行[m]	主軸方向	付属遺構	時 期	備 考
O2SB201	1×3	2.8×5.4	2.8×1.6～2.0	N-79°W	SK201	弥生～	
O2SB202	1×3	2.8×4.2	2.7～2.8×1.2～1.5	N-14°E	SK202	弥生～	
O2SB203	1×2	2.5×2.9	2.5×1.3～1.6	N-17°E		弥生～?	
O2SB204	1×3	3.1×4.3	2.9～3.1×1.1～1.7	N-83°W		弥生～?	
O2SB205	1×3	2.9[3.1]×4.1	2.9～3.1×1.3～1.5	N-21°E	SK219	弥生～?	
O2SB206	1×3	2.8×4.9	2.8×1.3～1.7	N-81°W	SK220	弥生～?	
O2SB207	1×3	2.8×4.9	2.8×1.4～1.7	N-17°E		弥生～?	



O2-7図 O2SB201・202・205・206 SK201・202・219・220

O2SB201(O2-8図)

時期；弥生 ~ 棟方向；N-79°W

規模；梁間1×桁行3 梁間2.8m×桁行5.4m 面積15.1m²

柱間寸法；梁間2.8m 桁行1.6~2.0m

柱穴数；8 柱穴形；円形

性格；掘立柱建物跡 付属施設；SK201

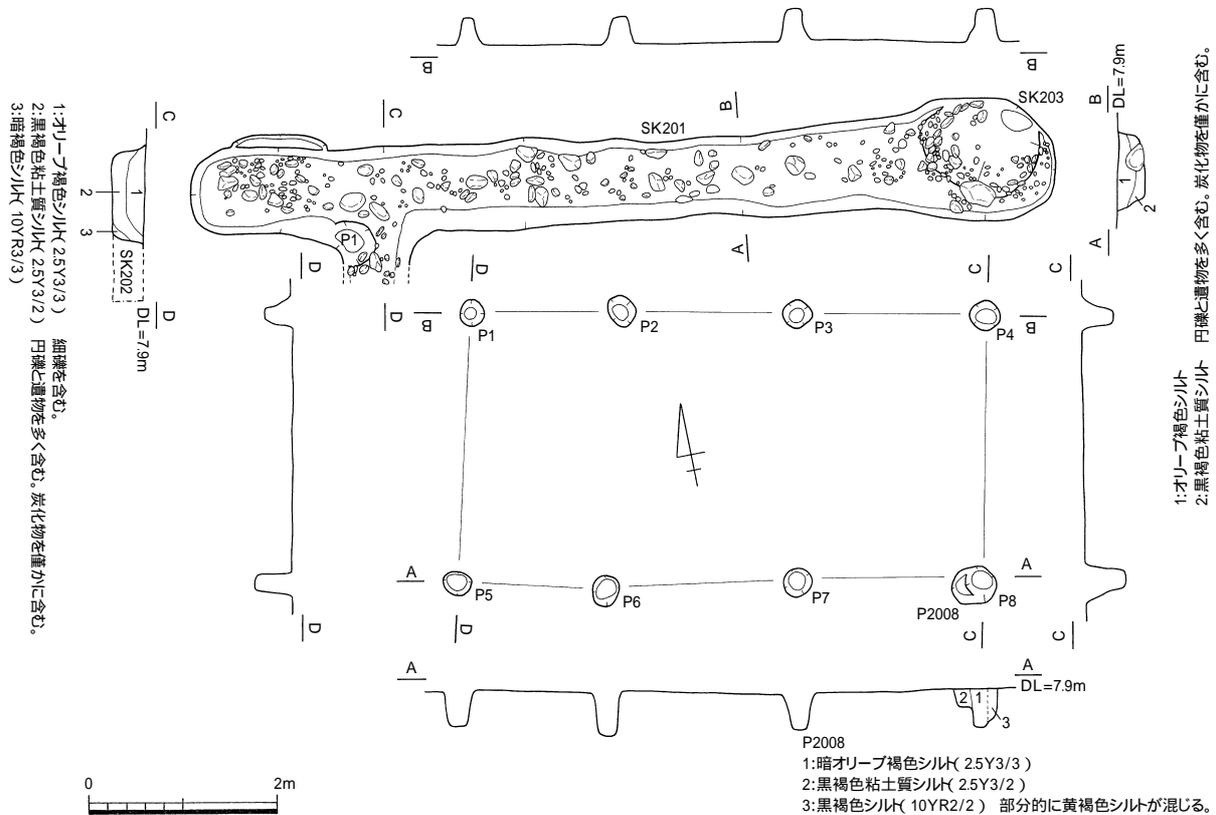
出土遺物；なし

所見；調査区E -ネ-20・15、ノ-16・21・22グリッドに位置し、溝状土坑(SK201)を伴う可能性のある掘立柱建物跡と考えられる遺構である。棟方向は東西方向であり、南北方向の位置関係で重複しているSB202を切っている可能性が、それぞれに伴う溝状土坑の切り合いにより間接的に考えられる。柱穴の規模は径約26~46cm、深さ約28~42cmを測る。埋土はP1・3~5・7が黒褐色シルト、P2・6・8が黒褐色粘土質シルトであり、P2は砂粒を多く含んでいる。またP8では柱痕を確認している。遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構(SK201)などから弥生 ~ 期頃の遺構と考えられる。

O2SB202(O2-9図)

時期；弥生 ~ 棟方向；N-14°E

規模；梁間1×桁行3 梁間2.8m×桁行4.2m 面積11.8m²



O2 - 8 図 O2SB201 SK201(1)

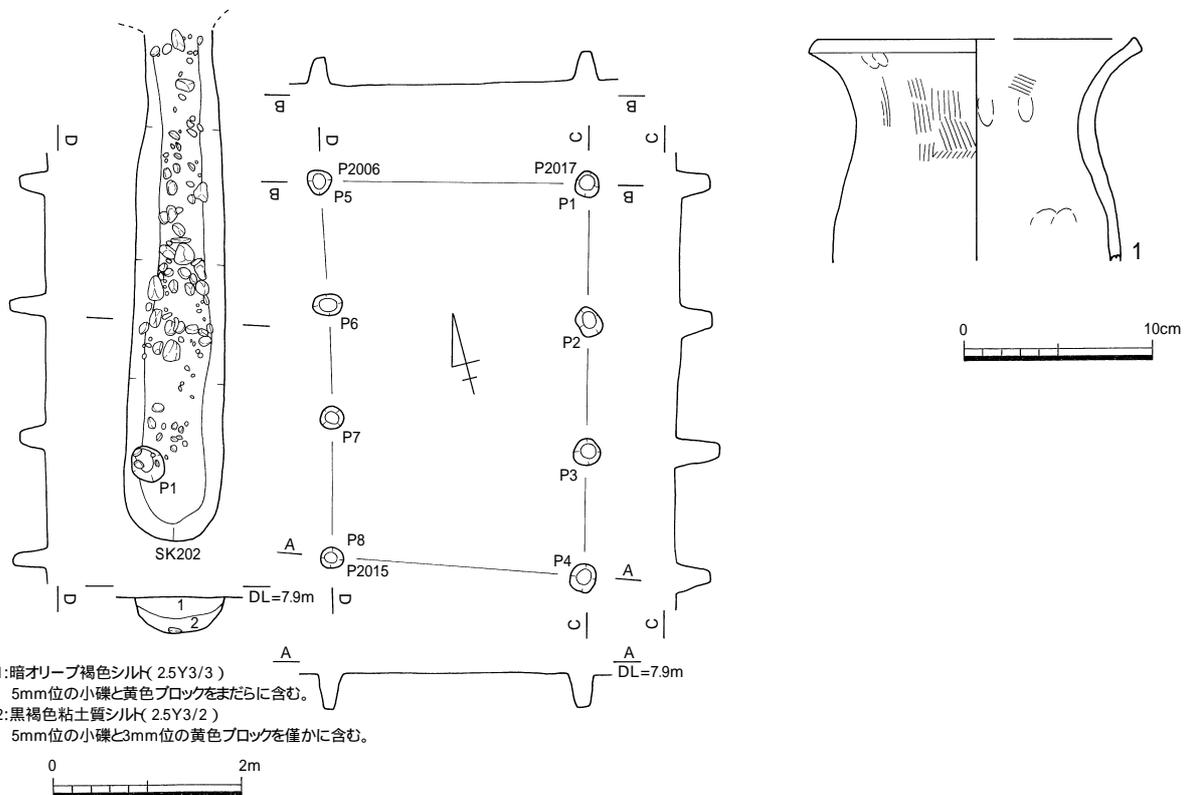
柱間寸法；梁間 2.7～2.8m 桁行 1.2～1.5m

柱穴数；8 柱穴形；円形

性格；掘立柱建物跡 付属施設；SK202

出土遺物；弥生土器 P2006(細片 6点)、P2015(口縁部 1点、細片 3点)

所見；調査区E -ネ-25、ノ-21、E -エ-5、オ-1グリッドに位置し、溝状土坑(SK202)を伴う可能性のある掘立柱建物跡と考えられる遺構である。棟方向は南北方向であり、東西方向の位置関係で重複しているSB201に切られている可能性が、それぞれに伴う溝状土坑の切り合いにより間接的に考えられる。柱穴の規模は径約22～29cm、深さ約26～46cmを測る。埋土はP1・2・4・7・8が黒褐色シルト、P3・5・6及びP4の下層が黒褐色粘土質シルトであり、P5は砂粒を含んでいる。遺物はP2006の下層から弥生土器の細片が出土し、またP2015の中層から「南四国型」甕(1)の可能性を残す口縁部が出土している。遺物から弥生～ 期頃の遺構と考えられる。



O2 - 9 図 O2SB202 SK202(1)

O2SB203(O2-10図)

時期；弥生～？ 棟方向；N-17°E

規模；梁間 1 × 桁行 2 梁間 2.5m × 桁行 2.9m 面積 7.3m²

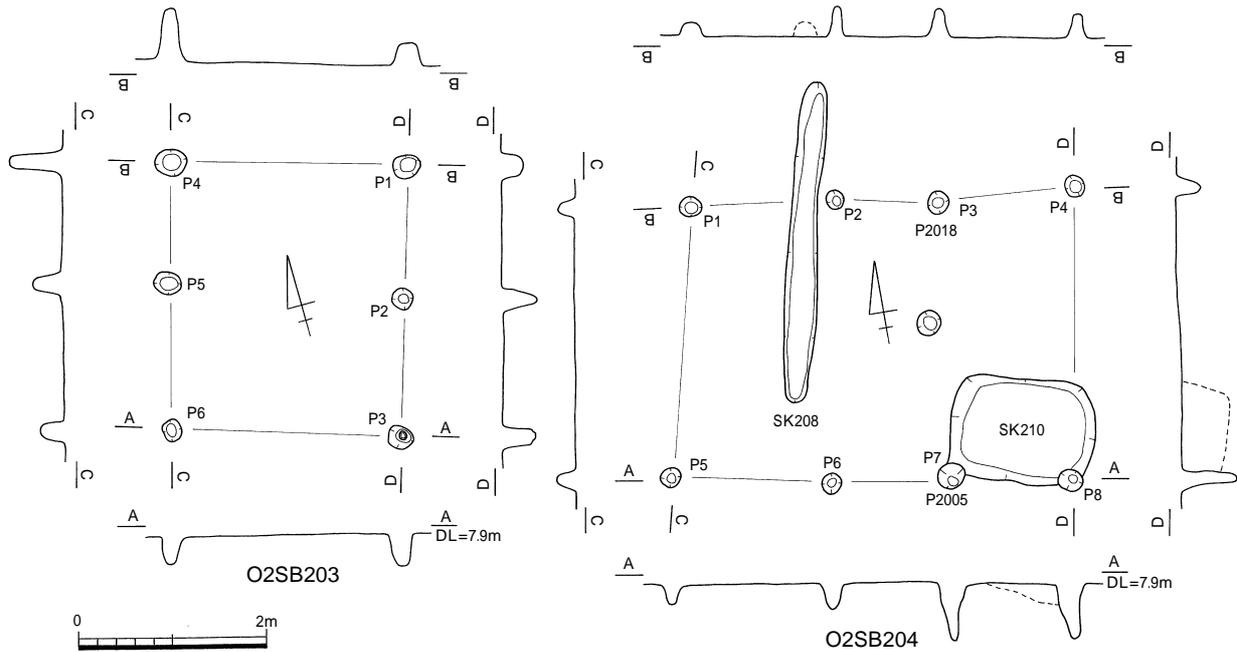
柱間寸法；梁間 2.5m 桁行 1.3～1.6m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；掘立柱建物跡 付属施設；

出土遺物；なし

所見；調査区E -オ-2・7・8グリッドに位置する掘立柱建物跡と考えられる遺構である。棟方向は南北方向であり、延伸は認められなかった。柱穴の規模は径約22～33cm、深さ約25～56cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトであり、P3・5では柱痕状の落ち込みを確認している。遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生～期頃の遺構の可能性が考えられる。



O2 - 10 図 O2SB203・204

O2SB204(O2-10図)

時期；弥生～？ 棟方向；N-83°W

規模；梁間1×桁行3 梁間3.1m×桁行4.3m 面積13.3m²

柱間寸法；梁間2.9～3.1m 桁行1.1～1.7m

柱穴数；8 柱穴形；円形

性格；掘立柱建物跡 付属施設；

出土遺物；弥生土器 P2018(細片1点)

所見；調査区E -エ-15・20、オ-11・16グリッドに位置する掘立柱建物跡と考えられる遺構である。SK210の南端に柱穴群の一部がかかるが、切り合い関係は不明である。棟方向は東西方向である。柱穴の規模は径約20～24cm、深さ約19～60cmを測る。埋土は砂粒を多く含む黒褐色粘土質シルトであり、P2・3では僅かながら炭化物を確認している。遺物はP2018の下層から弥生土器の細片が出土している。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生～期頃の遺構の可能性が考えられる。

掘立柱建物跡にほぼ直角の位置関係で溝状土坑(SK208)を検出している。規模は長径約3.42m、短径約0.33m、深さ約10cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色シルトであり、遺物は弥生土器の細片が3点程出土している。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生～期頃の遺構の可能性が考えられる。掘立柱建物跡との関連性は不明である。

O2SB205(O2-11図)

時期；弥生 ～ ? 棟方向；N-21°E

規模；梁間1×桁行3 梁間2.9(3.1)m×桁行4.1m 面積11.9m²

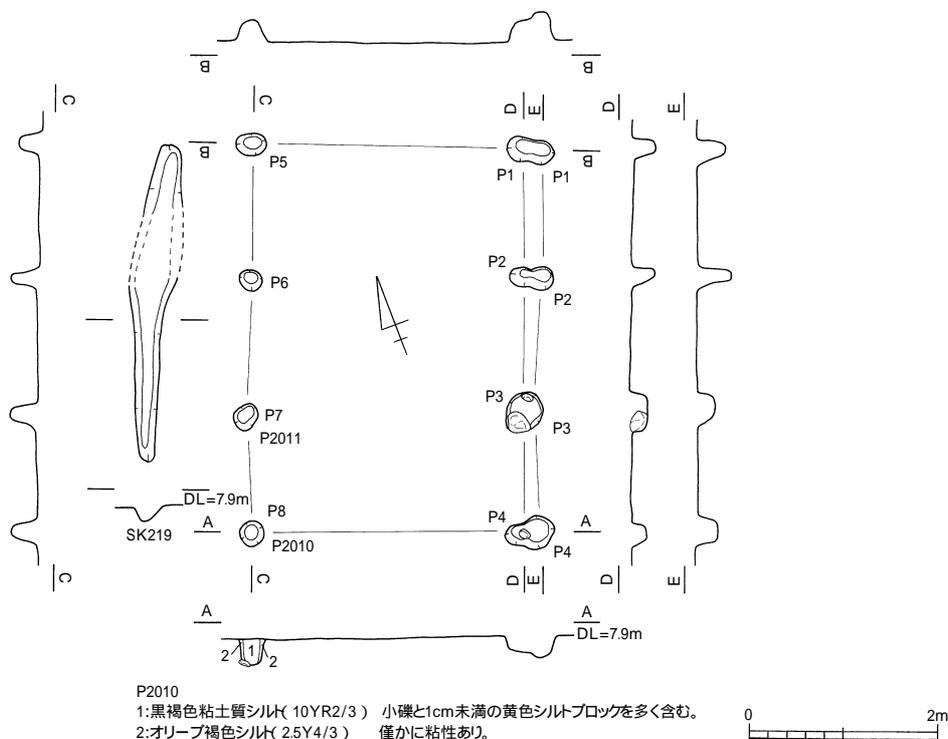
柱間寸法；梁間2.9～3.1m 桁行1.3～1.5m

柱穴数；8 柱穴形；円形

性格；掘立柱建物跡 付属施設；SK219

出土遺物；弥生土器 P2011(細片1点)

所見；調査区E -ケ-9・10・14・15グリッドに位置し、溝状土坑(SK219)を伴う可能性のある掘立柱建物跡と考えられる遺構である。棟方向は南北方向であり、東西方向の位置関係で重複しているSB206を切っている可能性が、それぞれに伴う溝状土坑の切り合いにより間接的に考えられる。柱穴の規模は径約22～43cm、深さ約18～30cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトであり、P5～8は砂粒を含み、P4・5は黄褐色シルトブロック(黄色粒)が混じっている。またP2では円礫の投げ込みを、P7・8では柱痕状の落ち込みを確認している。遺物はP2011の下層から弥生土器の細片が出土している。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生～期頃の



O2 - 11 図 O2SB205 SK219

遺構の可能性が考えられる。

また東側の柱穴列の外側に切り合う形でP1'～4'を検出しており、拡張・建て替え等が行なわれた可能性が考えられる。柱穴の規模は径約20～43cm、深さ約17～35cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトであり、遺物は出土していない。

O2SB206(O2-12図)

時期；弥生 ～ ? 棟方向；N-81°W

規模；梁間1×桁行3 梁間2.8m×桁行4.9m 面積13.7㎡

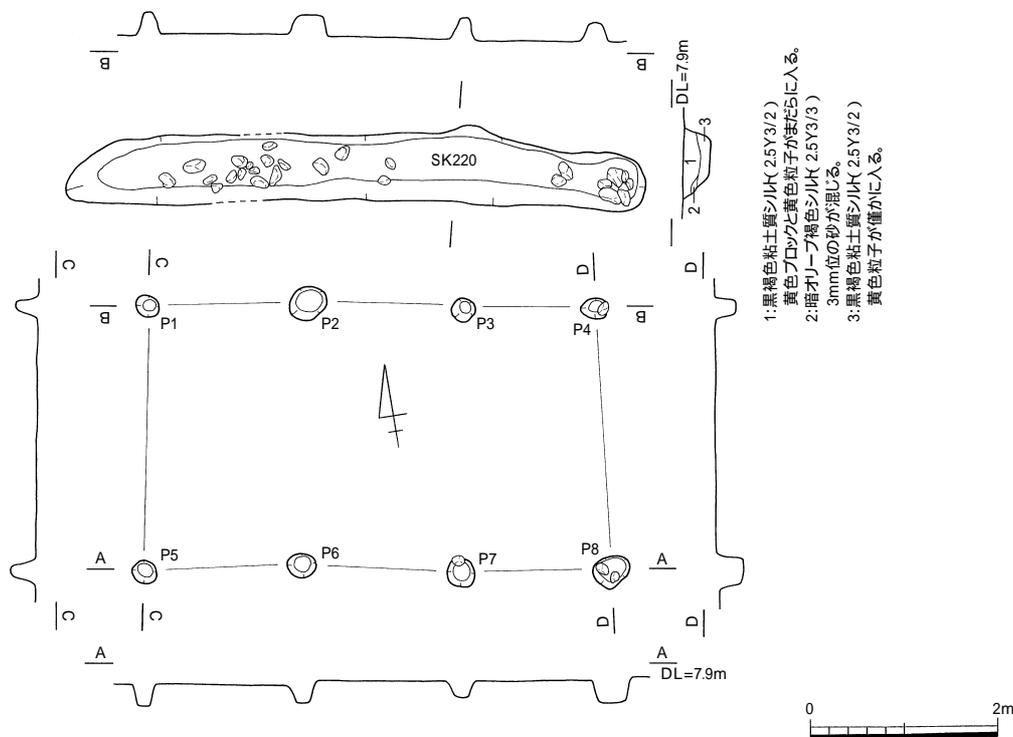
柱間寸法；梁間2.8m 桁行1.3～1.7m

柱穴数；8 柱穴形；円形

性格；掘立柱建物跡 付属施設；SK220

出土遺物；なし

所見；調査区E -ケ-9・10・14・15グリッドに位置し、溝状土坑(SK220)を伴う可能性のある掘立柱建物跡と考えられる遺構である。棟方向は東西方向であり、南北方向の位置関係で重複しているSB205に切られている可能性が、それぞれに伴う溝状土坑の切り合いにより間接的に考えられる。柱穴の規模は径約23～40cm、深さ約15～25cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトである。遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生～期頃の遺構の可能性が考えられる。



O2 - 12 図 O2SB206 SK220

O2SB207(O2-13図)

時期；弥生 ~ ? 棟方向；N-17°E

規模；梁間1×桁行3 梁間2.8m×桁行4.9m 面積13.7m²

柱間寸法；梁間2.8m 桁行1.4~1.7m

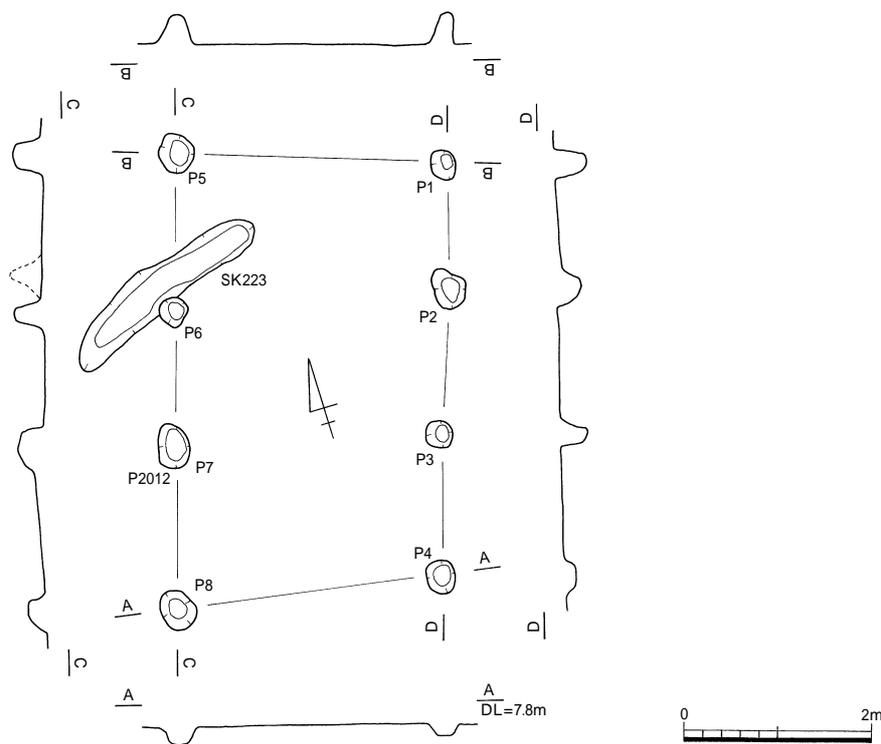
柱穴数；8 柱穴形；円形

性格；掘立柱建物跡 付属施設；

出土遺物；弥生土器 P2012(細片)

所見；調査区E -ケ-17・18・22・23グリッドに位置する掘立柱建物跡と考えられる遺構である。棟方向は南北方向である。柱穴の規模は径約29~45cm、深さ約12~32cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトであり、P6の下層に黄褐色シルトブロックが混じっている。遺物はP2012の上層から弥生土器の細片が出土している。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

掘立柱建物跡のP6に切られる形で溝状土坑(SK223)を検出している。規模は長径約2.34m、短径約0.40m、深さ約34cmを測り、断面形態はV字状を呈している。埋土はオリーブ褐色シルトである。遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。掘立柱建物跡との関連性は不明である。



O2 - 13 図 O2SB207

(3) 土坑

本調査区に於て土坑は23基を検出しており、多くの土坑でオリブ褐色シルトと黒褐色(粘土質)シルトの堆積を基調としている。平面形態は隅丸方形状を呈した土坑を多く検出し、掘立柱建物跡に伴うと考えられる溝状土坑も数基検出している。何れも弥生時代中期末～後期頃の遺構と考えられ、N1・O1区に展開している遺構群との関連性が考えられる。またSK209出土の壺の中から堅果類を出土しており、I1・Q2区に於ても土坑(貯蔵穴)からの出土を確認している。

尚、比較的しっかりとした掘方でありながら遺物を殆ど出土しない土坑や、ある程度纏まった遺物が床面に張り付いた状態で出土している土坑など、遺構が構築されてから間を置かず埋没或いは意図的に埋め戻した可能性を含んでいる土坑が数基考えられ、堆積の状況及び土坑の性格については検討を要すると考えられる。

O2-3表 O2区土坑一覧

遺構番号	平面形	断面形	規 模			主軸方向	埋 土	切合関係	時 期	備 考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)					
O2SK201	溝状	逆台形	9.31	0.80~ 1.00	25.0~ 35.0	N-82 °W	オリブ褐色シルト・黒褐色粘土質シルト / 2層	SK202・203を切る	弥生 ~	SB201に伴う可能性
O2SK202	溝状	U字状	[5.47]	0.70~ 1.00	38.0	N-15 °E	暗オリブ褐色シルト・黒褐色粘土質シルト / 2層	SK201に切られる	弥生 ~	SB202に伴う可能性
O2SK203	隅丸方形	U字状	[1.52]	1.30	104.0	N-82 °W	暗オリブ褐色シルト・黒褐色シルト / 2層	SK201に切られる	弥生 ~	
O2SK204	隅丸方形	逆台形	1.54	1.00	30.0	N-41 °W	オリブ褐色シルト・他 / 2層		弥生 ~ ?	
O2SK205	隅丸方形	箱形	2.23	1.54	57.0	N-90 °E	暗オリブ褐色シルト・黒褐色シルト質砂・他 / 8層		弥生 ~ ?	集石
O2SK206	隅丸方形	皿状	1.06	0.81	7.0	N-76 °W	黄色シルト質粘土 / 1層		不明	攪乱?
O2SK207	隅丸方形	逆台形	1.25	0.96	16.0~ 38.0	N-75 °W	オリブ褐色シルト・黒褐色粘土質シルト / 2層	土坑の切り合い?	弥生 -2	
O2SK208	溝状	箱形	3.42	0.33	10.0	N-15 °E	暗オリブ褐色シルト / 1層		弥生 ~ ?	
O2SK209	隅丸方形	箱形	1.68	1.31	73.0	N-84 °W	暗オリブ褐色シルト・黒褐色砂質シルト・他 / 4層		弥生 ~	
O2SK210	隅丸方形	箱形	1.53	1.10	50.0	N-72 °W	黒褐色砂質シルト・他 / 6層	SB204に切られる?	弥生 ~	床面から周溝・ヒット?
O2SK211	隅丸方形	逆台形	1.13	0.97	36.0	N-78 °W	オリブ褐色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルト・他 / 3層		弥生 ~ ?	
O2SK212	隅丸方形	箱形	1.17	0.80	45.0	N-68 °W	黒褐色粘土質シルト・暗オリブ褐色シルト・他 / 5層		弥生 ~	
O2SK213	隅丸方形	逆台形	0.76	0.67	16.0	N-17 °E	黒褐色粘土質シルト・暗オリブ褐色シルト・他 / 4層		弥生 ~ ?	
O2SK214	隅丸方形	逆台形	1.06	0.76	20.0	N-41 °E	黒褐色粘土質シルト・他 / 3層		弥生 ~ ?	
O2SK215	隅丸方形	箱形	1.28	0.94	53.0	N-77 °W	暗オリブ褐色シルト・黒褐色粘土質シルト・他 / 5層		弥生 ~ ?	
O2SK216	隅丸方形	逆台形	1.75	1.20	58.0	N-88 °W	黒褐色シルト質粘土・オリブ褐色砂質シルト・他 / 6層		弥生 ~ ?	
O2SK217	隅丸方形	箱形	1.78	1.52	38.0	N-21 °E	オリブ褐色シルト・他 / 11層		弥生 ~ ?	
O2SK218	溝状	逆台形	4.43	0.34	5.0~ 10.0	N-9 °E	黒褐色シルト質粘土 / 1層		弥生 ~ ?	
O2SK219	溝状	U字状	3.33	0.32	12.0	N-25 °E	黒褐色シルト質粘土・他 / 1層	SK220を切る	弥生 ~ ?	SB205に伴う可能性
O2SK220	溝状	逆台形	6.10	0.76	28.0	N-80 °W	黒褐色粘土質シルト・他 / 3層	SK219に切られる	弥生 ~ ?	SB206に伴う可能性
O2SK221	隅丸方形	逆台形	0.66	0.59	28.0	N-70 °W	オリブ褐色シルト / 1層		弥生 ~ ?	
O2SK222	不整形	逆台形	1.06	1.00	20.0	N-90 °E	黒褐色シルト質粘土・オリブ褐色シルト質粘土 / 3層		弥生 ~ V ?	
O2SK223	溝状	V字状	2.34	0.40	34.0	N-66 °E	オリブ褐色シルト / 1層	SB207に切られる?	弥生 ~ ?	

O2SK201(O2-8・14図)

時期；弥生 ～ **形状**；溝状 **主軸方向**；N-82°W

規模；9.31×0.80～1.00m **深さ** 0.25～0.35m **断面形態**；逆台形

埋土；オリーブ褐色シルト(黄灰色シルト)・黒褐色粘土質シルト

付属遺構；SB201 **機能**；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部33点、底部13点、細片約1,160点)、石器(石包丁1点)

所見；調査区E -ネ-20、ノ-16・17グリッドに位置し、SK202・203を切り、SB201に伴う可能性が考えられる溝状土坑である。埋土は上層がオリーブ褐色シルト(黄灰色シルト)、下層が黒褐色粘土質シルトであり、西側では炭化物を多く含んでいる。下層からは約20cm位の礫の投げ込みを検出し、床面上からある程度の出土状況を確認できた。

遺物は下層～床面からの出土が多く、櫛描直線文の下に列点文を施した土器片等が出土している。上層からは口縁部を含む弥生土器片を約180点程確認している。凹線文を施した口縁部は僅少であり、遺物から弥生 ～ 期頃の遺構と考えられる。図示したものは1～4である。1は弥生 -2期頃と考えられる長頸壺の口縁部である。2・3は弥生 ～ 期頃と考えられる甕である。5は貼付突帯を施した壺の口縁部であり、端部はヨコナデにより面状を成している。6は広口壺の可能性が考えられる口縁部である。7は貼付口縁の下端に刻目を施した甕の口縁部であり、このタイプの口縁部は数点を出土している。他に石包丁(4)が1点出土している。

西側の床面から径約50cm、深さ約45cmを測るピット(P1)を検出している。埋土は砂粒を多く含む黒褐色粘土質シルトであり、円礫が混じっている。遺物は底面から弥生土器の細片が2点程出土している。溝状土坑との関連性は不明である。

O2SK203(O2-14図)

時期；弥生 ～ **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-82°W

規模；(1.52)×1.30m **深さ** 1.04m **断面形態**；U字状

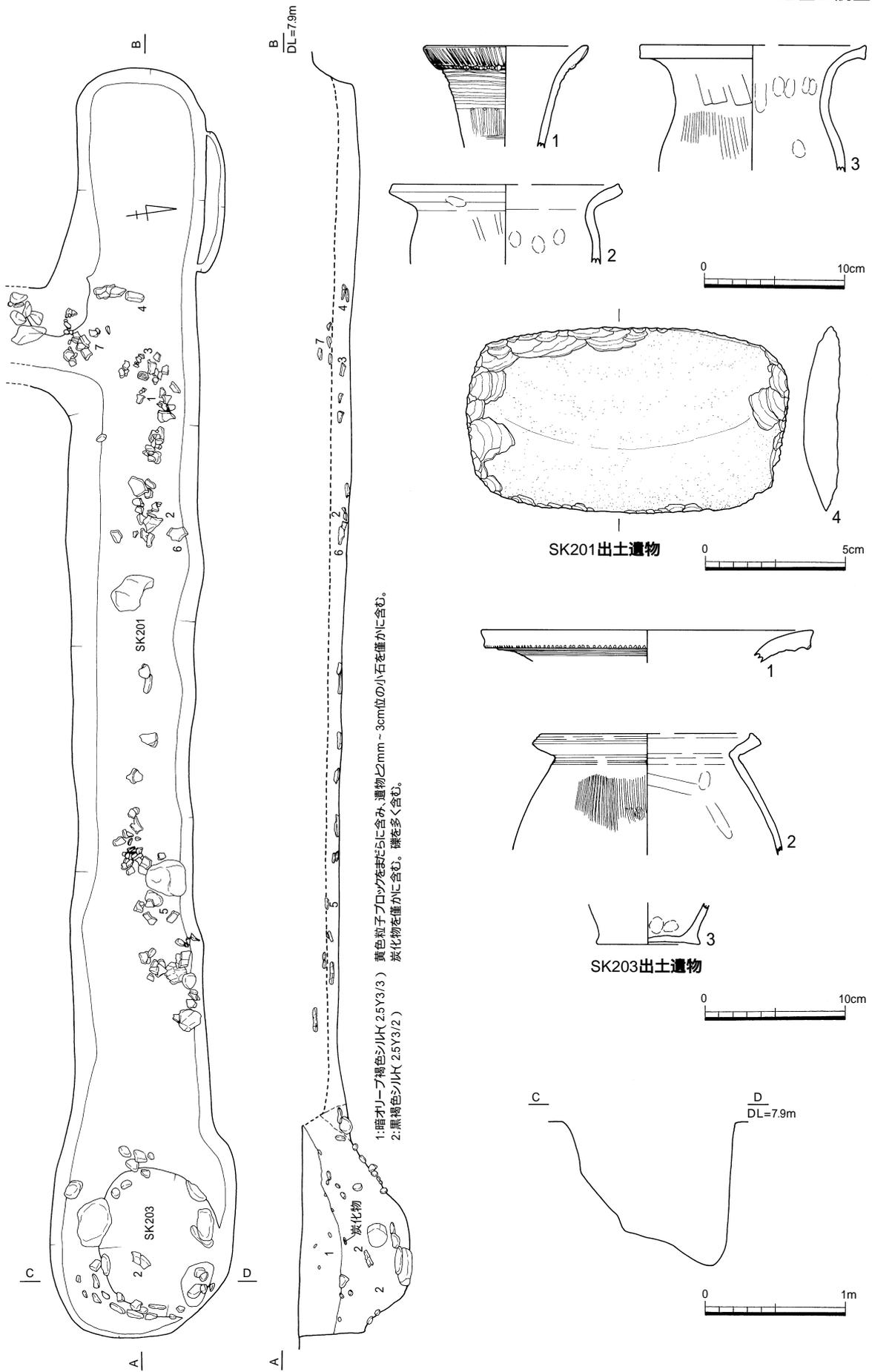
埋土；暗オリーブ褐色シルト・黒褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部4点、底部6点、細片約180点)

所見；調査区E -ノ-17グリッドに位置し、SK201に切られる土坑である。埋土は上層が暗オリーブ褐色シルト、下層が黒褐色シルトである。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、櫛描直線文の下に同波状文を施した土器片等が出土している。遺物から弥生 ～ 期頃の遺構と考えられる。遺物は上・下層に分けて取り上げを行ない、上層からは口縁部を含む弥生土器片を約40点程確認している。図示したものは弥生 ～ 期頃と考えられる甕(1)の口縁部である。遺物は下層での出土が多く、図示したものは弥生 ～ 期頃と考えられる甕(2・3)の口縁部・底部である。



1: 暗オリーブ褐色シルク(2.5Y3/3) 黄色粒子ブロッグをまたらに含み、遺物と2mm ~ 3cm位の小石を僅かに含む。
 2: 黒褐色シルク(2.5Y3/2) 炭化物を僅かに含む、礫を多く含む。

O2 - 14 図 O2SK201(2)・203

O2SK202(O2-9・15図)

時期；弥生 ~ 形状；溝状 主軸方向；N-15°E

規模；(5.47)×0.70~1.00m 深さ 0.38m 断面形態；U字状

埋土；暗オリーブ褐色シルト・黒褐色粘土質シルト

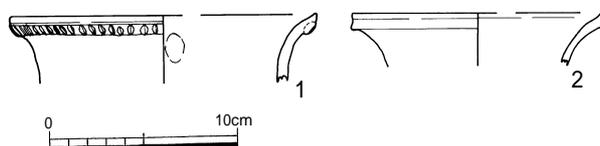
付属遺構；SB202 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部31点、底部15点、細片約570点)

所見；調査区E -ネ-20・25グリッドに位置し、SK201に切られ、SB202に伴う可能性が考えられる溝状土坑である。埋土は上層が暗オリーブ褐色シルト、下層が黒褐色粘土質シルトである。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、弥生 期頃と考えられる長頸壺の口縁部が出土している。口縁部の多くはヨコナデにより面状又は僅かに凹状を成しており、凹線文を施した口縁部は僅少である。遺物から弥生 ~ 期頃の遺構と考えられる。遺物は上層・下層に分けて取り上げを行ない、上層からは口縁部・底部等を含む弥生土器片を約30点程確認している。図示したものは弥生 ~ 期頃と考えられる甕(1)の口縁部である。遺物は下層での出土が多かったが、床面上から纏まった出土状況は確認できなかった。下層からは櫛描直線文の下に同波状文又は列点文を施した土器片等や、貼付突帯の下端に刻目を施した甕の口縁部などが出土している。図示したものは弥生 ~ 期頃と考えられる壺(2)の口縁部である。

南側の床面から径約40cm、深さ約17cmを測るピット(P1)を検出している。埋土は砂粒を多く含む黒褐色粘土質シルトであり、遺物は弥生土器の細片が2点程出土している。溝状土坑との関連性は不明である。



O2 - 15 図 O2SK202(2)

O2SK204(O2-16図)

時期；弥生 ~ ? 形状；隅丸方形 主軸方向；N-41°W

規模；1.54×1.00m 深さ 0.30m 断面形態；逆台形

埋土；オリーブ褐色シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；なし

所見；調査区E -ノ-22グリッドに位置し、平面形態は楕円形に近い隅丸方形状を呈した土坑である。

遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

O2SK205(O2-16図)

時期；弥生 ~ ? 形状；隅丸方形 主軸方向；N-90°E

規模；2.23×1.54m 深さ0.57m 断面形態；箱形

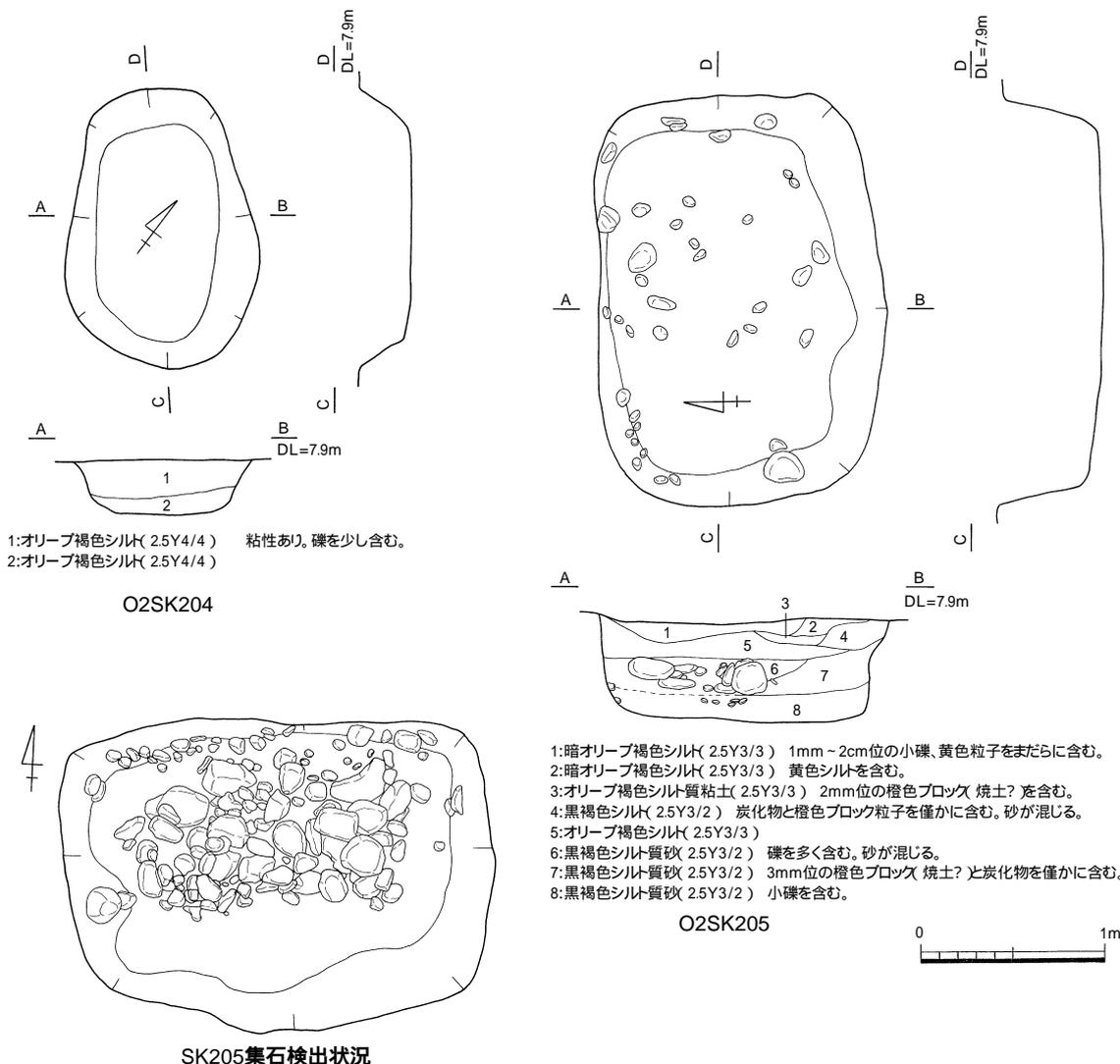
埋土；暗オリーブ褐色シルト・黒褐色シルト質砂

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器(底部2点、細片約40点)、石器(叩石2点)

所見；調査区E -オ-1・2・6・7グリッドに位置する土坑である。埋土は上層が暗オリーブ褐色シルト、下層が黒褐色シルト質砂である。下層の北側から集中して約20cm位の礫(砂岩)の投げ込みを確認し、叩石の他に西側の1箇所から粘板岩の原石が出土している。

遺物は下層での出土が多く、円礫に混じって甕の底部が出土しているが、纏まった出土状況は確認できなかった。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。



O2 - 16 図 O2SK204・205

O2SK207(O2-17図)

時期；弥生 -2 形状；隅丸方形 主軸方向；N-75 °W

規模；1.25×0.96m 深さ 0.16～0.38m 断面形態；逆台形

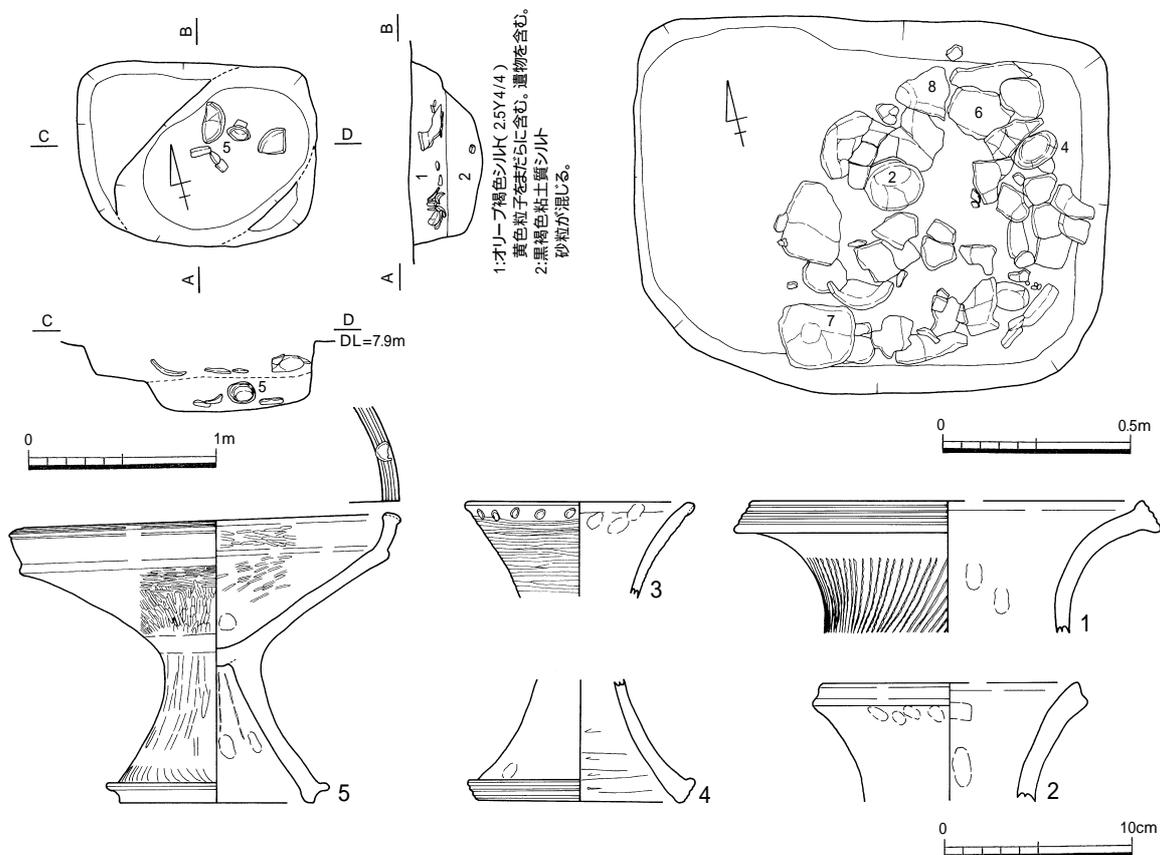
埋土；オリーブ褐色シルト(灰黄色シルト)・黒褐色粘土質シルト(褐色粘土質シルト)

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部10点、底部 5 点、細片約660点)

所見；調査区E -オ-12・17グリッドに位置する土坑である。埋土は上層がオリーブ褐色シルト、下層が黒褐色粘土質シルトである。遺構検出時に於て、オリーブ褐色シルトが黒褐色粘土質シルトを切る状態を確認しており、また不自然な平面形態などから、2つの土坑(上層・下層)による切り合いの可能性を含んでいる。

遺物は上層での出土が多く、上層土坑の床面上から出土状況を確認できた。遺物から弥生 -2期頃の遺構と考えられる。図示したものは1～4である。3は弥生 -2期頃と考えられる長頸壺の口縁部である。1は口縁部に凹線文を施した壺であり、3と共に南側の遺物の下から出土している。2は直口壺であり、口縁部から胴部にかけてほぼ一個体分を出土していると考えられるが、復元は困難であった。4は高杯の脚部である。6は壺の底部であり、内面に縦方向のヘラケズリが認められ、1の底部の可能性が考えられる。7・8は底部であり、7の底面はやや張り出し気味である。また土器片(胴部)の中から拳大程の礫を検出し、南東隅から炭化物の塊を確認している。下層土坑の床面



O2 - 17 図 O2SK207

上からは口縁部に凹線文を施したほぼ完形の高杯(5)が出土しており、弥生 期頃の遺構と考えられる。尚、SK207から出土している遺物の多くには鉄分が付着しており、堆積の状況については検討を要すると考えられる。

O2SK209(O2-18~20図)

時期；弥生 ~ 形状；隅丸方形 主軸方向；N-84 °W

規模；1.68×1.31m 深さ 0.73m 断面形態；箱形

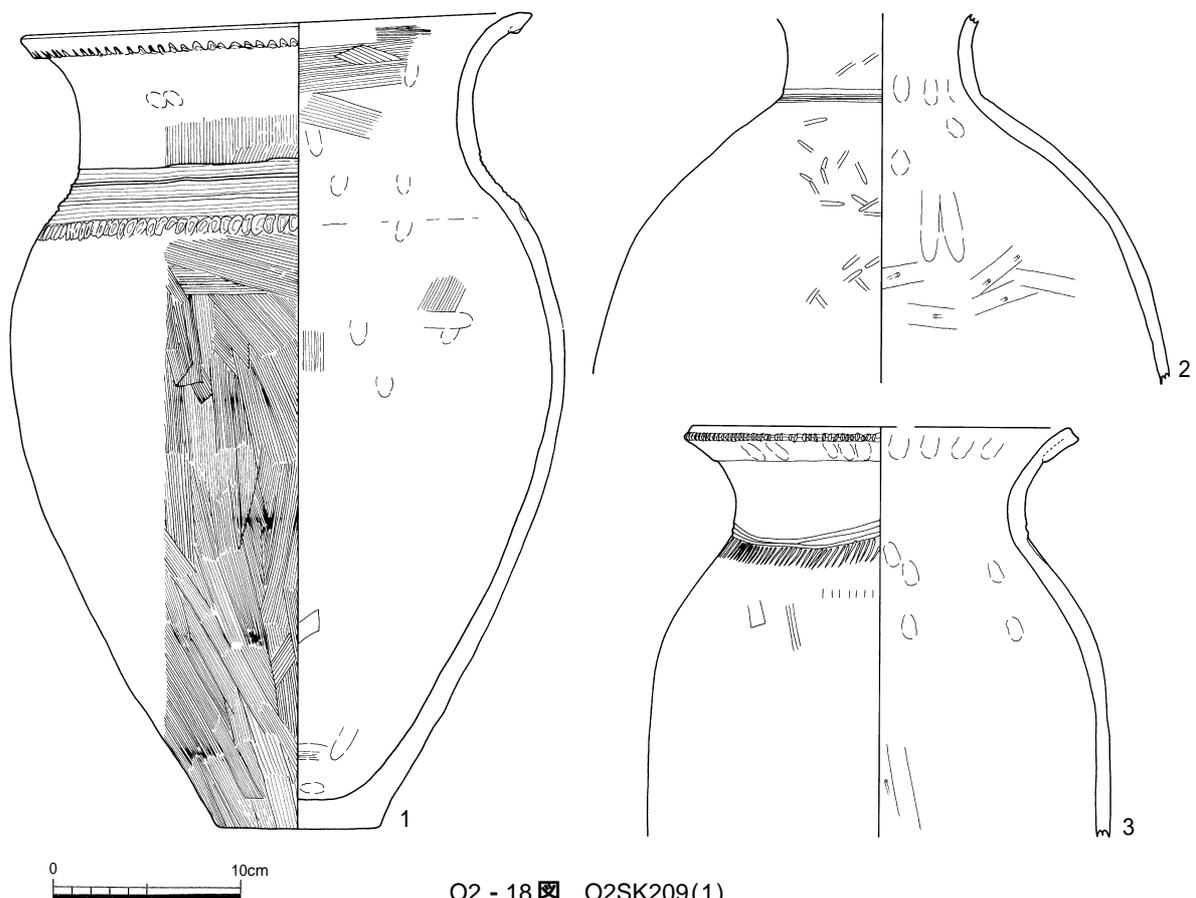
埋土；暗オリーブ褐色シルト・黒褐色砂質シルト

付属遺構；なし 機能；貯蔵穴？

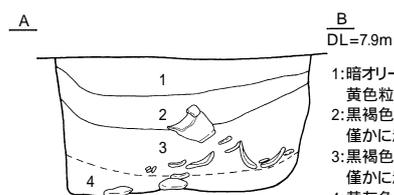
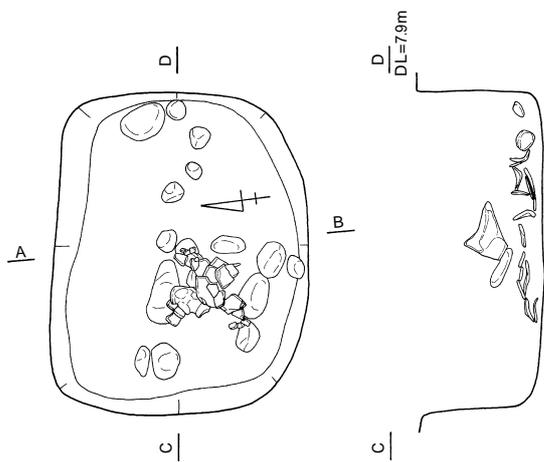
出土遺物；弥生土器(口縁部15点、底部14点、細片約750点)

所見；調査区E -E-14・15グリッドに位置する土坑である。埋土は上層が暗オリーブ褐色シルト、下層が黒褐色砂質シルトである。

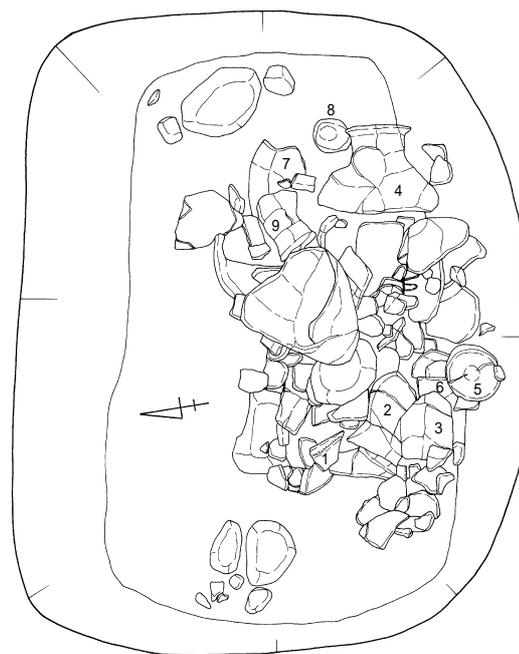
遺物は下層～床面からの出土が多く、櫛描直線文の下に列点文又は同波状文を施した土器片等が出土しており、床面上から出土状況を確認できた。遺物から弥生 ~ 期頃の遺構と考えられる。図示したものは1~9である。1は弥生 期頃と考えられるほぼ完形の甕であり、しっかりとした櫛描直線文の下に列点文を施している。胴部に煤が付着しており、煮炊きに使用していた可能性が考えられる。2は頸胴部境に櫛描直線文を施した壺であり、ST203から胴部の一部が出土している。



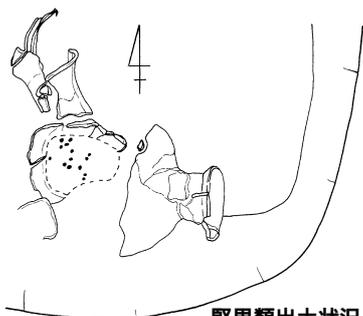
O2 - 18 図 O2SK209(1)



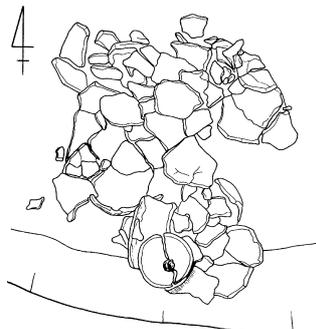
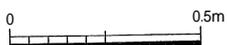
- 1: 暗オリーブ褐色シルト(2.5Y3/3)
黄色粒子がまだらに混じる。
- 2: 黒褐色シルト(2.5Y3/2)
僅かに炭化物・焼土粒を含む。
- 3: 黒褐色砂質シルト(2.5Y3/2)
僅かに炭化物・黄色ブロックを含む。
- 4: 黄灰色砂質シルト(2.5Y4/1)
黄・茶色シルトをまだらに含む。



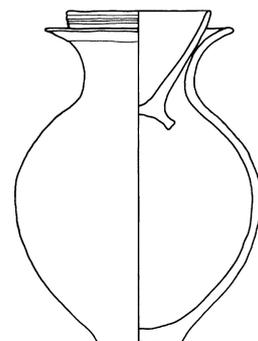
遺物出土状況1



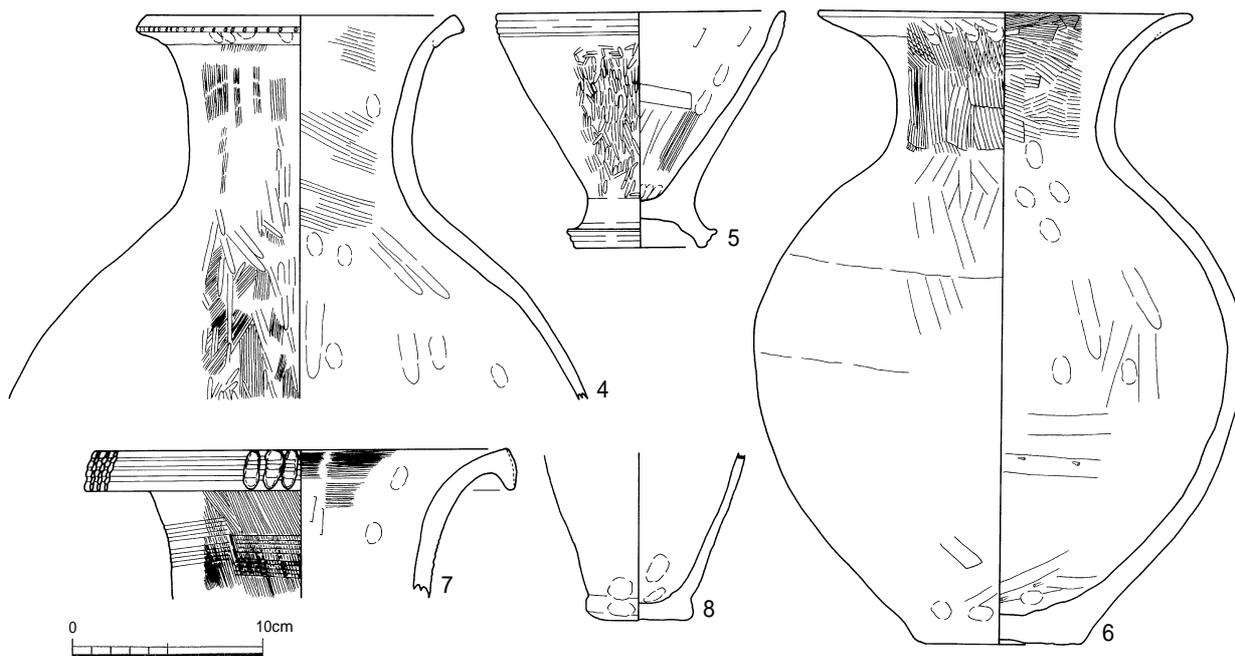
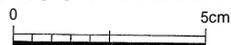
堅果類出土状況



遺物出土状況2



壺(6)・鉢(5)出土状況復元図



O2 - 19 壺 O2SK209(2)

3は「南四国型」甕の可能性が考えられる。4は貼付口縁の壺である。ほぼ一個体分を出土し、中から堅果類(イチイガシ)が出土している。5はほぼ完形の鉢であり、壺(6)の口縁部から底部を下にして重なった状態で出土している。6はほぼ完形の壺であり、口縁部に鉢(5)が底部を下にして重なった状態で出土している。7は凹線文を施した壺の口縁部である。8は小型土器と考えられる壺の底部である。9は口縁端部に凹線文を施したほぼ完形の高杯である。また最下層から香川高松平野からの搬入品の可能性が考えられる土器片が出土している。凡そ4個体分程の壺・甕を出土しており、機能として貯蔵穴の可能性が考えられる。

O2SK210(O2-20図)

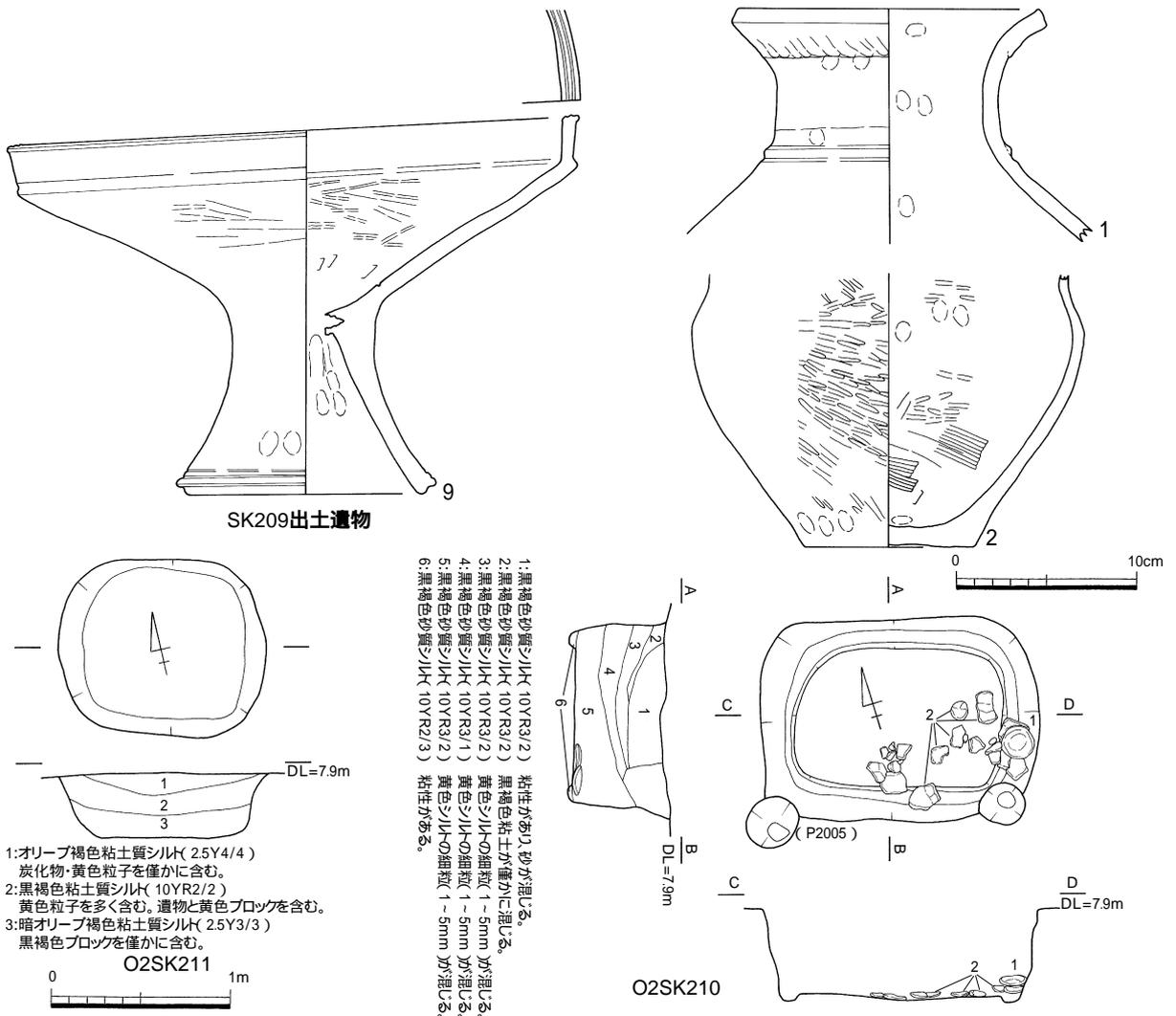
時期；弥生 ~ 形状；隅丸方形 主軸方向；N-72°W

規模；1.53×1.10m 深さ0.50m 断面形態；箱形

埋土；黒褐色砂質シルト

付属遺構；周溝・ピット？ 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部1点、底部1点、細片約110点)



所見；調査区E -オ-16グリッドに位置する土坑である。遺構の南端にかかるピット(P2005・他)はSB204の一部であるが、切り合い関係は不明である。床面から幅約8～12cm、深さ約3～4cmを測る周溝を検出している。埋土は粘性のある黒褐色砂質シルトで、遺物は出土していない。またSB204P8の下面に位置する南東隅の床面から遺構に伴う可能性が考えられるピットを検出している。埋土は砂粒を多く含む黒褐色粘土質シルトであり、遺物は弥生土器の細片が1点出土している。

遺物は下層～床面からの出土が多く、床面上からある程度出土状況を確認できた。遺物から弥生～期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生～期頃と考えられる壺(1)の口縁部と、鉢(2)の可能性が考えられる胴底部であり、床面上に散布した状態で出土している。

O2SK211(O2-20図)

時期；弥生～？ 形状；隅丸方形 主軸方向；N-78°W

規模；1.13×0.97m 深さ0.36m 断面形態；逆台形

埋土；オリブ褐色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルト・暗オリブ褐色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器(細片約30点)

所見；調査区E -オ-16・21グリッドに位置する土坑である。埋土は上層がオリブ褐色粘土質シルト、中層が黒褐色粘土質シルト、下層が暗オリブ褐色粘土質シルトである。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。それぞれの層位で取り上げを行ない、中層から弥生土器の細片を数点、下層から十数点程を確認している。遺物から時期を判断することは困難であったが、胎土等から弥生～期頃の遺構の可能性が考えられる。

O2SK212(O2-21図)

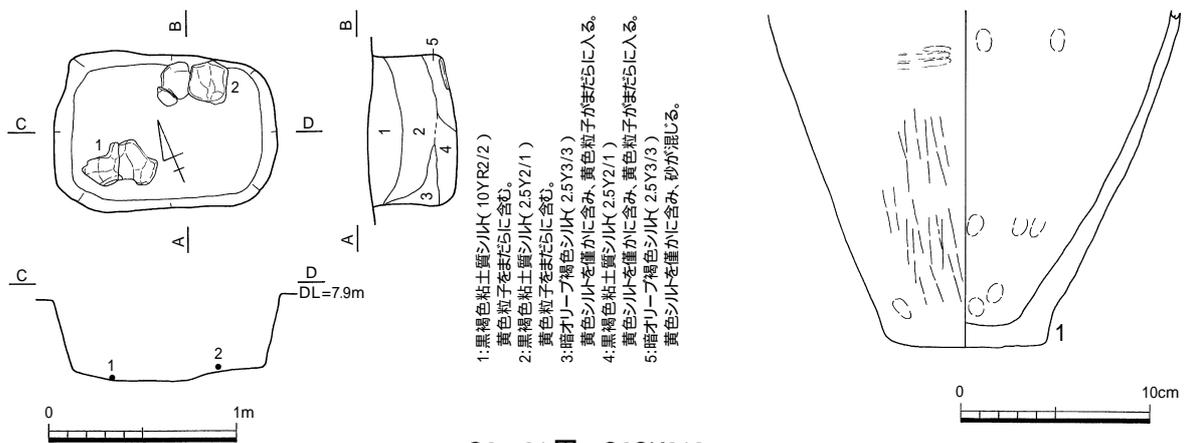
時期；弥生～ 形状；隅丸方形 主軸方向；N-68°W

規模；1.17×0.80m 深さ0.45m 断面形態；箱形

埋土；黒褐色粘土質シルト・暗オリブ褐色シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器(底部2点、細片約160点)



O2 - 21 図 O2SK212

所見；調査区E -オ-22グリッドに位置する土坑である。埋土は上層が黒褐色粘土質シルトで、下層に暗オリーブ褐色シルトが混じる互層堆積と考えられる。

遺物は下層～床面からの出土が多く、床面上からある程度の出土状況を確認できた。遺物から弥生～期頃の遺構と考えられる。図示したものは胴部にタタキ目が僅かに残る甕の底部(1)である。

O2SK214(O2-22図)

時期；弥生～？ 形状；隅丸方形 主軸方向；N-41°E

規模；1.06×0.76m 深さ0.20m 断面形態；逆台形

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器(細片3点)

所見；調査区E -エ-23グリッドに位置する土坑である。

出土した遺物は弥生土器の細片が3点のみである。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生～期頃の遺構の可能性が考えられる。

O2SK215(O2-22図)

時期；弥生～？ 形状；隅丸方形 主軸方向；N-77°W

規模；1.28×0.94m 深さ0.53m 断面形態；箱形

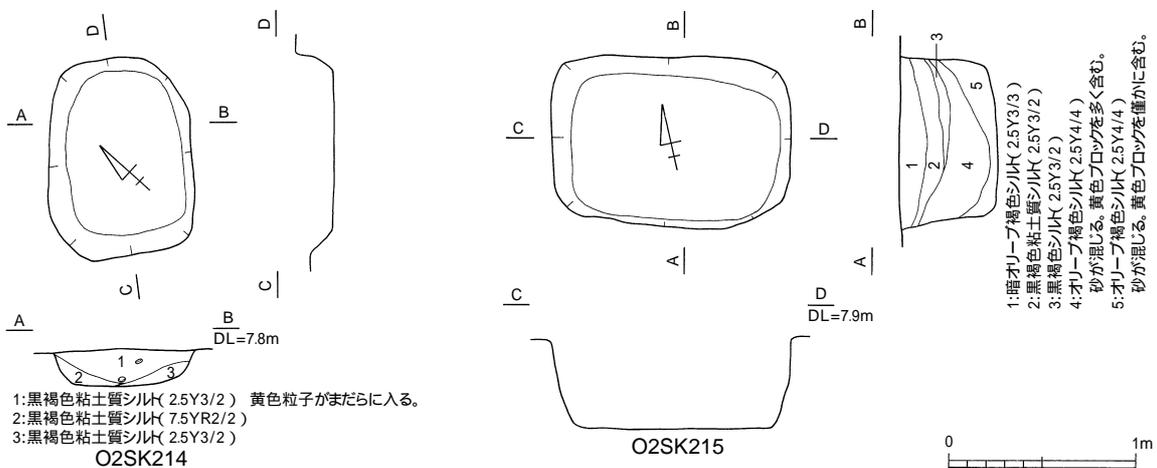
埋土；暗オリーブ褐色シルト・黒褐色粘土質シルト・オリーブ褐色シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；なし

所見；調査区E -エ-24グリッドに位置する土坑である。埋土は上層が暗オリーブ褐色シルト、中層が黒褐色粘土質シルト、下層がオリーブ褐色シルトである。

比較的しっかりとした掘方の遺構でありながら遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生～期頃の遺構の可能性が考えられる。



O2 - 22 図 O2SK214・215

O2SK216(O2-23図)

時期；弥生 ~ ? **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-88°W

規模；1.75×1.20m **深さ** 0.58m **断面形態**；逆台形

埋土；黒褐色シルト質粘土・オリーブ褐色砂質シルト・黒褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；弥生土器(細片2点)

所見；調査区E -エ-25、オ-21グリッドに位置する土坑である。埋土は上層が黒褐色シルト質粘土、中層がオリーブ褐色砂質シルト、下層が黒褐色粘土質シルトである。

比較的しっかりとした掘方の遺構でありながら、遺物は弥生土器の細片が2点のみである。中層から櫛描直線文の下に列点文を施した土器片が出土している。時期を判断する遺物が僅少であったが、弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

O2SK217(O2-23図)

時期；弥生 ~ ? **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-21°E

規模；1.78×1.52m **深さ** 0.38m **断面形態**；箱形

埋土；オリーブ褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；なし

所見；調査区E -ケ-5グリッドに位置する土坑である。埋土はオリーブ褐色系を基調とした互層堆積と考えられ、上層に黒褐色シルトが混じっている。

比較的しっかりとした掘方の遺構でありながら遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

北端にかかるピットは土坑に伴わない可能性が考えられる。埋土は黄褐色シルトであり、遺物は出土していない。

O2SK219(O2-11図)

時期；弥生 ~ ? **形状**；溝状 **主軸方向**；N-25°E

規模；3.33×0.32m **深さ** 0.12m **断面形態**；U字状

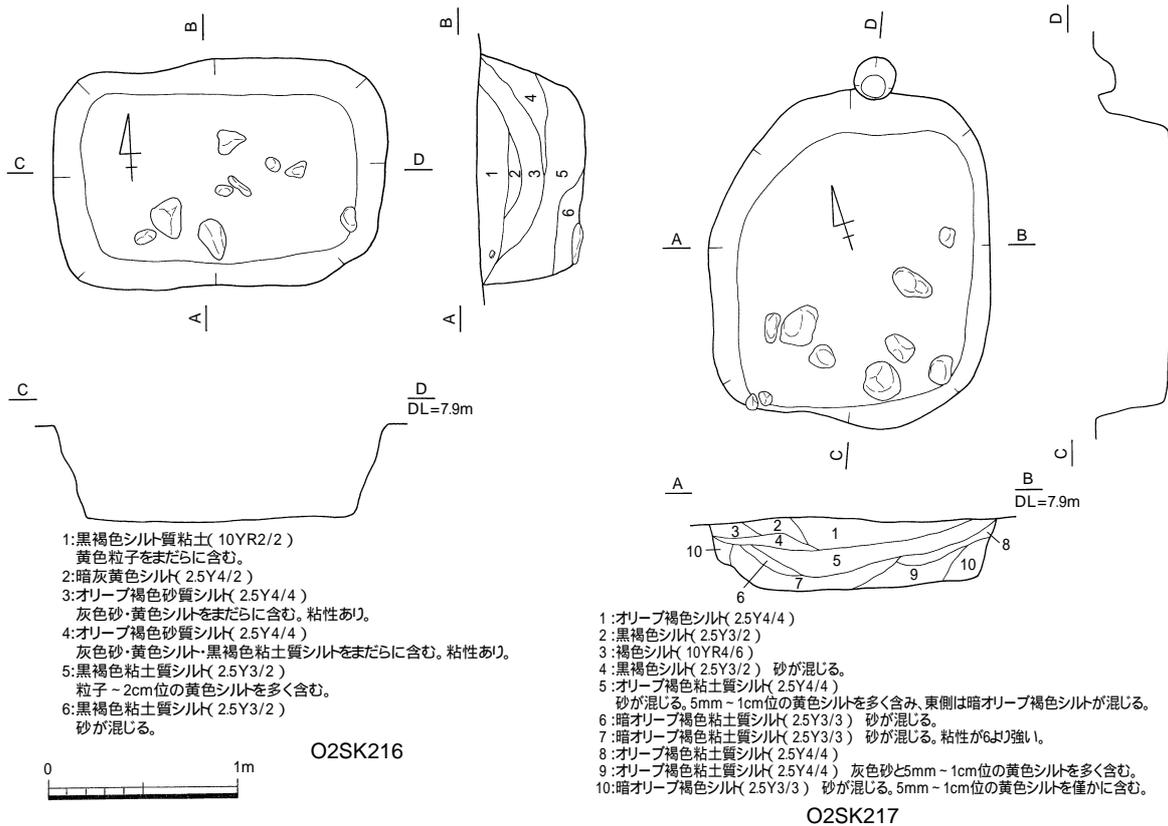
埋土；黒褐色シルト質粘土

付属遺構；SB205 **機能**；不明

出土遺物；弥生土器(底部1点、細片約10点)

所見；調査区E -ケ-9グリッドに位置し、SK220を切り、SB205に伴う可能性が考えられる溝状土坑である。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、下層での出土が多かった。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。



O2 - 23 図 O2SK216・217

O2SK220(O2-12図)

時期；弥生 ~ ? **形状**；溝状 **主軸方向**；N-80°W

規模；6.10×0.76m **深さ** 0.28m **断面形態**；逆台形

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；SB206 **機能**；不明

出土遺物；弥生土器(底部1点、細片約20点)

所見；調査区E -ケ-9・10グリッドに位置し、SK219に切られ、SB206に伴う可能性が考えられる溝状土坑である。床面上から約15~20cm位の礫の投げ込みを確認し、東端の落ち込み部分から約25cm位の礫を集中して検出している。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、礫に混じって甕?の底部が床面上から出土している。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

O2SK221(O2-24図)

時期；弥生 ~ ? **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-70°W

規模；0.66×0.59m **深さ** 0.28m **断面形態**；逆台形

埋土；オリーブ褐色シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器(細片 6 点)

所見；調査区E -コ-6グリッドに位置し、平面形態はやや円形状に近い隅丸方形を呈した小型の土坑である。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、上層での出土が多かった。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

O2SK222(O2-24図)

時期；弥生 ~ ? 形状；不整形 主軸方向；N-90°E

規模；1.06×1.00m 深さ 0.20m 断面形態；逆台形

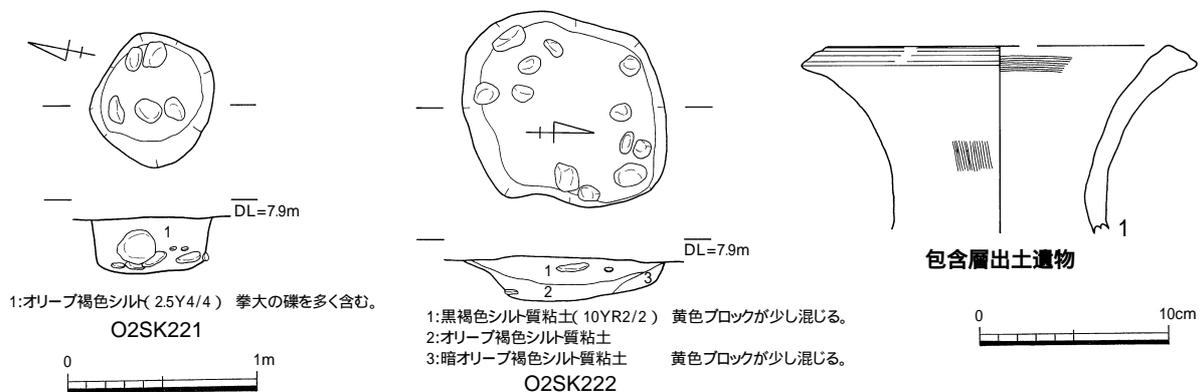
埋土；黒褐色シルト質粘土・オリーブ褐色シルト質粘土

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器(細片 5 点)

所見；調査区E -ケ-10・15グリッドに位置し、平面形態はやや隅丸方形に近い不整形を呈した土坑である。埋土は上層が黒褐色シルト質粘土、下層がオリーブ褐色シルト質粘土であり、床面上から上層にかけて約9cmの厚みの炭化物塊を確認している。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。



O2 - 24 図 O2SK221・222 / O2 区包含層出土遺物

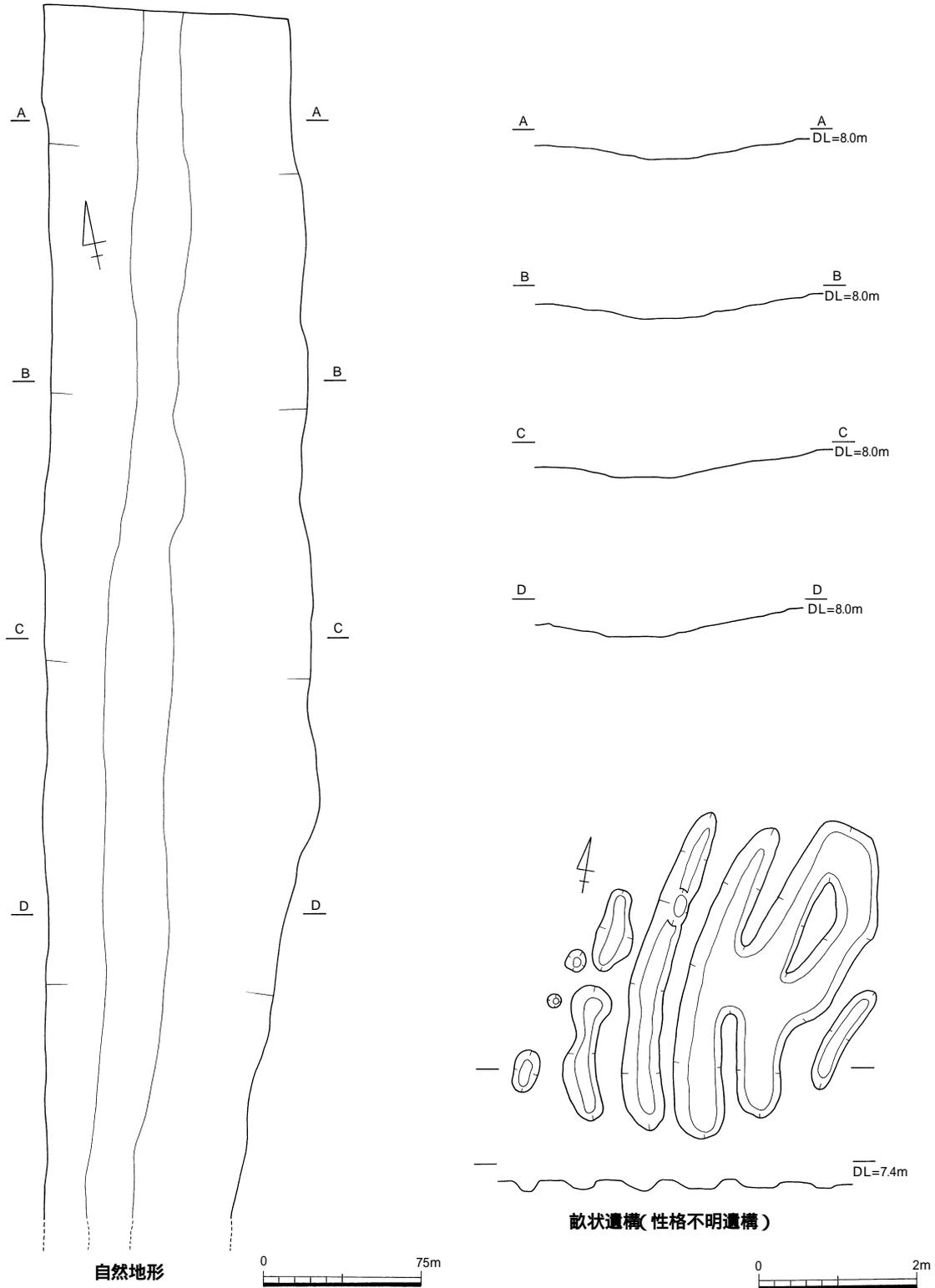
(4) 包含層出土遺物

本調査区に於て包含層出土遺物は弥生時代中期末～後期頃を中心に口縁部・底部を含む土器片が約200点程出土し、西側一帯の黒色粘土層からも僅かながら確認している。図示したものは弥生 ~ 期頃と考えられる壺(1)の口縁部である。

調査区西側に黒色土の落ち込みを確認しており、遺物は殆ど出土しなかったが、弥生時代に於ける自然地形の一部と考えられる。基底面は縄文時代に遡ると考えられ、縄文土器の可能性が考えられる土器片が出土している。西域に展開していたと考えられる水田と集落との境界部を形成してい

た可能性が考えられる。

また調査区南側で黑色粘土層に掘り込まれた畝状遺構を検出している。上面から約40cm程下面で検出し、遺物は出土していない。自然地形の可能性を含んでおり、時期・性格共に不明である。



O2 - 25 図 O2区自然地形 畝状遺構

3. O2区古代の遺構と遺物

(1) 溝跡

本調査区に於て古代の溝跡は6条を検出している。時期を判断する遺物が僅少であったが、埋土の状態や弥生時代後期中葉頃まで存在していたと考えられる大溝の上面から検出していることなどから古代の溝跡の可能性が考えられる。また接続する可能性が考えられるO1区に於ても同様の溝状遺構を検出している。

O2-4表 O2区古代溝一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	接 続	時 期	備 考
O2SD201	56.40×0.80～1.50×0.15	-	皿状	N-61°-E N-75°-W	O1SD101	古代?	
O2SD202	22.20×0.70～1.00×0.18～0.26	-	U字状	N-47°E N-77°-W	不明	古代?	
O2SD203	[36.90]×1.00×0.20～0.30	-	皿状	N-67°-E	不明	古代?	
O2SD205	7.40×0.30～0.50×0.14	-	逆台形	N-86°E	不明	古代?	
O2SD206	11.40×1.00×0.11	-	皿状	N-62°E	O1SD103	古代?	
O2SD206'	6.15×0.32～0.66×0.10	-	皿状	N-70°E	O2SD206?	古代?	
O2SD207	16.80×0.40～1.00×0.21	-	皿状	N-63°E	O1SD102	古代?	
O2SD207'	10.40×1.00×0.10	-	皿状	N-67°E	O2SD207?	古代?	

O2SD201(O2-26図)

時期；古代？ **方向**；N-61°E、N-75°W

規模；56.40×0.80～1.50m **深さ** 0.15m **断面形態**；皿状

埋土；黄灰褐色シルト

床面標高；東端 7.360m、西端 7.251m

接続；O1SD101

出土遺物；弥生土器(細片24点)

所見；調査区E -セ-20・24・25、チ-23～25、ツ-10・14・15・18・19・21～23、テ-2～4・6・7グリッドに位置し、SR202の上面を切り、東端をO1SD101に接続すると考えられる溝である。北東方向から南東方向にかけて横断し、調査区西端に至っている。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。図示したものは香川高松平野からの搬入品の可能性が考えられる高杯(1)であり、SD203出土の高杯と同一個体である。遺物から時期を判断することは困難であったが、埋土の状態などから古代の遺構の可能性が考えられる。

O2SD202(O2-26図)

時期；古代？ **方向**；N-47°E、N-77°W

規模；22.20×0.70～1.00m **深さ** 0.18～0.26m **断面形態**；U字状

埋土；明黄褐色シルト

床面標高；東端 7.294m、西端 7.198m

接続；不明

出土遺物；弥生土器(細片 8点)

所見；調査区E -チ-18・23～25、ツ-13・17・18・21グリッドに位置し、SR202の上面を切る溝である。断面形態は比較的しっかりとしたU字状を呈しているが、途中で検出を終えている。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から時期を判断することは困難であったが、埋土の状態などから古代の遺構の可能性が考えられる。

O2SD203(O2-26図)

時期；古代？ **方向**；N-67°E

規模；(36.90)×1.00m **深さ** 0.20～0.30m **断面形態**；皿状

埋土；灰色砂質シルト

床面標高；東端 7.273m、西端 7.079m

接続；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部 3点、細片約130点)

所見；調査区E -テ-4・5・7～13、ツ-21・22、ヌ-1・2グリッドに位置し、SR202の上面を切る溝である。途中で検出が困難となるが、再び検出し調査区南端に至っている。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。下層から弥生土器の細片を約60点程確認している。細片の中にタタキ目を残す土器片が数点程出土している。図示したものは香川高松平野からの搬入品の可能性が考えられる高杯(1)であり、SD201出土の高杯と同一個体である。遺物から時期を判断することは困難であったが、埋土の状態などから古代の遺構の可能性が考えられる。

O2SD205(O2-26図)

時期；古代？ **方向**；N-86°E

規模；7.40×0.30～0.50m **深さ** 0.14m **断面形態**；逆台形

埋土；黒灰色粘土質シルト

床面標高；東端 7.325m、西端 7.359m

接続；不明

出土遺物；なし

所見；調査区E -チ-14・15グリッドに位置する溝である。調査区西端から7.4m程の地点で検出を終えている。

遺物は出土しなかったが、埋土の状態などから古代の遺構の可能性が考えられる。

O2SD206(O2-26図)

時期；古代？ **方向**；N-62°E

規模；11.40×1.00m **深さ** 0.11m **断面形態**；皿状

埋土；褐色シルト

床面標高；東端 7.350m、西端 7.409m

接続；O1SD103

出土遺物；弥生土器(細片 2 点)

所見；調査区E -テ-10・12～14・17・18グリッドに位置し、SR202の上面を切り、東端をO1SD103に接続すると考えられる溝である。

出土した遺物は弥生土器の細片が 2 点のみである。遺物から時期を判断することは困難であったが、埋土の状態などから古代の遺構の可能性が考えられる。

調査区の南端に本遺構と接続する可能性が考えられるSD206'が存在している。検出長は約6.15m、幅約0.32～0.66m、深さ約10cmを測り、SR203の上面を切っている。埋土は礫を含む黒灰色粗砂であり、遺物は出土していない。

O2SD207(O2-26図)

時期；古代？ **方向**；N-63°E

規模；16.80×0.40～1.00m **深さ** 0.21m **断面形態**；皿状

埋土；褐色シルト

床面標高；東端 7.498m、西端 7.389m

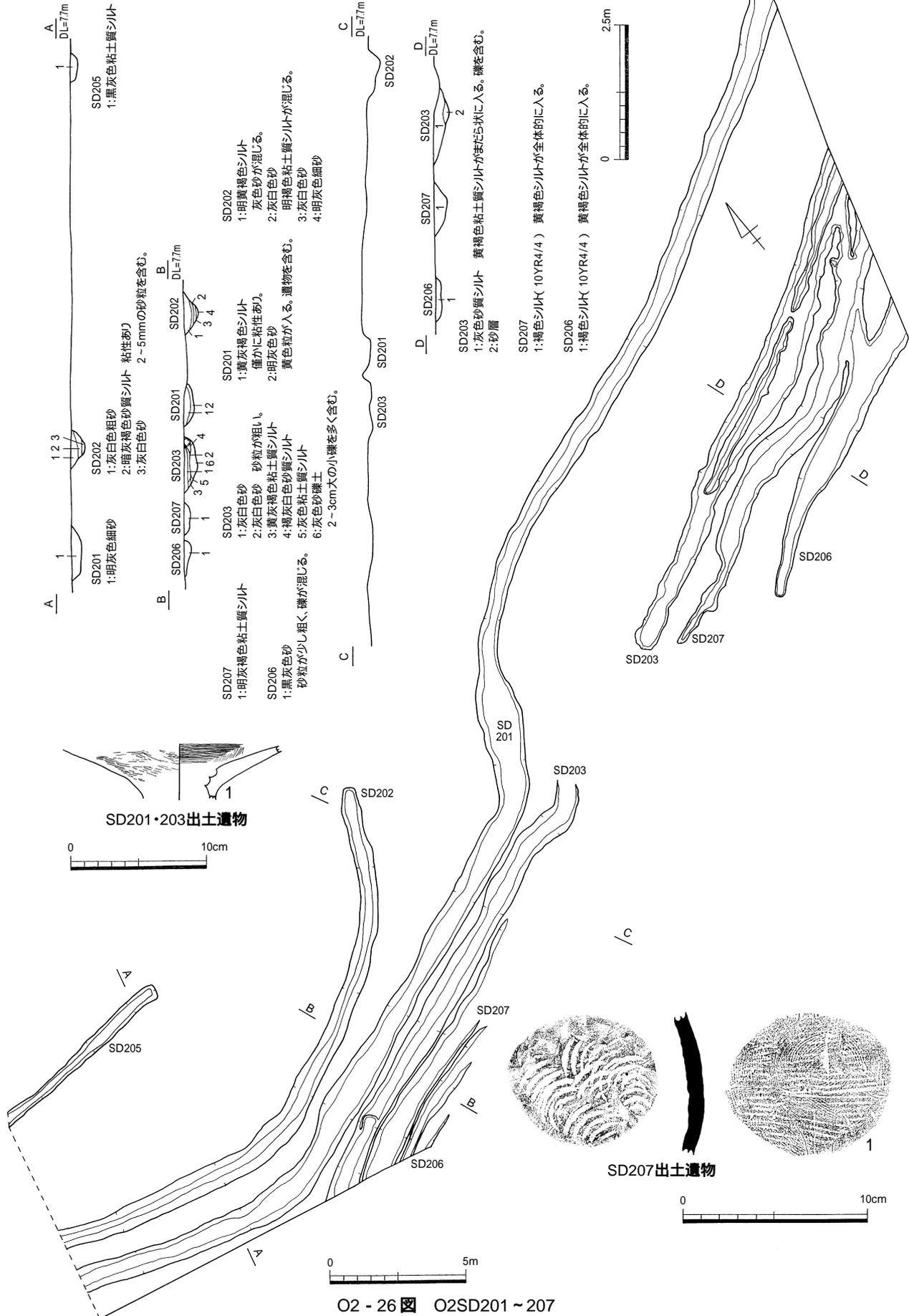
接続；O1SD102

出土遺物；須恵器(細片 1 点)、弥生土器(口縁部 1 点、底部 1 点、細片16点)

所見；調査区E -テ-8～14・16グリッドに位置し、SR202の上面を切り、東端をO1SD102に接続すると考えられる溝である。

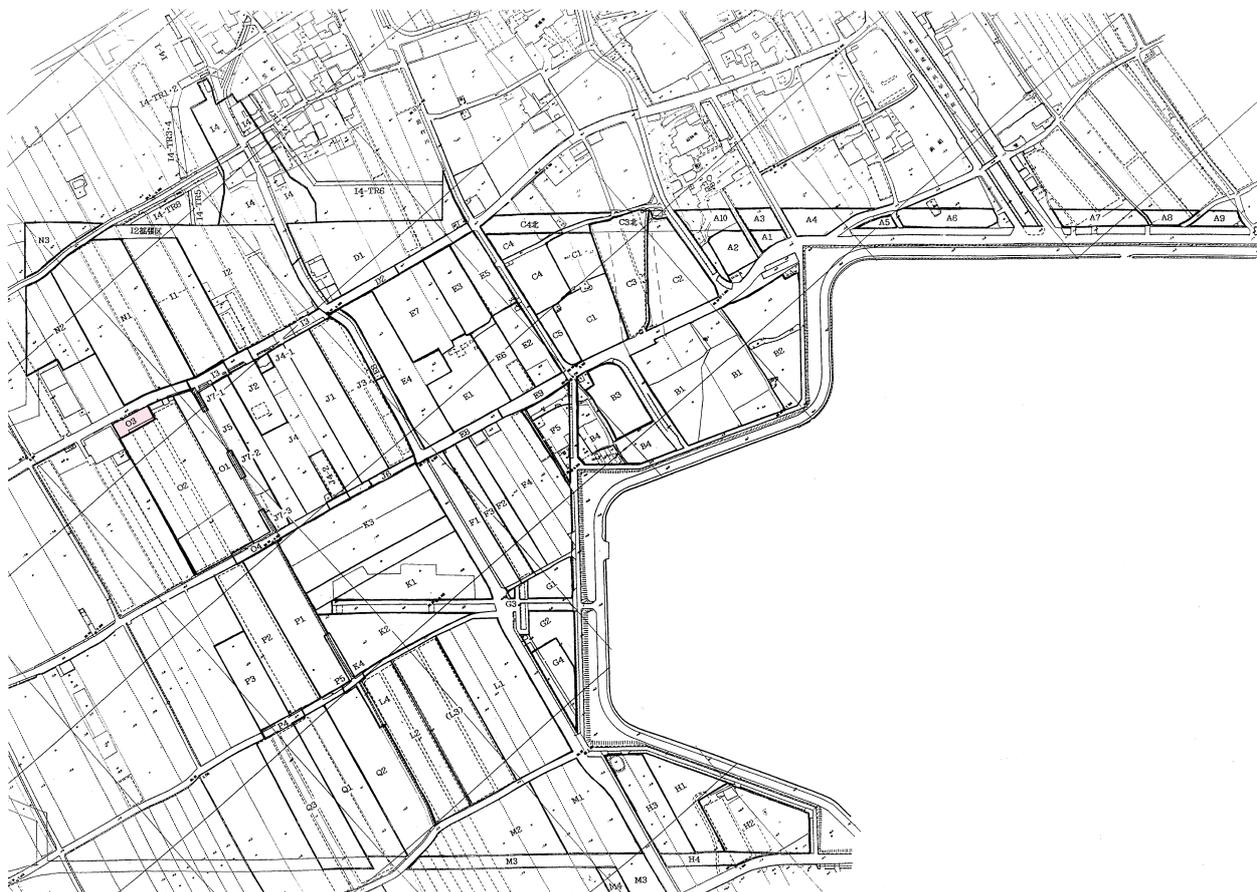
出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から古代の遺構の可能性が考えられる。図示したものは須恵器片(1)である。

調査区の南端に本遺構と接続する可能性が考えられるSD207'を検出している。検出長は約10.40m、幅約1.00m、深さ約10cmを測り、SR203の上面を切っている。埋土は明灰褐色粘土質シルトであり、遺物は出土していない。



O2 - 26 図 O2SD201 ~ 207

03 区の調査



1. O3区の概要

概要

O3区は今次調査の中で、O2区内の北西端に位置し、北側に道路部分を挟んでN区と境を接する農舎跡地の小調査区である。遺構は検出していないが、弥生時代中期末～後期頃と考えられる集落の西端部に位置している。中央部に黒色土の落ち込みを確認し、西域に展開していたと考えられる水田との境界部を形成していたと考えられる。

調査担当者 坂本憲昭、堅田 至

執筆担当者 宮地啓介

調査期間 平成11年6月下旬?～平成11年7月1日?

調査面積 312m²

時代 弥生時代

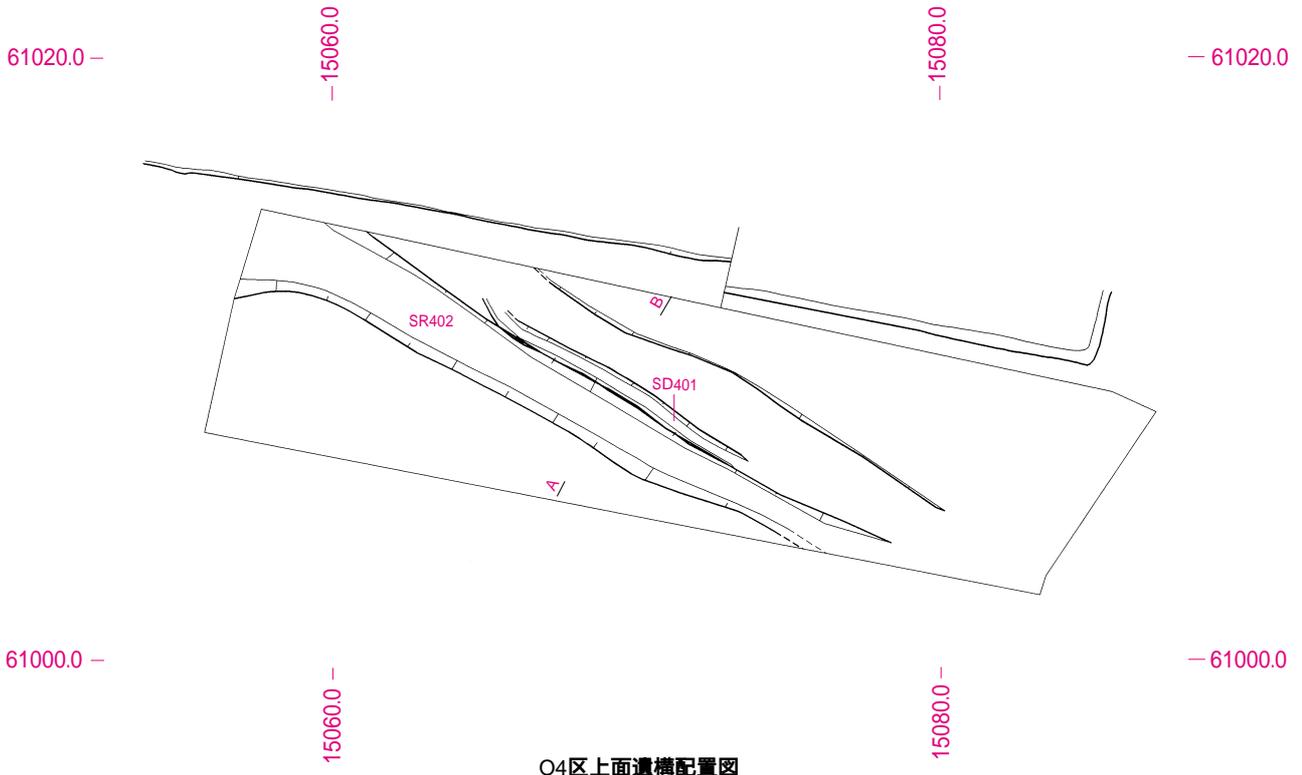
検出遺構 なし



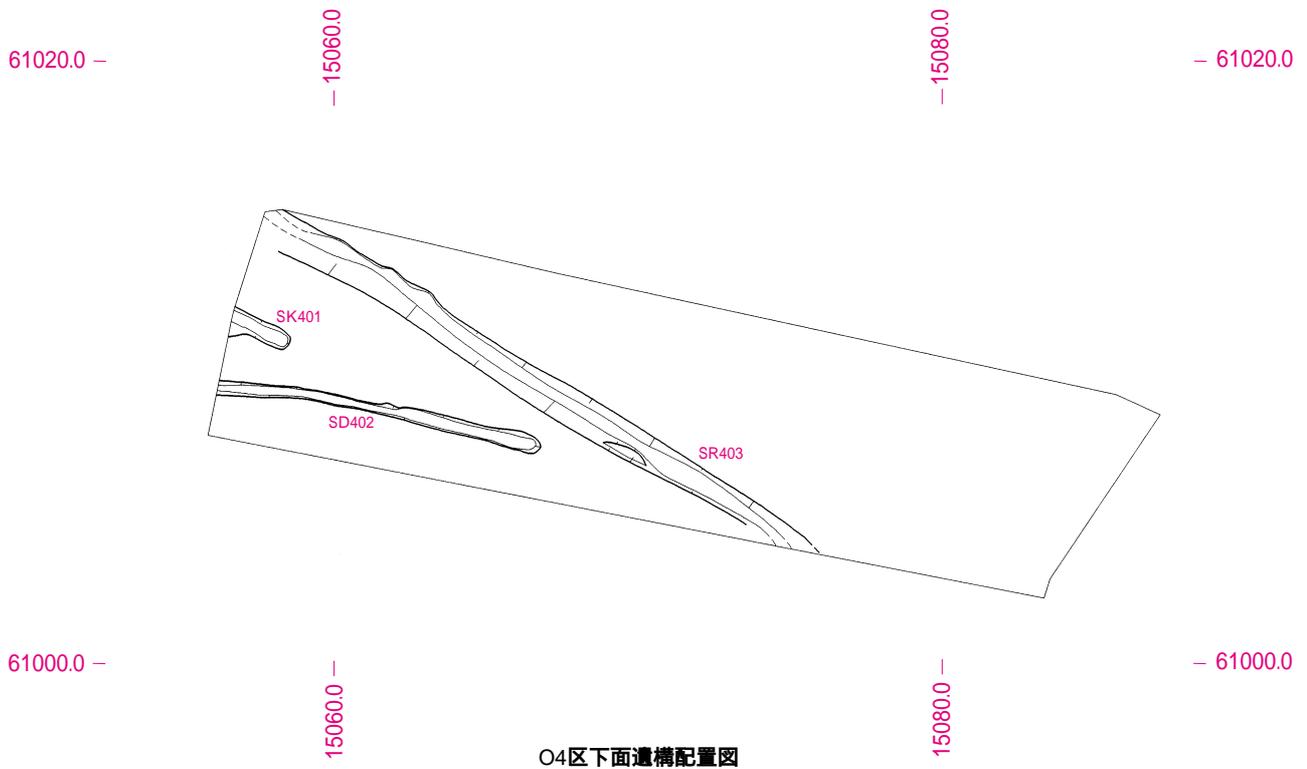
O3 - 1 図 O3区基本層序

04 区の調査





O4区上面遺構配置図



O4区下面遺構配置図

O4 - 1 図 O4 区遺構全体配置図(S = 1/250)

1. O4区の概要

概要

O4区(O4-1図)は今次調査の中で、北側をO1・2区に、南側をP区に挟まれた道路・水路の下面に位置する小調査区である。K3区から続く大溝の検出が予想され、溝状遺構を数条確認しているが、明瞭な切り合い関係を認めることは困難であった(O4-2図)。遺構は上層・下層より検出し、弥生時代中期末～後期頃に存在していた可能性が考えられる。溝状遺構は東側の河床が浅くなり、断面形も緩やかな立ち上がりを呈しており、大きく広がりながら東側の低湿地を形成していたと考えられる。またO2区に於てSR203として大溝の一端を検出しており、西域に展開していたと考えられる水田に向かい、用排水路としての機能を果たしていた可能性が考えられ、集落と大溝の関係を考える上で貴重な資料と考えられる。

調査担当者 坂本憲昭

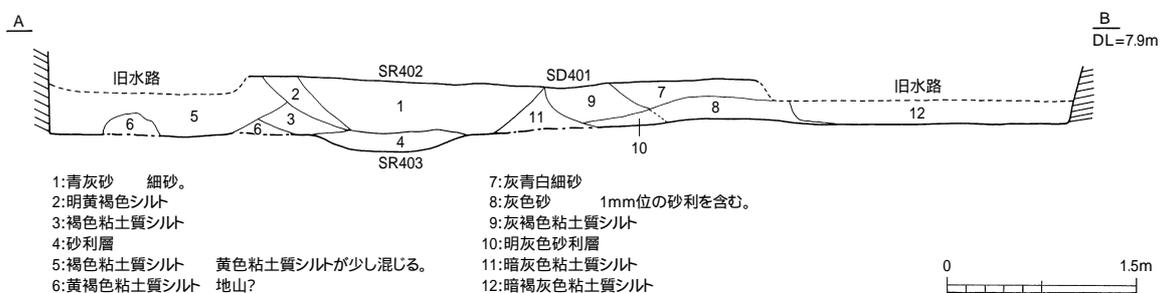
執筆担当者 宮地啓介

調査期間 平成13年1月17日?～平成13年1月24日?

調査面積 205m²

時代 弥生時代中期末～後期

検出遺構 弥生時代 土坑1基、溝2条、大溝3条



O4 - 2 図 O4SR402・403 SD401

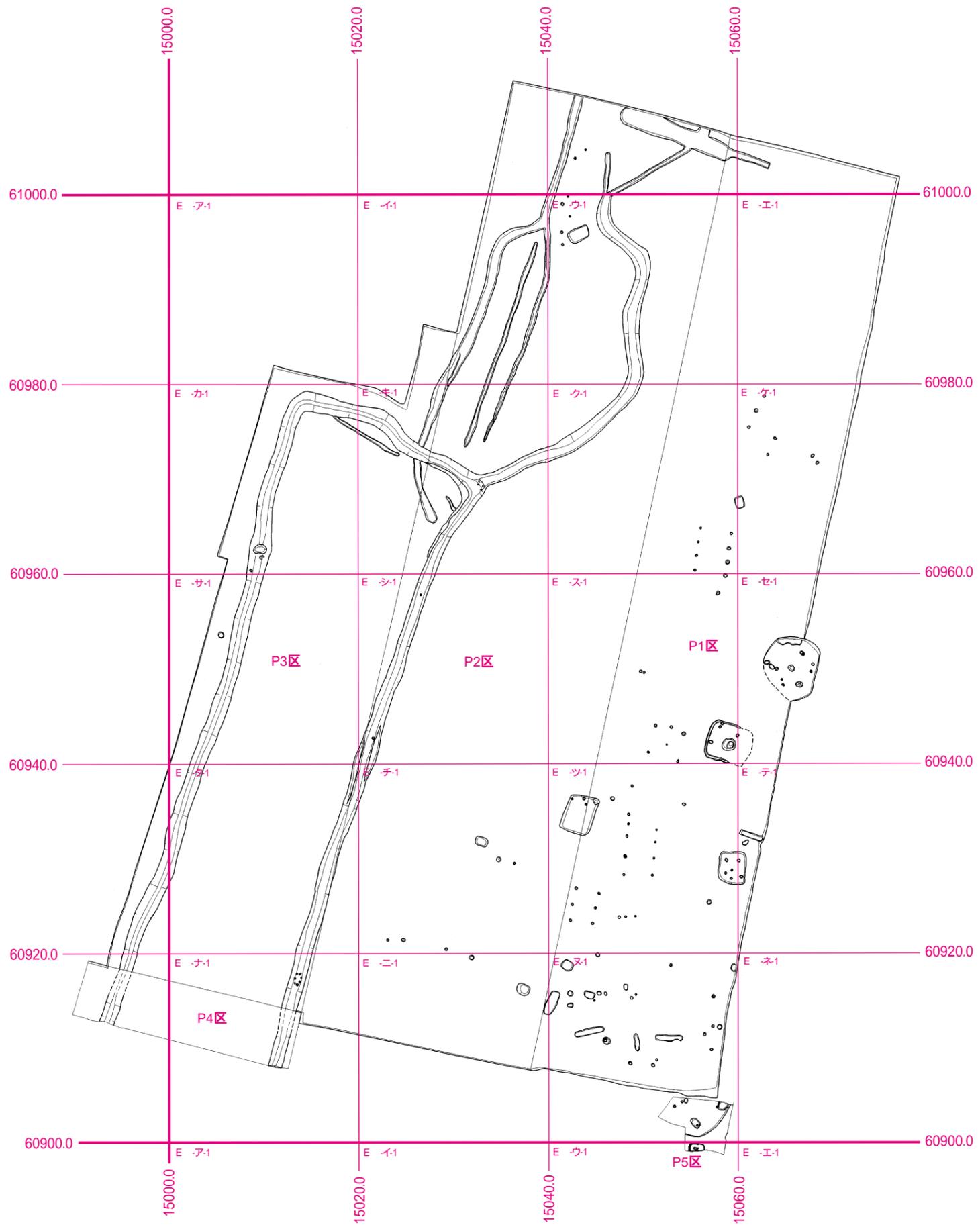
O4-1表 O4区土坑一覧

遺構番号	平面形	断面形	規 模			主軸方向	埋 土	切合関係	時 期	備 考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)					
O4SK401	溝状	逆台形	[2.04]	0.68	19.0	N-64°W	黒色粘土質シルト		弥生	

O4-2表 O4区溝一覧

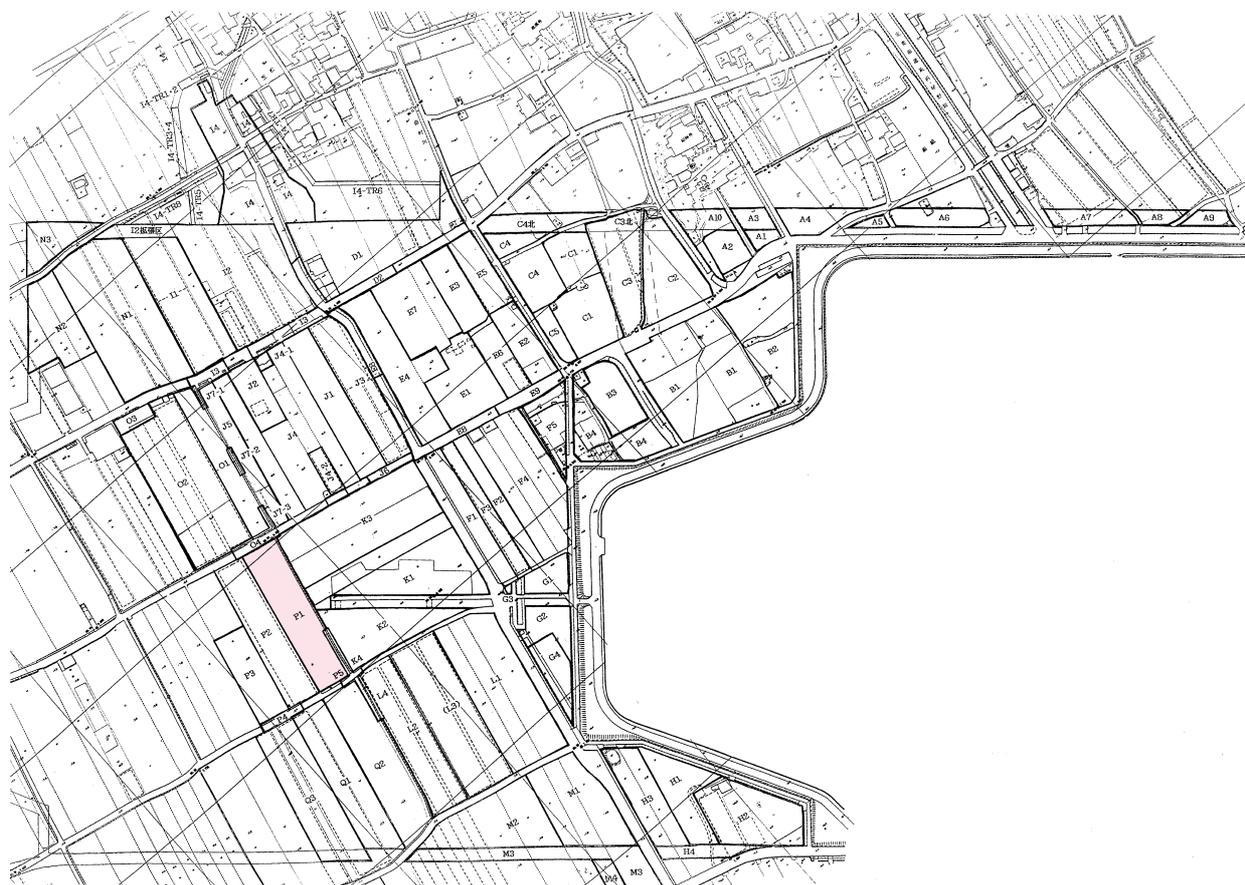
遺構名	長さ×幅×深さ (m)	平面形	断面形	主軸方向	接 続	時 期	備 考
O4SD401	10.00×0.60×0.27	-	U字状	N-59°-W		弥生 -2~	
O4SD402	10.65×0.64×0.07	-	皿状	N-80°-W		弥生	

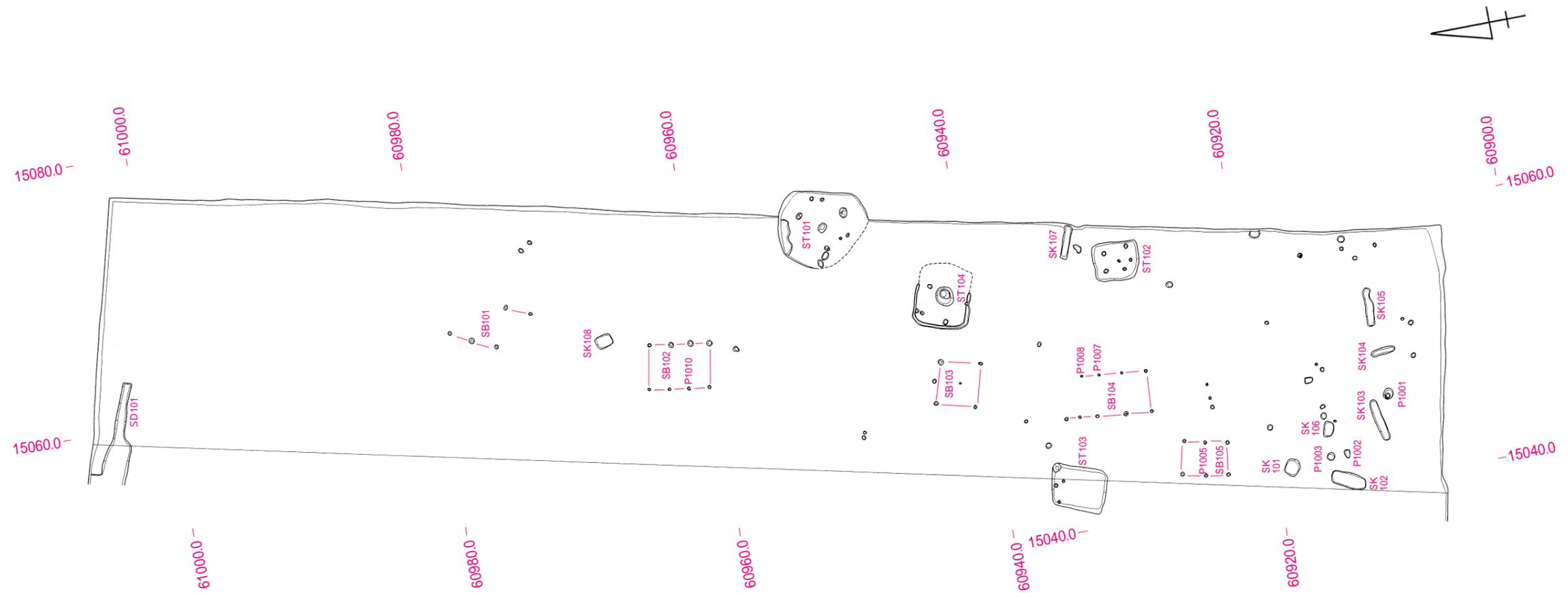
P区の調査



P - 1 図 P区遺構全体配置図(S=1/500)

P1 区の調査





P1 - 1 图 P1区遺構全体配置図(S=1/250)

1. P1区の概要

概要

P1区(P1-1図)は今次調査の中で、調査対象区域の西側に位置し、東側をK区、西側をP2区、南側にP5区を隔ててQ1区と境を接する調査区である。基盤層は礫層であり、地形的には北西部の標高が低く、自然の落ち込みを呈している。位置的にはK区を中心に展開している弥生時代中期末～後期頃と考えられる集落のほぼ西端に位置していると考えられ、遺構密度はやや低い。

調査担当者 前田光雄(坂本裕一、小野由香)

執筆担当者 宮地啓介

調査期間 平成9年7月22日～平成9年8月29日(平成9年5月19日～平成9年5月21日)

調査面積 1,926m²

時代 弥生時代中期末～後期

検出遺構 弥生時代 竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡5棟、土坑8基、溝1条、ピット66個

2. P1区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

本調査区に於て竪穴住居跡は4軒を検出しており、平面形態が長方形を呈する竪穴住居跡は3軒を検出している。何れも弥生時代後期頃の竪穴住居跡と考えられ、K区を中心に展開している弥生時代中期末～後期頃と考えられる集落のほぼ西端に位置していると考えられる。方形を呈した小型の竪穴住居跡と考えられるST102からは規模に対して多くの遺物を出土している。

P1区 P1区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(m ²)	平面形	主軸方向	時期	備考
P1ST101	6.63 × [5.70]	0.10 ~ 0.26	[34.5]	円形	-	弥生V	
P1ST102	3.75 × 2.71	0.12 ~ 0.20	10.2	長方形	N-8 °E	弥生V	
P1ST103	4.06 × 3.20	0.38	13.0	長方形	N-18 °E	弥生V	
P1ST104	[4.90] × [4.12]	-	[20.2]	長方形	N-73 °W	弥生V	

P1ST101(P1-2図)

時期；弥生 **形状**；円形 **主軸方向**；

規模；6.63 × (5.70)m **深さ** 0.10 ~ 0.26m **面積** (34.5)m²

埋土；暗褐色粘土質シルト

ピット数；9 **主柱穴数**；5 **主柱穴**；P1～5

床面；1面 **貼床**； **焼失**；

中央ピット；円形 **規模** 78 × 74cm **深さ** 24cm **埋土** 暗褐色粘土質シルト？

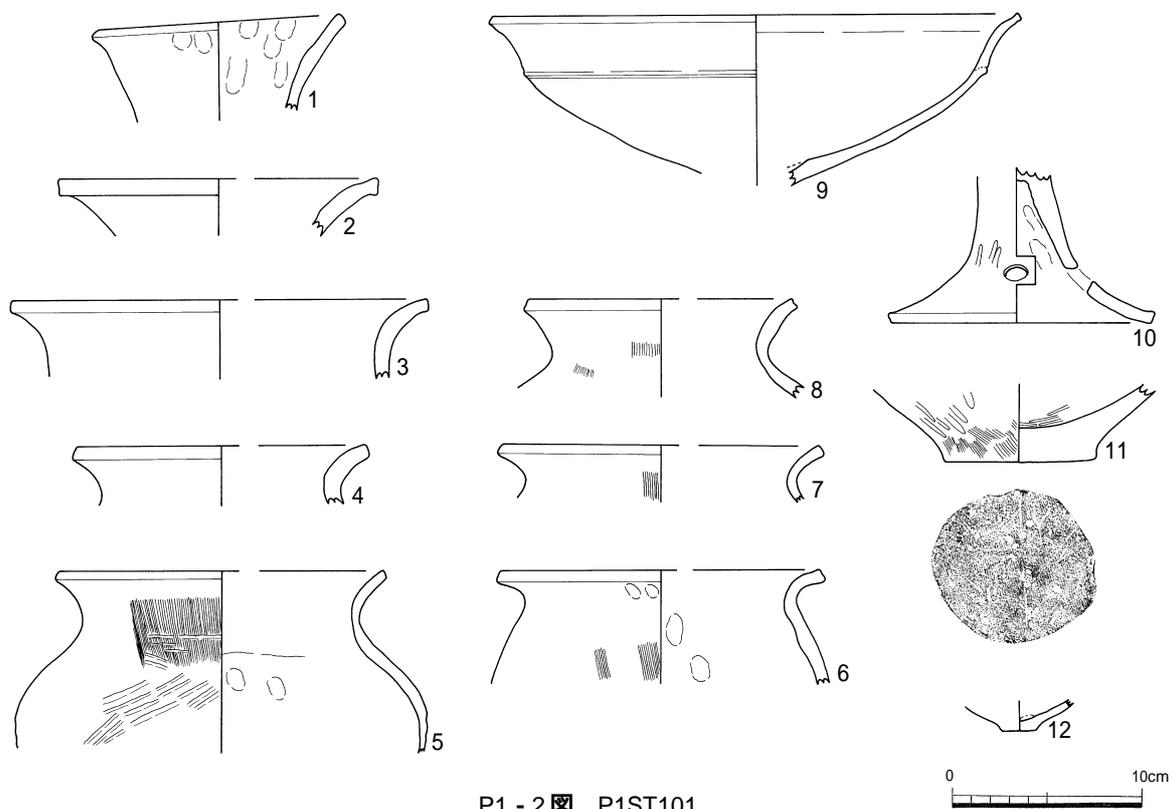
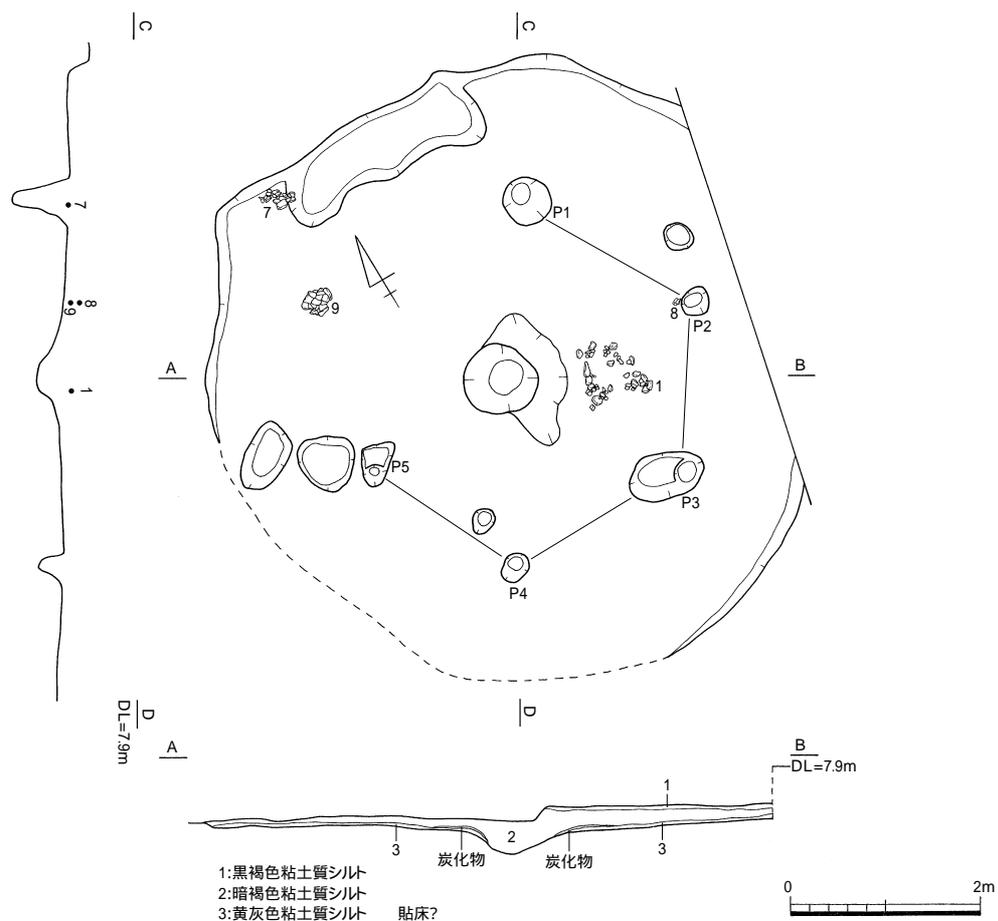
壁溝； **幅** **深さ**

出土遺物；弥生土器(口縁部67点、底部16点、細片約1,490点)

所見；調査区E -セ-6・7・11・12・13・17グリッドに位置し、平面形態はやや不整形な円形状を呈した中型の竪穴住居跡である。東端は調査区外にかかり未検出である。遺構の上面は削平を受けたと考えられ、壁面の残存状態は良好ではなく、南西部分は確認できなかった。

主柱穴と考えられるのはP1～5で、径約24～50cm、それぞれ約59・43・45・20・24cmの深さを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトと考えられ、遺物は出土していない。埋土中から焼土・炭化物を確認している。中央ピットは円形状を呈し、周辺に不整形な浅い落ち込みを有している。埋土は暗褐色粘土質シルトと考えられ、遺物は出土していない。壁溝は確認していない。その他の遺構として北側部分に深さ約10cmを測る土坑状の落ち込みを有しているが、遺構として判断することは難しいと考えられる。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、埋土2層目から床面上にかけてある程度の出土状況を確認できた。細片の中にはタタキ目を残す土器片が多数出土し、また高杯が小片を含めて8点程出土しており、1点は脚部に分割成形技法を用いている。遺物から弥生 期頃の遺構と考えられ、中葉頃まで下る可能性を含んでいる。図示したものは弥生 期頃と考えられる壺(1～3)、甕(4～8)、高杯(9・10)の口縁部・底部(脚部)であり、11の底面には木葉痕が認められる。



P1 - 2 図 P1ST101

P1ST102(P1-3・4図)

時期；弥生 形状；長方形 主軸方向；N-8°E

規模；3.75×2.71m 深さ0.12～0.20m 面積10.2m²

埋土；黒褐色粘土質シルト

ピット数；6 支柱穴数；4 支柱穴；P1～4

床面；1面 貼床；焼失；

中央ピット；規模 深さ 埋土

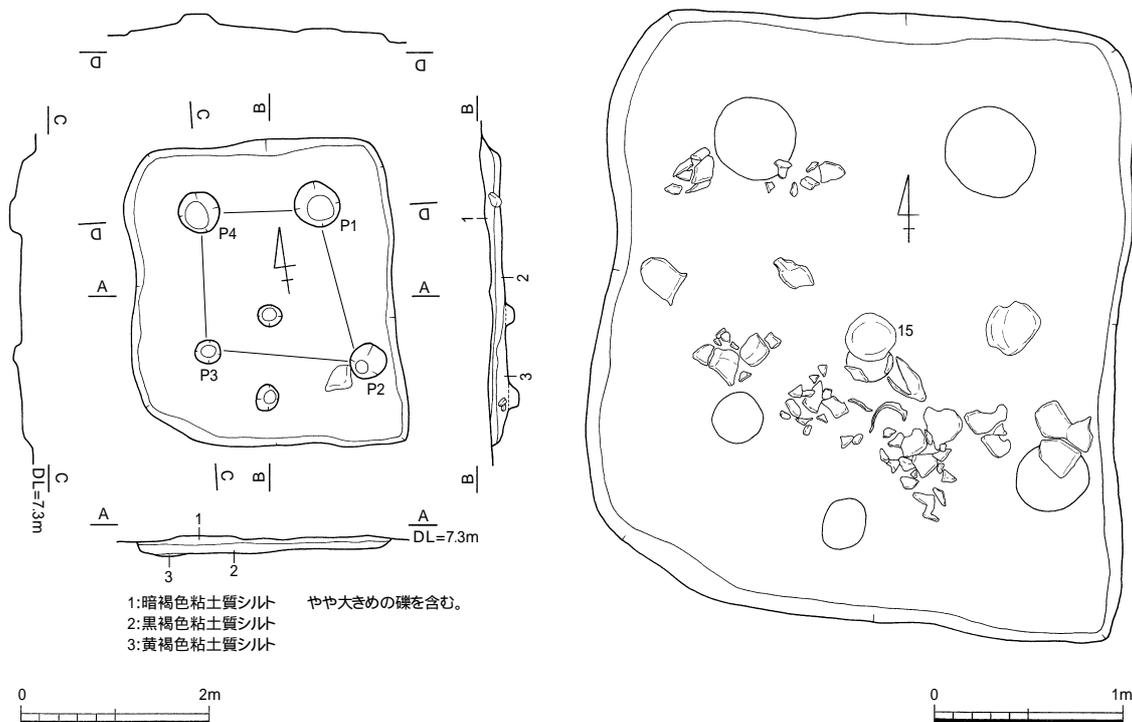
壁溝；幅 深さ

出土遺物；弥生土器(口縁部83点、底部23点、細片約1,890点)、石器(石鏃1点、石包丁1点)

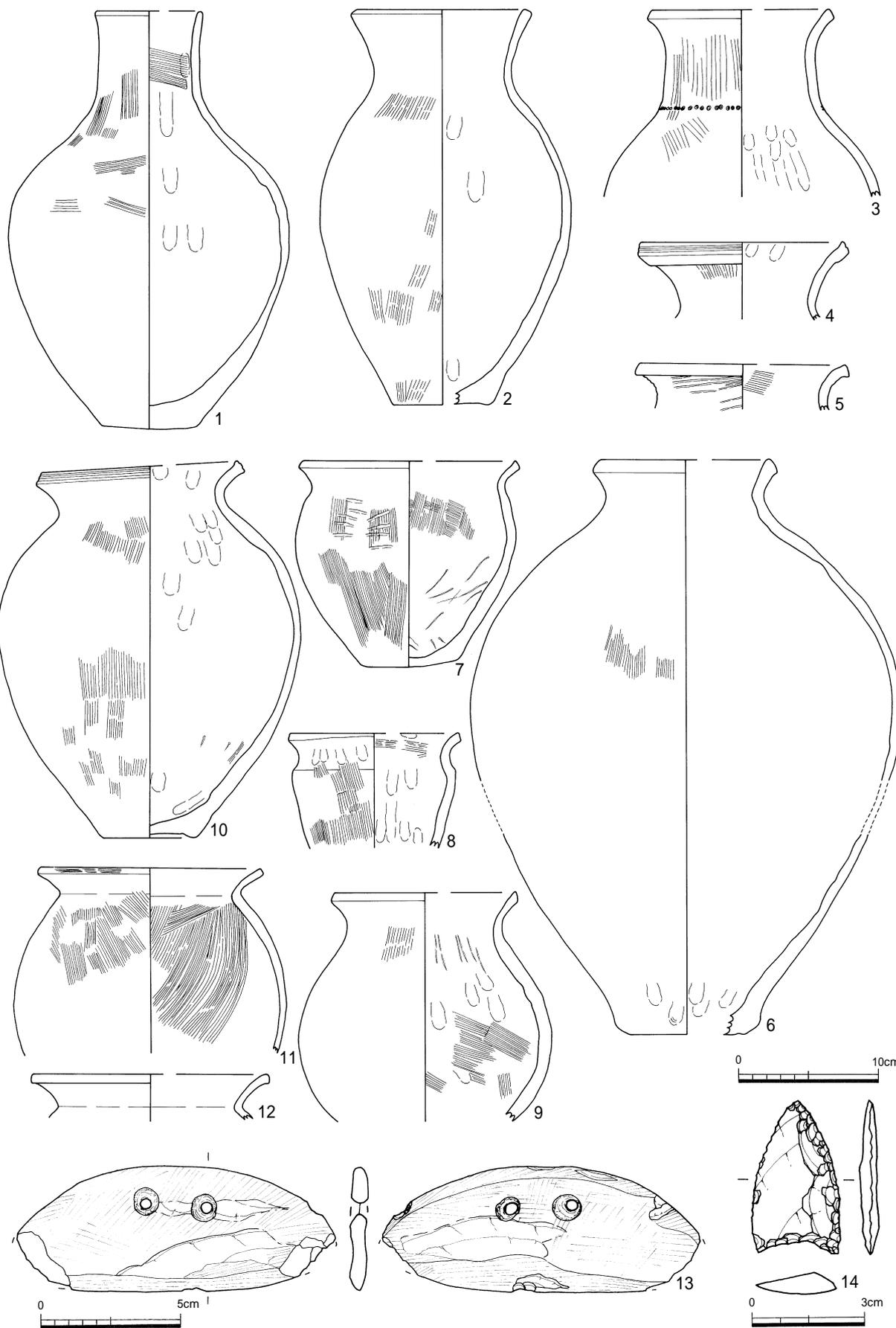
所見；調査区E -ツ-15・20、テ-11・16グリッドに位置し、平面形態は長方形を呈した小型の
竪穴住居跡である。遺構の上面は削平を受けたと考えられ、壁面の残存状態はあまり良好ではない。

支柱穴と考えられるのはP1～4で、径約26～49cm、それぞれ約3・22・8・8cmの深さを測り、全
体的に浅めである。埋土は黒褐色粘土質シルトと考えられ、遺物は出土していない。中央ピット・
壁溝等は確認していない。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、埋土2層目から床面上にかけて出土状況を確認でき
た。遺物から弥生 期頃の遺構と考えられ、数個体分の壺・甕を出土している。図示したものは弥
生 期頃と考えられる壺(1～4・6)、甕(5・9～12)、鉢(7・8)の口縁部などである。また検出面直
下から石鏃(14)が1点出土し、他に石包丁(13)が1点出土している。遺構のほぼ中央に床面から数
cm程浮いた状態で約35cm位の台石状の扁平な円礫(15)を検出しており、石器として用いた可能性が
考えられる。



P1 - 3 図 P1ST102(1)



P1 - 4 ☒ P1ST102(2)

P1ST103(P1-5・6図)

時期；弥生 形状；長方形 主軸方向；N-18°E

規模；4.06×3.20m 深さ0.38m 面積13.0m²

埋土；暗褐色粘土質シルト

ピット数；3 主柱穴数；3 主柱穴；P1～3

床面；1面 貼床；焼失；

中央ピット；規模 深さ 埋土

壁溝；幅 深さ

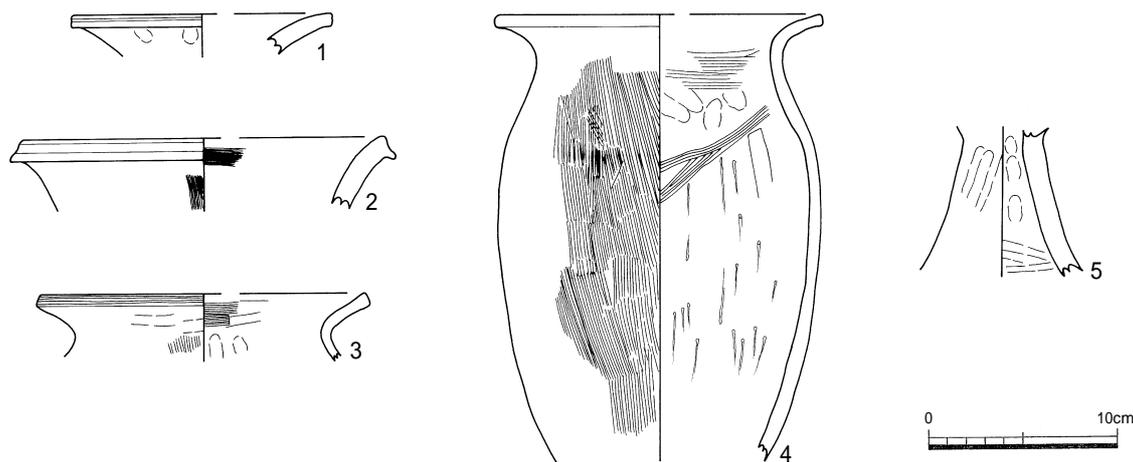
出土遺物；弥生土器(口縁部22点、底部10点、細片約950点)、石器(石包丁2点)

所見；調査区E -ツ-1・2・6・7グリッドに位置し、平面形態が長方形を呈する小型の竪穴住居跡の可能性が考えられる遺構である。西側はP2区に広がる。

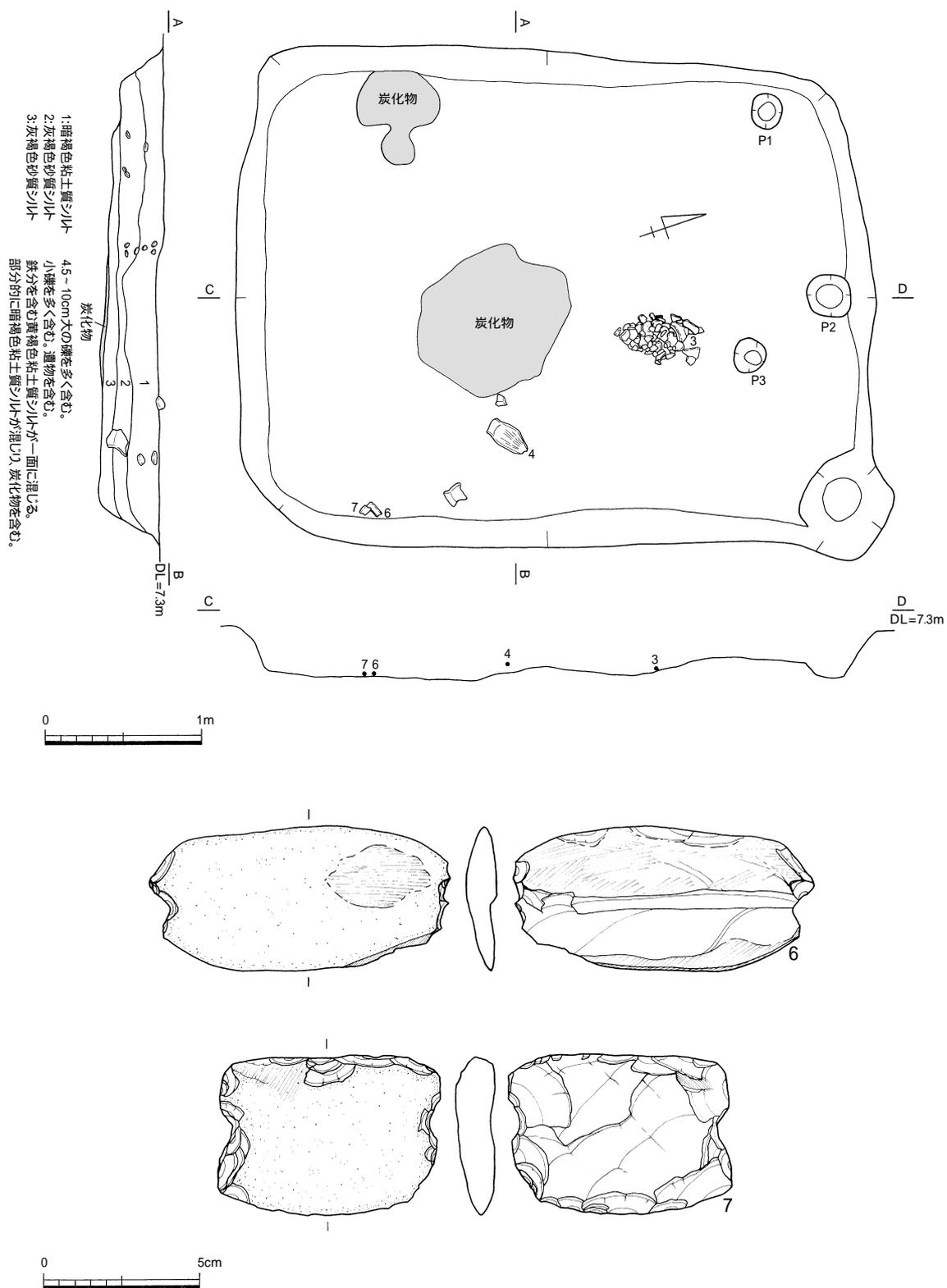
床面からは遺構に伴うと考えられるピットが殆ど検出できず、主柱穴はP1～3の可能性が考えられるのみである。径約23～27cm、それぞれ約11・10・28cmの深さを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトと考えられ、遺物は出土していない。遺構のほぼ中央の床面直上から炭化物の広がりを確認しているが、中央ピットは確認していない。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、埋土2層目から床面上にかけてある程度出土状況を確認できた。遺物から弥生 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 期頃と考えられる壺(1・2)、甕(3・4)の口縁部、高杯(5)の脚部である。3は出土状況からほぼ一個体分が纏まって出土していると考えられるが、復元することは困難であった。他に床面直上で石包丁(6・7)が2点程壁際から出土している。

北東隅にかかるピットとの関連性は不明であるが、竪穴住居跡に伴わない可能性が考えられる。



P1 - 5 図 P1ST103(1)



P1 - 6 ☒ P1ST103(2)

P1ST104(P1-7図)

時期；弥生 形状；長方形 主軸方向；N-73°W

規模；(4.90)×(4.12)m 深さ 面積(20.2)m²

埋土；

ピット数；5 主柱穴数；3 主柱穴；P1～3

床面；1面 貼床； 焼失；

中央ピット；楕円形 規模148×126cm 深さ64cm 埋土 黒褐色粘土質シルト

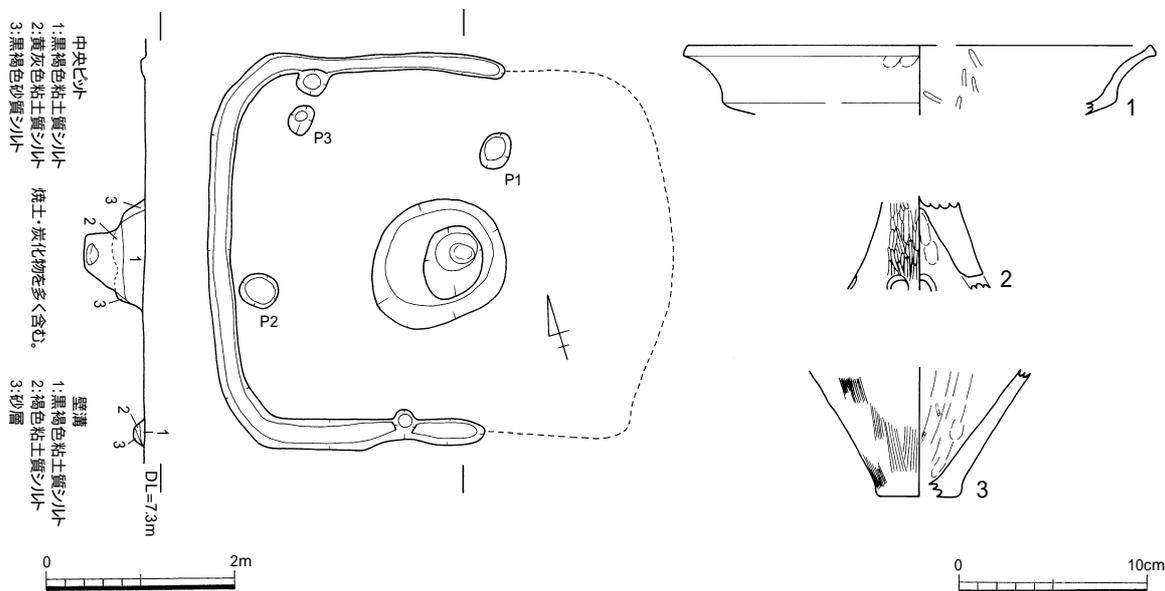
壁溝；1条 幅20～30cm 深さ4～12cm

出土遺物；弥生土器(口縁部14点、底部5点、細片約80点)

所見；調査区E -ス-20・25グリッドに位置し、平面形態は長方形を呈すると考えられる小型の竪穴住居跡である。遺構の上面は大きく削平を受けたと考えられ、壁面は残存せず、僅かに中央ピットと壁溝を確認するのみである。

主柱穴と考えられるのはP1～3で、径約32～40cm、それぞれ約10・7・25cmの深さを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトと考えられ、遺物は出土していない。中央ピットは段部を有し、中央部は長径約0.8m、短径約0.6mの楕円形状を呈し、約34cmの深さを測る。埋土2層目から焼土・炭化物を確認している。壁溝は西側からコ字状に1条を検出している。

出土した遺物の大半は中央ピットからの出土である。遺物から弥生 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 期頃と考えられる高杯(1・2)などである。



P1-7図 P1ST104

(2) 掘立柱建物跡

本調査区に於て掘立柱建物跡は5棟を検出しているが、遺構の上面は削平を受けたと考えられ、全体的に浅めである。棟方向は南北方向であり、K区を中心に展開している弥生時代中期末～後期頃と考えられる集落の西端に位置していると考えられる。同様に集落の端部に掘立柱建物跡群を配していると考えられるO区に於てもその傾向が窺えるが、本調査区に於ては掘立柱建物跡に伴うと考えられる溝状土坑は検出していない。

P1-2表 P1区掘立柱建物跡一覧

遺構名	梁間×桁行 [間]	梁間×桁行 [m]	柱間寸法 梁間×桁行[m]	主軸方向	付属遺構	時 期	備 考
P1SB101	1×3	[3.0]×[5.4]	3.0×1.7～1.9	N-26°E	-	弥生 ～ ?	
P1SB102	1×3	3.3×4.5	3.3×1.4～1.6	N-8°E	-	弥生 ?	
P1SB103	1×1	3.0×3.3	3.0×3.1～3.3	N-75°W	-	弥生 ～ ?	
P1SB104	1×4	3.0×6.4	3.0×1.0～2.1	N-6°E	-	弥生 ～ ?	
P1SB105	1×2	2.5×3.4	2.5×1.6～1.7	N-12°E	-	弥生 ～ ?	

P1SB101(P1-8図)

時期；弥生 ～ ? **棟方向**；N-26°E

規模；梁間1×桁行3 梁間(3.0)m×桁行(5.4)m **面積**(16.2)m²

柱間寸法；梁間3.0m 桁行1.7～1.9m

柱穴数；(5) **柱穴形**；円形

性格；掘立柱建物跡 **付属施設**；

出土遺物；なし

所見；調査区E -ケ-1・6グリッドに位置する掘立柱建物跡と考えられる遺構である。棟方向は南北方向である。柱穴の規模は径約26～42cm、深さ約6～14cmを測るが、削平を受けた可能性も含めて部分的に未検出と考えられる。埋土は黒褐色粘土質シルトである。遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ～ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

P1SB102(P1-8図)

時期；弥生 ? **棟方向**；N-8°E

規模；梁間1×桁行3 梁間3.3m×桁行4.5m **面積**14.9m²

柱間寸法；梁間3.3m 桁行1.4～1.6m

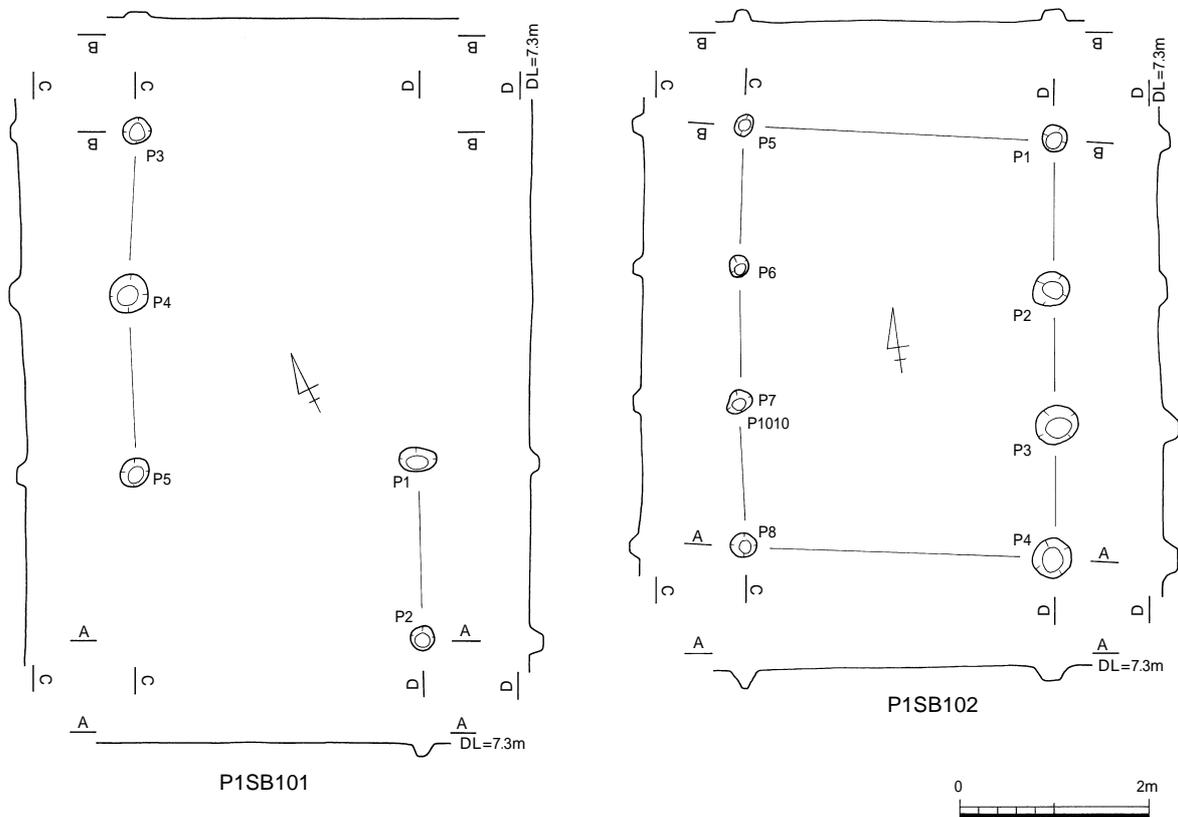
柱穴数；8 **柱穴形**；円形

性格；掘立柱建物跡 **付属施設**；

出土遺物；弥生土器 P1010(細片4点)

所見；調査区E -ク-20・24・25、ス-5グリッドに位置する掘立柱建物跡と考えられる遺構である。

棟方向は南北方向である。柱穴の規模は径約22～47cm、深さ約9～20cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトであり、遺物はP1010から弥生土器の細片が出土している。細片の中にタタキ目を残す土器片が出土しており、遺物から弥生 期頃の遺構の可能性が考えられる。



P1 - 8 図 P1SB101・102

P1SB103(P1-9図)

時期；弥生 ～ ? **棟方向**；N-75°W

規模；梁間1×桁行1 梁間3.0m×桁行3.3m **面積**9.9m²

柱間寸法；梁間3.0m 桁行3.1～3.3m

柱穴数；4 **柱穴形**；円形

性格；掘立柱建物跡？ **付属施設**；

出土遺物；なし

所見；調査区E -ス-18・24・25、ス-5グリッドに位置する掘立柱建物跡の可能性が考えられる遺構である。棟方向は東西方向であり、延伸は認められなかった。柱穴の規模は径約28～42cm、深さ約8～24cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトである。遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ～ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

遺構のほぼ中央に径約16cm、深さ約7cmを測る小ピットを検出しているが、掘立柱建物跡との関連性は不明である。

P1SB104(P1-9図)

時期；弥生 ~ ? 棟方向；N-6°E

規模；梁間1×桁行4 梁間3.0m×桁行6.4m 面積19.2m²

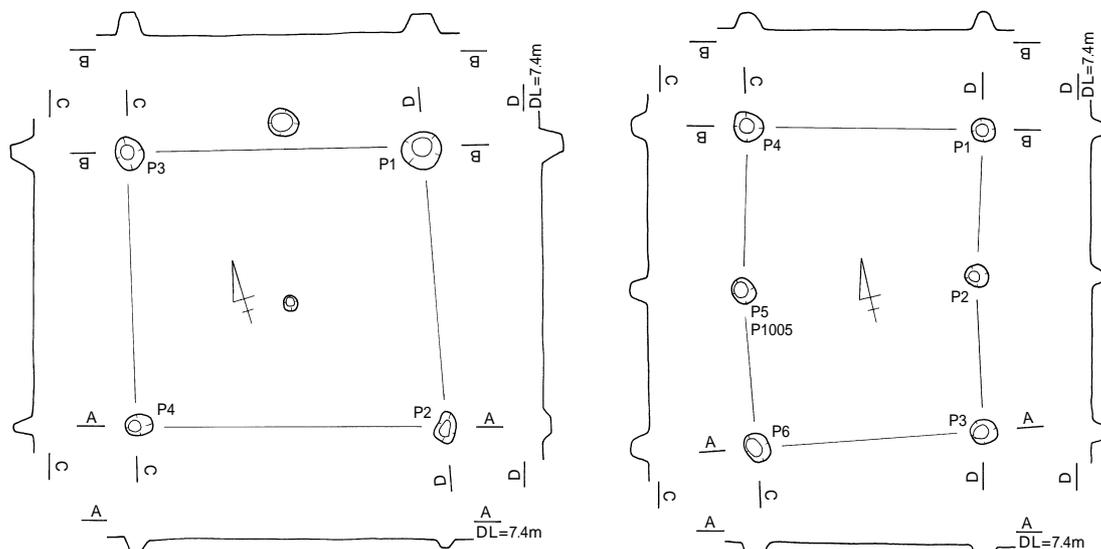
柱間寸法；梁間3.0m 桁行1.0~2.1m

柱穴数；(9) 柱穴形；円形

性格；掘立柱建物跡 付属施設；

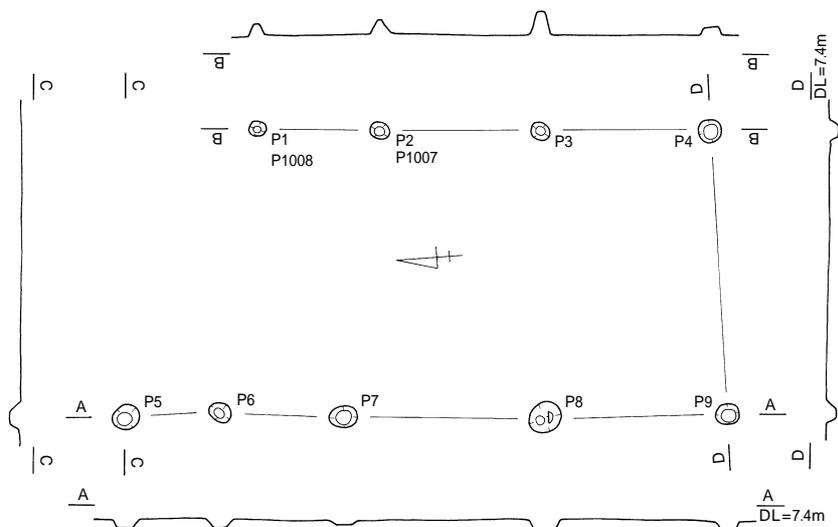
出土遺物；弥生土器 P1007(細片1点)、P1008(細片2点)

所見；調査区E -ツ-8・12・13グリッドに位置する掘立柱建物跡と考えられる遺構である。棟方向は南北方向である。柱穴の規模は径約18~36cm、深さ約5~26cmを測るが、東側北端の柱穴は削平を受け、未検出の可能性が考えられる。埋土は黒褐色粘土質シルトであり、遺物はP1007・1008

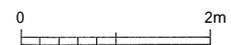


P1SB103

P1SB105



P1SB104



P1 - 9 図 P1SB103 ~ 105

から弥生土器の細片が出土している。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

P1SB105(P1-9図)

時期；弥生 ~ ? **棟方向**；N-12°E

規模；梁間1×桁行2 梁間2.5m×桁行3.4m **面積**8.5m²

柱間寸法；梁間2.5m 桁行1.6~1.7m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形

性格；掘立柱建物跡 **付属施設**；

出土遺物；弥生土器 P1005(細片2点)

所見；調査区E -ツ-16・17・21・22グリッドに位置する掘立柱建物跡と考えられる遺構である。棟方向は南北方向である。柱穴の規模は径約25~33cm、深さ約16~18cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトであり、遺物はP1005から弥生土器の細片が出土している。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

(3) 土坑

本調査区に於て土坑は8基を検出している。調査区南側から平面形態が隅丸長方形又は長楕円形状を呈し、埋土は黒褐色又は黒色粘土質シルトを基調とする土坑を数基検出している。また隅丸長方形を呈したSK101からは弥生時代中期末~後期頃と考えられる遺物を多く出土している。集落端部に於けるそれぞれの土坑の性格については不明である。

P1-3表 P1区土坑一覧

遺構番号	平面形	断面形	規 模			主軸方向	埋 土	切合関係	時 期	備 考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)					
P1SK101	隅丸方形	箱形	1.25	1.06	35.0	N-51°W	黒褐色粘土質シルト / 2層	-	弥生 - 2	
P1SK102	隅丸長方形	皿状	2.62	1.11	19.0	N-25°E	黒褐色粘土質シルト・他 / 2層	-	弥生	
P1SK103	長楕円形	逆台形	3.20	0.67	29.0	N-78°E	黒色粘土質シルト・他 / 2層	-	弥生 ~ ?	
P1SK104	長楕円形	U字状	1.85	0.50	21.0	N-8°W	黒色粘土質シルト・他 / 2層	-	弥生 ~ ?	
P1SK105	隅丸長方形	逆台形	2.87	0.62	19.0	N-88°W	黒色粘土質シルト・他 / 2層	-	弥生 ~ ?	
P1SK106	隅丸方形	箱形	1.15	0.74	21.0	N-74°W	黒褐色粘土質シルト・他 / 3層	-	弥生 ~ ?	
P1SK107	隅丸長方形	皿状	[2.50]	0.54	12.0	N-69°W	黒褐色粘土質シルト / 2層	-	弥生 ?	
P1SK108	隅丸方形	箱形	1.25	0.92	29.0	N-17°W	黒褐色粘土質シルト・他 / 3層	-	弥生 ~ ?	

P1SK101(P1-10・11図)

時期；弥生 -2 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-51°W

規模；1.25×1.06m **深さ**0.35m **断面形態**；箱形

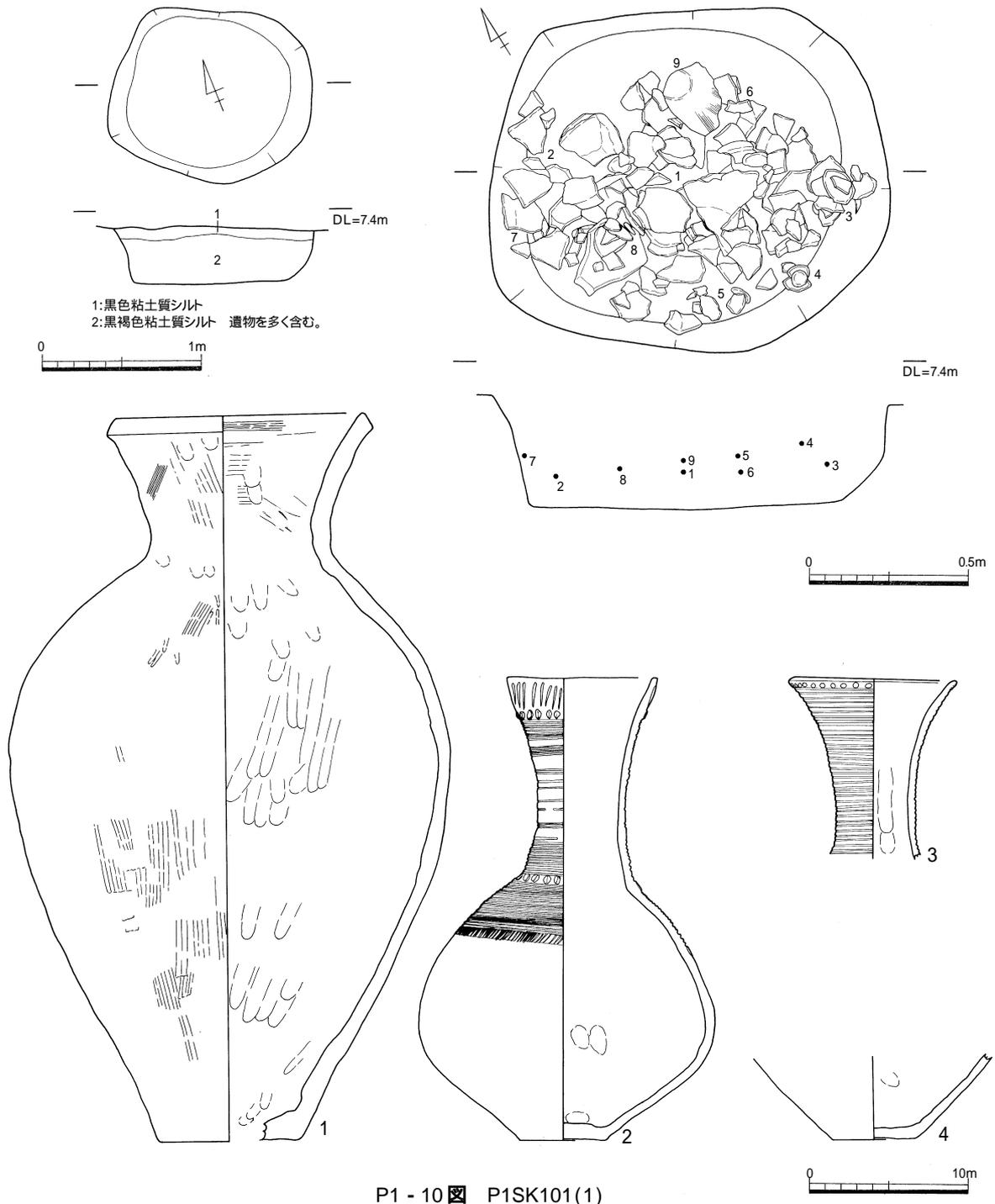
埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

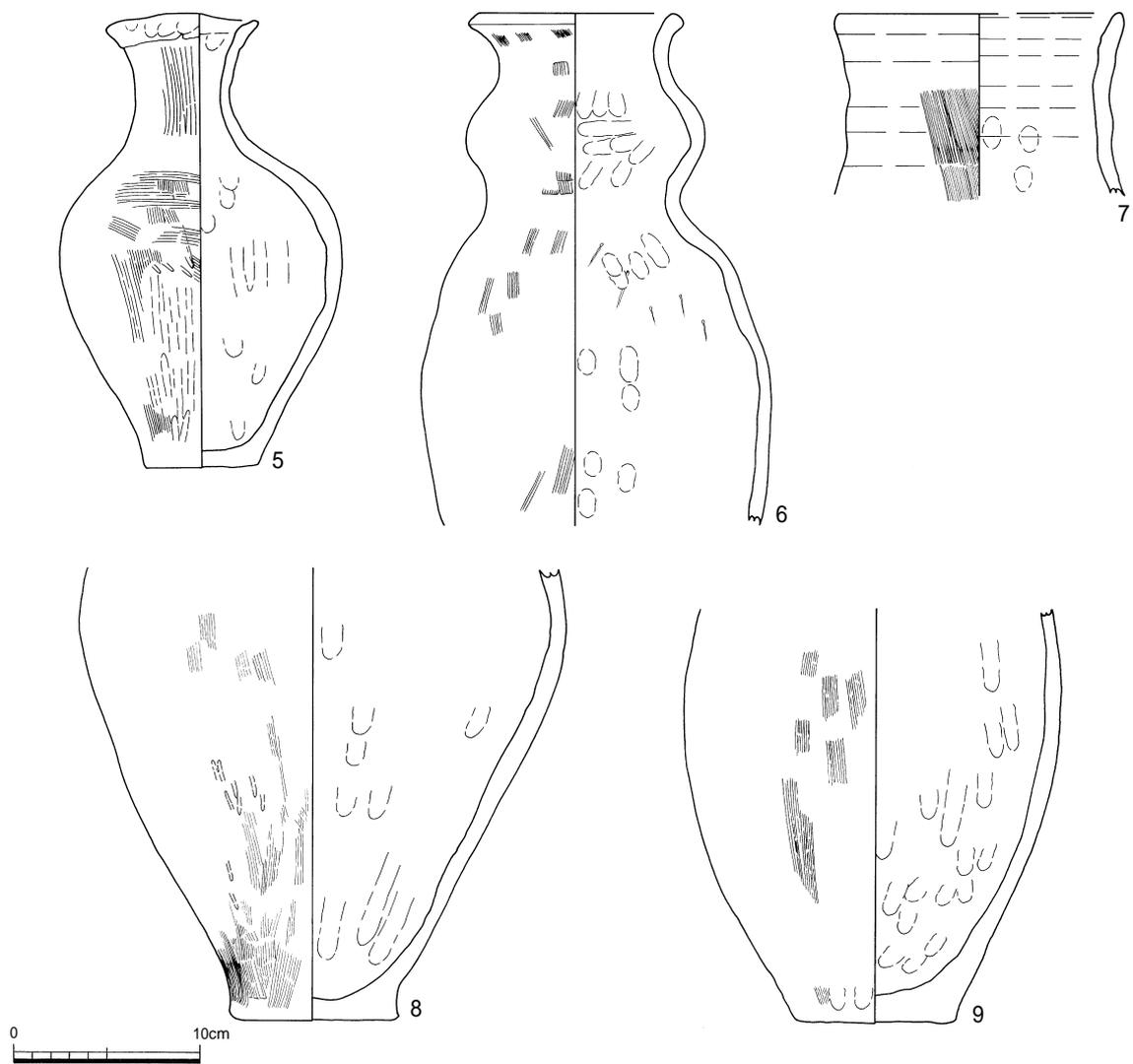
出土遺物；弥生土器(口縁部8点、底部4点、細片約600点)

所見；調査区E -ヌ-1グリッドに位置し、平面形態はやや円形に近い隅丸方形状を呈した土坑である。

遺物の大半は埋土2層目からの出土であり、出土状況を確認できた。遺物から弥生 -2期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 -2期頃と考えられる壺の口縁部・底部である。個体分がある程度の纏まりを保ちながら土坑内に散布している状態で出土しており、3と4は同一個体の可能性が考えられる。また瓢箪型を呈した壺(6)が出土している。



P1 - 10 図 P1SK101(1)



P1 - 11 図 P1SK101(2)

P1SK102(P1-12図)

時期；弥生 **形状**；隅丸長方形 **主軸方向**；N-25°E

規模；2.62×1.11m **深さ** 0.19m **断面形態**；皿状

埋土；黒褐色粘土質シルト

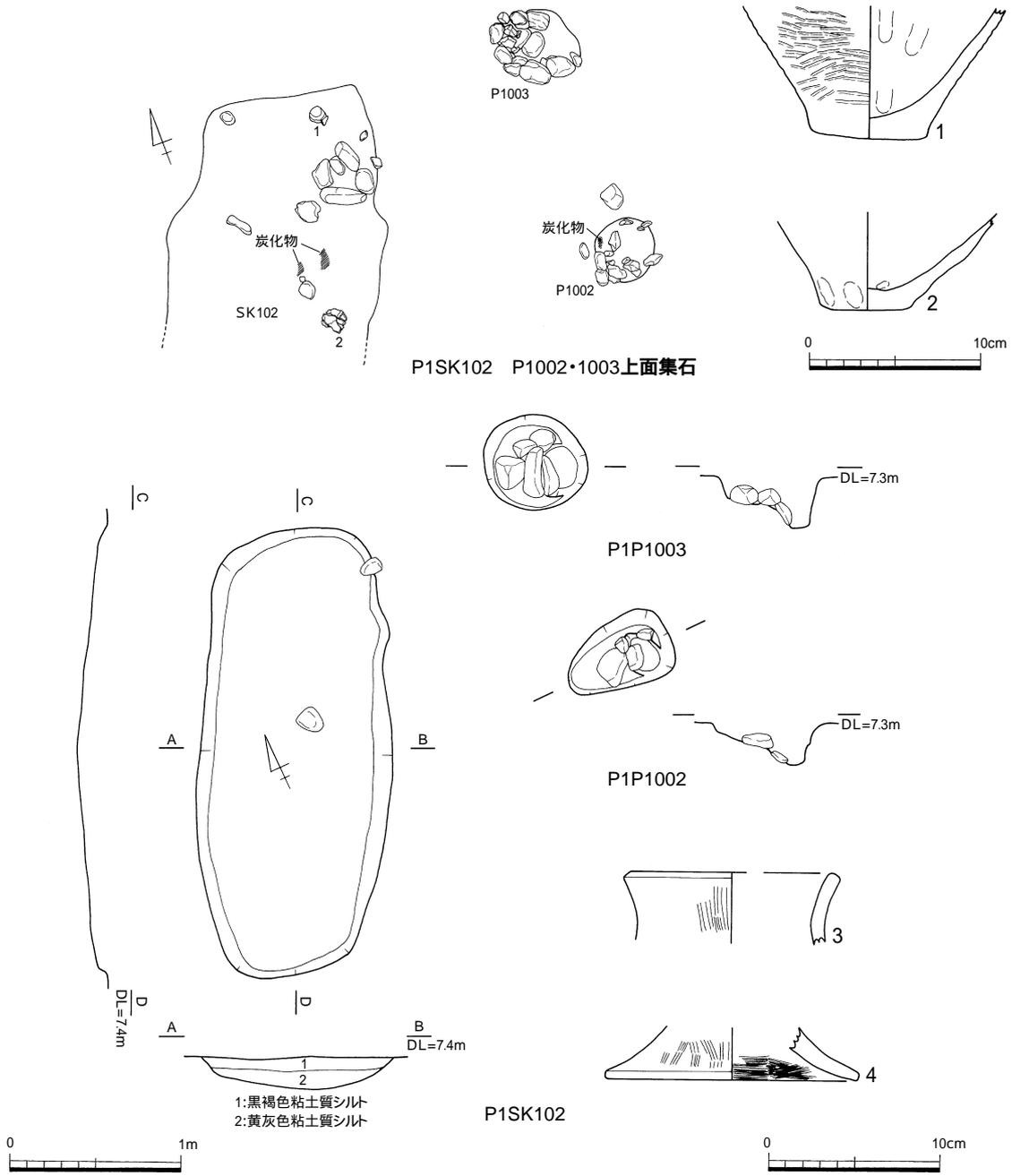
付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部6点、細片約60点)

所見；調査区E -ニ-10、ヌ-6グリッドに位置する土坑である。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から弥生 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 期頃と考えられる壺(3)の口縁部と高杯(4)の脚部である。

尚、SK102の遺構検出面上の集石遺構をSX101として本調査に先立ち調査を行なったが、本報告書に於ては同一遺構として取り扱うこととする。遺構上面から炭化物を確認し、出土した遺物は弥生土器の細片が十数点程とタタキ目を残す底部(1)などである。



P1 - 12 図 P1SK102 P1002・1003

P1SK103(P1-13図)

時期；弥生 ~ ? 形状；長楕円形 主軸方向；N-78°E

規模；3.20×0.67m 深さ 0.29m 断面形態；逆台形

埋土；黒色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；なし

所見；調査区E -ヌ-7・11・12グリッドに位置する土坑である。

遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

P1SK104(P1-13図)

時期；弥生 ~ ? 形状；長楕円形 主軸方向；N-8°W

規模；1.85×0.50m 深さ 0.21m 断面形態；U字状

埋土；黒色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；なし

所見；調査区E -ヌ-13グリッドに位置する土坑である。

遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

P1SK105(P1-13図)

時期；弥生 ~ ? 形状；隅丸長方形 主軸方向；N-88°W

規模；2.87×0.62m 深さ 0.19m 断面形態；逆台形

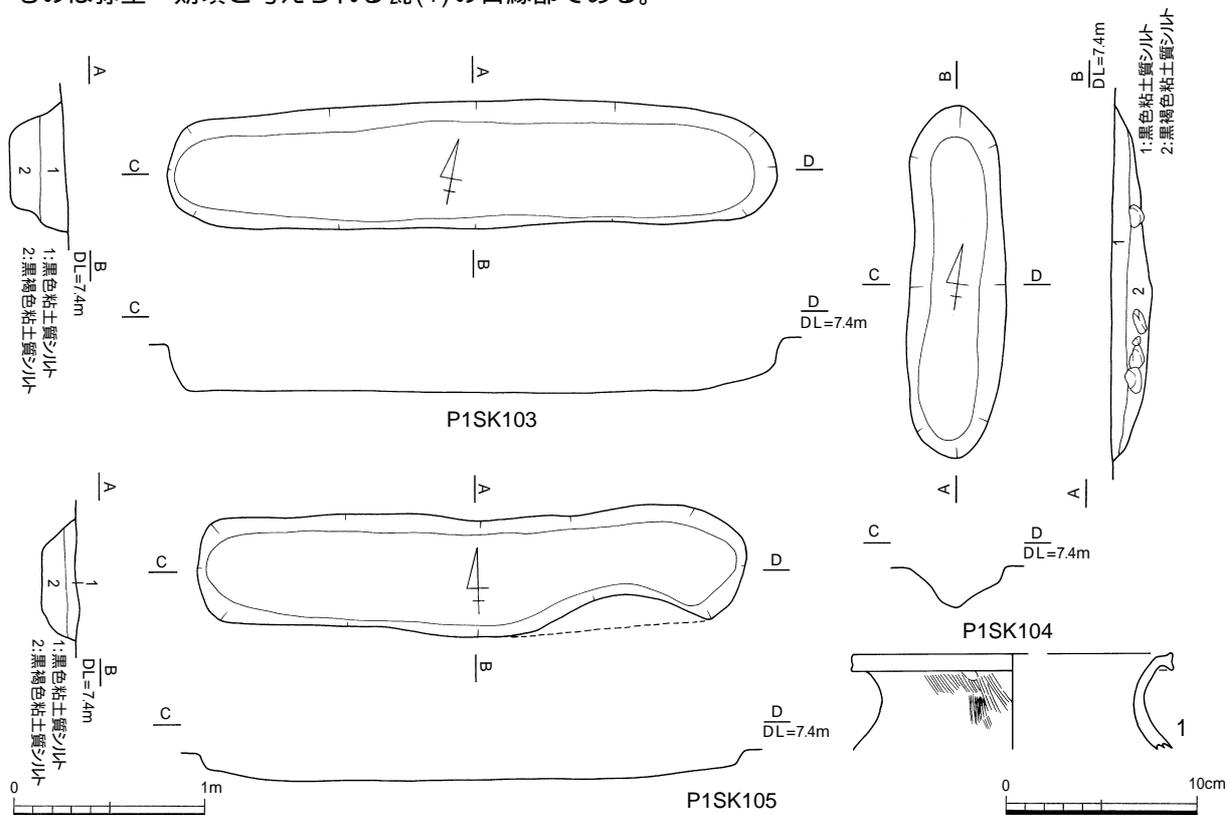
埋土；黒色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部6点、底部2点、細片約80点)

所見；調査区E -ヌ-13・14グリッドに位置する土坑である。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から弥生 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 期頃と考えられる甕(1)の口縁部である。



P1 - 13 図 P1SK103 ~ 105

P1SK107(P1-14図)

時期；弥生 ? 形状；隅丸長方形 主軸方向；N-69 °W

規模；(2.50)×0.54m 深さ 0.12m 断面形態；皿状

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器(細片 5 点)

所見；調査区E -テ-6・11グリッドに位置する土坑である。東端は調査区外へ延伸する可能性を含んでいる。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から弥生 期頃の遺構の可能性が考えられる。

P1SK108(P1-14図)

時期；弥生 ~ ? 形状；隅丸方形 主軸方向；N-17 °W

規模；1.25×0.92m 深さ 0.29m 断面形態；箱形

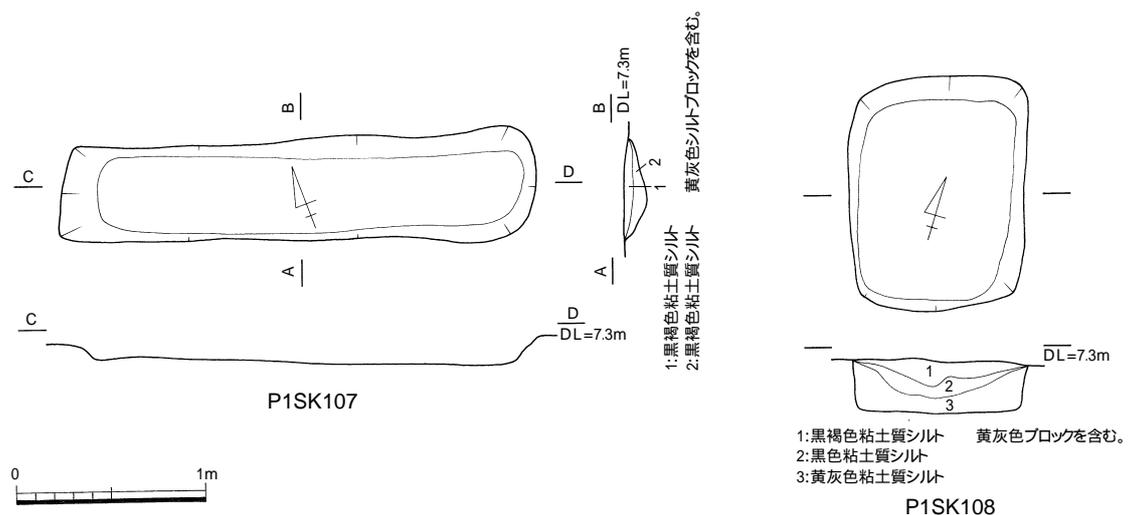
埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部 1 点)

所見；調査区E -ク-20、ケ-11・16グリッドに位置する土坑である。

出土した遺物は口縁下端部に刻目を施し、微隆起突帯を貼付した土器片が 1 点のみである。時期を判断する遺物が僅少であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。遺構のほぼ中央西寄りに床面から数cm程浮いた状態で大きめの扁平な円礫を検出しているが、石器であるかは判断できない。



P1 - 14 図 P1SK107・108

(4) 溝跡

本調査区に於て溝跡は1条を検出している。平面形態は長方形状を呈しているが、東端部は未検出の可能性を含んでいる。調査区北西の自然の落ち込み部分から検出し、西端はP2SD201に接続すると考えられ、P2区に展開している溝状遺構との関連性が考えられる。

P1-4表 P1区溝一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	接 続	時 期	備 考
P1SD101	4.43×0.78×0.10	-	皿状	N-72°-W	P2SD201	弥生 ~	

(5) ピット

本調査区に於てピットは掘立柱建物跡も含めて66個を検出しているが、削平を受けている可能性が考えられ、未検出のピットが存在している可能性を含んでいる。多くのピットが掘立柱建物跡を構成していると考えられるが、調査区南側から集石を伴うピットを検出している。周辺の状況から礫層の自然堆積とは考えにくく、意図的に投げ込まれた可能性が考えられるが、性格については不明である。

P1P1001(P1-15図)

時期；弥生 ~ ? **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-57°W

規模；0.83×0.71m **深さ** 0.23~0.50m

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；

出土遺物；弥生土器(細片1点)

所見；調査区E -ヌ-12グリッドに位置し、底面に柱穴状の落ち込みを有している遺構である。

出土した遺物は弥生土器の細片が1点のみである。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

P1P1002(P1-12図)

時期；弥生 ? **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-89°E

規模；0.64×0.42m **深さ** 0.11~0.24m

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；

出土遺物；弥生土器(底部1点、細片31点)

所見；調査区E -ヌ-6グリッドに位置し、底面に柱穴状の落ち込みを有している遺構である。遺構検出面上から底面にかけて礫の集中を検出している。北側に同様な遺構(P1003)を検出しているが、関連性は不明である。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から時期を判断することは困難であったが、周

辺の遺構(SK102)などから弥生 期頃の遺構の可能性が考えられる。

P1P1003(P1-12図)

時期；弥生 ? 形状；円形 主軸方向；

規模；0.60×0.56m 深さ 0.17～0.30m

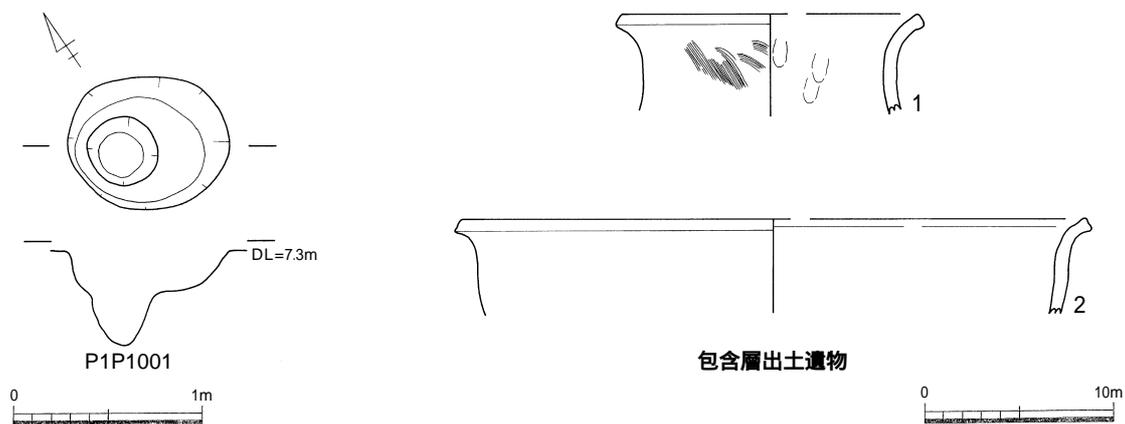
埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；

出土遺物；弥生土器(細片 6 点)

所見；調査区E -ヌ-6グリッドに位置し、底面に柱穴状の落ち込みを有している遺構である。遺構検出面上から底面にかけて礫の集中を検出している。南側に同様な遺構(P1002)を検出しているが、関連性は不明である。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構(SK102)などから弥生 期頃の遺構の可能性が考えられる。

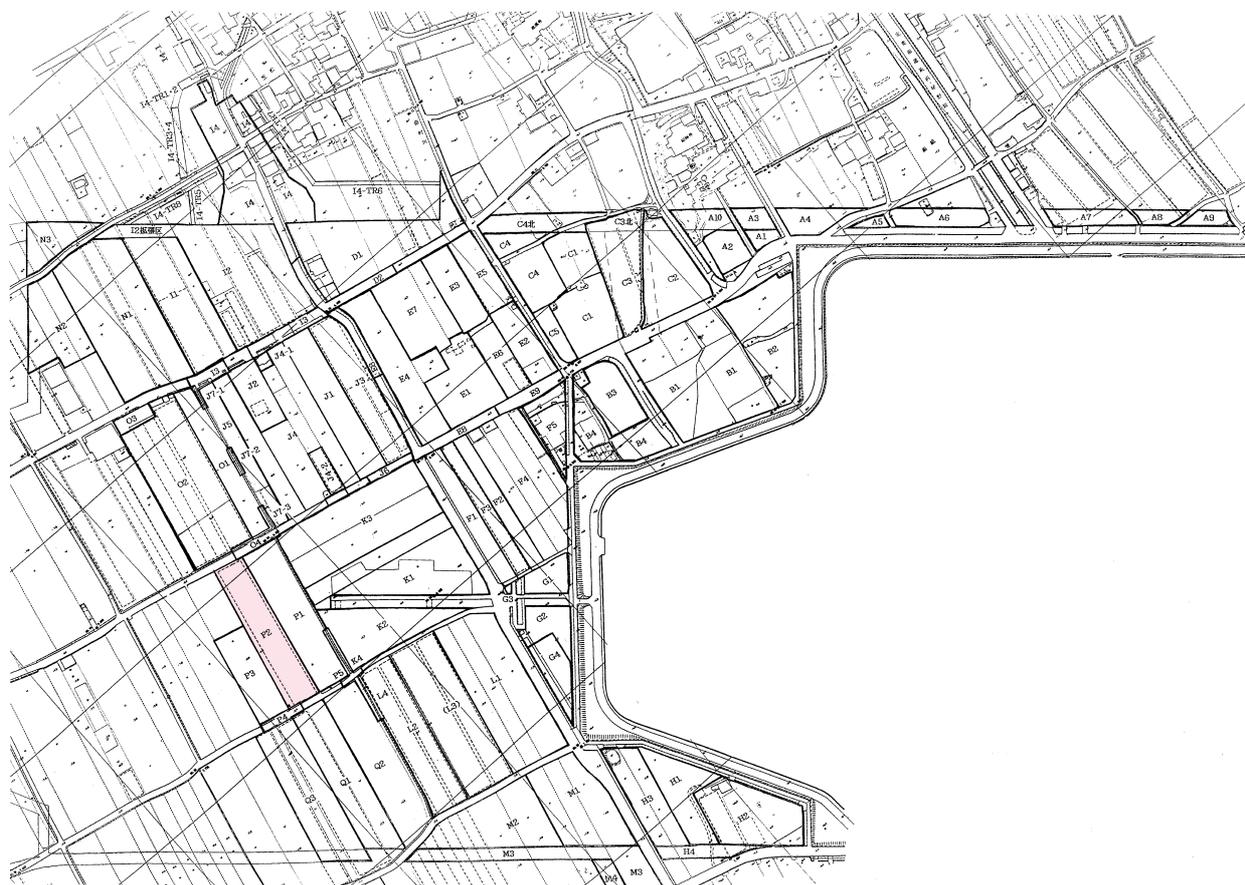


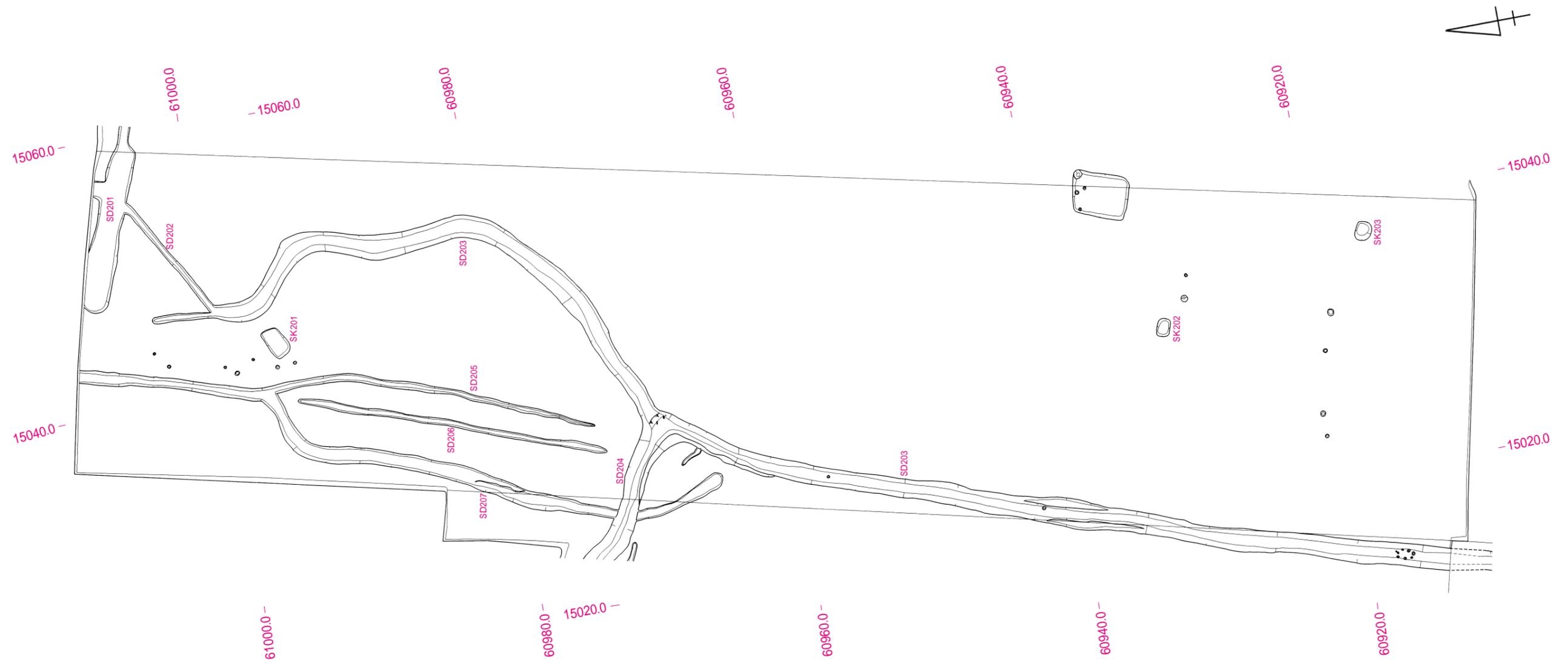
P1 - 15 図 P1P1001 / P1区包含層出土遺物

(6) 包含層出土遺物

本調査区に於て包含層出土遺物(包含層)は弥生時代後期頃を中心に口縁部17点、底部6点、細片約920点程を出土している。図示しているのは弥生 期頃と考えられる壺(1)、鉢(2)の口縁部であり、包含層 から出土している。また土師器の口縁部と須恵器の細片を包含層 から出土している。

P2 区の調査





P2 - 1 图 P2区遺構全体配置図(S=1/250)

1. P2区の概要

概要

P2区(P2-1図)は今次調査の中で、調査対象区域の西側に位置し、東側をP1区、西側をP3区、南側に道路部分を隔ててQ1区と境を接する調査区である。南側に礫層が広がり、調査区西端部では縄文時代の包含層の可能性が考えられる黒色粘土層の堆積が認められる。K区を中心に展開している弥生時代中期末～後期頃と考えられる集落のほぼ最西端に位置していると考えられ、遺構密度は低い。調査区北側では数条の溝状遺構を検出しており、比較的規模の大きいSD203・204は、断定はできないが西域に展開していたと考えられる水田に関連する導水路の可能性が考えられ、それぞれ大溝8a・8bとしてP3区を中心に検出し、P4区を経てQ3区へ続いている。

調査担当者 前田光雄、田坂京子

執筆担当者 宮地啓介

調査期間 平成10年11月6日?～平成10年11月27日

調査面積 2,408m²

時代 (縄文時代) 弥生時代前期～後期

検出遺構 弥生時代 土坑3基、溝跡5条、大溝2条、ピット13個

2. P2区弥生時代の遺構と遺物

(1) 土坑

本調査区に於て土坑は3基を検出している。K区を中心に展開している弥生時代中期末～後期頃と考えられる集落のほぼ最西端に位置しており、検出は少数であるが、調査区南側から検出しているSK203からは弥生時代中期末頃と考えられる遺物がある程度纏まって出土している。北東に位置するP1SK101と共に集落端部に於けるこれらの土坑の性格は不明である。

P2-1表 P2区土坑一覧

遺構番号	平面形	断面形	規模			主軸方向	埋 土	切合関係	時 期	備 考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)					
P2SK201	隅丸長方形	皿状	2.27	1.40	10.0	N-63°E	暗褐色粘土質シルト / 1層	-	弥生 ~ ?	
P2SK202	隅丸方形	逆台形	1.34	0.94	20.0	N-73°W	暗褐色粘土質シルト / 3層	-	弥生 ~ ?	
P2SK203	隅丸方形	逆台形	1.41	1.15	45.0	N-65°W	暗褐色粘土質シルト・他 / 3層	-	弥生 -2	

P2SK203(P2-2図)

時期；弥生 -2 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-65°W

規模；1.41×1.15m **深さ** 0.45m **断面形態**；逆台形

埋土；暗褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部5点、底部3点、細片約420点)

所見；調査区E -ニ-5・10グリッドに位置し、平面形態はやや円形に近い隅丸方形を呈した土坑である。

遺物の大半は埋土3層目から床面上にかけての出土であり、出土状況を確認できた。遺物から弥生 -2期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 -2期頃と考えられる壺(1~3)、甕(4)の口縁部・底部である。また土器片(胴部)の中から拳大程の礫を検出している。

P2SK201(P2-3図)

時期；弥生 ~ ? **形状**；隅丸長方形 **主軸方向**；N-63°E

規模；2.27×1.40m **深さ** 0.10m **断面形態**；皿状

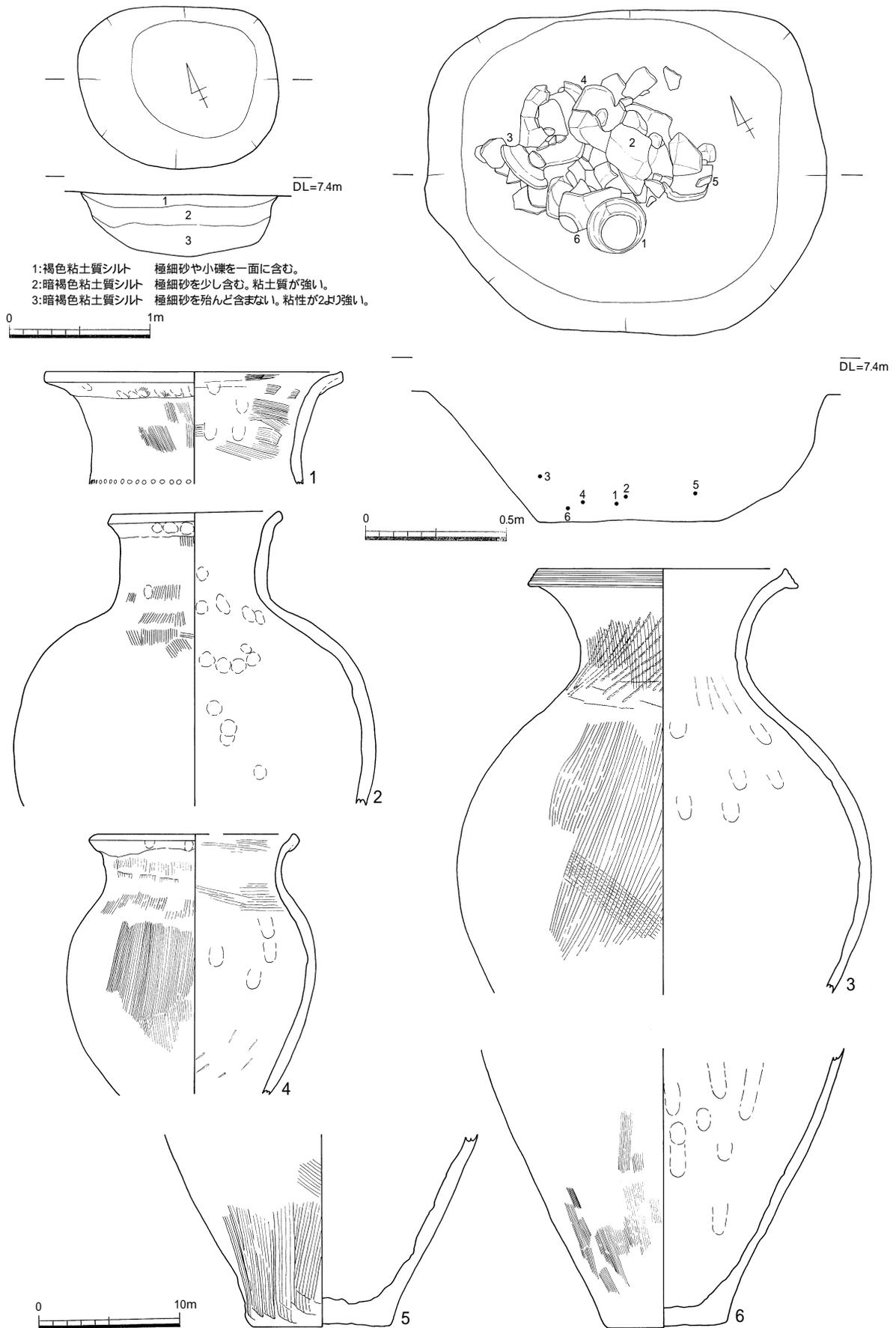
埋土；暗褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；なし

所見；調査区E -ウ-1・2・6・7グリッドに位置する土坑である。

遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。



P2 - 2 ☒ P2SK203

P2SK202(P2-3図)

時期；弥生 ~ ? 形状；隅丸方形 主軸方向；N-73 °W

規模；1.34×0.94m 深さ 0.20m 断面形態；逆台形

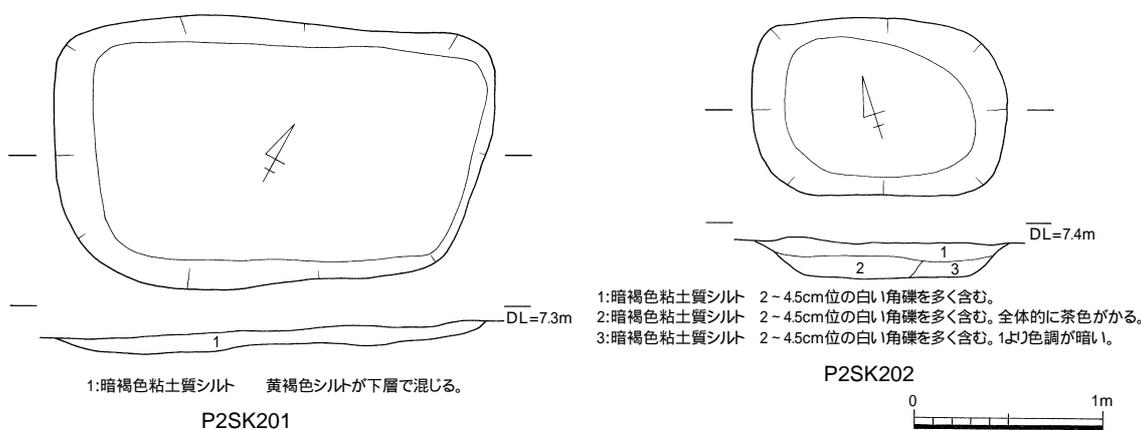
埋土；暗褐色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；なし

所見；調査区E -チ-9・14グリッドに位置する土坑である。

遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。



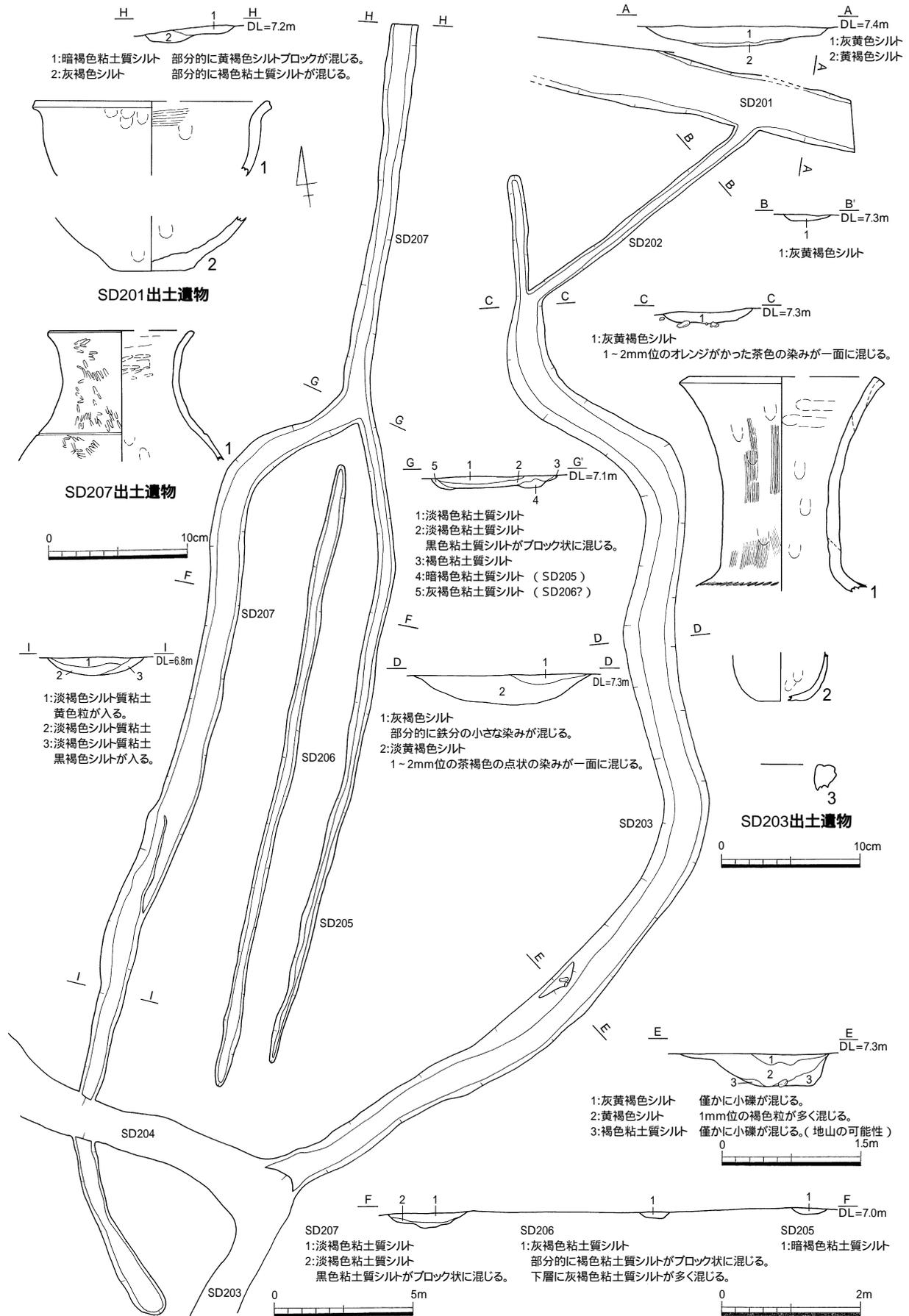
P2 - 3 図 P2SK201・202

(2) 溝跡

本調査区に於て溝跡は5条を検出している。調査区北側の低地部分で数条を検出し、集落端部に於て、西域に展開していたと考えられる水田との関連性も含めて、弥生時代に於ける水利施設としての可能性を残している溝状遺構と考えられる。また西端に位置している1条は弥生時代前期頃の溝と考えられ、弥生前期集落の広がりを示唆していると考えられる。

P2-2表 P2区溝一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	接 続	時 期	備 考
P2SD201	9.90×1.95×0.22	-	皿状	N-69°-W	P1SD101	弥生 ~	
P2SD202	9.80×0.51×0.07	-	皿状	N-60°-E		弥生	
P2SD203	46.00×1.80×0.34	-	U字状	N-5 °E N-55 °E	P2SD204	弥生 ~	大溝部分を除く
P2SD205	23.90×0.50×0.09	-	皿状	N-22 °E		弥生 ?	
P2SD206	22.90×0.46×0.10	-	皿状	N-20 °E		弥生 ?	
P2SD207	48.90×1.12×0.20	-	皿状	N-20 °E		弥生 -3	



P2 - 4 図 P2SD201 ~ 203・205 ~ 207

P2SD201(P2-4図)

時期；弥生 ~ **方向**；N-69°W

規模；9.90×1.95m **深さ** 0.22m **断面形態**；皿状

埋土；灰黄色シルト

床面標高；東端 7.202m、西端 7.060m

接続；P1SD101

出土遺物；弥生土器(口縁部 6 点、細片180点)

所見；調査区E -又-12・13・17・18・19・20・25グリッドに位置し、遺構検出状況などからSD 202を切ると考えられ、東端をP1SD101に接続すると考えられる溝状遺構である。西端は礫層にかかり未検出の可能性を含んでいる。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、検出面上でも出土を確認している。遺物から弥生 ~ 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 ~ 期頃と考えられる鉢(1・2)の口縁部・底部であり、同一個体の可能性が考えられる。

P2SD202(P2-4図)

時期；弥生 **方向**；N-60°E

規模；9.80×0.51m **深さ** 0.07m **断面形態**；皿状

埋土；灰黄褐色シルト

床面標高；北端 7.132m、南端 7.182m

接続；不明

出土遺物；なし

所見；調査区E -又-19・22~24グリッドに位置し、遺構検出状況などからSD201・203に切られると考えられる小溝である。

遺物は出土しておらず、周辺の遺構も弥生I~ 期頃まで検出しており、時期を判断することは困難である。

P2SD203(P2-4図)

時期；弥生 ~ **方向**；N-5°E、N-55°E

規模；46.00×1.80m **深さ** 0.34m **断面形態**；U字状

埋土；黄褐色シルト

床面標高；北端 7.112m、南端 6.812m

接続；SD203 / 大溝8a、SD204 / 大溝8b

出土遺物；縄文土器(口縁部 3 点、細片10点)、弥生土器(口縁部 6 点、底部 4 点、細片約140点)

所見；調査区E -又-17・22、E -ウ-2・7・8・13・18・23、キ-10・14・15、ク-2・3・6・7グリッドに位置し、調査区北側を蛇行しながらSD203 / 大溝8a・204 / 大溝8bに接続すると考えられる溝である。遺構検出状況などからSD202を切ると考えられるが、切り合い部分(セクション図C-C' 付

近)から集石を検出している。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から弥生 ~ 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 頃と考えられる壺(1)などであり、上層から出土している。またセクション図E-E' 付近の床面上から口縁部を含む縄文土器片(縄文時代後期中葉頃 鐘崎式?)が十数点程出土している。図示したものは縄文時代後期中葉頃と考えられる鉢(3)の口縁部であるが、上層から出土しており、混入の可能性が考えられる。

尚、本項に於てのSD203の記載事項に大溝8a部分は含んでいない。

P2SD205(P2-4図)

時期 ; 弥生I? **方向** ; N-22°E

規模 ; 23.90×0.50m **深さ** 0.09m **断面形態** ; 皿状

埋土 ; 暗褐色粘土質シルト

床面標高 ; 北端 6.890m、南端 6.775m

接続 ; 不明

出土遺物 ; なし

所見 ; 調査区E -イ-5・10・15・20・24・25、ウ-1・6・11、キ-4・9グリッドに位置し、セクション図G-G' などからSD207に切られると考えられる小溝である。

遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、SD207(弥生I-3期)に切られていることなどから、弥生I-3期頃かそれ以前の遺構の可能性が考えられる。

P2SD206(P2-4図)

時期 ; 弥生I? **方向** ; N-20°E

規模 ; 22.90×0.46m **深さ** 0.10m **断面形態** ; 皿状

埋土 ; 灰褐色粘土質シルト

床面標高 ; 北端 6.871m、南端 6.768m

接続 ; 不明

出土遺物 ; なし

所見 ; 調査区E -イ-10・15・19・20・24、キ-4・8・9グリッドに位置する小溝である。セクション図G-G' などからSD207に切られている可能性が考えられ、北端は未検出の可能性を含んでいる。

遺物は出土しておらず、時期を判断することは困難であったが、SD207(弥生I-3期)に切られている可能性が考えられ、弥生I-3期頃かそれ以前の遺構の可能性が考えられる。

P2SD207(P2-4図)

時期 ; 弥生I-3 **方向** ; N-20°E

規模 ; 48.90×1.12m **深さ** 0.20m **断面形態** ; 皿状

埋土 ; 淡褐色粘土質シルト

床面標高；北端 6.989m、南端 6.625m

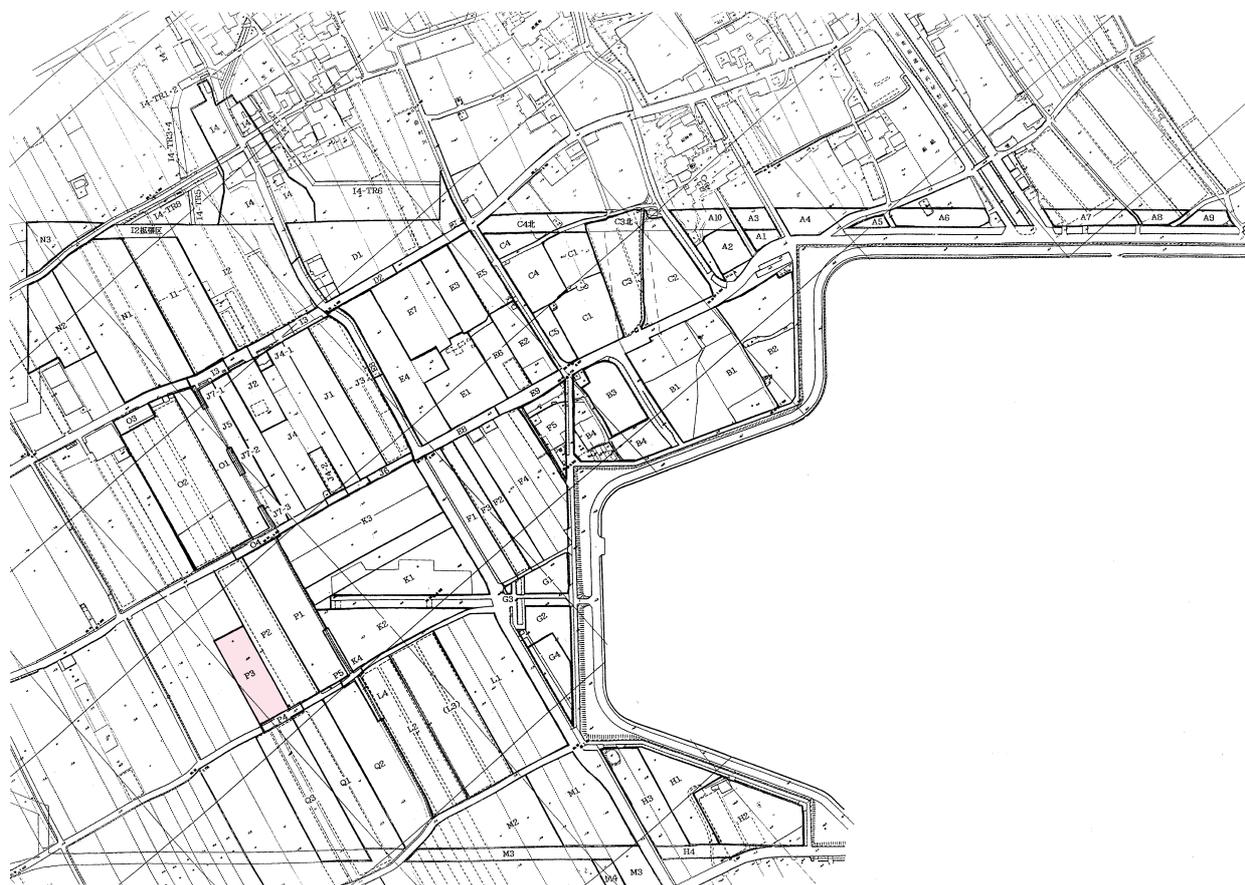
接続；不明

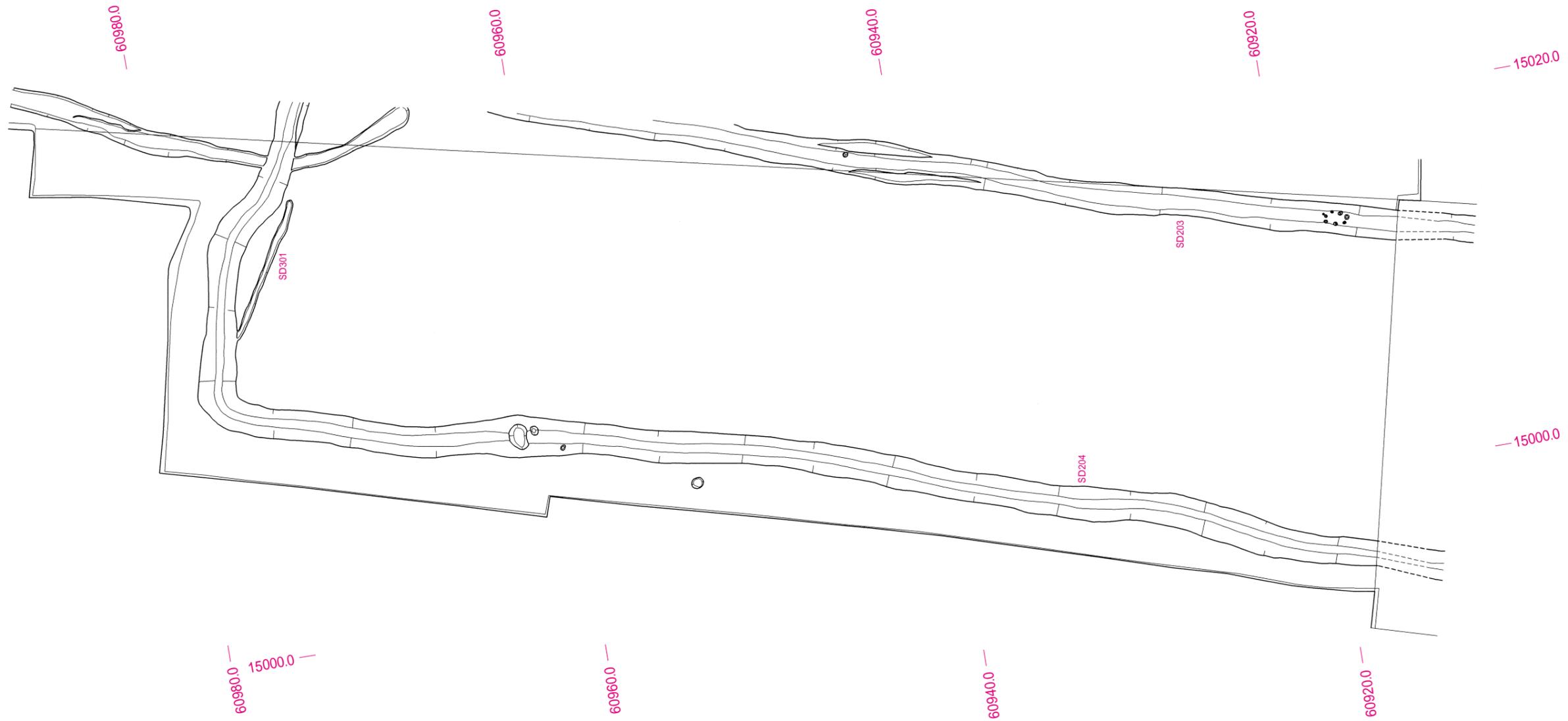
出土遺物；弥生土器(口縁部 1 点、細片約70点)

所見；調査区E -ヌ-11・16・21、E -イ-5・9・10・14・18・19・23・25、ウ-1、キ-2・3・7・12・17・18グリッドに位置し、セクション図G-G´などからSD205・206を切り、P3区でSD204 / 大溝8bに切られると考えられる溝である。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。全て弥生I-3期頃と考えられる土器片であり、調査区東端から出土している。遺物から弥生I-3期頃の遺構と考えられる。図示したものはP3区から出土している弥生I-3期頃と考えられる壺(1)の口縁部である。

P3 区の調査





P3 - 1 图 P3区遺構全体配置图(S=1/250)

1. P3区の概要

概要

P3区(P3-1図)は今次調査の中で、調査対象区域の最西端に位置し、東側にP2区、南側にP4区を挟んでQ3区と境を接する調査区である。P2区東端で存在を確認しているSD204 / 大溝8bの続きを検出しており、南に方向を変えてコ字状にSD203 / 大溝8aと並行しながら調査区南端に至り、P4区を経てQ3区へ続いている。調査区以西には生産域としての水田が展開していた可能性が考えられ、断定はできないが弥生時代に於ける大規模な水利施設の可能性が考えられる遺構である。

調査担当者 前田光雄、田坂京子

執筆担当者 宮地啓介

調査期間 平成11年 1月6日? ~ 平成11年 2月23日

調査面積 1,277m²

時代 (縄文時代) 弥生時代

検出遺構 弥生時代 溝 1 条、大溝 2 条、ピット 1 個

2. P3区弥生時代の遺構と遺物

(1) 溝跡

本調査区に於て溝跡は1条を検出している。SD204 / 大溝8bに切られると考えられる小溝であり、時期は不明であるが、P2区で検出している同規模のSD206とほぼ直角の位置関係で直線的に検出しており、関連性は不明であるが、区画溝の可能性を僅かながら残している溝状遺構である。

P3-1表 P3区溝一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	接 続	時 期	備 考
P3SD301	8.09×0.40×0.09	-	皿状	N-59°-W		弥生	

(2) 大溝

本調査区に於て大溝は2条を検出しており、コ字状に展開して並行しながら調査区南端に至り、P4区を経てQ3区へ続いている。大溝8a・8bの性格を、西域に展開していたと考えられる水田に関連する導水路とする可能性については検討を要すると考えられるが、弥生時代の生産域としての水田と集落端部に於ける溝状遺構との関連性を復元する上で貴重な資料と考えられる。

P3-2表 P3区大溝一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	接 続	時 期	備 考
P2SD203	59.60×1.46×0.50	-	U字状	N-11°-E	Q3SD301	弥生	大溝8a
P2SD204	84.70×1.91×0.76	-	U字状	N-19°-E	Q3SD302	弥生	大溝8b

P2SD203 / 大溝8a(P3-2・3図)

時期 ; 弥生 **方向** ; N-11°E

規模 ; 59.60×1.46m **深さ** 0.50m **断面形態** ; U字状

埋土 ; 灰黄褐色シルト

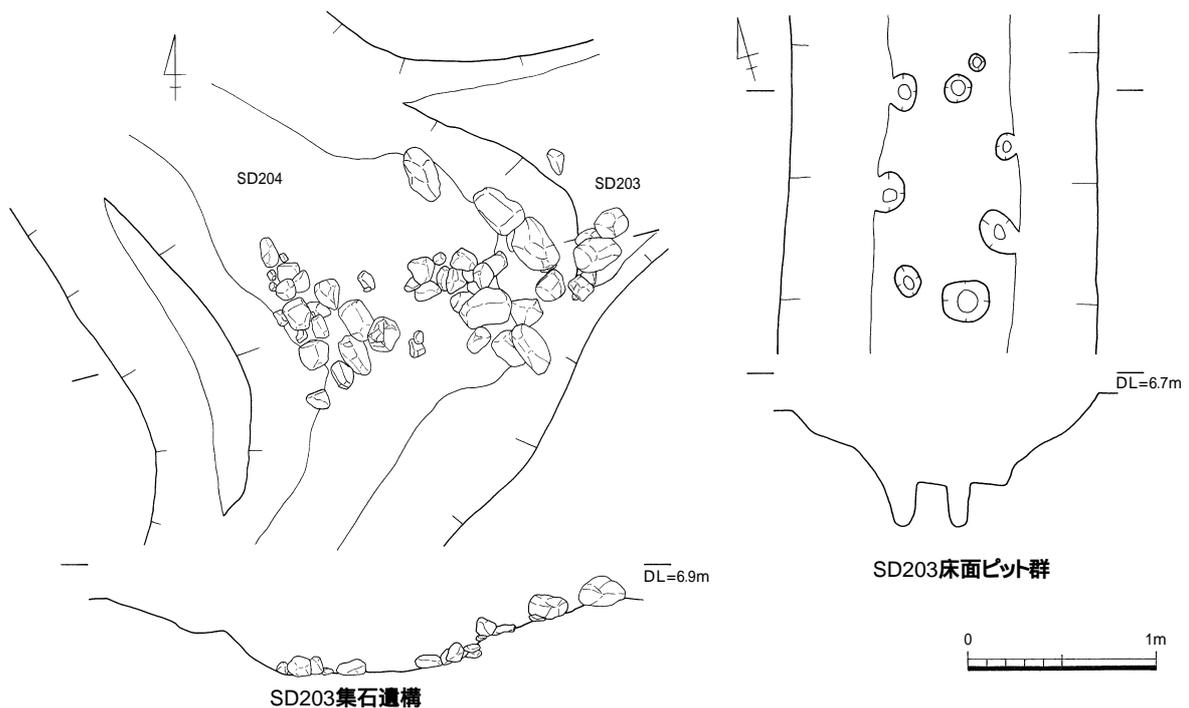
床面標高 ; 北端 6.358m、南端 6.084m

接続 ; P2SD203

出土遺物 ; 弥生土器 ?

所見 ; 調査区東端に位置し、SD204 / 大溝8bと共にコ字状を呈して並行しながら調査区南端に至り、P4区を経て、Q3区へ続いている大溝である。東側はP2区に広がる。北東端から北へ延びるP2SD203との関連性が考えられ、接続部分から集石遺構を検出しているなど、水利施設の可能性が考えられる。また南端の床面から径約9～25cm、深さ約12～23cmを測るピット群を楕円形状に検出しているが、性格は不明である。大溝の断面形は半楕円形に近いU字状を呈しており、並行するSD204 / 大溝8bよりやや浅い。

遺物は殆ど出土しておらず、時期を判断することは困難であった。接続関係などから弥生～期頃の遺構の可能性が考えられるが、時期については断定を避けたいと考える。



P3 - 2 図 P2SD203集石遺構・床面ピット群

P2SD204 / 大溝8b(P3-3図)

時期；弥生 **方向**；N-19°E

規模；84.70×1.91m **深さ** 0.76m **断面形態**；U字状

埋土；淡灰褐色砂質シルト

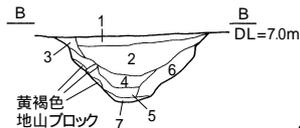
床面標高；東端 6.368m、南端 6.057m

接続；SD203 / 大溝8a

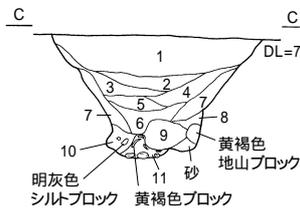
出土遺物；縄文土器(細片16点)

所見；調査区西側に位置し、P2SD207(弥生I-3期)を切り、SD203 / 大溝8aと共にコ字状を呈して並行しながら調査区南端に至り、P4区を経て、Q3区へ続いている大溝である。断面形態はV字状に近く、約1m程の深さを測り、一見すると環濠を連想させる程しっかりとした遺構でありながら、遺物は殆ど出土していない。埋土は粘性のある砂質シルトを基調とし、部分的に崩れ落ちたと考えられる黄褐色地山ブロックを確認しているが、砂・砂利層等は認められず、自然流水の可能性は低いと考えられる。下層から縄文時代中期末～後期頃と考えられる土器片が十数点程出土しているが、大溝は縄文時代の包含層の可能性が考えられる黒色粘土層の上面から掘り込まれており、包含層遺物が混入している可能性が考えられる。その他の遺構としてセクション図C-C'の床面から長径約1.4m、短径約0.9m、深さ約40cmを測る不整形な楕円形状を呈した土坑を検出している。断面形態は袋状を呈し、埋土は灰褐色粘土質シルトであり、遺物は出土していない。大溝との関連性は不明である。

遺物は殆ど出土しておらず、時期を判断することは困難であった。切り合い関係などから弥生I期以降(弥生～期頃?)の遺構と考えられるが、時期については断定を避けたいと考える。

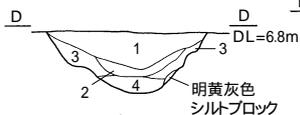


- 1: 黄褐色砂質シルト 粘性あり。
- 2: 淡褐黄色砂質シルト 粘性あり。僅かに炭化物を含む。
- 3: 淡褐色砂質シルト 粘性あり。
- 4: 淡黄褐色砂質シルト 粘性あり。
- 5: 淡褐色砂質シルト 粘性あり。黒褐色粒を含む。
- 6: 淡褐色砂質シルト 粘性あり。黒色と黄色ブロックを含む。
- 7: 淡灰褐色粘土

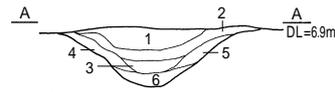
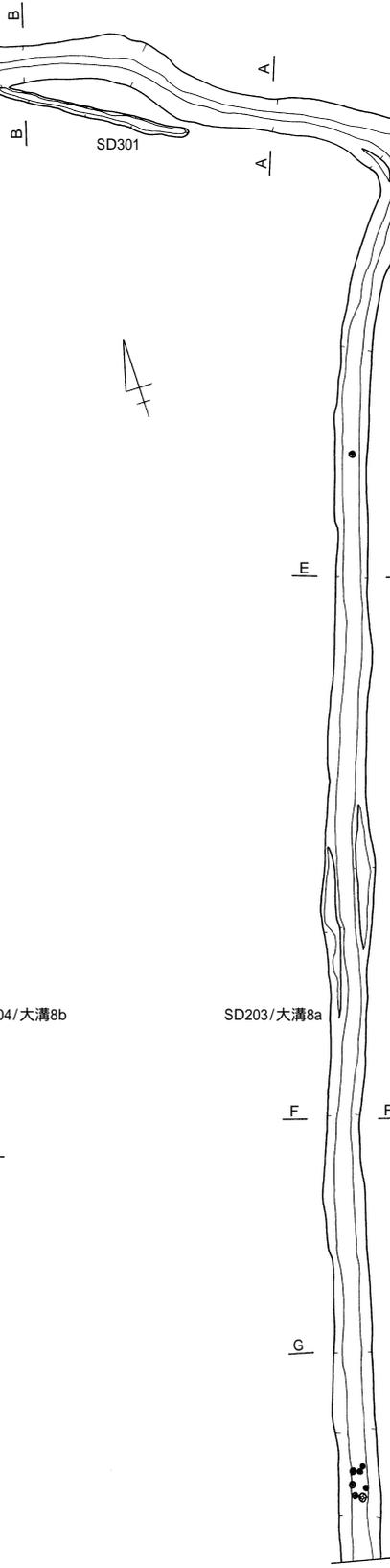


- 1: 淡灰褐色砂質シルト
- 2: 淡灰褐色砂質シルト 粘性あり。鉄分を含む。
- 3: 淡灰黄褐色砂質シルト 粘性あり。
- 4: 淡褐灰色砂質シルト 粘性あり。
- 5: 淡褐灰色砂質シルト 粘性あり。褐色が強い。
- 6: 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり。
- 7: 淡褐灰色粘土質シルト 黒褐色と黄褐色ブロックを含む。

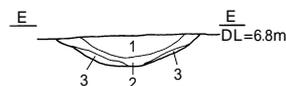
- 下層土杭
- 8: 灰黄色粘土
- 9: 灰褐色粘土質シルト 僅かに砂が混じる。黒褐色と黄褐色ブロックを含む。
- 10: 灰褐色粘土質シルト 明灰色シルトブロックを含む。
- 11: 暗灰褐色粘土質シルト 黄褐色ブロックが帯状に入る。



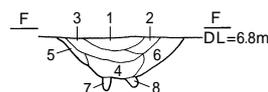
- 1: 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり。
- 2: 黄灰褐色砂質シルト 粘性あり。
- 3: 淡褐色砂質シルト 粘性あり。
- 4: 淡褐色粘土 黒褐色と黄褐色ブロックを含む。



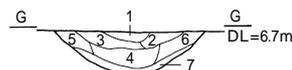
- 1: 灰黄色粘土質シルト 部分的に砂質が混じる。
- 2: 灰褐色粘土質シルト
- 3: 灰褐色粘土質シルト 褐色が強い。下層に僅かに炭化物を含む。
- 4: 暗灰褐色粘土質シルト 2~3mm位の黒褐色粘土質シルトを含む。
- 5: 灰褐色粘土質シルト 2~4.5mm位の黒褐色粘土質シルトを含む。
- 6: 暗灰褐色粘土質シルト ブロック状の炭化物が多く混じる。上層は黒色粘土質シルトブロック 下層は黄褐色粘土質シルトブロックが混じる。



- 1: 灰黄褐色粘土質シルト
- 2: 黄暗灰色粘土質シルト
- 3: 黄暗灰色粘土質シルト 黄褐色地山ブロックが混じる。



- 1: 灰黄褐色砂質シルト 粘性あり。
- 2: 暗灰褐色砂質シルト 粘性あり。
- 3: 灰褐色砂質シルト
- 4: 灰黄色砂質シルト 粘性あり。
- 5: 褐色砂質シルト 粘性あり。
- 6: 褐色粘土質シルト 明灰褐色シルトが入る。
- 7: 灰黄色粘土質シルト 明灰黄色シルトが混じる。
- 8: 灰黄色粘土質シルト 黄褐色シルトが混じる。

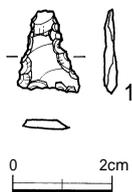


- 1: 灰黄褐色シルト
- 2: 暗灰褐色砂質シルト 粘性あり。
- 3: 黄灰褐色シルト
- 4: 灰褐色粘土質シルト 暗灰色と黄褐色シルトが混じる。
- 5: 褐色砂質シルト 粘性あり。鉄分を含む。
- 6: 暗灰色粘土質シルト 褐色シルトが混じる。
- 7: 灰色粘土 明灰黄色シルトがまだらに入る。



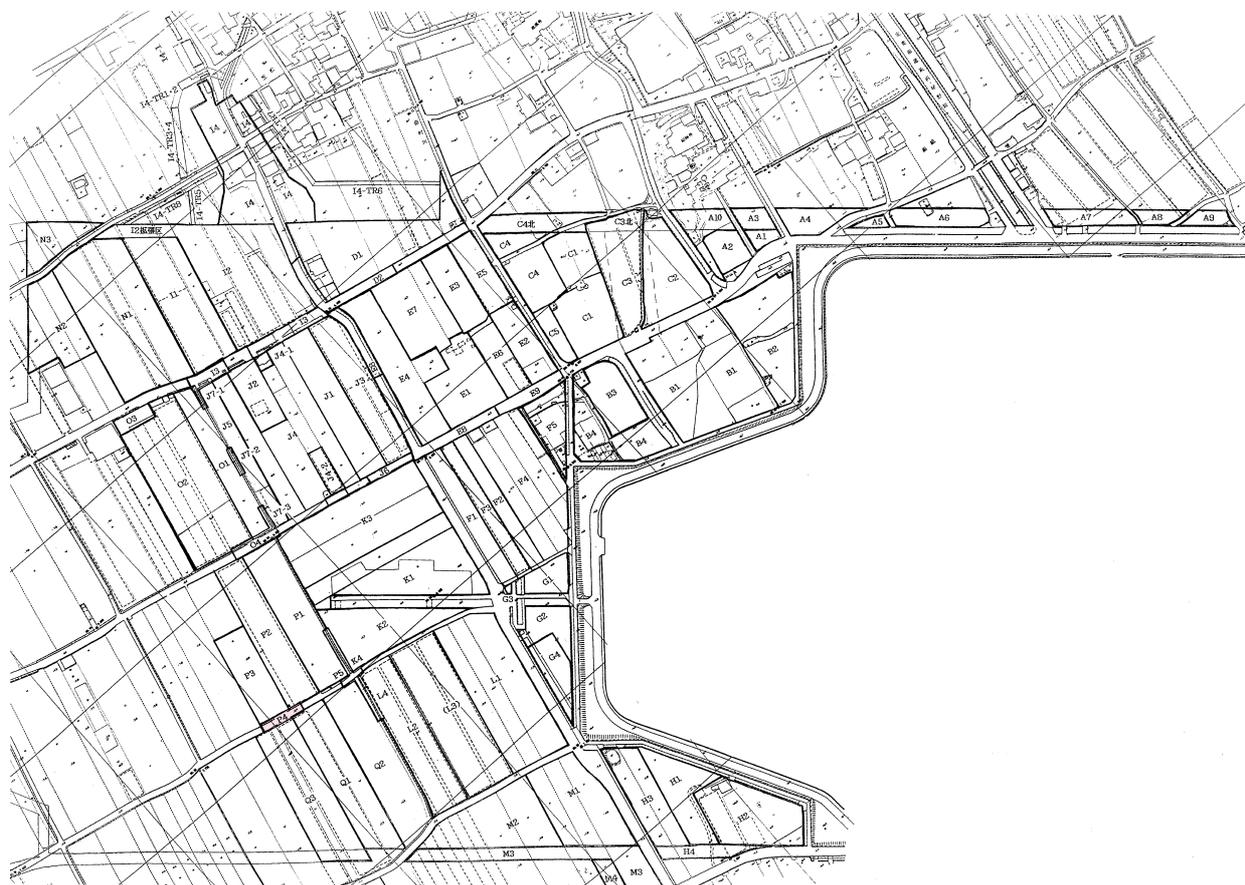
(3) 包含層出土遺物

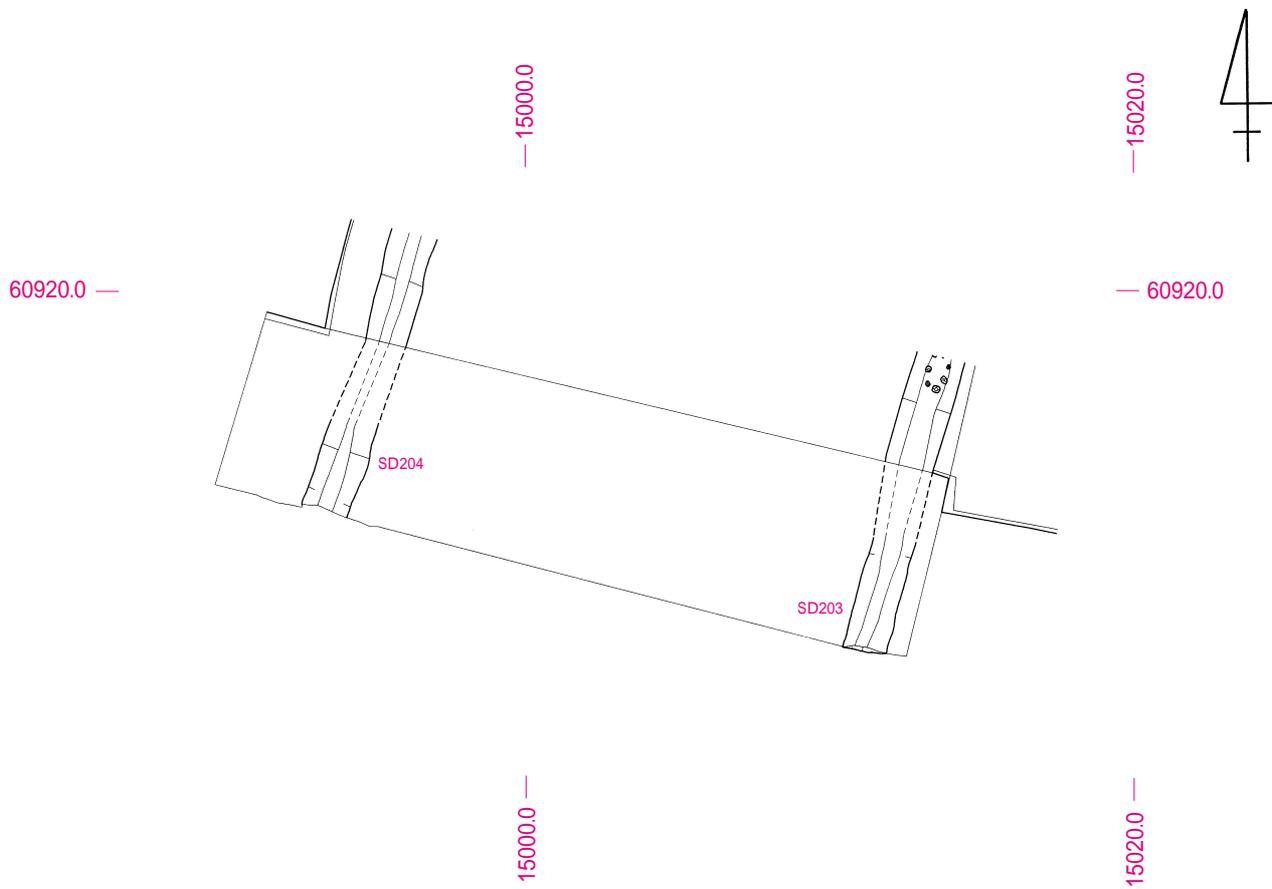
本調査区に於て包含層出土遺物は、黒色粘土層から出土したと考えられる石鏃(1)を1点確認しているのみである。



P3 - 4 図 P3区包含層出土遺物

P4 区の調査





P4 - 1 图 P4 区遺構全体配置図(S = 1/250)

1. P4区の概要

概要

P4区(P4-1図)は今次調査の中で、調査対象区域の最西端に位置し、北側をP3区に、南側をQ3区は挟まれた道路・水路の下面に位置する小調査区である。位置的にP3区から続くP2SD203 / 大溝8a・204 / 大溝8bの検出が予想され、粘土層中から2条の大溝を検出している。遺物は遺構検出面上から弥生土器の細片が数点程出土しているのみである。

大溝は更に南下し、Q3区に於てQ3SD301 / 大溝8a・302 / 大溝8bとして検出しており、それぞれ約96.0・74.5mを測る。大溝の総検出長は大溝8aが約159.4m、大溝8bが約162.4mを測り、Q3区に於てやや西に向きを変え、南端部では調査区外へと更に続いている。遺物は殆ど出土しておらず、図示し得たものは弥生I期末頃と考えられる甕(1)の口縁部が1点のみである。

調査担当者 坂本裕一(P4区)、森田尚宏(Q3SD301・302)

執筆担当者 宮地啓介

調査期間 平成12年7月4日～平成12年7月6日

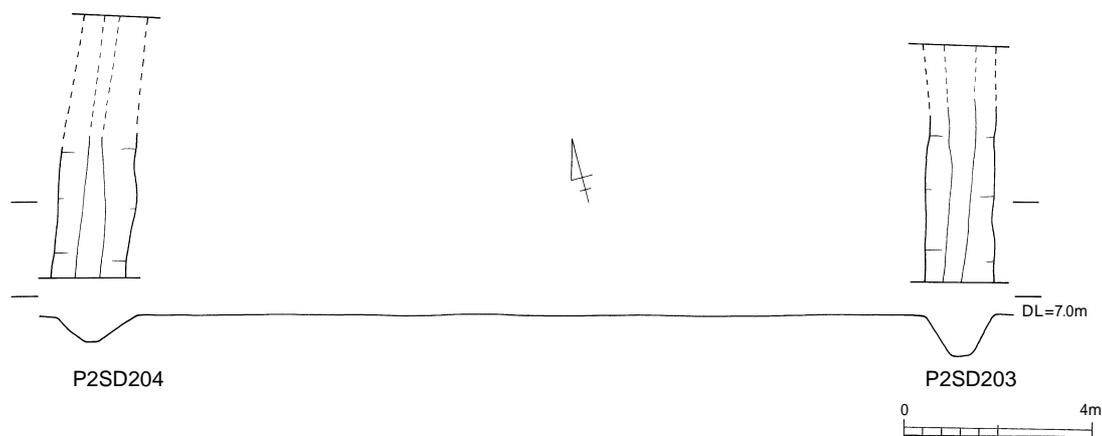
調査面積 120m²

時代 弥生時代

検出遺構 弥生時代 大溝2条

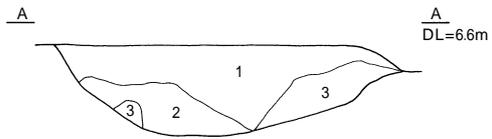
P4-1表 P4区大溝一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	接 続	時 期	備 考
P2SD203	3.80×1.42×0.80	-	U字状	N-15°-E	Q3SD301	弥生	
P2SD204	3.16×1.68×0.52	-	U字状	N-20°-E	Q3SD302	弥生	

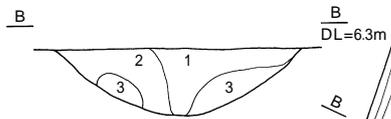


P4 - 2 図 P2SD203・204

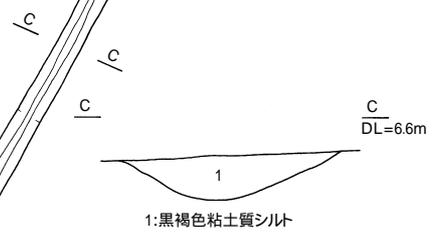
SD302出土遺物



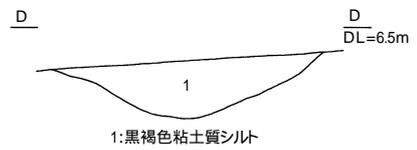
- 1: 灰黄褐色粘土質シルト
- 2: 黒褐色粘土質シルト
- 3: 灰白色粘土質シルト



- 1: 灰黄褐色粘土質シルト
- 2: 黒褐色粘土質シルト
- 3: にぶい黄褐色粘土質シルト



- 1: 黒褐色粘土質シルト

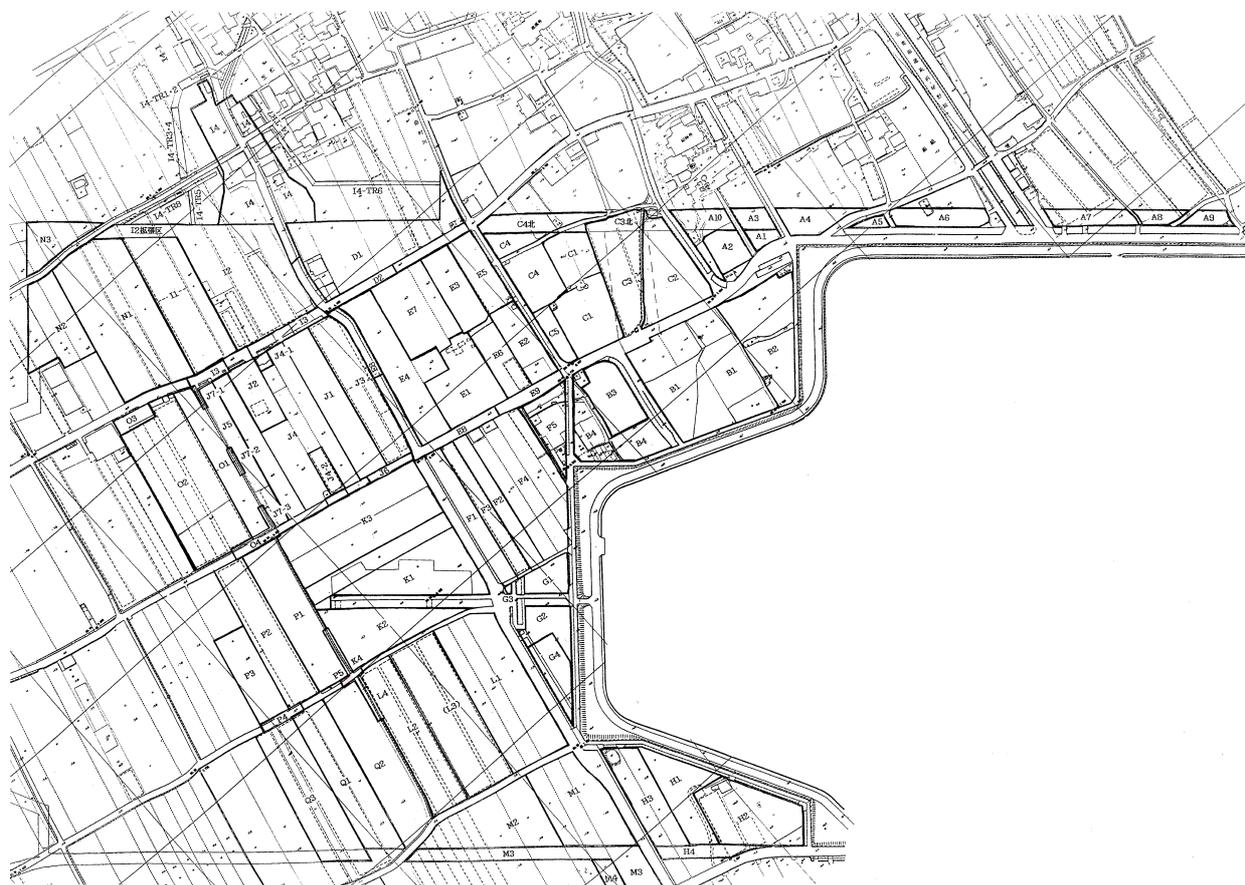


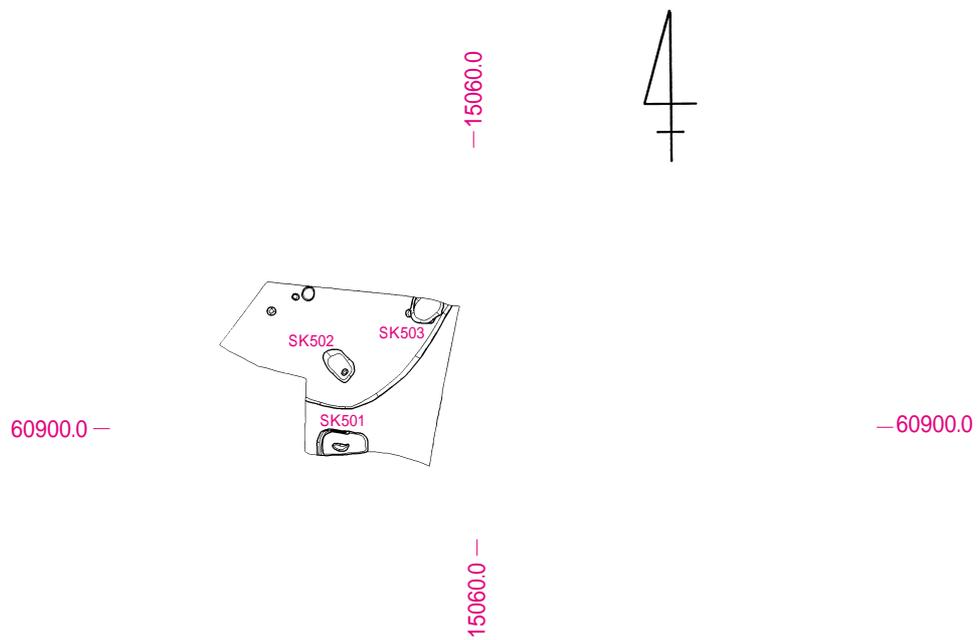
- 1: 黒褐色粘土質シルト



P4 - 3 ☒ Q3SD301・302

P5 区の調査





P5 - 1 図 P5区遺構全体配置図(S = 1/250)

1. P5区の概要

概要

P5区(P5-1図)は今次調査の中で、北側をP1区に、南側をQ2区に挟まれた道路・水路の下面に位置する小調査区である。基盤層はP1区南端部から続いていると考えられる褐色粘土質シルトであり、地形的には南西方向に落ち込んでいると見られる。位置的にはK区を中心に展開している弥生時代中期末～後期頃と考えられる集落のほぼ西端に位置していると考えられる。

調査担当者	坂本憲昭
執筆担当者	宮地啓介
調査期間	平成12年12月5日?～平成12年12月15日
調査面積	52m ²
時代	弥生時代中期末～後期
検出遺構	弥生時代 土坑3基、ピット3個

2. P5区弥生時代の遺構と遺物

(1) 土坑

本調査区に於て土坑は3基を検出している。床面から付帯施設を伴う土坑を1基検出しているが、集落端部に於ける土坑の性格等については不明である。

P5-1表 P5区土坑一覧

遺構番号	平面形	断面形	規 模			主軸方向	埋 土	切合関係	時 期	備 考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)					
P5SK501	隅丸方形	箱形	1.69	[0.75]	17.0	N-83°W	褐色粘土質シルト?	-	弥生 ~ ?	
P5SK502	隅丸方形	皿状	1.18	0.73	7.0	N-43°W	褐色粘土質シルト?	-	弥生 ~	
P5SK503	不整形	皿状	1.02	[0.79]	17.0	-	褐灰色粘土質シルト・他/2層	?	弥生 ~ ?	

P5SK501(P5-2図)

時期；弥生 ~ ? **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-83°W

規模；1.69×(0.75)m **深さ** 0.17m **断面形態**；箱形

埋土；褐色粘土質シルト?

付属遺構；周溝・中央ピット? **機能**；不明

出土遺物；弥生土器(細片17点)

所見；調査区E -ウ-4・5グリッドに位置する土坑である。南側は調査区外にかかり未検出である。西側の床面からコ字状に幅約5~15cm、深さ約2~6cmを測る周溝を検出している。また中央に長径約50cm、短径約25cm、深さ約12cmを測る土坑状の落ち込みを有している。埋土は灰色が混じる黄褐色砂質シルトで褐色粘土質シルトブロックを含んでいる。炭化物等は確認していない。平面形態や付帯施設から、作業小屋的な性格を持つ遺構の可能性が考えられる。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

P5SK502(P5-2図)

時期；弥生 ~ **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-43°W

規模；1.18×0.73m **深さ** 0.07m **断面形態**；皿状

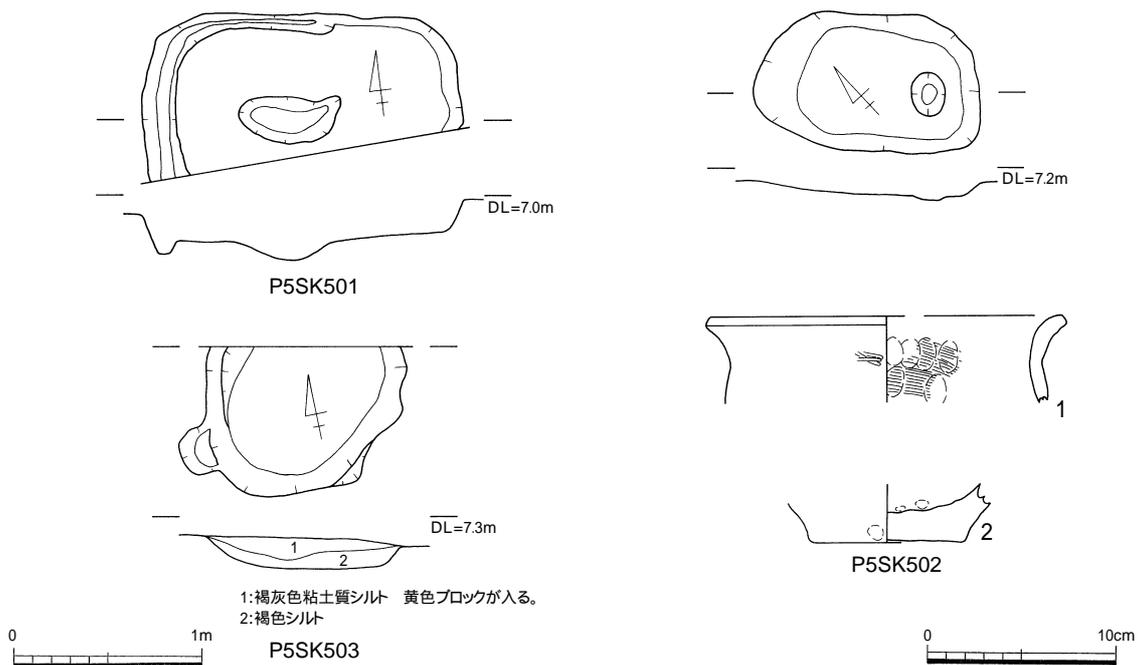
埋土；褐色粘土質シルト?

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部12点、底部1点、細片約310点)

所見；調査区E -ヌ-24グリッドに位置する土坑である。東側にピット状の浅い落ち込みを有している。

出土した遺物の大半は埋土中のものであり、検出面上である程度の出土状況を確認できた。遺物から弥生 ~ 期頃の遺構と考えられる。図示したものは弥生 期頃と考えられる甕(1)の口縁部などである。



P5 - 2 図 P5SK501 ~ 503

P5SK503(P5-2図)

時期；弥生 ~ ? **形状**；不整形 **主軸方向**；**規模**；1.02 × (0.79)m **深さ** 0.17m **断面形態**；皿状**埋土**；褐灰色粘土質シルト**付属遺構**；なし **機能**；不明**出土遺物**；弥生土器(細片約10点)

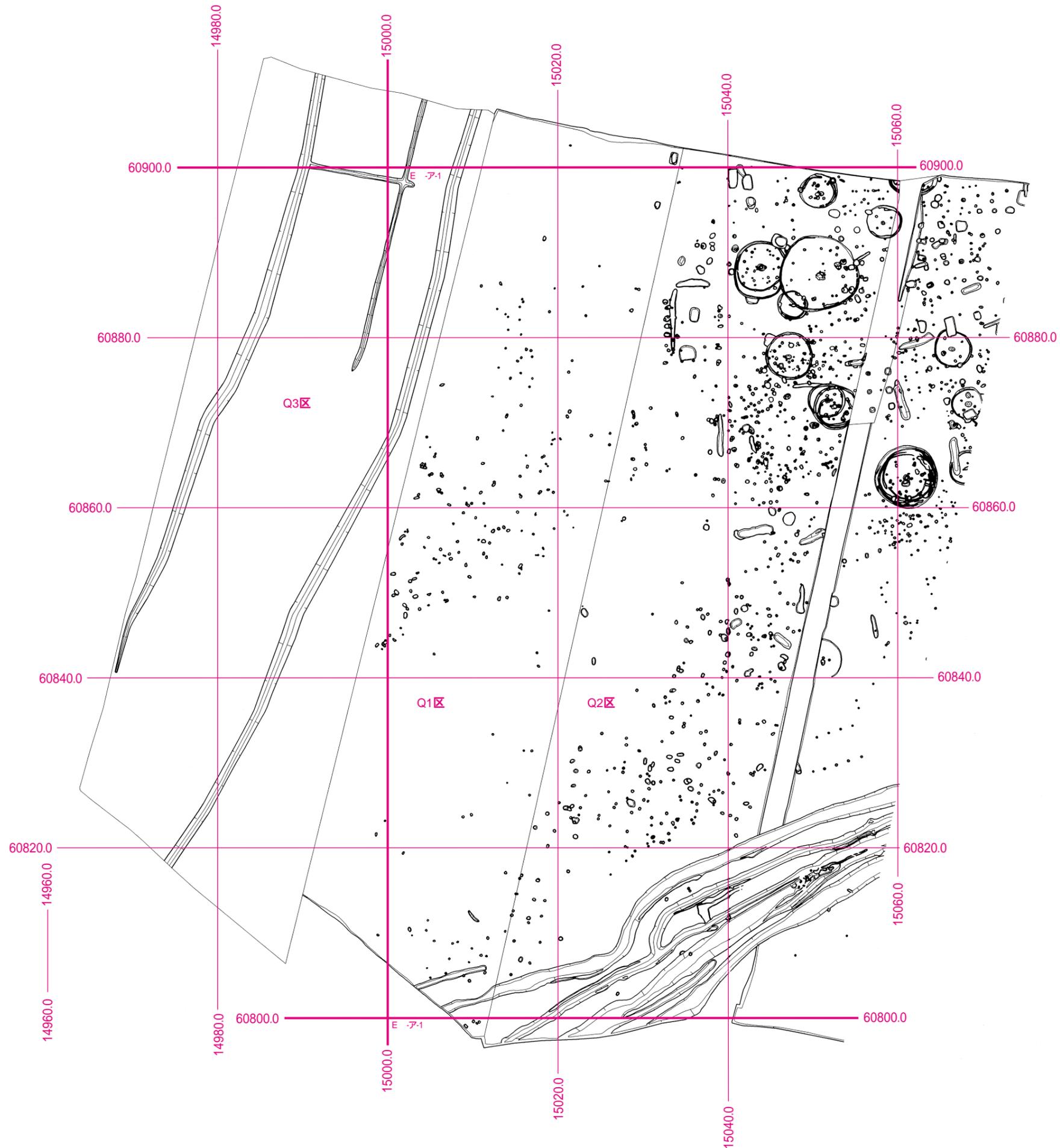
所見；調査区E -ヌ-20・25グリッドに位置する土坑である。北側は調査区外にかかり未検出である。遺構検出状況などから2つの土坑の切り合いの可能性も考えられるが、確認することは困難である。

出土した遺物の大半は埋土中のものである。遺物から時期を判断することは困難であったが、周辺の遺構などから弥生 ~ 期頃の遺構の可能性が考えられる。

(2) 包含層出土遺物

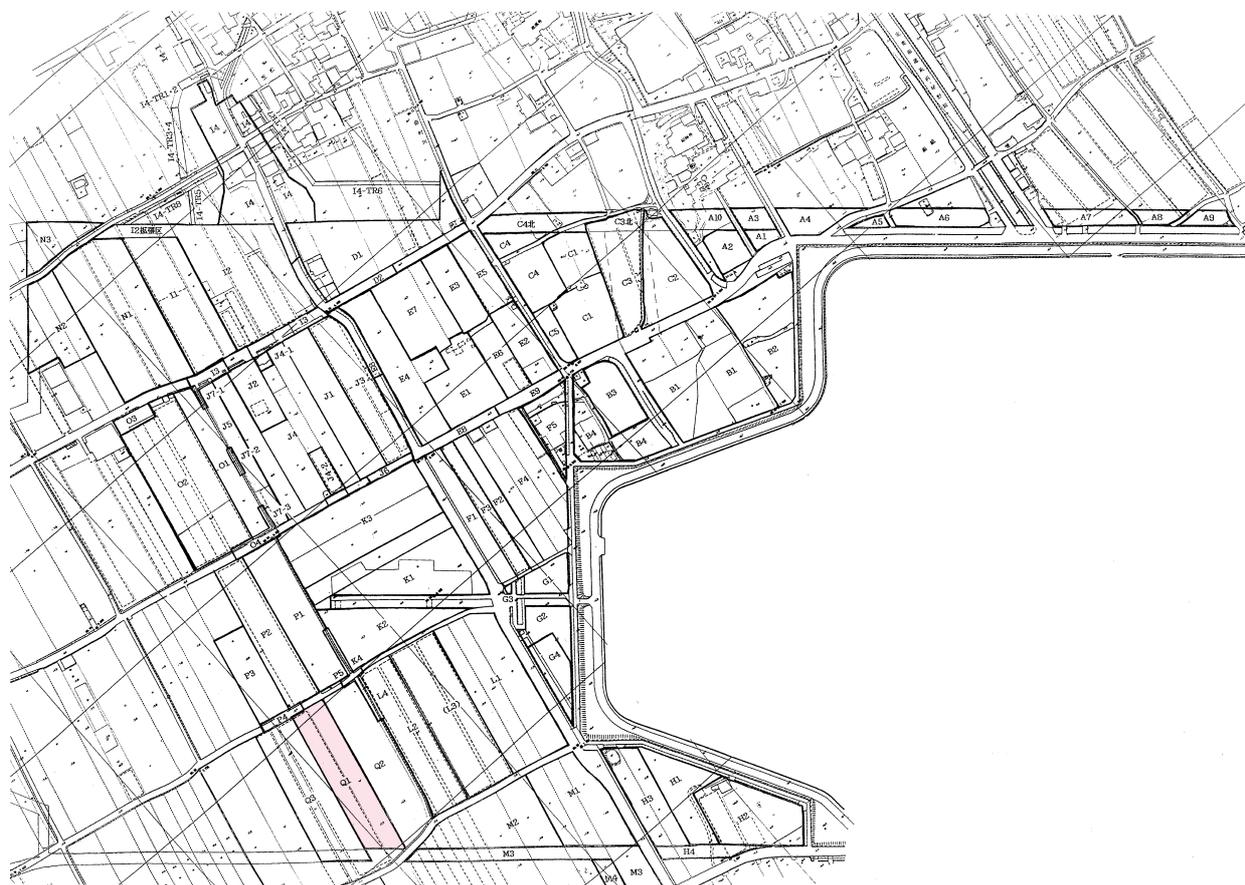
本調査区に於て包含層出土遺物は弥生時代中期末～後期頃と考えられる細片が約40点程出土している。遺物は同一個体の可能性が考えられるが、胴部の接合は適わなかった。包含層は暗褐色粘土質シルトと考えられ、やや西方に広がりを見せている。

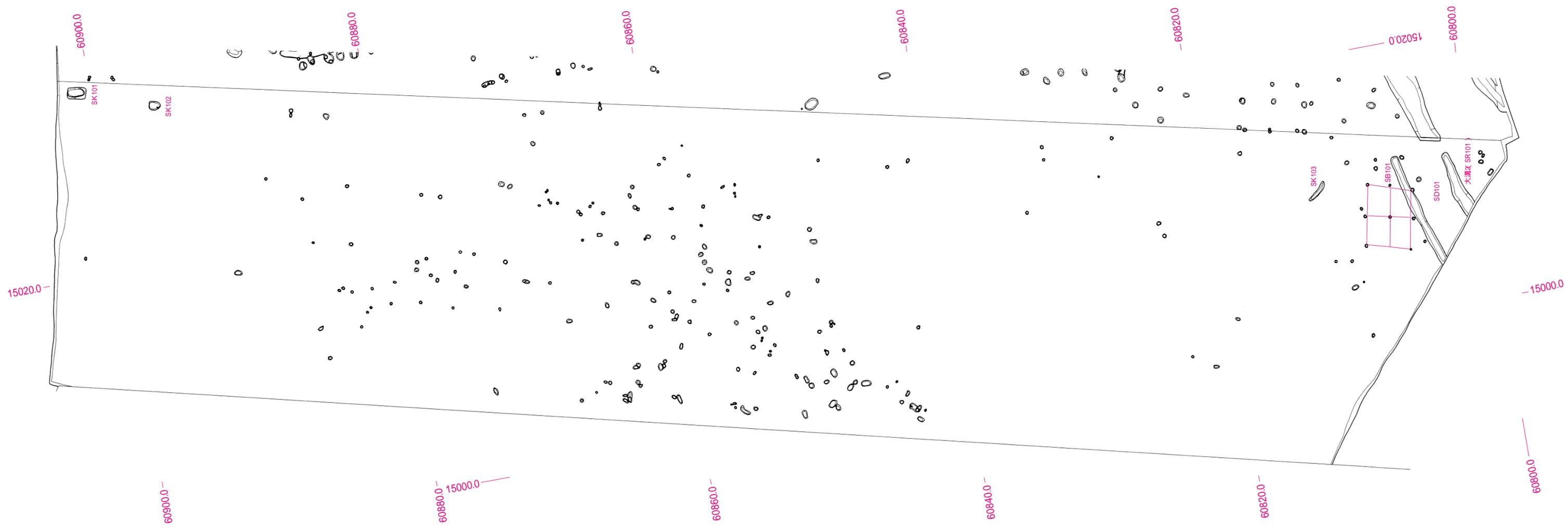
Q区の調査



Q-1图 Q区遺構全体配置図(S=1/500)

Q1 区の調査





Q1 - 1 図 Q1 区遺構全体配置図(S = 1/250)

1. Q1区の概要

概要

Q1区は今次調査の対象区域の南西部に当たり、西はQ2区、東はQ3区に接する。遺構密度は非常に低く、調査区北東部と南東部で掘立柱建物跡 1 棟、土坑 3 基、溝跡 2 条を検出したにとどまる。

また調査区の中央部西側では黒褐色シルトの堆積が認められた(Q1-2図)。この土層中からは遺物はほとんど出土しなかった。また黒褐色シルトの下層では、ピット状の平面プランを多数検出したが、掘立柱建物跡など規則性のある柱配置は認められない。明確な立ち上がりも見られず、人為的なものではない可能性が高い。弥生時代には調査区北東部微高地状の高まりがあり、南西に向かって落ち込む地形であったと考えられる。Q1区は集落の西の外れに当たる。

調査担当者 坂本裕一、小野由香

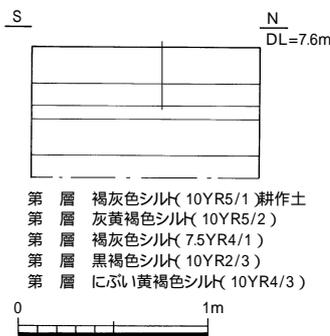
執筆担当者 小野由香

調査期間 平成10年 1月26日～平成10年 2月18日

調査面積 2,338m²

時代 弥生時代中～後期、中～近世

検出遺構 掘立柱建物跡 1 棟、土坑 3 基、溝跡 2 条、ピット225個



Q1 - 2 図 調査区西壁柱状図

2. Q1区弥生時代の遺構と遺物

(1) 土坑

Q1区で検出した弥生時代の土坑は3基である。2基は調査区北東部、1基は南東部で検出した。そのうち遺物が多量に出土したのはQ1SK101で、その他の土坑は残存状態が悪く、遺物の出土も少量にとどまった。

Q1-1表 Q1区土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	埋 土	切合関係	時 期	備 考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)					
Q1SK101	長方形	逆台形	1.43	0.68	24	N-8°-E	黒褐色粘土質シルト(10YR3/1)	-	弥生 ?	東肩部は調査区外
Q1SK102	楕円形	皿状	0.81	0.51	13	N-7°-W	黒褐色シルト(10YR2/2)	-	弥生	
Q1SK103	楕円形	皿状	1.78	0.22	5	N-38°-W	黒褐色シルト(10YR3/2)	-	弥生	

Q1SK101(Q1-3・4図)

時期；弥生 ? **形状**；長方形 **主軸方向**；N-8°E

規模；1.43×0.68m **深さ**；24cm **断面形態**；逆台形

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構； **機能**；

出土遺物；弥生土器(壺、甕)、スクレイパー 2

所見；調査区北東端部で検出した土坑で、土坑の東肩部は調査区外に若干延びる。比較的残存状態は良く、基底面よりやや上面から破砕した礫と共に多量の遺物が出土した。

出土遺物のうち、復元図示できたのは12点である。1・3・7～10は壺である。8～10は接合はできないものの法量、胎土等から同一個体と考えられる。2・4～6は甕である。壺、甕とも口縁部外面に粘土帯を貼付するものが多い。11・12はサヌカイト製のスクレイパーである。剥離調整によって刃部を作り出している。

Q1SK102(Q1-5図)

時期；弥生 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-7°W

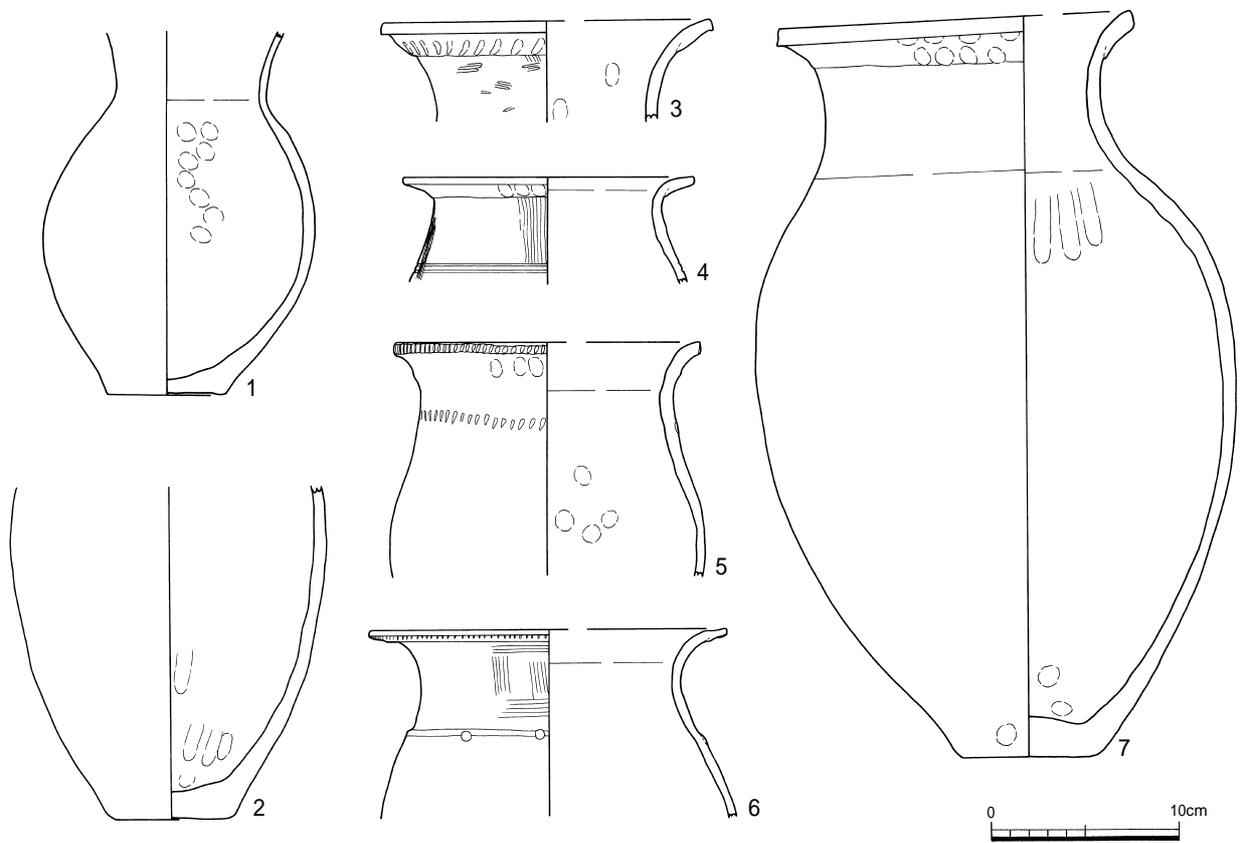
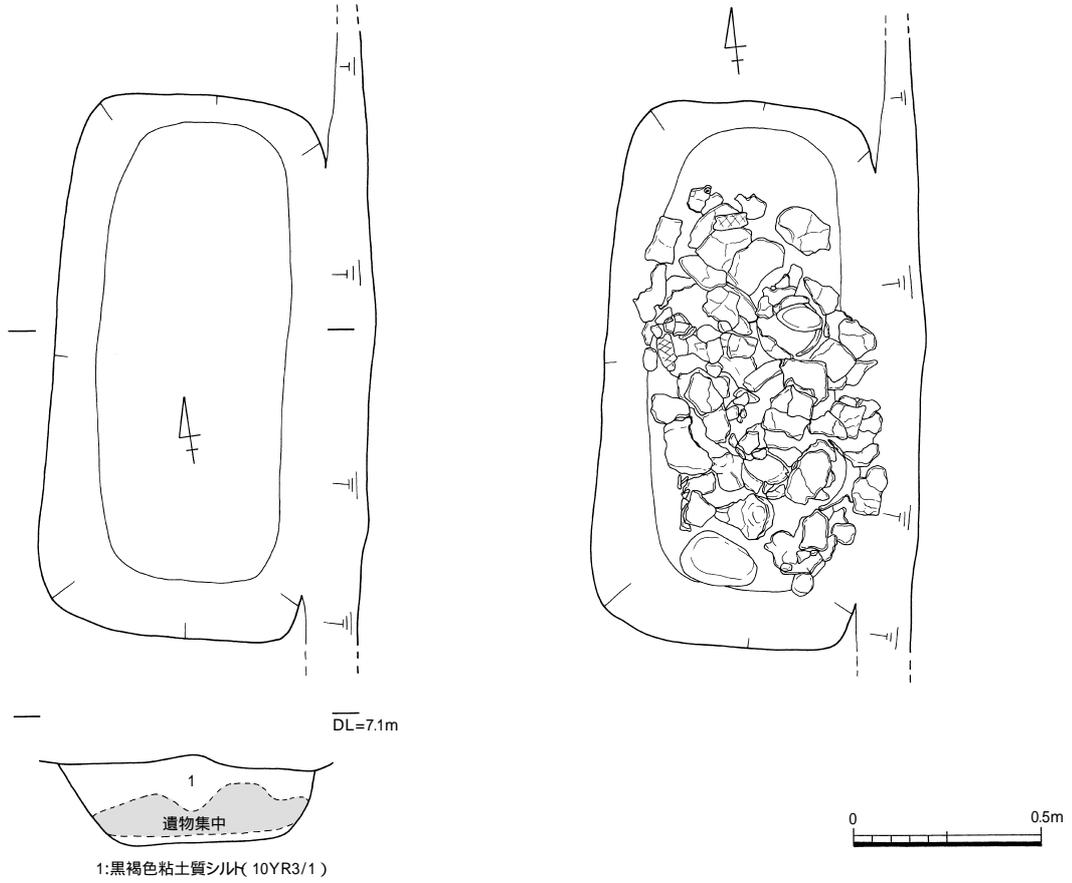
規模；0.81×0.51m **深さ**；13cm **断面形態**；皿状

埋土；黒褐色シルト

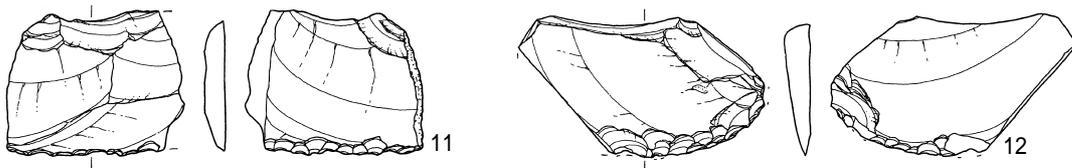
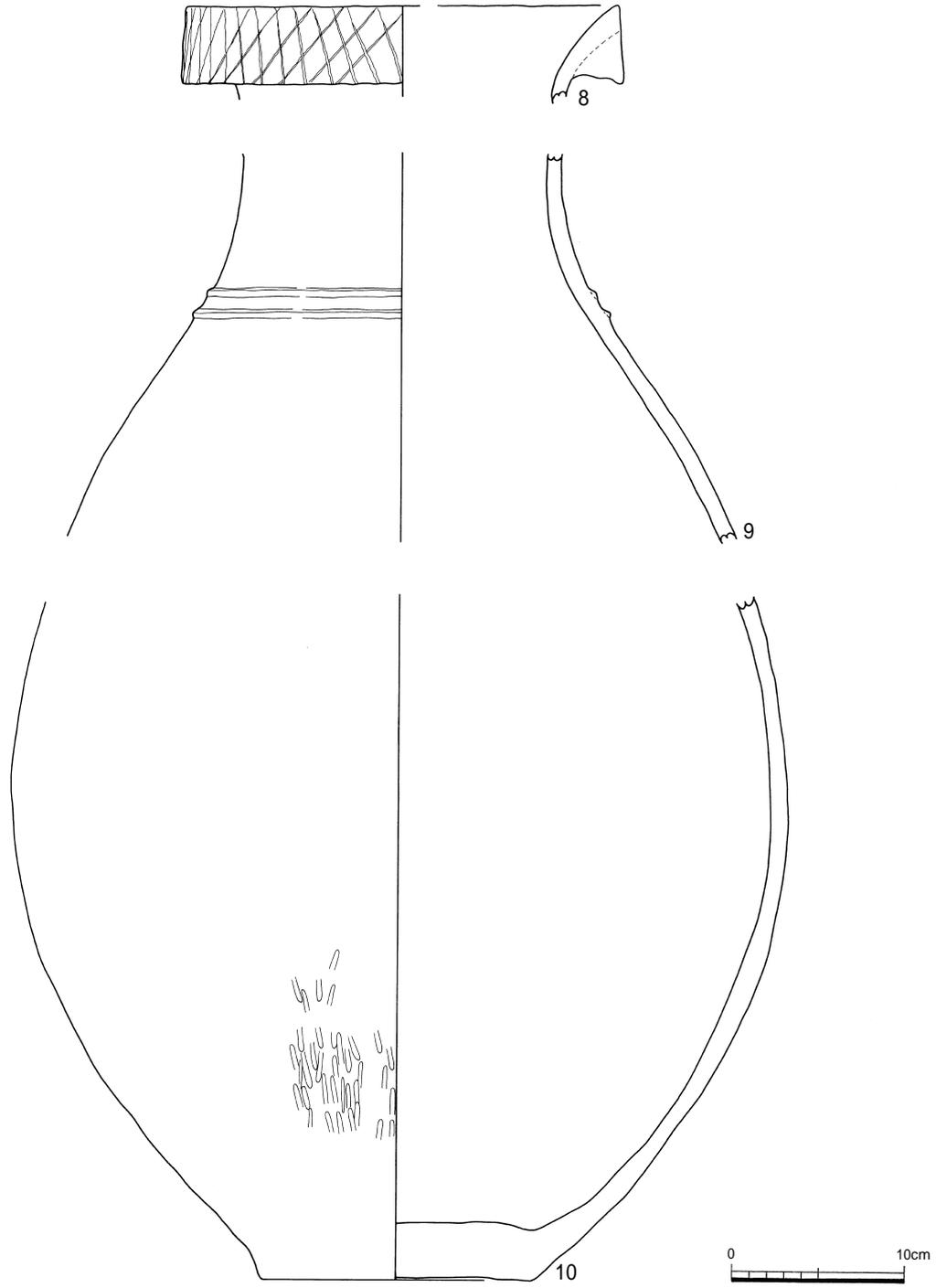
付属遺構； **機能**；

出土遺物；弥生土器

所見；調査区北東部で検出した土坑で、非常に残存状態が悪く、遺物は弥生土器胴部片が少量出土したにとどまる。そのうち復元図示できるものはなかった。



Q1 - 3 図 Q1SK101(1)



Q1 - 4 图 Q1SK101(2)

Q1SK103(Q1-5図)

時期；弥生 形状；楕円形 主軸方向；N-38°W

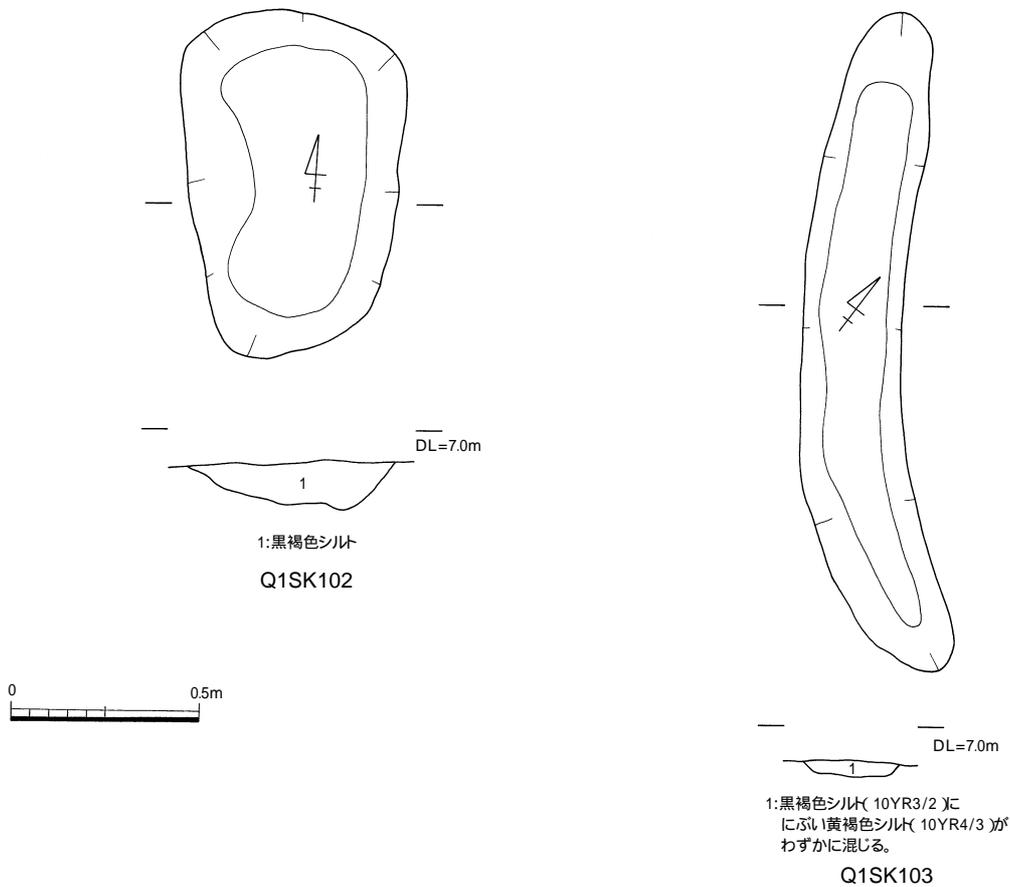
規模；1.78×0.22m 深さ；5cm 断面形態；皿状

埋土；黒褐色シルトに、にぶい黄褐色シルト混じる。

付属遺構； 機能；

出土遺物；

所見；調査区南東部で検出した土坑である。非常に残存状態が悪く、遺物は出土していない。埋土の色調から弥生時代の土坑と考えられる。



Q1 - 5 図 Q1SK102・103

(2) 溝跡

Q1区南部では北東から南西に向かってほぼ平行に延びる溝跡2条を検出した。北の溝跡をQ1SD101、南をQ1SR101としたが、いずれも機能は同じと考えられる。

Q1SR101は大溝2の一部で、溝の基底面がかろうじて残ったものと考えられる。埋土は灰黄褐色砂質シルトである。大溝2については第7分冊で詳しく述べることとする。

Q1SD101(Q1-6図)

時期；弥生 方向；N-74 °E

規模；(8.55)×0.8m 深さ；0.05～0.12m 断面形態；皿状

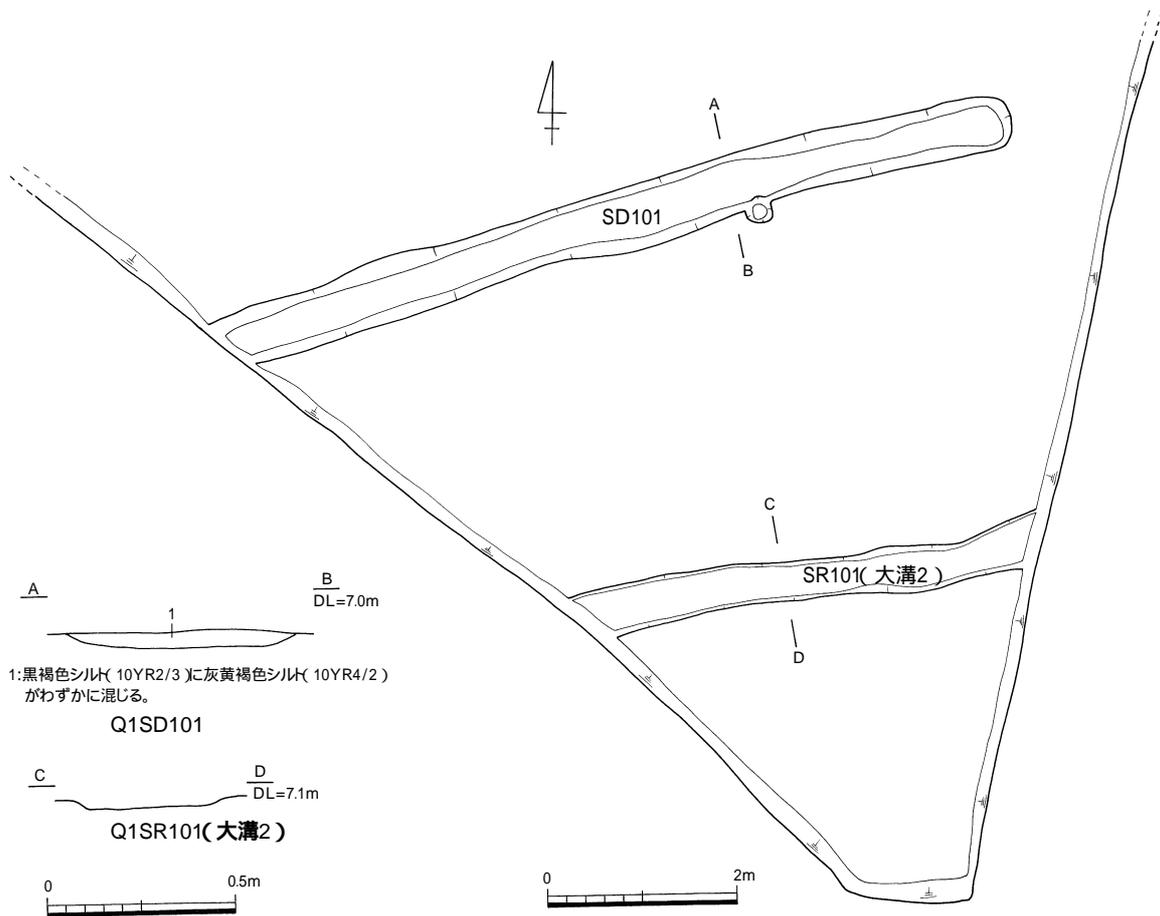
埋土；黒褐色シルトに灰黄褐色シルト混じる。

床面標高；6.837m

接続；

出土遺物；

所見；調査区南部で検出した溝跡で、Q1SR101(大溝2)の北を平行に流れる。隣接するQ2区では未検出である。小規模な溝あるいは溝状土坑の可能性もある。残存状態は極めて悪い。遺物は出土しておらず、埋土の色調から弥生時代の遺構と考えられる。



Q1 - 6 図 Q1SD101、SR101(大溝2)

3. Q1区中～近世の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

中世の掘立柱建物跡は調査区南部で1棟確認した。またQ2SB207はQ1区にまたがって検出した。これらの掘立柱建物跡は黒褐色シルトを掘り込んで建てられている。黒褐色シルト層の安定した中世以降に、Q1区の南は居住域として利用されていたと考えられる。

Q1SB101(Q1-7図)

時期；中～近世 棟方向；N-78°W

規模；梁間2×桁行2 梁間3.56m×桁行4.52m 面積16.1m²

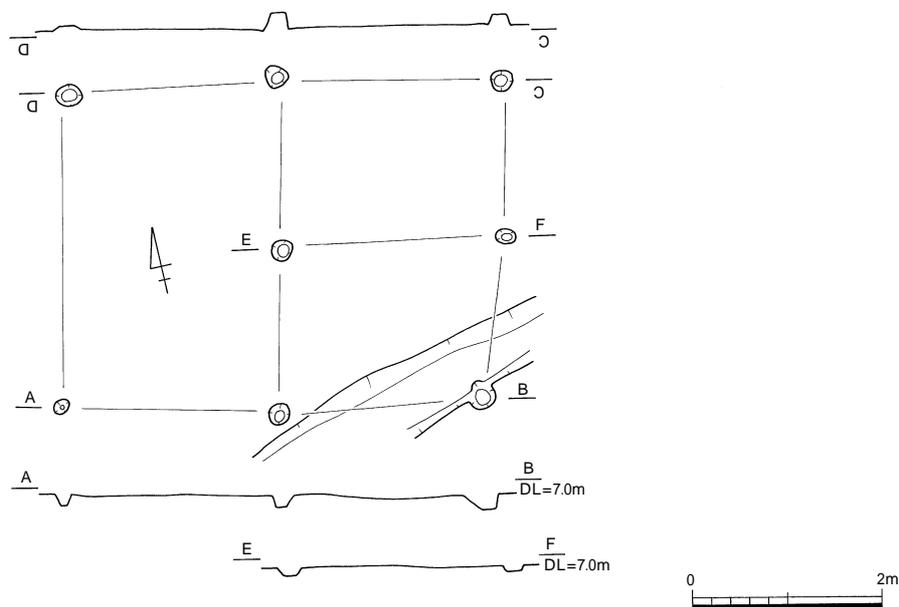
柱間寸法；梁間1.78～1.86m 桁行2.18～2.32m

柱穴数；8 柱穴形；円形

性格； 付属施設；

出土遺物；土師器

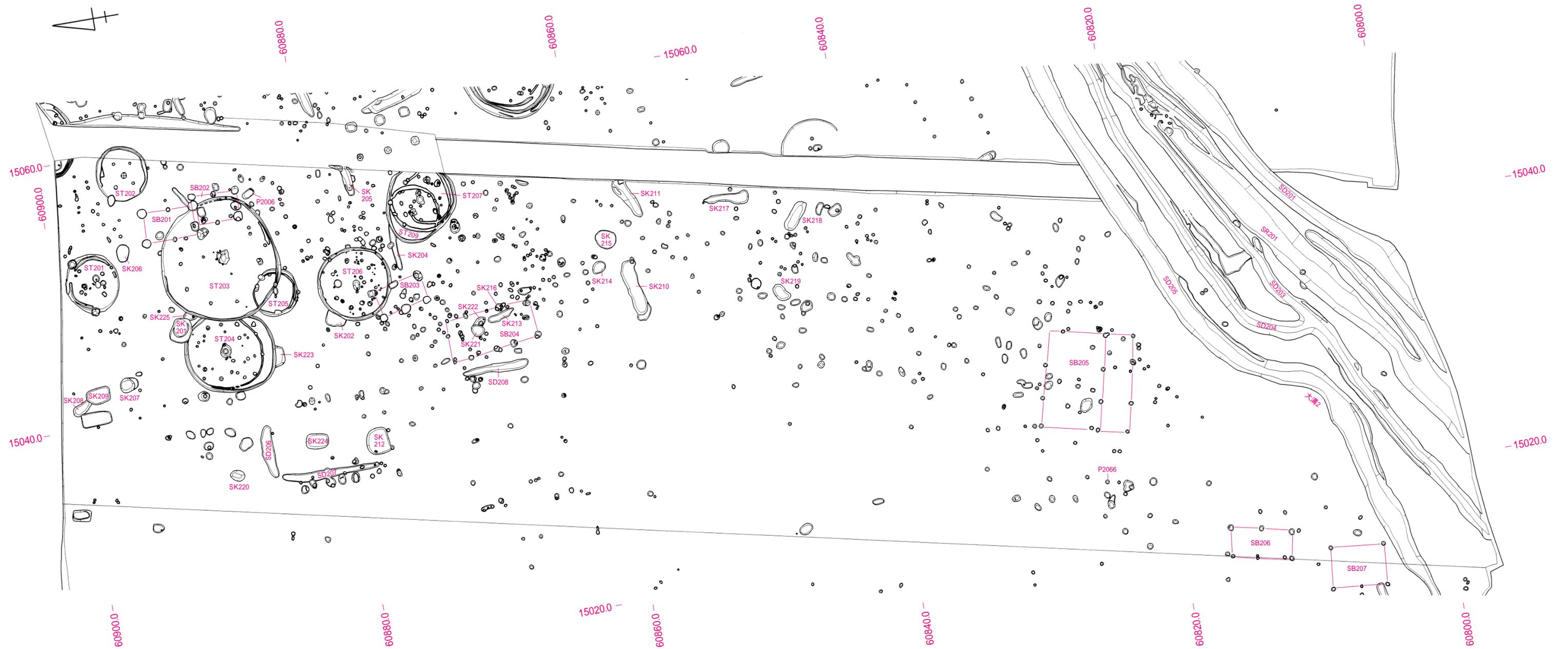
所見；調査区南部で検出した東西棟建物で、Q2SB207の西に所在する。西妻柱真中の柱穴は確認できなかった。柱穴の埋土はいずれも、にぶい黄褐色シルトに灰黄褐色・黒褐色シルトが混じる。遺物はP3・8から土師器片が出土したが、細片のため復元図示はできなかった。



Q1-7図 Q1SB101

Q2 区の調査





Q2 - 1 図 Q2区遺構全体配置図(S=1/250)

1. Q2区の概要

概要

今次全体調査区の南西部に位置する。田村遺跡群の西限に近づく為か西側ほど遺構の密度は低い。調査区は南北に細長く、北部と南部ではやや様相を異にする。

Q2区北部はF区からL区を中心とする弥生時代中・後期の居住域の西端部に相当する。～期の遺物を出土する竪穴住居跡を9軒検出した。また、出土遺物や切り合い等から同時期に機能したと思われる掘立柱建物跡4棟も検出された。同時期の土坑やピットも周辺で検出されたが、種実の貯蔵穴が確認されており、当時の生業を知るうえで貴重な資料となっている。

Q2区南端には大溝2が構築されているが、弥生時代の遺構は大溝2に近づくほど少なくなる。一方、大溝2の北側には古代末～中世前期の所産と思われる掘立柱建物跡が3棟検出されている。同時期のもと思われるピットは調査区南部に集中しているが、弥生時代の遺構検出面のレベルから考えて、調査区の原地形は北側ほど標高が高いと思われ、比較的浅い古代～中世の遺構が北側では削平されている可能性も否めない。

調査担当者 吉成承三、畠中宏一

執筆担当者 畠中宏一

調査期間 平成10年12月～平成11年2月

調査面積 2,753m²

時代 弥生時代中期～後期、古代～中世

検出遺構 弥生時代 竪穴住居跡9軒 掘立柱建物跡4棟 土坑24基 溝跡3条 ピット75個
古代～中世 掘立柱建物跡3棟 ピット6個

2. Q2区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

調査区北東部において9軒の竪穴住居跡を検出した。住居群の西端部に位置する為か、切り合いは少なくST203～205とST207・209のみである。時期は中・後期で、遺物や状況からST204・207・209は 期、ST202・205・206は 期、ST201は ～ 期、ST203は 期にそれぞれ機能したと思われる。壁溝から拡張の可能性が考えられる住居は 期のST204・207のみである。 期の住居の中央ピットからは炭化物が検出されていない。 期の住居であるST203の規模は特に大きいことなど時期的な特徴がみられる。

Q2-1表 Q2区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(m ²)	平面形	主軸方向	時 期	備 考
Q2ST201	4.16	0.10	13.6	円形	N-80°-W	弥生 ～	
Q2ST202	3.96	0.26	12.3	円形	N-61°-W	弥生	
Q2ST203	9.28	0.28	67.6	円形	N-65°-W	弥生	
Q2ST204	7.10×6.10	0.12	34.2	楕円形	N-85°-E	弥生	
Q2ST205	3.46	0.20	9.4	円形	N-90°	弥生	
Q2ST206	5.52	0.20	23.9	円形	N-90°	弥生	
Q2ST207	5.10	0.24	20.4	円形	N-55°-E	弥生	
Q2ST208							L2ST204として記す
Q2ST209	4.18	0.30	13.7	円形	N-20°-E	弥生	

Q2ST201(Q2-2図)

時期；弥生 ～ **形状**；円形 **主軸方向**；N-80°-W

規模；直径4.16m **深さ**0.10m **面積**13.6m²

埋土；黒褐色粘土

ピット；数11 **支柱穴数**5 **支柱穴**P1～4・6

床面；1面

中央ピット；**形状**楕円形 **規模**50×60cm **深さ**7cm **埋土**暗褐色黄色粘土

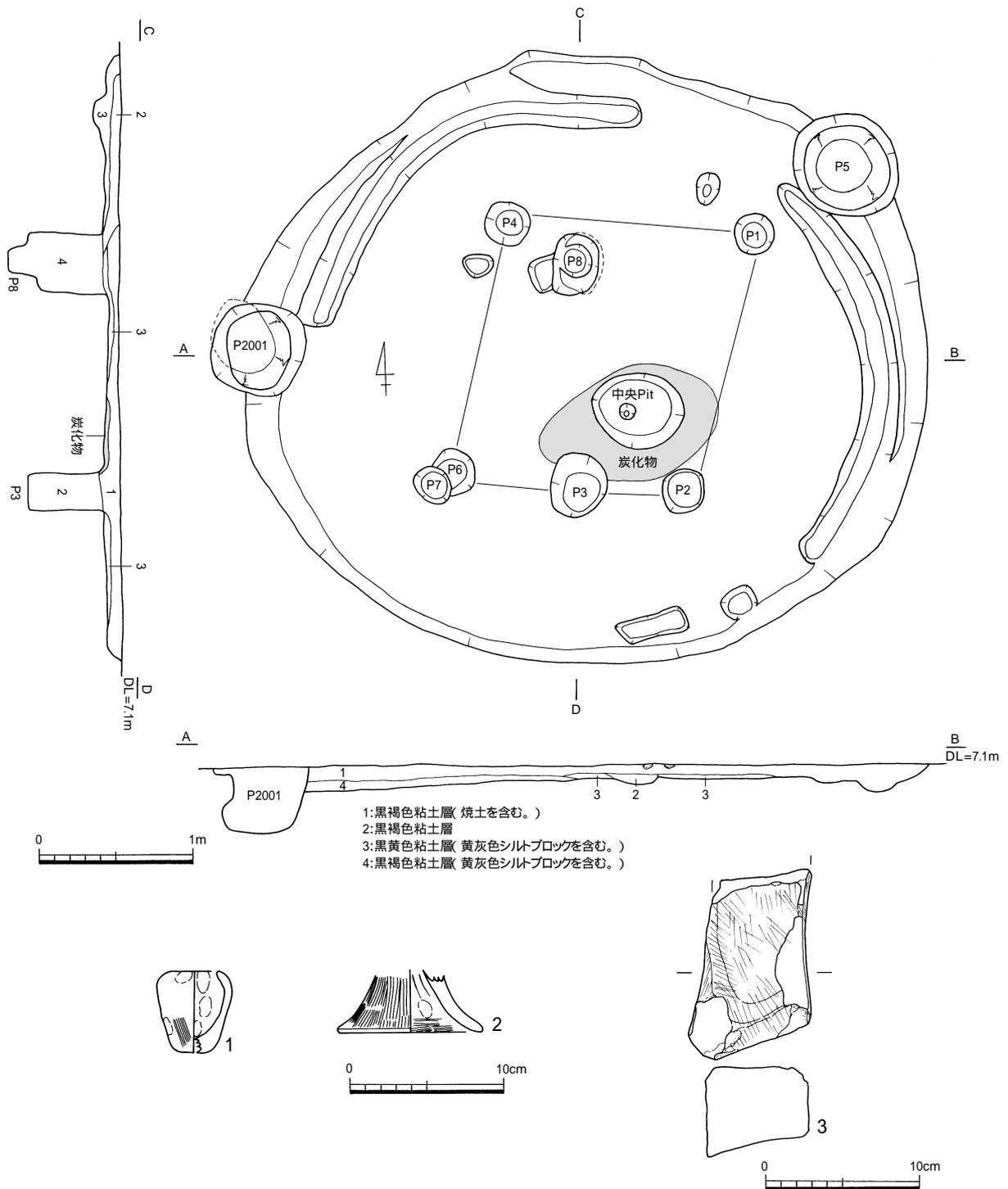
壁溝；1条 **幅**23cm **深さ**5cm

出土遺物；弥生土器(ミニチュア土器)、石器(叩石・砥石・サヌカイト剥片)

所見；調査区北部で検出。P5・2001によって切られる。床面より検出されたP8を切る。埋土は上層が黒褐色土であったが、下層は黒褐色土に黄灰色土がブロック状に混じった状態で貼床になっている可能性が考えられた。

中央ピットは住居跡中央よりやや南東の位置で検出した。埋土は暗褐色黄色土であるが、周囲には炭化物がみられ、炉として使用されたと考えられる。床面で検出された11個のピットの内、P1～4・6が相互の間隔等から支柱穴であると考えられた。

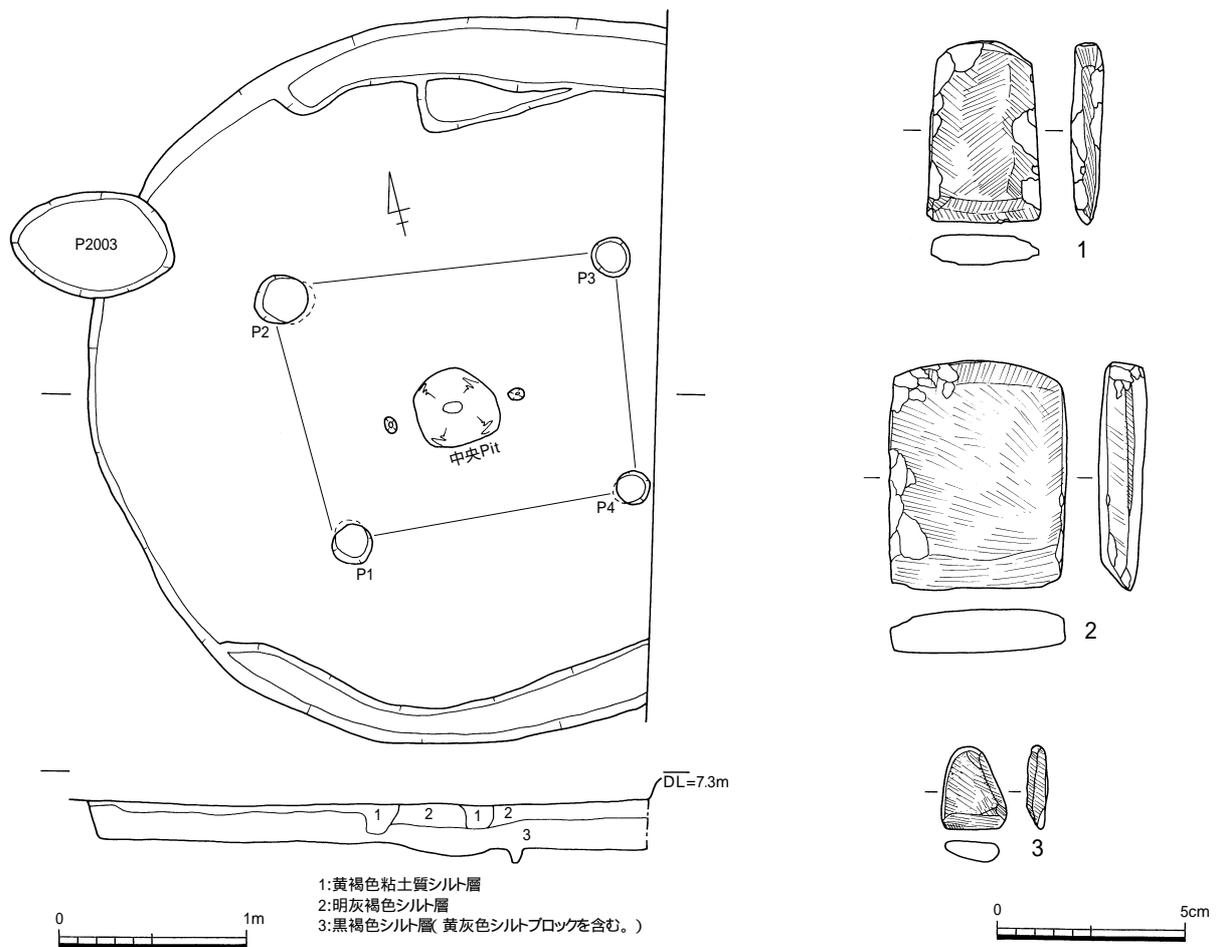
弥生土器はミニチュア土器(1)、脚部(2)が出土した。その他、図示しなかったが小片も含めると約170点が出土しており、タタキ目が残る土器片や平底の底部も出土した。P1～3・5からも小片が



Q2 - 2 図 Q2ST201

出土した。P1から出土した土器片にはタタキ目が残っており、P5から出土した口縁部の土器片には刻目が施される。石器としてはP5から砥石(3)、図示しなかったが埋土から叩石が出土した。また、サヌカイトの剥片が約3.9g出土した。

出土遺物から、この住居は弥生時代中期末から後期初頭にかけて使用されたと考えられる。



Q2 - 3 図 Q2ST202

Q2ST202(Q2-3図)

時期；弥生 形状；円形 主軸方向；N-61°-W

規模；直径 3.96m 深さ 0.26m 面積 12.3m²

埋土；黒褐色シルト

ピット；数 7 主柱穴数 4 主柱穴 P1～4

床面；1面

中央ピット；形状 円形 規模 直径 46cm 深さ 20cm 埋土 黒褐色粘土質シルト

壁溝；1条 幅 30cm 深さ 5cm

出土遺物；弥生土器、石器(石斧)

所見；調査区北部で検出した。遺構の東部は調査区外に所在する。P2003によって切られる。

中央ピットは暗黒褐色土であり、両側に小型のピットが配される。主柱穴はP1～4である。

弥生土器は、図示したものはないが小片を含めて約20点出土した。凹線文が施された土器片や、平底の底部もみられる。石器では扁平片刃石斧(1・2)、小型石斧(3)が出土した。

出土遺物から住居跡は、弥生時代 期に使用された可能性が考えられる。

Q2ST203(Q2-4・5図)

時期；弥生 **形状**；円形 **主軸方向**；N-65°-W

規模；直径 9.28m **深さ** 0.28m **面積** 67.6m²

埋土；明黄灰色シルト

ピット；数 23 **主柱穴数** 10 **主柱穴** P1・2・5～12

床面；1面

中央ピット；**形状** 円形 **規模** 直径 100cm **深さ** 20cm **埋土** 黒褐色シルト

壁溝；1条 **幅** 24cm **深さ** 4cm

出土遺物；弥生土器(壺・甕・ミニチュア土器・高杯)、石器(石包丁・石斧・凹石・砥石・サヌカイト剥片)、ガラス玉

所見；調査区北部で検出。ST204・205、SB201・202、SK225を切る。埋土は上層が明黄灰色土で中央部の下部に10～30cm大の円礫が投げ込まれていた。下層は明黄灰褐色土である。

南部の壁溝の内側に細長い遺構があるが内側の壁溝である可能性がある。中央ピットはやや不定形に近い楕円形である。周囲には炭化物がみられ、炉として使用されたと考えられる。床面で検出された23個のピットの内、P1・2・5～12が相互の間隔等から主柱穴であると考えられる。

弥生土器は壺(1～8)、甕(9～12)、壺または甕の底部(13～15)、ミニチュア土器(16)、高杯(17～23)等、小片を含めて約4,050点が出土した。壺では、貼付口縁を有するもの(1・3)、凹線文を施されたもの(6)、頸部にタタキ目の残るもの(7)等が出土した。円形浮文を有し、櫛描直線文を施された長頸壺(8)については、第1層から出土したことや、他の出土遺物との時期差があることを考え併せると、他時期の包含層からの混入の可能性が考えられる。甕では、口縁端部に凹線文を施すもの(10・11)もあれば、胴部にタタキ目を残すものもみられる。底部は平底のものがみられ、タタキ目を残すもの(15)もある。高杯では口縁部が外反するもの(17～19・21)や、脚部の端部に凹線文が施されたものが見える。(19)と(20)は同一個体であると考えられる。石器では 叩石(24)や、図示しなかったが、石包丁・石斧・砥石が出土した。サヌカイト剥片も約2.9g 出土している。その他、ガラス玉(25)が出土した。

タタキ目の残る土器や口縁部が外反する高杯が出土したことや、凹線文が施された土器が残ることから考えて、この住居は後期前葉に使用されたものであると思われる。

Q2ST204(Q2-6図)

時期；弥生 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-85°-E

規模；7.10×6.10m **深さ** 0.12m **面積** 34.2m²

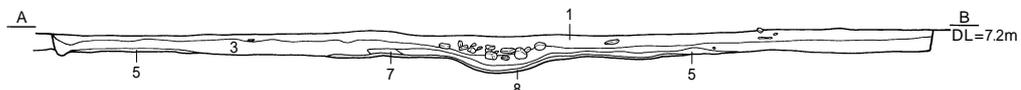
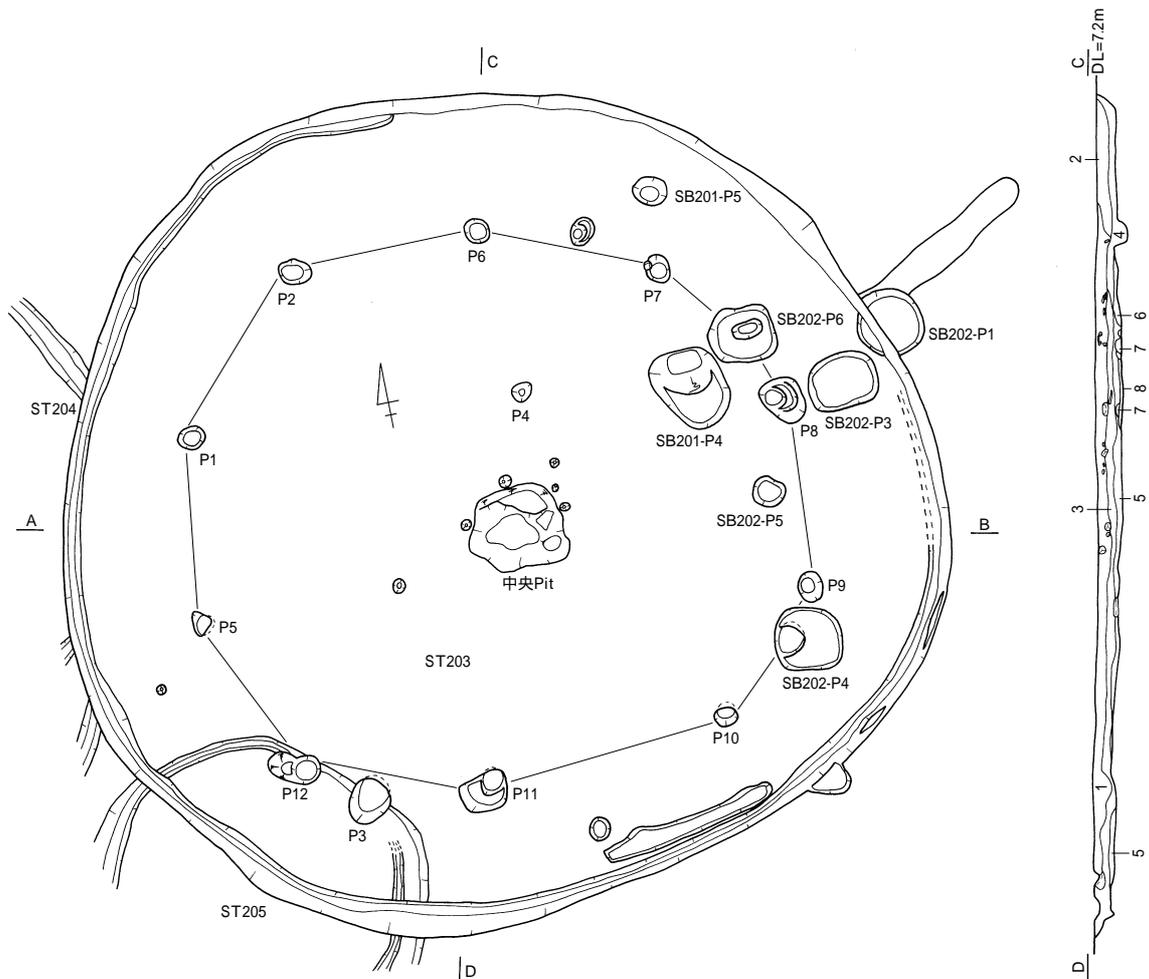
埋土；暗褐色シルト

ピット；数 29 **住居** 1 **主柱穴数** 6 **主柱穴** P1・2・12～15

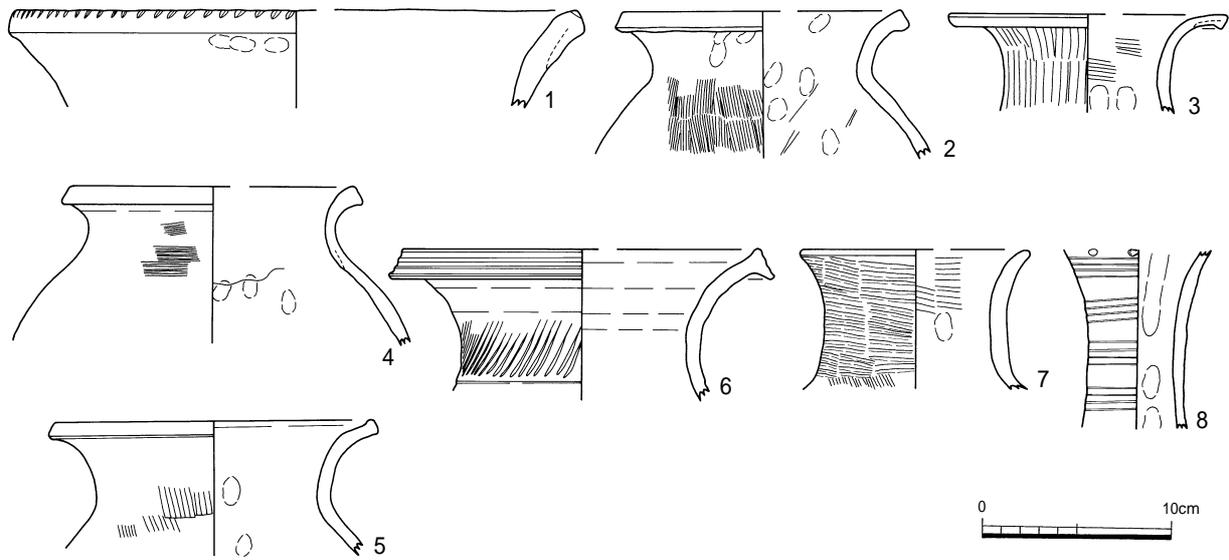
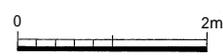
住居 2 **主柱穴数** 9 **主柱穴** P3～11

床面；1面

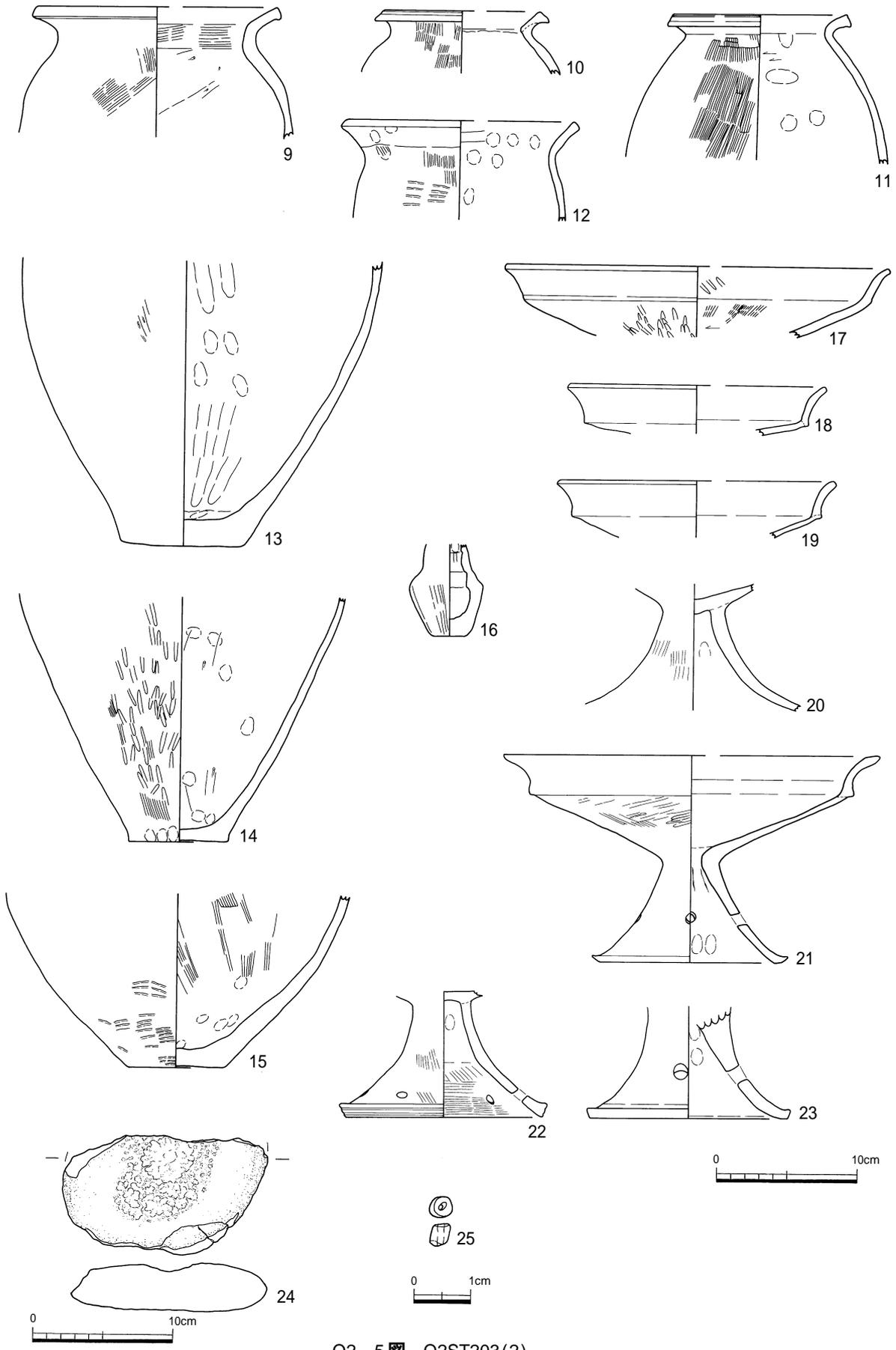
中央ピット；**形状** 楕円形 **規模** 106×82cm **深さ** 20cm **埋土** 暗褐色シルト(焼土を含む)



- 1:明黄灰色シルト層(中央部からやや北寄りにかけての範囲で10~30cm大の円礫の投げ込みがみられる。)
- 2:明黄灰色シルト層(第1層より明るい色調。礫を含まない。)
- 3:明黒灰褐色シルト層(黄色シルト・マンガンを含む。)
- 4:明黒灰褐色シルト層(第3層よりやや暗い色調。灰色シルトをブロックで含む。)
- 5:黒褐色シルト層(炭化物・焼土ブロックを含む。)
- 6:黄灰色シルト層(褐色シルトをブロックで含む。)
- 7:焼土ブロック
- 8:炭化物層



Q2 - 4 図 Q2ST203(1)



Q2 - 5 ☒ Q2ST203(2)

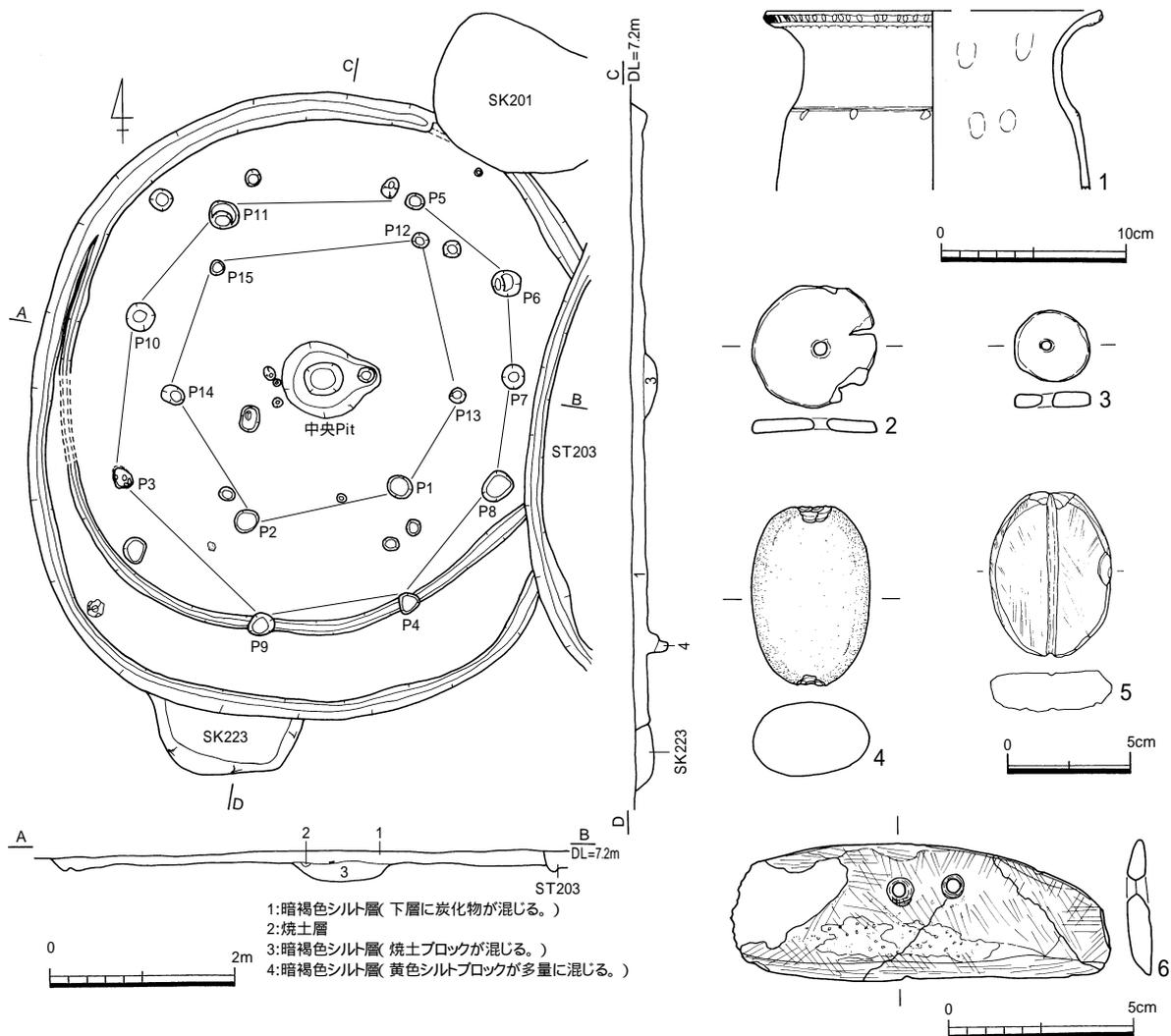
壁溝；2条 壁溝1 幅 16cm 深さ 12cm

壁溝2 幅 24cm 深さ 4cm

出土遺物；弥生土器(甕・紡錘車)、石器(石包丁・石錘・叩石・サヌカイト剥片)

所見；調査区北部で検出。SK223を切り、ST203、SK201によって切られる。埋土は暗褐色土である。

住居は1度南に拡張されたと考えられ、壁溝は2条検出された。2条ともほぼ全周検出することができたが、北側で2条の壁溝は重なり、その切り合いを確認できなかった。その東側はST203によって切られている。中央ピットは1個しか検出することができなかったため、拡張後も最初の中央ピットがそのまま利用されたものと思われる。中央ピットの埋土は暗褐色土であるが焼土ブロックが混入するところから、炉として使用されたと考えられる。床面で検出された29個のピットの内、P1・2・12~15は最初の住居の支柱穴で、P3~11は拡張された住居の支柱穴であると思われ、P4・9は



Q2 - 6 図 Q2ST204

最初の住居の壁溝を切る。

弥生土器は、微隆起突帯が施され円形浮文を有する甕(1)等、小片を含めて約290点が出土した。図示しなかった土器の中には薄手のものがみられる。その他、土器を転用した紡錘車(2・3)も出土した。石器では石錘(4・5)、石包丁(6)、そして図示しなかったが叩石が出土した。サヌカイト剥片は約28.5g出土した。また、側溝の一部から2～3cm大の円礫が約10個集中して出土した。

出土遺物からこの住居跡は弥生時代 期に使用されたと考えられる。

Q2ST205(Q2-7図)

時期；弥生 形状；円形 主軸方向；N-90°

規模；直径 3.46m 深さ 0.20m 面積 9.4m²

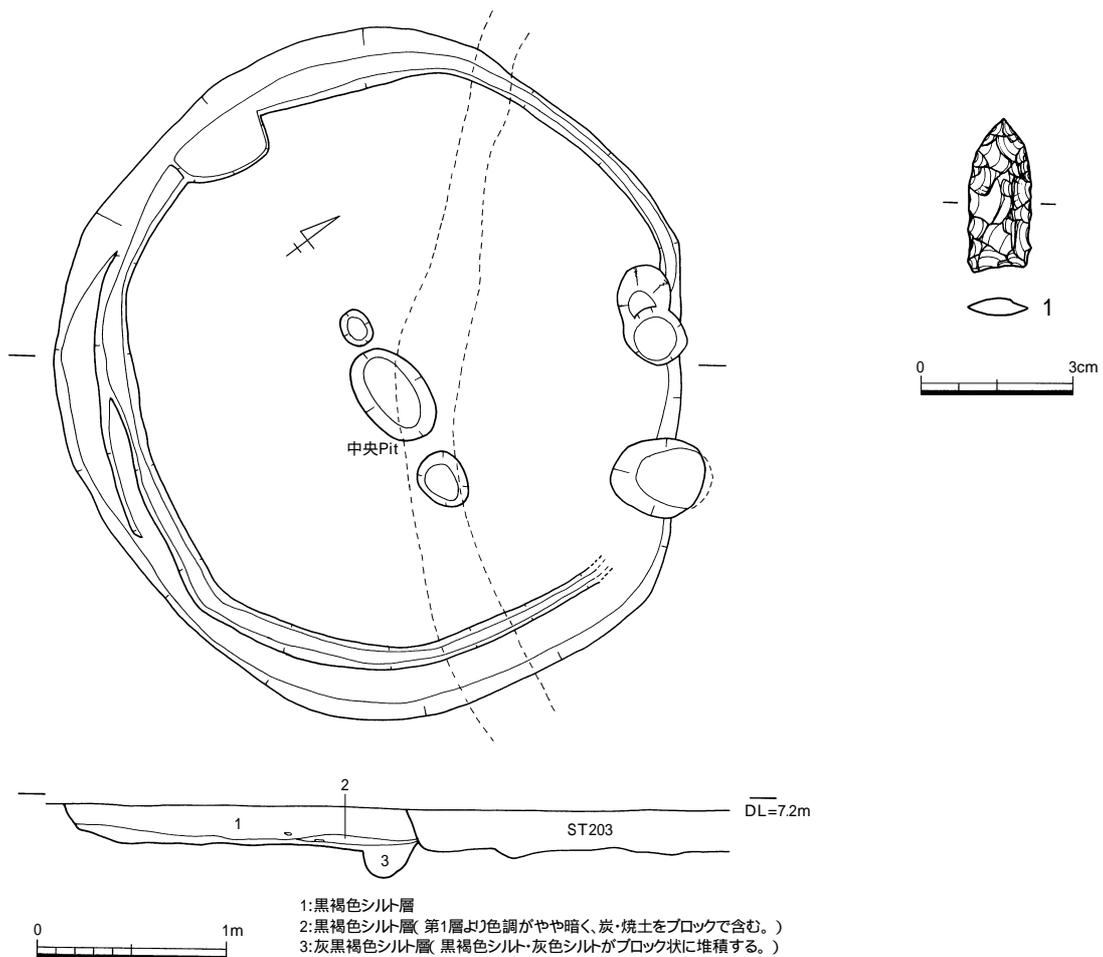
埋土；黒褐色シルト

ピット；数3 主柱穴数

床面；1面

中央ピット；形状 楕円形 規模 54×36cm 深さ 16cm 埋土 灰黒褐色シルト

壁溝；1条 幅 14cm 深さ 2cm



Q2 - 7 図 Q2ST205

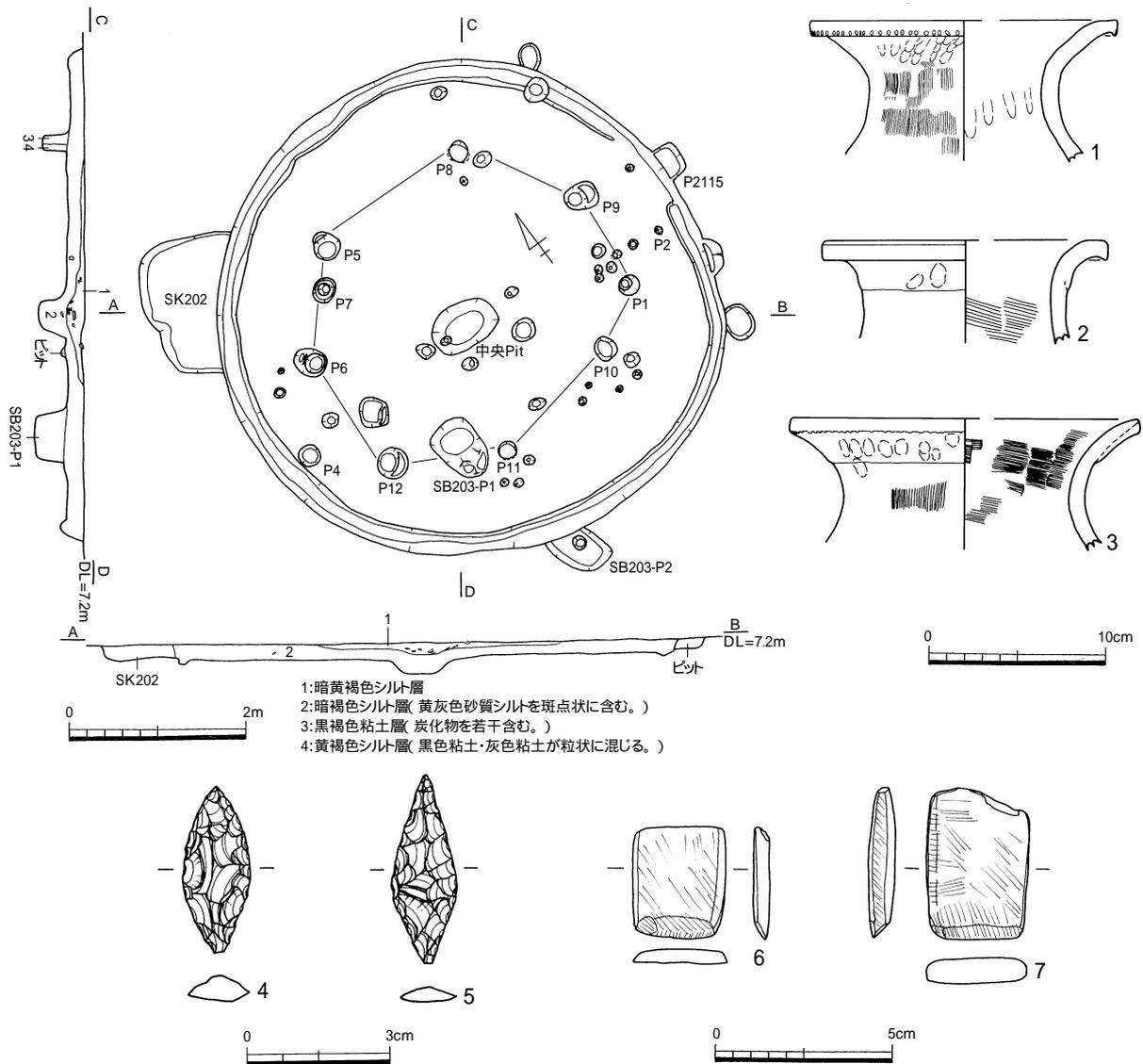
出土遺物；弥生土器、石器(石鏃・石斧・叩石・サヌカイト剥片)

所見；調査区北部で検出。ST203に切られる。埋土は黒褐色土である。

壁溝は幅約14cm、深さ約2cmである。住居跡がST203に切られた部分でも壁溝は残ったが、壁溝の埋土とST203の埋土を区別できなかった。中央ピットは楕円形で、その長軸の両側にピットを有する。埋土に炭化物はみられなかった。支柱穴と思われる遺構は検出されなかった。

弥生土器で図示したものはないが、小片を含めて約100点出土した。細片で摩耗しているが、微隆起突帯が認められるものがある。石器では石鏃(1)が出土した。そして図示しなかったが、石斧の未製品や叩石が出土した。また、サヌカイト剥片が約4.8g出土した。

出土遺物からこの住居は弥生時代 期に使用された可能性があると考えられる。



Q2 - 8 図 Q2ST206

Q2ST206(Q2-8図)

時期；弥生 **形状**；円形 **主軸方向**；N-90°

規模；直径5.52m **深さ** 0.20m **面積** 23.9m²

埋土；暗褐色シルト(黄灰色砂質シルトを斑点状に含む)

ピット；数 40 **主柱穴数** 8 **主柱穴** P1・5・6・8～12

床面；1面

中央ピット；**形状** 楕円形 **規模** 76×50cm **深さ** 32cm **埋土** 暗褐色シルト(黄灰色砂質シルトを斑点状に含む)

壁溝；1条 **幅** 20cm **深さ** 6cm

出土遺物；弥生土器(壺)、石器(石鏃・石斧・叩石・砥石・サヌカイト剥片)

所見；調査区北部で検出。SB203、SK202、P2015を切る。埋土は暗褐色土である。中央ピットは楕円形で、その長軸方向の両側に小型のピットが配される。埋土に炭化物は確認されていない。床面で検出された40個のピットの内、P1・5・6・8～12が主柱穴であると考えられた。

弥生土器としては壺(1～3)等、小片を含めて約980点出土したが、貼付口縁を有するもの(2・3)が図示しなかったものも含めて多い。また、図示しなかった土器片の中には微隆起突帯と円形浮文を有するものもある。石器では石鏃(4・5)や石斧(6・7)が出土した。また図示していないが、石斧、叩石、そしてP2・5からは砥石が出土した。サヌカイト剥片も約29.7g出土しており、中には二次加工がみられるものもある。また、住居跡の一部から2～3cm大の円礫が集中して出土した。

出土遺物からこの住居は弥生時代 期に使用されていたと考えられる。

Q2ST207(Q2-9・10図)

時期；弥生 **形状**；円形 **主軸方向**；N-55°-E

規模；直径 5.10m **深さ** 0.24m **面積** 20.4m²

埋土；黒褐色シルト(炭化物・黄色シルトを斑点状に含む)

ピット；数 25 **住居 1** **主柱穴数** 5 **主柱穴** P4・6・12～14

住居 2 **主柱穴数** 5 **主柱穴** P5・15～18

床面；1面 **貼床**；1面

中央ピット；**住居 1** **形状** 楕円形 **規模** 52×36cm **深さ** 42cm **埋土** 淡黒褐色シルト

住居 2 **形状** 円形 **規模** 直径 66cm **深さ** 34cm **埋土** 黒褐色シルト(炭化物・黄色シルトを斑点状に含む)

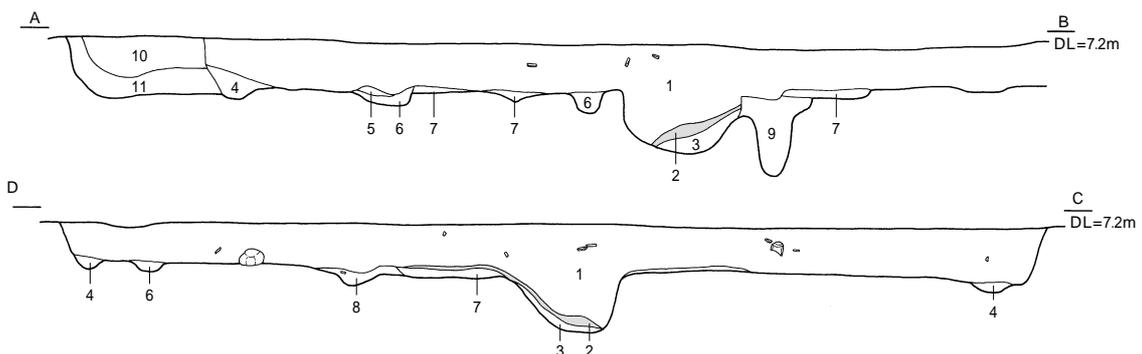
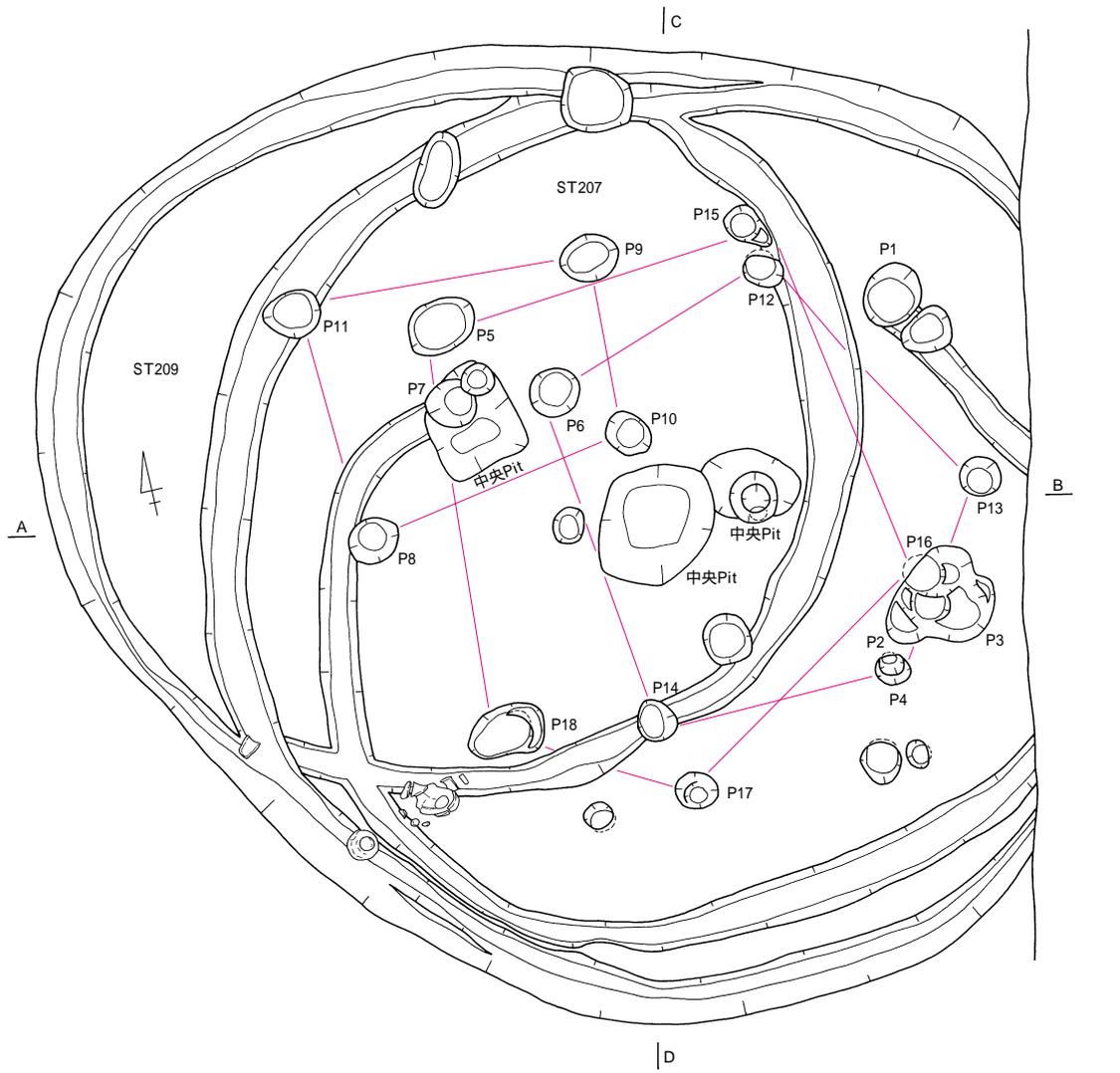
壁溝；2条 **壁溝 1** **幅** 24cm **深さ** 6cm

壁溝 2 **幅** 28cm **深さ** 6cm

出土遺物；弥生土器(壺・鉢)、石器(石鏃・石包丁・石錘・石斧・サヌカイト剥片)

所見；調査区北部で検出。遺構の東端は調査区外に所在する。ST209を切るが、ほぼ重なる。埋土は黒褐色土である。床面の所々に貼床とみられる部分が残る。

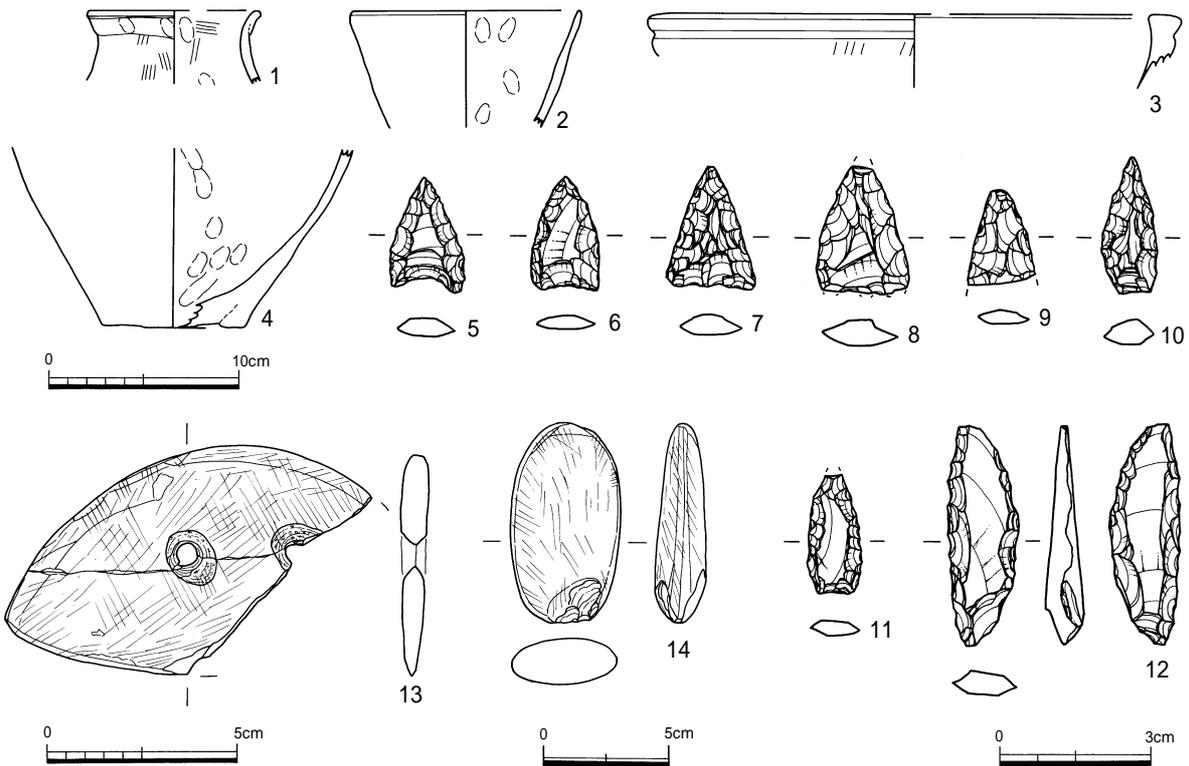
住居はやや北西方向に拡張されたと考えられ、壁溝は2条確認された。最初の住居の壁溝は、



- | | |
|--------------------------------|---------------------------------|
| 1:黒褐色シルト層(炭化物・黄色シルトを斑点状に含む。) | 7:明黄褐色シルト層(貼床) |
| 2:炭化物層 | 8:黒褐色シルト層(炭化物が混じる。) |
| 3:淡黄褐色シルト層(焼土を若干含む。) | 9:淡黒褐色シルト層 |
| 4:明灰黒褐色シルト層(第1層より灰黄色シルトを多く含む。) | 10:明灰黄褐色シルト層(黄色シルトブロックを多く含む。) |
| 5:黄色シルト層 | 11:黒灰褐色シルト層(黄灰色シルトブロックを斑点状に含む。) |
| 6:明黄灰褐色シルト層 | 第1-9層はST207埋土。第10-11層はST209埋土。 |



Q2 - 9 図 Q2ST207(1)・209



Q2 - 10 図 Q2ST207(2)

ST209の壁溝と重なるが、切り合いは確認できなかった。拡張後の住居の壁溝も、ST209の壁溝と重なるが、切り合いは確認できなかった。拡張前の中央ピットからは炭化物が出土しなかったが、拡張後の中央ピットからは炭化物が確認されており、炉として使用されたと考えられる。床面で検出された25個のピットの内P4・6・12～14は最初の住居の支柱穴であり、P5・15～18は拡張後の住居の支柱穴と考えられる。

弥生土器としては、壺(1)、鉢(2・3)、底部(4)等、小片を含めて約1090点出土した。貼付口縁を有するもの(1)もある。図示しなかった小片の中には櫛描文を施されたものもみられる。石器では石鏃(5～12)が多く出土した。その他、石包丁(13)、石錘(14)、そして図示しなかったが、小型石斧も出土した。また、サヌカイト剥片が約85.9g出土した。

ST209とほぼ重なったため、出土遺物から判断するのは難しいが、この住居は 期に使用されたものと思われる。

Q2ST209(Q2-9図)

時期；弥生 **形状**；円形 **主軸方向**；N-20°-E

規模；直径 4.18m 深さ 0.30m **面積** 13.7m²

埋土；明灰黄褐色シルト(黄色シルトブロックを多く含む)

ピット；数 7 **支柱穴数** 4 **支柱穴** P8～11

床面；1面

中央ピット；形状 円形(やや隅丸方形) 規模 直径 50cm 深さ 22cm 埋土 黄暗褐色シルト

壁溝；1条 幅 26cm 深さ 4cm

出土遺物；

所見；調査区北部で検出。ST207に切られるがほぼ重なる。SK204にも切られる。埋土は明灰黄褐色土である。

壁溝は幅約26cm、深さ約4cmである。ST207に切られた部分でも、壁溝はその床面下に残る。中央ピットの埋土は黄暗褐色土で礫を含む。床面で検出したピット7個の内、P8～11は支柱穴であると思われる。

ST207によって切られずに残った部分が狭いため、時期等を確定できる遺物は検出していないが、ST207と重なる部分から出土した遺物の時期差があまりないことから、ST207と同じ 期に使用された可能性が強いと思われる。

(2) 掘立柱建物跡

弥生時代の掘立柱建物跡は調査区北部で4棟検出されている。棟方向がほぼ北向きでL2区の掘立柱建物の主軸方向とほぼ同じ向き、または直交している。4棟の建物のうちSB201～203は規模もほぼ同じであるが、特にSB201・202は主軸方向がほとんど真北を向いており、6本の柱のうち4隅の柱の太さに比べて、残り2本の柱が細いという特徴が共通している。SB201については出土遺物から 期の可能性があり、SB202も規模や特徴等が似ているところから同時期であると思われる。SB203は切り合いや周囲の状況から ～ 期に機能したものであると思われる。SB204は切り合いや付属施設と思われる遺構から出土した遺物から 期であると思われる。

Q2-2表 Q2区弥生掘立柱建物跡一覧

遺構名	梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	柱間寸法 梁間×桁行(m)	主軸方向	付属遺構	時 期	備考
Q2SB201	1×2	2.24×3.82	2.20～2.30×1.80～2.14	N-0°		弥生	
Q2SB202	1×2	2.06×3.30	1.96～2.16×1.64～1.68	N-0°		弥生	
Q2SB203	1×2	2.03×3.66	2.00～2.06×1.80～1.96	N-14°-W		弥生 ～	
Q2SB204	1×4	2.77×6.56	2.64～2.90×1.30～2.02	N-5°-W	SD208	弥生	

Q2SB201(Q2-11図)

時期；弥生 棟方向；N-0°

規模；1×2間 2.24×3.82m 面積 8.56m²

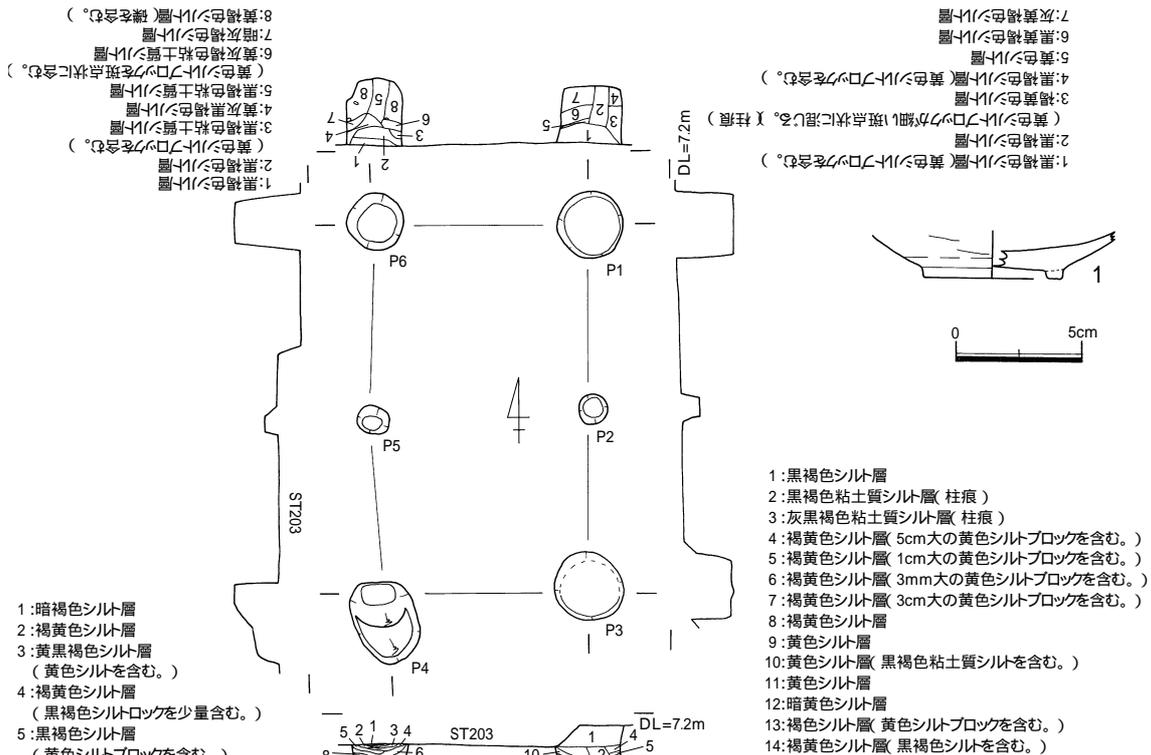
柱間寸法；梁間 2.20～2.30m 桁行 1.80～2.14m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格； 付属施設；

出土遺物；弥生土器、土師器

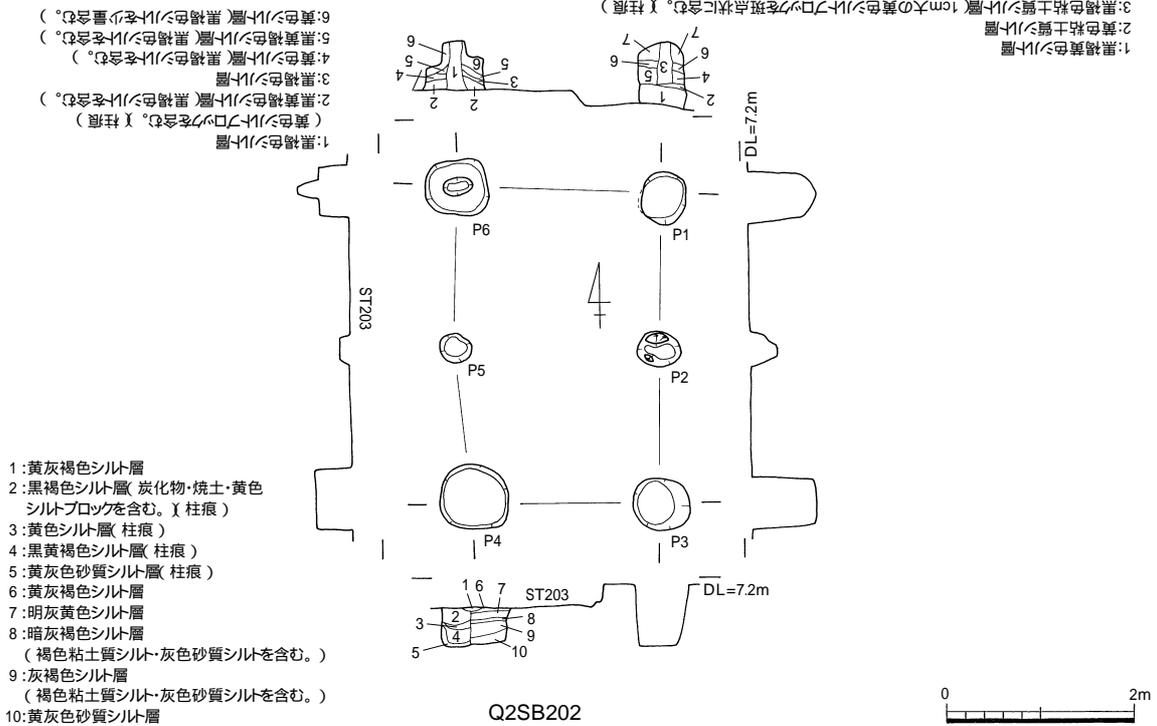
所見；調査区北部で検出。ST203に切られる。P1・3・4・6では柱痕を確認することができた。図示は



- 1: 暗褐色シルト層
- 2: 褐黄色シルト層
- 3: 黄黒褐色シルト層 (黄色シルトを含む。)
- 4: 褐黄色シルト層 (黒褐色シルトブロックを少量含む。)
- 5: 黒褐色シルト層 (黄色シルトブロックを含む。)
- 6: 黄黒褐色シルト層 (黄色シルトブロックを多く含む。)
- 7: 黒褐色シルト層 黄色シルトブロックを含む。 (柱痕)
- 8: 黄黒褐色シルト層 黄色シルトを含む。)
- 9: 黄色シルト層 黒褐色シルトを含む。)
- 10: 黄褐色シルト層 黄色シルトブロックを含む。)
- 11: 黄色シルト層 黒褐色シルトを含む。)

- 1: 黒褐色シルト層
- 2: 黒褐色粘土質シルト層 (柱痕)
- 3: 灰黒褐色粘土質シルト層 (柱痕)
- 4: 褐黄色シルト層 (5cm大の黄色シルトブロックを含む。)
- 5: 褐黄色シルト層 (1cm大の黄色シルトブロックを含む。)
- 6: 褐黄色シルト層 (3mm大の黄色シルトブロックを含む。)
- 7: 褐黄色シルト層 (3cm大の黄色シルトブロックを含む。)
- 8: 褐黄色シルト層
- 9: 黄色シルト層
- 10: 黄色シルト層 (黒褐色粘土質シルトを含む。)
- 11: 黄色シルト層
- 12: 暗黄色シルト層
- 13: 褐色シルト層 (黄色シルトブロックを含む。)
- 14: 褐黄色シルト層 (黒褐色シルトを含む。)

Q2SB201



- 1: 黄灰褐色シルト層
- 2: 黒褐色シルト層 (炭化物・焼土・黄色シルトブロックを含む。 (柱痕)
- 3: 黄色シルト層 (柱痕)
- 4: 黒黄褐色シルト層 (柱痕)
- 5: 黄灰色砂質シルト層 (柱痕)
- 6: 黄灰褐色シルト層
- 7: 明灰黄色シルト層
- 8: 暗灰褐色シルト層 (褐色粘土質シルト・灰色砂質シルトを含む。)
- 9: 灰褐色シルト層 (褐色粘土質シルト・灰色砂質シルトを含む。)
- 10: 黄灰色砂質シルト層

- 1: 黒褐色シルト層
- 2: 黒褐色粘土質シルト層
- 3: 黒褐色シルト層 黄色シルトを含む。)
- 4: 黒褐色シルト層 (黒褐色シルトを含む。)
- 5: 黄色シルト層 黒褐色シルトを含む。)
- 6: 黄黒褐色シルト層 (黄色シルトブロックを多く含む。)
- 7: 灰黒褐色粘土質シルト層 (5mm大の黄色シルトブロックを含む。)

Q2SB202

Q2 - 11 図 Q2SB201・202

していないが、P1からは土器が4点出土しておりタタキ目の残るものや、平底の底部がみられる。P3からは土器片が173点出土したが、貼付口縁を有するものや平底の底部がみられる。P6からは土器片が3点出土した。また、石器では図示していないが、P3から石包丁が出土した。なお、P3からは12世紀後半のものと思われる土師器の底部(1)が出土したが、これは混入されたものと思われる。

時期の特定は難しいが、小片ながらタタキ目の残る土器片が出土していることから 期の可能性が強い。

Q2SB202(Q2-11図)

時期；弥生 **棟方向**；N-0°

規模；1×2間 2.06×3.30m **面積** 6.80m²

柱間寸法；**梁間** 1.96～2.16m **桁行** 1.64～1.68m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形

性格； **付属施設**；

出土遺物；弥生土器

所見；調査区北部で検出。ST203に切られる。P1・4・6では柱痕を確認することができた。図示はしていないが、P1からは弥生土器片が68点、P3からは10点、P4からも10点出土した。P1からはハケ調整を施した土器片も出土した。

Q2SB203(Q2-12図)

時期；弥生 ~ **棟方向**；N-14°W

規模；1×2間 2.03×3.66m **面積** 7.43m²

柱間寸法；**梁間** 2.00～2.06m **桁行** 1.80～1.96m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形

性格； **付属施設**；

出土遺物；弥生土器(壺)、石器(石斧)

所見；調査区北部で検出。ST206に切られる。P2～6では柱痕を確認することができた。P3・4から出土した弥生土器片は接合して壺(1)となった。P1からは弥生土器片が約20点、石斧(2)が出土した。

機能した時期については 期の土器が出土したST206との切り合い関係と、周囲の弥生時代の遺構が ~ 期のものであるという状況から ~ 期である可能性が強いと考えられる。

Q2SB204(Q2-12図)

時期；弥生 **棟方向**；N-5°W

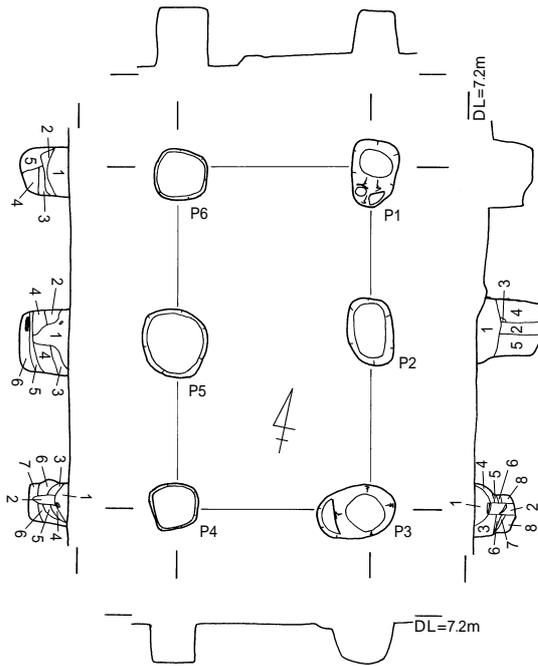
規模；1×4間 2.77×6.56m **面積** 18.17m²

柱間寸法；**梁間** 2.64～2.90m **桁行** 1.30～2.02m

- 1:黒褐色粘土質シルト層(1cm大の黄色シルトブロックを斑点状に含む。)
- 2:灰黒褐色粘土質シルト層(1~3cm大の黄色シルトブロックを斑点状に含む。)
- 3:黒黄褐色粘土質シルト層(5cm大の黄色シルトブロックを斑点状に含む。)
- 4:黒褐色粘土質シルト層(黄色シルトブロックを斑点状に含む。)
- 5:暗黒褐色粘土質シルト層(1cm大の黄色シルトブロックを斑点状に含む。)

- 1:黒褐色粘土質シルト層(5mm~1cm大の黄色シルトブロックを斑点状に含む。)(柱痕)
- 2:明黄灰褐色シルト層
- 3:黒褐色粘土質シルト層(2~3cm大の黄色シルトブロックを斑点状に含む。)
- 4:黒黄褐色粘土質シルト層(粘性有り。2~5cm大の黄色シルトブロックを斑点状に含む。)
- 5:灰黒褐色粘土質シルト層
- 6:黒褐色粘土質シルト層(褐色粘土質シルト・黄色シルトが互層を成す。)

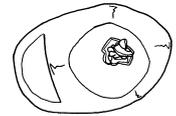
- 1:黒褐色シルト層
- 2:黒褐色粘土質シルト層(1cm大の黄色シルトブロックを少量、斑点状に含む。)(柱痕)
- 3:黄灰褐色シルト層
- 4:黒灰褐色粘土質シルト層
- 5:黄褐色シルト層
- 6:黒黄灰褐色粘土質シルト層
- 7:褐色シルト層(黄色シルトに褐色粘土質シルトブロックが混じる。)



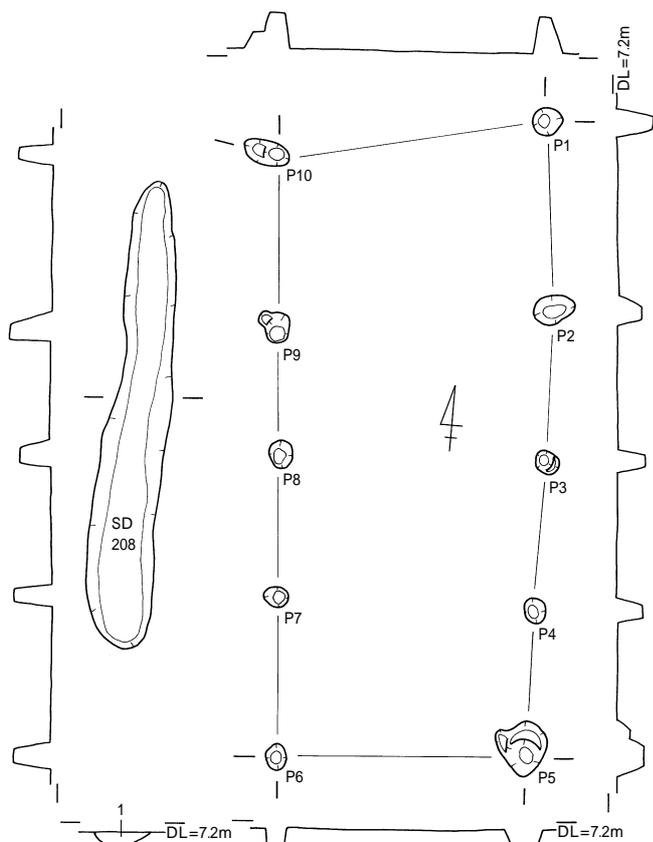
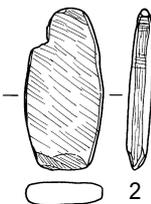
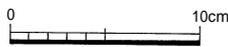
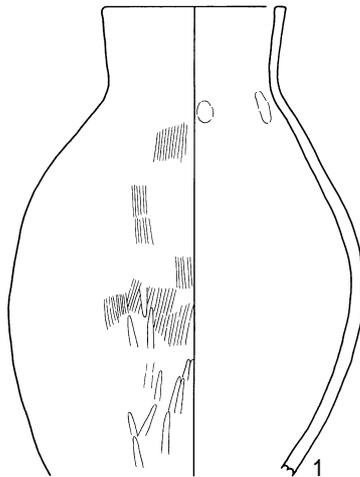
Q2SB203

- 1:黒褐色シルト層(1cm大の黄色シルトブロックを斑点状に含む。)
- 2:黒褐色粘土質シルト層(柱痕)
- 3:黒褐色粘土質シルト層
- 4:褐色シルト層
- 5:黒黄褐色粘土質シルト層

- 1:黒褐色シルト層
- 2:黒褐色粘土質シルト層(柱痕)
- 3:黒褐色シルト層(粘性有り。黄色シルトブロックを斑点状に含む。)
- 4:黄褐色シルト層
- 5:灰黄褐色シルト層
- 6:黄灰色シルト層
- 7:灰褐色シルト層(粘性有り。)
- 8:黄灰褐色シルト層



Q2SB203・P3



- 1:黒褐色粘土質シルト層

Q2SB204・SD208



Q2 - 12 図 Q2SB203・204・SD208

柱穴数；10 柱穴形；円形

性格； 付属施設；SD208

出土遺物；弥生土器

所見；調査区北部で検出。西側には棟方向と長軸がほぼ平行なSD208が設けられている。図示はしていないが、土器片がP1からは2点、P2からは6点、P5からは2点、P8からは1点出土している。

付属施設と思われるSD208の出土遺物から、弥生時代 期に使用された掘立柱建物である可能性が強いと思われる。

Q2SD208(Q2-12図)

時期；弥生 方向；N-0°

規模；0.70×4.98m 深さ0.13m 断面形態；皿状

埋土；黒褐色粘土質シルト

床面標高；北端7.07m 南端7.08m

接続；

出土遺物；弥生土器、石器(サヌカイト剥片)

所見；調査区北部で検出。形状から、溝状土坑として取り上げることできるが、ここでは溝跡として記す。弥生土器は細片ばかり約110点出土した。微隆起突帯を施されたものもみられる。また、サヌカイト剥片が約5.9g出土した。

出土遺物から弥生時代 期に機能したと思われる。

(3) 土坑

弥生時代の土坑は調査区北部から中央部で24基検出されている。出土遺物は ~ 期のもので竪穴住居が機能した時期と一致する。形状は円形、楕円形、隅丸長方形と多様である。楕円形と記したのものの中には溝状と形容することも可能なものもあるが、主軸方向は真北、またはこれに直交する向きのもので多いのが特徴である。時期的には ~ 期は円形、隅丸長方形や楕円形でもやや膨らんだ形状のものが多く、 期は溝状のものが多く傾向にある。

Q2-3表 Q2区土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
			長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					
Q2SK201	隅丸長方形	皿状	1.86	1.50	30	N-67°-W	黒褐色粘土質シルト	ST204を切る		
Q2SK202	隅丸長方形	逆台形	1.56	(1.04)	16	N-32°-E	黒褐色粘土質シルト	ST206に切られる		
Q2SK203										欠番
Q2SK204	楕円形	逆台形	(3.56)	0.40	18	N-88°-E	黒褐色シルト	ST209に切られる	弥生	
Q2SK205	楕円形	逆台形	(2.08)	0.66	38	N-82°-E	黒黄褐色粘土質シルト		弥生	調査区外東に伸びる
Q2SK206	楕円形	皿状	1.34	0.94	19	N-77°-W	黒褐色シルト		弥生 ~	
Q2SK207	隅丸長方形	皿状	1.42	1.08	26	N-9°-W	暗黒褐色シルト		弥生 ~	
Q2SK208	楕円形	皿状	1.92	1.02	32	N-25°-E	黒褐色粘土	SK209に切られる	弥生	
Q2SK209	隅丸長方形	皿状	1.78	1.14	16	N-0°	黒褐色シルト	SK208を切る	弥生 ~	
Q2SK210	楕円形	皿状	4.28	1.08	20	N-82°-E	暗黒褐色シルト		弥生	

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	埋 土	切合関係	時 期	備 考
			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)					
Q2SK211	楕円形	逆台形	3.48	1.08	30	N-65°-E	暗黒褐色粘土質シルト		弥生	調査区外東に伸びる
Q2SK212	隅丸長方形	逆台形	1.98	1.72	23	N-85°-E	黒灰黄褐色シルト			
Q2SK213	楕円形	皿状	2.10	0.56	14	N-18°-W	暗黒褐色粘土質シルト			
Q2SK214	楕円形	皿状	1.12	0.86	14	N-33°-W	暗黒灰褐色シルト			
Q2SK215	円形	皿状	1.06	1.36	12	N-33°-E	黒褐色シルト		弥生	
Q2SK216	楕円形	皿状	0.84	0.60	10	N-24°-W	淡褐色シルト			
Q2SK217	楕円形	皿状	3.42	1.00	14	N-7°-E	黒褐色シルト		弥生	
Q2SK218	楕円形	皿状	2.40	0.90	22	N-50°-W	暗黒褐色粘土質シルト			
Q2SK219	楕円形	皿状	1.45	0.62	6	N-57°-E	淡褐色シルト			
Q2SK220	楕円形	皿状	1.18	0.88	14	N-6°-E	黒褐色シルト		弥生	
Q2SK221	円形	逆台形	1.06	0.88	22	N-62°-E	黒褐色シルト	SK222を切る		
Q2SK222	楕円形	V字形	0.70	0.64	34	N-33°-W	暗黒褐色粘土質シルト	SK221に切られる		
Q2SK223	隅丸長方形	皿状	(1.60)	(0.90)	21	N-90°	暗褐色シルト	ST204に切られる		
Q2SK224	隅丸長方形	箱形	1.70	1.10	42	N-8°-W	黒褐色粘土質シルト		弥生	
Q2SK225	楕円形	皿状	(1.04)	(0.70)	24	N-0°	黒褐色シルト	ST203・SK201に切られる		

Q2SK208(Q2-13図)

時期；弥生 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-25°E

規模；1.92×1.02m **深さ** 0.32m **断面形態**；皿状

埋土；黒褐色粘土

付属遺構； **機能**；

出土遺物；弥生土器(長頸壺・甕・高杯)、石器(叩石)

所見；調査区北部で検出。出土遺物としては長頸壺(1)、甕(2)がある。その他、図示しなかったが高杯の脚や、摩耗しているがタタキ目が残る胴部片等、弥生土器片が約350点出土した。また石器では、図示できなかったが叩石が出土した。

出土遺物から弥生時代後期前半に機能した遺構である可能性が強い。

Q2SK210(Q2-13図)

時期；弥生 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-82°E

規模；4.28×1.08m **深さ** 0.20m **断面形態**；皿状

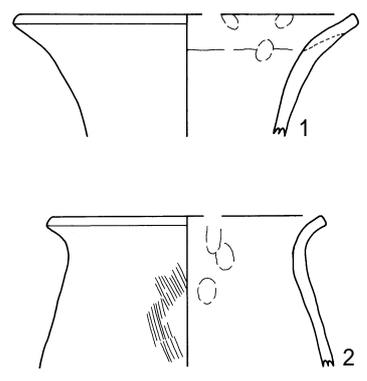
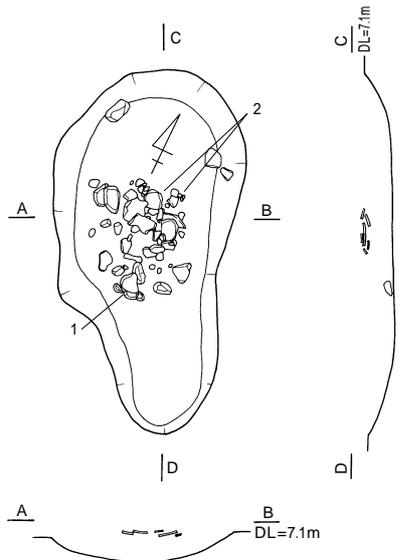
埋土；暗黒褐色シルト

付属遺構； **機能**；

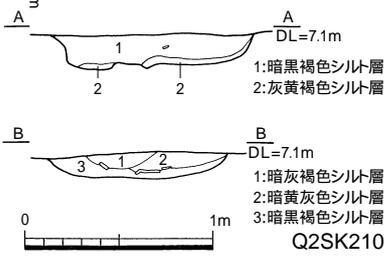
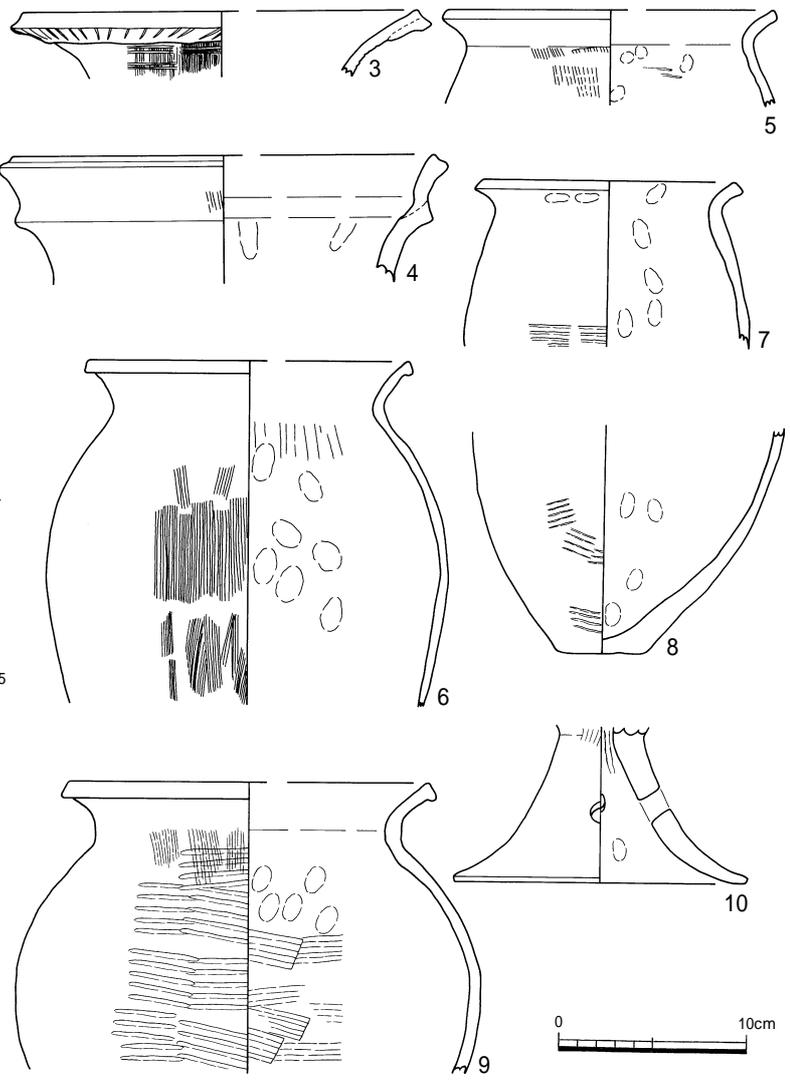
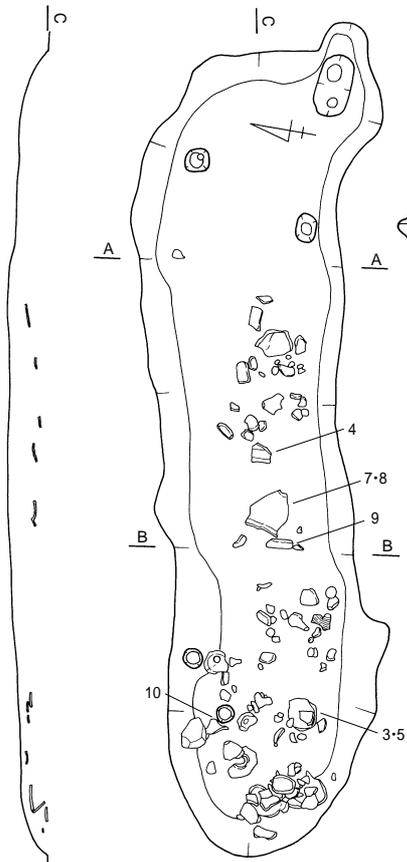
出土遺物；弥生土器(甕・壺・高杯)、石器(叩石)

所見；調査区中央部で検出。弥生土器は壺(3・4)、甕(5～9)、高杯の脚(10)が出土する。壺は貼付口縁を有するもの(3)、二重口縁を有するもの(4)がある。甕にはタタキ目が残るもの(7～9)もある。(7・8)は同一個体と思われる。その他、小片を含めて約480点が出土したが、タタキ目が残るものやハケ調整が施されたものもみえる。石器では図示できなかったが、叩石が出土した。

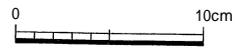
出土遺物から、弥生時代後期中葉に機能した土坑である可能性が強い。貼付口縁を有する壺(3)は、出土したレベルについては他の遺物とほとんど変わらないが、他の遺物の形態と比較すると時期差があるため、混入されたものであると思われる。



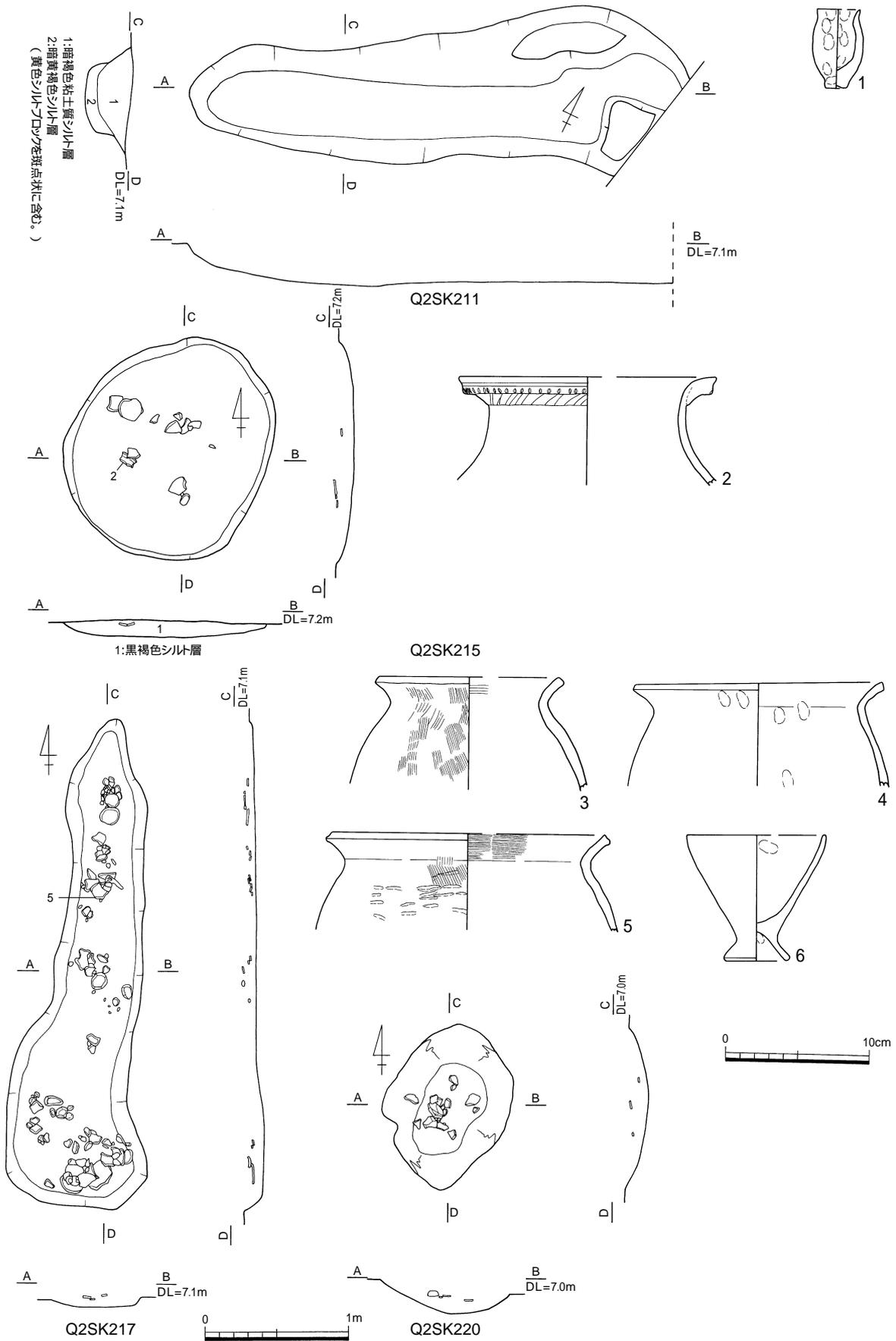
Q2SK208



- 1:暗灰褐色シルト層
 2:灰黄褐色シルト層
 1:暗灰褐色シルト層
 2:暗黄灰色シルト層
 3:暗黒褐色シルト層
 Q2SK210



Q2 - 13 ☒ Q2SK208・210



Q2 - 14 ☒ Q2SK211・215・217・220

Q2SK211(Q2-14図)

時期；弥生Ⅴ **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-65 °E

規模；3.48×1.08m **深さ** 0.30m **断面形態**；逆台形

埋土；暗黒褐色粘土質シルト

付属遺構； **機能**；

出土遺物；弥生土器(ミニチュア土器・高杯)

所見；調査区中央部で検出。遺構の東端は調査区外に所在する。(1)はミニチュア土器である。その他、高杯の口縁部や、タタキ目の残る胴部片等、小片が約120点出土した。

出土遺物から弥生時代後期中葉に機能した土坑であると思われる。

Q2SK215(Q2-14図)

時期；弥生 **形状**；円形 **主軸方向**；N-33 °E

規模；1.60×1.36m **深さ** 0.12m **断面形態**；皿状

埋土；黒褐色シルト

付属遺構； **機能**；

出土遺物；弥生土器(壺)

所見；調査区中央部で検出。貼付口縁を有する壺(2)が出土した。その他、小片は上底の底部等、約70点が出土した。

出土遺物等から弥生時代 期に機能した可能性が強い。

Q2SK217(Q2-14図)

時期；弥生Ⅴ **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-7 °E

規模；3.42×1.00m **深さ** 0.14m **断面形態**；皿状

埋土；黒褐色シルト

付属遺構； **機能**；

出土遺物；弥生土器(甕・台付鉢・高杯)

所見；調査区中央部で検出。弥生土器では甕(3～5)や台付鉢(6)が出土した。甕にはタタキ目が残るものもある。その他、タタキ目の残る胴部や高杯の脚部等、小片を含めて約230点出土した。

出土遺物等から弥生時代後期に機能していた可能性が強い。

Q2SK220(Q2-14図)

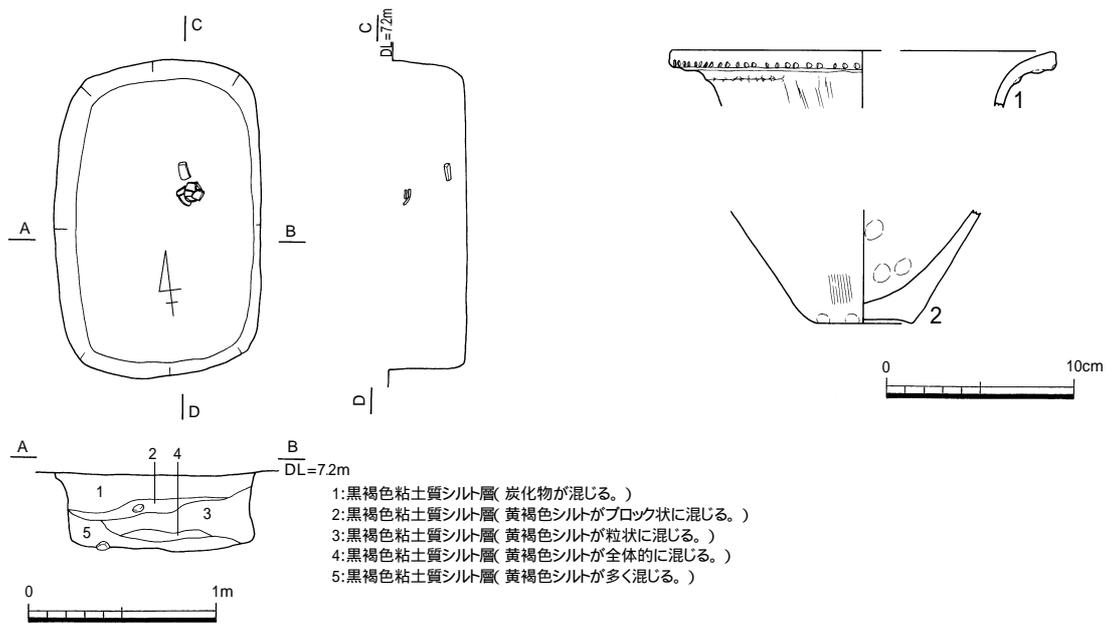
時期；弥生 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-6 °E

規模；1.18×0.88m **深さ** 0.14m **断面形態**；皿状

埋土；黒褐色シルト

付属遺構； **機能**；

出土遺物；弥生土器



Q2 - 15 図 Q2SK224

所見；調査区北部で検出。図示した遺物はないが、弥生土器は小片を含めて約80点出土しており、微隆起突帯が施されたものや、平底を呈した底部等が出土した。

出土遺物から弥生時代 期に機能した土坑であると思われる。

Q2SK224(Q2-15図)

時期；弥生 **形状**；隅丸長方形 **主軸方向**；N-8°W

規模；1.70×1.10m **深さ** 0.42m **断面形態**；箱形

埋土；黒褐色粘土質シルト(炭化物を含む)

付属遺構； **機能**；

出土遺物；弥生土器(甕)、石器(サヌカイト剥片)

所見；調査区北部で検出。弥生土器は甕(1)と底部(2)等、小片を含めて約90点出土した。また、サヌカイト剥片は約0.8g 出土した。

出土遺物から弥生時代 期に機能した土坑であると思われる。

(4) 溝跡

弥生時代の溝は大溝2を除くと調査区北部で3条検出されている。これらの溝は形状から、溝状土坑として取り上げることが可能であるがここで記す。3条とも主軸方向は真北、またはこれに直交する向きのものが多いのが特徴である。また、SD208についてはSB204の付属遺構として前述している。

Q2-4表 Q2区溝跡一覧

遺構番号	形態	断面形	規模			主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
			長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					
Q2SD206	楕円形	皿状	4.00	0.92	18	N-90°	黒褐色粘土質シルト		弥生	
Q2SD207	楕円形	皿状	7.36	0.68	20	N-0°	黒褐色粘土質シルト	P2009・2010・2011に切られる	弥生	
Q2SD208	楕円形	皿状	4.98	0.70	13	N-0°	黒褐色粘土質シルト		弥生	

Q2SD206(Q2-16図)

時期；弥生 方向；N-90°

規模；4.00×0.92m 深さ0.18m

断面形態；皿状

埋土；黒褐色粘土質シルト

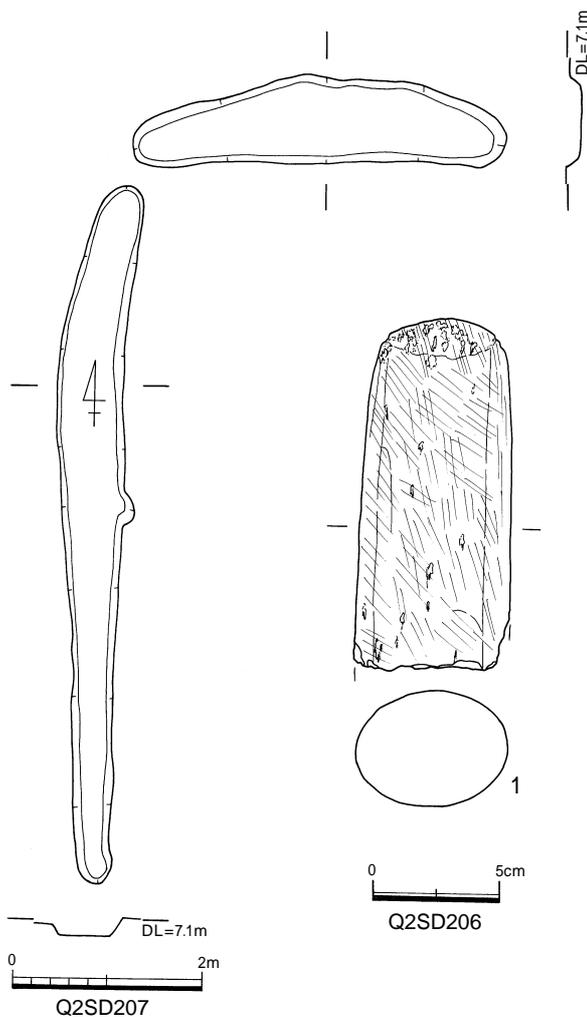
床面標高；東端7.13m 西端7.05m

接続；

出土遺物；石器(石斧)

所見；調査区北部で検出。SD207と長軸方向が垂直である。石斧(1)が出土した。

出土遺物から弥生時代のものと思われる。



Q2 - 16 図 Q2SD206・207

Q2SD207(Q2-16図)

時期；弥生 方向；N-0°

規模；7.36×0.68m 深さ0.20m

断面形態；皿状

埋土；黒褐色粘土質シルト

床面標高；北端7.03m 南端7.07m

接続；

出土遺物；

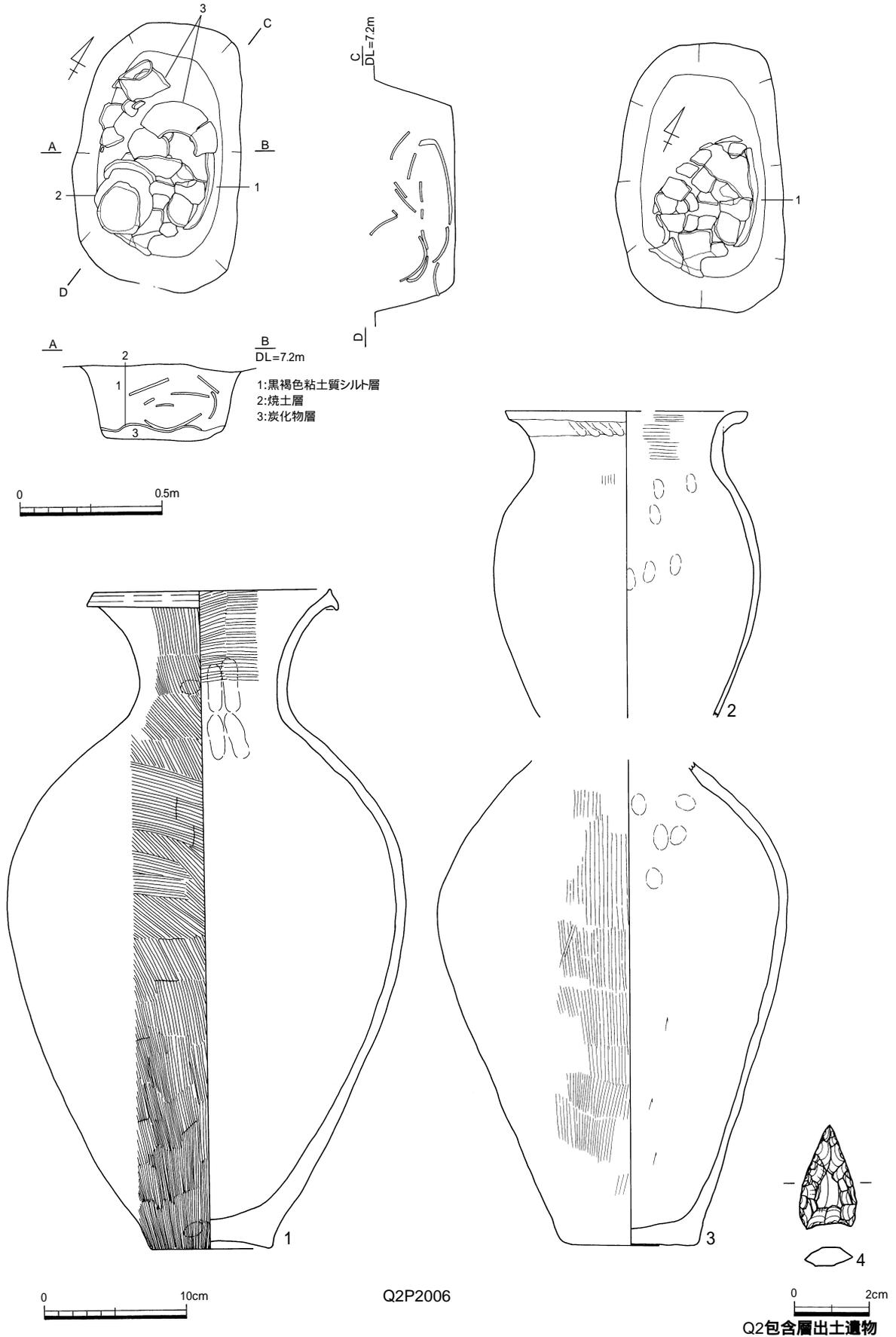
所見；調査区北部で検出。P2009・2010・2011に切られる。SD206と長軸方向が垂直である。

遺物は出土しなかった。

遺構の配置から関連があると思われるSD206の出土遺物から弥生時代に機能した遺構である可能性が強いと思われる。

(5) ピット

ピットは調査区の北部、東部で多く検出した。掘立柱建物を構成するものを除くと、遺物が出土したピットは75個である。その大部分が弥生時代のものである。以下、検出したピットのなかでは貴重な資料であるP2006について記す。



Q2 - 17 図 Q2P2006 ・ 包含層出土遺物

Q2P2006(Q2-17図)

時期；弥生 **形状**；隅丸長方形 **主軸方向**；N-32 °W

規模；0.94×0.59m **深さ** 0.27m **断面形態**；逆台形

埋土；黒褐色粘性シルト

付属遺構； **機能**；

出土遺物；弥生土器(甕・壺)

所見；調査区北部で検出。弥生土器では(1・3)の壺、(2)の甕が出土した。(1)は口縁部に凹線文が施され、(2)は貼付口縁を有する。(1)の壺はピットの底から潰れたような状態で出土した。壺の中からは多量の種子が出土した。分析の結果コナラ属アカガシ亜属と同定された。貯蔵穴であったと思われる。

出土遺物から弥生時代 期に機能した遺構であると思われる。

(6) 包含層出土遺物

遺物包含層から出土した遺物の中で主なものを以下に記す。

Q2遺物包含層(Q2-17図)

出土遺物；石鏃

所見；(4)は石鏃である。サヌカイト製である。

3. Q2区古代～中世の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

古代～中世の掘立柱建物跡は調査区南部で3棟検出されており、主軸方向はほぼ同じ向き、または直交している。機能した時期も出土遺物から判断して、ほぼ近いものと思われる。

Q2-5表 Q2区古代～中世掘立柱建物跡一覧

遺構名	梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	柱間寸法 梁間×桁行(m)	主軸方向	付属遺構	時期	備考
Q2SB205	2×3	6.56×7.16	2.04～4.36×2.08～2.64	N-75°-W		古代末～ 中世前期	
Q2SB206	1×2	2.02×4.68	2.00～2.06×2.22～2.56	N-14°-E		古代末～ 中世前期	
Q2SB207	1×2	3.08×4.04	3.04～3.12×2.00～2.16	N-5°-E		古代末～ 中世前期	

Q2SB205(Q2-18図)

時期；古代末～中世前期 **棟方向**；N-75°W

規模；2×3間 6.56×7.16m **面積** 46.97m²

柱間寸法；**梁間** 2.04～4.36m **桁行** 2.08～2.64m

柱穴数；12 **柱穴形**；円形

性格； **付属施設**；

出土遺物；土師器

所見；調査区南部で検出。P1は棟方向からずれる。小片のため図示しなかったが、土師器片がP1から3点、P4から1点、P6から1点、P7から4点、P9から3点出土した。P6から出土したものは鍋と思われる。P9から出土した土器片のうち1点は輪高台を貼付した痕がみられる底部である。

この遺構や周囲より出土した遺物から、12世紀頃のものと思われる。

Q2SB206(Q2-18図)

時期；古代末～中世前期 **棟方向**；N-14°E

規模；1×2間 2.02×4.68m **面積** 9.45m²

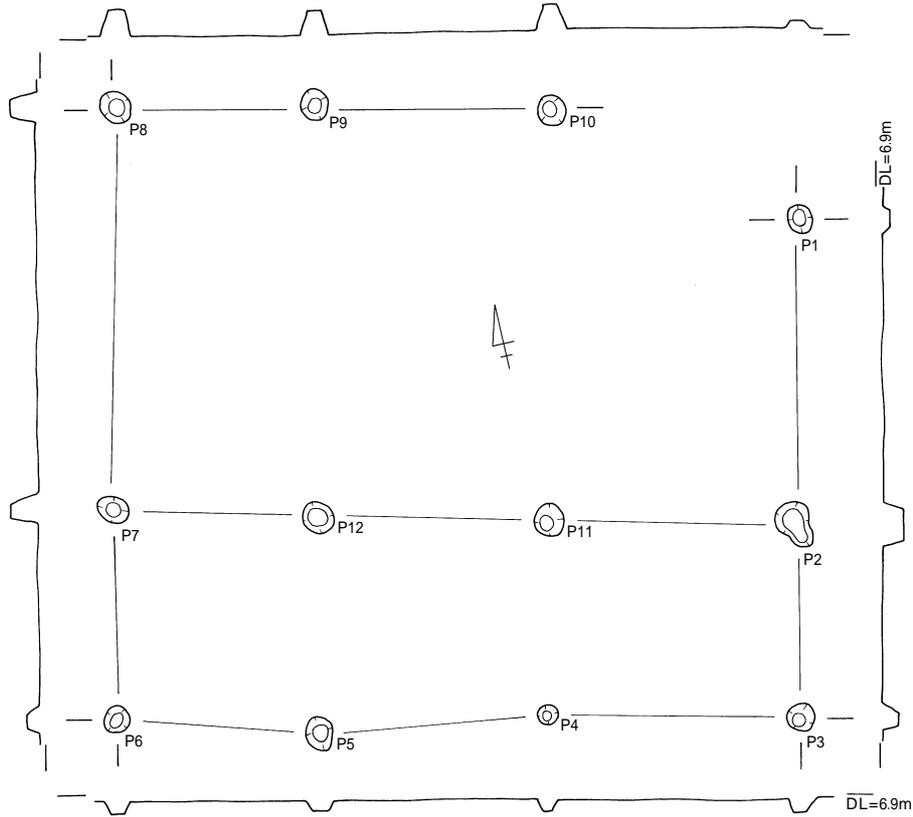
柱間寸法；**梁間** 2.00～2.06m **桁行** 2.22～2.56m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形

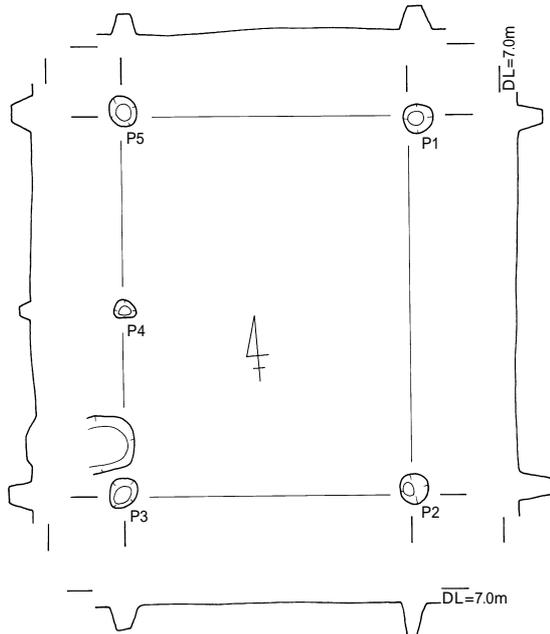
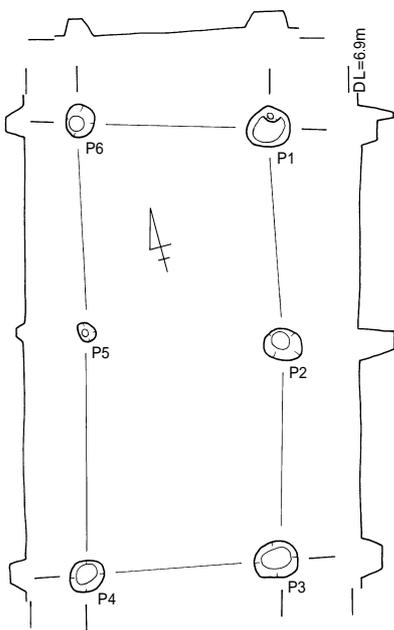
性格； **付属施設**；

出土遺物；土師器(椀)、須恵器、瓦器(椀)

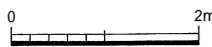
所見；調査区南部で検出。P1やP3の底や断面で柱痕を確認した。小片であるため図示しなかったが、P1からは土師器片、瓦器椀が出土した。瓦器椀は内外面に丁寧な篋磨きが施されおり、中世前期のものと思われる。P2からは土師器片、須恵器片、P3からは土師器片が出土した。P6からは土師器椀が出土したが、古代のものと思われる。出土遺物から遺構は古代末～中世前期のものと考えられる。



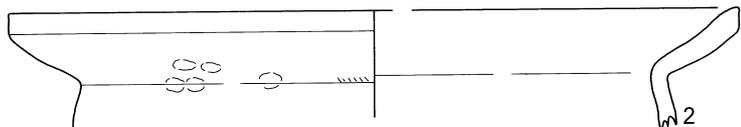
Q2SB205



- 1:明灰褐色シルト層(柱痕)
- 2:黒褐色粘土層(黒色粘土・褐色シルトブロックが混じる。)



Q2SB206



Q2SB207



Q2 - 18 ☒ Q2SB205・206・207

Q2SB207(Q2-18図)

時期；古代末～中世前期 棟方向；N-5°E

規模；1×2間 3.08×4.04m 面積 12.44m²

柱間寸法；梁間 3.04～3.12m 桁行 2.00～2.16m

柱穴数；5 柱穴形；円形

性格； 付属施設；

出土遺物；土師器(椀・甕)

所見；調査区南部で検出。遺構の東半分はQ1区で検出。P4の東側に対応する柱穴は検出することが出来なかった。遺物が出土したピットはP3のみである。土師器の椀の口縁部(1)は欠損部分が多いため口径は不明である。土師器の甕の口縁部・上胴部(2)は12世紀頃のものと思われる。

(2) ピット

古代～中世の遺物が出土するピットは調査区の南部で多く検出した。掘立柱建物を構成するものを除くと、遺物が出土したピットは10個足らずである。以下、主な遺物が出土したP2066について記す。

Q2P2066(Q2-19図)

時期；古代末～中世初頭

出土遺物；土師器(皿)

所見；調査区南部で検出。出土土器は(1・2)とも皿である。

出土遺物から11～12世紀に機能した遺構であると思われる。

(3) 包含層出土遺物

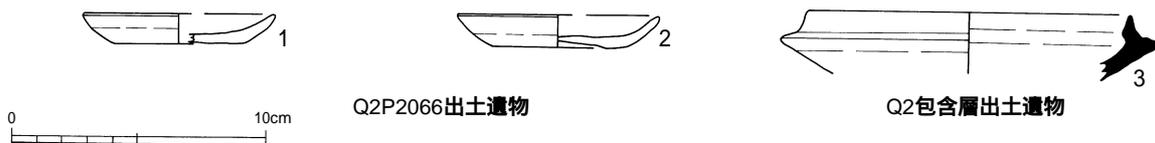
包含層から出土した遺物の中で主なものを以下にあげる。

Q2遺物包含層(Q2-19図)

時期；古墳

出土遺物；須恵器(蓋杯(杯身))

所見；(3)は須恵器であり古墳時代のものと思われる。



Q2P2066出土遺物

Q2包含層出土遺物

Q2 - 19 図 Q2P2066・包含層出土遺物

Q3 区の調査





Q3 - 1 図 Q3区遺構全体配置図(S = 1/250)

1. Q3区の概要

概要

Q3区は今次調査の対象区域の南西端部に当たり、東をQ1区と接する。調査区は東から西に向かって地形的に落ち込んでおり、全体的に黒褐色粘土質シルトの堆積が認められた(Q3-2図)。第 層は西に行くに従い粘土化する。また第 層とした層からは、弥生土器細片が少量出土している。1は弥生時代前期の甕である。遺構は第 層上面で検出した。いずれも弥生時代のもので、北のP1区から続く大溝 2 条(大溝8a・b)と、それに平行して走る溝 1 条(Q3SD304)、南北の溝に接続する溝跡 1 条(Q3SD303)である。また大溝8aと8bの間の第 層上面ではピット 3 個、畦畔又は小溝が一部碁盤状に広がるのを確認した。ただし精査前の度重なる降雨によって遺構の所在が不明瞭となり、再検出はできなかった。そのため遺構の性格は判然としない。また、畦畔又は小溝状遺構の際では磨製石包丁 1 点が出土した(Q3-2図2)。

調査担当者 坂本裕一、名木郁、小野由香

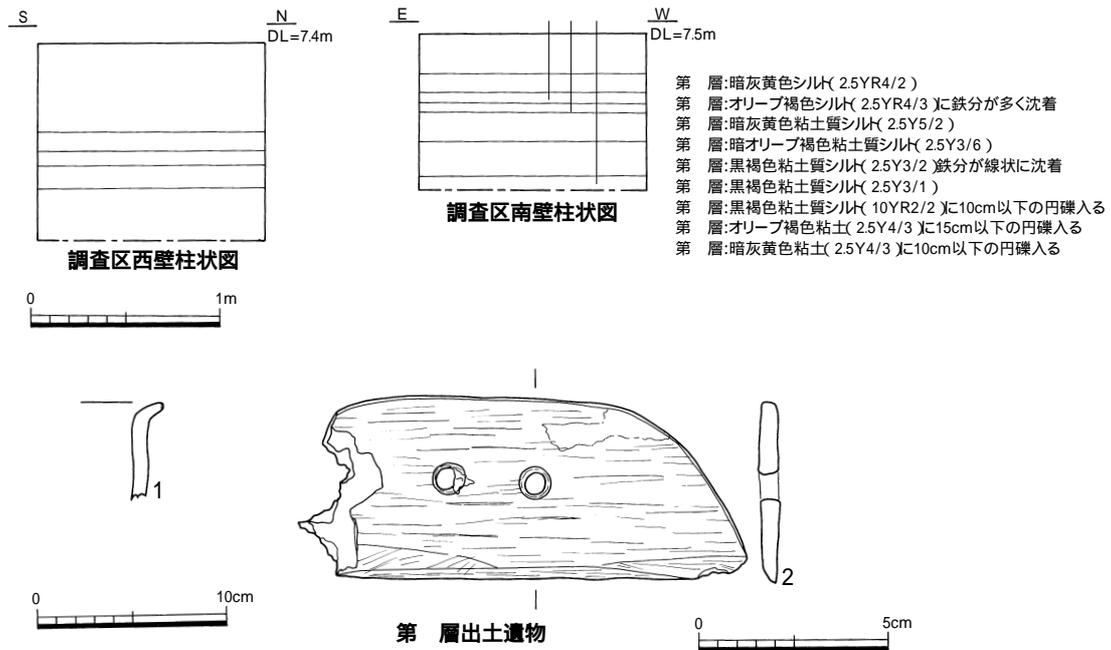
執筆担当者 小野由香

調査期間 平成11年 6 月 4 日～平成11年10月29日

調査面積 2,758m²

時代 弥生

検出遺構 溝跡 4 条(うち 2 条は大溝8a・b)



Q3 - 2 図 調査区西・南壁柱状図、第 層出土遺物

2. Q3区弥生時代の遺構と遺物

(1) 溝跡

Q3区で検出した弥生時代の遺構は溝跡4条で、いずれも弥生時代のものとみられる。P1区から続き、調査区を縦断する大溝8a・bについてはP3・4区で扱うこととし、残り2条の溝跡についてここで述べる。

Q3-1表 Q3区溝跡一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	接 続	時 期	備 考
Q3SD303	(12.4)×0.6×0.3	-	U字状	N-79°-W	大溝8b、 Q3SD304?	弥生	
Q3SD304	(32.7)×0.4×0.07	-	逆台形	N-14°-E	Q3SD303?	弥生	

Q3SD303(Q3-3図)

時期；弥生 **方向**；N-79°W

規模；(12.4)×0.6m **深さ** 0.3m **断面形態**；U字状

埋土；暗オリーブ褐色～黒褐色粘土質シルト

床面標高；6.203m

接続；大溝8b、Q3SD304

出土遺物；

所見；調査区北部で検出した、東西方向に延びる溝跡である。大溝8b、Q3SD304と接続又は切り合う。切り合う場合、先後関係は不明である。また遺物は全く出土しておらず、溝の機能した時期の特定は困難である。埋土の色調及び周囲の遺構との関係から、弥生時代の溝跡と考えられる。

Q3SD304(Q3-3図)

時期；弥生 **方向**；N-14°E

規模；(32.7)×0.4m **深さ** 0.07m **断面形態**；逆台形

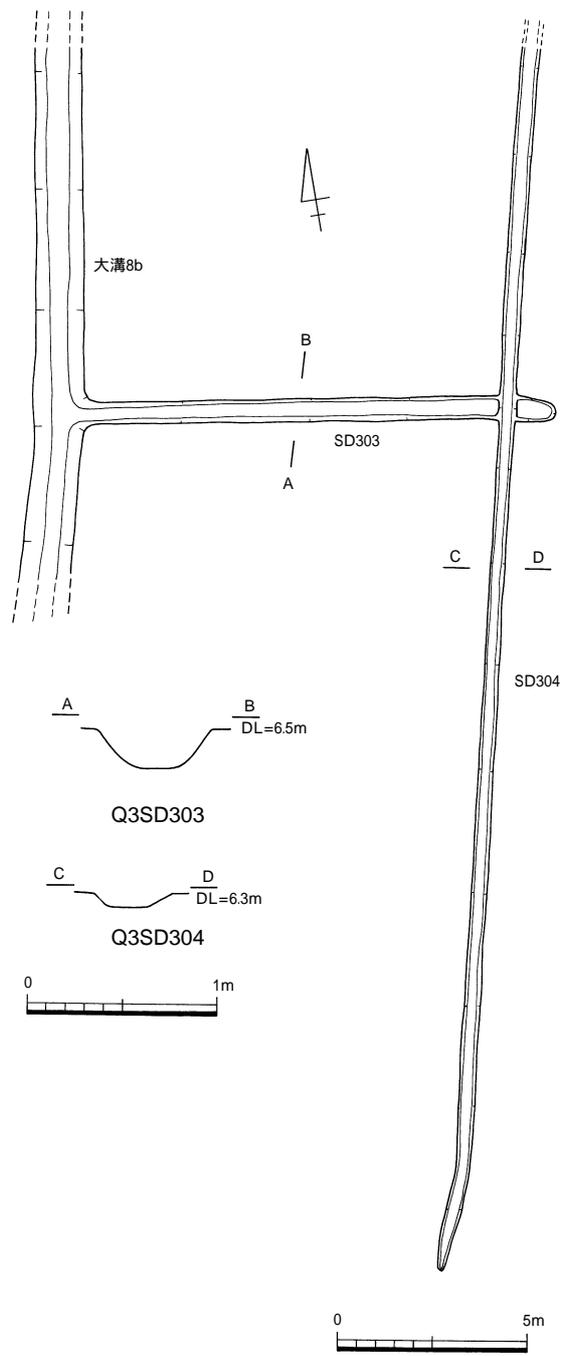
埋土；黒褐色粘土質シルト

床面標高；6.186～6.121m

接続；Q3SD303

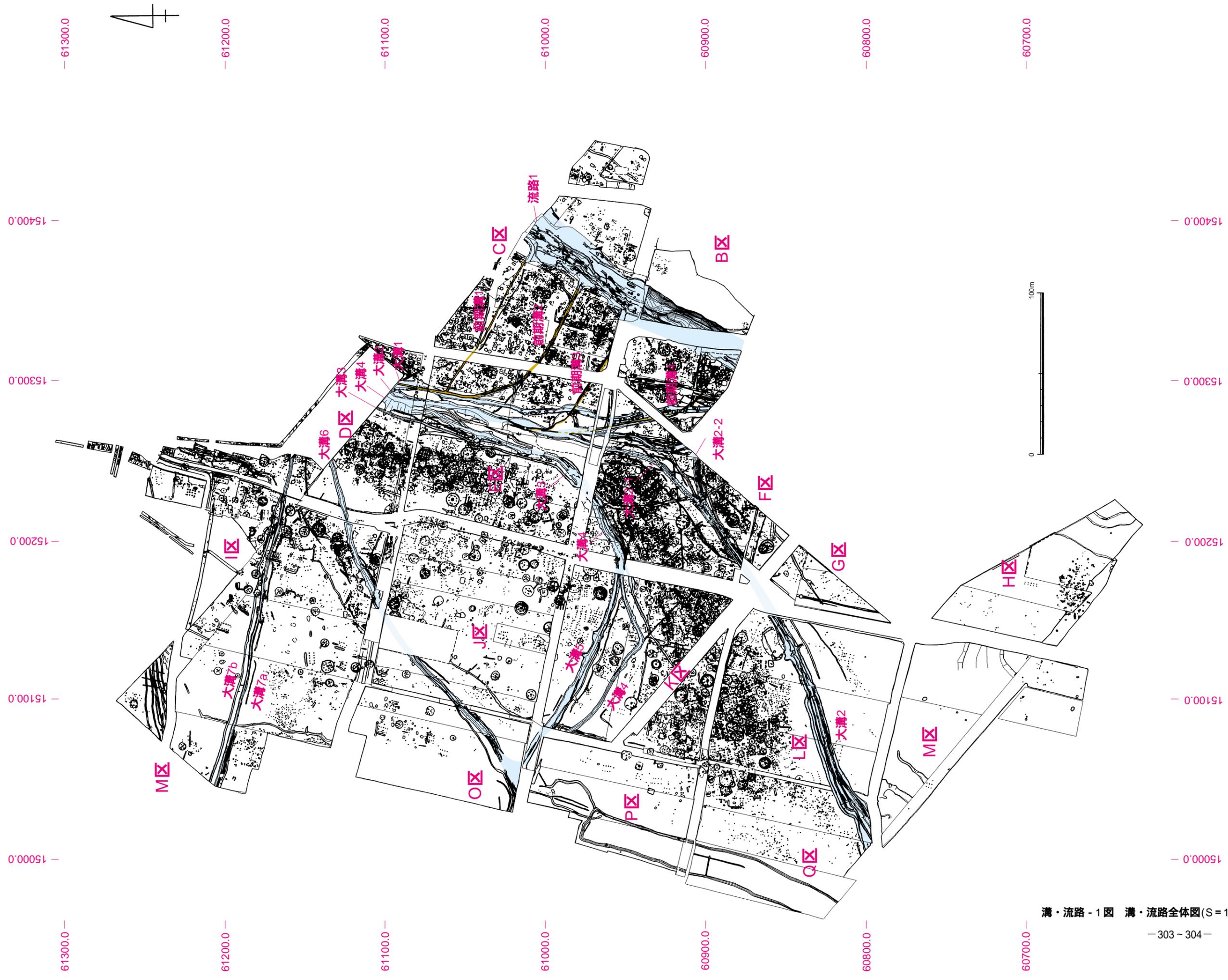
出土遺物；

所見；調査区北部で検出した溝跡で、大溝8aの西側を平行して走る。非常に残存状態が悪く、深さは約7cmを測る。Q3SD303とは接続又は切り合う。遺構の性格は給排水用施設とみられるが、周辺に住居等はなく水田等に伴う可能性がある。遺物は出土しておらず、時期の特定は困難である。埋土の色調及び周囲の遺構との関係から弥生時代の溝跡と考えられる。



Q3 - 3 ☒ Q3SD303・304

溝・流路



溝・流路 - 1 図 溝・流路全体図(S=1/2000)

溝・流路

(1) 溝・流路の概要

今回の田村遺跡群の調査では、調査区全体に繋がる溝・流路を検出した。これらの溝は基本的に地形の等高線に沿っているものが多く、弥生時代の集落の中心に形成されている。今次調査区北東部で検出された流路1(C3SR301)は規模が大きく、弥生時代前期から後期にかけての集落の中心的な流路であったと考えられる。この流路の西側にあたるB・C・E区では弥生時代前期の溝(前期溝1~4)の内側に前期の土坑群が多数検出された。前期溝2については、昭和51年の一次調査時に一部が検出されており、今次調査で全容が明らかとなった。東端は流路1に開口するように接続しており、北西から北の方向に向かって弧状に延びる。前期溝3は前期溝2の南側に位置し、二つの溝の距離間は約50mを測り、前期溝2と同じ方向性を持ち弧状を呈するが、西側は弥生時代中期~後期にかけての溝(大溝1・2)に切られる。さらに南部(B4・F5区)では、前期溝4を検出しており、やや南部に張出しながら弧状に延びる。これらの弥生時代前期の溝の配置を見れば、比較的安定している自然堤防上に形成されており、等高線に並行して50m前後の距離間で等間隔に配置されている。内側には土坑の集中が見られ、これら弥生時代前期の土坑群を区画する環濠的性格も考えられる。また、溝の断面形を見れば、前期溝2はU字を呈するのに対し、前期溝3・4はV字状を呈しており、防御的な溝として機能をしていたことが考えられる。溝3・4については砂・砂礫などの流水堆積は僅かしか認められず、埋土は地山である黄色シルトがブロック状に含まれていることから灌漑用水的な機能は果たしていないと考えられ、比較的短期間に埋め戻されているものと思われる。これらの弥生時代前期溝及び、内部の土坑から出土した遺物からみて弥生時代前期中葉(I-3~I-4期)が中心的時期であると考えられる。

大溝1~6については、弥生時代中期~後期にかけての溝であり、それぞれ当該期の集落の中心に位置する。大溝1・2については北部の調査区であるD区から南に向かって延び、F区で南西方向に向きを変える。いずれも等高線に並行して延びているが、大溝4・5についてはK区で地山の礫層を掘り込んで構築されており、環濠的な性格が考えられる。大溝1は、集落の東側を流れており、弥生時代前期中葉の溝を切る。また、南部は南東方向に延び流路1と合流する可能性がある。大溝1の帰属時期は弥生時代前期末から中期と中期末~後期にかけての2時期にピークが見られるが、前期溝が検出されているC区、B区の自然堤防状の高まりの外郭にあたる部分をながれており、弥生時代前期~中期にかけては今次調査区の北東部の高まりが集落の中心であった可能性がある。大溝2はE6区で二股に別れ、F区中央部で収束し、2条が並行し南西方向に延びる。この内、F5区側に流れ込む1条の一次堆積層(弥生前期末~中期)は大溝1に繋がり、B4区から南部に延びる。大溝2はF区中央部を南西方向に直線的に延びL区では4条に分岐する。L区ではこの溝の南部には弥生時代の遺構は皆無である。大溝3は他の大溝に比べ規模が小さく、砂礫などの流水堆積は認められない。埋土は暗褐色を呈したシルト層であり、D1区及び、F1・3区で比較的まとまっ

て弥生時代中期中葉(期)の遺物が集中して出土が見られた。大溝4に切られながらK1区中央部まで延びる。大溝6はD区から南西方向に延びる溝であり、調査区西側の地形の低い部分に向かって延びる。I区では溝上面で集石が検出され、古代(奈良～平安)の遺物の出土が見られ、古代の段階に改修が進んだものと思われる。大溝7についてはI・N区の中央部をほぼ東西方向に延び、I4区でやや北東に向きを変える。同じ規模の溝が2条並行しており、条理と同じ方向性を持つ。大溝1～6については地形等高線と並行しているが、大溝7は等高線を横断するように延びる。出土遺物は弥生時代の遺物しか確認されておらず、詳細は不明であるが、溝の位置、方向から見て古代の溝の可能性も考えられる。

以上、流路・大溝を概観したが堆積状況及び出土遺物についての詳細は各溝ごとに後述する。

溝・流路1表 溝・流路接続表

遺構名	接続	総延長(m)	幅(m)×深さ(m)	断面形	時期
前期溝1	C1SD101 E5SD101 E3SD309	105	1.0～1.3×0.2～0.5	U字～逆台形	弥生I-3
前期溝2	I4TR6 D1SD1010 D2SD215 E3SD310 E5SD105 E2SD201 C5SD501 C1SD105 C3SD105	185	1.7～2.3×0.62～1.05	U字(テラス有) ～凸状	弥生I-3 (I-3～4)
前期溝3	C1SD208 C5SD504 E2SD206 E6SD612	93	0.45～1.4×0.4～1.1	V字	弥生I-3～4
前期溝4	B4SD411 F5SD	86	0.82～1.0×0.3～0.7	V字～逆台形	弥生I-2
大溝1	D1SD1009 D2SR209 E3SR301 E6SR601 F5SR509 B4SD421	225	2.2～3.5×0.52～0.7	U字	弥生I-5～II ・IV～V
大溝2	D1SR112 D2SR201 E3SR302 E6SR602 F5SR501 F4SR401・ 402 F3SR301 L1SR107 L3S R301A～C Q2SR201・203～205	452	1.8～3.4×0.6～1.2	U字	弥生I-5～ ・IV～V-3
大溝3	D1SD1001 D2SD211 E7SR702 E1SD101 F3SD309 F1SD114 K3SD103 K1SD103	220	1.7×0.7	U字	弥生～IV
大溝4	D1SR111 D2SD204・205 E3S R303 E7SR704・705 E1SR101 F2SR202 F3SD309 F1SR101 K3・K1SD103	304	5.0×0.9	U字	弥生中期 ～後期
大溝5	D1SR111 D2SD204・205 E3S R303 E7SR E1SR101 F2SR 202 F3SD309 F1SR101 K3S D301	119	4.4×0.5	U字	弥生中期 ～後期
大溝6	D1SD131 D2SD131 I2SD220 J4SR401 J5SR501 O1SR101 O2SR202	195	3.5～5.4×0.5～1.1	U字～逆台形	弥生中期 ～後期
大溝7a	I4SD102 I2SD102 I1SD102 N1SD102 N2SD102	213	0.9～2.05×0.29～0.65	逆台形～U字	弥生IV～ V・古代
大溝7b	I4SD103 I2SD103 I1SD103 N1SD103 N2SD103	213	0.9～2.05×0.29～0.65	逆台形～U字	弥生IV～ V・古代

前期溝1**時期**；N-62°-W**規模**；1.0～1.3m×65m **深さ**約；0.2～0.5m **断面形態**；U字状～逆台形、一部箱形**埋土**；灰褐色土から黒褐色土**床面標高**；西側 7.35m、東側 7.3m**接続**；西側よりE3、E5、C4、C1**出土遺物**；弥生土器(壺、甕、鉢、高坏、蓋)、土製紡錘車

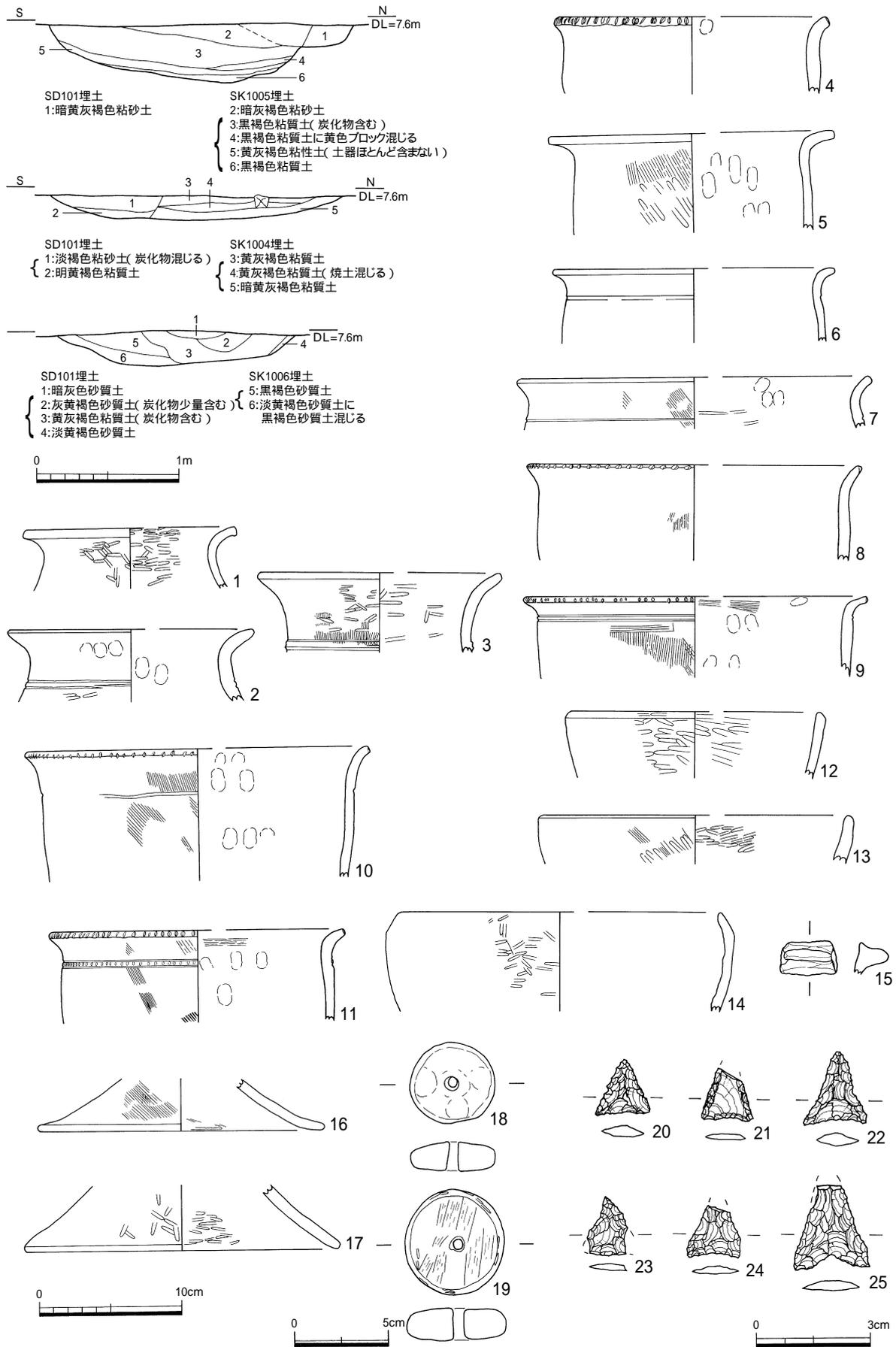
石器(石鏃、石斧、砥石、叩石、石材)

所見；E3、E5、C4、C1で検出した。C1区では前期の環濠と考えられる前期溝2から約39m北側で前期溝2とほぼ並行した東西方向の溝跡として検出した。西側調査区のE3では中期末～後期の溝跡に切られるが、更に西側に延びていた痕跡がないためE3区で南北方向に向きを変えるものと考えられ、前期溝2が南北方向に向きを変えた溝と合流すると考えられる。東側端部はC1で検出しており、C3区で検出したSR301に合流している。旧名称はC1区、E5区ともSD101である。

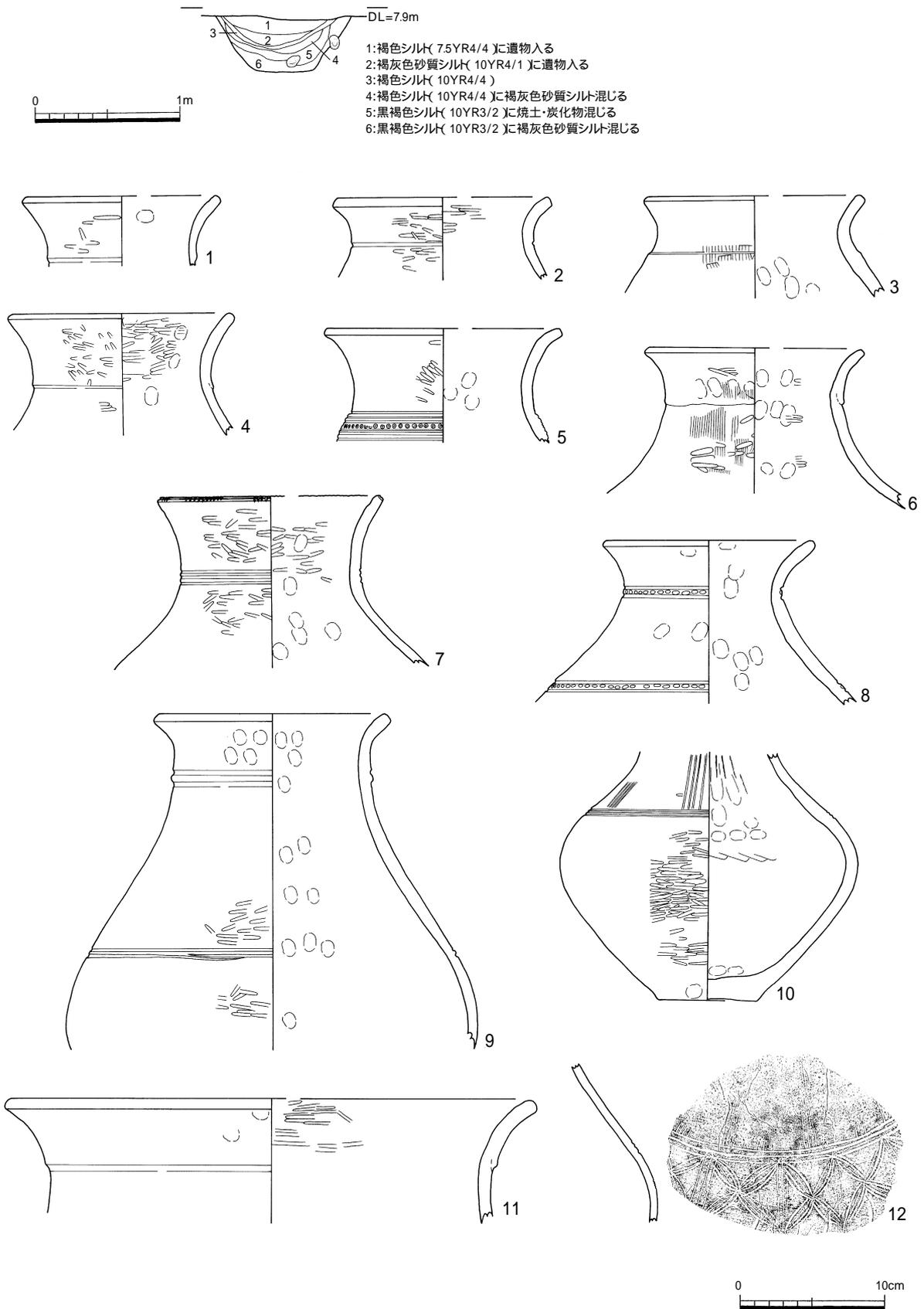
埋土は、灰褐色土から黒褐色土であるが、炭化物、黄色土ブロックが混じる。埋土中からの出土遺物は碎片が多く、完形復元できたものはE5出土の甕のみであった。土器では壺、甕、高坏、鉢、蓋が出土している。壺では胴部に無軸の木葉文が施されたものが出土している。また、甕では口縁部に口縁全面刻みがあるものや、口縁下に3条までの沈線が巡るものが出土している。鉢では直縁のものと如意形口縁のものがみられる。高坏はE5区で出土した低脚と考えられる1点のみである。

石器では石鏃、石斧、砥石、叩石、石材が出土している。石鏃はいずれも石材サヌカイトで打製である。遺物の時期は弥生前期中葉の可能性が考えられる。

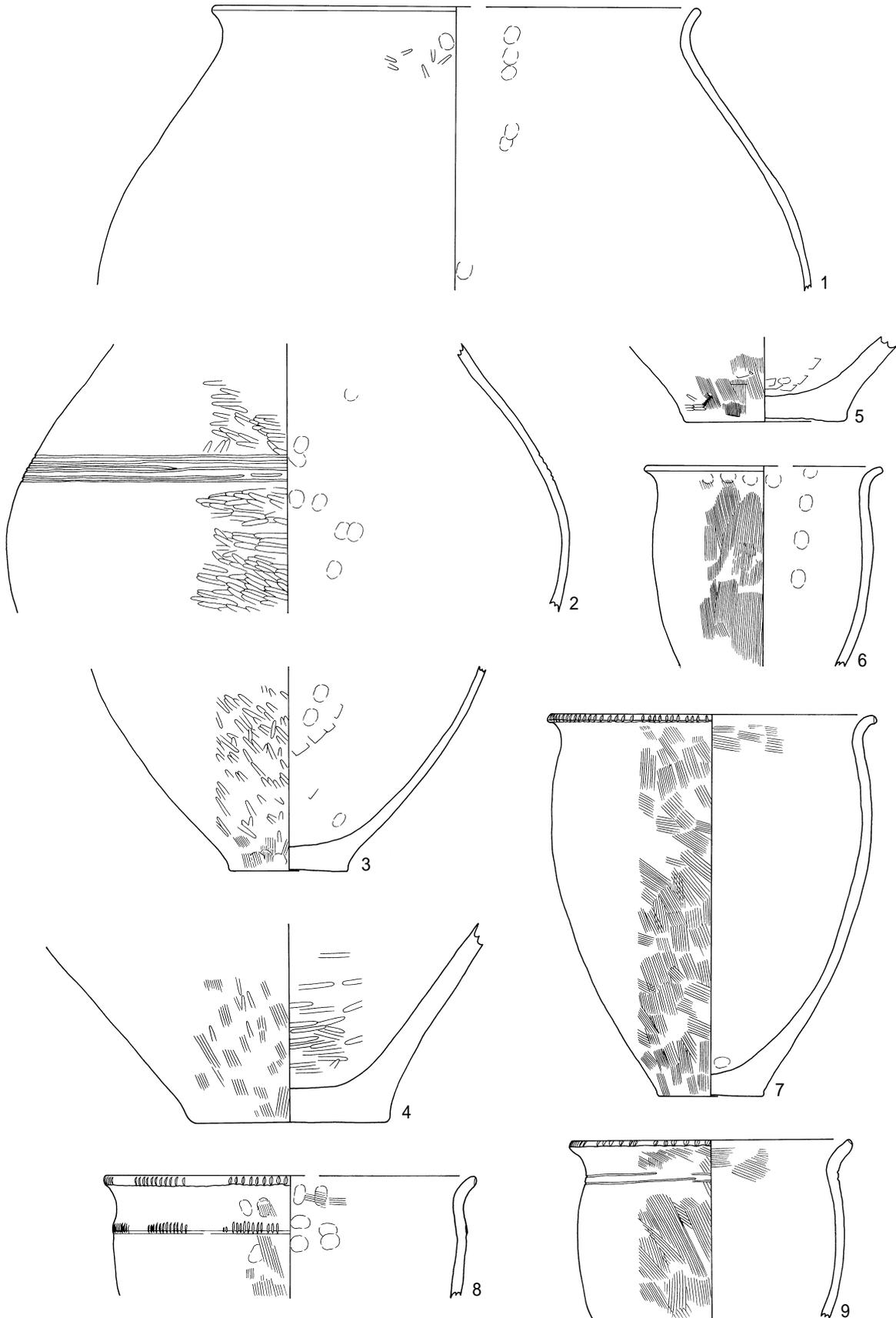
他遺構との切り合いではC1区でSK1004、SK1005、SK1006と切りあっており、平面確認では埋土が類似しており前後関係は不明であったが、断面観察で、SK1005はSD101を切り、SK1004とSK1006はSD101に切られている可能性が考えられる。土坑出土遺物は、いずれも弥生時代前期中葉と考えられており、時期差はほとんど無いものと考えられる。また、内濠と考えられる前期溝2とは同時期と考えられ、規模もしっかりしていることから、集落内を区画する溝の可能性が考えられる。



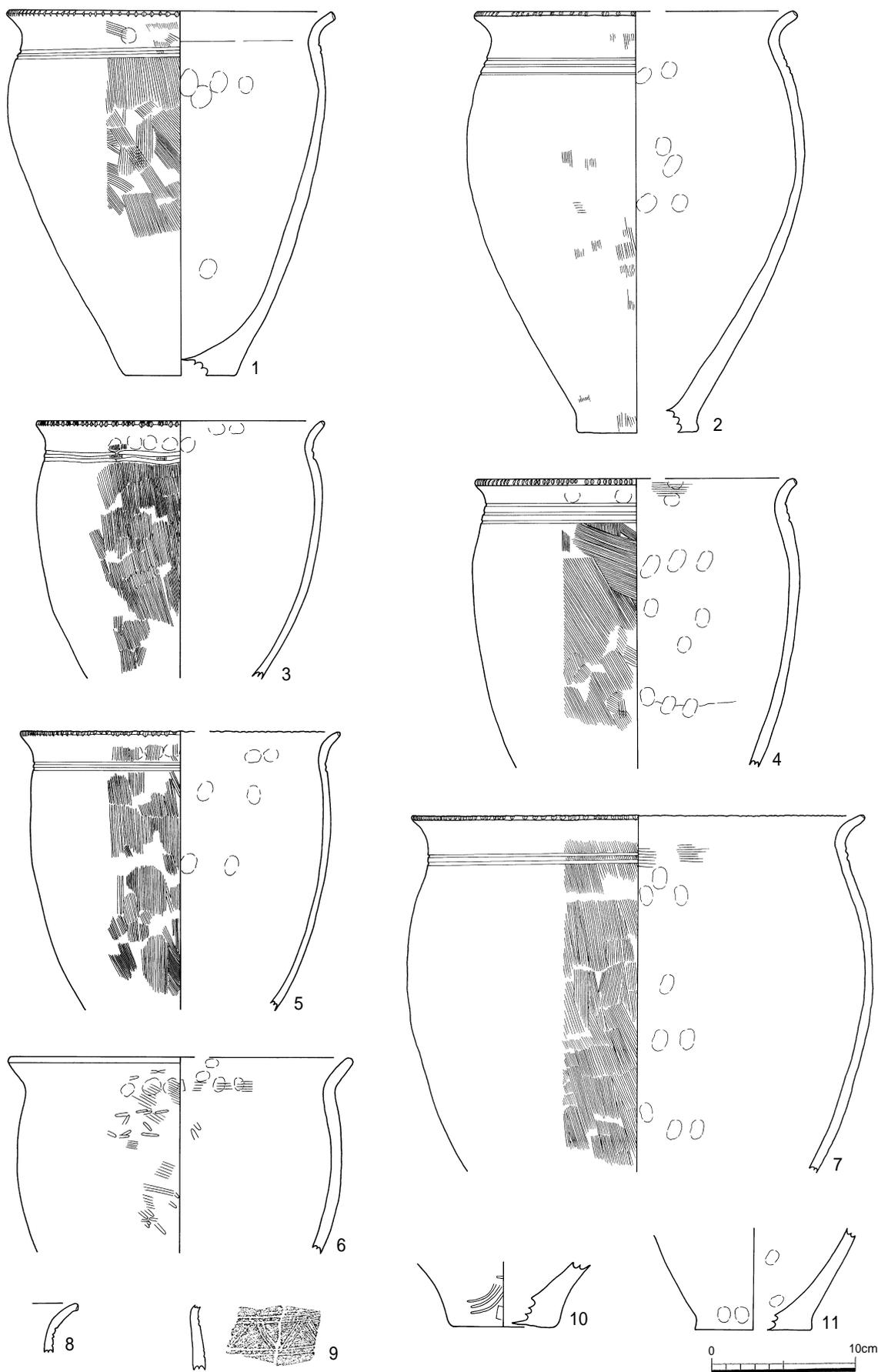
前期溝1-1図 C1SD101出土遺物



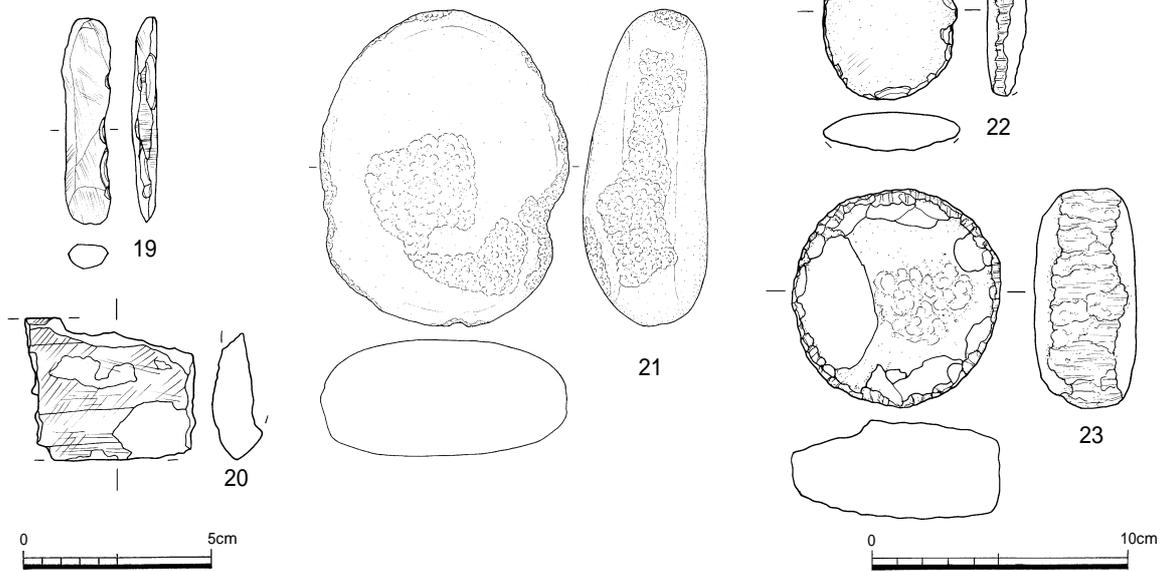
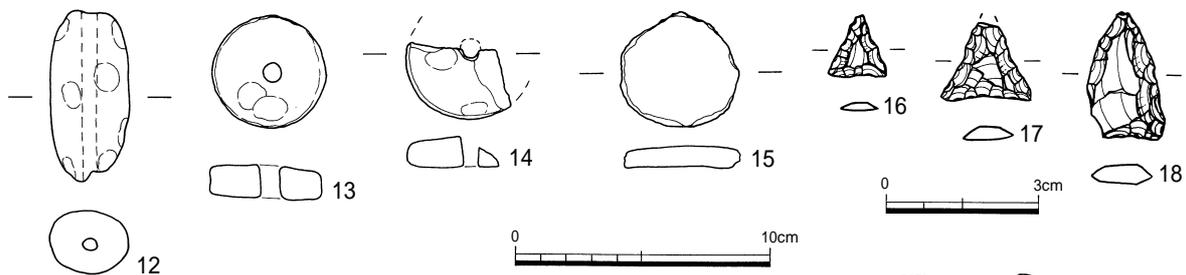
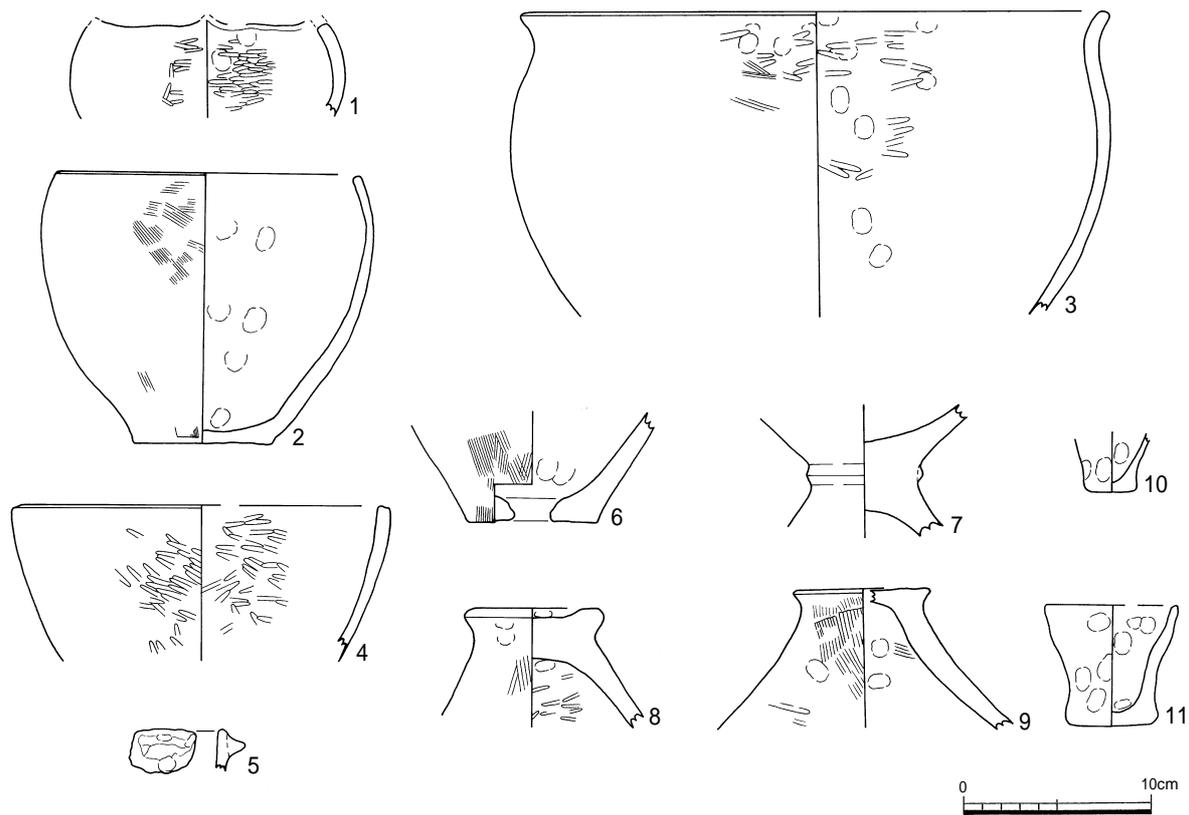
前期溝1 - 2図 E5SD101出土遺物(1)



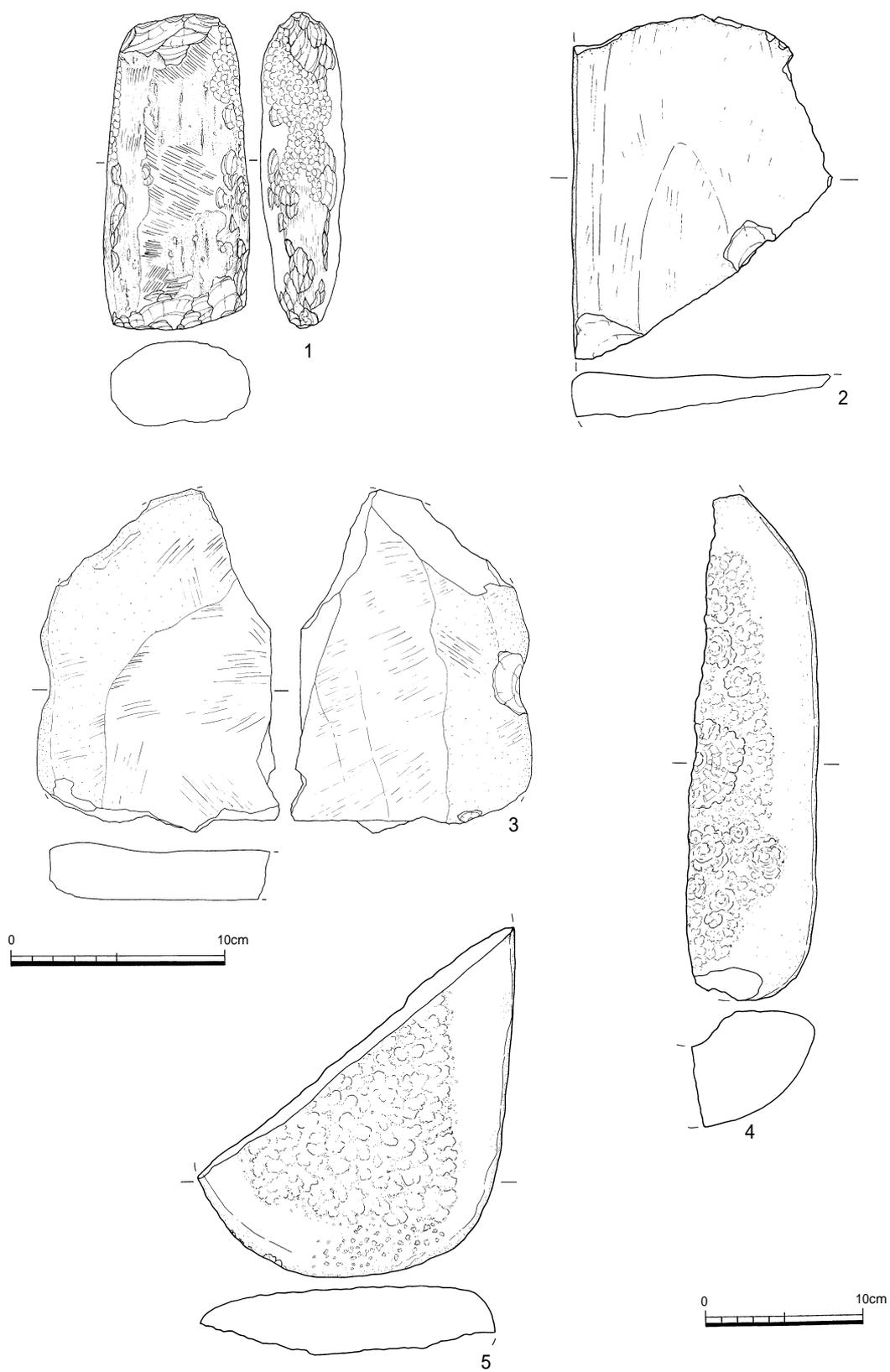
前期溝1 - 3 図 E5SD101出土遺物(2)



前期溝1 - 4 図 E5SD101出土遺物(3)



前期溝1-5図 E5SD101出土遺物(4)



前期溝1 - 6図 E5SD101出土石器(5)



前期溝2 - 1 図 前回調査区分を含む前期溝2全体図(S = 1/1,500)

前期溝2(前期溝2-1～24図)

時期；弥生I-3(～4) **方向**；北東～南東に弧状

規模；検出長 185.0×幅 1.7～2.3m **深さ** 0.62～1.05m **断面形態**；U字状(テラスを持つ)～凸状

埋土；黒褐色シルト主体

床面標高；6.53～7.09m

接続；I4TR6～D1SD1010～D2SD215～E3SD310～E5SD105～E2SD201～C5SD501～C1SD105～C3SD105

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)、土製紡錘車、土製円盤、管状土錘、用途不明土製品、石鏃、石包丁、石鎌、大型直縁刃石器、スクレイパー、石製紡錘車及び未製品、石斧、叩石、砥石、台石、チャート剥片類

所見；前期溝2は、1983年までに行われた発掘調査によって既に存在が確認されていた。1955年に発見された西見当遺跡は、同年12月にA区、1976年2月にB、C区(いずれも今次調査のC区)の調査が行われ、前期の遺構・遺物を確認した。西見当遺跡C区の調査では、環濠とみられる溝跡を検出した。これにより、環濠は検出長1.8m、全幅1.17m、深さ75cmを測り、断面形はV字状～逆凸状を呈していることが明らかとなった。この環濠が前期溝2に当たると考えられる(以下、前期溝2と記述)。また前回のLoc.44の調査では、前期溝2は遺跡群の北部まで延び、弧状を呈することが確認された。今回の調査はこれまで想定されたことを裏付ける結果となった上に、前期溝2の内外にも弥生時代前期の溝跡がめぐることが明らかとなった。

今次調査で確認した前期溝2は、北からI4TR6～D1～D2～E3～E5～E2～C5～C1区を経て、C3区の自然流路に接続する。更に北部は前回調査のLoc.44Cで確認したSD1へと繋がるとみられ、ここまでの総延長は223mを測る。北部も自然流路に取り付き、半円状を呈していた可能性が高い。その場合前期溝2の内側の推定面積は、1.8～1.9万㎡になると考えられる。

前期溝2は検出長185m、全幅、深さは調査区によって異なるが、概ね全幅1.7～2.3m、深さは最も残りの良いE5区で1.05mを測る。周辺の遺構の状態からみて後世の削平があったとみられ、本来は更に全幅、深さともあったと考えられる。また床面標高は北から南に向かって低くなり、D2区で7.09m、南のC区では約6.5mを測る。断面形はU字状から凸状、場所によってはテラス状の平坦部を持つ。これらの形状の差は、溝の浚渫作業が行われた可能性を示唆するものと考えられる。また場所にもよるが、前期溝2の埋土下層には地山土とみられる黄～褐色シルトブロックが顕著で、掘削後早い時期に埋まったものと考えられる。埋土中層は安定した土壌層を形成しており、前期溝2は空堀の状態で比較的長期間使用され、その後埋められたとみられる。その埋没の原因の一つとして、洪水の可能性が上げられる。

遺物は主に中層からまとまって出土している。E5区では遺物と共に炭化物層の薄い堆積が認められた。土器は完形になるものは極めて少なく、石器は欠損品、未製品が多い。これらの遺物は不要品を廃棄したものとみられる。出土遺物のうち、復元図示できたのは344点である。セクション図及び遺物実測図は、北の調査区からD2、E3、E5、E2、C5、C1(C3区出土遺物含む)区の順に図示している。I4区TR6、D1区からは遺物が出土しておらず、ここでは触れていない。D1区SD1010に関しては、第3分冊D1区の項で取り上げているので、そちらも参照願いたい。

壺は口頸部境に段を有するもの、突帯を貼付するもの、ヘラ描沈線、双線、竹管文等を施すものがみられる。また少量ではあるが、段部に沈線等を施すものもみられる(37)。口頸部境、頸胴部境に施す沈線は、多条のものでも3条である。口縁部の形態は、9・34・42・110・251・258などのようにあまり発達しないものと、11・13・37・114・191・261などのような大きく外反するものがみられる。また7は小型の壺で、口縁部は発達せず、最大径は下胴部にある。その他の壺は、完形品はなかったが最大径は概ね胴部中位にあるとみられる。また130・196のように底部外面にヘラ描沈線を施すものがみられる。

甕は古い様相のものもあるが、上胴部の張る器形が比較的多く認められる。口縁端部は刻みを施すものが圧倒的で、その多くが全面を刻む。61・213のように意図的に刻みと無刻みあるいは短沈線を交互に施すものも若干であるがみられる。口縁部下は無文、有段で段部に刻目を施すもの、ヘラ描沈線、双線、刺突文等を施すものがある。199は山形文、18・207・211～214はヘラ描又は双線により類似した文様を施す。またI-1様式の東松木式に比定される甕の口縁部片(198・267)も少量出土しているが、これらは混入と考えられる。甕は八ヶ、ナデ調整のものが多く、稀に外面にミガキを施すものもみられる。

鉢は口縁部が如意状に外反するもの、小型で口縁部が直線的に立ち上がるもの、波状口縁の器形がみられる。如意状に外反する鉢は無文が大勢を占めるが、220は強いヨコナデによって、上胴部に弱い段を作り出す。69は直線的に立ち上がる器形であるが、口縁端部外面には薄い粘土帯を貼付し肥厚させる。口縁部外面の粘土帯貼付は 様式から出現する土器群に顕著にみられ、69はそれらの土器の祖型的な要素を持つものと考えられる。68・173・176は鉢とみられ、波状口縁を有する。68は胴部外面に双線と複線山形文による文様を施す。また鉢は概ね内外面にミガキ調整を施す。

高杯の出土は非常に僅少で、E5区で3点図示できたにとどまる(77～79)。78は杯部と脚部の境に断面三角形の突帯を、79はヘラ描沈線を施す。

蓋は壺、甕用のものが出土している。圧倒的に甕の蓋が多く、壺用とみられるのは227のみである。227は裾部には対角線状に2箇所、2孔1対で円孔が穿たれている。内外面はミガキ調整を施す。24・80～89・181～188・228～231・311～314は甕の蓋である。それらの中には、裾部内面にリング状に煤が付着するものがみられる。

以上、壺、甕、鉢、高杯の様相は、調査区によって若干異なるようである。

土製品は紡錘車、土製円盤、管状土錘が出土した。そのうち紡錘車は孔径0.5～0.7cm、重量19.4～29.7gを測る。

石器は叩石以外欠損品、未製品が主体を占める。使用石材は、遺跡周辺で獲得できる砂岩、粘板岩、頁岩、チャート、蛇紋岩などの他、搬入の香川県金山産サヌカイトなどが認められる。頁岩、粘板岩は磨製石鏃、石製紡錘車、磨製石包丁、磨製石鎌、小型石斧、扁平片刃石斧に、蛇紋岩は扁平片刃石斧、砂岩は叩石、砥石、台石、サヌカイトは打製石鏃、スクレイパー、大型直縁刃石器と、石材に応じた使い分けがなされている。また図示し得ないがチャート剥片類も出土しており、石器製作によって生じた剥片類を廃棄したものと考えられる。

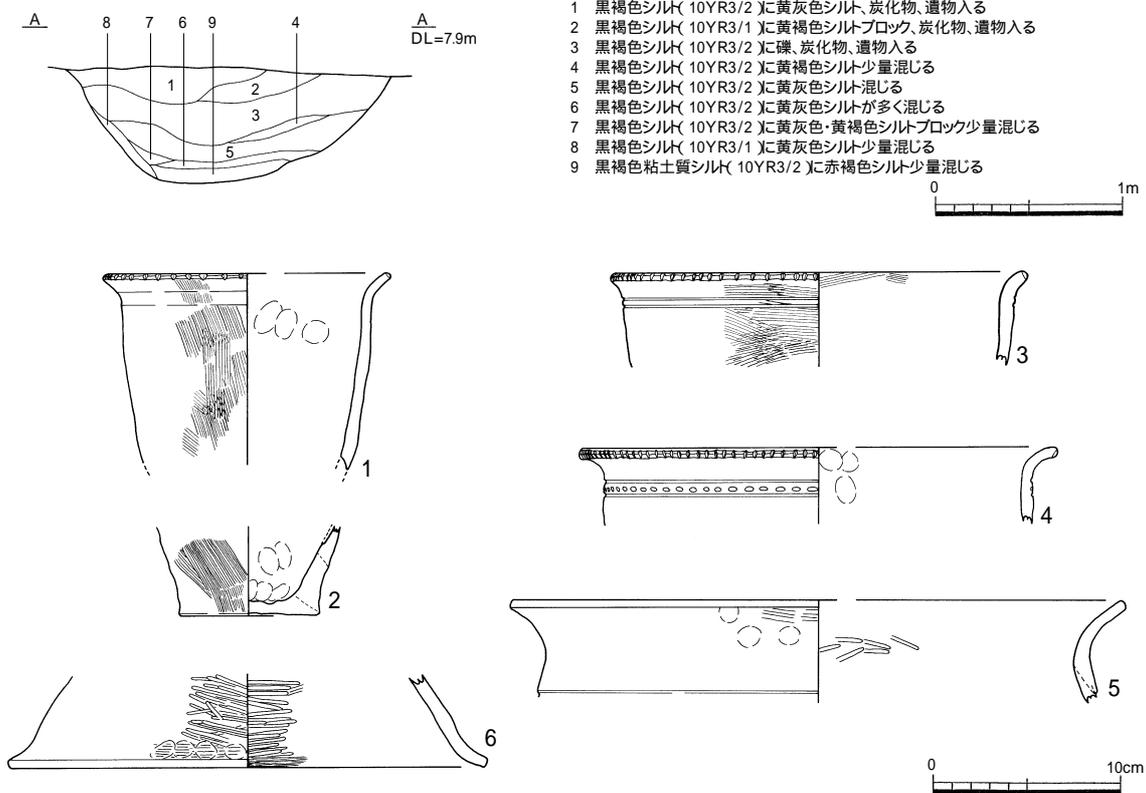
収獲具は石包丁1点、石鎌2点、大型直縁刃石器1点を図示した。331の石包丁は片刃で、刃部

は弱い弧背凹刃形を呈するとみられる。104はサヌカイト製の大型直縁刃石器で、刃縁付近はやや磨滅している。使用痕光沢面は確認できなかった。

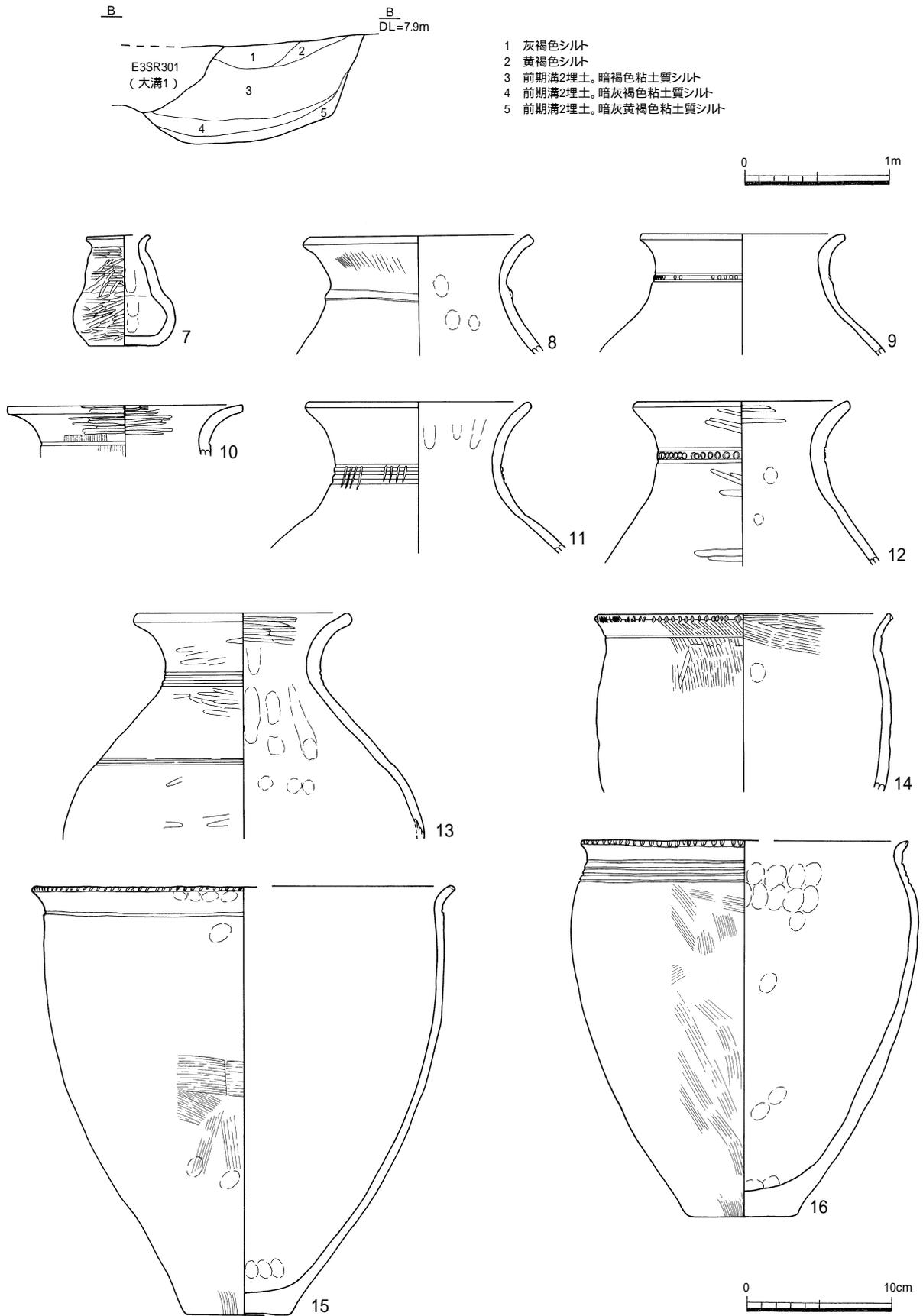
工具は、伐採斧、扁平片刃石斧、小型石斧、叩石、砥石が出土した。103は伐採斧である。刃部は弧状を呈し、研ぎ直しを行ったとみられる。断面は非常に扁平で、刃角は77度を測る。334、335、337は扁平片刃石斧である。334は片岩製で、刃部再生を繰り返したためか基部が非常に短い。撥形を呈し、縦断面は基部中央が膨らむ。335は蛇紋岩製で研磨により基端部及び両側面を平坦に仕上げる。縦断面形は基端部が厚く、刃部にいくに従い薄くなる。叩石は円礫をそのまま利用したもの、他、弥生時代前期に特徴的な打ち割った砂岩円礫の縁辺部を利用するものがある。縁辺部には直交する刻み状の敲打痕がみられることから、石器などの製作に利用されたと考えられる。このタイプの叩石はここに図示したもの他、30点以上出土している。246は側縁が挟り状を呈する叩石で、持ちやすいように意図的に加工したものの可能性がある。

狩猟具又は武器では、打製・磨製の石鏃が出土した。320を除き、いずれも欠損品である。紡織具も同様で、石製紡錘車はいずれも欠損品又は未製品であった。

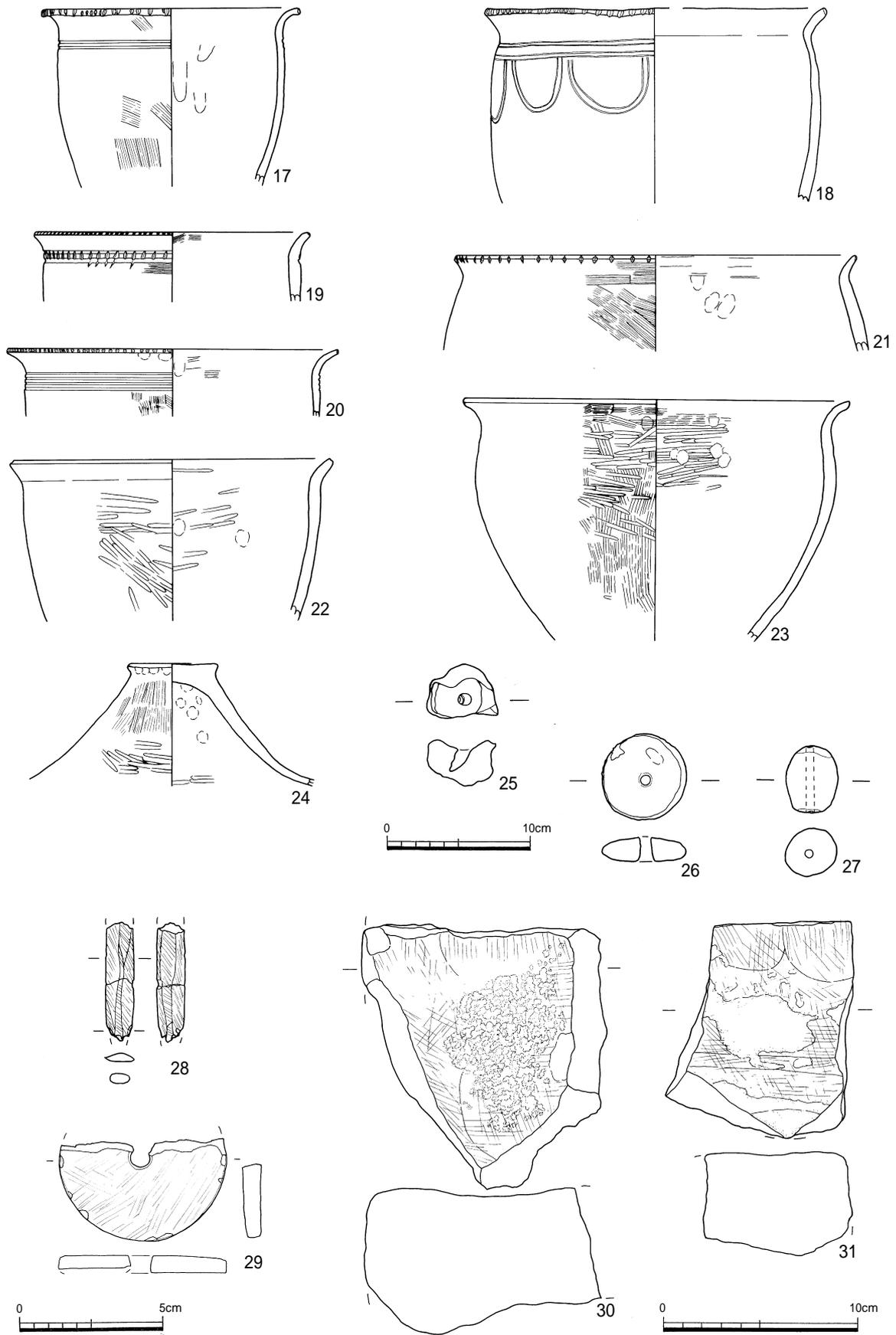
出土遺物から、前期溝2はI-3あるいはI-4様式の時期に埋没したと考えられる。浚渫作業の跡は最下層にしか認められず、埋土中層まで埋没した段階で空堀のまま溝を放棄していた可能性がある。とすると、必然的に環濠によって集落を守るという物理的な防御機能はほとんど果たしていなかったと想定される。観念として環濠を配したものの、掘削後比較的早い段階で防御的機能は失われ、廃れていったと考えられる。



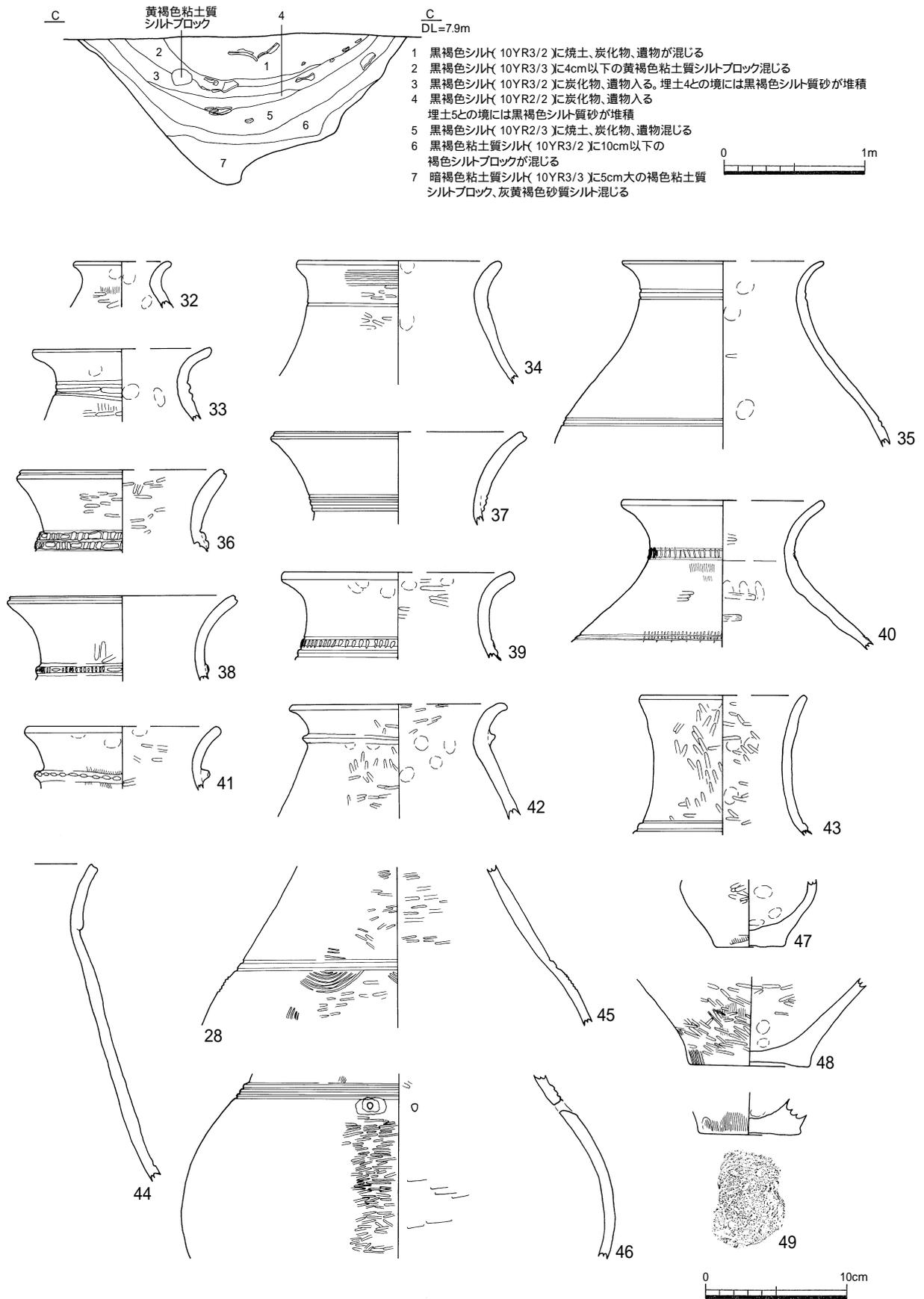
前期溝2 - 3図 D2SD215



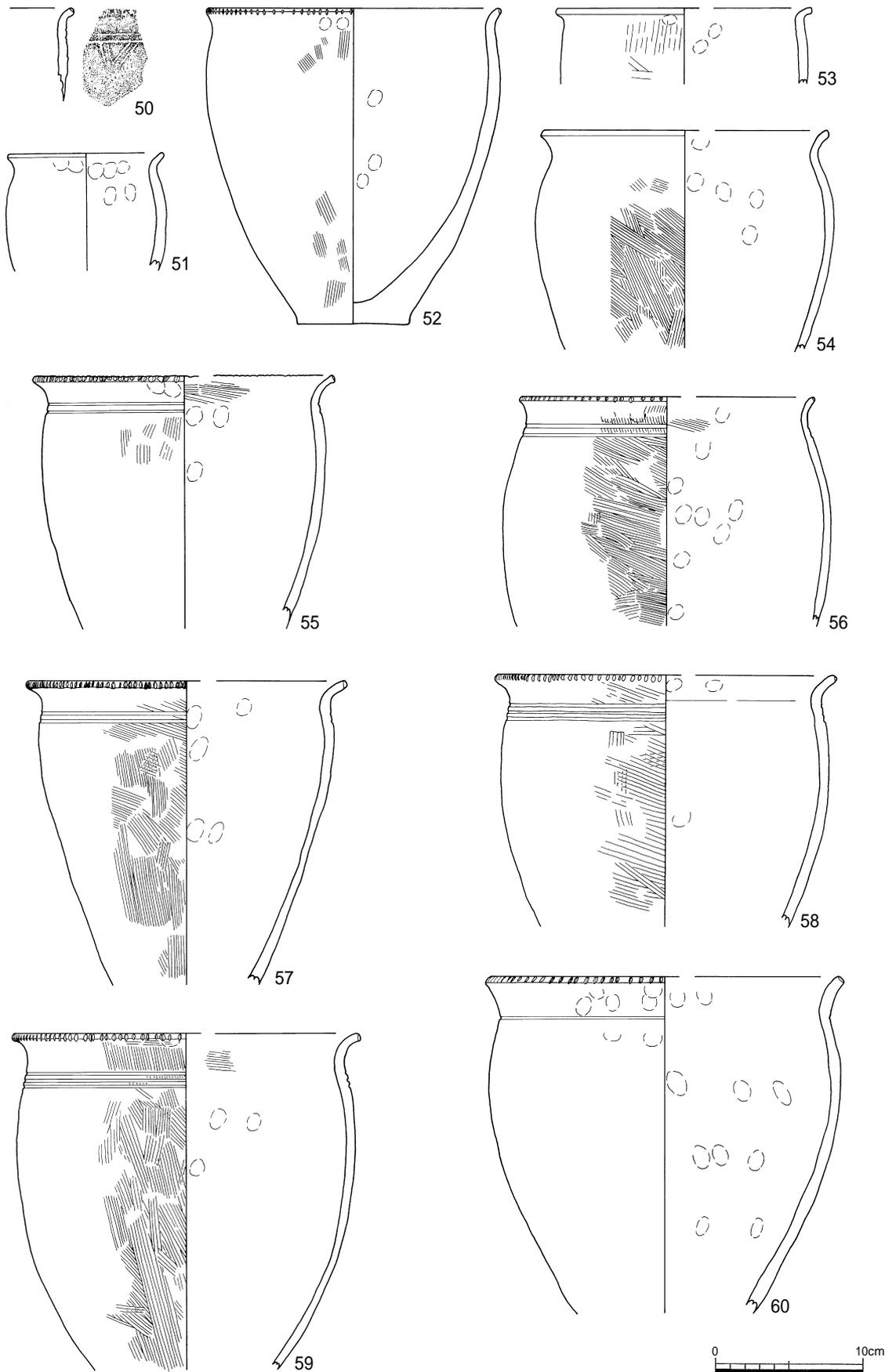
前期溝2 - 4 図 E3SD310(1)



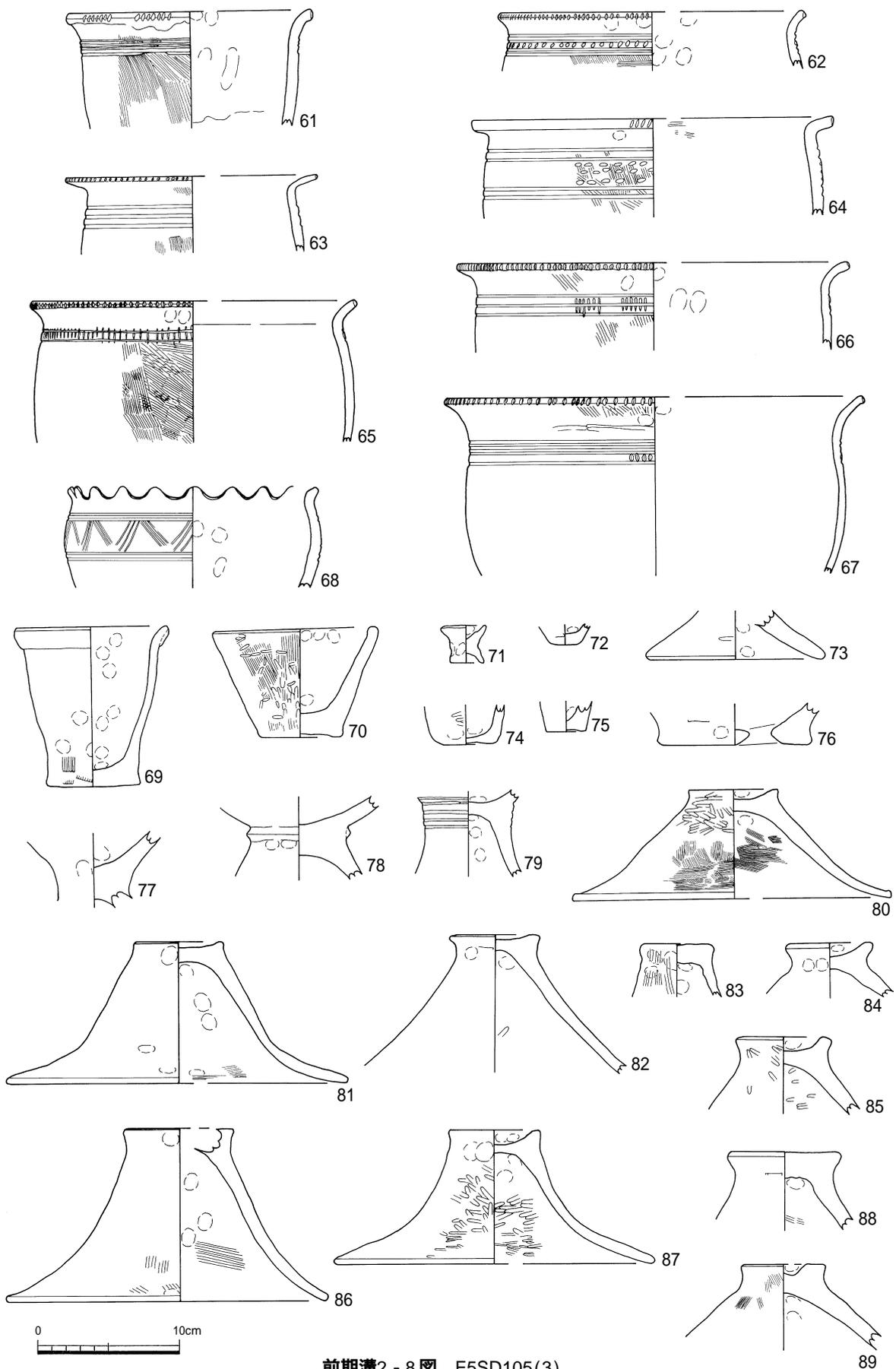
前期溝2 - 5 図 E3SD310(2)



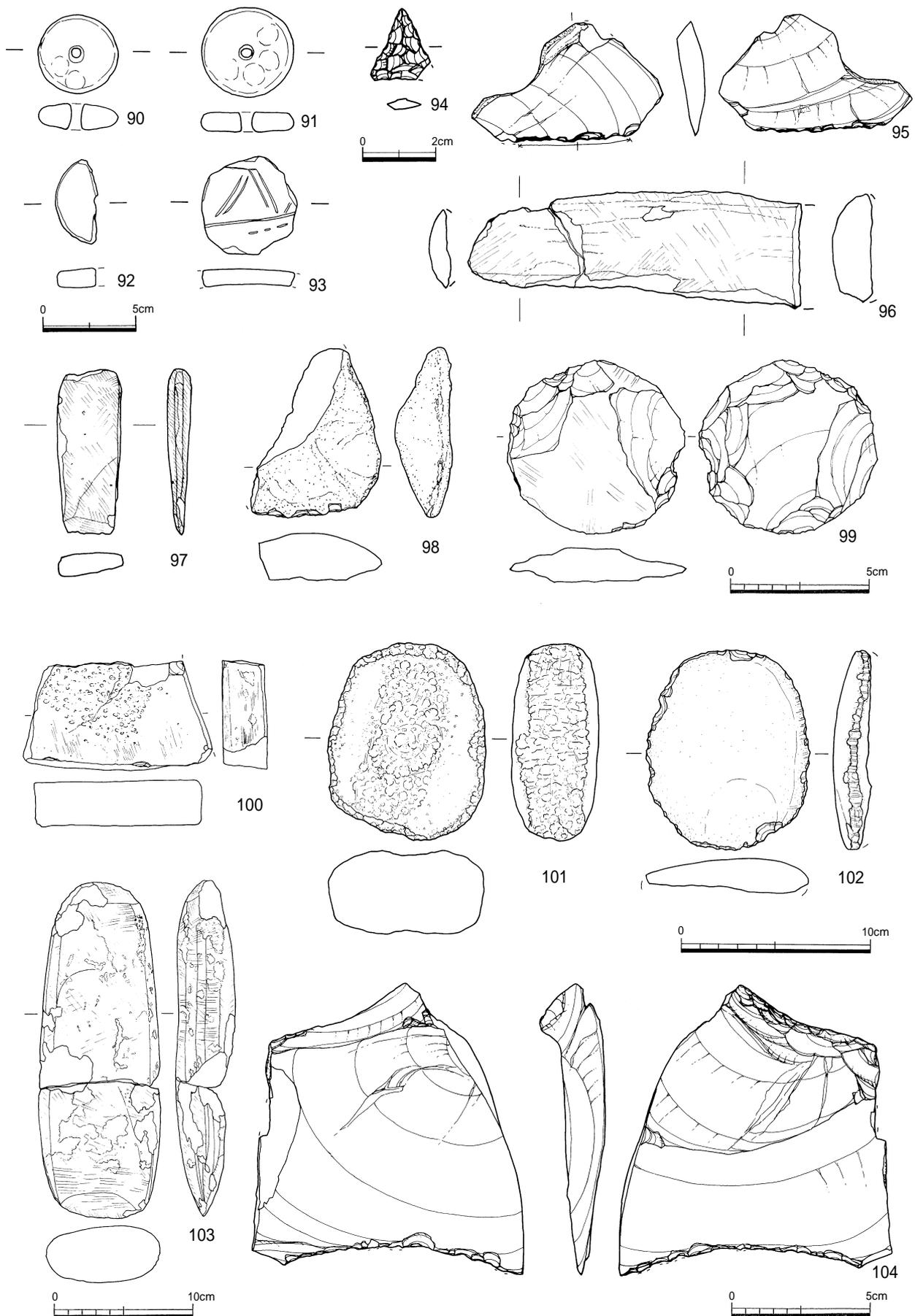
前期溝2 - 6図 E5SD105(1)



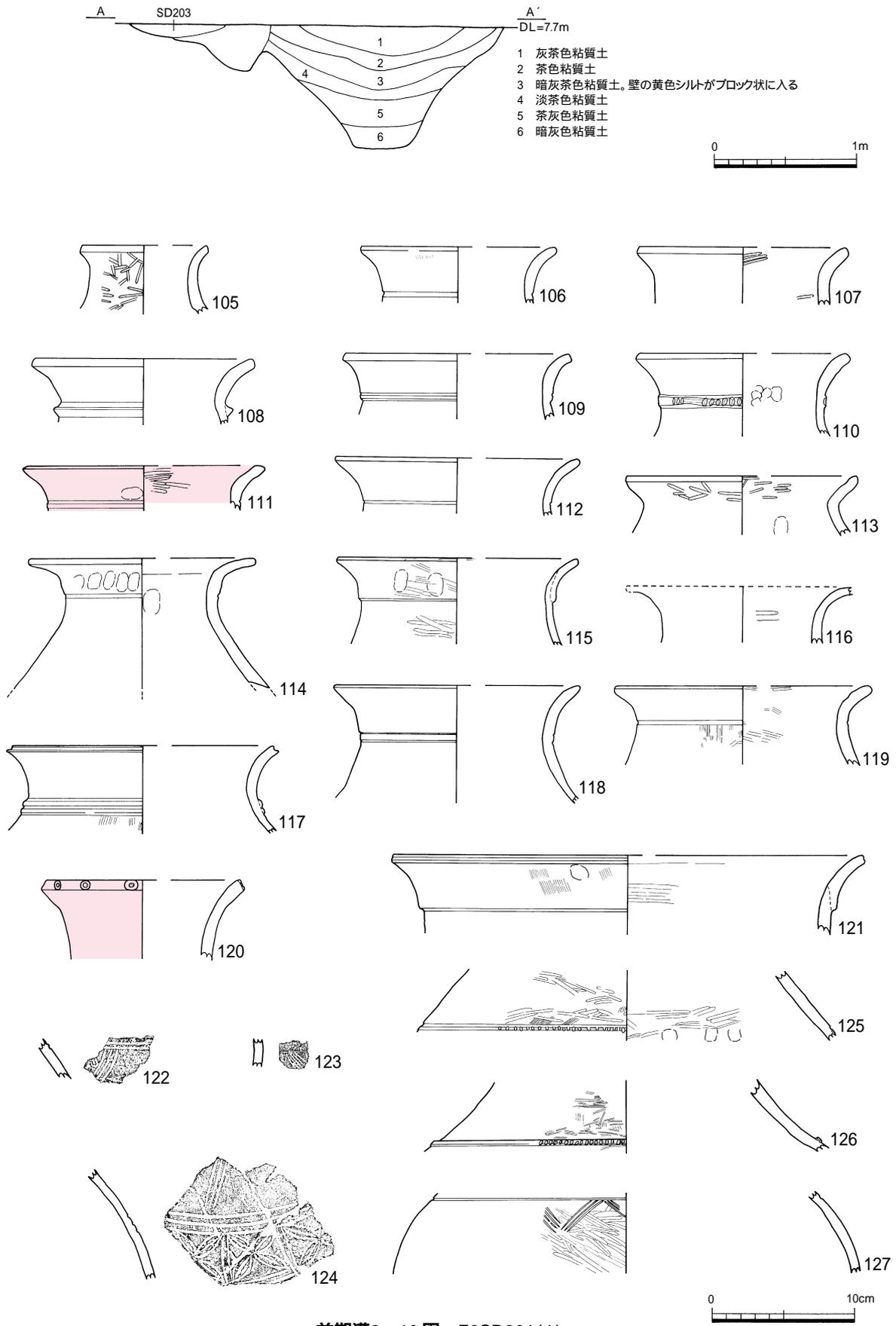
前期溝2 - 7 図 E5SD105(2)



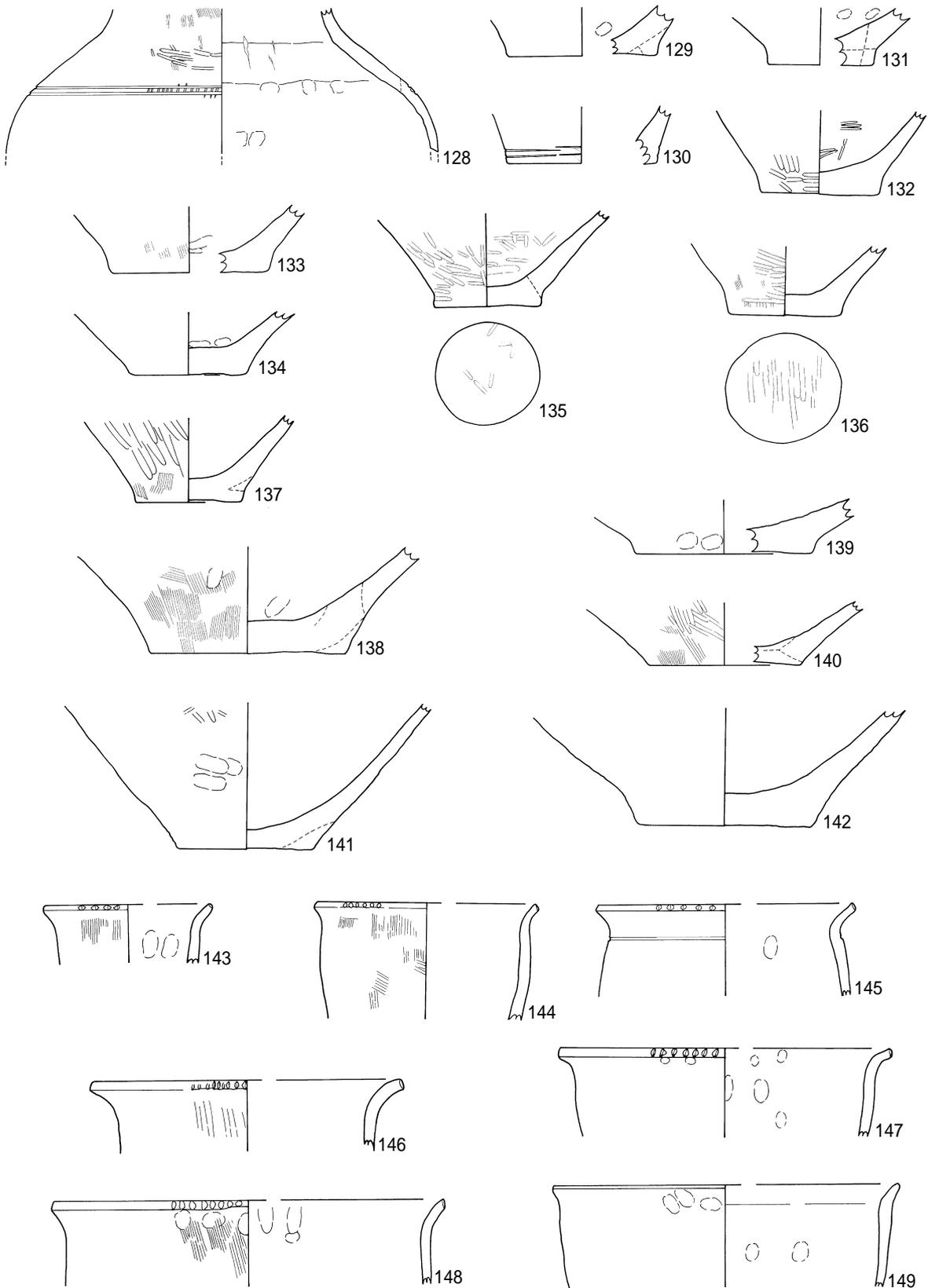
前期溝2 - 8 図 E5SD105(3)



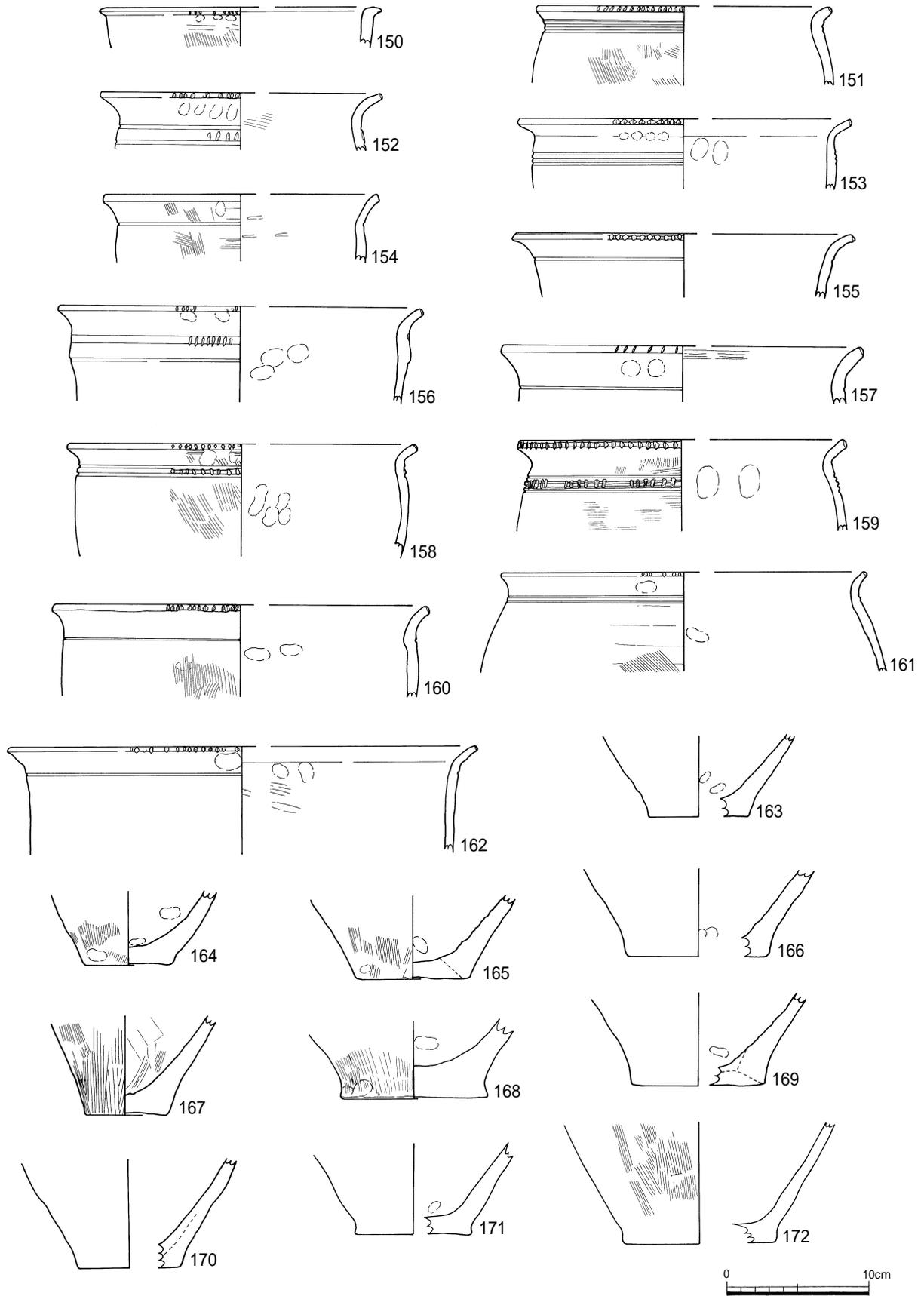
前期溝2 - 9 図 E5SD105(4)



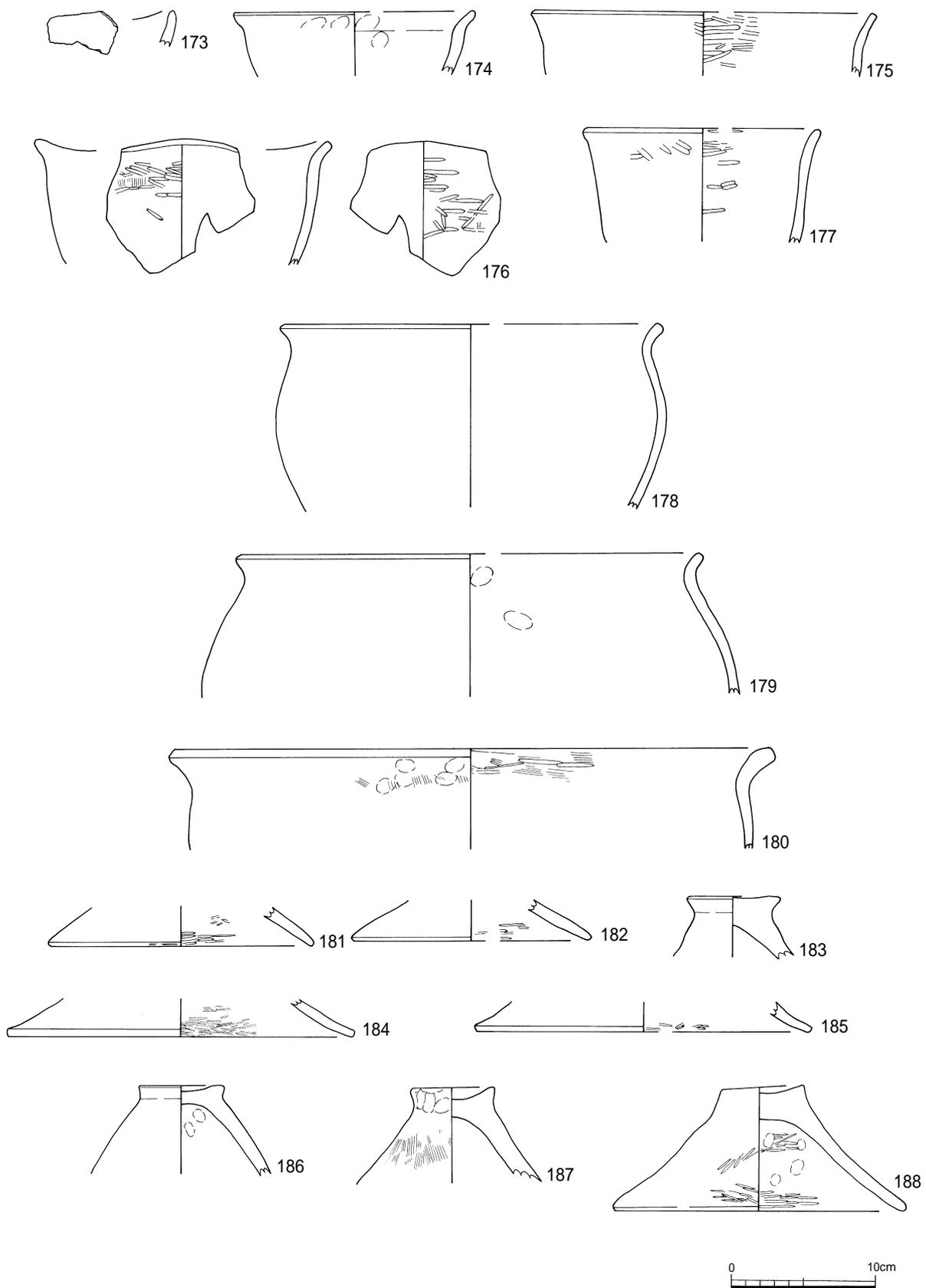
前期溝2 - 10 図 E2SD201(1)



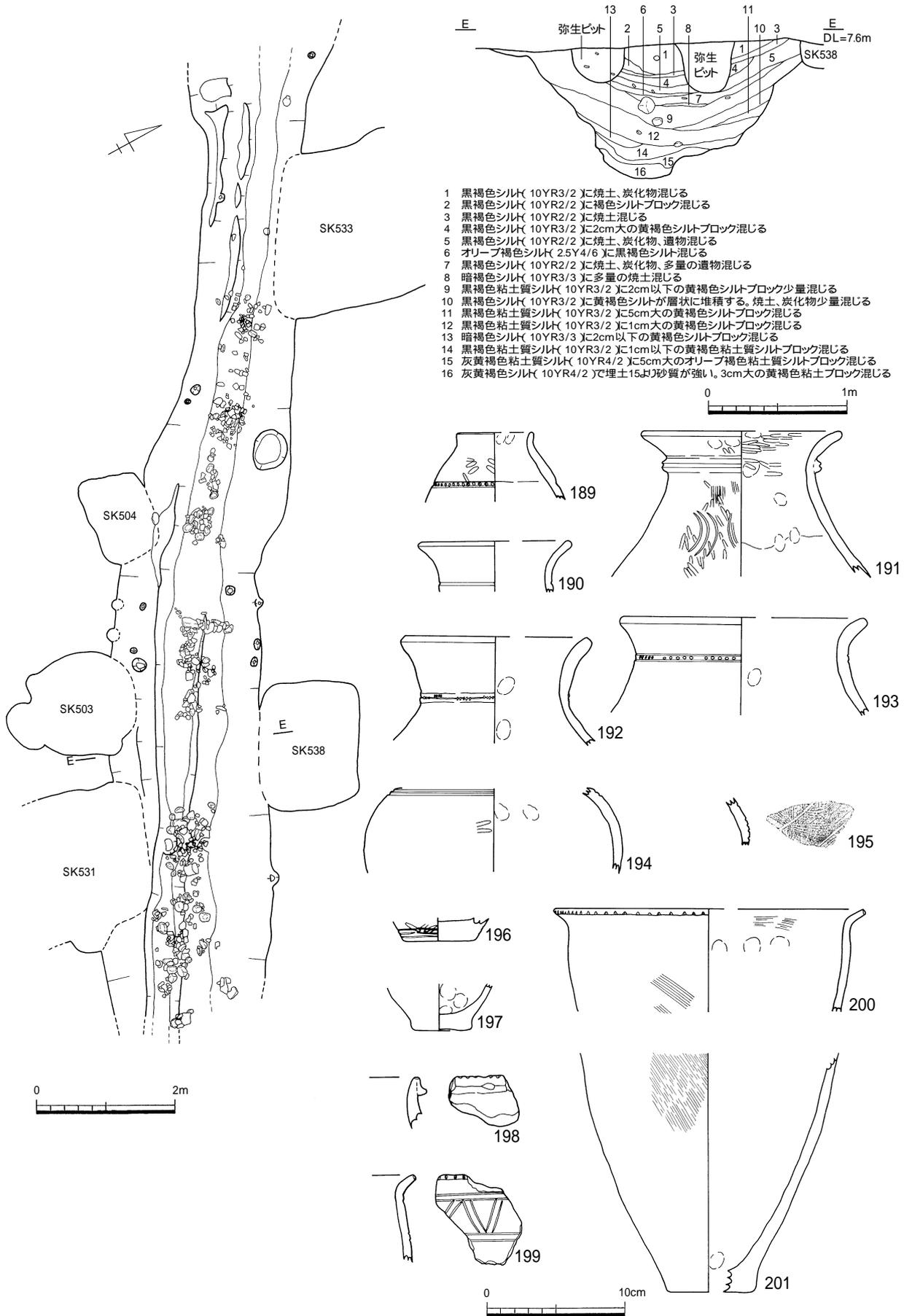
前期溝2 - 11 図 E2SD201(2)



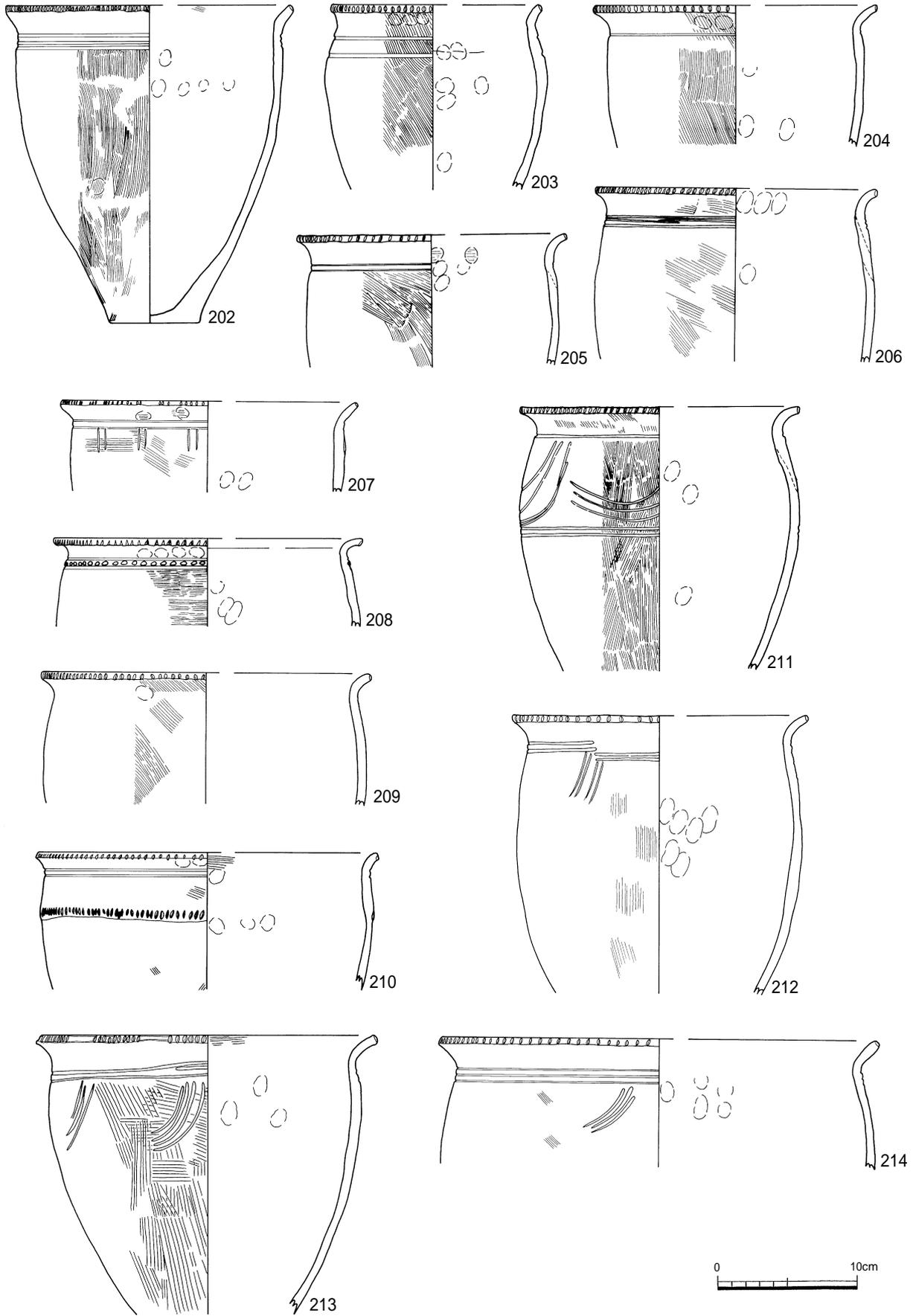
前期溝2 - 12 図 E2SD201(3)



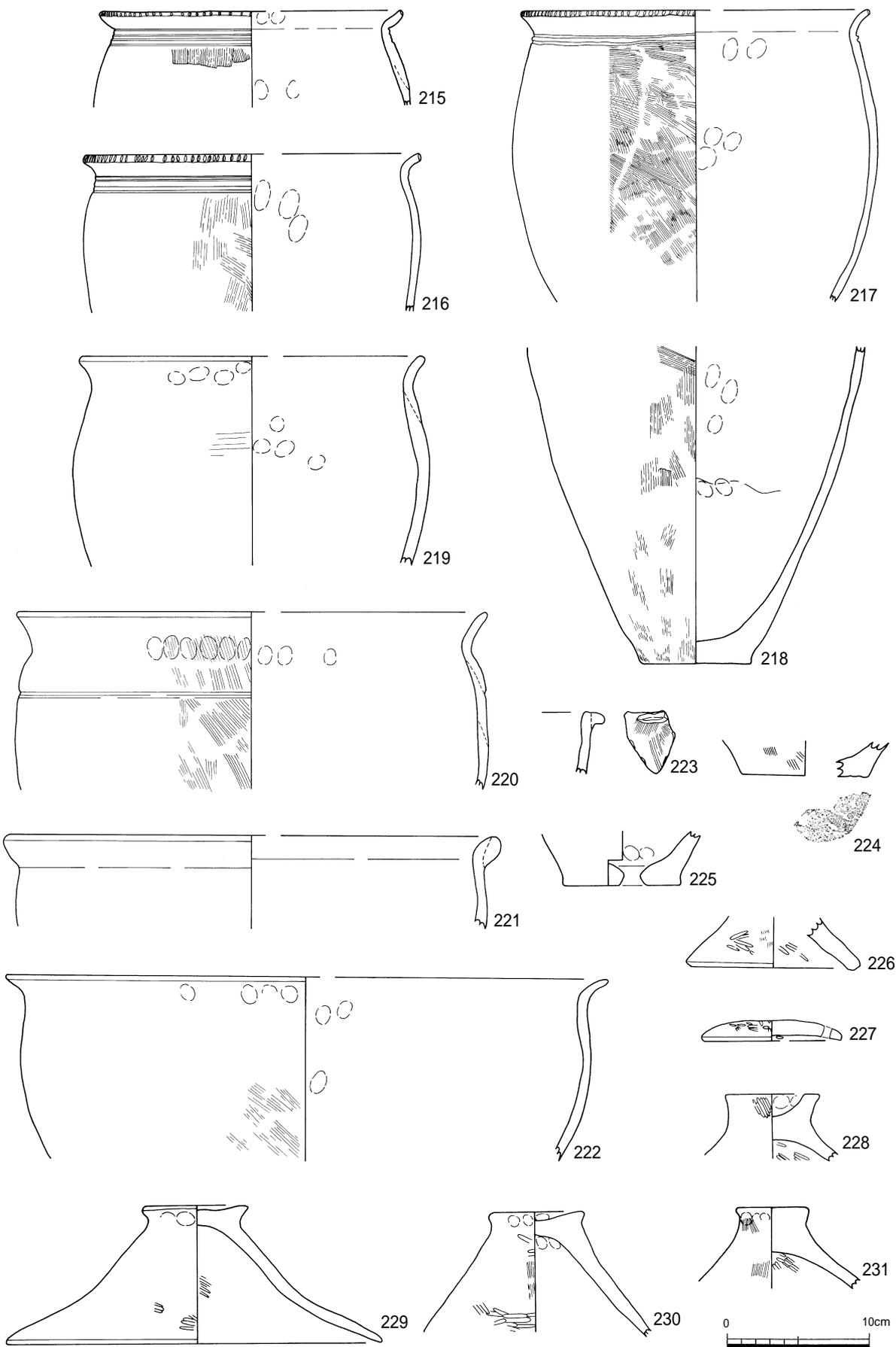
前期溝2 - 13 図 E2SD201(4)



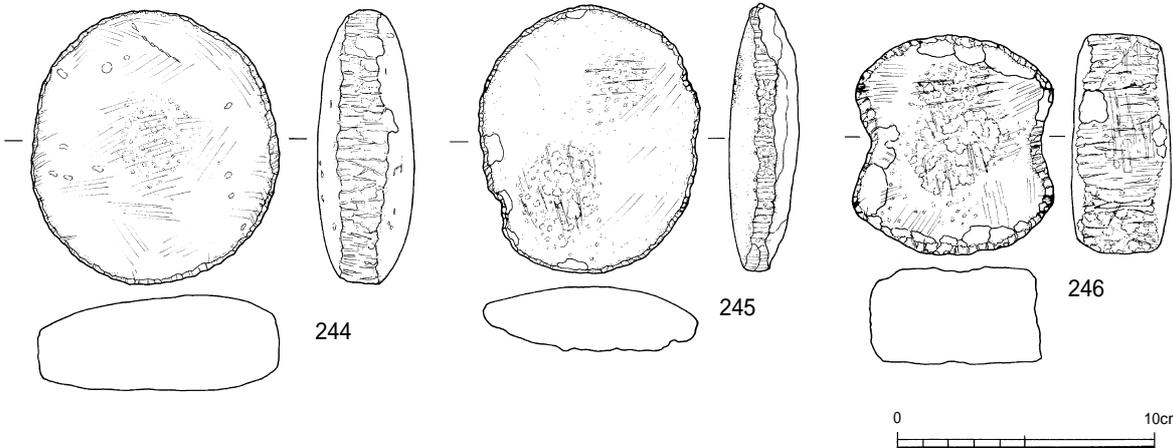
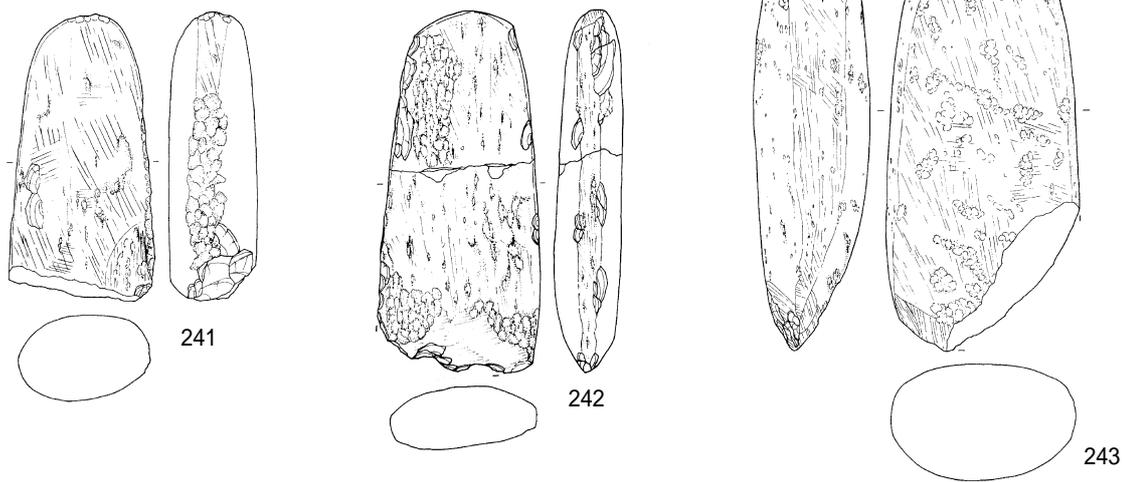
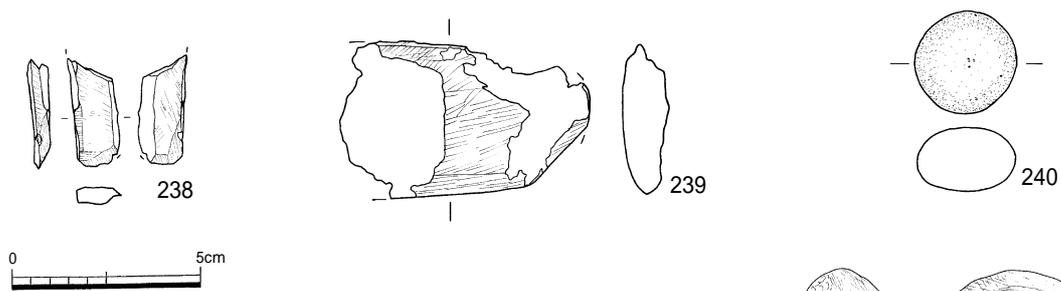
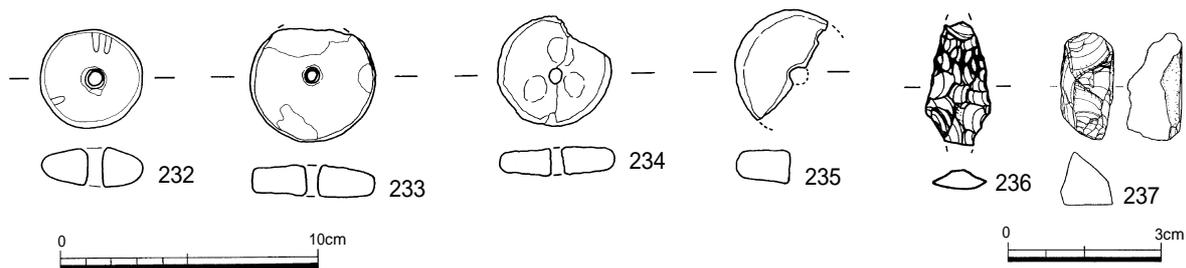
前期溝2 - 14 図 C5SD501(1)



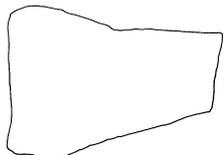
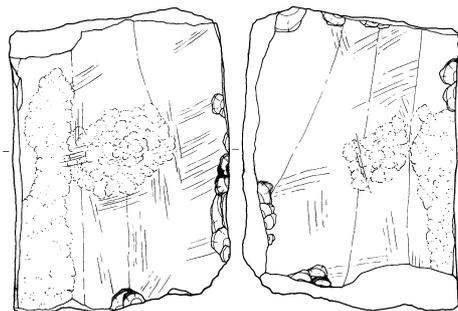
前期溝2 - 15 図 C5SD501(2)



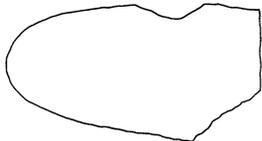
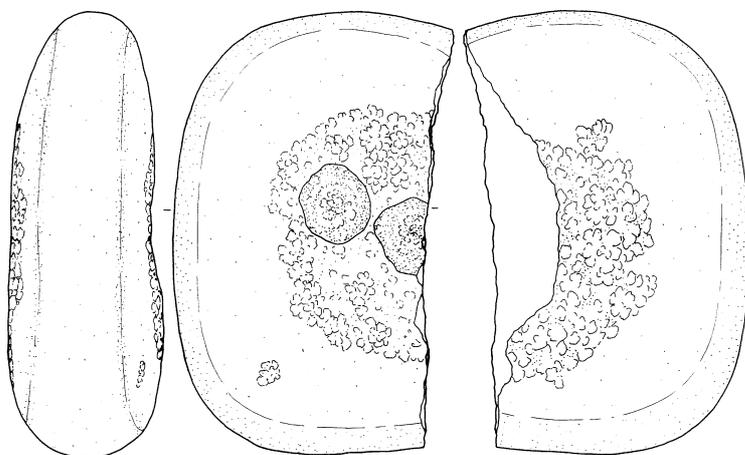
前期溝2 - 16 図 C5SD501(3)



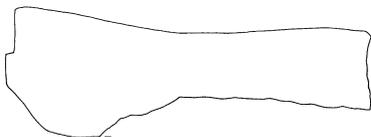
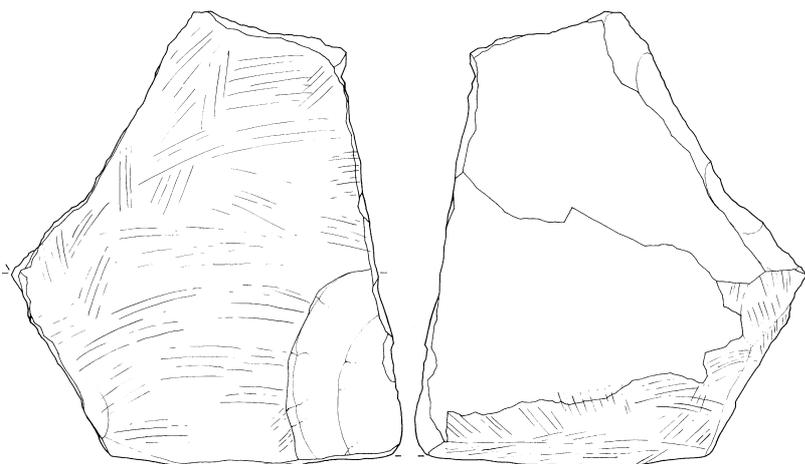
前期溝2 - 17 図 C5SD501(4)



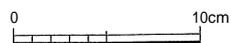
247



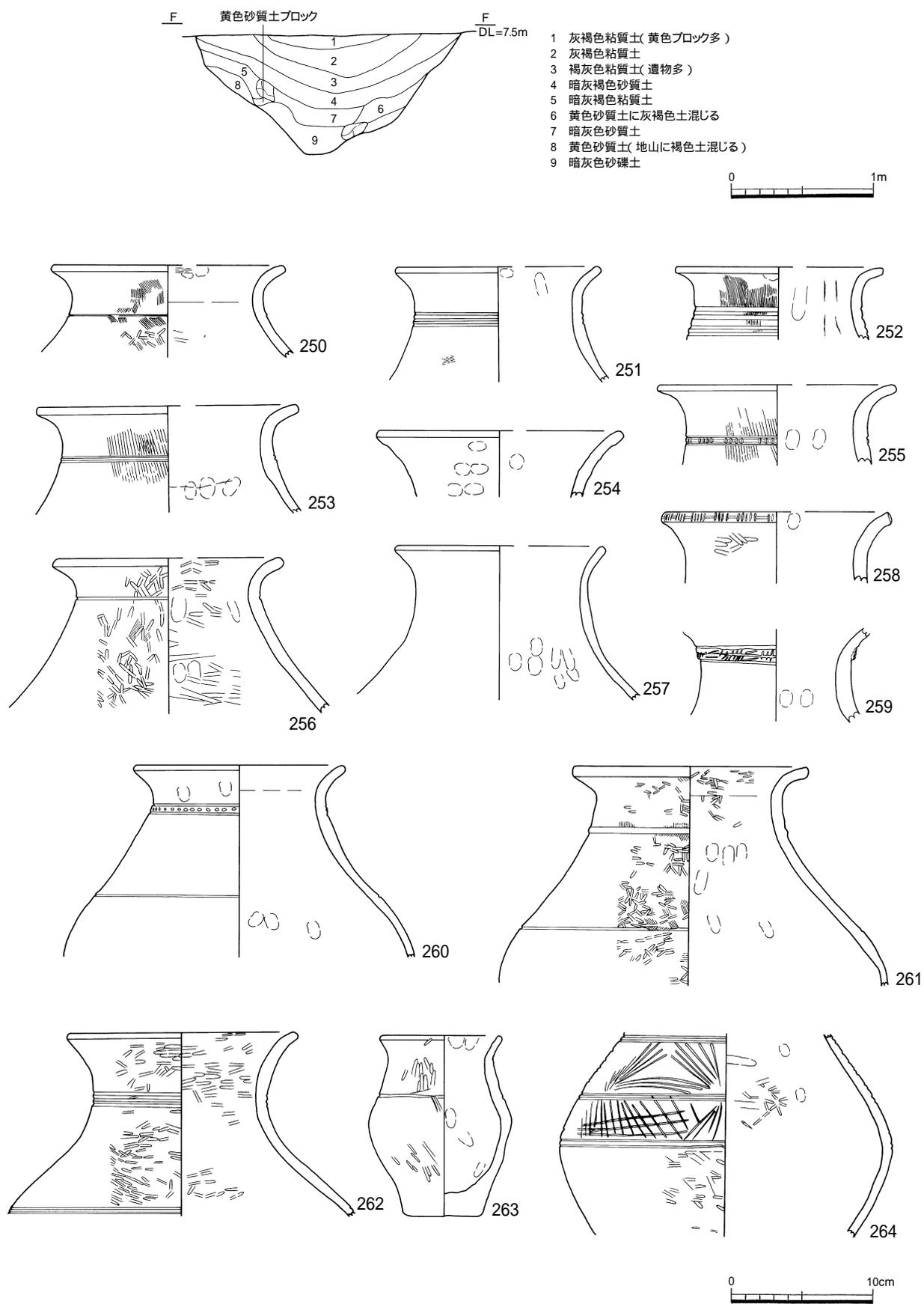
248



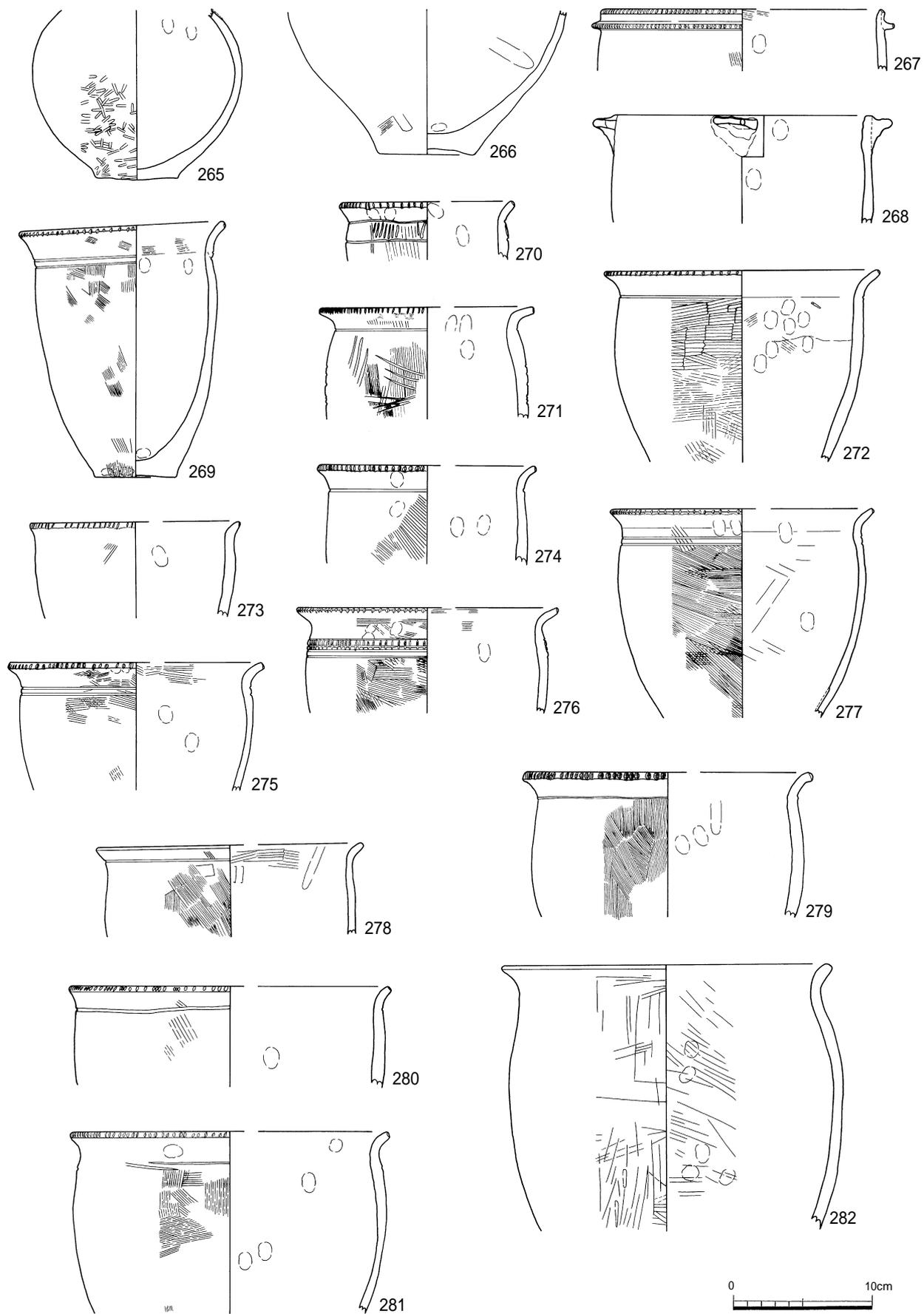
249



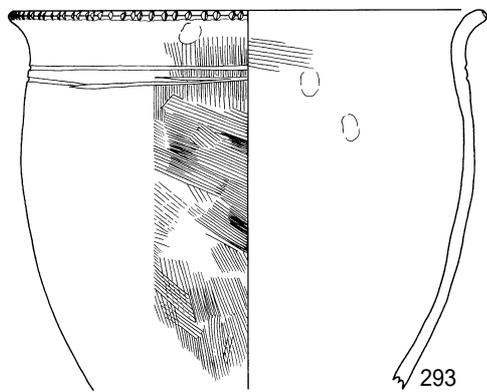
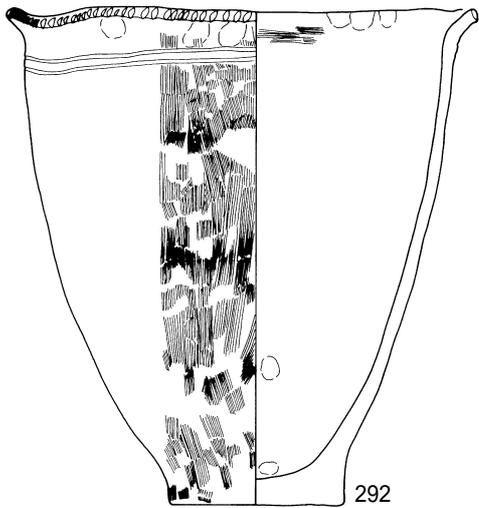
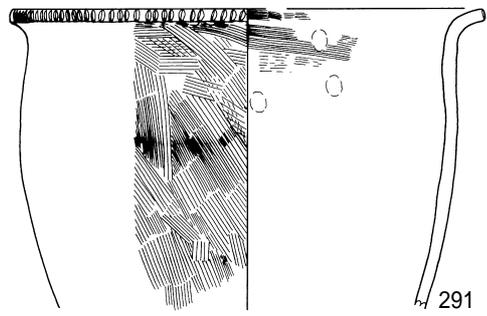
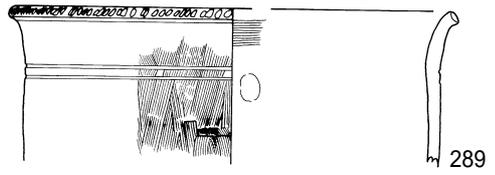
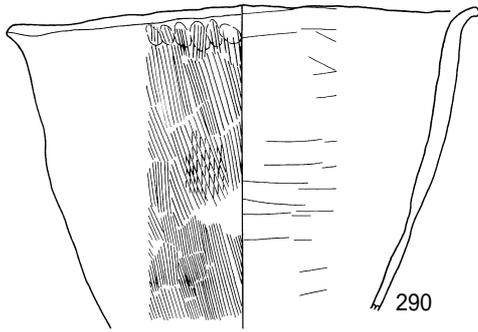
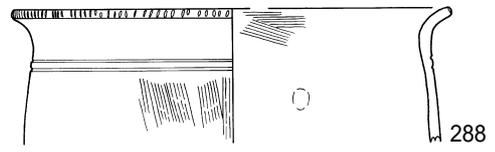
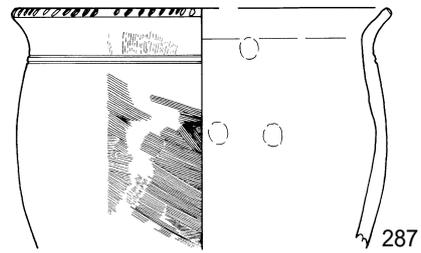
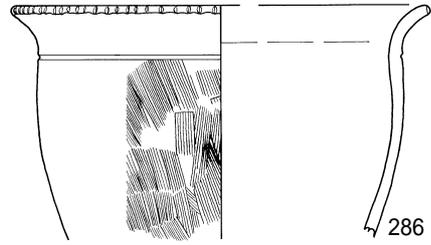
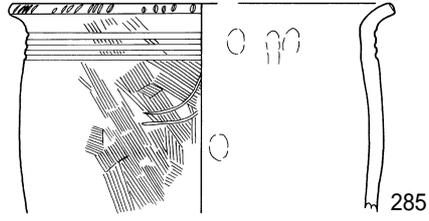
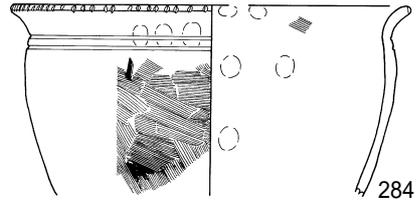
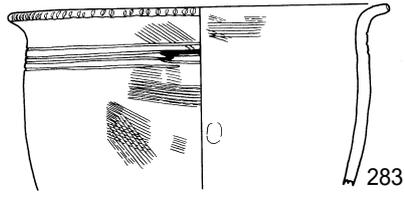
前期溝2 - 18 図 C5SD501(5)



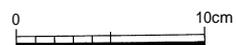
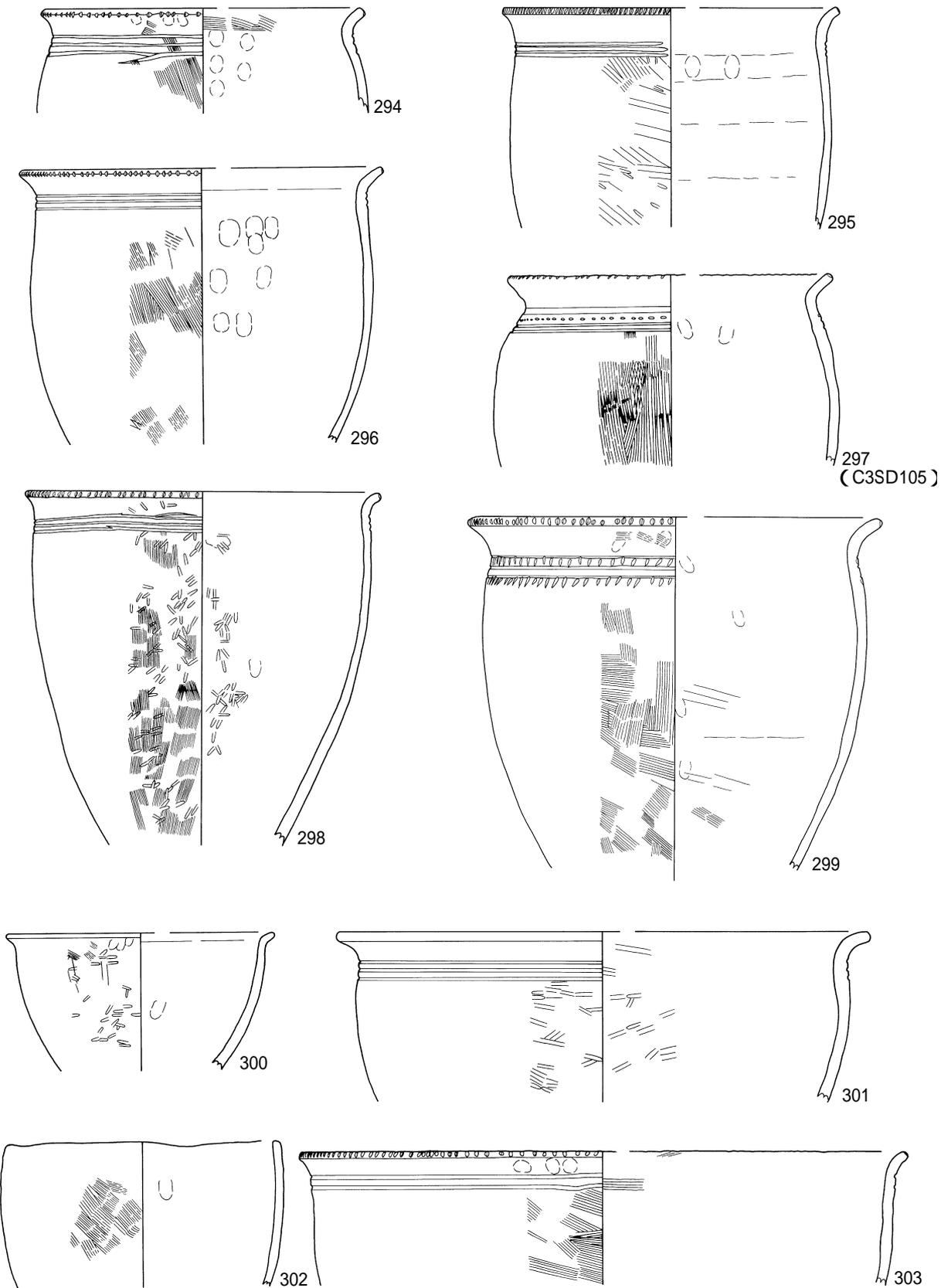
前期溝2 - 19 図 C1SD105(1)



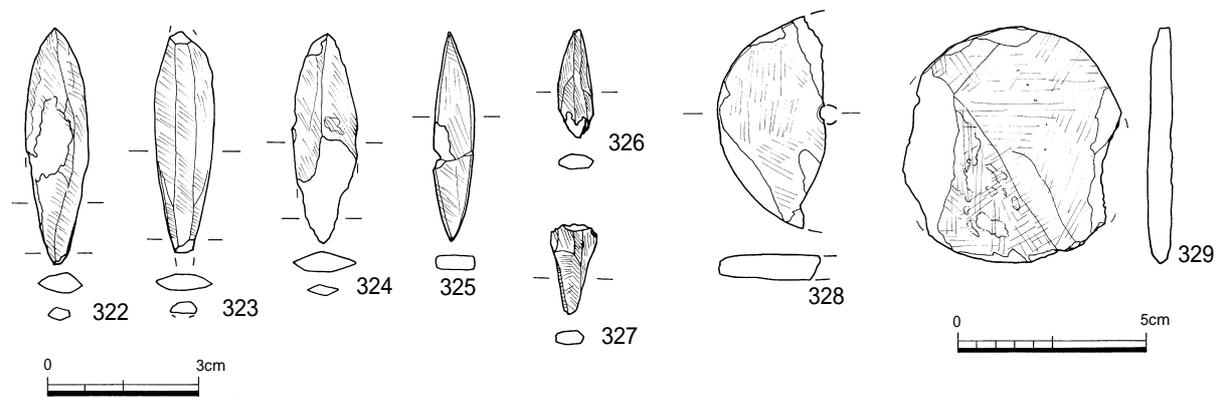
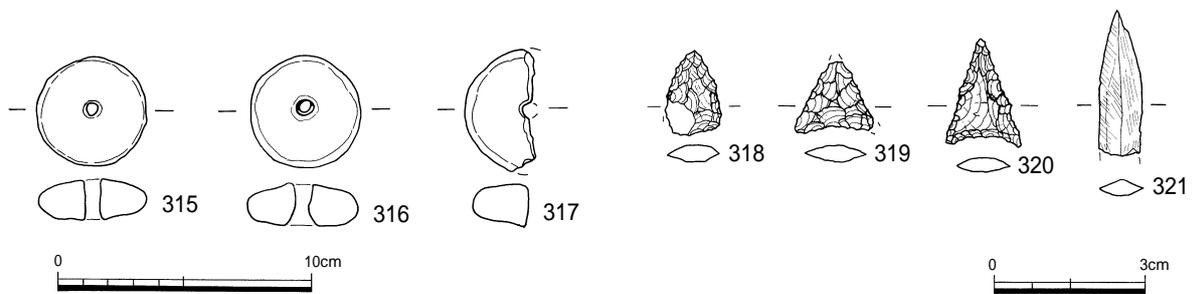
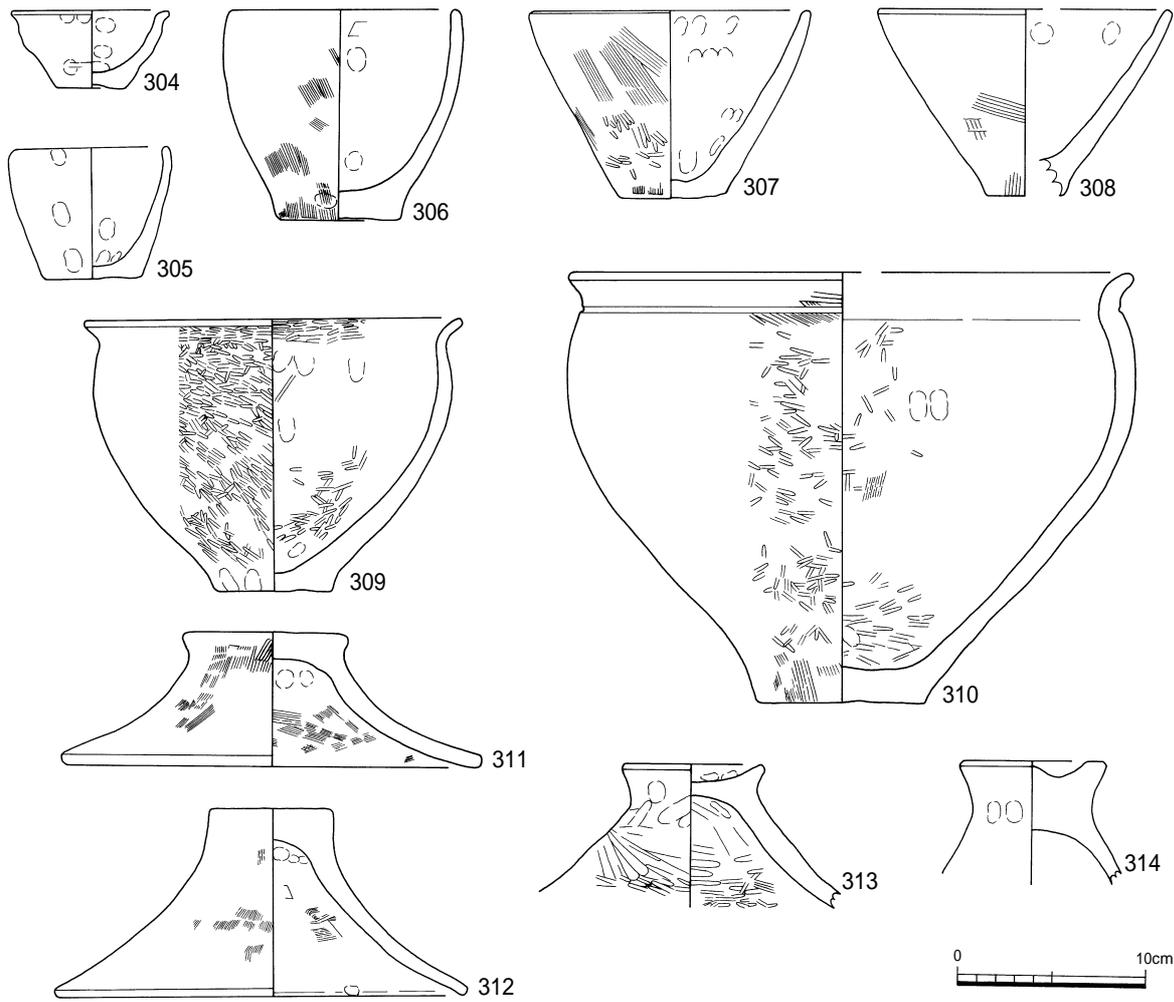
前期溝2 - 20 図 C1SD105(2)



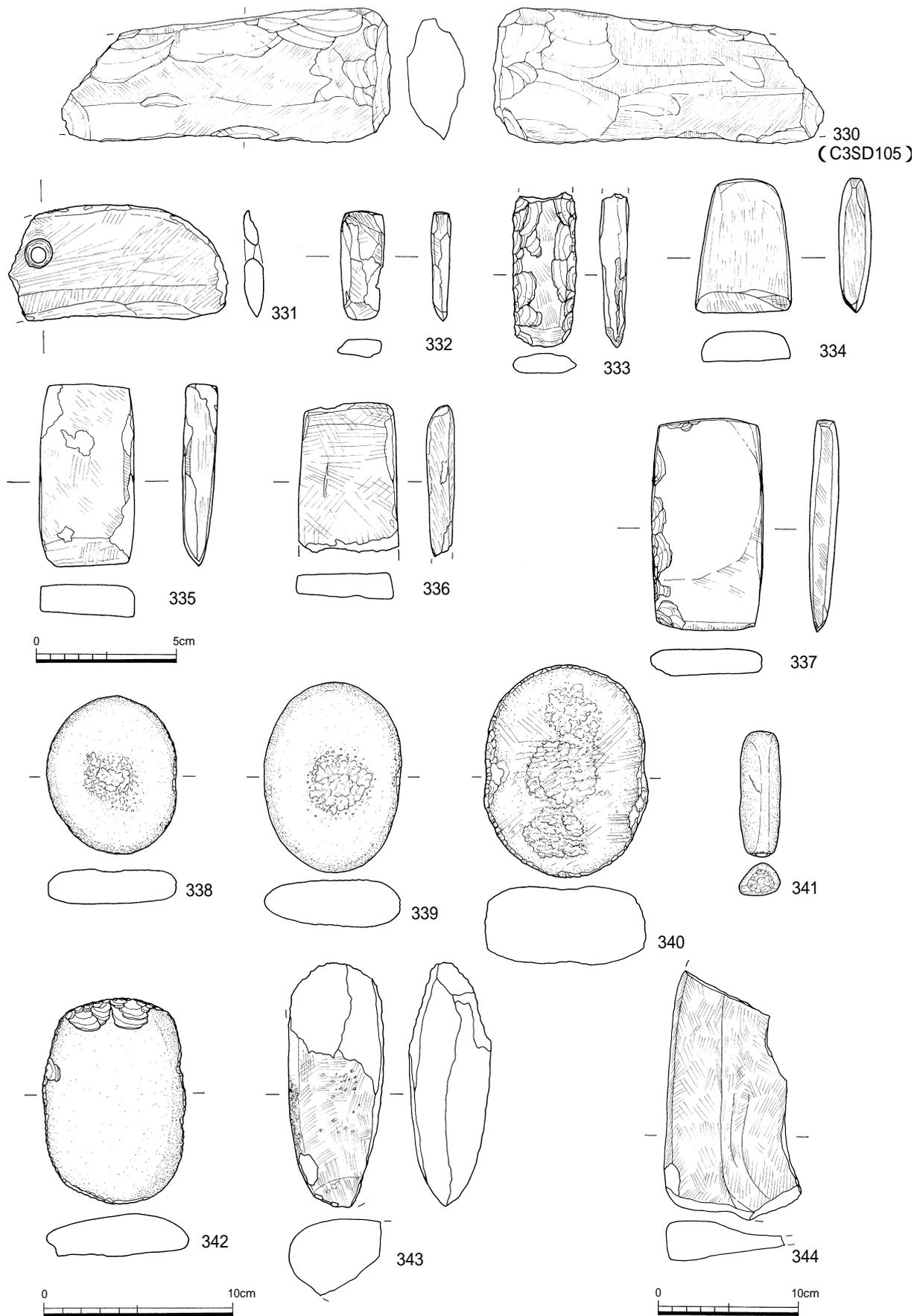
前期溝2 - 21 図 C1SD105(3)



前期溝2 - 22 図 C1SD105(4)



前期溝2 - 23 図 C1SD105(5)



前期溝2 - 24 図 C1SD105(6)

前期溝3(前期溝3-1～6区)

時期；1-3～4期 方向-

規模；検出長 93.0m × 幅 0.45～1.4m **深さ**；0.4～1.1m **断面形態**；V字

埋土；褐色シルトを基調とし、地山の黄色シルトのブロックや部分的に焼土・炭化物を多く含むところがある。

床面標高；6.4～7.2m

出土遺物；弥生土器(壺・甕・鉢・蓋・高坏)、土錘、紡錘車、石器(打製石鏃・石鎌・叩石)

所見；C5区の南端からE2区の南部を横切り、E6区へ延びる確認延長93mの溝である。C5・E2区では、南東から北西方向に直線的に延びるが、E6区で大きく北にカーブしている。C4・5、E2・E5区等に集中している土坑群を囲む環濠の可能性が高い。前期溝2の内濠に対して外濠として捉えることができよう。掘削時期を明確にすることは難しいが、1-3期には埋没している。全体に面的な削平を受けていると考えられるが、E6区で特に顕著である。E6区においては、1-4期に掘削された大型の竪穴状遺構SX601やV期の大溝1・2に切られており、これらの遺構の床面から検出されている。溝幅は、最も残りの良いE2区で1.4mを測る。

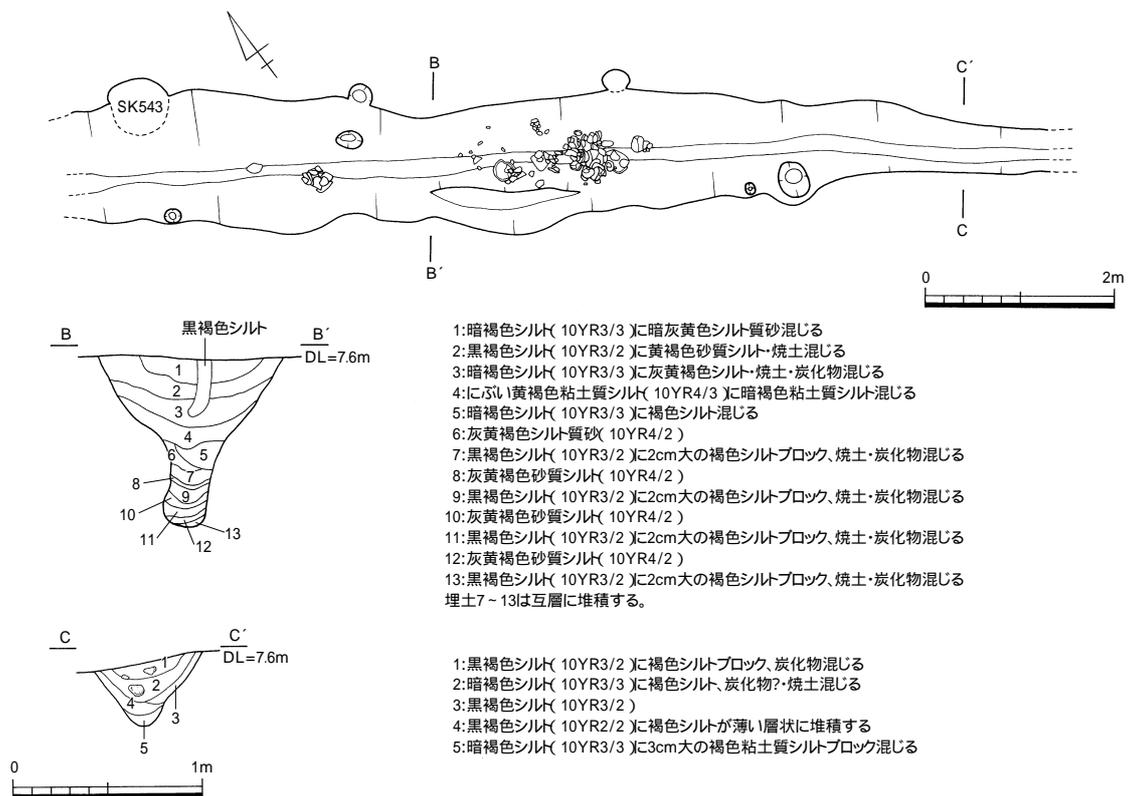
前期溝3の南端はC5区南端から現市道下に延びる形勢を示しており今次調査では押さえることができなかつたが、前期溝2と同様に、東側の流路に向かって開口していると考えた方が自然であろう。しかし、C5区南端部では、幅が50cm、深さも40cm前後と規模の著しい減少が見られ、前回の現市道部分の調査においても検出されていないことから、ほぼC5区南端部で終息している可能性も否定できない。ただ、床面標高において、C5区南部で7.2m、その西で6.64m、E2区中央部で6.58m、E5区の北部で6.4mを示している。すなわち南端部が溝中央部分よりも60～80cmも高くなっている。したがっての開口部への排水機能は、ほとんど果たし得ない。溝の北端も明確に捉えることはできなかった。E5区北端近(E6-1区参照)で、プランは終わっているが、大溝2に床面まで切られている可能性も十分考えられる。また、断面Vをなす床面の幅は極めて狭く、埋土上層にのみ地山のブロックが見られること、壁の崩落が認められないことなどからこの溝は、掘削後、極めて短時間の内に埋没、或いは埋め戻されている。

遺物は、C5区に集中しており他の調査区からの出土は僅少である。C5区の出土状況は、図示したように、検出面直下で一個所に集中するかたちで出土している。ここからは壺(1～13)、甕(14～18)、鉢(19)、高坏(20)、蓋(21)、紡錘車(22)、土錘(23～58)、石器では打製石鏃(59・60)、石鎌(61)、叩き石(63・64)、砥石(65)などが出土している。壺は、完形品やそれに近い小型壺が4点(1～4)、中型壺が6点(5～10)見られ、甕の3倍近く出土している。遺物の中で特に注目すべきは、36点もの出土を見た管状土錘である。これらの多くは長さ4～5cm、重さ40～50gの間に納まる規格性に富んでいる。当該期に属する管状土錘で、これ程量的にまとまった出土例は管見の限りでは前例を見ない。調査担当者は「並べられたような出土状況であった」としている。漁網に付けられたままで廃棄された可能性も考えられ、当時の漁撈を知る上で示唆に富む資料である。石器の石材は、打製石鏃はサヌカイト、石鎌は御荷鉾緑色岩類、叩き石・砥石は砂岩である。石鎌は刃部8cmほどの破片であるが、全面激しく被熱赤変している。破断面から意識的に破損廃棄されたものと考え

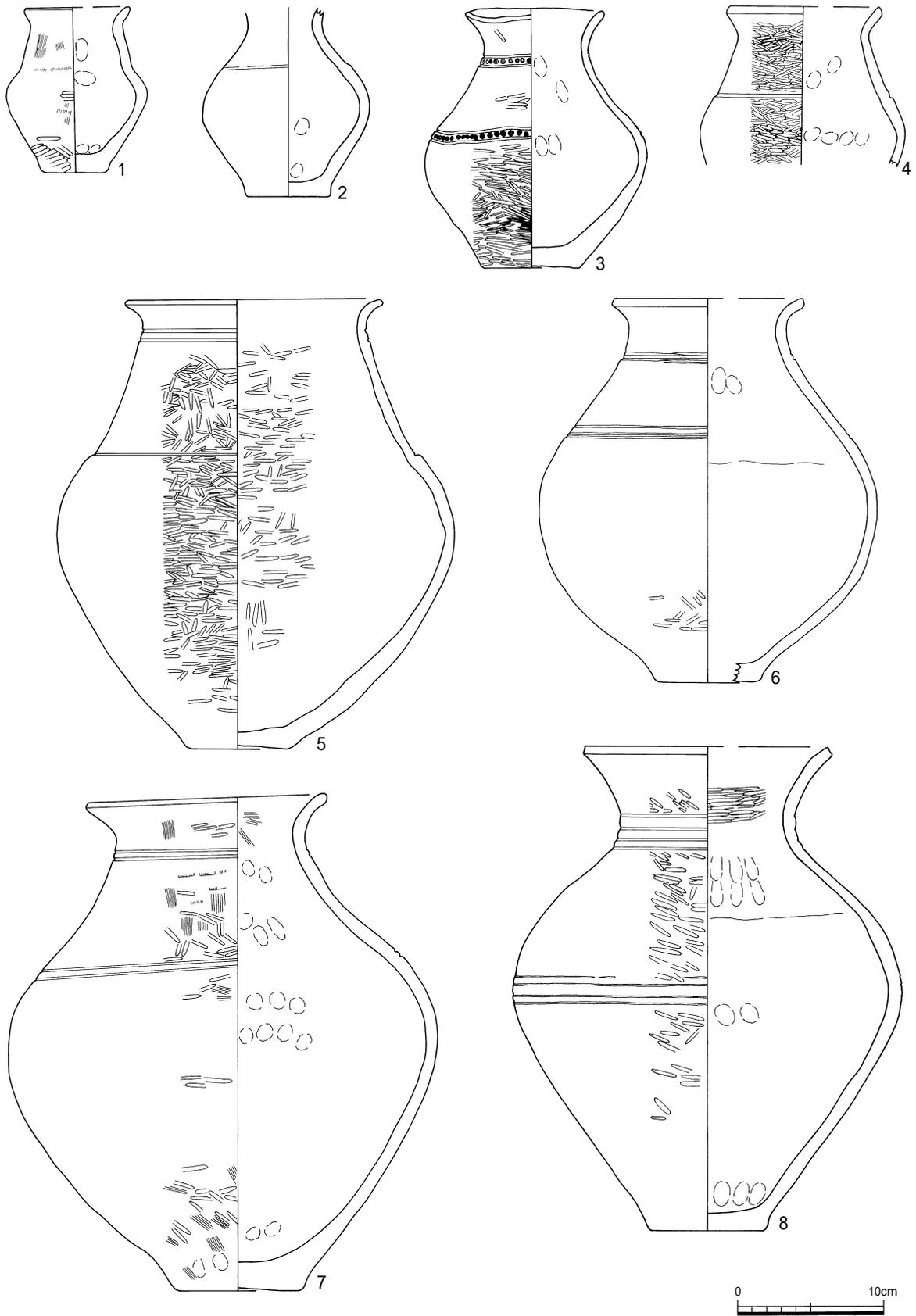
えられる。

E2区からの出土は僅少で図示可能なものは小型壺(69)と大型壺の口頸部片(68)のみである。E5区の僅少さは削平によることも考えられるが、意識的に溝の南端部分、C5区に集中廃棄された可能性も考えられる。これらの遺物は、溝3がかなり埋没した時期、南端部に廃棄された一括性の高いものである。その時期はI-3期の内に求めることができる。

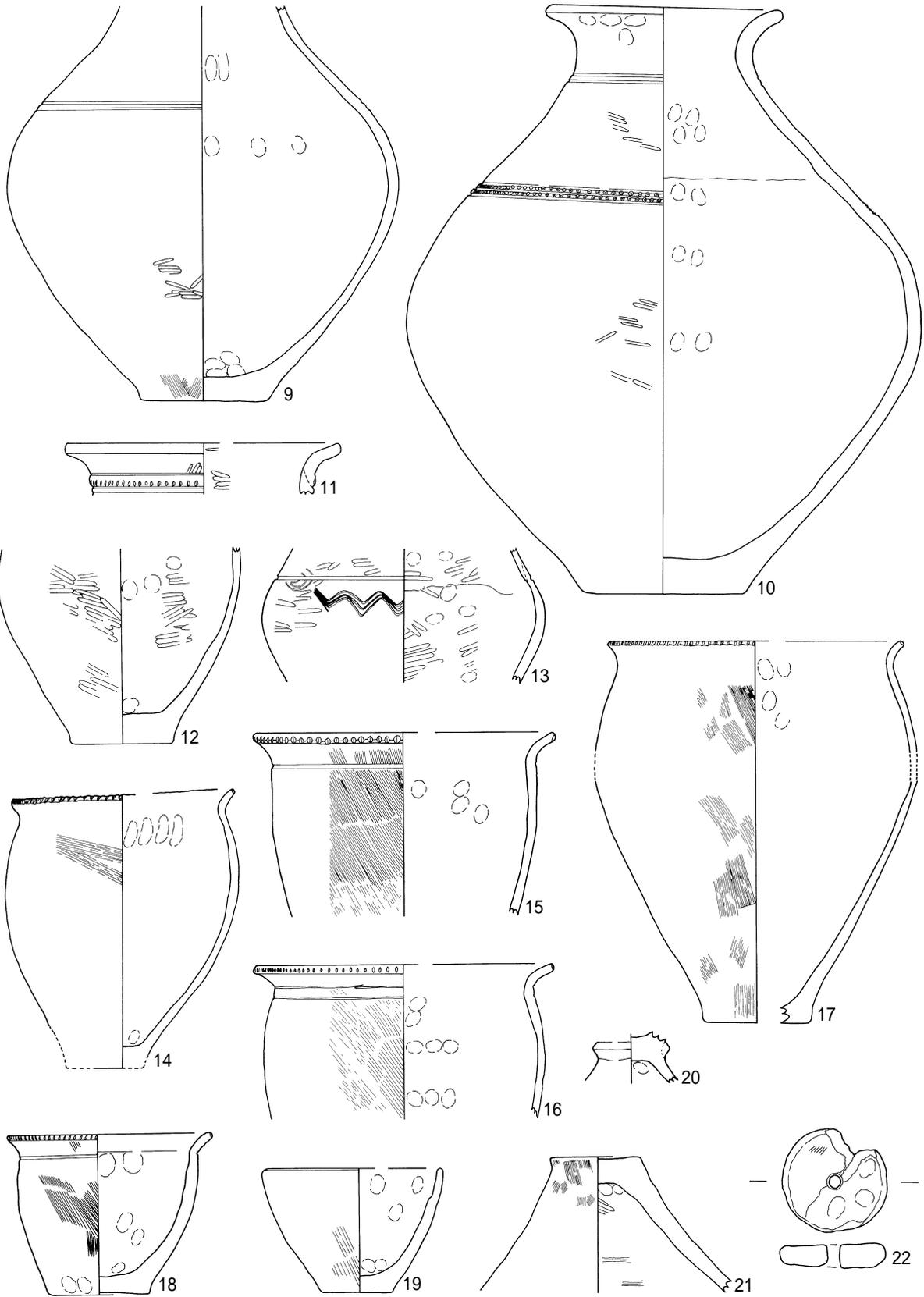
この溝は、前期溝2に比べて、遺物の出土量も著しく少なし、出土状況も異なっている。このことから短期間に埋没あるいは埋め戻されたものと考えられる。埋没時期は、両者ともほぼ同じと考えられるが、掘削時期は溝3が溝2に後出している。溝3は、外濠として捉えたが、その機能を明らかにすることは現状ではできない。弥生時代の環濠に対する一般的なイメージとしては、竪穴住居などの居住域を囲む防御的なものがある。当遺跡の場合は、環濠の外に居住域が形成されていることからそのような性格を与えることはできない。貯蔵穴と考えられる土坑群を囲んではいないが、環濠外に営まれる土坑も数多く存在する。しかも排水機能は果たしておらず、究めて短期間に埋没、埋め戻されていること。このことは、溝3が物理的側面から集落の安全を確保する機能を果たすのではないことを意味している。精神的側面から意味も視野に入れなければならない。



前期溝3 - 1 図 C5SD504(1)



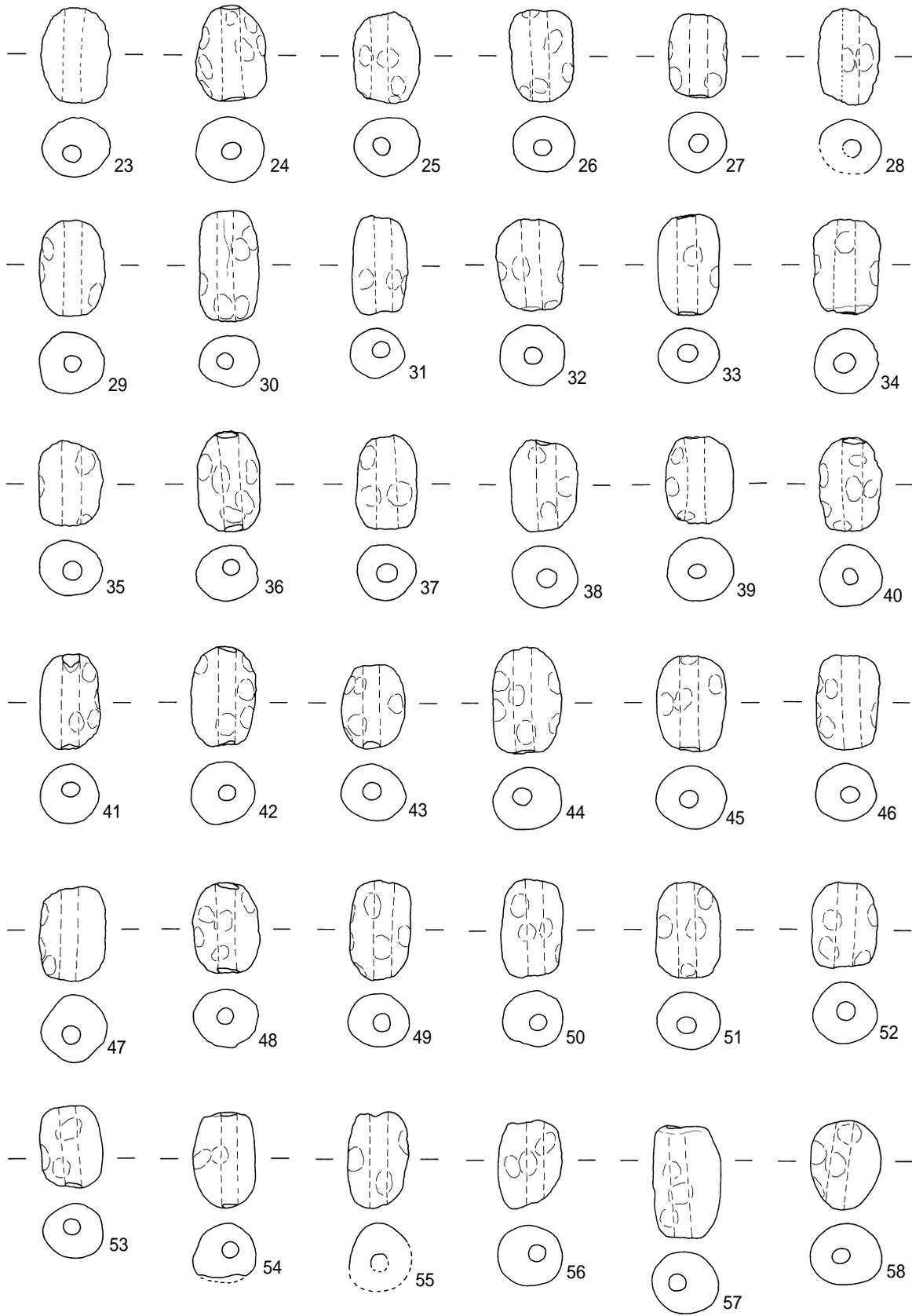
前期溝3 - 2 図 C5SD504(2)



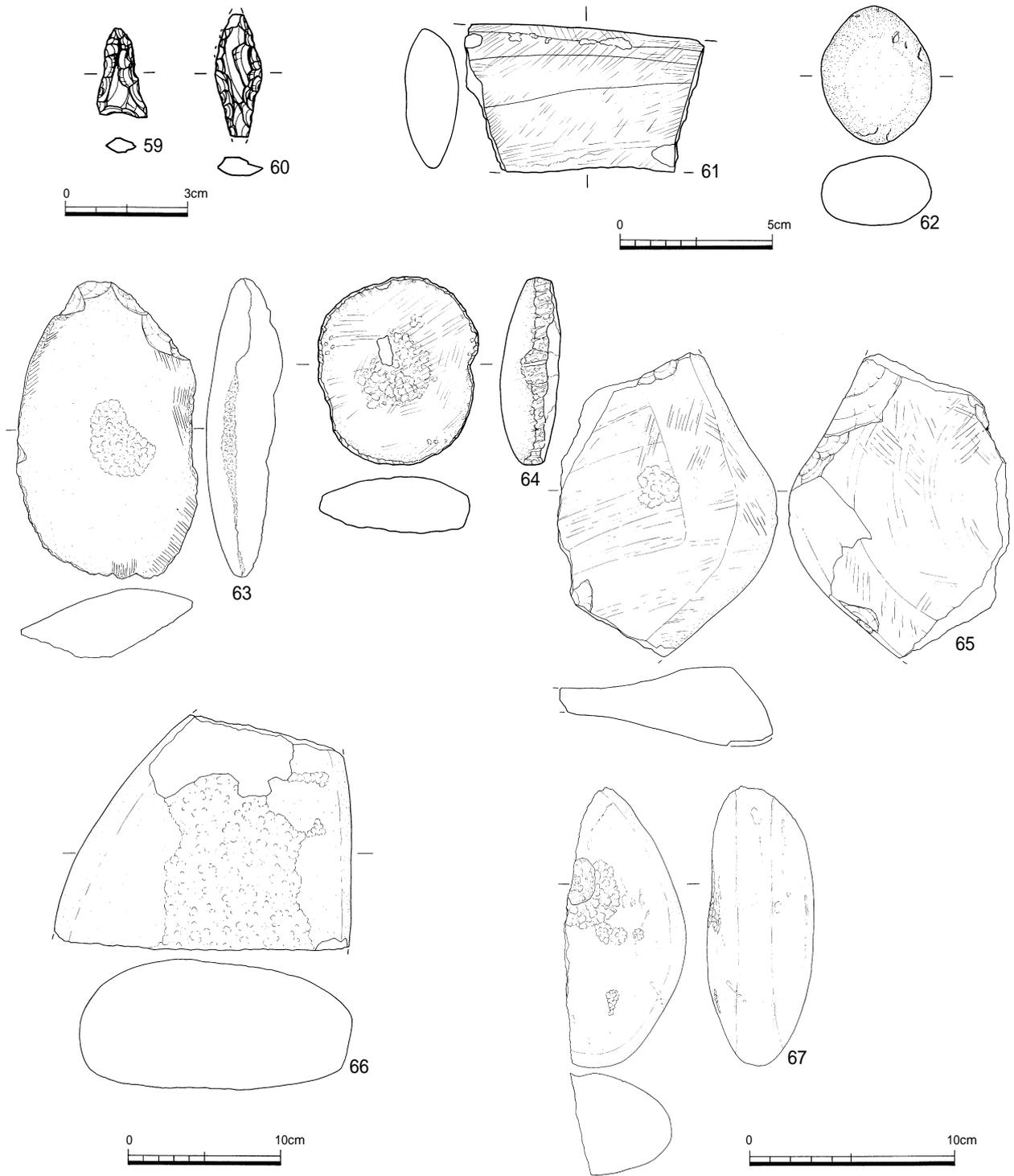
0 10cm

0 5cm

前期溝3 - 3図 C5SD504(3)

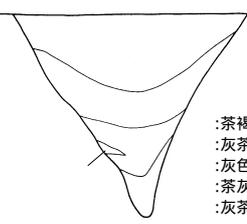


前期溝3-4図 C5SD504(4)



前期溝3 - 5 図 C5SD504(5)

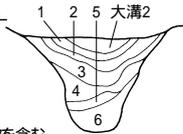
A
DL=7.7m



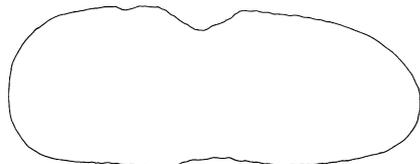
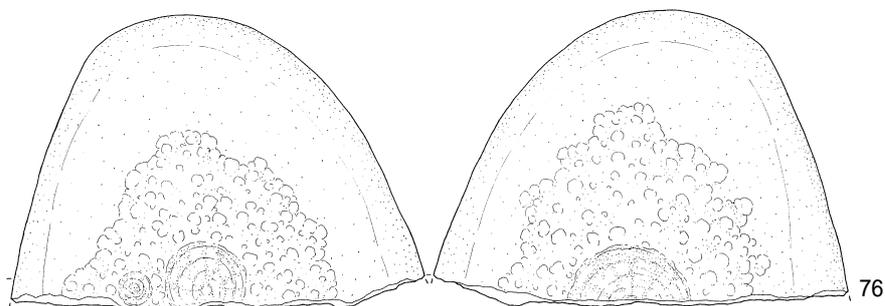
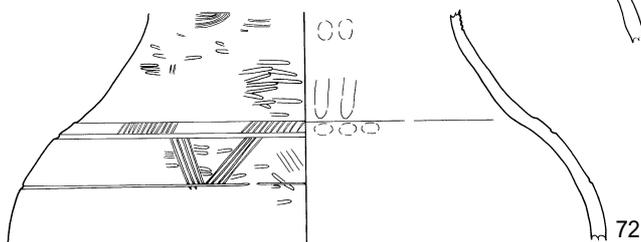
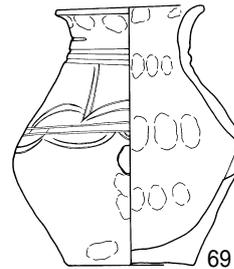
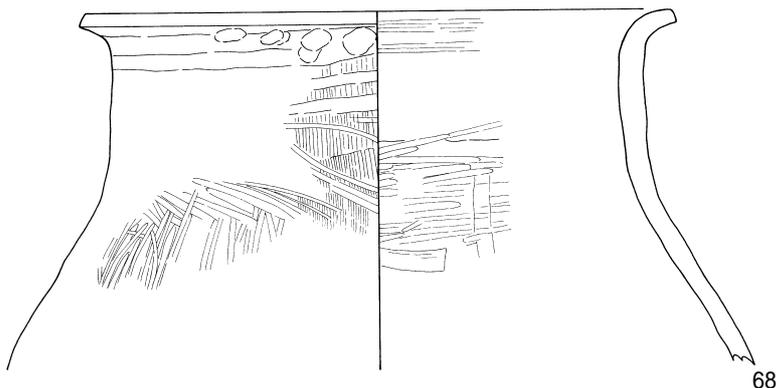
:茶褐色粘土に黄色シルトのブロックを含む
 :灰茶色粘土質土
 :灰色砂
 :茶灰色粘土
 :灰茶色粘土

(第3分冊E2-1図参照)

D
DL=7.0m



1:暗褐色シルト
 2:暗褐色砂
 3:暗褐色シルト質砂
 4:灰黄褐色シルト
 5:暗褐色砂
 6:にぶい黄褐色シルト 黄褐色シルト混じる



前期溝3-6図 E2SD206・E6SD612

大溝1(大溝1-1～17図)

時期；弥生 I-5 ～ ・IV～V **方向**；北～南、南東

規模；検出長 225m × 幅 2.2～3.5m **深さ**；0.52～0.7m **断面形態**；U字状

埋土；シルト、砂礫主体

床面標高；7.2～6.67m(D1区～B4区)

接続；D1SD1009、D2SR209、E3SR301、E6SR601、F5SR503、B4SD420・421

出土遺物；弥生土器(甕、壺、鉢、高杯、石器)

所見；調査区全体の東限を流れる溝跡である。北部のD1・2区、E3・6区まで南北に延び、F5区からB4区にかけて南東方向に延びる。各調査区内においての特徴を以下に述べる。大溝1の北端にあたるD1区では、大きく二つのレンズ堆積が認められ、一つは黄褐色～黒褐色のシルト層で構成されるD1SD1007の堆積と、その堆積層を切るようにD1SD1009が堆積している。D1SD1009は黄灰色～灰褐色を呈したシルト及び砂、砂利層で構成されており、中層の8・9層に遺物が多く含まれる。西側は一部、テラス状を呈し、地山の黄色シルト層上面に黄色シルトをブロック状に含んだ黒褐色粘土質シルトの堆積(5層)が認められ、一次堆積層として捉えることができる。また、SD1007の東側の肩口には、黒褐色シルト層(18層)が認められ、弥生時代前期の土器を包含していることから、弥生時代前期には、溝状の地形を呈していたものと思われる。SD1009では前期溝2の延長を底面で確認しており、北部に位置する前回調査のLoc.44C区で検出した前期溝(SD1)と弧状に繋がるものと思われる。出土遺物は弥生時代後期の土器が主体を占めており、石器では、大溝1-1図1～10の石鏃が比較的多く出土しており、サヌカイト製の打製石鏃が中心である。他には環状石斧(11)、石錘(12)、石棒(13)などが見られる。SD1007は弥生時代前期末(期)～中期(期)の土器片が多く含まれており、堆積状況、及び方向から見て、南部のE3区内でE3SR302(大溝2)に合流するものと思われる。

D2区(大溝1-2図)でも基本的な堆積状況はD1と同じであり、SR207(D1SD1007と接続)を切るように、SR209の堆積が確認できる。基本的には上層がシルト～砂質シルトであり、中～下層にかけては砂～礫が堆積している。上層では3層、下層では11層の砂礫層に遺物が多く含まれる。出土遺物は弥生時代中期の壺(16・17)が下層11層の床面から出土しており、後期の壺(14)、甕(18)、高杯(19～21)が上層1～3層で出土した。また、溝の底面で前期溝2の延長を確認した。

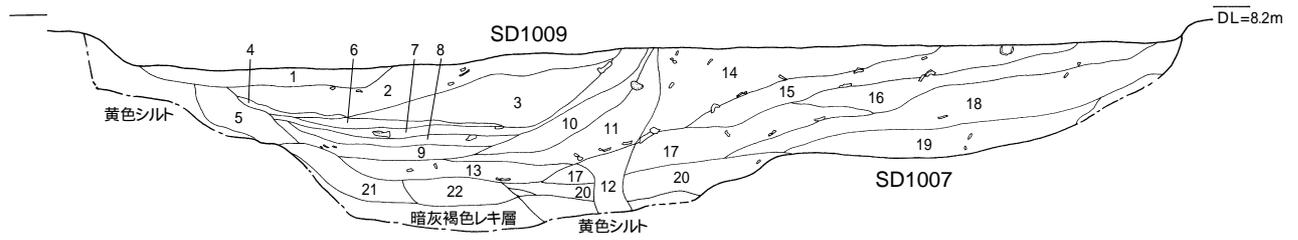
E3区(大溝1-3図)では、調査区中央部のセクションを見てみたい。ここでのSR301の溝幅は2.5m、深さ0.6mを測り、上層の砂礫層(1層)と、中～下層の砂礫層(4・10層)に遺物が含まれる。これらのレンズ状の流水堆積の両側は灰褐色～暗褐色を呈したシルト層が堆積しているが、セクションの東側では地山の黄褐色シルトの堆積が認められ、その上にI・層が堆積している。このI・層からは弥生時代前期末～中期初頭の遺物が認められ、この段階には、溝状の地形を形成していたものと思われる。SR301からの出土遺物は弥生時代後期(V-1～3)の時期の遺物が主体であり、壺(22～26)、甕(27～30)、高杯(32～34)などが出土している。壺は長頸壺(22～24・26)が多く、甕は、「く」の字に外反し、胴部外面にタタキ目を残すもの(29)が見られる。高杯は外反するタイプ(32・33)が主体である。34の高杯は体部が大きく外反し、口縁端部は僅かに拡張が認められる。搬入品

と考えられる。石器大溝1-4図では小型の扁平片刃石斧(40)、磨製石斧(41~43)、石包丁(44)、砥石(45)、叩石(46)など多量の石器が出土している。47は石鎌であり、両主面に使用痕光沢面が認められ、線状痕は刃縁に直交する。石質は片岩系である。E6区では調査区の東部に位置する。調査区南端のセクションを見ると、溝の幅は3.5m、深さ0.25~0.65mを測る。前期溝3を切る。断面形は開いたV字を呈するが、床面中央部の落ち込みは前期溝3の底であり、大溝1としての断面形は緩やかなU字状を呈する。上層は1~4層がシルト質土、中・下層は砂、砂礫層が堆積しており、遺物は中層の5・6層で集中して出土が見られた。出土遺物は、弥生時代前期末葉~中期前半のものと、中期末~後期前半にかけてのものが主体を占める。壺は大溝1-5図に図示したが、弥生時代前期末~中期初頭のものが主体を占める。口縁端部にキザミが施され、頸部にヘラ描き沈線や櫛描沈線が施されるものが見られる。56の口縁部は粘土帯を貼付し端部に面を作り、斜格子状のキザミを施す。内面は数条の沈線を周縁に巡らせ、等間隔に縦位のキザミを施す。60は、口縁部外面に粘土帯が貼付され断面四角形を呈する。凸部にキザミを施す。胴頸部には櫛描沈線と波状文が認められる。63の頸部には簾状文が連続して施される。甕は大溝1-6図(67~83)に図示したが、中期末から後期にかけてのものが主体を占める。口縁部に凹線文が施されるもの(73・76・78)、胴部外面にタタキ目が残るもの70・80などが見られる。81は頸部が延び、口縁部は外反する。胴部と頸部の境目にヘラによる沈線が施され、頸部外面には縦位のハケ調整が施される。前期末葉の甕である。84~88は底部片であるが、84は外面にハケ調整が認められる。88は底部脇から外底面に向かって2個一単位の円孔が配される。大溝1-7図は鉢・高杯・蓋を図示した。鉢もバリエーションがあり、平底のもの91・92・95、脚が付くもの93・94・96~97がある。104~120・122・123は高杯であるが、体部が内湾するもの104や外反するもの105・106が見られる。106は体部全面にヘラミガキが施される。107は水平口縁の高杯であり、口縁端部に縦位のキザミが施され、口縁直下には貝殻による施文が施される。108~123は脚部であり、円盤充填のタイプ108・109や中空のタイプ117・118・122・123が見られる。121は土製支脚であり、弥生時代終末期のものと考えられるが大溝2全体から出土した遺物の中で当該期の遺物はこの1点のみである。また、今次調査の周辺調査区での出土も皆無であった。124・125は蓋である。124外面にはタタキ目が認められる。石器は大溝1-8図~10図に図示した。128は有柄式石剣の基部であり、粘板岩製である。129は紡錘車で粘板岩製であり、非常に薄い作りである。130は石鎌であり、頁岩製である。石包丁(大溝1-8図131~142)では磨製と打製のものが見られる。9図143~145は石錐である。144は砂岩製であり、両端部を錐部として使用している。145は頁岩か粘板岩系であり、基部が若干細くなり先端は尖る。146~148はノミ状の加工斧である。自然円礫の先端を研ぎ使用している。149は小型方柱状片刃石斧であり、石質は層灰岩である。151~156は磨製石斧であり、156は緑色岩で形態的には太形蛤刃石斧である。157~159は扁平片刃石斧であり蛇紋岩製である。何度かの浚渫が認められ、この溝の最終埋没時期は弥生時代後期であると考えられる。160・161・164は緑色岩の太形蛤刃石斧であり164は研磨前の敲打痕が認められる。162は環状石斧であり緑色岩製である。穿孔部が表裏面でズレが生じる。163は石錘ではないかと思われる。中央部の抉り部付近は摩耗しており、紐ズレの可能性も考えられる。166は砂岩の叩石である。以上、E6区では石器がまとまって出土している。168は青銅器であり、先端にノミ状

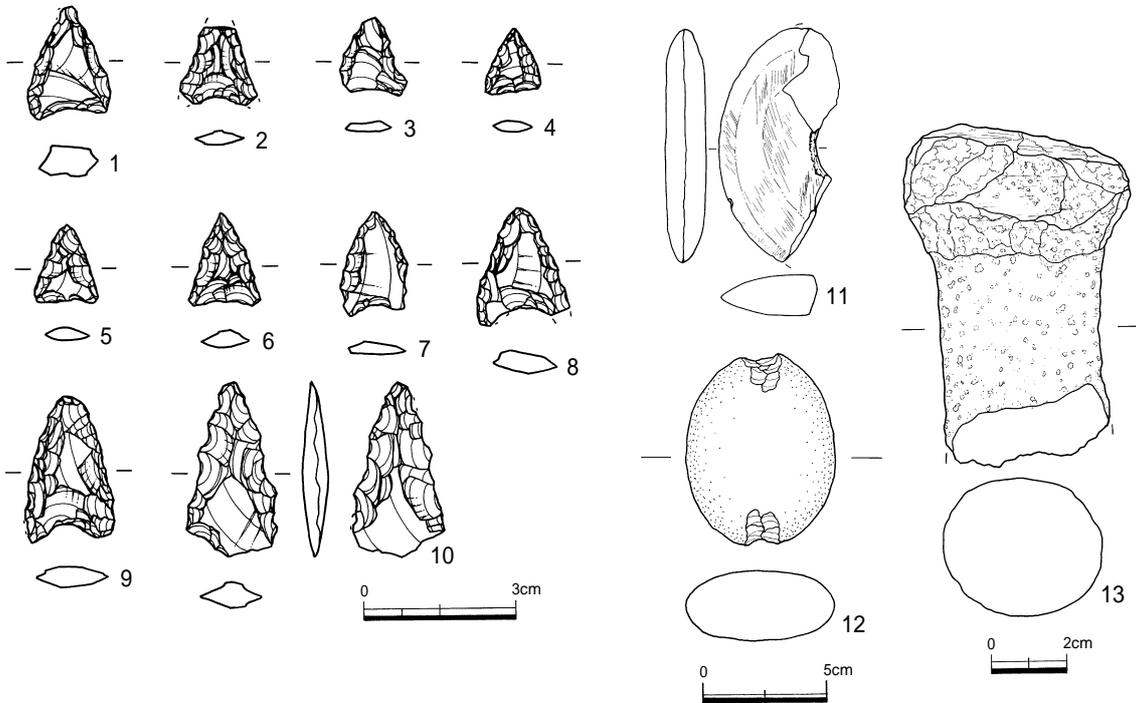
の加工が認められる。幅狭の銅戈の脊部か銅鏃の一部の可能性も考えられるが、形状の復元は困難である。

大溝1はE6区南部でやや蛇行しながら南部のE9・F5区に続く。E9区は現況道路であり遺構上面は削平を受けていた。F5区では2条の溝が平行するが西側の1条は大溝2のE6SR602からの分岐でありF5SR503としてB4区まで並行して続く。E6SR602からの接続であるF5SR503の堆積はシルト層と砂礫層で構成されており、中層の砂礫層中に遺物を多量に含んでいる。断面形はU字形を呈し、幅3.0m、深さ0.7mを測る。床面でB4区から続く前期溝4を検出したが、F5SR503により切られる。出土遺物の帰属時期は弥生時代後期が中心であり、土器では長頸壺(大溝1-12図169～172)や、頸部が間延びする甕(174～176)、鉢(177・178)が見られる。石器ではサヌカイト製の石鏃(185～187)、小型石斧(188・189)などの出土が見られた。190は粘板岩系の石材を使用した石剣と思われる。大溝1のE6SR601から接続するF5SD504は幅3.1m、深さ0.6m前後を測り、シルトと砂礫層の互層堆積である。中層から下層中に、中期末の遺物(大溝1-13図192～194・197)の出土が見られ、上層の3層から後期前半(V-2・3期)の遺物(195・198～200)がまとまって出土した。197は器台か広口の壺の口縁部と思われるが、口縁端部は拡張され面を成し、外面に凹線文と山形文が連続して配される。内面は竹管状工具による刺突文が連続する。B4区ではF5区から続くB4SD420・421の2条を検出する。北西から南東方向に延び調査区外に続く。F5区との境に道路・水路があるが前回調査地点のLoc.34Bに該当し、大溝1の続きであるSD1を検出している。B4SD420はF5SD504と接続し、南東方向に延びる。幅2.1～2.6m、深さ0.52m前後を測り、断面形は東側が緩やかなU字形を呈する。シルトと砂礫層の互層堆積であり、1-3層、-4層、-3層の砂礫層中に遺物が多く含まれる。また、B4SD420の両肩には暗褐色を呈したシルト層の堆積が認められ弥生時代前期の土器が出土している。出土遺物は、弥生時代前期末～中期末の遺物が中心であり、壺では頸部にヘラ描沈線と刻目突帯を施すタイプ251・253・255・257など弥生時代前期末の土器の特徴を持つものが見られる。257の口縁部内面には断面四角形の粘土帯を巡らしキザミを施す。252は頸部下位に櫛描直線文と簾状文が施され中期前半の土器として捉えることができる。他に凹線文系の甕(262・263)、鉢(265)、高杯(267～269)が見られる。石器ではサヌカイト製の石鏃(272～275)、自然礫の先端を刃部に加工した小型石斧(276・277)、扁平片刃石斧(279・280)、サヌカイト製のスクレイパー(281)、磨製石包丁(282)が見られる。282の石包丁は中央に一穴穿孔がみられ、長軸両端に抉りが入る。

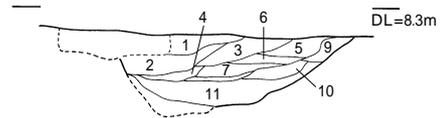
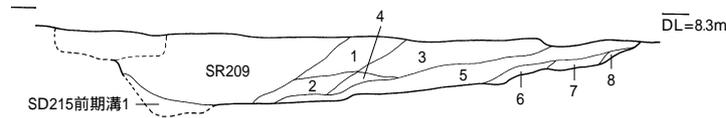
以上、各調査区毎に大溝1の遺物を概観してみたが、弥生時代前期末～中期初めの時期と弥生時代後期にピークが見られる。D・E区での堆積状況からみて弥生時代前期には大溝1のラインは溝状の地形を呈していたものと考えられる。砂、砂礫とシルトの互層堆積を見れば、何度かの浚渫が行われていたものと思われ、地点によってはレンズ状を呈している箇所も見られる。この砂礫層が幅2.2～3.0m前後、深さ0.5～0.6m前後で弥生時代前期の溝のラインを切っている。砂礫層からの出土遺物は弥生時代後期前半～中葉を主体とすることからこの段階にも溝が機能していた可能性が考えられる。E6区から南部では方向が南東方向に変わりE6区で大溝2が分岐し2条が並行して延びるが、東側を流れる流路1と調査区外南部で合流する可能性がある。



- | | |
|--------------------------------|----------------------------------|
| 1:砂礫層(5mm~3cmの礫) | 12:にぶい黄褐色シルト |
| 2:暗灰黄色砂質(一部にシルトが入るがほぼ中砂である) | 13:暗灰黄色中砂(3~5cmの礫を少量含む) |
| 3:にぶい黄褐色砂混じりシルト(灰色細砂全体にうすらかかる) | 14:にぶい黄褐色シルト(土器細片を含む) |
| 4:黄灰褐色中砂層 | 15:にぶい黄褐色シルト(埋土は14層と同じだが灰色がやや入る) |
| 5:黒褐色粘質シルト(黄色シルトが帯状に入る) | 16:暗褐色砂質シルト |
| 6:褐灰色粗砂 | 17:にぶい黄褐色シルト(土器細片を多量に含む) |
| 7:にぶい黄色シルト | 18:黒褐色シルト(若干土器細片を含む) |
| 8:褐灰色粗砂(土器細片を含む) | 19:灰黄褐色細砂 |
| 9:灰黄褐色中砂(土器細片を多く含む) | 20:暗褐色粘質土(1cm弱の黄色シルトブロックを含む) |
| 10:灰黄褐色シルト(土器細片を多く含む) | 21:褐色粘質土 |
| 11:灰褐色シルト | 22:暗褐色砂礫層(鉄分によって酸化している) |

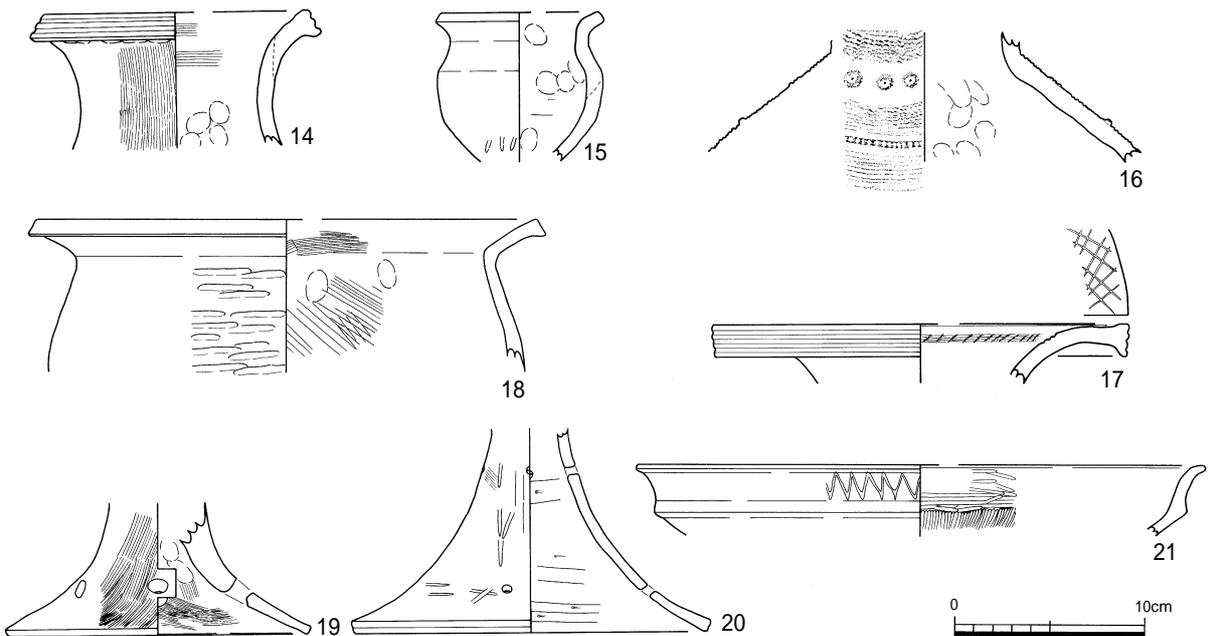
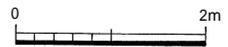


大溝1-1 図 D1区SD1007・1009

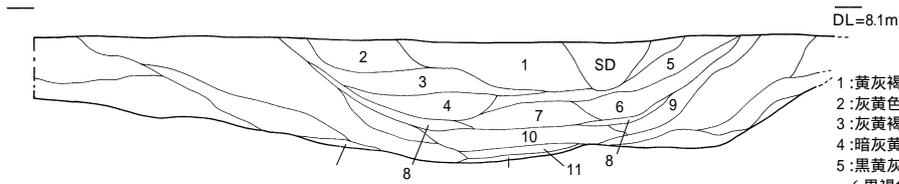


- D2SR207埋土
- 1:褐色シルト
 - 2:黄褐色粘性シルト
 - 3:暗褐色粘質土
 - 4:暗褐色砂質土(礫が入る。遺物を多く含む。)
 - 5:暗灰褐色砂質土
 - 6:黒灰褐色砂質シルト
 - 7:黒灰褐色粘性シルト
 - 8:黒灰褐色シルト(黄褐色・橙色)粘性土(地山)ブロックが入る。)

- D2SR209埋土
- 1:黄灰色シルト(礫を多く含む。)
 - 2:暗灰色砂質シルト
 - 3:灰黄色シルト(遺物を含む。)
 - 4:灰色細砂
 - 5:明黄灰色砂質シルト
 - 6:暗黄灰色砂質シルト
 - 7:灰色砂利層
 - 8:黄灰色砂質シルト(やや粘性がある。)
 - 9:黄灰色シルト
 - 10:黄灰色砂質シルト(黄褐色シルトが入る。)
 - 11:暗褐色砂礫土(10cm位の礫が入る。遺物を多く含む。)



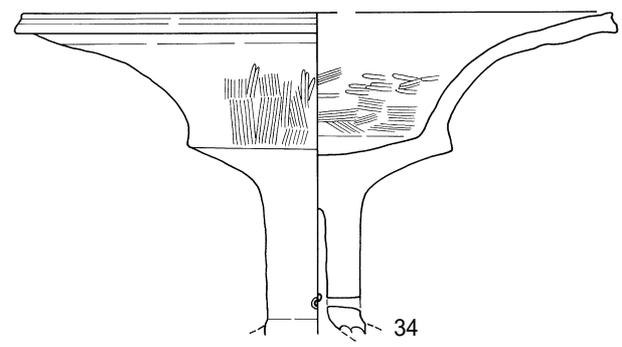
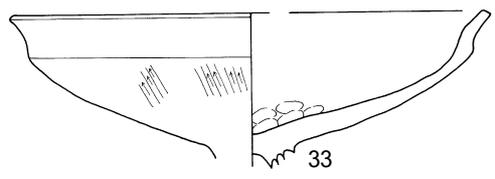
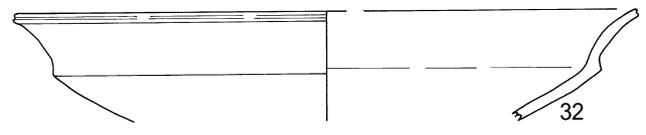
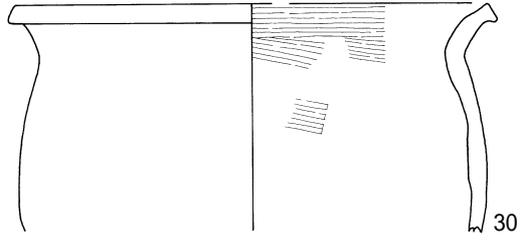
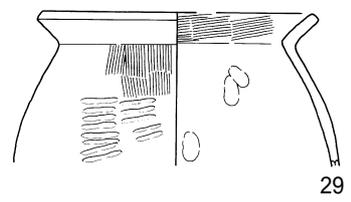
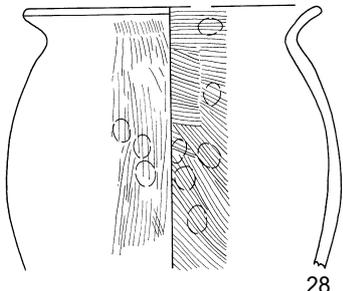
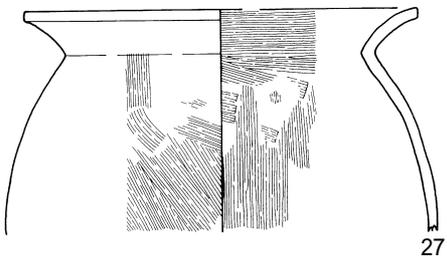
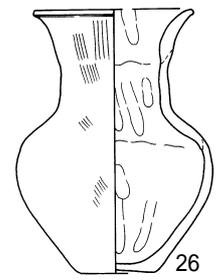
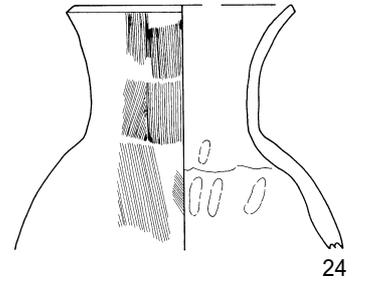
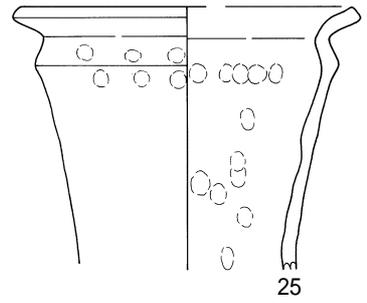
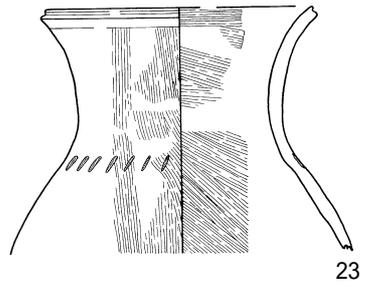
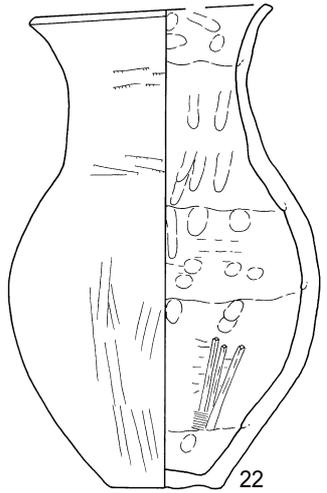
大溝1 - 2 図 D2区SR207



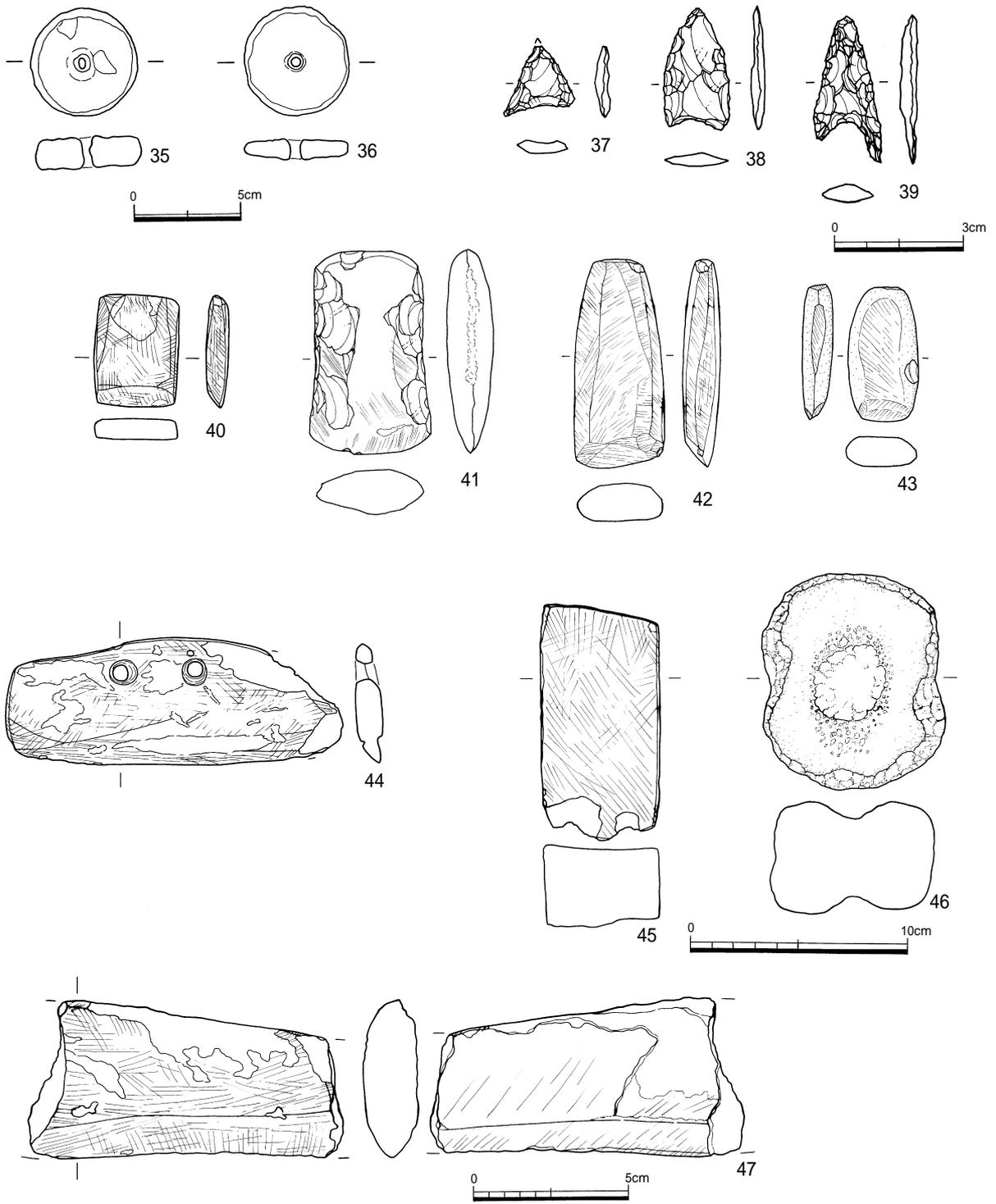
- 1:黄灰褐色砂礫(2~3cm大の礫・遺物多量に含む)
- 2:灰黄色砂質シルト
- 3:灰黄褐色シルト(粗砂・遺物含む)
- 4:暗灰黄褐色砂礫(粗砂・2~5mm大の礫・遺物多い)
- 5:黒黄灰シルト
(黒褐色粘土と黄灰色シルトのブロック。下部は砂含む)
- 6:暗灰色シルト(細砂と粗砂の互層)
- 7:灰色粗砂
- 8:灰褐色シルト
- 9:暗灰褐色シルト(細砂・遺物を含む)
- 10:暗黄褐色砂礫(砂利層)
- 11:暗灰褐色粘土質シルト(粘土・粗砂混じる)



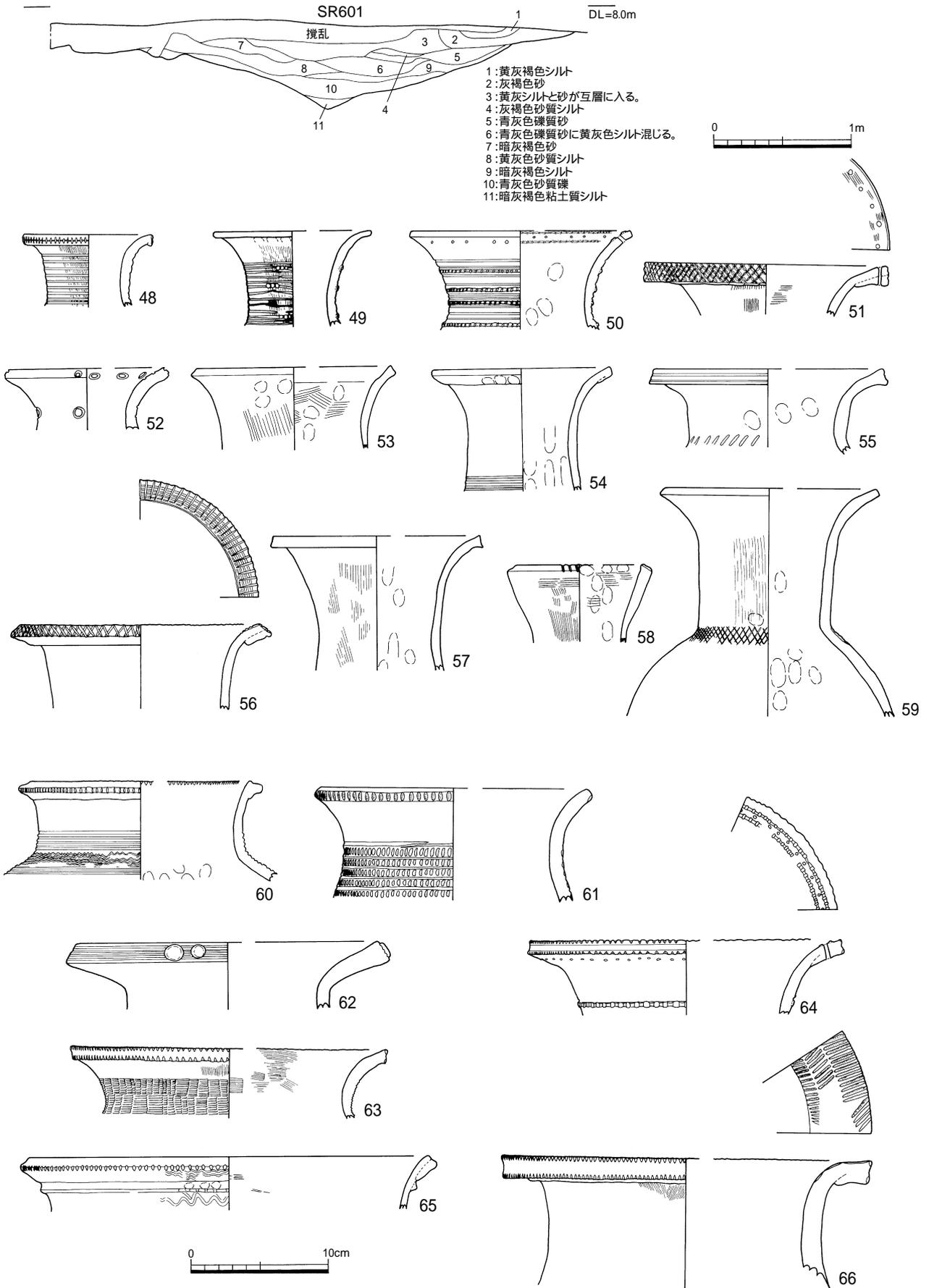
- :灰褐色シルト(5mm~1cm大の砂礫含む)
- :暗灰褐色シルト(砂礫微量に含む)
- :黒黄褐色シルト(2~3cm大の礫・黄色シルト含む)
- :黒褐色粘土
- :黄色シルト(Mn多く含む)



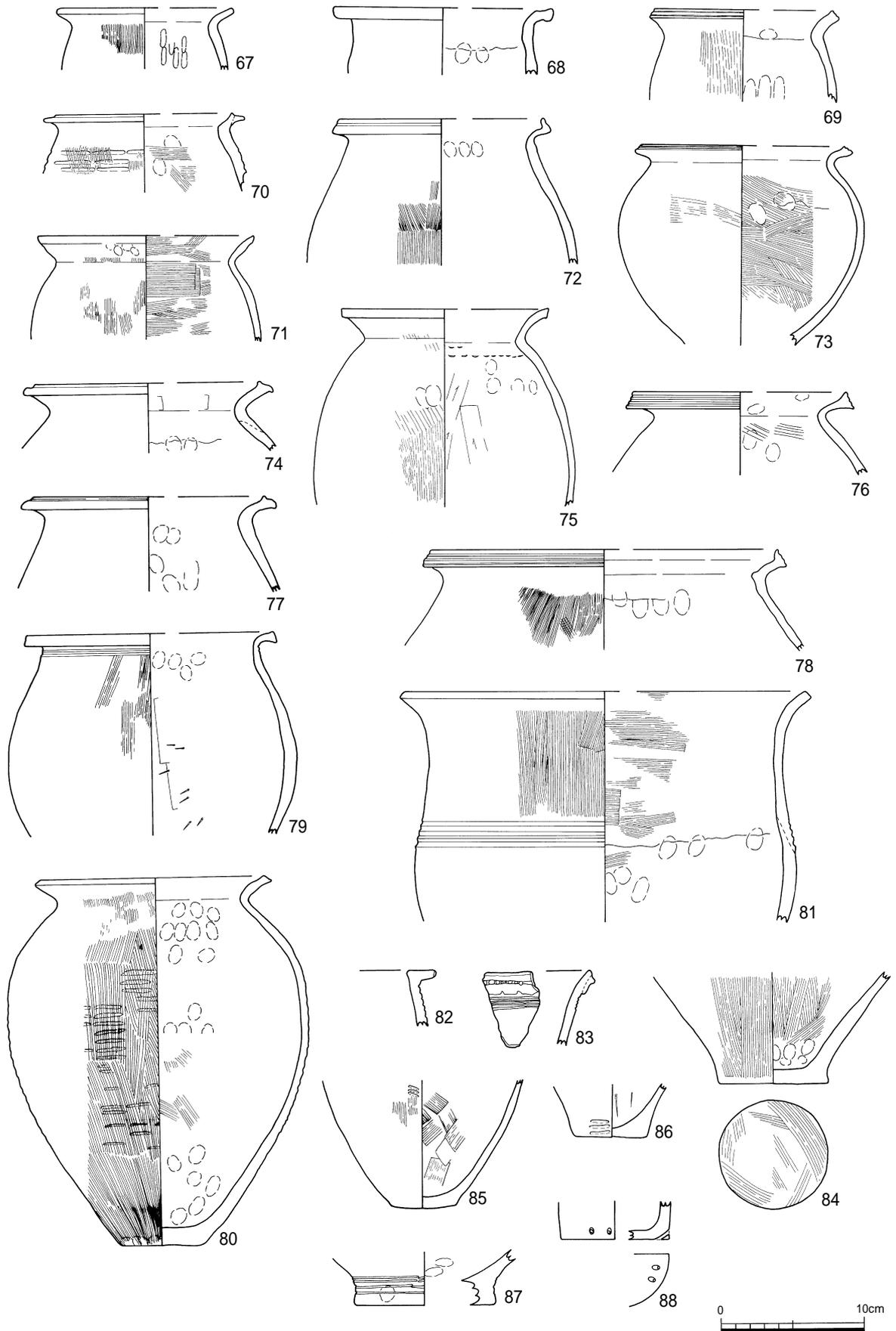
大溝1 - 3 図 E3区SR301(1)



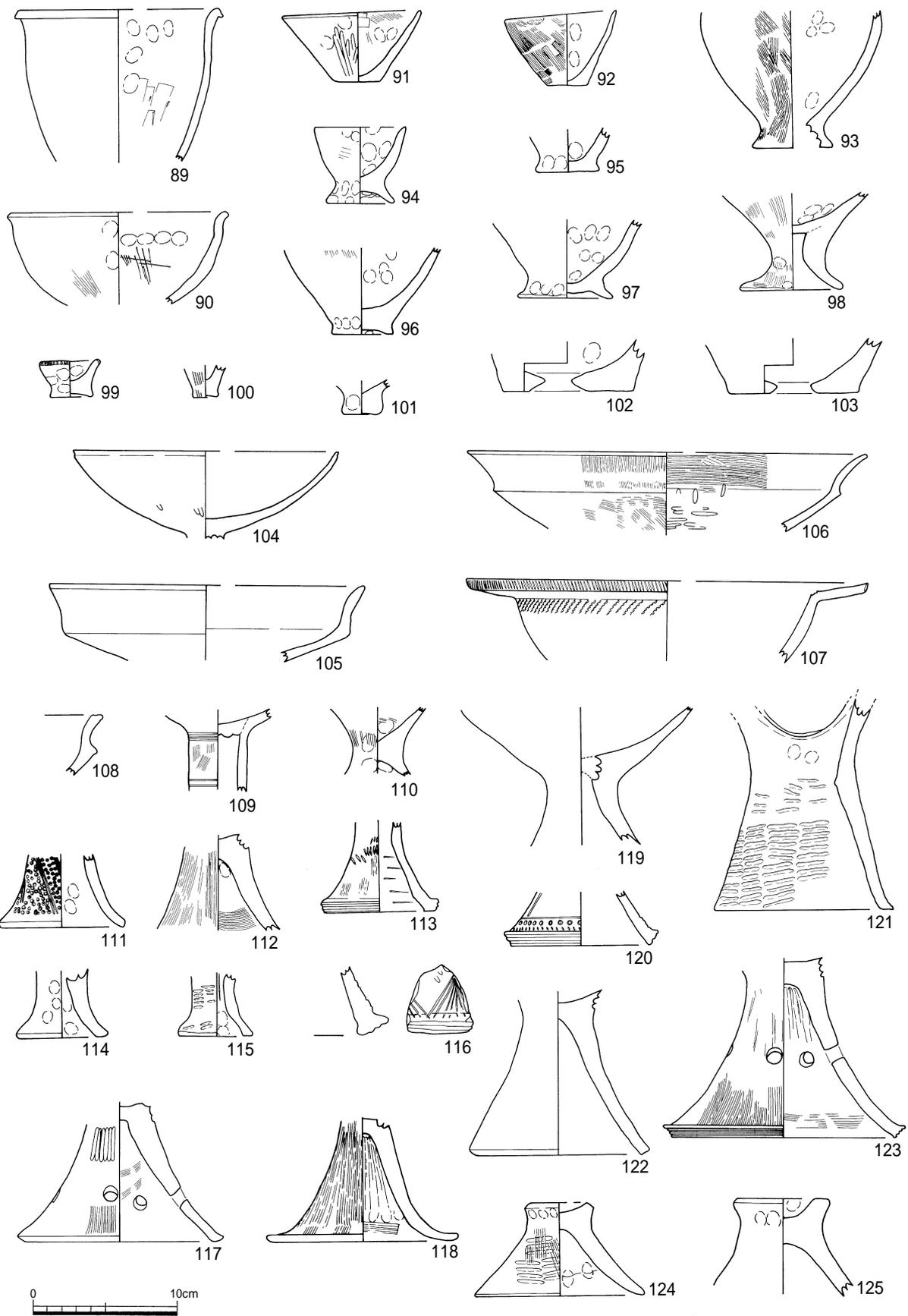
大溝1 - 4 図 E3区SR301(2)



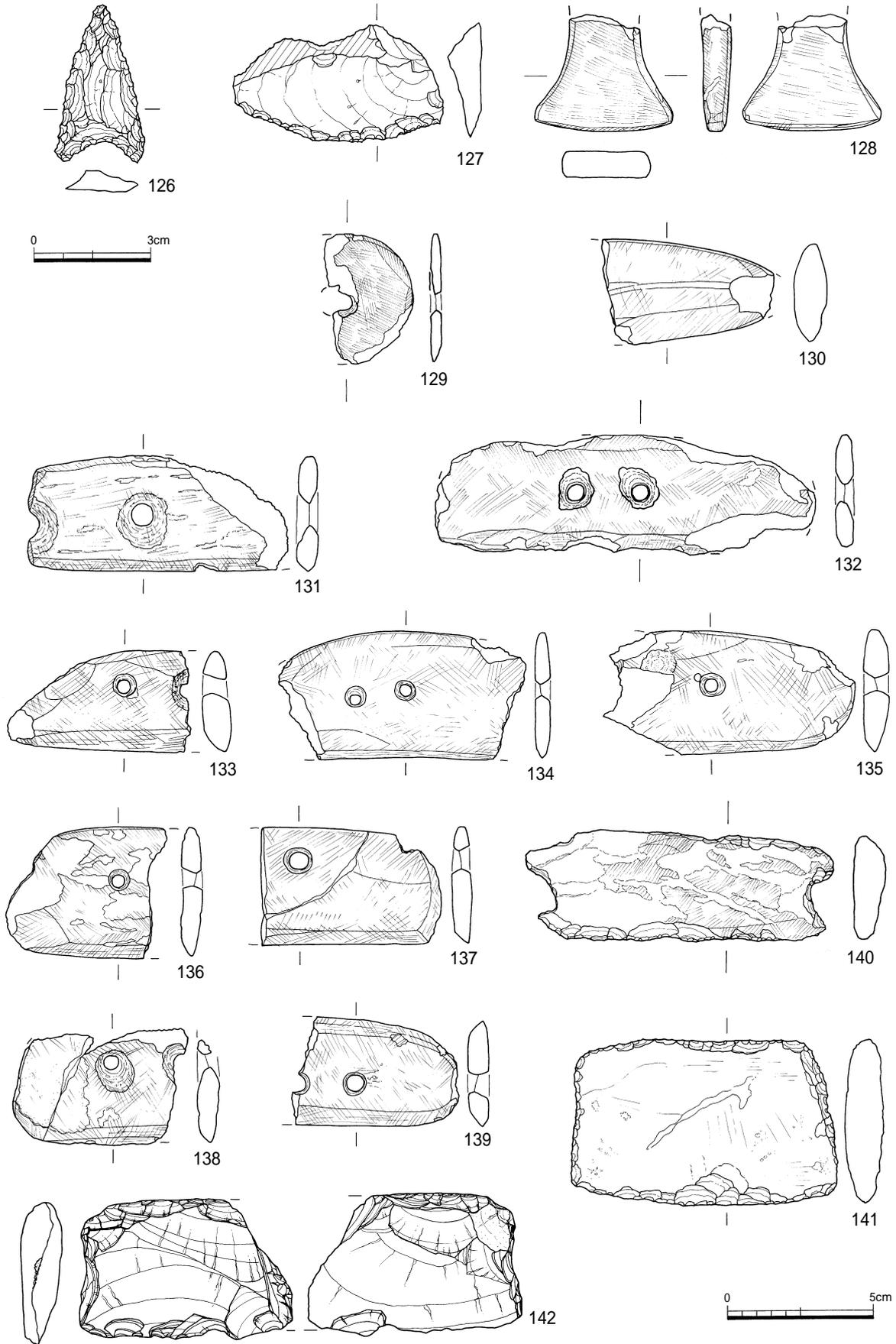
大溝1 - 5 図 E6区SR601(1)



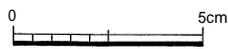
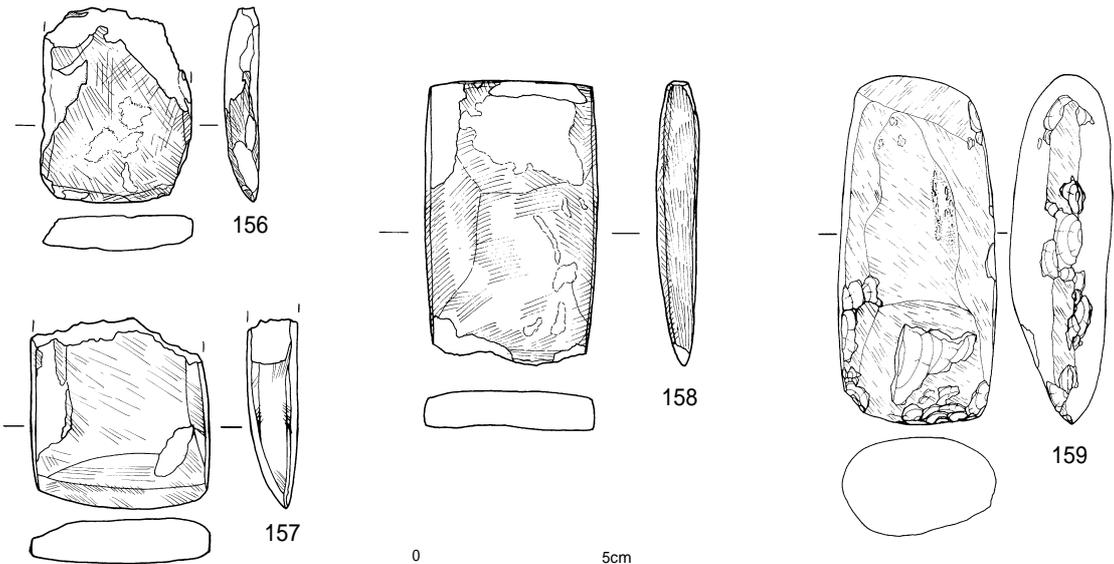
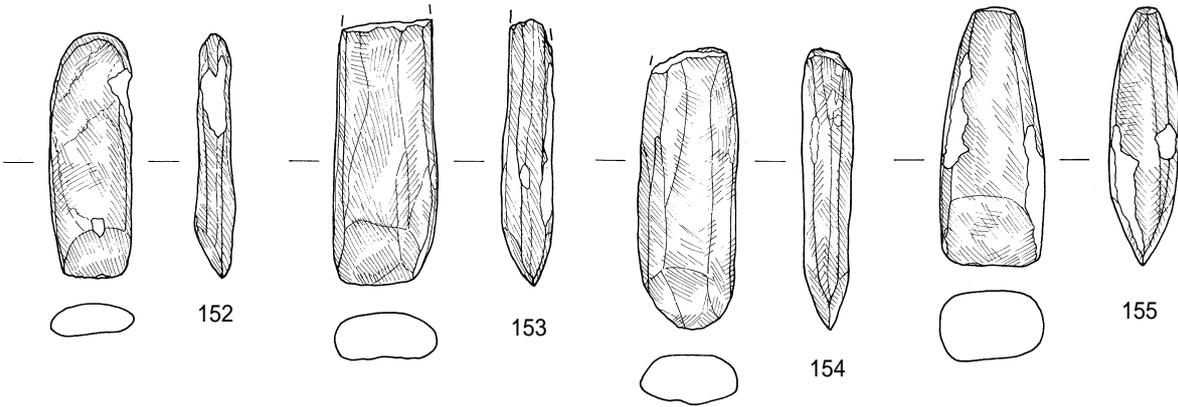
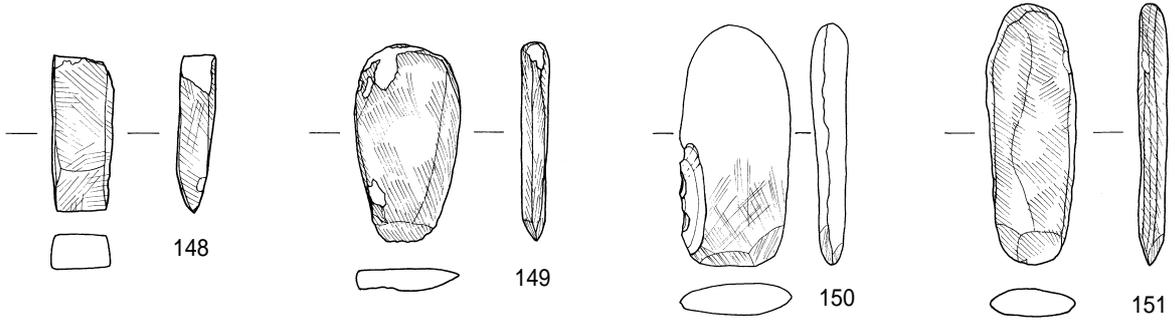
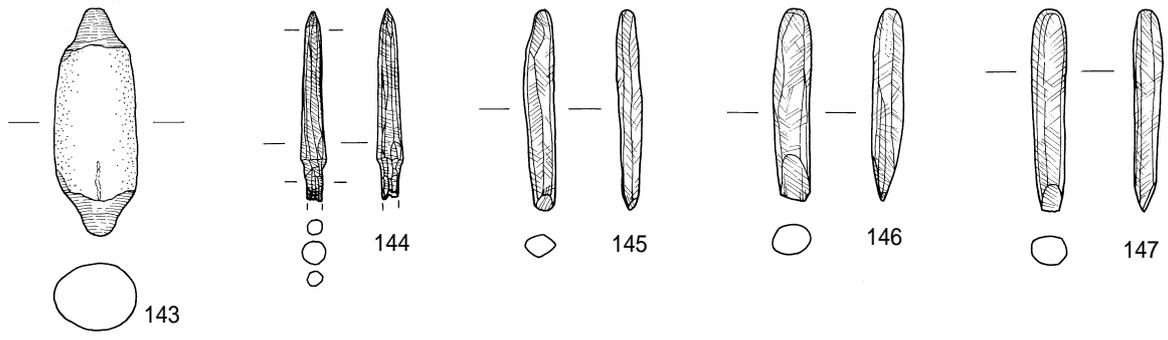
大溝1 - 6 图 E6区SR601(2)



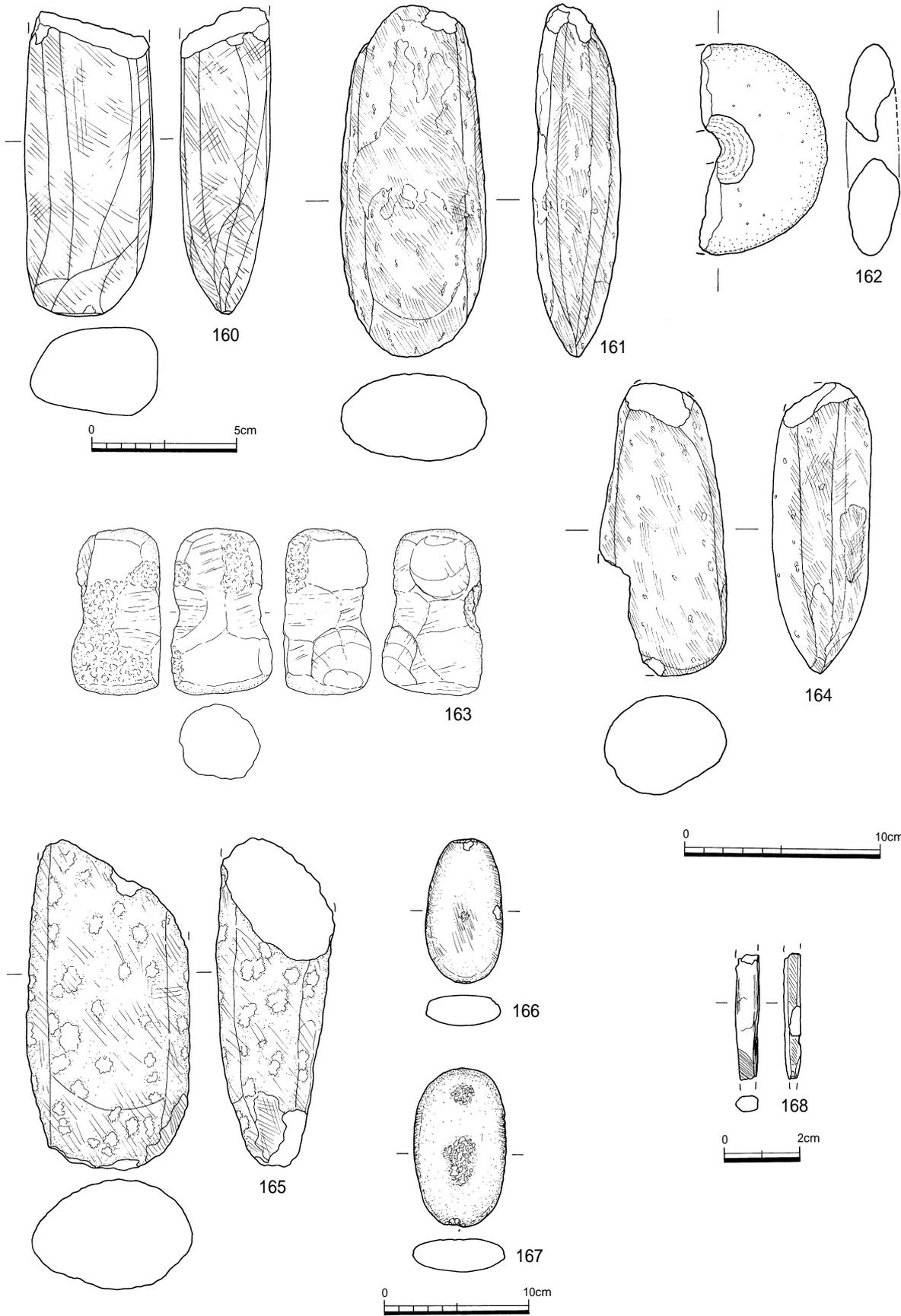
大溝1 - 7 图 E6区SR601(3)



大溝1 - 8图 E6区SR601(4)

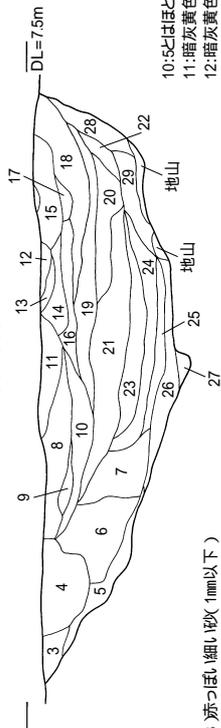


大溝1 - 9圖 E6区SR601(5)



大溝1 - 10 図 E6 区SR601(6)

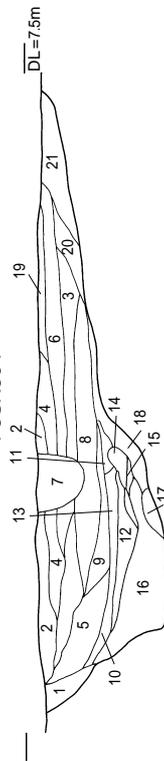
F5SR503



- 3:暗褐色細砂 7.5YR3/3 赤っぽい細い砂 1mm以下)
- 4:暗灰黄色砂質シルト(2.5Y4/2) 遺物少し含む
- 5:暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2) 赤褐色シルトが入る
- 6:2とほとんど同じ。小礫はほとんど含まず、1~3mmくらい粗砂がほとんどを占める。20の上あたりのみ、遺物がかかり入る
- 7:灰黄色シルト(2.5Y5/3) 褐灰色シルトが8と接する面で少し入る
- 8:暗褐色細砂 7.5YR3/3) 3とほぼ同じであるが、栗の方は8と同化するといつか9そのもの
- 9:暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2) 5と接する面は1~2mmくらいの砂粒がばらばらと入るが、中央から栗の方にかけては、砂、小礫(3~8mm)がほとんどを占め、遺物の量も多い。5と接するあたりでは明らかに土質が違つように思われる。かつ8の中央より栗の方は9であるように思われる

- 10:5とはほとんど同じ。炭化物が若干含まれる。少し黄色が強い
- 11:暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2) 赤褐色シルトに入り、遺物も少し入る
- 12:暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2) 褐色が少し入り、遺物も少し入る
- 13:暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2) 細砂が混ざる。3cmくらいの礫が入る
- 14:暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2) 赤褐色シルトが連続に入る。遺物が少し入る
- 15:14と同じ。細砂混入
- 16:黄灰色砂質シルト(2.5Y4/1) 褐色が入る。遺物はほとんど含まない
- 17:暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2) 14とほぼ同じだが遺物はほとんど含まない
- 18:黒褐色砂質シルト(7.5YR3/3) 暗灰黄色シルト粒が入る。遺物が入る。これまでは違う土質
- 19:黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1) 遺物が少し入る
- 20:黒褐色シルト(10YR3/2) 褐色が少し入る。遺物がかかり入る
- 21:黒褐色シルト(10YR3/2) 遺物はまだ含まない

F5SR504

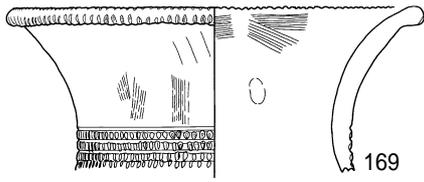


- 1:黄褐色シルト(2.5Y5/6) 黒褐色ブロック 大 暗灰黄色シルトが互手状に入る
- 2:黒色粘性土(10YR2/1) 黄褐色粒が少し入る
- 3:暗褐色砂質シルト(7.5YR3/4) 遺物含、粗砂(1~3mm)が入る
- 4:暗褐色砂質シルト(7.5YR3/4) 褐灰色シルト粒が全体に入る
- 5:黒褐色粘性土(10YR2/2) 褐色が混じる
- 6:黒褐色シルト(7.5YR3/4) 粗砂(1~3mm)が混じる。遺物若干含む
- 7:黒褐色砂質シルト(2.5YR3/2) 粗砂(1~3mm)が少し入る)
- 8:灰黄色シルト(2.5YR2/2) 粗砂(1~3mm)が10と接するあたりに混ざる
- 9:砂・ジャリ層(1~3mm) 遺物含む
- 10:砂・ジャリ層(1~3mm) 灰黄色シルトが少し入る。遺物含む

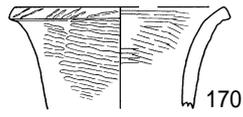
- 11:暗褐色砂質シルト(10YR3/4) 粗砂(1~3mm) 遺物含む
- 12:砂・ジャリ層(1~3mm)
- 13:暗褐色砂質シルト(10YR3/4) 粗砂(1~2mm)以下が入る
- 14:砂・ジャリ層(1~3mm) 遺物含む。灰黄砂質シルトが少し入る
- 15:暗褐色砂質シルト(10YR3/4) 粗砂(1~3mm) 遺物若干含む
- 16:黒褐色シルト(10YR2/2) 粗砂(1~2mm) ばらばらと入る
- 17:細砂(1mm以下) 暗褐色シルト若干入る
- 18:黄褐色シルト(2.5Y5/6) 灰黄色シルトが入る
- 19:砂・ジャリ層(1~3mm) 遺物多く含む。黄灰色
- 20:暗灰黄色シルト(2.5Y5/2) 赤褐色シルトが入る。遺物が入る
- 21:砂礫層(1~3mm) 遺物多く含む



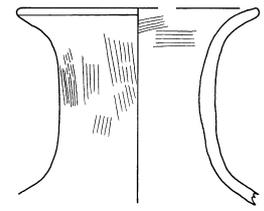
大溝1 - 11 図 F5区SR503・SD504



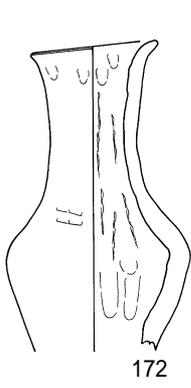
169



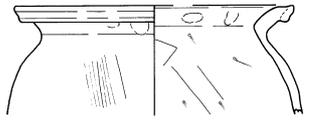
170



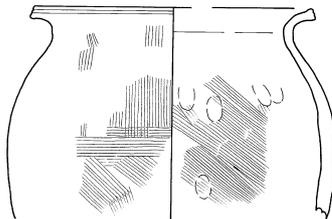
171



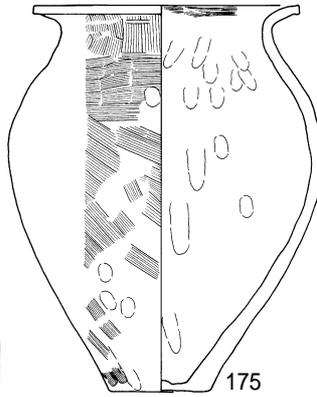
172



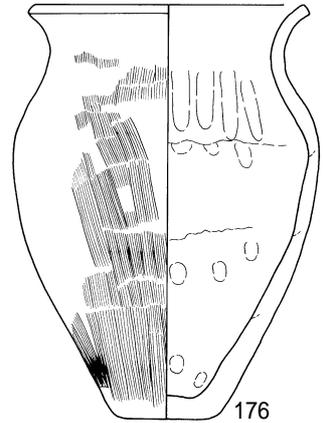
173



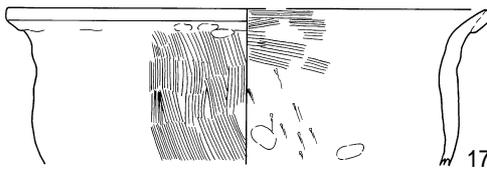
174



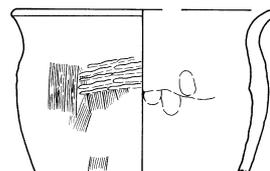
175



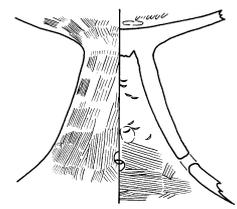
176



177



178



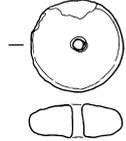
179



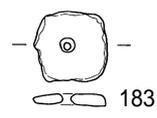
180



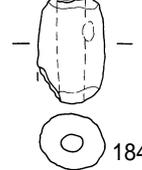
181



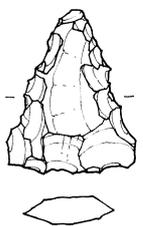
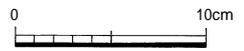
182



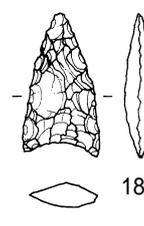
183



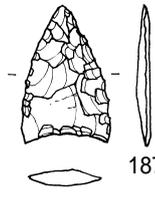
184



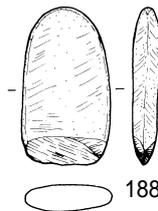
185



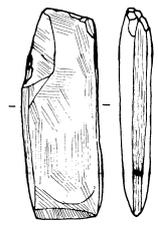
186



187



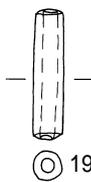
188



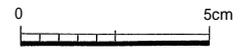
189



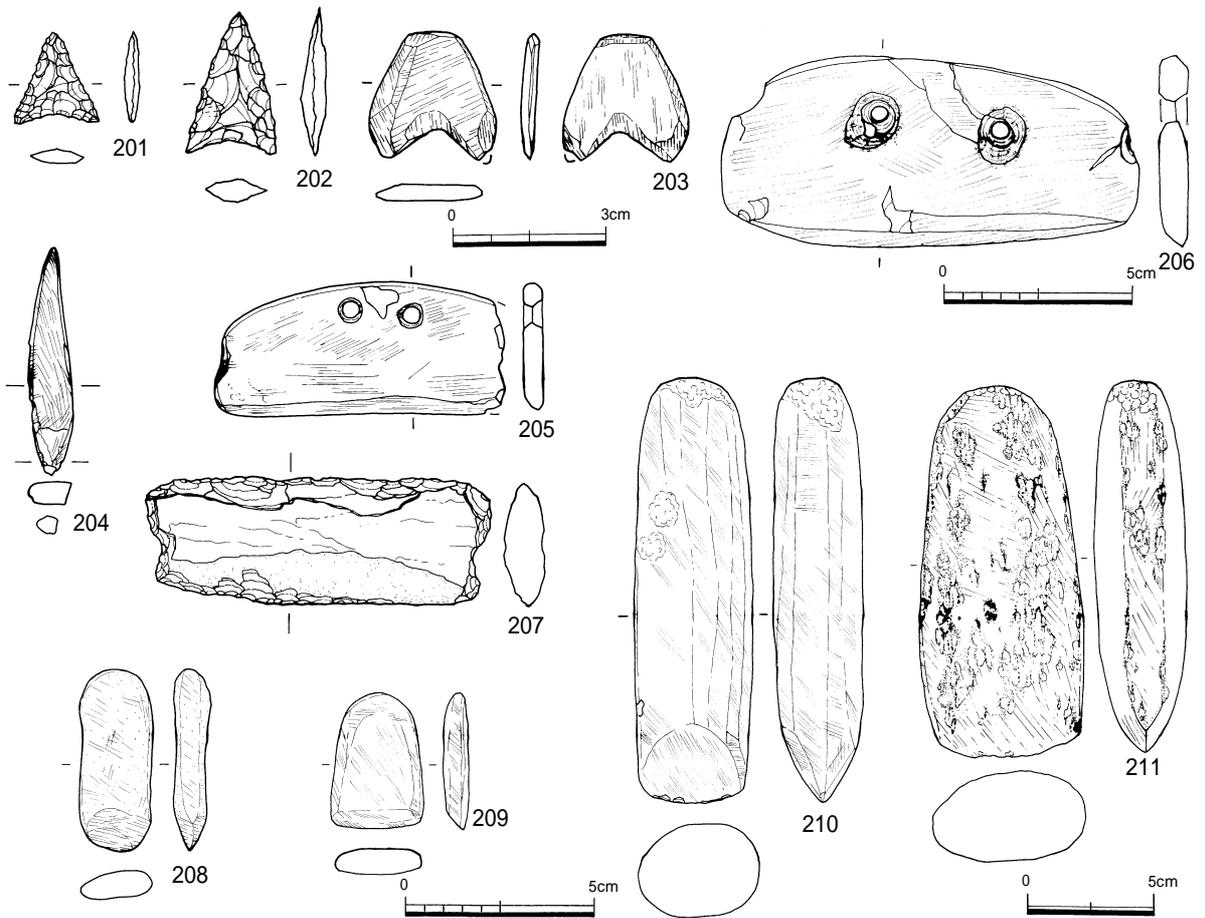
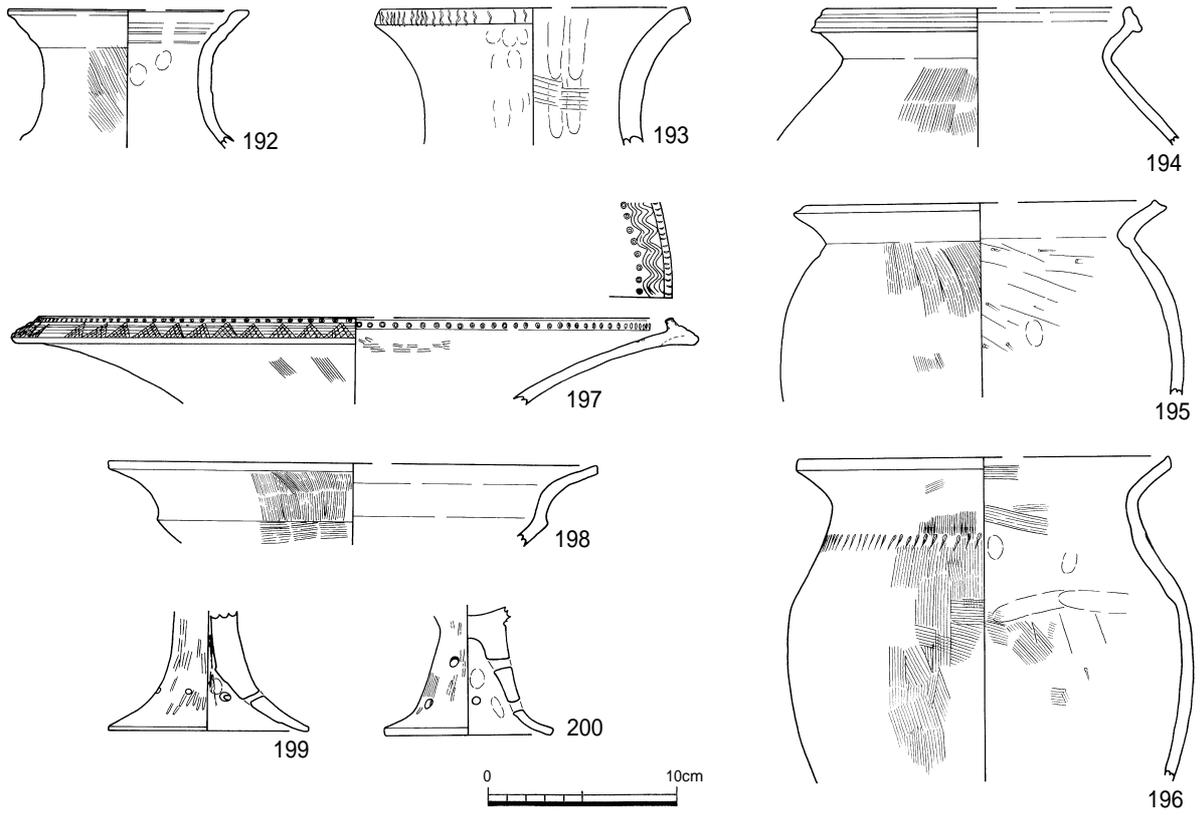
190



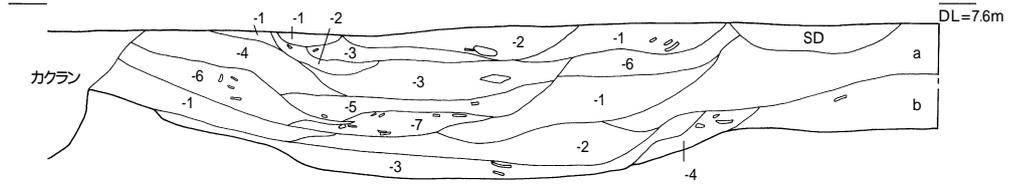
191



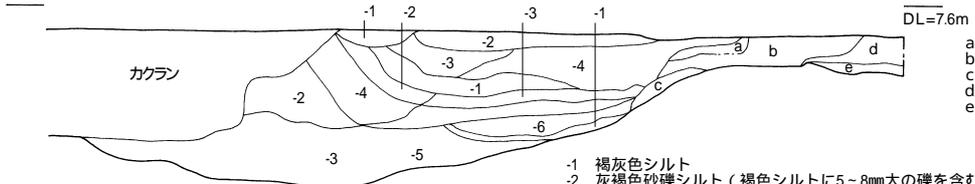
大溝1 - 12图 F5区SR503



大溝1-13图 F5区SD504

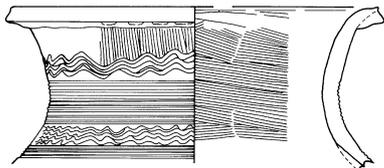


- 1 灰色(粗砂)
- 2 暗黄灰色砂質シルト(粗砂と3~5mm大の礫が互層堆積)
- 3 灰色砂礫(1~3cm大の礫に粗砂が混じる)*土器片多量(-1層取上)
- 1 暗褐色シルト
- 2 黄褐色砂質シルト
- 3 褐灰色砂礫シルト(シルトに粗砂と5mm~1cm大の礫が混じる)
- 4 灰色シルト(下部に粗砂が混じる)
- 5 褐灰色(細砂)
- 6 暗褐色シルト(粗砂が混じる)
- 7 灰色砂礫(5mm~1cm大の礫に粗砂とシルトが混じる)*土器片多量(層取上)
- 1 灰黄色シルト
- 2 褐灰色砂質シルト
- 3 灰色砂礫
- 4 暗褐灰色砂質シルト*土器多量(-1・2層取上)

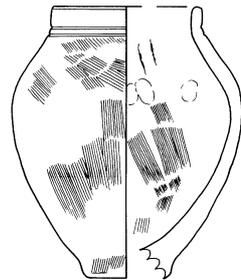


- 1 灰色(粗砂)
- 2 暗黄灰色砂質シルト(粗砂と3~5mm大の礫が互層堆積)
- 3 褐灰色砂質シルト(粗砂が混じる)
- 4 灰色砂礫(3~5mm大の礫、5mm~1cm大の礫、粗砂が互層堆積)*土器多量
- 1 褐灰色シルト
- 2 灰褐色砂礫シルト(褐色シルトに5~8mm大の礫を含む)
- 3 褐灰色砂質シルト(粗砂が混じる)
- 4 暗灰褐色シルト(8mm大の礫が混じる)
- 5 褐灰色砂礫(粘土質シルトに粗砂と1cm大の礫が混じる)
- 6 暗黄灰褐色砂礫(シルトに粗砂と1cm大の礫が混じる)*土器多量
- 1 黄灰色砂質シルト
- 2 暗褐色シルト
- 3 暗灰褐色砂礫シルト(粘土質シルトに粗砂と3~4cm大の礫が混じる)*土器多量

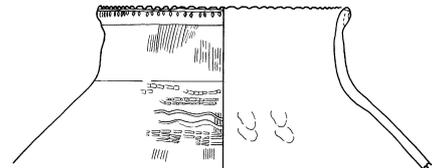
- a 灰黄色シルト
- b 暗褐色シルト
- c 暗黄灰色シルト
- d 褐灰色砂礫
- e 暗褐色シルト



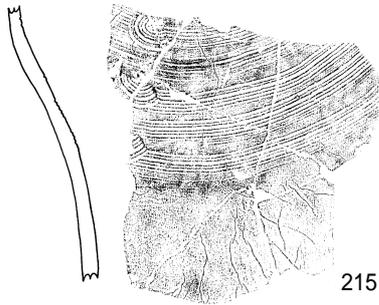
212



213



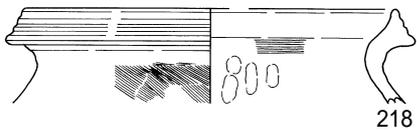
214



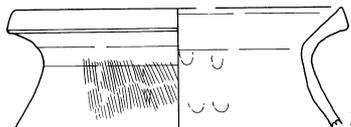
215



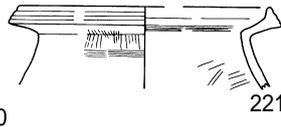
216



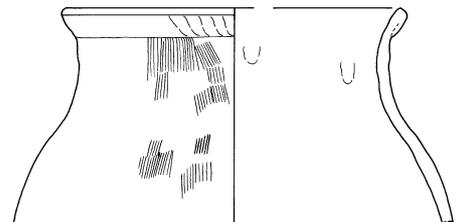
218



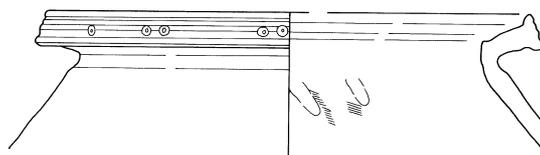
220



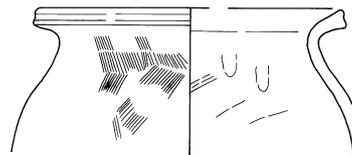
221



219



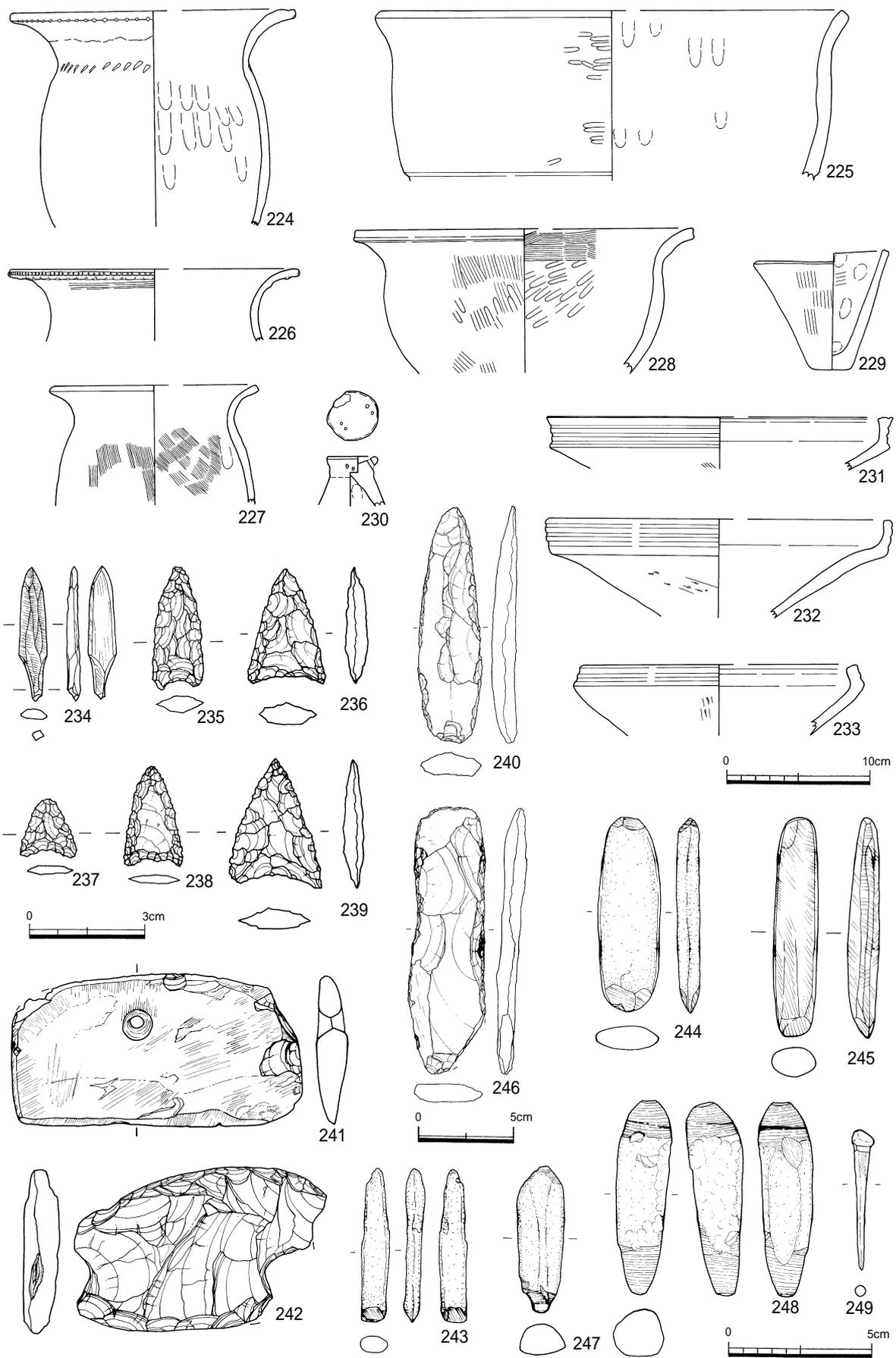
223



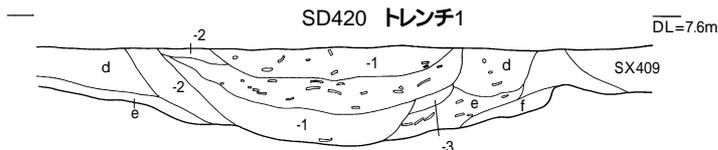
222



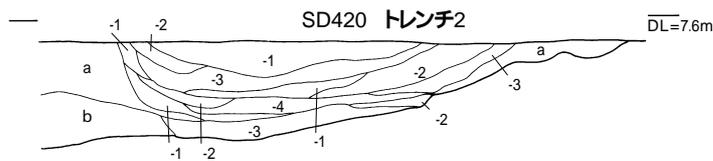
大溝1 - 14 図 B4 区SD421(1)



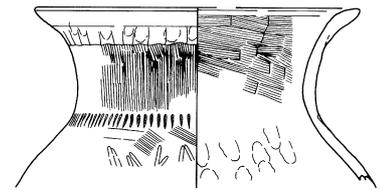
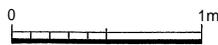
大溝1 - 15 图 B4区SD421(2)



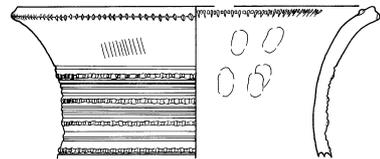
- 1 黄灰褐色砂質シルト (シルト、粗砂、5mm~1cm大の礫が互層堆積)
- 2 灰褐色 (砂)
- 褐灰色砂礫シルト (砂にシルト、5mm~3cm大の礫が混じる) * 土器片多量 (層取上)
- 1 褐灰色粘土質シルト (炭化物を少量に含む)
- 2 黄灰褐色シルト
- 3 灰褐色シルト



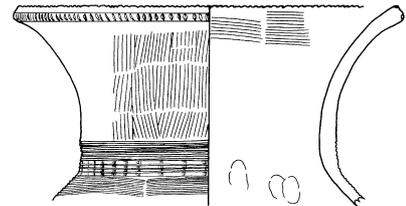
- 1 黄灰褐色砂質シルト (シルト、粗砂、5mm~1cm大の礫が互層堆積)
- 2 褐灰色砂質シルト
- 3 灰褐色砂礫シルト (シルトに粗砂、5mm大の礫が混じる) * 土器片多量 (層取上)
- 1 灰褐色砂質シルト (粘性シルトに粗砂が混じる)
- 2 黄灰褐色シルト
- 3 暗褐色シルト (5mm大の礫を含む)
- 4 褐灰色砂礫シルト (粘土に粗砂と2~3cm大の礫を含む) * 土器片多量 (層取上)
- 1 灰褐色粘土質シルト
- 2 褐灰色砂質シルト (炭化物を少量含む)
- 3 褐灰色 (粗砂、5mm大の礫を含む) * 土器片多量 (層取上)



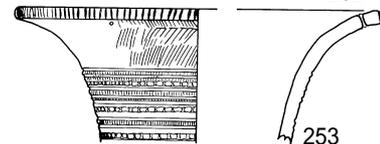
250



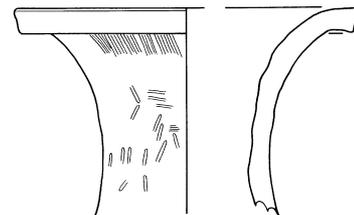
251



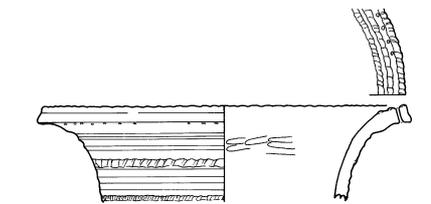
252



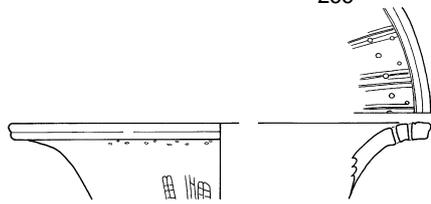
253



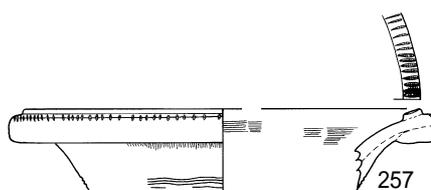
254



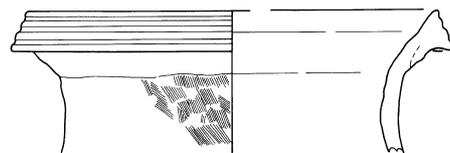
255



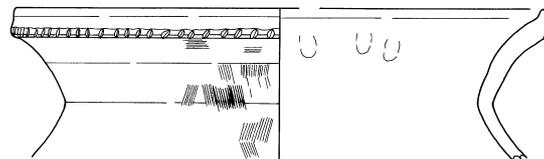
256



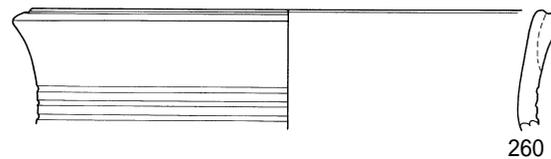
257



258



259



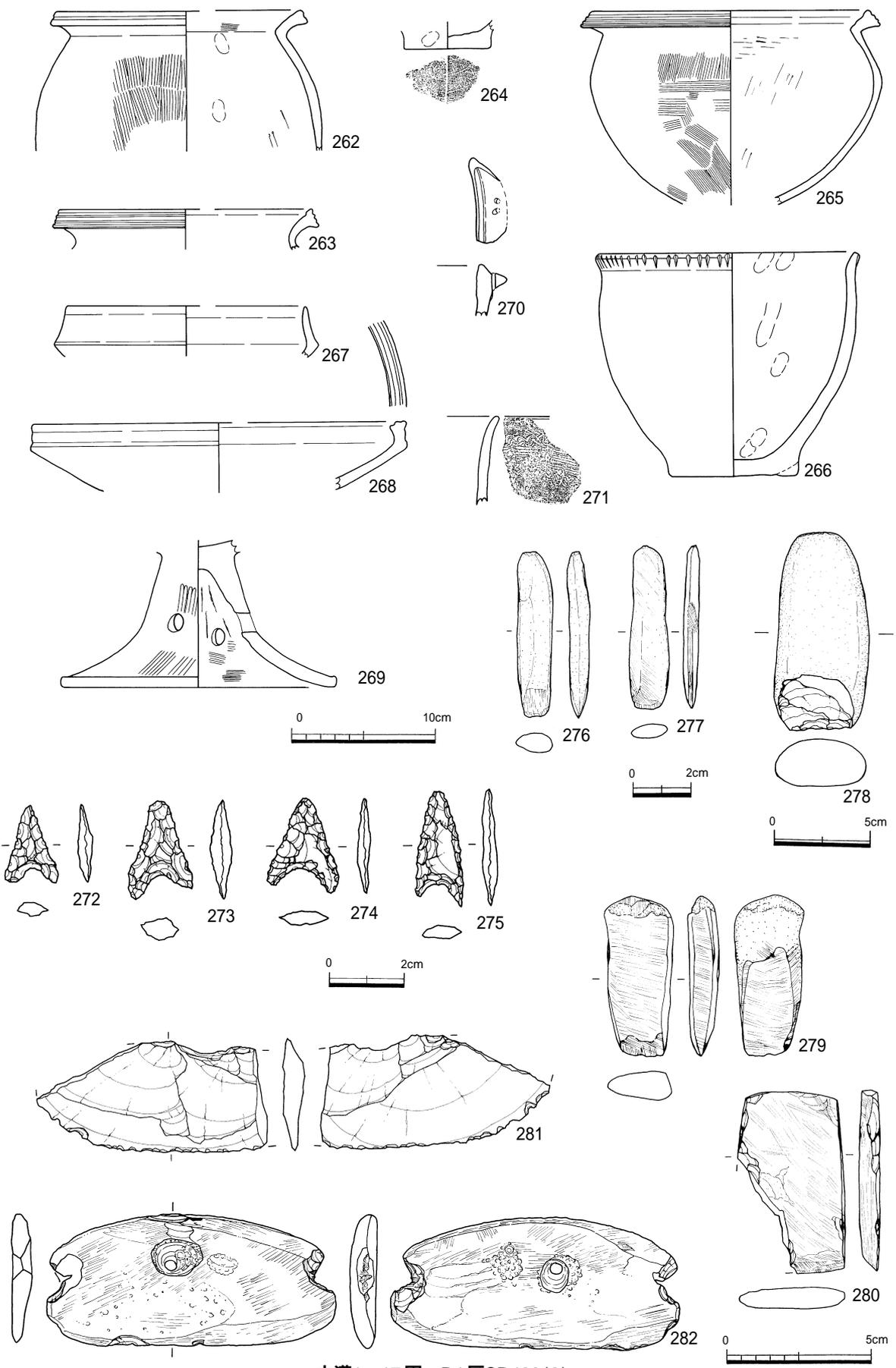
260



261



大溝1 - 16 図 B4区SD420(1)



大溝1 - 17 图 B4 区SD420(2)

大溝2(大溝2-1～20図)**時期**；弥生I-5～・IV～V-3 **方向**；北～南、南西**規模**；検出長 452m×幅 1.8～3.4m **深さ**；0.6～1.2m **断面形態**；U字形**埋土**；シルト、砂礫主体**床面標高**；7.15～5.4m(D1SR112～Q2SR201)**接続**；D1SR112・D2SR201・E3SR302・E6SR602・F5SR501・F4SR401・402・F3SR301・F2SR202・L1SR107・L3SR301A～C・Q2SD203～205**出土遺物**；弥生土器(甕、壺、鉢、高杯、石器、鉄器)古代・中世(土師器碗・須恵器壺)

所見；全調査区の東よりを北東から南西方向に弧状に延びる溝である。DE区では大溝1と並行して南北に延びE6区南部で二股に分岐する。1条はF5区、もう1条はF4区に延びF区中央部で収束し、2～3条の溝が並行して南西方向に延びる。大溝2の北端にあたるD1区のセクション(大溝2-1図)を見れば大きく二つのレンズ状堆積が認められる。セクションの西側のレンズ状の堆積は大溝4のD1SR111であり、D1SR112を切るように堆積が見られるが、基本的には東側のD1SR112側から堆積が進み、西側の方に移行していったものと考えられる。レンズ状に認められる部分の堆積はシルトと砂礫層で構成されており、D1SR111・112の中央部分に堆積が認められる安定したシルト層(14～16層・22層)を削り込んでおり、人為的に溝として浚渫したと考えられる。大溝2で捉えたD1SR112のレンズ堆積の上層から中層にかけては(1～9層)は弥生時代後期と考えられる遺物(大溝2-3図18～20・23・24)などが見られ、東側の肩部に堆積が認められる12・13層及び10層からは弥生時代前期末から中期前半～中葉にかけての遺物が多く出土した。大溝2-2図は壺を主体に掲載したが、1は直立する口縁から口縁部はラッパ状に開き、口縁部外面に断面四角形の粘土帯を貼付する。口縁内面には櫛描による沈線を周縁に施し、5条一単位の沈線を等間隔に配する。2は器壁の薄い壺口縁部片であり、口縁端部を肥厚させ下端にキザミを施す。土佐西部域に多く散見できるタイプであり、胎土は黒褐色を呈し、他のものとは異なる。3は口縁端部を上下に拡張し面を作り、端面と内面に櫛描による波状文を施す。4は弥生時代前期中葉の壺であり、口縁下及び胴頸部に沈線を施す。5は壺の胴頸部片であり、櫛描沈線と波状文が頸部下から上胴部に施される。6は長頸の壺であり、口縁端部は粘土帯を貼付し三角形に成形して端部にキザミを施す。7も長頸の壺であるが、頸部から口縁部にかけて凹線文が施される。8の頸部下には断面逆台形状の突帯が付く。11は頸部が間延びして口縁部が外反する。12・13は貼付口縁であり、13は他のものと比べ法量が多い。甕(19・20)は「く」の字に外反するものが見られ、鉢(21)は口縁端部は拡張され凹線文が施されるものが見られる。蓋(22)は内面に横位のヘラミガキが施される。高杯脚(23・24)はやや低脚であり、23は裾部が大きくラッパ状を呈する。25～27は脚部であるが上位が欠損しているため器種は不明である。27は脚部と上部の境目に断面三角形の突帯が付く。28～32は石器である。石鏃では凹基式(28)と有茎式(29)のものと認められ、石質はサヌカイトである。30は石製紡錘車で全体的にやや丸味を帯びる。31は方柱状片刃石斧であり、石質は層灰岩である。D1区の南側道路部分にあたるD2区でも基本的な堆積状況はD1区と変わらない。ここでは東側肩部のシルト層の堆積が顕著であり、弥生時代前期末～中期にかけての遺物が主体を占めた。(大溝2-4図)33・34は弥生時代前期末

の壺の口縁部片であり、頸部にはヘラ描き沈線と刻目突帯が施され、口縁部内面には刻目突帯が貼付される。35は中期初頭の壺と考えられ頸部に櫛描沈線と波状文が施される。36は器壁が薄く上胸部に沈線を施しハケ状原体によるキザミを入れる。38は頸部が間延びし口縁部が開く。上胸部には4条の微隆起帯を施し下に右上がりの列点文状のキザミを施す。39～41は長頸壺であり、39は直立気味に立ち上がり、40・41は貼付口縁で口縁部は外反する。42は高杯であり、丸味のある体部から口縁部は外反する。内外面ヘラミガキ、口縁内面は横位のナデが施される。43は脚部片であり、上部との境目に断面三角形の突帯が付く。脚部には長方形の透かしを穿つ。脚端部には凹線文が巡る。44・45は石包丁であり、44は磨製直線刃で長方形を呈する。全面研磨で中央部に二つの紐部を穿つ。石質は頁岩である。45は打製直線刃で両端に抉りが入る。粘板岩である。46は太形蛤刃石斧の断片であり、基部は欠損する。側縁はほぼ平行であり、断面形は扁平である。緑色岩を全面研磨している。47は小型石斧であり磨製両刃である。局部研磨が施され石質は頁岩である。

D2区から南のE3区へは直線的に延びるが、E3区北部で大溝1の支流が流れ込みE3SR302上層を構成する。E3区南壁セクション(大溝2-1図)を見ると中層から上層にかけてレンズ状の堆積が認められるが、中層の砂礫層中からは弥生時代中期から後期にかけての遺物が多量に出土し一時期のピークを示している。また、東側の肩部には暗褐色シルト～灰褐色シルトの一次堆積層が認められ、弥生時代前期から中期前半にかけての遺物が出土していることからこの溝の古い段階の堆積として捉えることが出来る。さらに、E3SR302南部底面では溝の東側下場において前期溝3の延長を確認した。出土遺物は大溝2-5図～6図に図示したが、弥生時代前期中葉～後期前半にかけての遺物が出土している。48・49は弥生時代前期中葉の壺である。48は口縁下に刻目突帯が付く。49は法量が小さい小型の壺である。50・51・53・54は弥生時代中期初頭～中葉の壺である。50は櫛描沈線、刻目突帯が頸部に施され、口縁部内面にも刻目突帯が施される。51は口縁部が下方に拡張され、凹線文と円形浮文が施される。頸部外面には細かい単位の浅い櫛描沈線が施される。52は時期が不明であるが長頸壺であり、頸部が細く直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。外面は密なヘラミガキが施される。甕も弥生時代前期中葉から後期にかけてのものが出土しているが、60～68の弥生時代中期末～後期にかけてのものが主体を占める。69～72は高杯であり、69は深い杯部であり内湾しながら口縁部は外反する。70は口縁部が大きく外反する。外面はヘラミガキが施される。71・72は高杯の脚部であり、71の脚部は深く細い沈線が施され、横位の沈線帯間に6条一単位の垂下する沈線が配される。73～79は石器である。73は磨製の有茎石鏃であり、先端部は欠損する。断面形は菱形を呈する。黒色を呈した粘板岩である。75はサヌカイト製の打製石包丁である。76・77は自然円礫の先端を加工した小型石斧であり、一方をノミ状に加工する。79は断面三角形を呈する石錘であると思われる。砂岩礫の二辺頂部に2箇所の抉りを配する。

南部のE6区SR602は調査区南部で2条に分岐し、E3SR302で確認されている弥生時代中期末～後期前半の遺物が主体を占める溝がF4SR401に接続し、もう一方はF5SR501に接続する。さらに、セクションで確認すると下層のレンズが大溝1であるF5SR503に接続する。この堆積層には弥生時代前期末から中期の遺物が多く含まれており、E3SR302の東側肩部で確認されている一次堆積層と同じであることから、大溝2の古い段階は大溝1と同一方向(南東)に形成されていたものと考えられる。

そして、後期の段階に、集落の主体であるF・K・L区を囲むように南西方向側に向きを変化させたものと考えられる。E6区では、調査区中央部で弥生時代前期末～中期にかけての一括性の高い土器が多量に出土した廃棄土坑E6SX601が検出されており、E6SR602はこの遺構を切る。出土遺物は中期末から後期にかけての遺物が主体を占める。(大溝2-7図～10図)壺では中期前半～中葉にかけてのものが比較的多く、胴部に細い櫛描直線文(87)や、微隆起帯(86)を施したものなどが見られる。87は口縁端部及び上胴部に貝殻の先端でキザミを施す。中期末～後期初頭にかけてのものは凹線文の甕(94・97)、高杯(111)などが見られる。その他、器壁の薄い南四国型甕(95・96)も認められる。土器以外では石器も多量に出土しており(121～145)、石鏃(121)、石包丁(122～129)、石鎌(130・131)、石錐(132)、石斧(133～136・138・141～143)、石錘(137・139・140)、石棒(144・145)などが見られる。146は鑄造板状鉄斧であり、二条突帯を基部に持つ袋状鉄斧の断片を再加工しているものと考えられる。

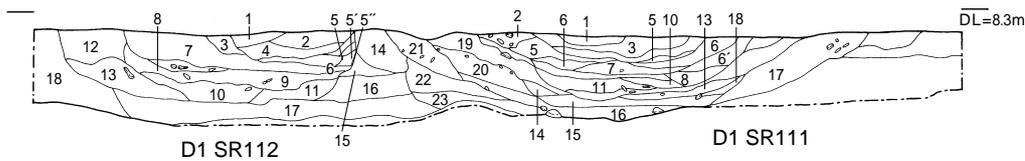
F5区では、調査区の西側を南に流れ、南部でF4区に折れる。前回の調査区Loc.34Bの調査で銅鏡が出土したSP1(溜り状)がこの屈折部分であると考えられる。出土遺物は弥生時代後期のものが主体を占める。甕では胴部外面にタタキ目があるもの(152)が認められる。F4区では、E6区で分岐した2条が調査区中央部で再び合流する。1条は、E6SR602からF4区北東部に続くF4SR401であり調査区内で弧状を呈する。もう1条はF5区内を蛇行しながら南に延び、F4区側に屈折しF4SR402と接続する。F4SR401の堆積を調査区北部のセクション(大溝2-12図)で見たい。基本的な堆積はシルトと砂・砂礫層で構成されており、-4層の褐灰色砂、-2層の褐灰色細砂に遺物が多量に含まれる。上層はI-1層の砂・礫混じりの黄褐色シルトが溝上面を覆う。A-A'ラインの所でSR402に切られる弥生時代前期土坑F4SK577を検出した。SR401の遺物は(大溝2-13図・14図)に図示した。161～164は壺である。161は上胴部に貝殻の先端を刺突し刻目状に施す。その下には細いヘラ状工具による波状文が施される。162は脚付の壺であると思われる。胴部は算盤玉状を呈し長頸である。胴部最大径の箇所及び脚部に櫛描沈線が施される。163・164は長頸の壺である。165～169は甕であり、166～168は凹線文の甕である。166の口縁部は上下に拡張され凹線文が施される。内面胴部中位以下にヘラ削りが認められる。168は外面は密なハケ調整が施され、内面は口縁部直下までヘラ削りが認められる。169は「く」の字に大きく外反し、上胴部に縦位の長いキザミが施される。170～174は鉢を(大溝2-15図)に図示した。170は器形的には甕にも分類できそうであるがここでは鉢として取り上げた。上げ底気味の底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字に外反する。胴部外面にはタタキ目が認められる。171～174は小型の鉢である。口縁部が外反するもの(171)、直線的に立ち上がるもの(172)、内湾するもの(173・174)が認められる。175～184は高杯を(大溝2-16図)に図示した。F4SR401からは高杯が多く出土している。特に北部からF4SR402との合流部にかけてからの出土の比率が高い。口縁部は直立し外面に凹線文が施されるもの(175)、口縁部がやや斜状外方に立ち上がり、端部に面を作り凹線文を施すもの(176・177)、口縁部が外反するもの(178～182)などが見られる。181は胎土が褐色を呈し、口縁部はつよい横位のナデにより内外面に段を有し、体部内外面には密なヘラミガキが施される。搬入品である。185は手炙り形土器の可能性があり、上位は欠損しているが、体部は袋状を呈する。体部外面に2条の断面三角形を呈した突帯を貼付し、突帯間に細い粘土帯を

4条程度縦方向に貼り付ける。底部は小さく蓋の摘み状を呈する。県内での出土例は管見がない。186～192は石器であるがSR401からは石器も多く出土している。186はサヌカイト製の打製石包丁である。両端に挟りが認められる。187は泥岩製の石包丁であり、背の部分は直接打撃で整形された後縁辺を研磨している。188は扁平石斧であり、基端部は欠損する。小型石斧で片刃であり刃部は摩滅が著しい。頁岩である。189も扁平片刃石斧であり、蛇紋岩製である。190は環状石斧の断片である。緑色岩であり、全面研磨が施される。穿孔部は両側穿孔である。191はサヌカイト製の平基式石鏃である。先端のみ鋸歯縁である。192はサヌカイト製の有茎石鏃である。193・194は平安時代末の遺物である。上層I層から出土した。193は土師器の杯であり、底部に回転糸切り痕が認められる。193は須恵器の壺である。次にF4SR402のセクションを見てみたい。調査区東部でのセクション(大溝2-12図)を見ると南側は古代の溝に切られる。2層までは砂礫層が認められレンズ状を呈した流水堆積であるが、北側はフラットな堆積を呈しており、底面はややテラス状を呈する。床面-3層で遺物が多量に出土した。主な出土遺物は(大溝2-15図)に図示したが様相的にはF4SR401と同じであり、弥生時代中期末～後期にかけてが主体を占める。凹線文が施された壺(196)、甕(198・199)などが見られる。202は大型の鉢であり、口縁部が「く」の字に外反する。石器では、サヌカイト製の凹基式石鏃(206)、蛇紋岩系の磨製石包丁(207)、片岩製の扁平片刃石斧(208)、器種は不明であるが砂岩に剥離調整、敲打による調整が認められる。これら2条の溝が合流する調査区中央部でのセクションを見るとSR401とSR402との切り合い部分は上層部を弥生時代の溝(F4SD412)に切られる。また、SR402上層部は古代の溝に切られる。ここでの断面形態はSR401はU字形を呈し、SR402は逆台形を呈する。この合流地点の溝底面では溝に直交するように幅8～12cmの細長い溝状のプランや直径5cm前後の円形杭穴が認められるが堰や柵状の遺構の可能性が考えられる。SR401の埋土はシルト・シルト質砂が主体であり、中層(-1・-3層)が砂礫層である。SR402はシルト・砂・砂礫層の互層堆積であり、恒常的に流水があったものと考えられる。この地点から南西方向の調査区に向かって2条の溝が切り合いながら延びるが、西側に隣接するF3・F2区(大溝2-16図・17図)ではレンズ堆積が三ヶ所に見られ、南から北に向かって溝の位置が移動しているのが確認できる。上層は古代末頃の溝が確認でき、この段階のF区上面に展開する遺構に関連する溝として捉えられる。この溝からは底部回転糸切り、輪高台を貼り付けた土師器碗(大溝2-16図216)が出土している。同地点ではF4SR402をF4SR401が切る。出土遺物は弥生時代中期末～後期にかけてのものが主体を占める。凹線文の壺(210・211)、高杯(219・221)などが見られる。222は土器に付く把手である。土器以外では鉄器の223の板状鉄斧が出土している。

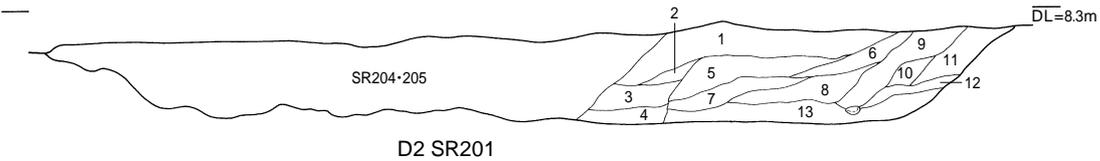
南部の調査区であるL～Q区では、L1からL3区・Q2区にかけて、4条に分離していく。平面プランでは北端の溝が、北側に張り出し、残り2条は直線的に延びる。L3区・Q2区のセクション(大溝2-19図・20図)では断面U字形、逆台形を呈した4条の溝が確認できる。L3区のセクションではSR301A～Dを図示したが、A Q2SD205、B Q2SD203、C Q2SR201に繋がる。Q区から南部のM区にかけては調査区全体に黒褐色粘土層が堆積しており地形的に低いものと思われ、溝はこの低い部分に流れて終わるものと思われる。また、大溝2の北部に弥生時代の遺構が集中しており、南部は当該期の遺構は皆無である。L1区では大溝2に取り付くように「コ」の字状の溝が見られるが、

F区の南部にも同様の溝が配置されており、大溝2に関連する遺構として捉えられる。L・Q区を通じてまとめて遺物が出土したのはL3SR301・Q2SR201からであり、弥生時代中期から後期にかけての遺物が出土した。L3SR301・Q2SR201は断面はU字形を呈し、シルトと砂礫の互層堆積であり恒常的な流水が考えられる。出土遺物は壺では凹線文、長頸壺などがあり、甕は胴部にタタキ目が残るものが見られる。また石器もまとめて出土しており、石鏃、石斧類が目立って出土している。

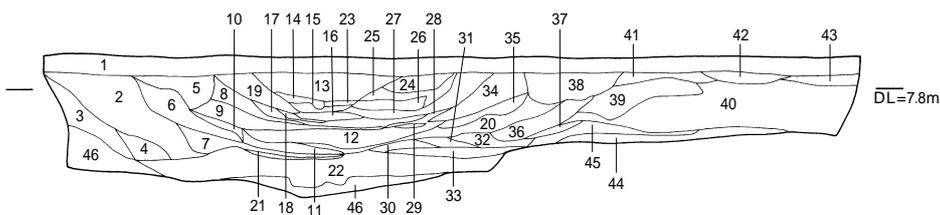
以上、大溝2を調査区ごとに概観してみたが北部の調査区(D・E)区では、弥生時代前期～中期にかけての一次堆積層が認められ、F・L・Q区にかけては中期末～後期が主体となる。E6区南部から南部調査区にかけては集落の縁辺に人為的に掘削して溝が構築されている。導水の経路は弥生時代を通じて調査区の北部から導水しており、各期の集落の立地に併せて地形の高低を利用し構築されている。



- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 暗褐色砂礫層(5~8mm大の礫、粗砂褐色シルト混) 2 灰褐色シルト(微粒砂) 3 暗褐色砂礫シルト(粗砂、5~8mm大の礫、黄色シルト) 4 暗灰色砂礫層(細砂、粗砂互層) 5 黄灰色シルト(微粒砂) 5 暗黄色シルト 5 灰黄色シルト(細砂) 6 灰色砂礫層(粗砂、5mm大の礫) 7 黄褐色シルト(黄灰色シルトベースに褐色シルト混) 8 暗褐色砂礫層(褐色粘土、粗砂、3~4cm大の礫混) 9 暗灰色砂礫層(遺物が多い) 10 暗灰黄色シルト(細砂、粘土質黄色シルト) 11 暗黄灰色砂礫シルト(黄色シルト、粗砂互層、2~3cm大の礫混) 12 暗褐色砂礫層(褐色シルトに5~10cm大の礫が多量に混入) 13 灰褐色シルト(灰褐色シルトに3~4cm大の礫混) 14 褐色シルト(5mm大の礫混) 15 灰黄色シルト(粘性有り) 16 黄灰色シルト(黄色シルト、細砂互層) 17 暗灰色砂礫層(粗砂、2~3cm大の礫、4~8cm大の礫下部は粘土質シルト) 18 灰褐色砂礫シルト(上層部12層ラインのところまで8~10cm大の礫が入る) | <ul style="list-style-type: none"> 1 暗褐色シルト 2 灰褐色砂質シルト(8mm大の礫混、土器集中) 3 淡黄灰色シルト 4 暗灰色砂質シルト(粗砂とシルト互層) 5 淡黄灰色粘土質シルト 6 褐色粘土質シルト(5~8mm大の礫含む) 6 灰褐色シルト(5~8mm大の礫混) 7 暗灰色砂礫層(微粒砂、粘土質シルト、8~10mm大の礫) 8 暗灰褐色粘土質シルト 9 明灰色粘土質シルト 10 褐色粘土質シルト 11 暗灰色砂質シルト(やや粘りのあるシルトに10cm大の礫をブロック状に含む) 12 黄灰色粘土質シルト(下部は砂質) 13 暗灰色砂礫層(粗砂、褐色粘土、2~3cm大の礫混) 14 淡黄灰色粘土質シルト 15 暗褐色砂礫層(粗砂、1~4cm大の礫混) 16 褐色砂礫層(灰褐色粘土10~20cm大の礫、Fe Mn 沈着層) 17 暗褐色シルト(粘性強い、4~5cm大の礫を少量含む) 18 灰褐色シルト 19 暗灰褐色シルト 20 暗褐色粘土質シルト(1cm大の礫、4~5cm大の礫混) 21 暗褐色粘土質シルト(4~5cm大の礫混) 22 暗灰褐色粘土質シルト(粘土、微粒砂) 23 褐色砂礫層 |
|--|--|



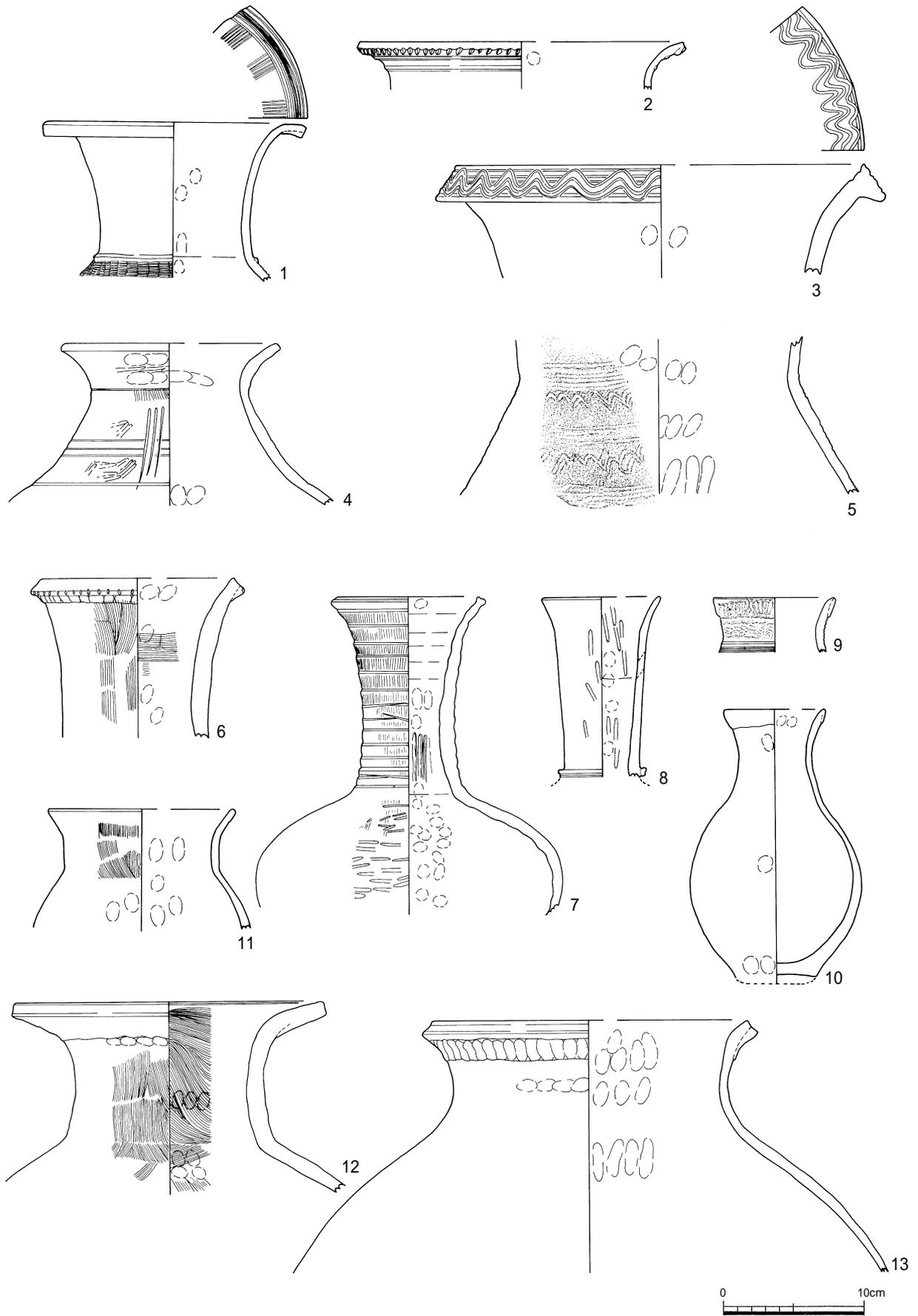
- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 黒褐色シルト(10cm大の礫と大きめの砂粒が入る) 2 黒褐色シルト(黄褐色シルトが混じる) 3 暗褐色シルト(礫を含む) 4 暗褐色シルト(砂礫が混じる、遺物を若干含む) 5 黒褐色シルト(10cm大の礫が入る、遺物を含む) 6 黒褐色シルト(小さめの礫が入る) | <ul style="list-style-type: none"> 7 暗褐色シルト(小石が入る、遺物を若干含む) 8 暗褐色シルト(小石が入る、遺物を若干含む、5cm大の礫が入る) 9 暗褐色シルト(小石が入る、遺物を若干含む) 10 暗褐色シルト(小石が入る、遺物を若干含む) 11 暗褐色シルト(黄灰色シルトが混じる、5cm大の礫が入る、遺物が少し入る) 12 暗褐色シルト(黄灰色シルトが混じる、炭化物が入る、遺物が少し入る) 13 砂礫層(10~15cm大の礫が入る) |
|---|---|



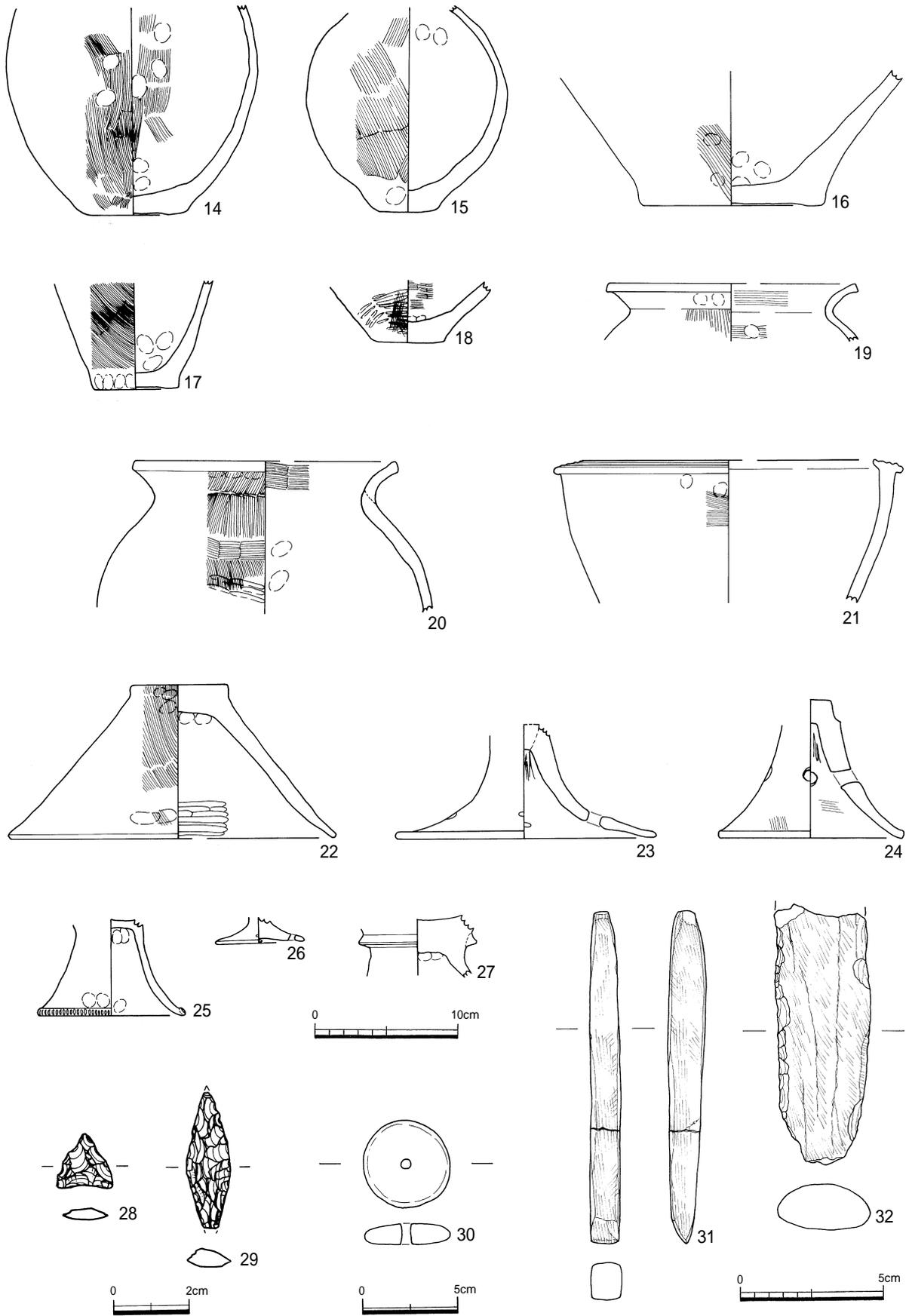
- | | | |
|--|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 耕作土(表土) 2 灰褐色砂質(2~5mm大の小礫と2~3cm大の礫含む土器を包含する) 3 暗褐色シルト(遺物包含層) 4 明灰褐色粘土 5 黄灰褐色砂質(2と同じ) 6 黄灰シルト 7 灰色砂層(遺物包含層) 8 黄褐色シルト(NM含) 9 黄灰シルト 10 暗黄褐シルト(2mm大の礫含む) 11 褐色砂層 12 灰色砂礫層(遺物多量に包含する1~2cm大の砂礫、5cm大の礫及び砂で構成) 13 暗褐色砂礫 14 灰色細砂 15 暗灰色砂礫層 16 黄灰粗砂 | <ul style="list-style-type: none"> 17 16に同じ 18 緑灰微粒砂 19 黄灰シルト 20 灰色粘土(砂質強い) 21 明灰色粘土 22 灰褐色砂礫(12と同じ) 23 褐色粗砂 24 黒褐色シルト(5mm大の礫を含む) 25 黄褐色シルト(5mm大の礫を含む) 26 灰色砂礫(5mm~1cm大の砂) 27 緑黄灰色シルト 28 黄灰シルト 29 灰色砂礫 30 灰褐色シルト(砂1cm大の礫、遺物含む) 31 灰黄褐色シルト(砂、遺物含む) 32 灰色シルト(砂多い) | <ul style="list-style-type: none"> 33 灰褐色砂質(遺物包含層) 34 褐色シルト(遺物1cm以下の礫、砂) 35 明黄褐色粘質 36 暗灰褐色砂質 37 黄灰褐色粘質(遺物、砂含む) 38 暗褐色砂質(遺物含む) 39 暗褐シルト(遺物、砂含む) 40 灰褐色シルト(遺物含む) 41 褐色粘土質 42 黒褐色シルト(遺物含む) 43 褐色シルト 44 暗灰色砂礫 45 暗黄褐色シルト(粘性強) 46 黄色シルト(流路床面は粘性が強い) |
|--|---|--|



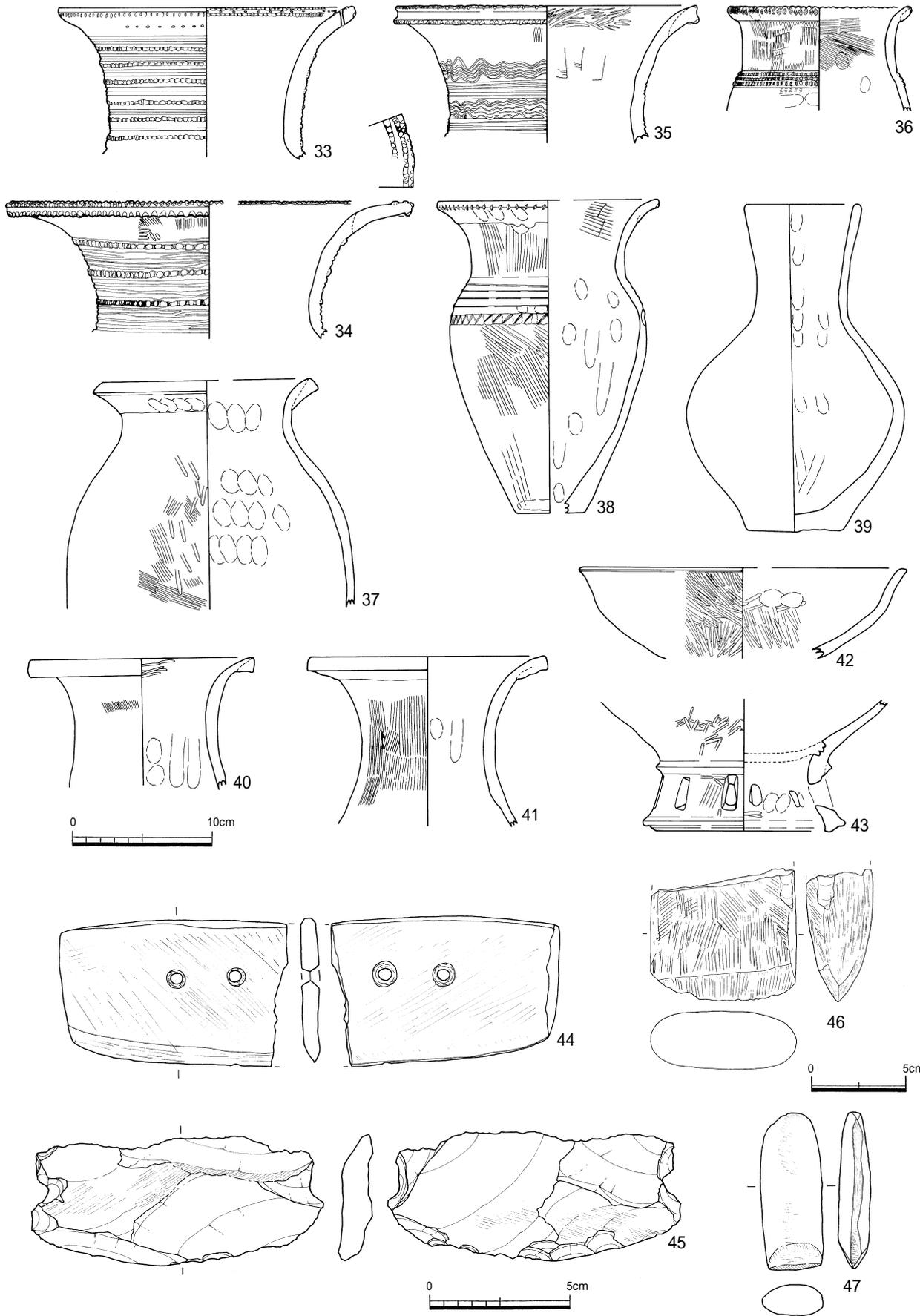
大溝2 - 1 図 D1 区SR112・D2区SR201・E3区SR302



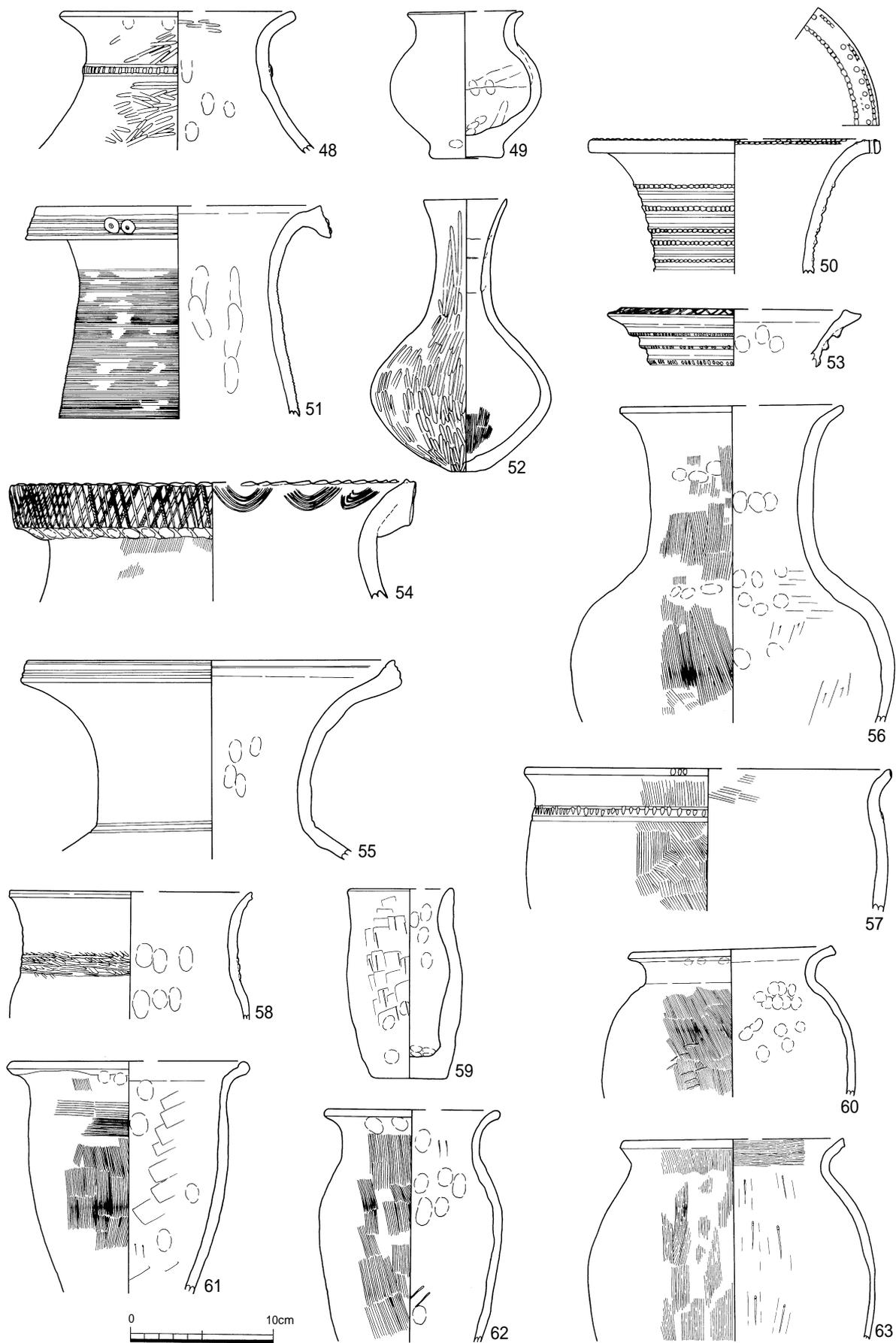
大溝2 - 2图 D1区SR112(1)



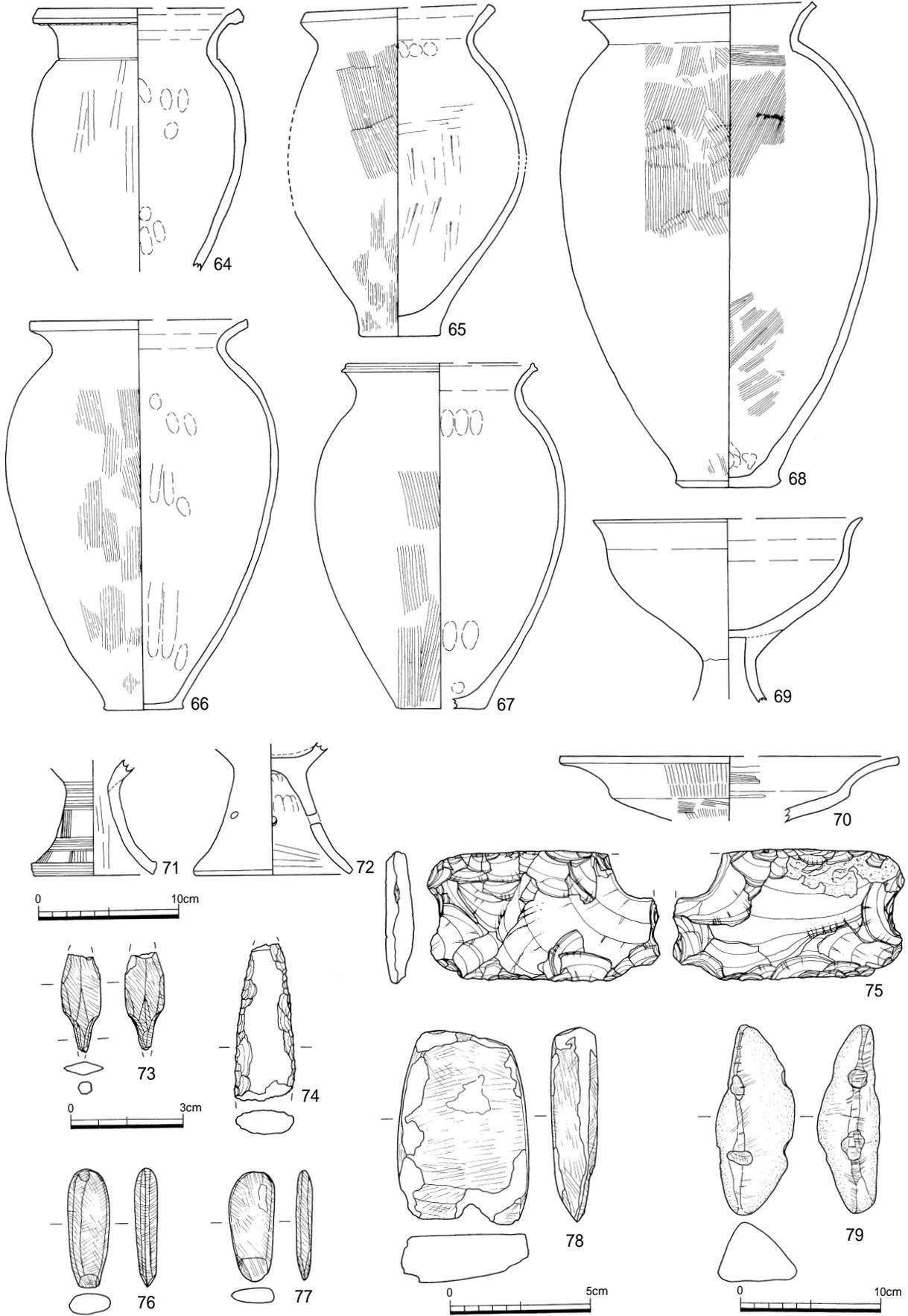
大溝2 - 3 圖 D1区SR112(2)



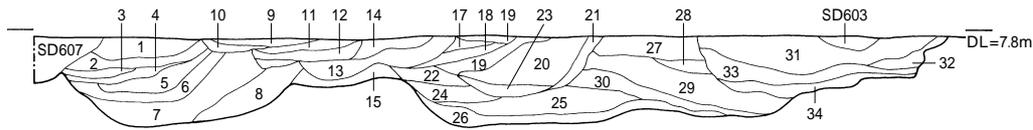
大溝2 - 4 图 D2 区SR201



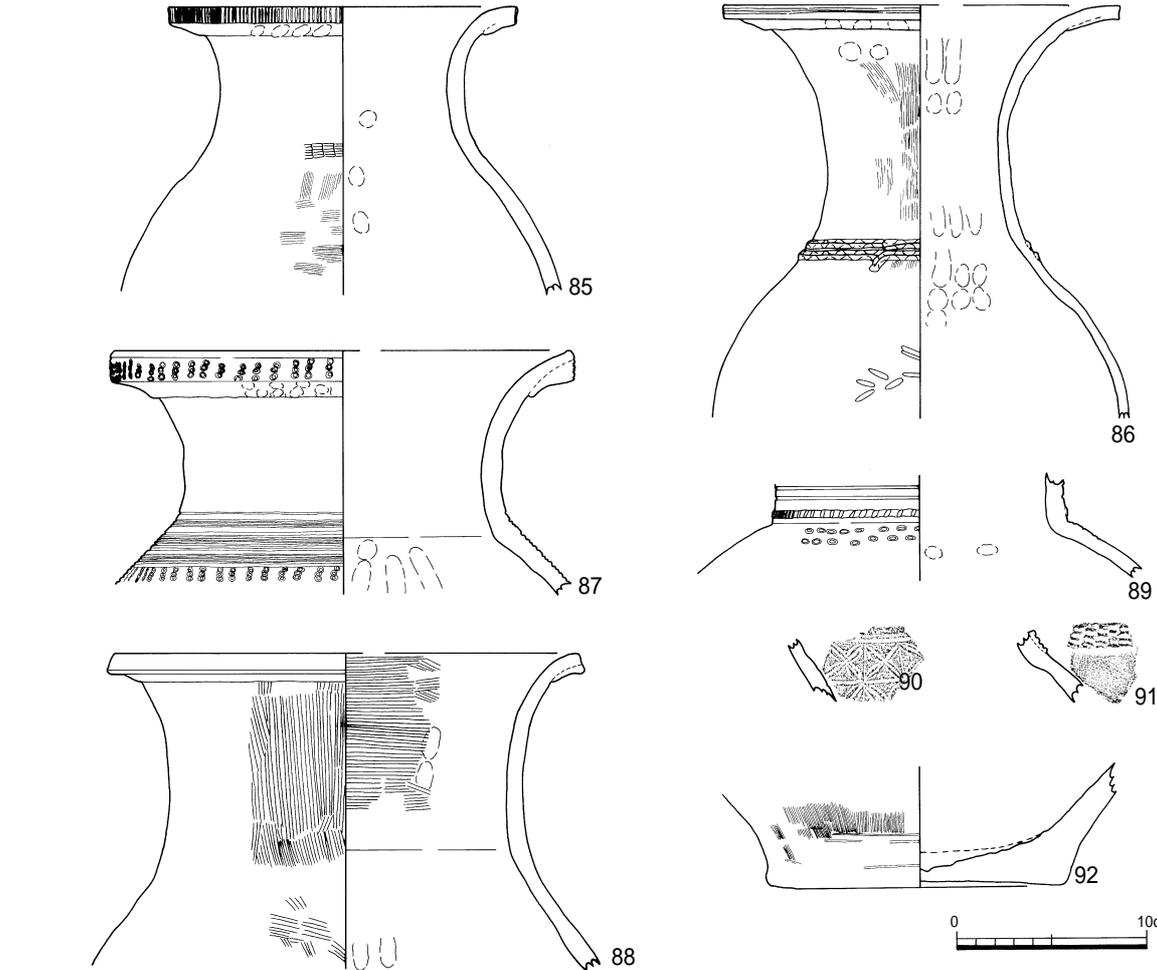
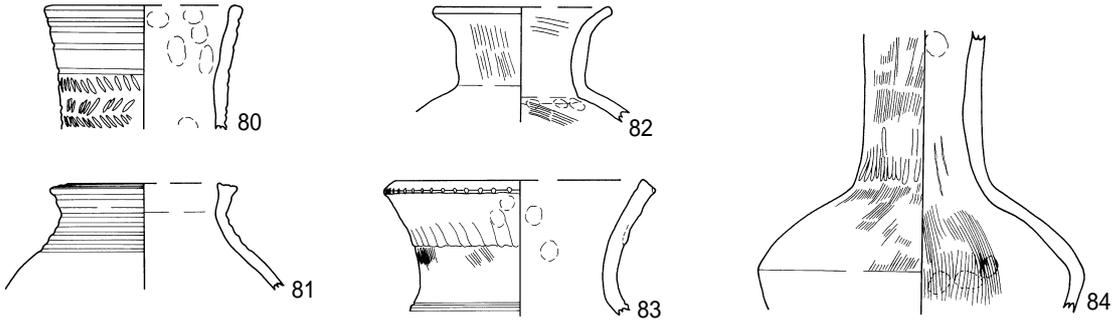
大溝2 - 5 图 E3区SR302(1)



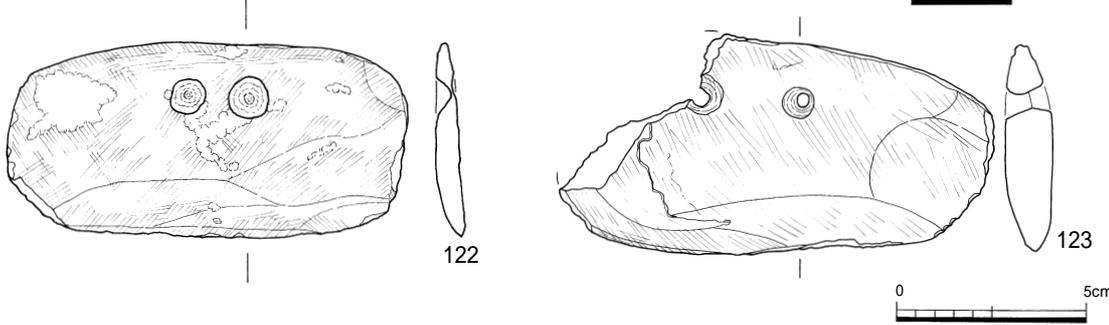
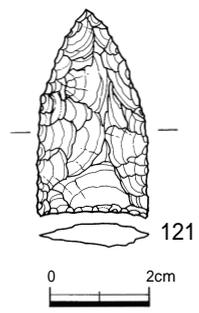
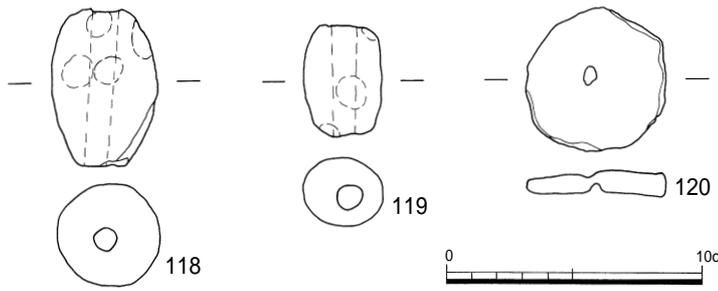
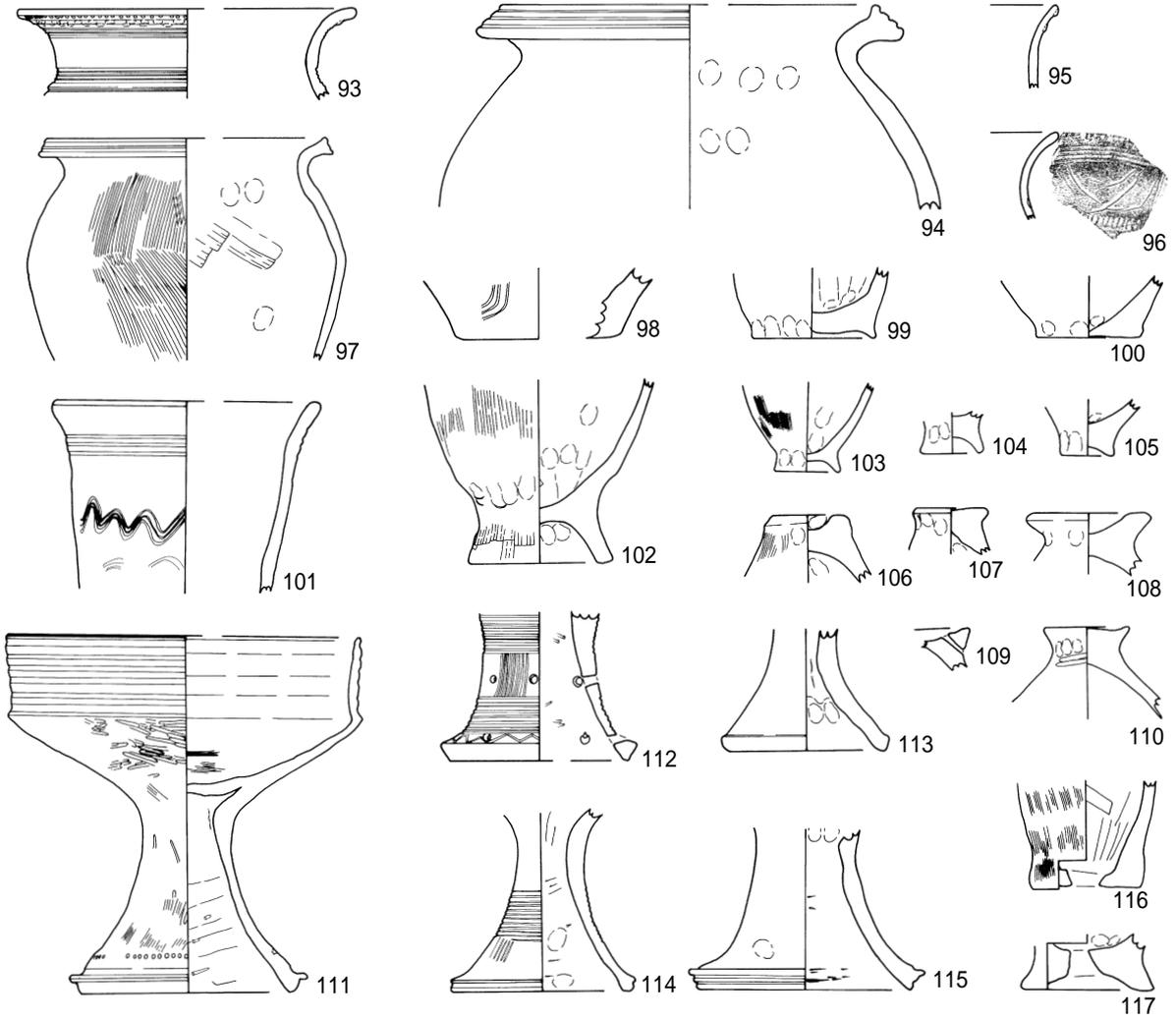
大溝2 - 6图 E3区SR302(2)



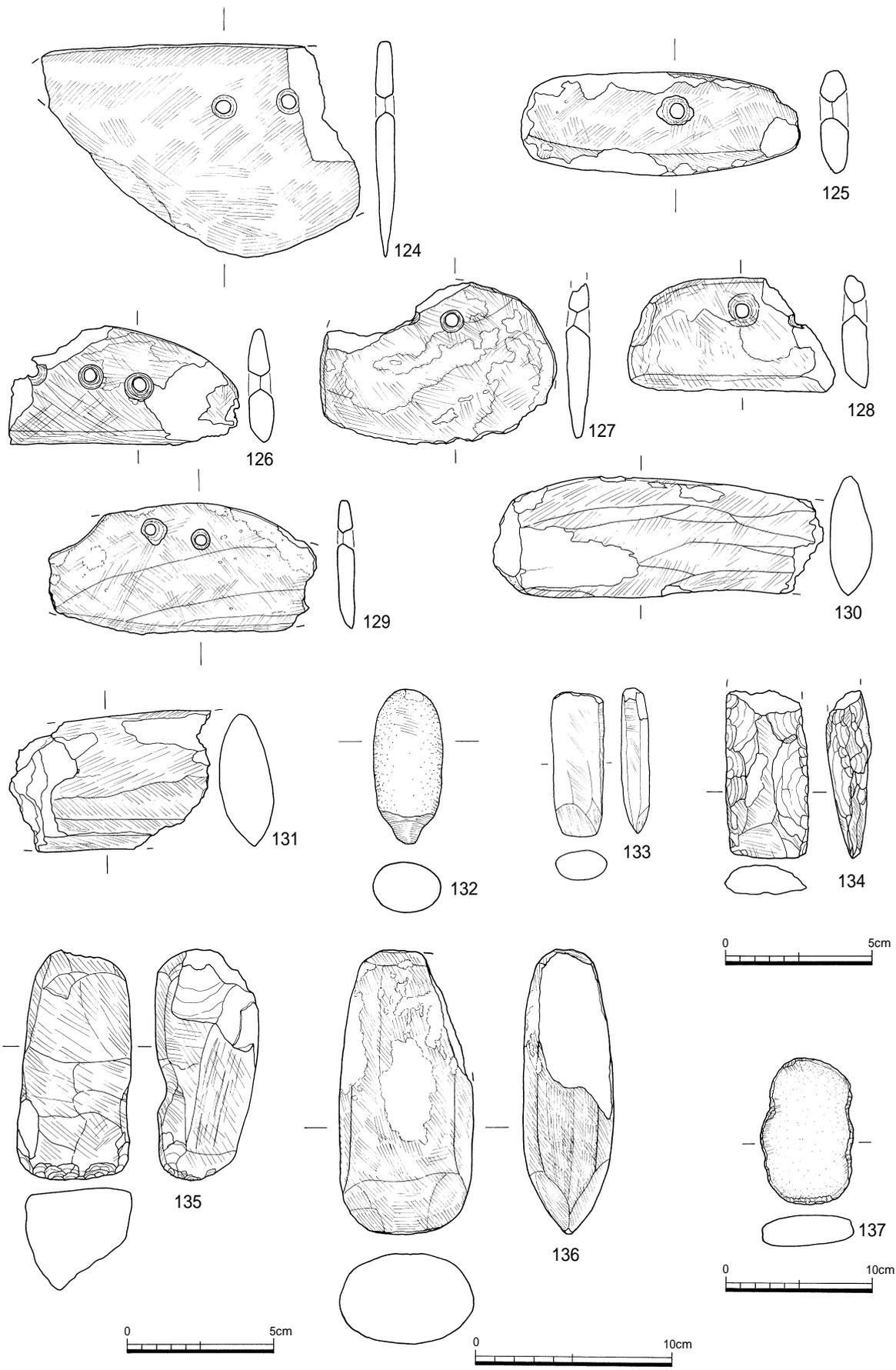
- | | | |
|-----------------------------------|-----------------------------|-------------------------|
| 1 オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y4/4) | 12 暗オリーブ褐色礫質砂(2.5Y3/3) | 23 暗オリーブ褐色砂(2.5Y3/3) |
| 2 暗オリーブ褐色礫質砂(2.5Y3/3) | 13 暗オリーブ褐色砂(2.5Y3/3) | 24 暗灰黄色粘土質シルト(2.5Y4/2) |
| 3 暗オリーブ褐色砂(2.5Y3/3) | 14 暗灰黄色礫質砂(2.5Y4/2) | 25 オリーブ褐色礫質砂(2.5Y4/4) |
| 4 オリーブ褐色砂(2.5Y4/3) | 15 暗灰黄色粘土質シルト(2.5Y4/2) | 26 オリーブ褐色シルト質砂(2.5Y4/4) |
| 5 黒褐色砂(2.5Y3/2) | 16 オリーブ褐色砂質礫(2.5Y4/4) | 27 黄褐色砂質シルト(2.5Y5/4) |
| 6 オリーブ褐色シルト質砂(2.5Y4/3) | 17 リーブ褐色砂(2.5Y4/4) | 28 オリーブ褐色砂質礫(2.5Y4/4) |
| 7 オリーブ褐色シルト質砂(2.5Y4/3)に褐色シルト質砂混じる | 18 暗オリーブ褐色砂(2.5Y3/3) | 29 オリーブ褐色礫質砂(2.5Y4/4) |
| 8 オリーブ褐色シルト質砂(2.5Y4/3) | 19 暗オリーブ褐色砂質礫(2.5Y3/3) | 30 オリーブ褐色砂質礫(2.5Y4/4) |
| 9 暗オリーブ褐色礫質砂(2.5Y3/3) | 20 オリーブ褐色砂(2.5Y4/4)と礫が互層に堆積 | 31 オリーブ褐色砂(2.5Y4/4) |
| 10 暗オリーブ褐色砂(2.5Y3/3) | 21 オリーブ褐色粘土質シルト(2.5Y4/4) | 32 暗褐色礫質砂(10YR3/3) |
| 11 オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y4/4) | 22 暗灰黄色粘土質シルト(2.5Y4/2) | 33 オリーブ褐色砂(2.5Y4/4) |



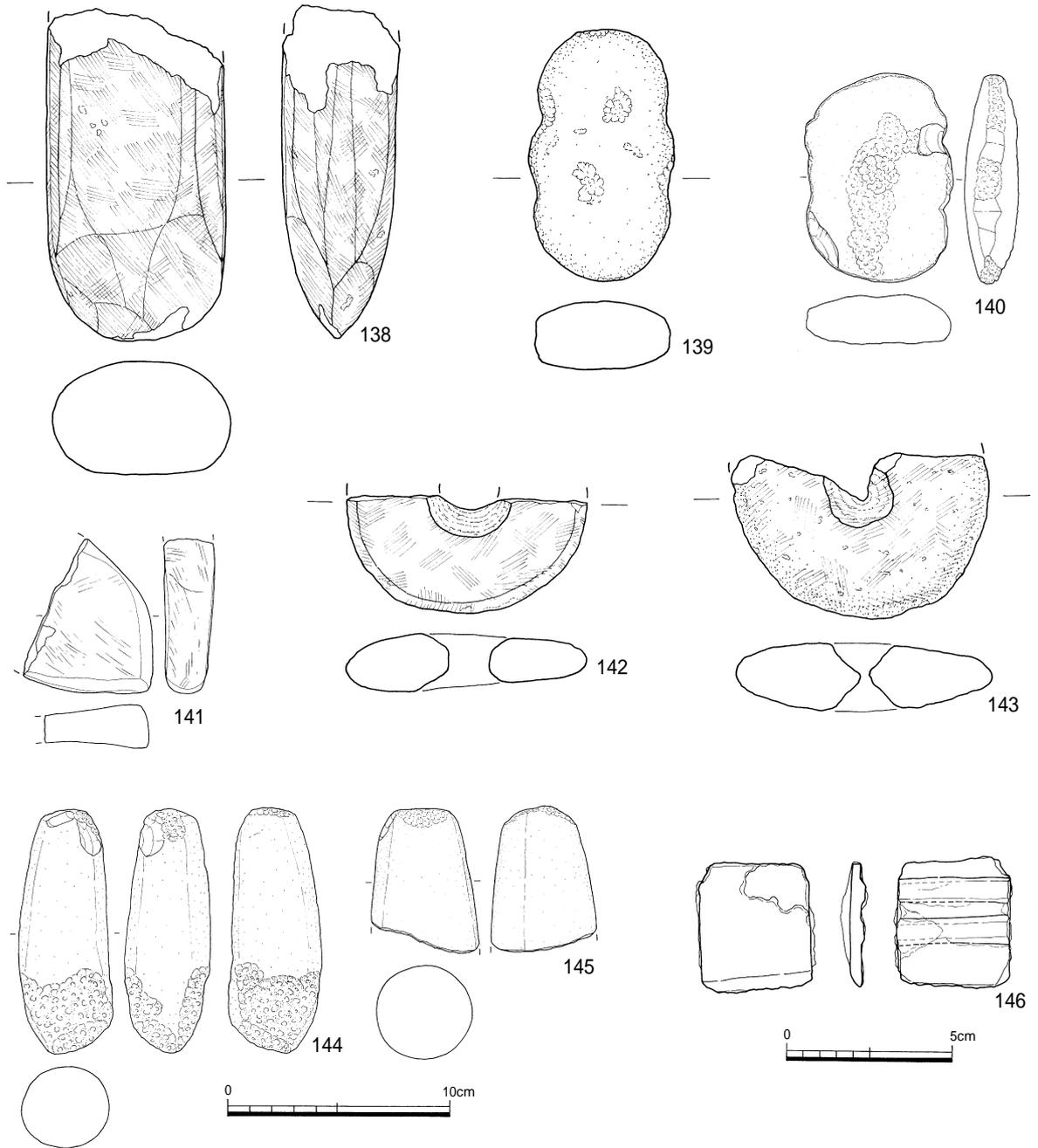
大溝2 - 7 図 E6区SR602(1)



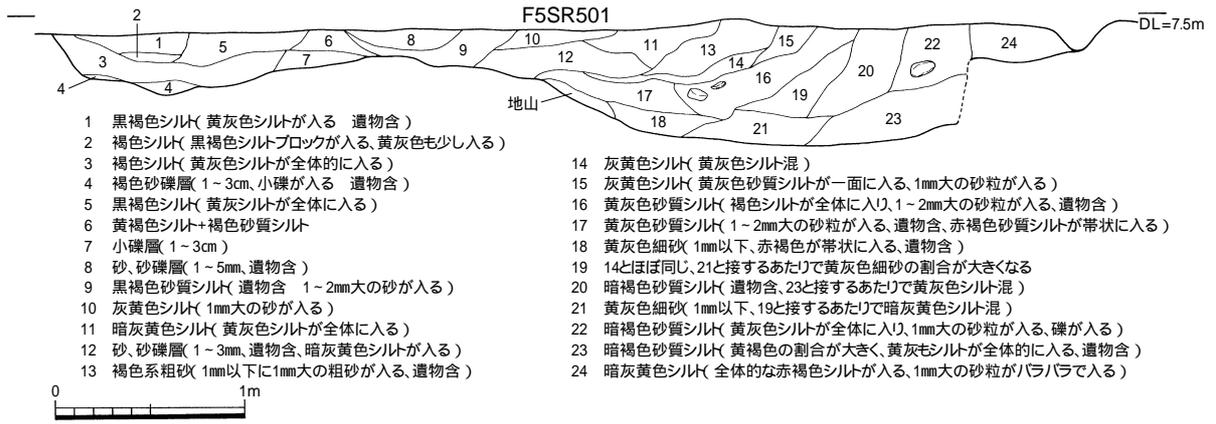
大溝2 - 8图 E6区SR602(2)



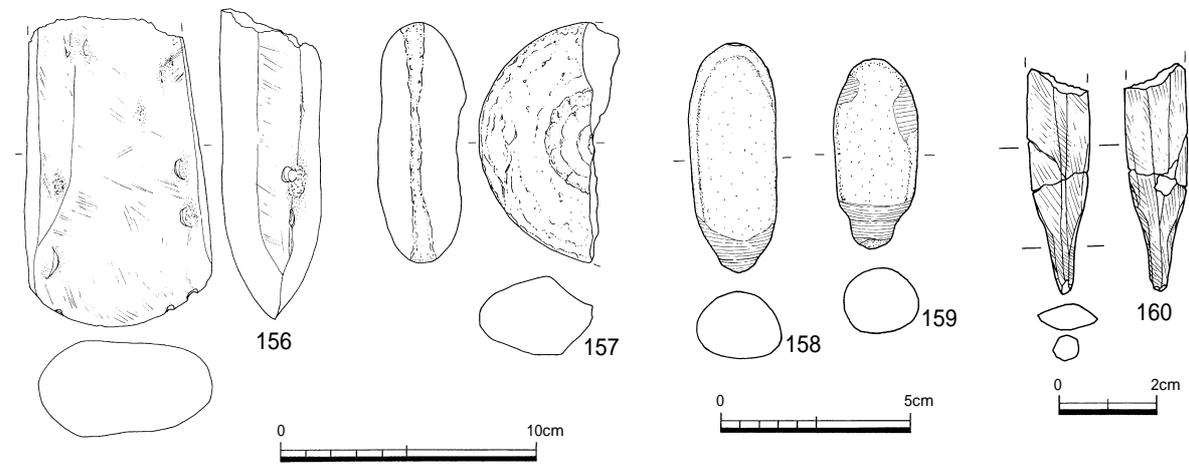
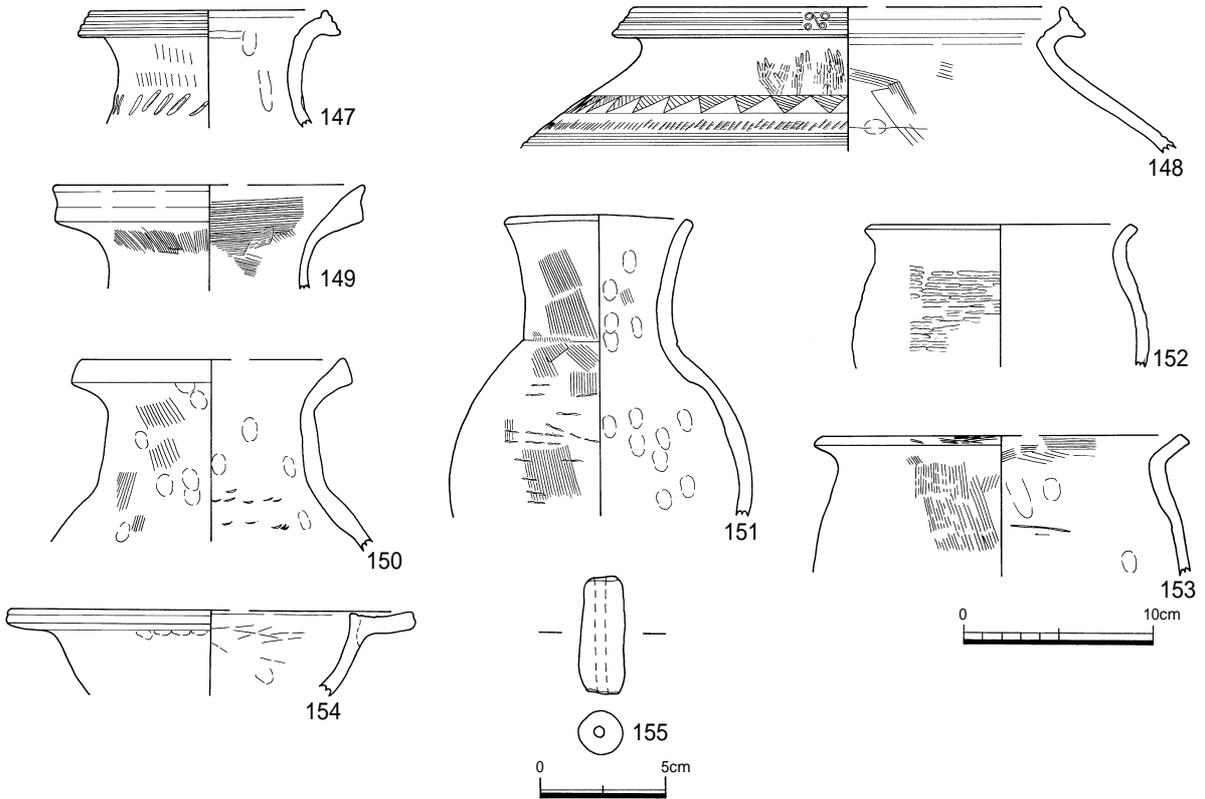
大溝2 - 9 圖 E6 区SR602(3)



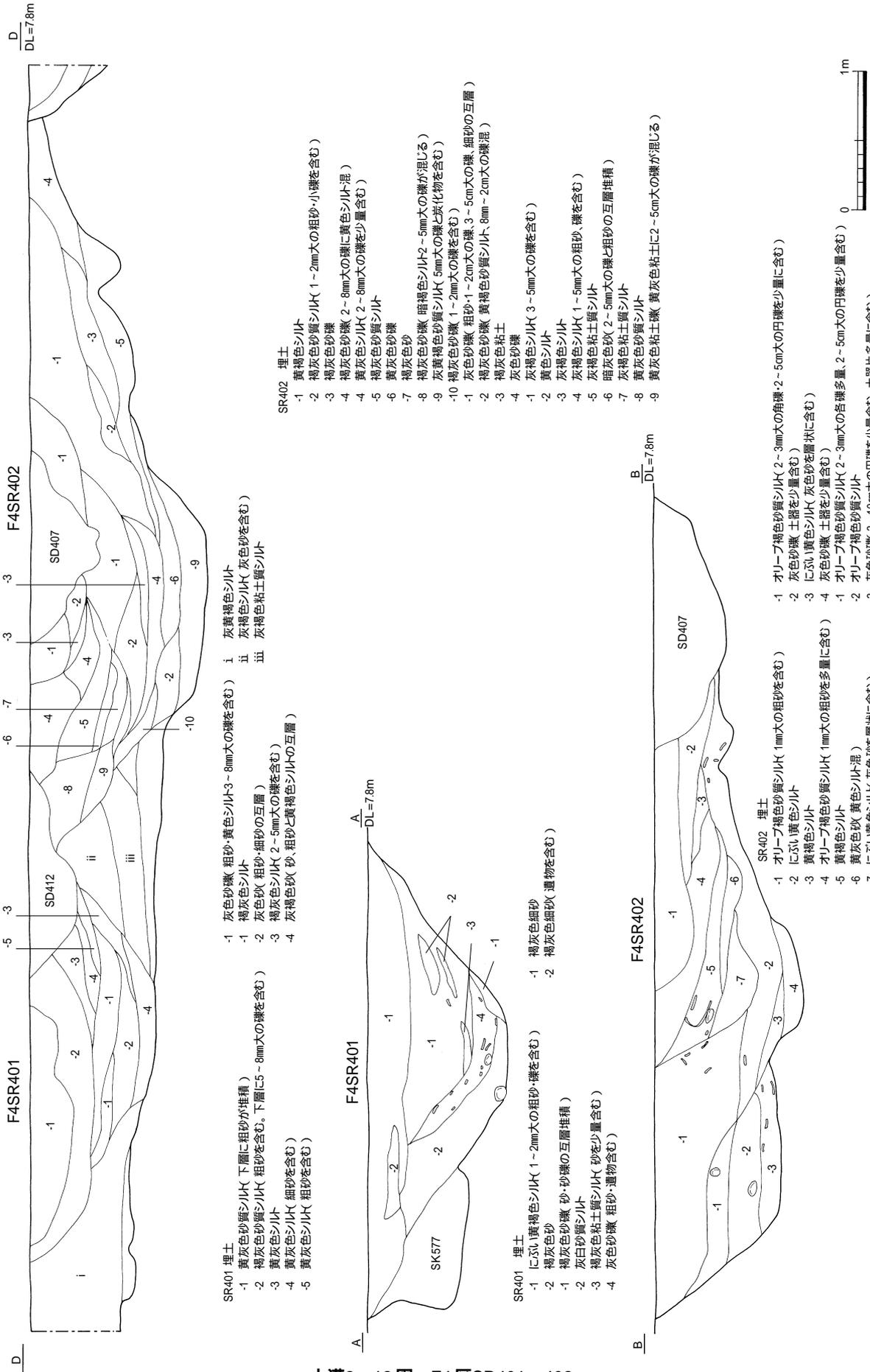
大溝2 - 10 図 E6区SR602(4)



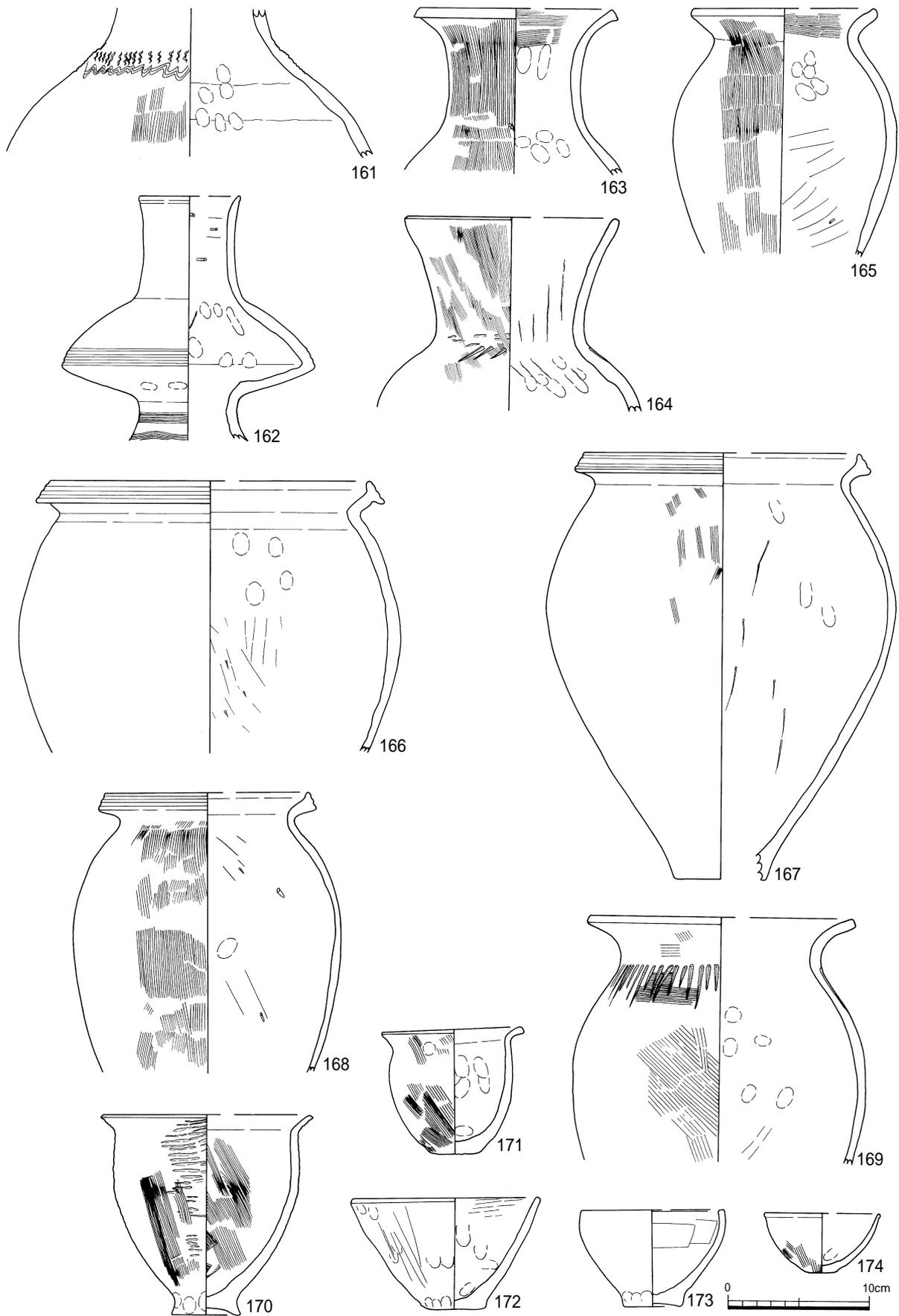
- | | |
|---|---|
| <p>1 黒褐色シルト(黄灰色シルトが入る 遺物含)</p> <p>2 褐色シルト(黒褐色シルトブロックが入る、黄灰色も少し入る)</p> <p>3 褐色シルト(黄灰色シルトが全体的に入る)</p> <p>4 褐色砂礫層(1~3cm、小礫が入る 遺物含)</p> <p>5 黒褐色シルト(黄灰シルトが全体的に入る)</p> <p>6 黄褐色シルト+褐色砂質シルト</p> <p>7 小礫層(1~3cm)</p> <p>8 砂、砂礫層(1~5mm、遺物含)</p> <p>9 黒褐色砂質シルト(遺物含 1~2mm大の砂が入る)</p> <p>10 灰黄色シルト(1mm大の砂が入る)</p> <p>11 暗灰黄色シルト(黄灰色シルトが全体的に入る)</p> <p>12 砂、砂礫層(1~3mm、遺物含、暗灰黄色シルトが入る)</p> <p>13 褐色系粗砂(1mm以下に1mm大の粗砂が入る、遺物含)</p> | <p>14 灰黄色シルト(黄灰色シルト混)</p> <p>15 灰黄色シルト(黄灰色砂質シルトが一面に入る、1mm大の砂粒が入る)</p> <p>16 黄灰色砂質シルト(褐色シルトが全体的に入り、1~2mm大の砂粒が入る、遺物含)</p> <p>17 黄灰色砂質シルト(1~2mm大の砂粒が入る、遺物含、赤褐色砂質シルトが帯状に入る)</p> <p>18 黄灰色細砂(1mm以下、赤褐色が帯状に入る、遺物含)</p> <p>19 14とほぼ同じ、21と接するあたりで黄灰色細砂の割合が大きくなる</p> <p>20 暗褐色砂質シルト(遺物含、23と接するあたりで黄灰色シルト混)</p> <p>21 黄灰色細砂(1mm以下、19と接するあたりで暗灰黄色シルト混)</p> <p>22 暗褐色砂質シルト(黄灰色シルトが全体的に入り、1mm大の砂粒が入る、礫が入る)</p> <p>23 暗褐色砂質シルト(黄褐色の割合が大きく、黄灰もシルトが全体的に入る、遺物含)</p> <p>24 暗灰黄色シルト(全体的な赤褐色シルトが入る、1mm大の砂粒がバラバラで入る)</p> |
|---|---|



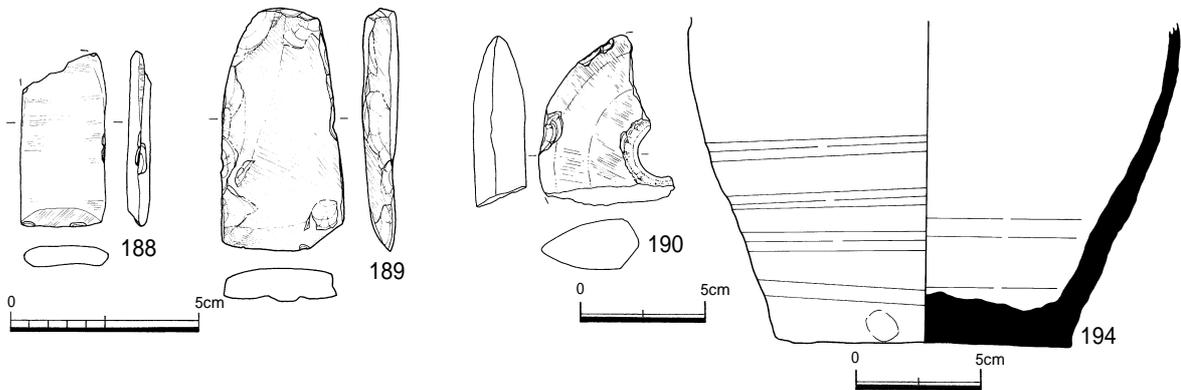
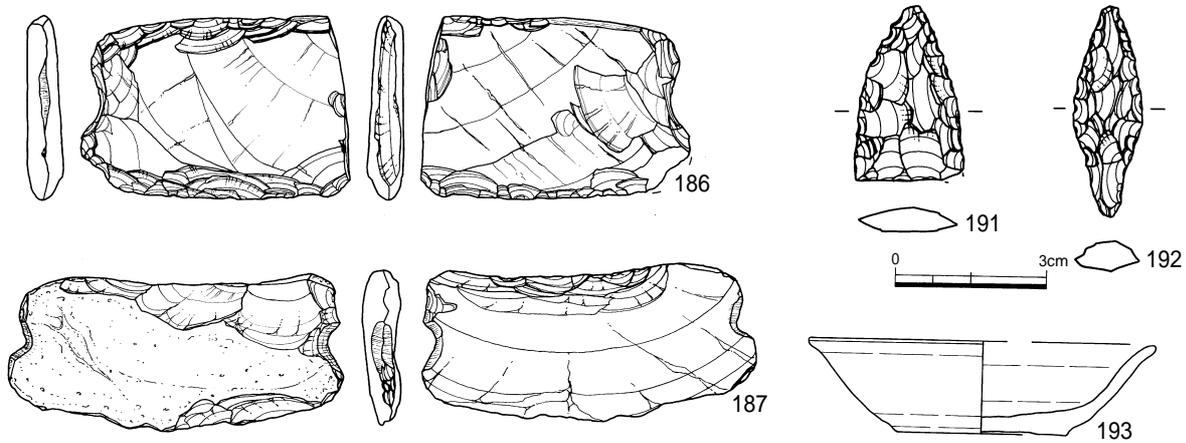
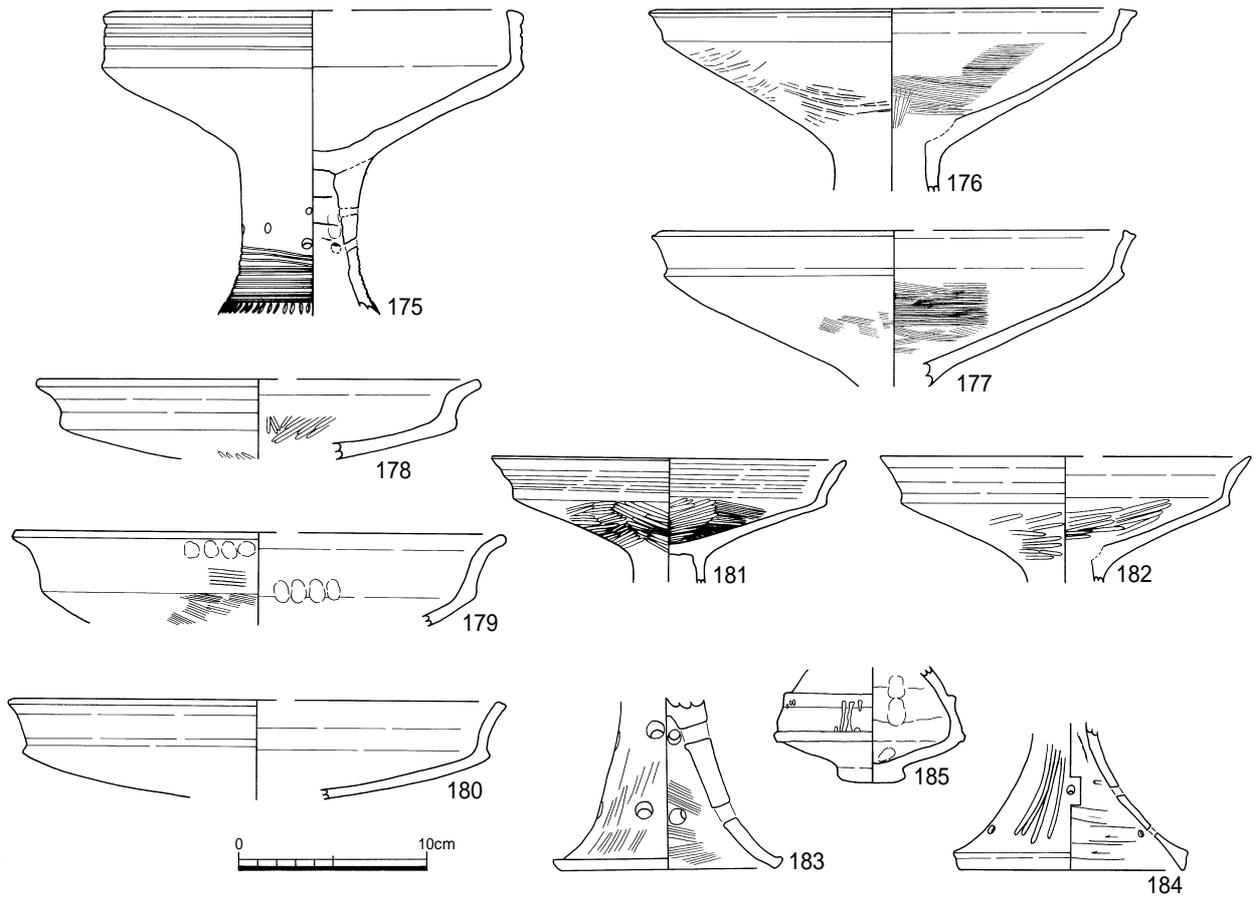
大溝2 - 11 図 F5区SR501



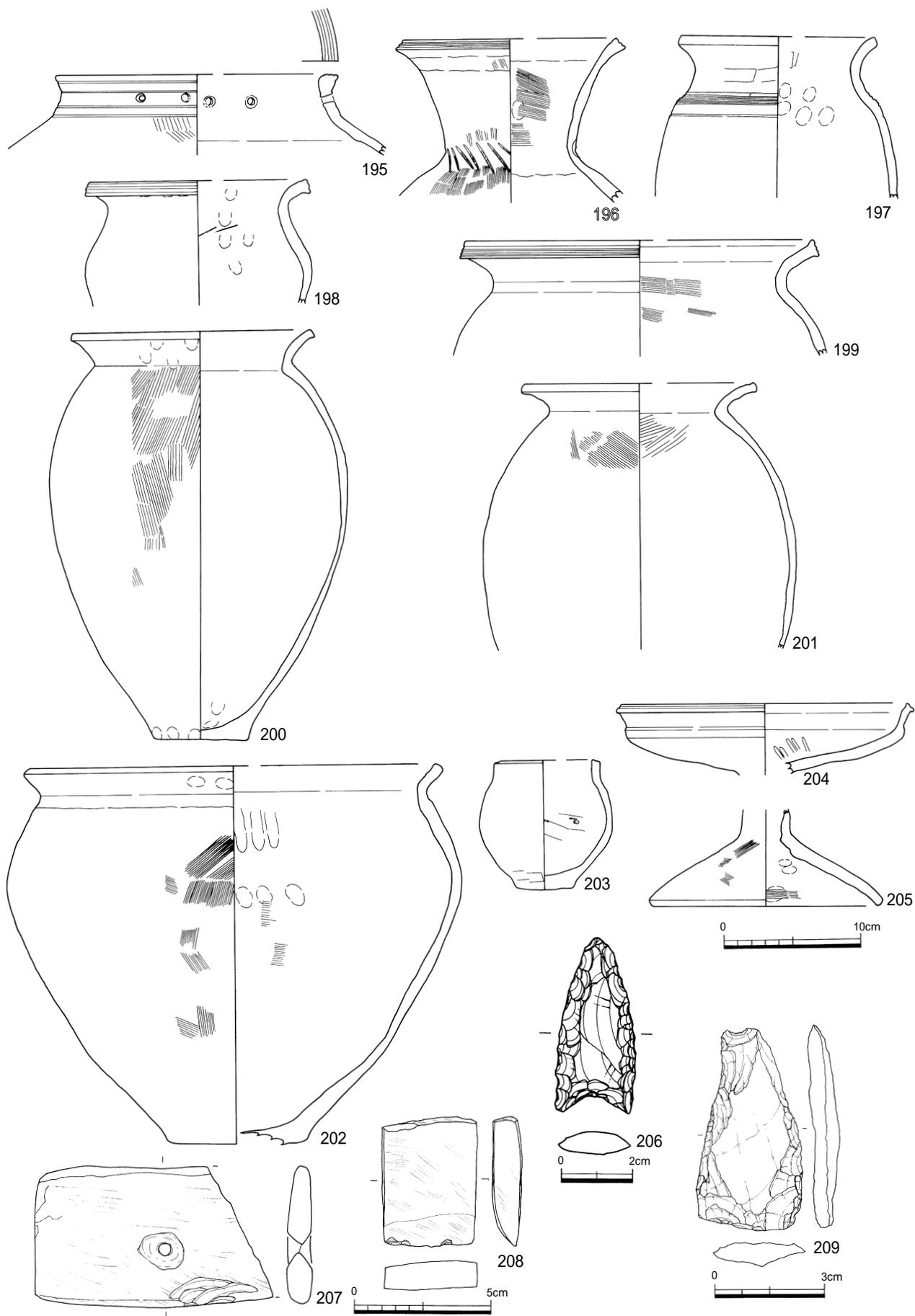
大溝2 - 12 図 F4区SR401・402



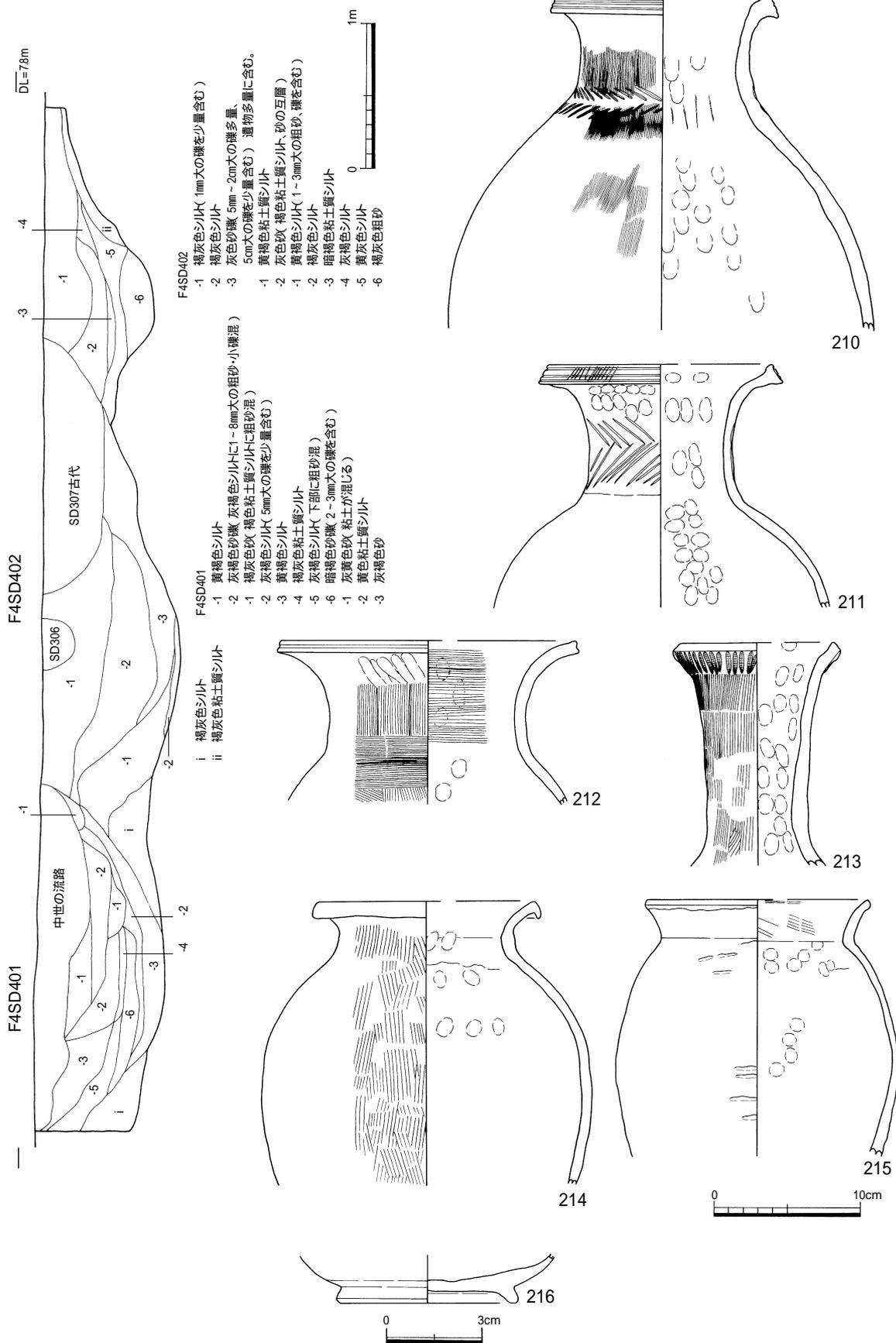
大溝2 - 13 图 F4 区SR401(1)



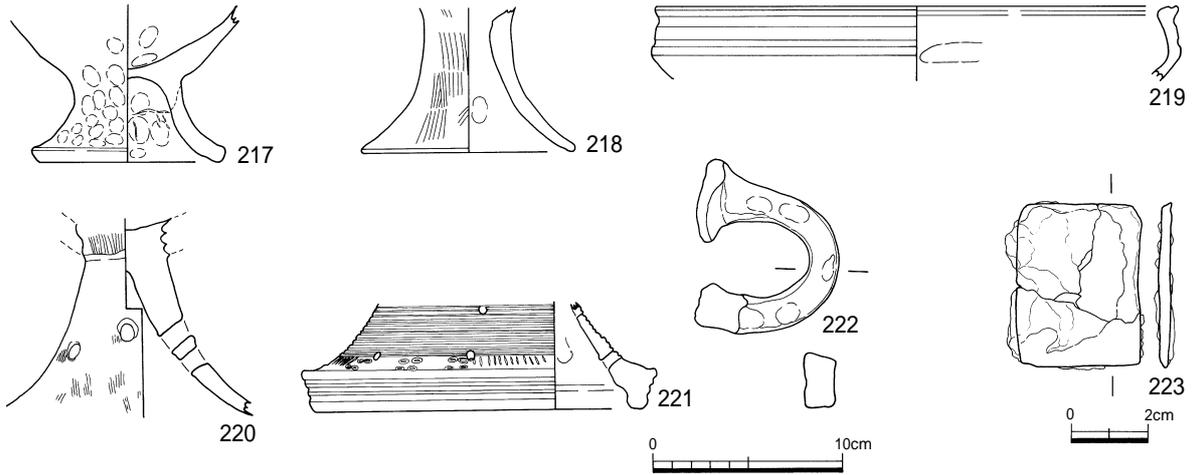
大溝2 - 14 図 F4 区SR401(2)



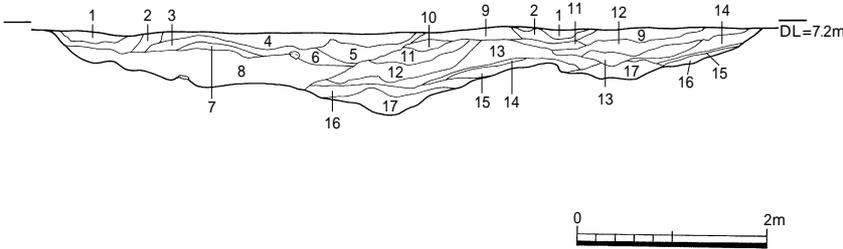
大溝2 - 15 图 F4 区SR402



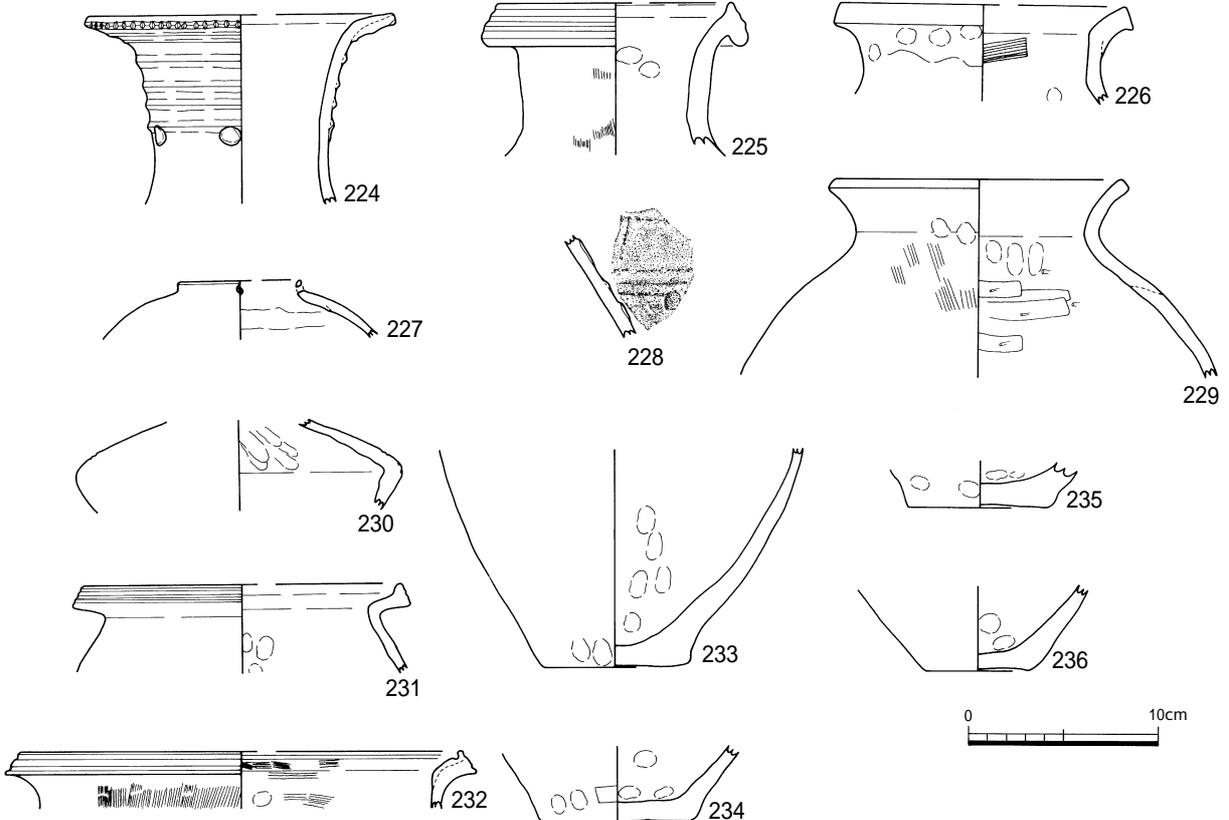
大溝2 - 16図 F3区SR301



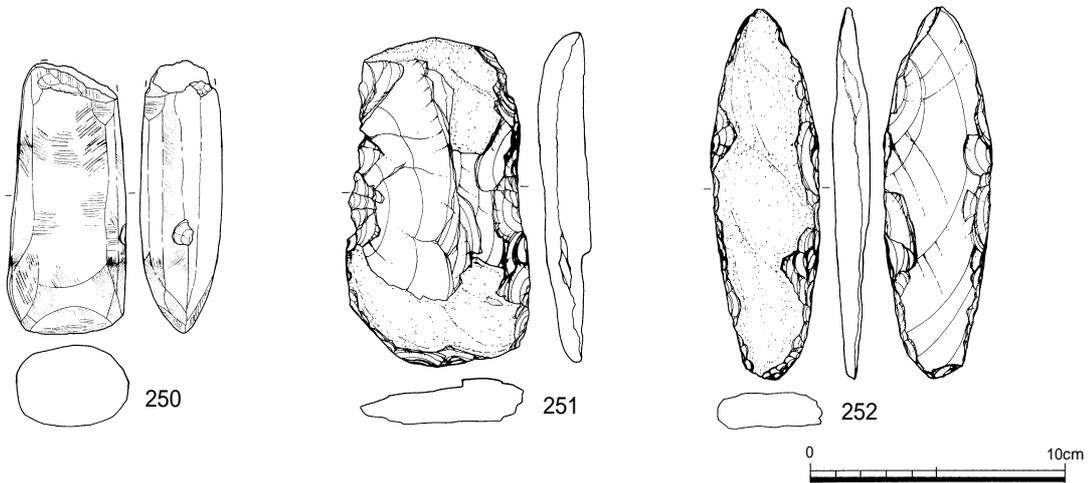
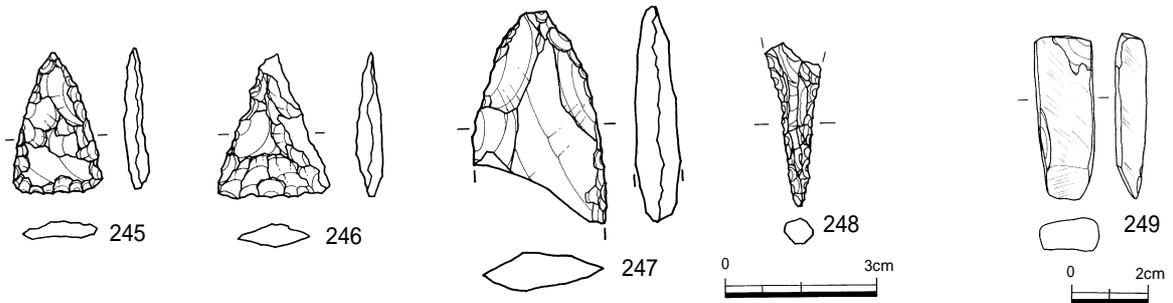
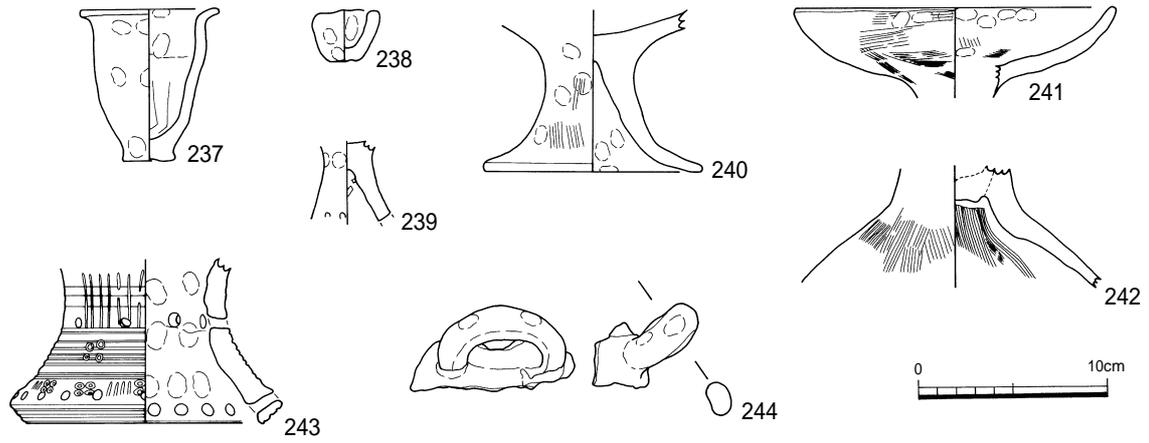
F2SR201



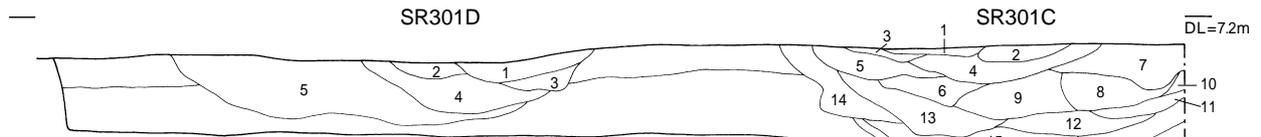
- 1 オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y4/3)
- 2 暗オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y3/3)
- 3 暗灰黄色砂(2.5Y4/2)
- 4 オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y4/4)
- 5 青灰色砂質礫
- 6 青灰色礫質砂に灰黄褐色シルトブロック混じる
- 7 にぶい黄褐色シルト
- 8 青灰色砂質礫とにぶい黄褐色シルトが互層に堆積
- 9 にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)
- 10 砂層
- 11 灰黄褐色シルト(10YR4/2)
- 12 灰黄褐色シルト(10YR4/2)に暗灰黄色砂混じる
- 13 にぶい黄褐色シルト(10YR5/3)
- 14 褐色粘土質シルト(10YR4/4)
- 15 にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)
- 16 にぶい黄褐色シルト質砂(10YR4/3)
- 17 青灰色礫質砂ににぶい黄褐色シルトが混じる



大溝2 - 17 図 F2区SR202・L1区SR107(1)



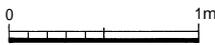
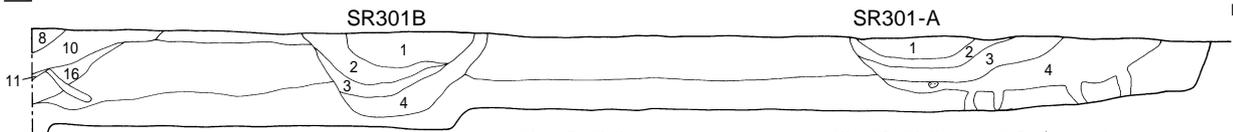
大溝2 - 18 図 L1 区SR107(2)



- 1 黄灰シルト質砂 (1~4mmの礫混)
- 2 灰色シルト質砂 (1~10mmの礫混、土器混、灰褐ブロック少量混)
- 3 灰色シルト質砂 (他の層より色が淡、1~4mmの礫少量混)
- 4 灰色シルト質砂 (1~7mmの礫少量混、灰褐ブロック混)
- 5 灰褐砂質シルト

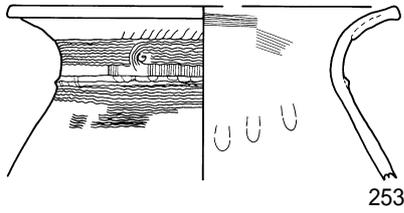
- 1 橙砂質シルト(1~10mmの礫、暗褐ブロック混)
- 2 灰黄砂質シルト
- 3 灰黄砂質シルト(上層部は橙ブロック有)
- 4 砂礫層(1~4mmの層と1~10mmの礫層有、土器混)
- 5 黄灰シルト質砂(1~8mmの礫少量混)
- 6 砂礫層(1~20mm礫多量混、土器混)
- 7 灰黄砂質シルト(層の下あたりに礫少量混)
- 8 灰色砂 1~5mmの礫混、灰褐シルトブロック混)
- 9 灰褐シルト質砂(1~10mmの礫混、土器混)
- 10 黄灰褐砂質シルト
- 11 褐灰砂質シルト
- 濃灰色砂(1~5mmの礫少量混、土器混)

- 13 黄褐灰砂質シルト(黄強、微粒砂)
- 14 褐灰砂質シルト
- 15 灰色シルト質砂(土器、炭化物混、細砂、1~10mmの礫混)
- 16 灰褐シルト質砂
- 17 灰色砂質シルト(土器混、細砂)
- 18 灰色シルト質砂(1~5mmの礫、土器混)
- 19 濃灰色砂質シルト(炭化物土器1~20mm)
- 20 灰色シルト質砂(細砂)
- 21 灰色シルト質砂(炭化物混)

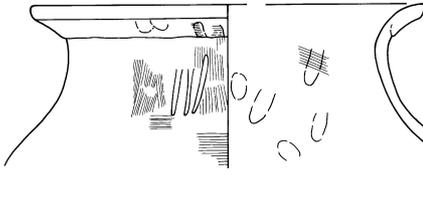


- 1 淡褐灰砂質シルト
- 2 灰褐砂質シルト(粗砂混)
- 3 褐灰砂質シルト
- 4 暗砂質シルト(黄ブロック、炭化物混)

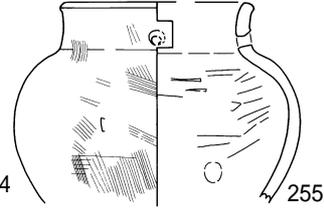
- 1 黄褐灰砂質シルト(土器、粗砂ブロック混)
- 2 暗褐灰砂質シルト
- 3 黄褐灰砂質シルト(層より色が濃)
- 4 暗褐灰砂質シルト(層より色が濃、炭化物混)



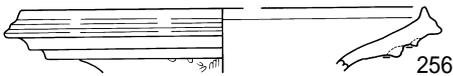
253



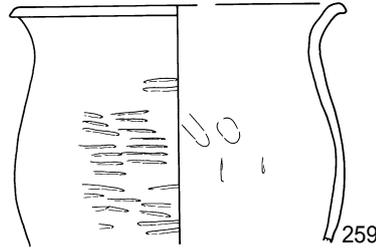
254



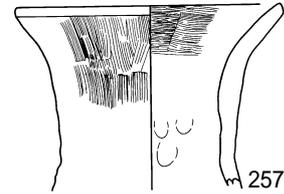
255



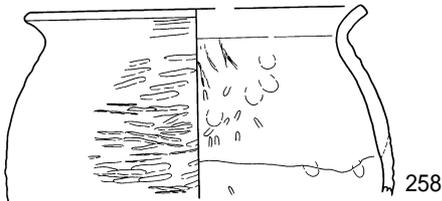
256



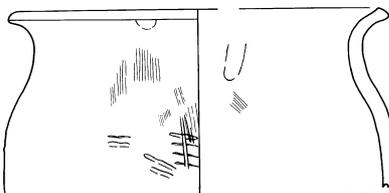
259



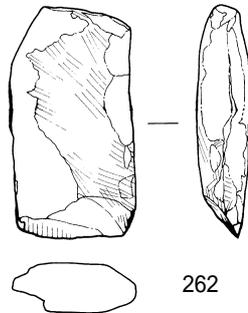
257



258



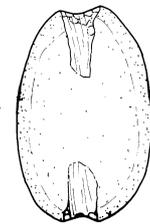
260



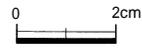
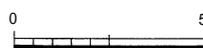
262



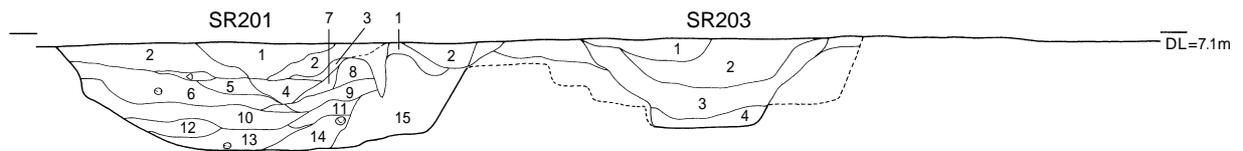
263



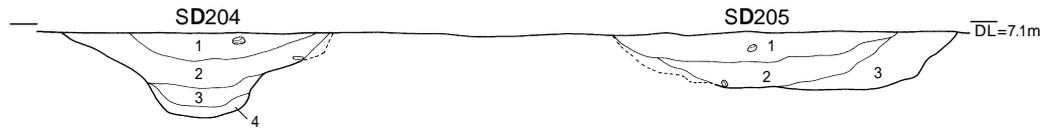
264



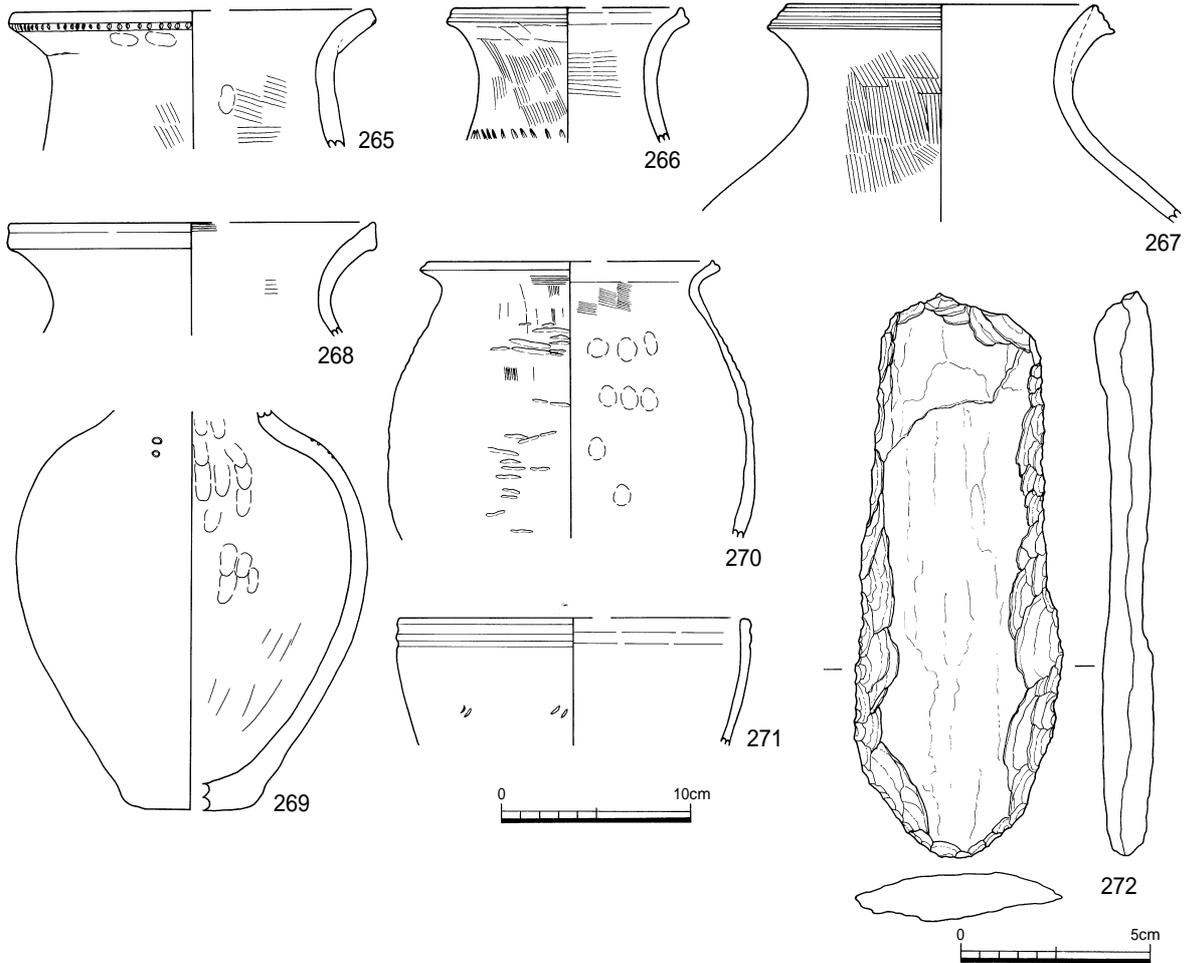
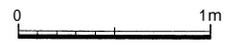
大溝2 - 19 図 L3区SR301A~C



- | | | |
|--|----------------------------|-------------------------|
| 1 明灰色砂質シルト (Fe含む) | 10 暗灰色砂層 (粗砂0.5mm大) (Fe含む) | 1 明黄灰色シルト |
| 2 暗灰褐色砂礫層 (灰色シルト、粗砂1-5mm大の小礫を含む) | 11 灰褐色粘性シルト | 2 明褐灰色砂質シルト |
| 3 灰色砂層 (細砂、下層部に鉄分 [Fe] 沈着) | 12 赤褐灰色砂層 (粗砂、Fe沈着) | 3 暗灰褐色シルト (炭化物含む) |
| 4 暗灰褐色砂礫層 (粗砂5-8mm大の小礫混) | 13 暗灰色砂層 (淡灰色粘土と粗砂互層) | 4 暗灰褐色砂質シルト (細砂、粘土も混じる) |
| 5 灰褐色砂層 (褐色シルト、灰色細粒、5-8mm大の小礫混) | 14 暗灰褐色粘土質シルト | |
| 6 暗灰色砂礫層 (粗砂0.5mm大、8mm-1cm大の小礫、2-3cm大の礫 [Fe含む] 若干含む) | 15 黄灰褐色シルト (Mn含む) | |
| 7 暗灰色砂質シルト | | |
| 8 暗灰褐色砂質シルト (Mn含む) | | |
| 9 暗灰褐色砂質シルト (Mn、炭化物を若干含む) | | |



- | | |
|-------------|-------------------------|
| 1 黄褐色シルト | 1 明黄灰砂質シルト (シルト、細砂の互い層) |
| 2 明褐灰色砂質シルト | 2 灰褐色砂質シルト |
| 3 黄褐灰色砂質シルト | 3 暗灰褐色砂質シルト |
| 4 暗灰褐色砂質シルト | |



大溝2 - 20 図 Q2 区SR201・SD203~205

大溝3(大溝3-1～6図)

調査区 ; D1区(SD1001)・D2区(SD211)・E7区(SR702)・E1区(SD101)・F3区(SD309)・F1区(SD114)・K3区(SD103)・K1区(SD103)

時期 ; 弥生時代中期～後期

規模 ; 220×1.7m **深さ** ; 0.7m **断面形態** ; U字状

埋土 ; 黒褐色シルト・暗褐色粘質土

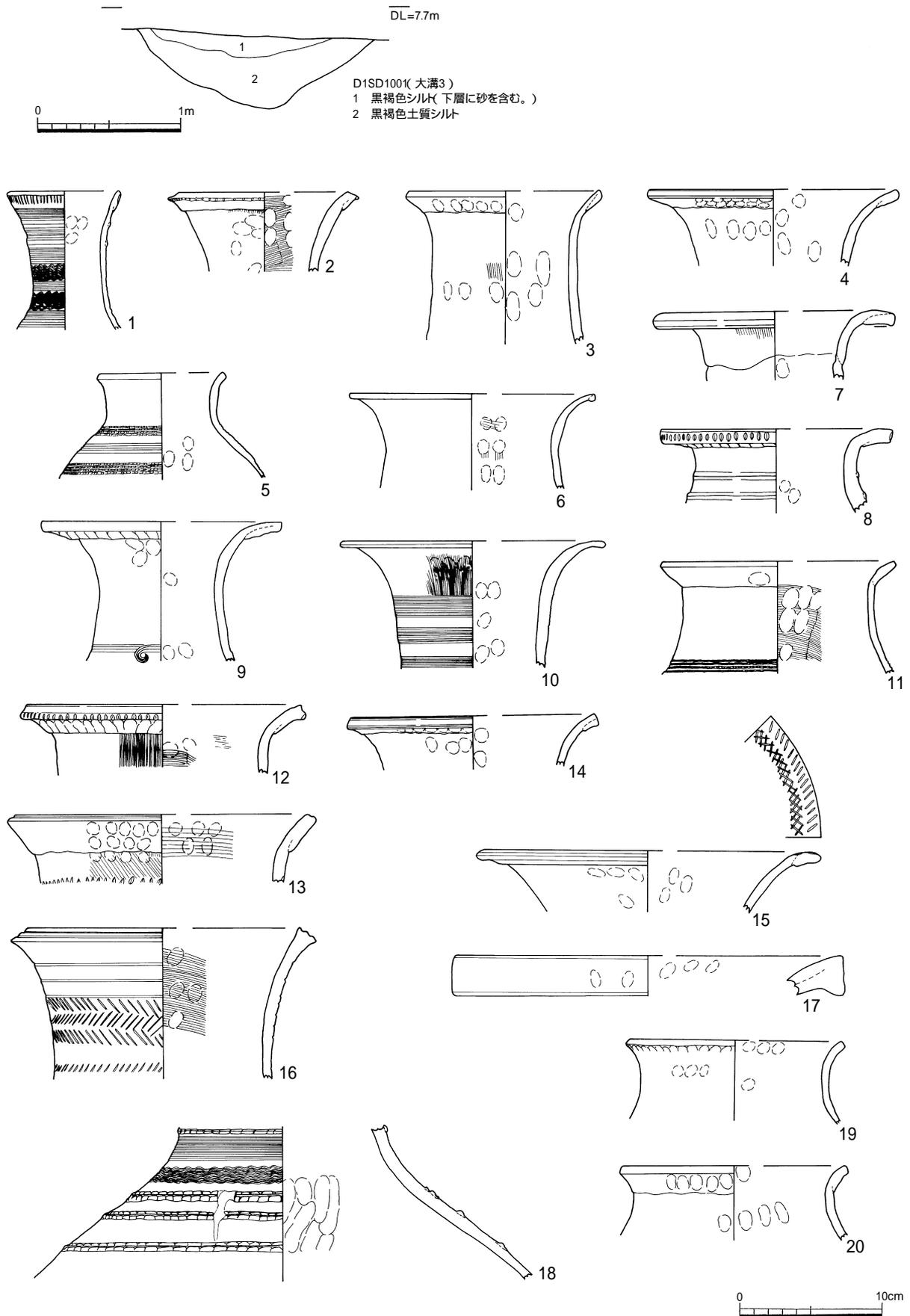
床面標高 ; 7.18～7.66m

接続 ; -

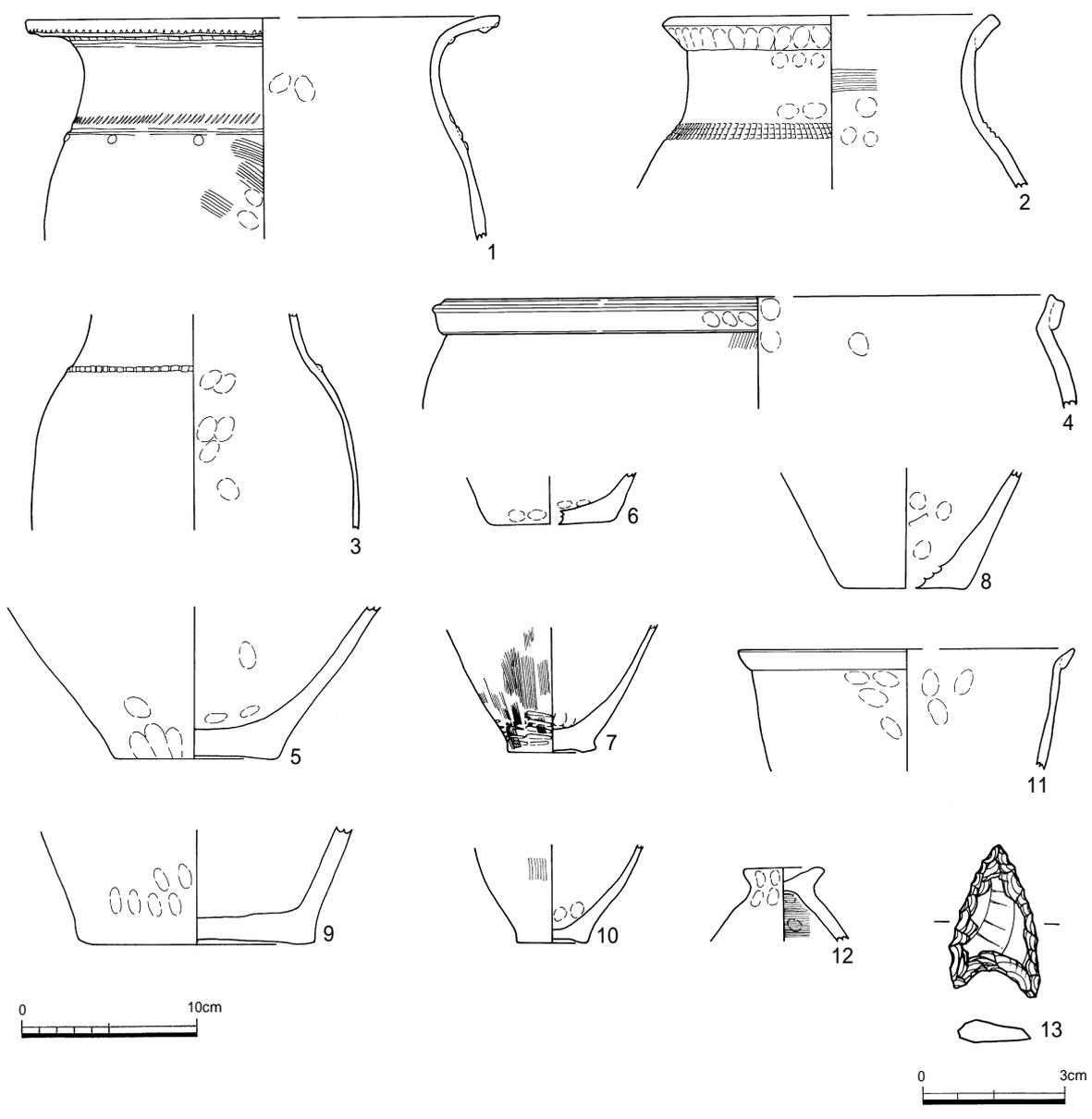
出土遺物 ; 弥生土器(甕、壺、鉢、高杯)、石鏃、石製簪

所見 ; 大溝3は大溝4・5とほぼ同様の軌跡を描くが、E区とF区の境目付近で大溝4・5に切られる。規模的には大溝4・5に比べ小さい。埋土はシルトが主体であり、砂層、礫層は認められない。

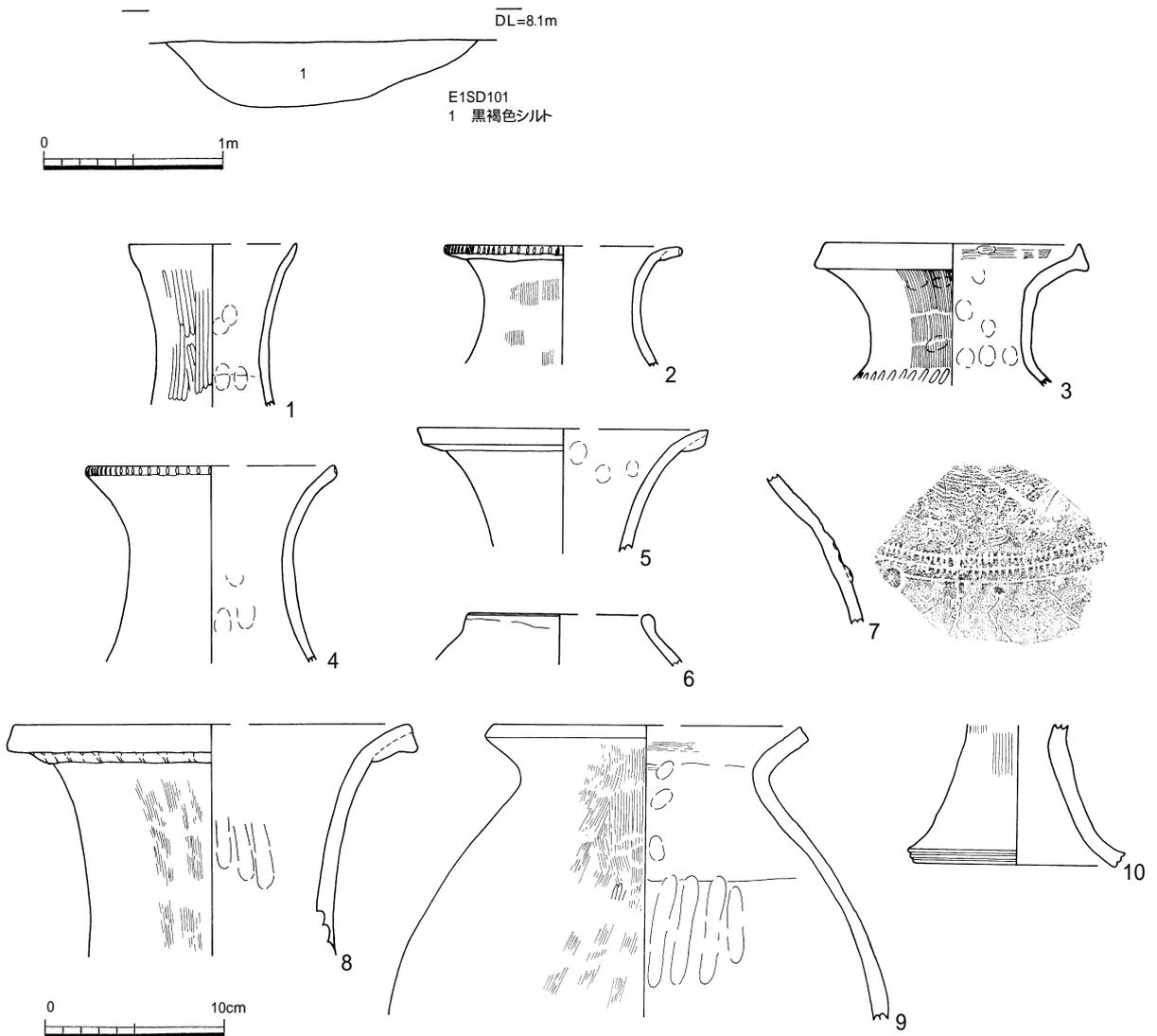
出土遺物は弥生時代中期中葉に遡るやや古相の遺物が出土しているものの、最終的に埋没した時期は他の大溝同様、後期中葉段階である。特筆すべきものとしては、E7区から碧玉製管玉(大溝3-4-3)、碧玉製簪(大溝3-4-4)が出土している。



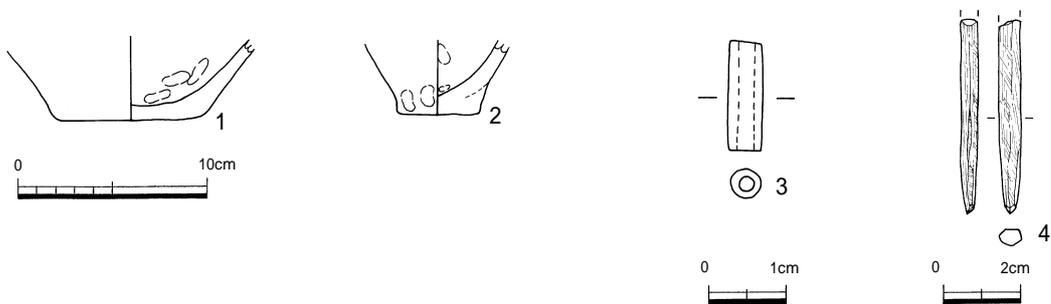
大溝3 - 1 図 D1区SD1001(1)



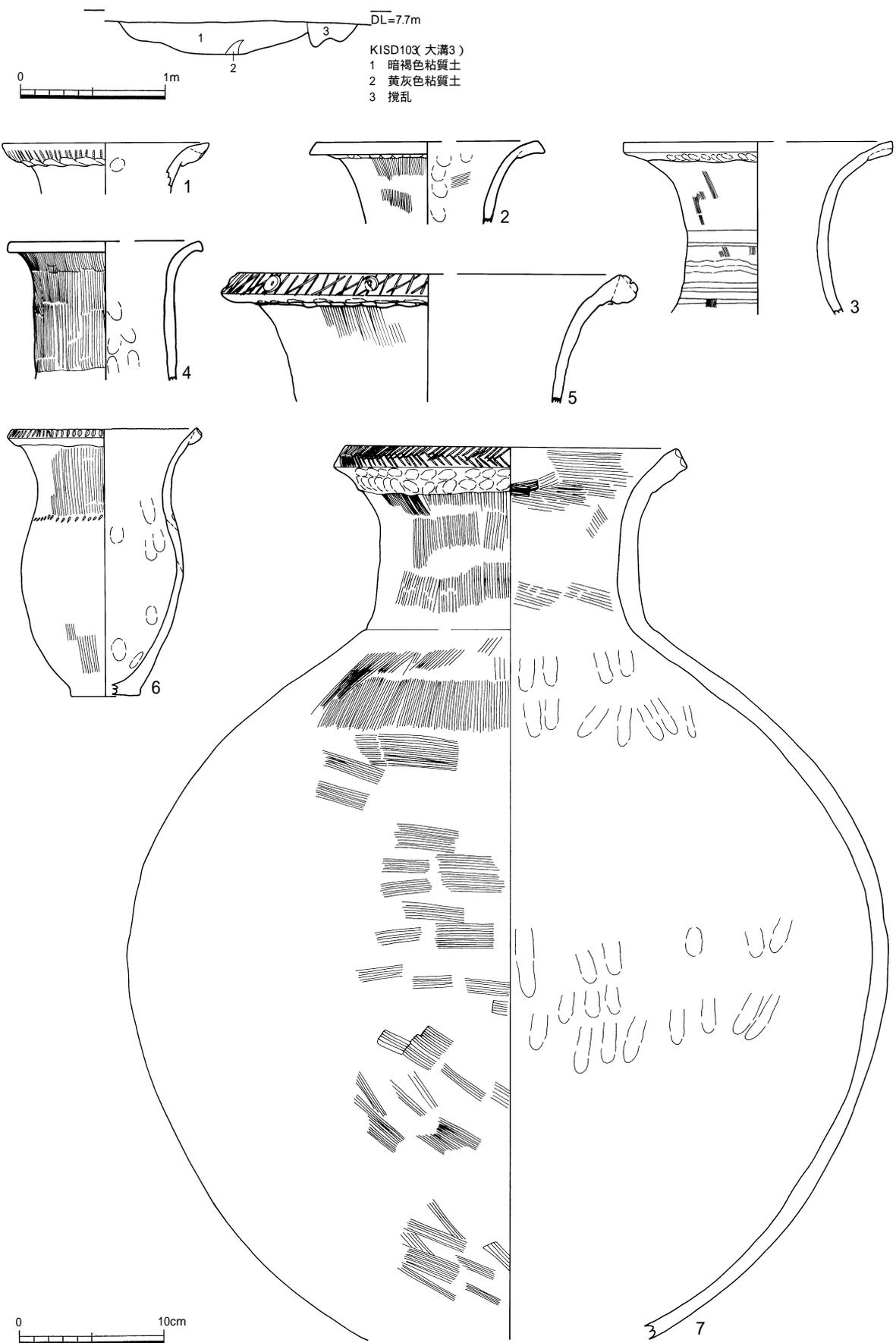
大溝3 - 2 図 D1区SD1001(2)

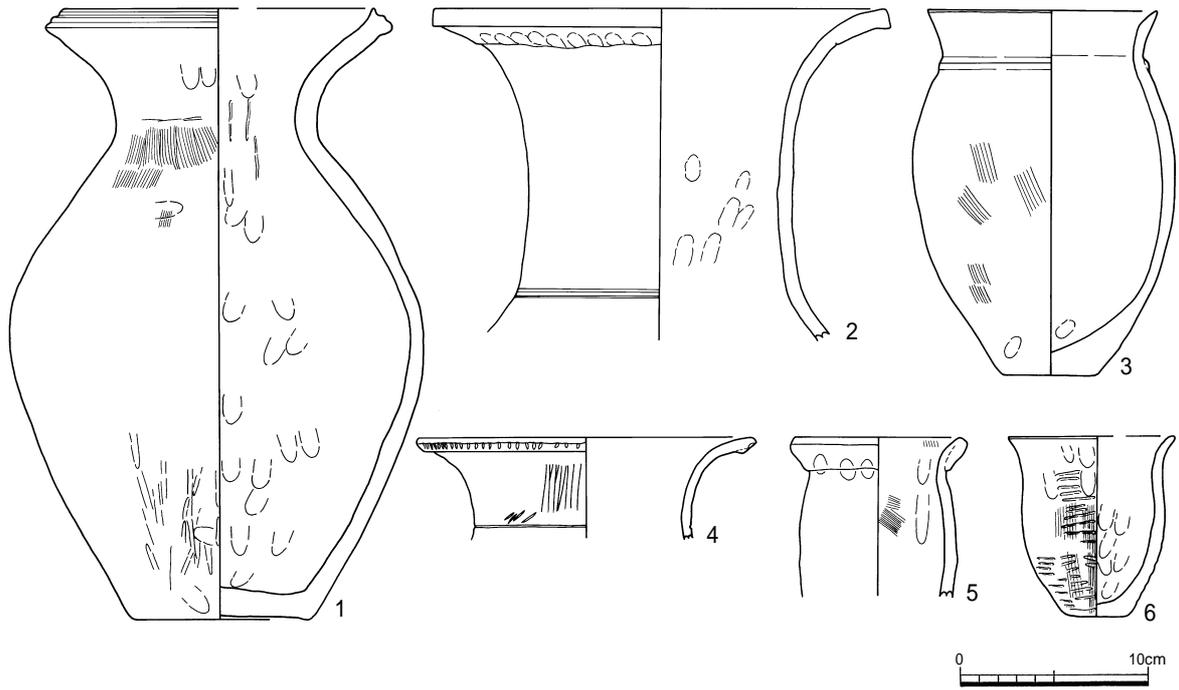


大溝3 - 3図 E7区SR702



大溝3 - 4図 E1区SD101





大溝3 - 6 図 K1 区SD103(2)

大溝4・5(大溝4・5-1~21図)・大溝5(大溝4・5-20・21図)

調査区；大溝4 D1区(SR111)・D2区(SD204・205)・E3区(SR303)・E7区(SR704・705)・E1区(SR101)・F2区(SR202)・F3区(SD309)・F1区(SR101)・K3区(SD102)・K1区(SD102)

大溝5 K3区(SD301)

時期；弥生時代中期～後期

規模大溝4；304×5.0m 深さ；0.9m 断面形態；U字状

規模大溝5；119×4.4m 深さ；0.5m 断面形態；U字状

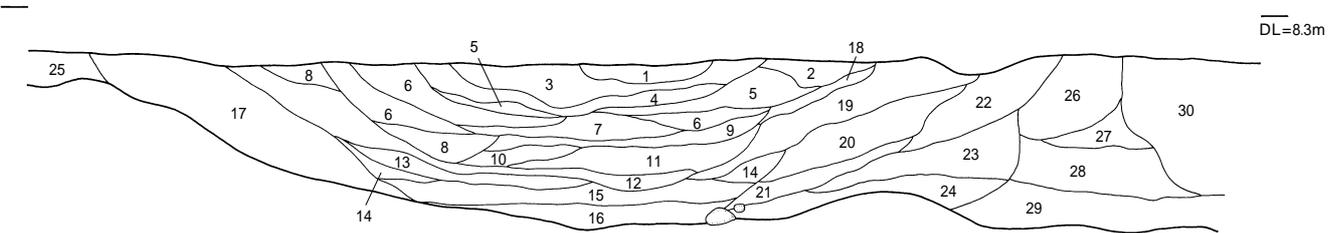
埋土；シルト・砂礫層

床面標高；6.77～7.28m

接続；-

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)、ミニチュア土器、石斧、石包丁、石鏃など

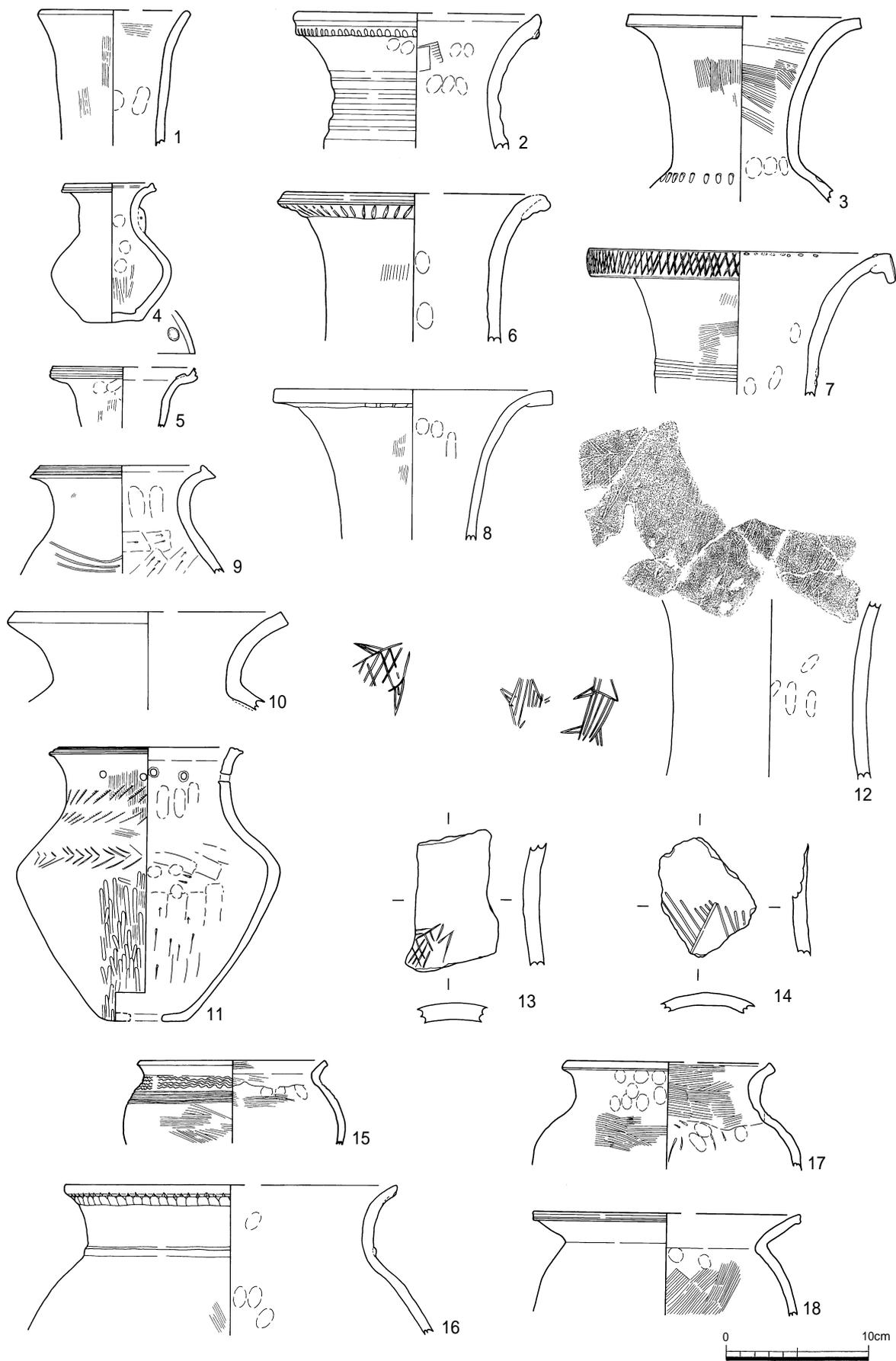
所見；ここでは大溝4と大溝5について述べる。D区、E区では直線的に南下し、F区で方向を西に向け、K区では直線的にのびる。D区、E区は多くの大溝と共通した軌跡を描く。また、F区とK区付近で大溝5が分岐する。大溝5は鉤状に屈曲してのびる。埋土は概ね砂礫層とシルト層が堆積したものである。出土遺物では、讃岐地域からの搬入土器が目立つ。また、土製支脚が出土している。



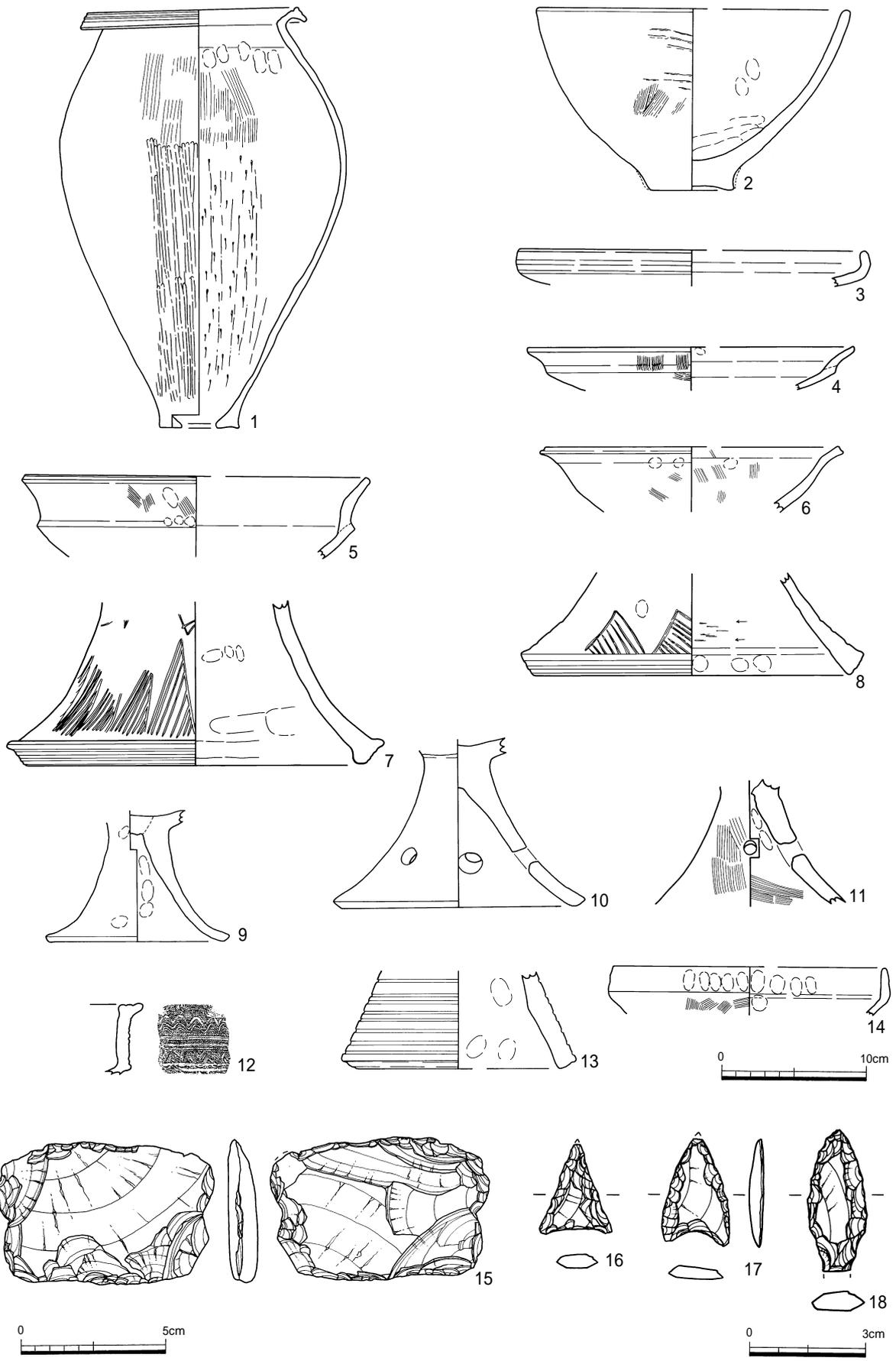
D1SR111

- | | |
|----------------------------|-----------------------------------|
| 1:暗灰褐色シルト | 16:褐黄色砂礫層(灰褐色粘土、礫、鉄分・マンガン沈着礫を含む。) |
| 2:灰褐色砂質シルト(礫を含む。土器を多く含む。) | 17:暗褐色シルト(粘性強い。礫を含む。) |
| 3:淡黄灰色シルト | 18:灰褐色シルト |
| 4:暗灰色砂質シルトと暗灰色細砂の互層 | 19:暗灰褐色シルト |
| 5:淡黄灰色粘土質シルト | 20:暗褐色粘性シルト(礫を含む。) |
| 6:褐灰色粘土質シルト(礫を含む。) | 21:暗灰褐色砂質シルト |
| 6:灰褐色シルト(礫を含む。) | 22:暗褐色粘性シルト(礫を含む。) |
| 7:暗灰色砂礫層 | 23:暗灰褐色粘性シルト(微粒砂・礫を含む。) |
| 8:暗灰褐色粘土質シルト | 24:褐灰色砂礫層 |
| 9:明灰色粘性シルト | 25:暗灰褐色粘性シルト〔SD204埋土〕 |
| 10:褐灰色粘性シルト | 26:褐黄色シルト(礫を含む。〔中州状〕) |
| 11:暗灰色砂質シルト(やや粘性有り。小礫を含む。) | 27:灰黄色シルト(粘性有り。〔中州状〕) |
| 12:黄灰色粘性シルト(下層は砂質土。) | 28:黄灰色シルトと黄色シルト細砂の互層〔中州状〕 |
| 13:暗灰色砂礫層 | 29:暗灰色砂礫層 |
| 14:淡黄灰色粘性シルト | 30:〔SR112埋土〕 |
| 15:暗褐灰色砂礫層 | |

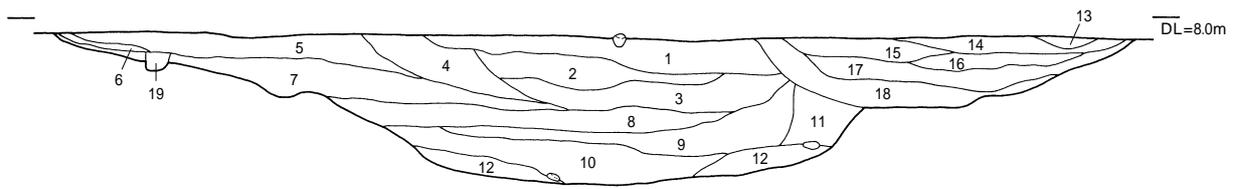
大溝4・5-1図 D1区SR111(1)



大溝4·5-2圖 D1区SR111(2)



大溝4・5-3図 D1区SR111(3)



E7区SR704・705

1:暗褐色シルトに黄褐色シルト混じる。

2:暗灰黄色シルト質砂

3:暗オリーブ褐色礫質砂

4:暗灰黄色シルト質砂に黄褐色シルト混じる。

5:オリーブ褐色シルトに黄褐色シルト混じる。

6:黒褐色シルトに黄褐色シルト混じる。

7:暗灰黄色シルト質砂

8:オリーブ褐色シルト質砂に暗灰黄色シルト質砂混じる。

9:暗灰黄色シルト質砂に褐色シルト質砂混じる。

10:暗オリーブ褐色礫質砂

11:褐色シルトに暗灰黄色シルト混じる。

12:にぶい黄褐色砂質シルト

13:褐色シルト質砂

14:暗灰黄色シルトに黄褐色シルト混じる。

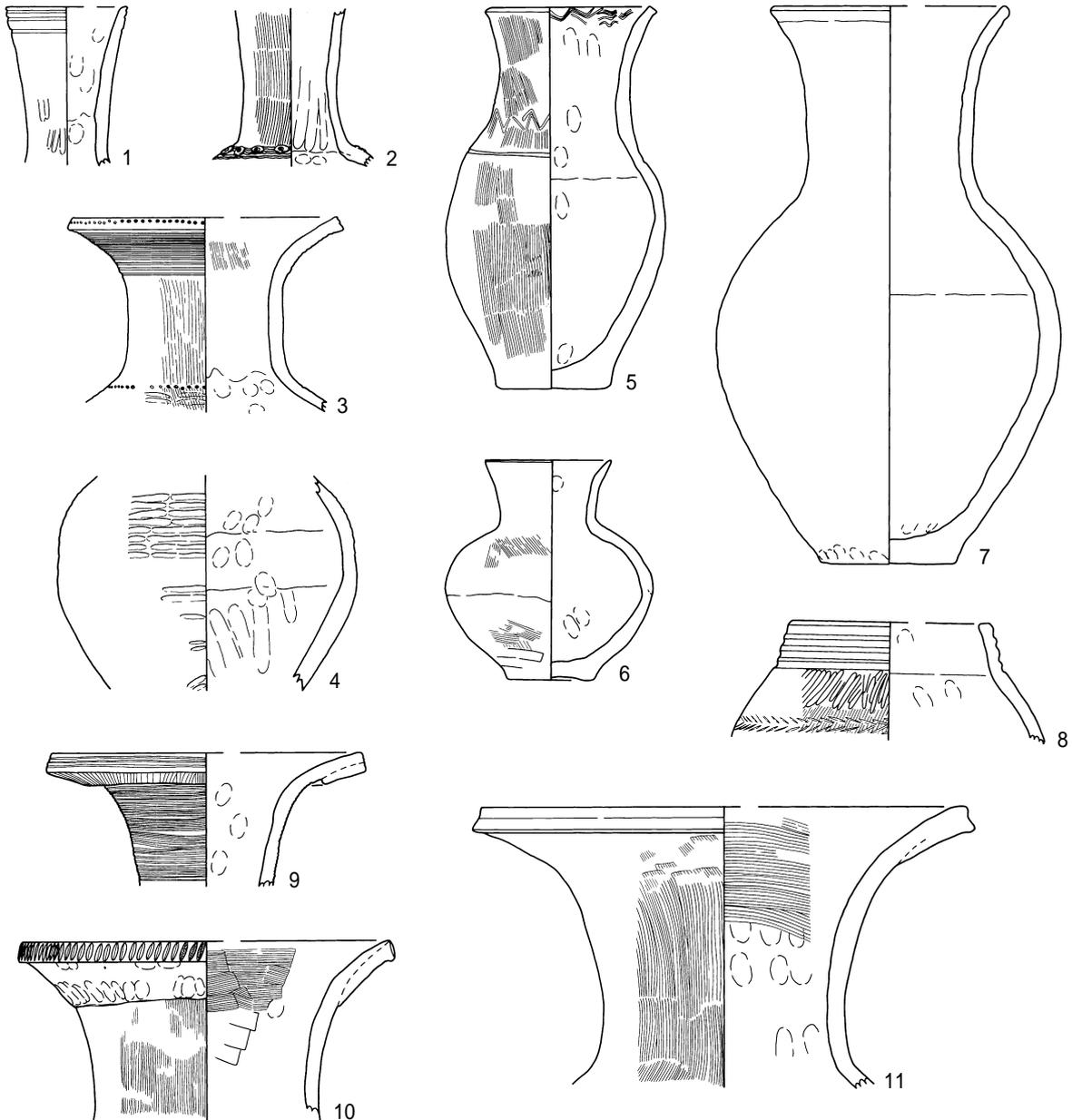
15:暗灰黄色砂質シルトに黄褐色シルト混じる。

16:オリーブ褐色シルト質砂

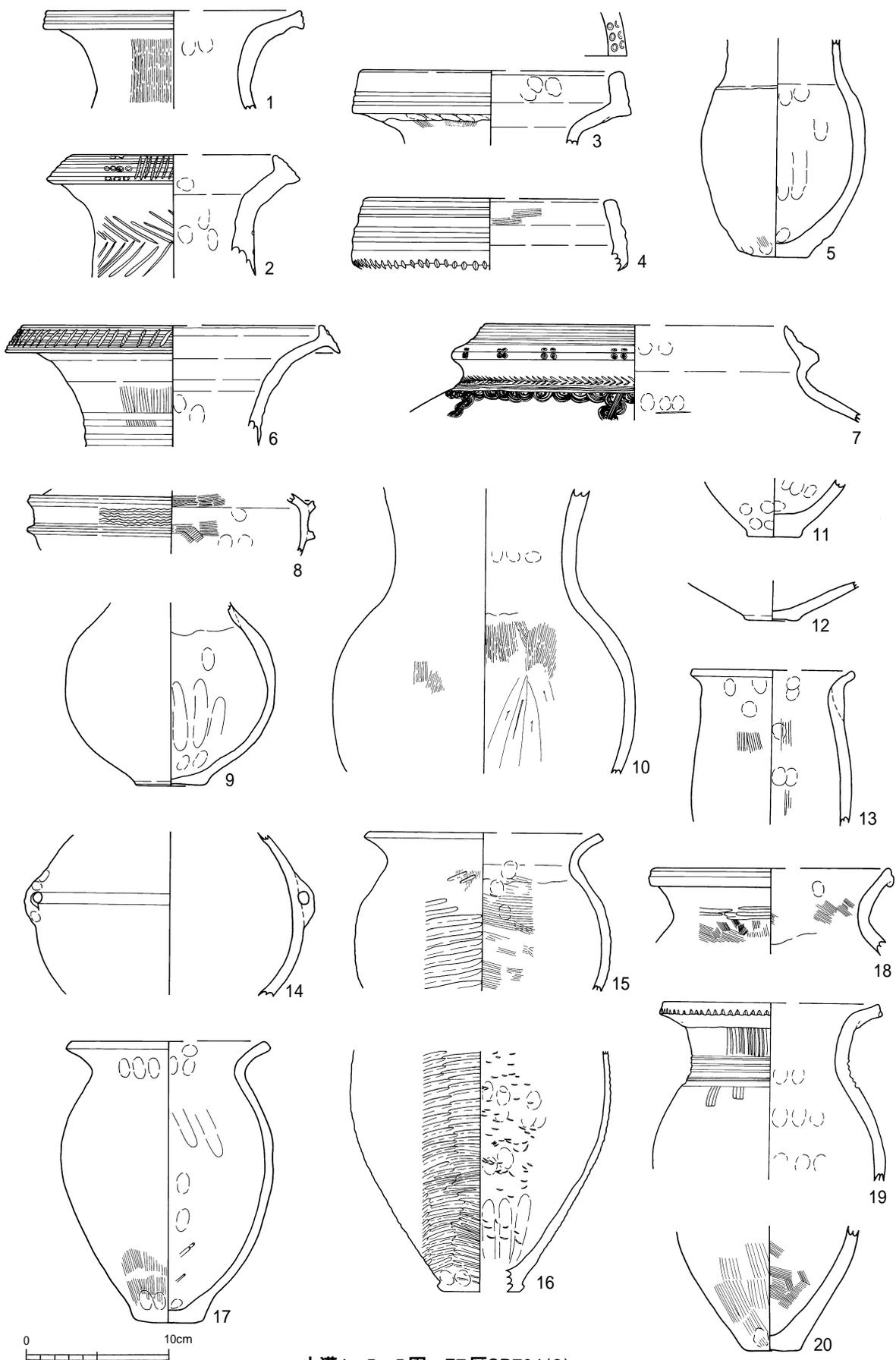
17:暗灰黄色シルト質砂

18:オリーブ褐色シルト質砂に暗灰黄褐色シルト質砂混じる。

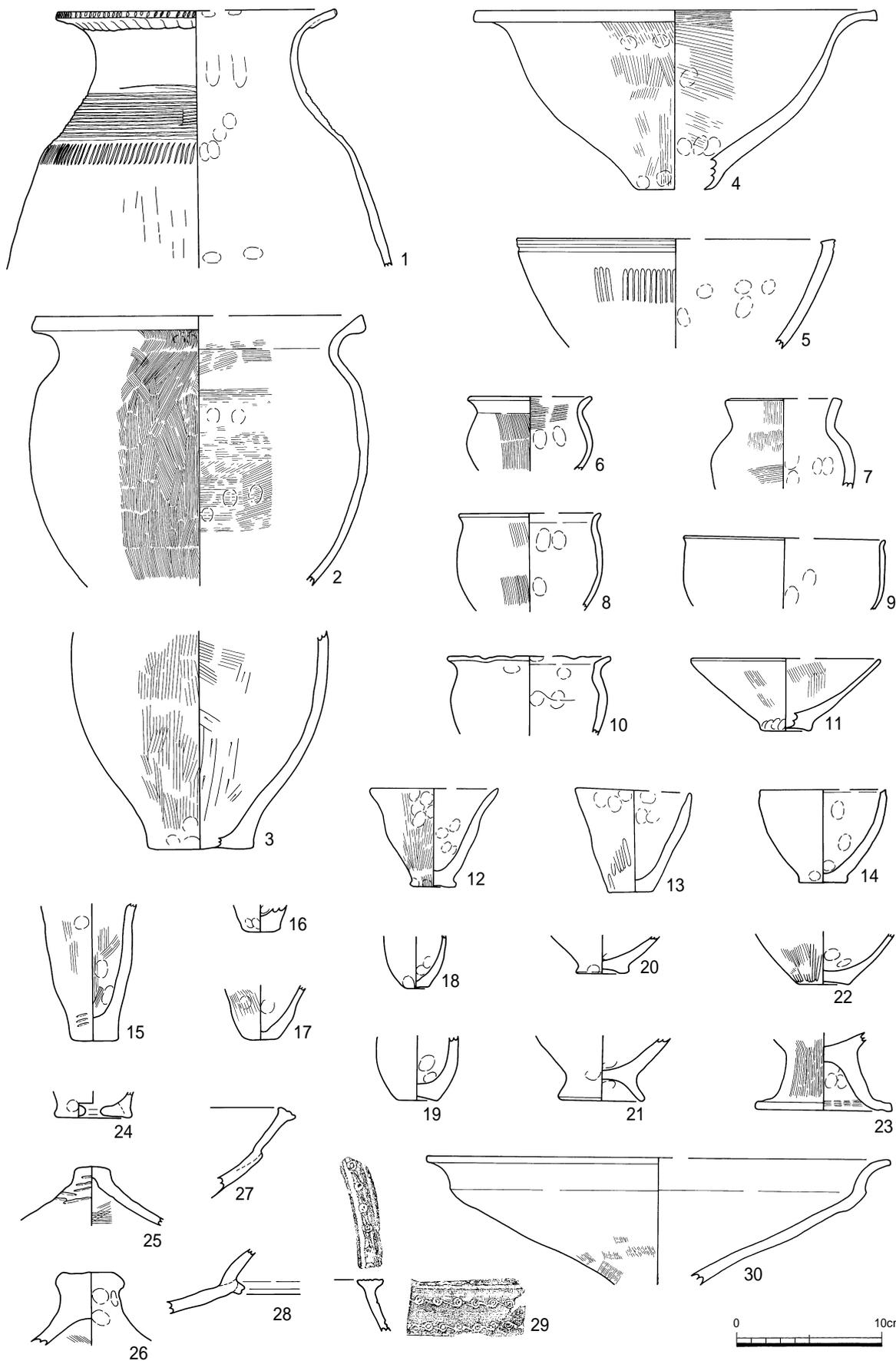
19:暗灰黄色粘質シルトに暗オリーブ褐色粘質シルト混じる。



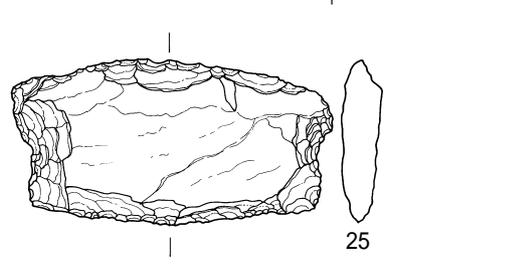
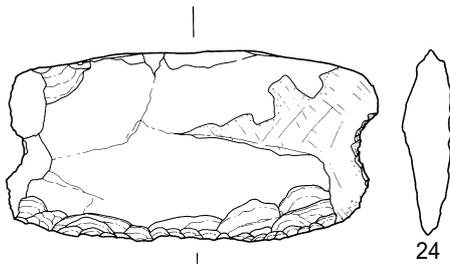
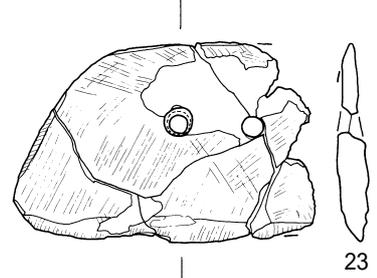
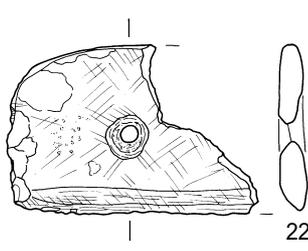
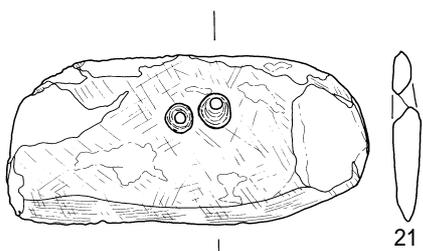
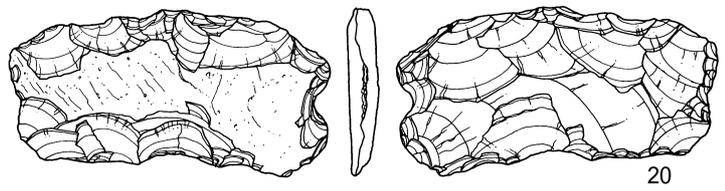
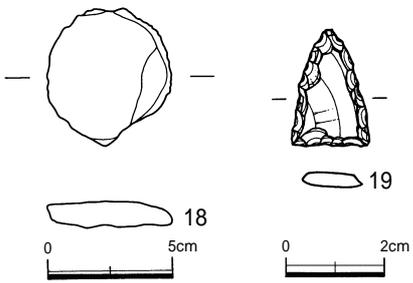
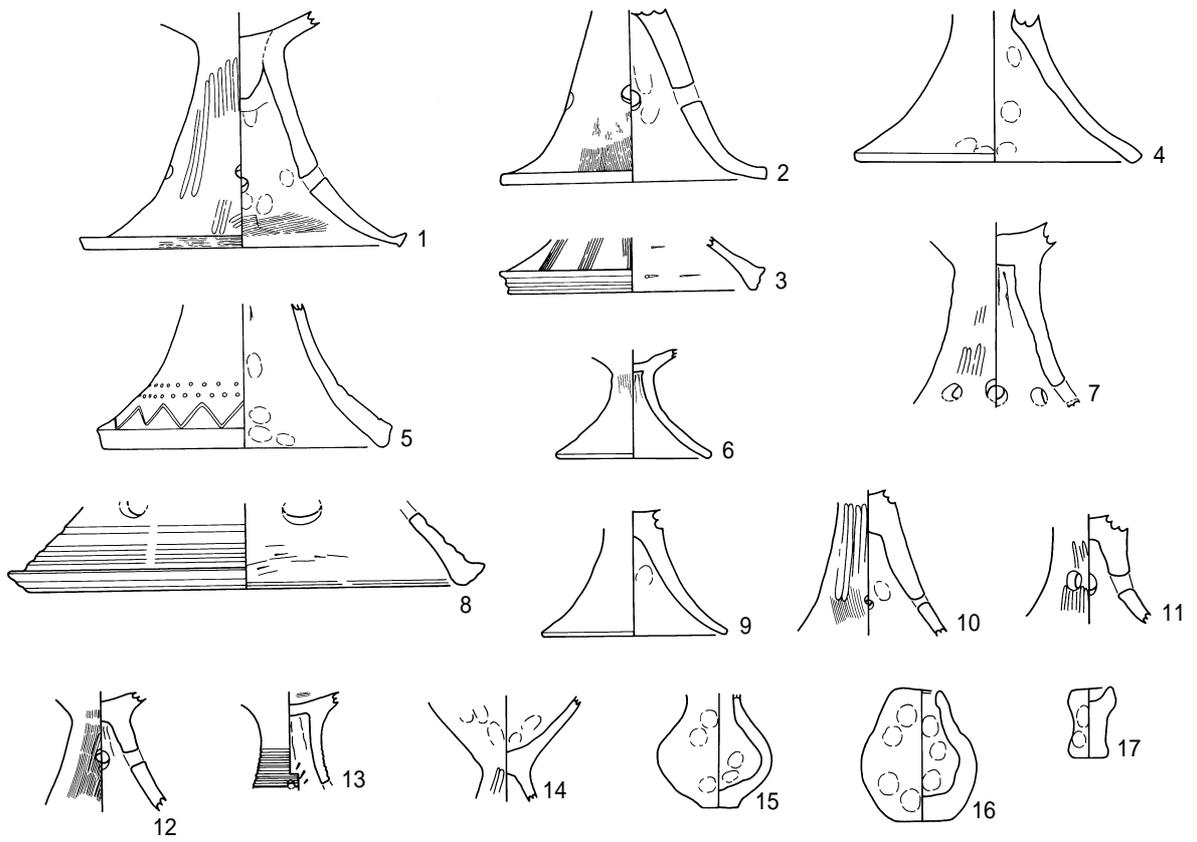
大溝4・5-4図 E7区SR704(1)



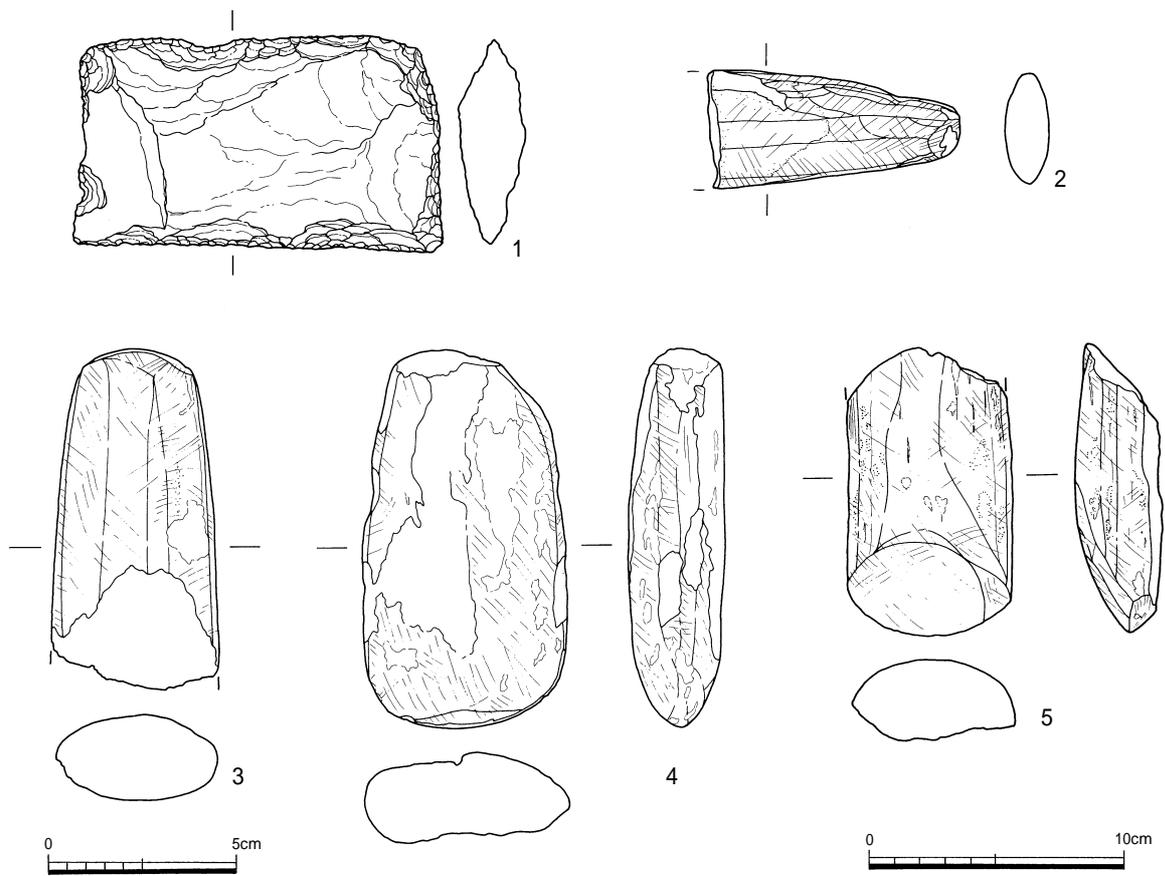
大溝4・5・5図 E7区SR704(2)



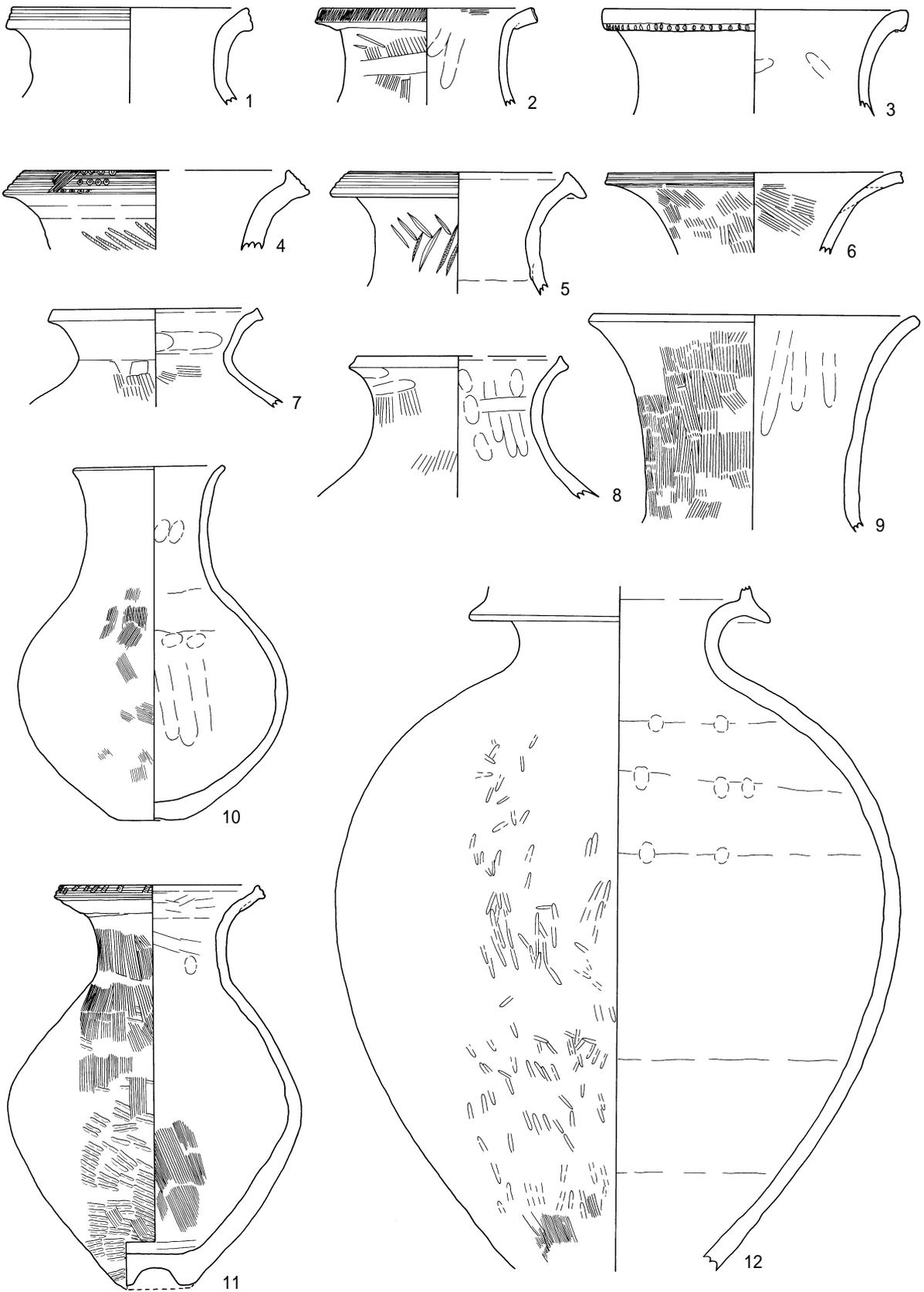
大溝4·5-6图 E7区SR704(3)



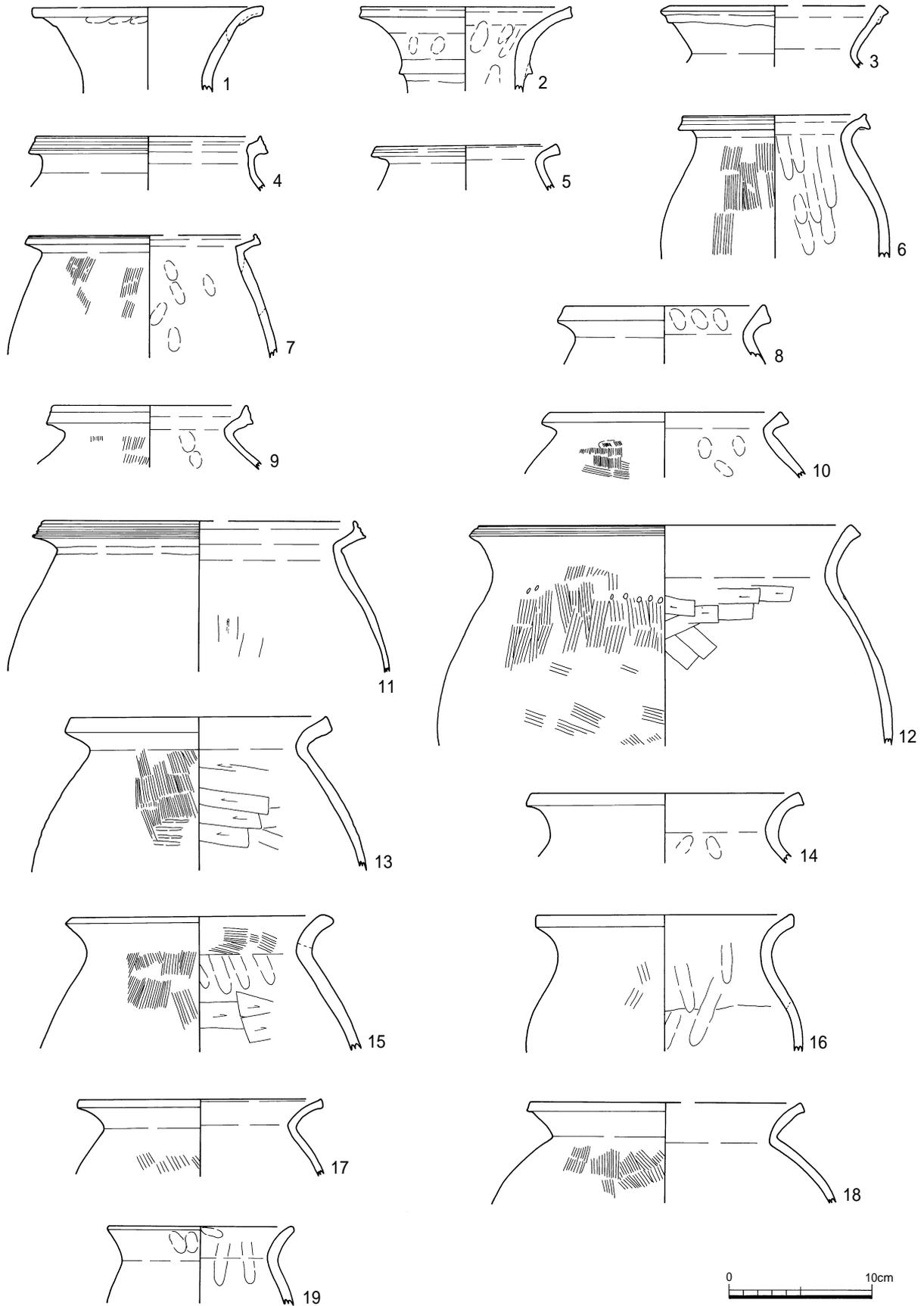
大溝4・5・7図 E7区SR704(4)



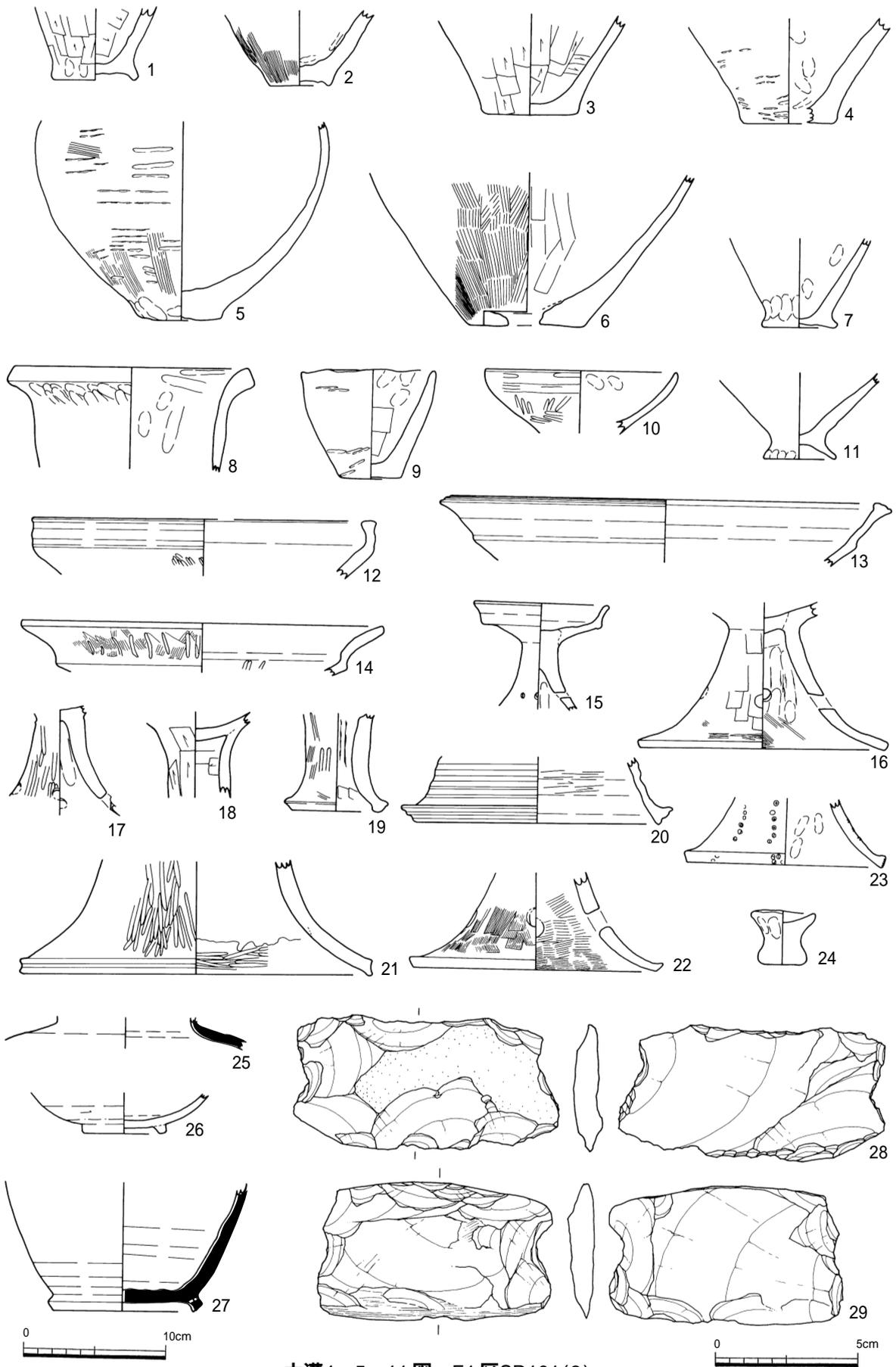
大溝4・5 - 8 図 E7 区SR704(5)



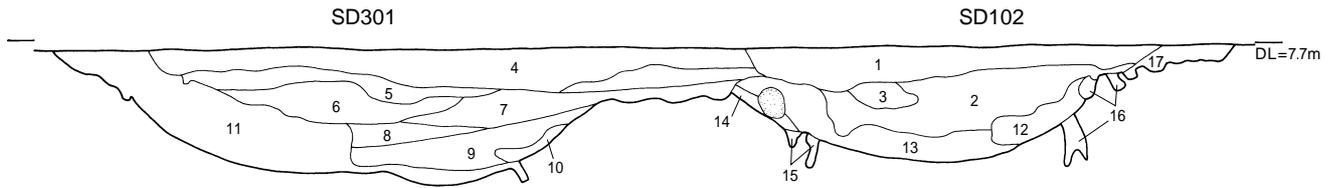
大溝4・5-9図 E1区SR101(1)



大溝4・5-10図 E1区SR101(2)



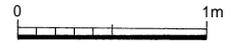
大溝4・5-11 図 E1区SR101(3)



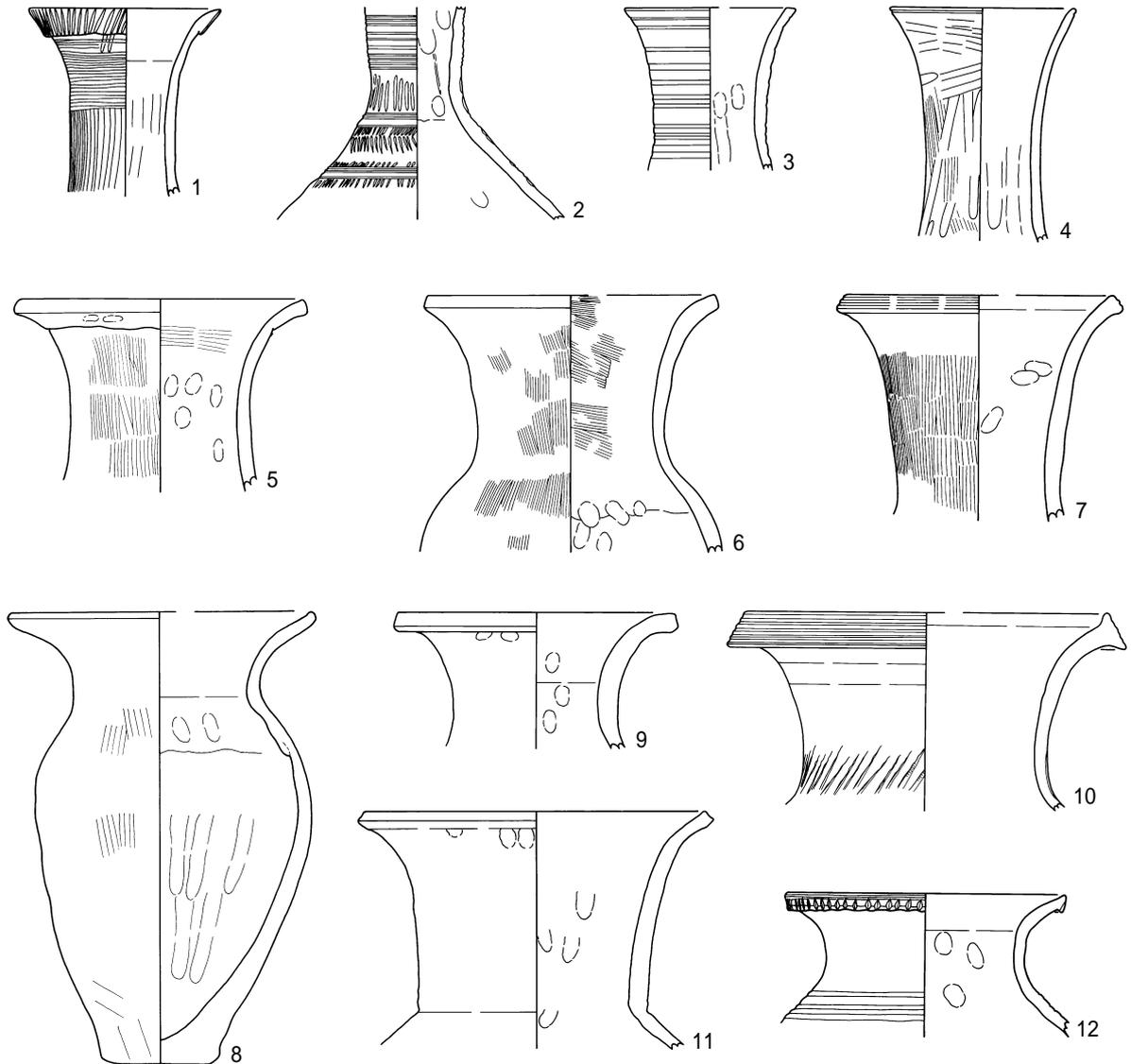
大溝4・5 K区分セクション

- 1:黄灰色シルト(鉄分の集積粒を多く含む。砂・褐灰色粘土質シルトを含む。)
- 2:黄灰色シルト(鉄分の集積粒・砂・褐灰色粘土質シルトを含む。)
- 3:砂と褐灰色粘土質シルトがブロック状に混ざる。
- 4:黄灰色シルト(鉄分の集積粒・褐灰色粘土質シルトを含む。遺物を含む。)
- 5:灰色シルト(砂・小礫を含む。遺物を含む。)
- 6:砂と小礫と褐灰色粘土質シルトが混ざる。(遺物を多く含む。)
- 7:砂と小礫と褐灰色粘土質シルトと灰色シルトが混ざる。(遺物を多く含む。)
- 8:砂と小礫と褐灰色シルト質粘土が混ざる。(遺物を含む。)
- 9:砂と褐灰色シルト質粘土が混ざる。(小礫を多く含む。遺物を含む。)

- 10:褐灰色粘土質シルト(マンガン粒・小砂・小礫を含む。)
- 11:褐灰色粘土質シルトと砂が混ざる。(マンガン粒・小礫を含む。)
- 12:灰色粘土質シルト(マンガン粒を多く含む。)
- 13:灰色シルト(鉄分の集積粒・マンガン粒を含む。遺物を含む。)
- 14:灰色粘土質シルト(マンガン粒を多く含む。)
- 15:黄灰色シルト質粘土と黄褐色シルト質粘土が混ざる。
- 16:褐灰色シルト質粘土(黄褐色シルト質粘土・マンガン粒を多く含む。)
- 17:褐灰色粘土(にぶい黄褐色粘土ブロックを含む。)

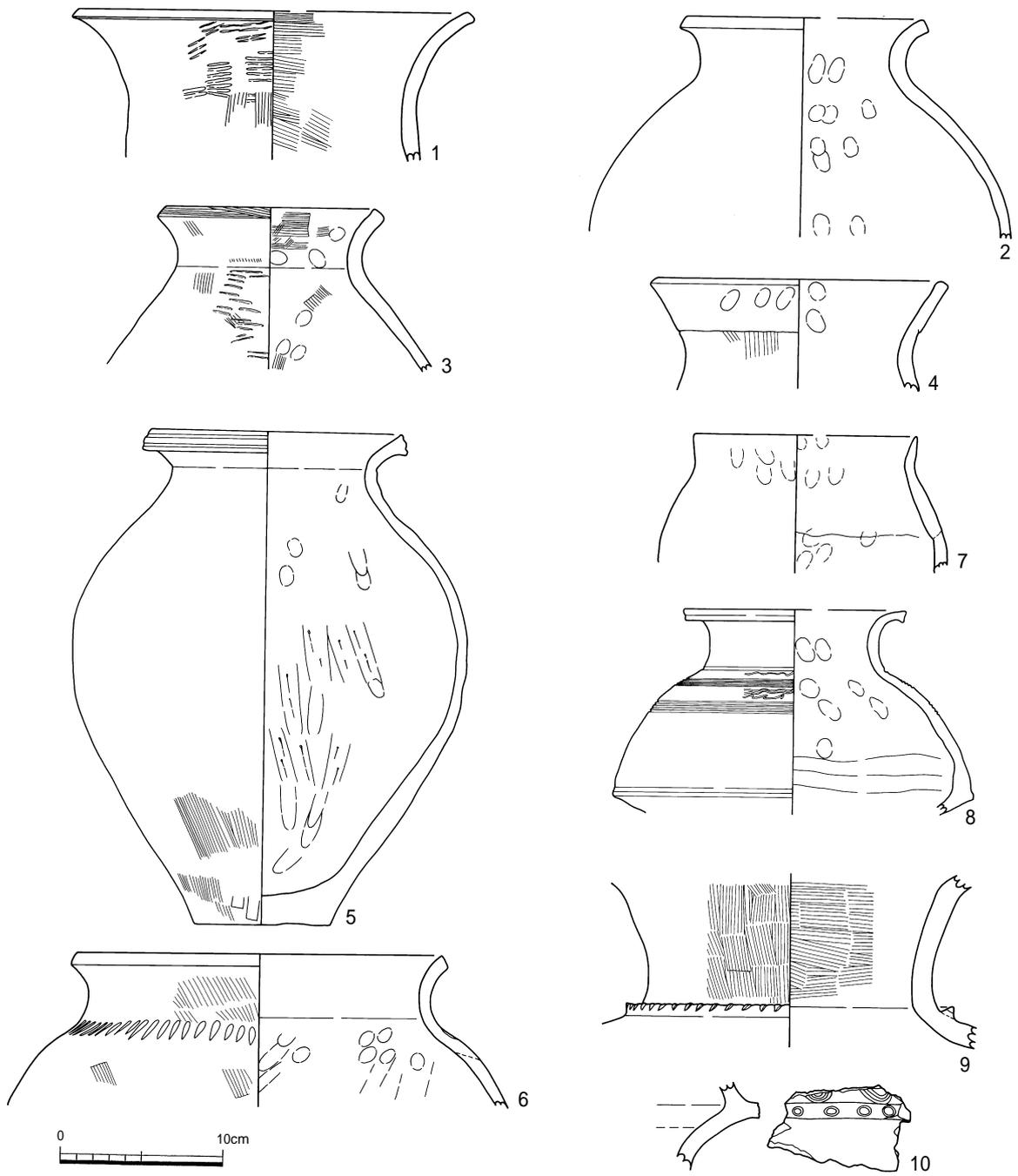


大溝4・5 - 12 図 K3区SD301・102

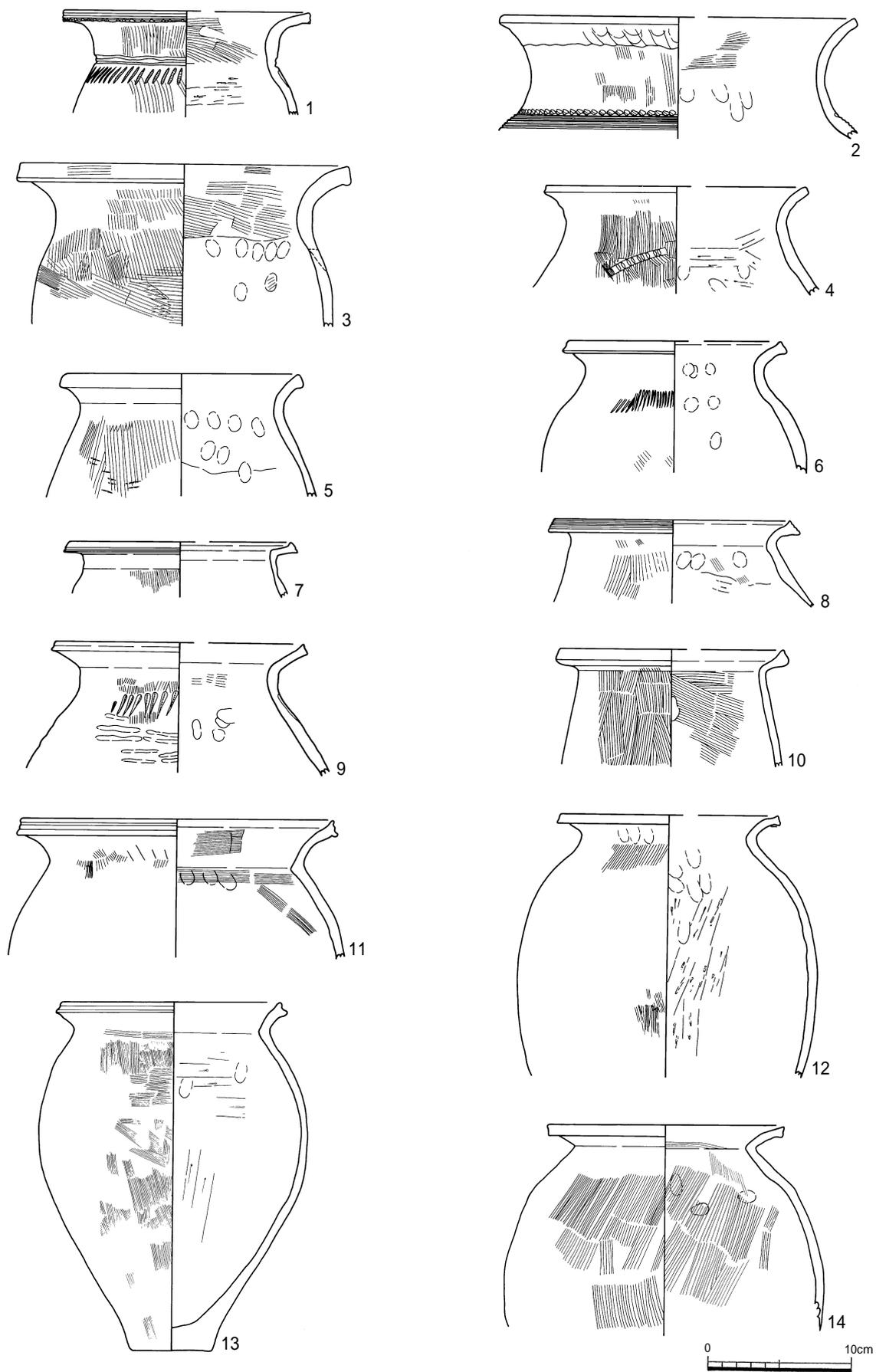


大溝4・5 - 13 図 F・K区(1)

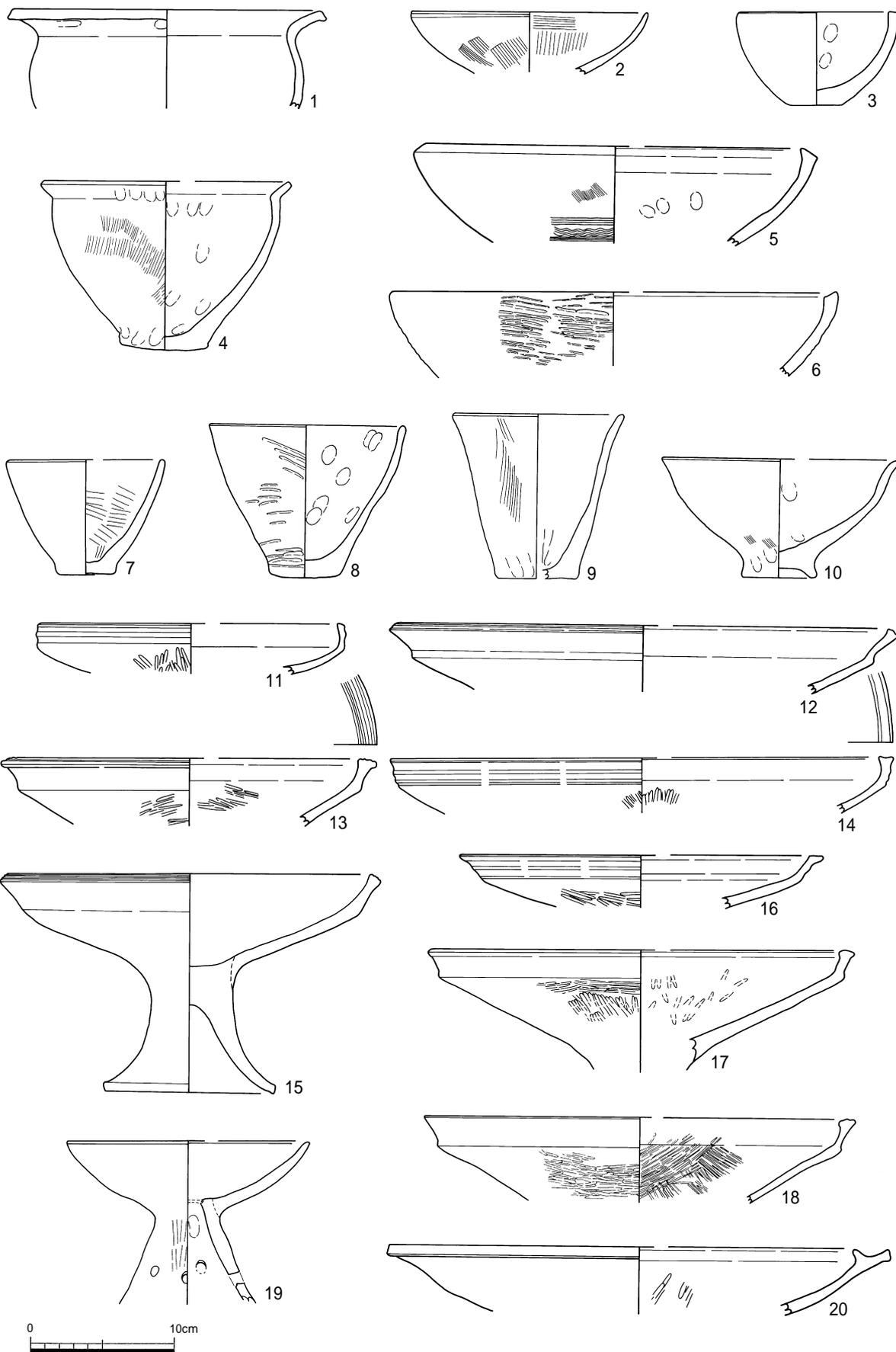




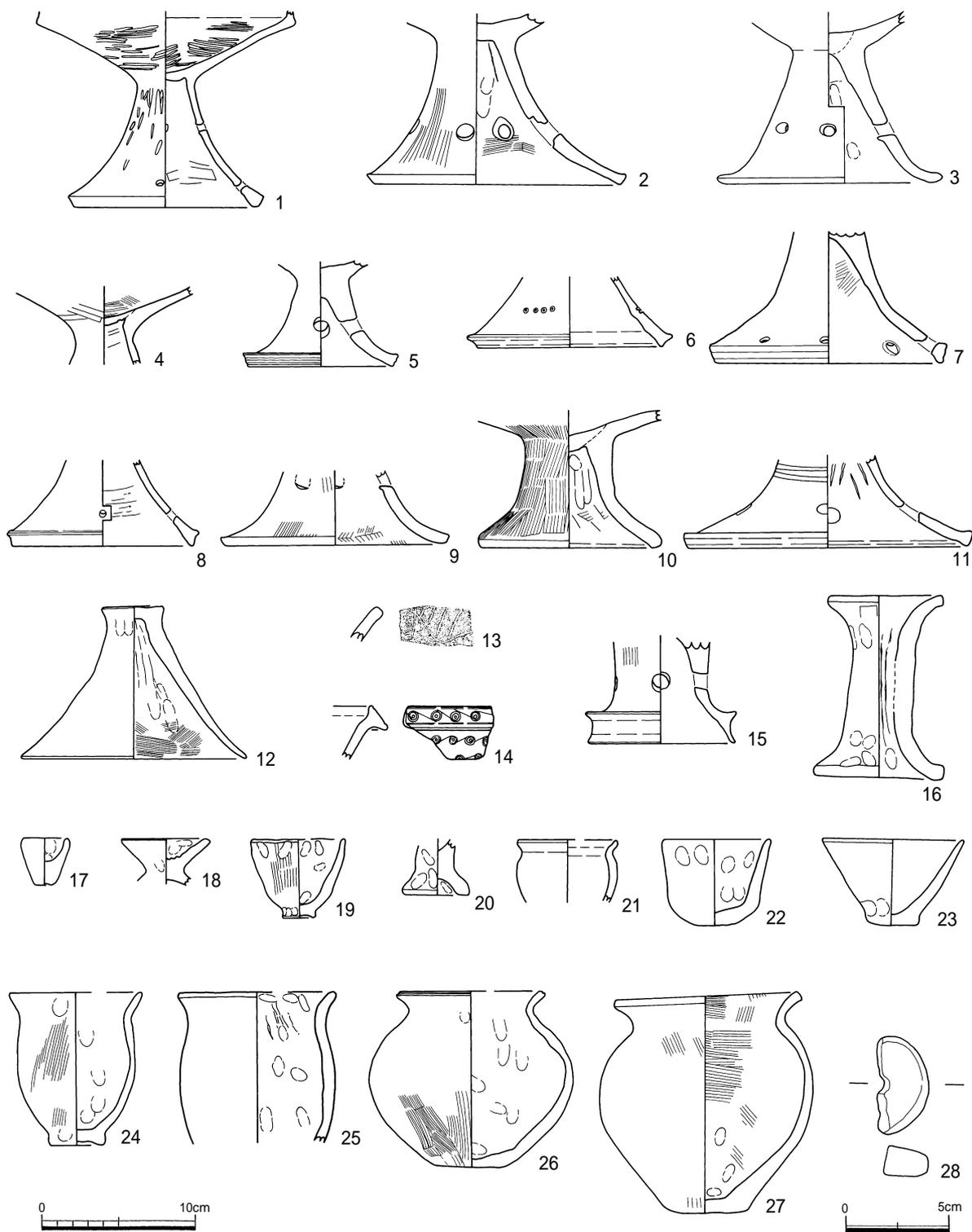
大溝4・5-14 図 F・K区(2)



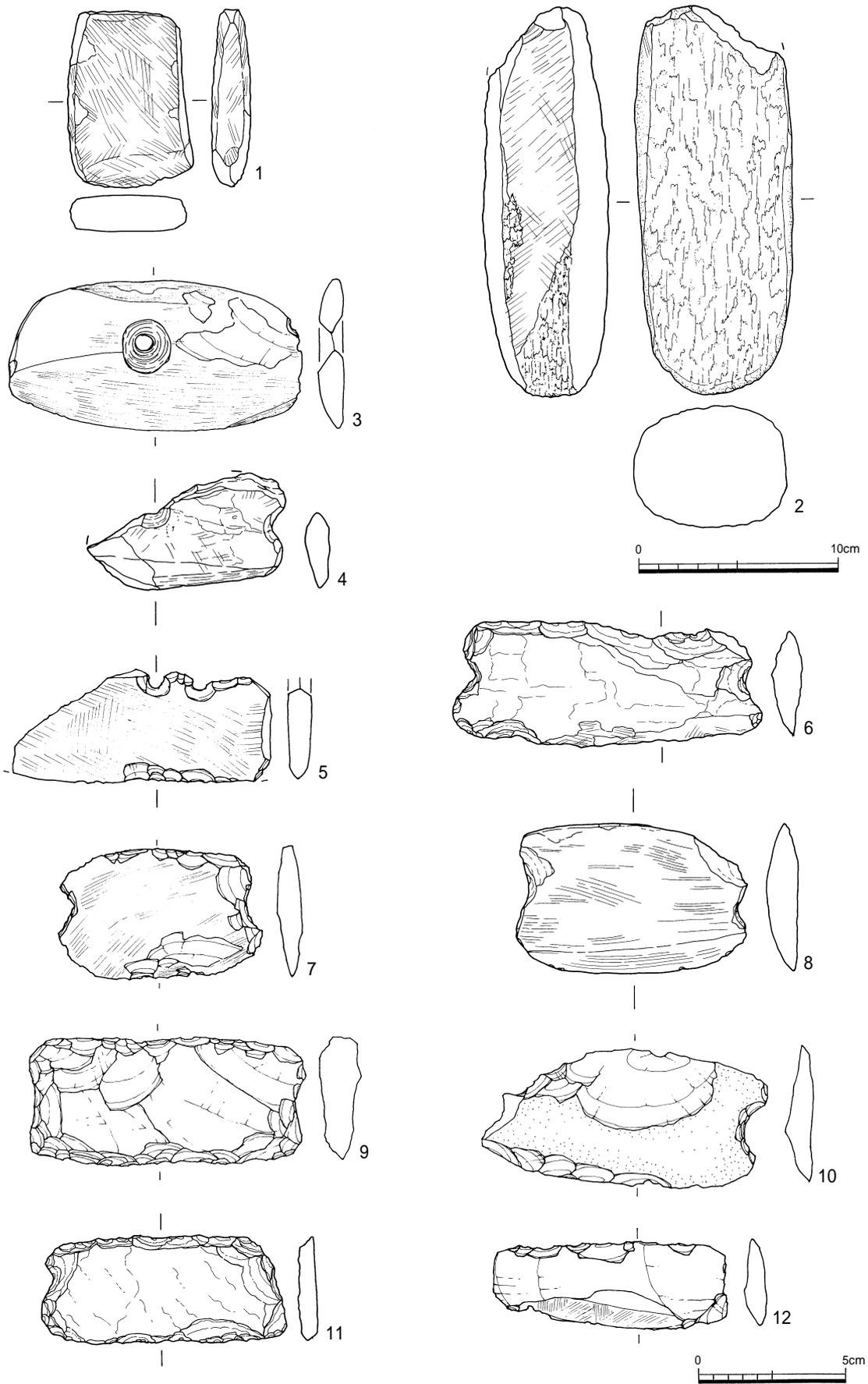
大溝4·5 - 15 图 F·K区(3)



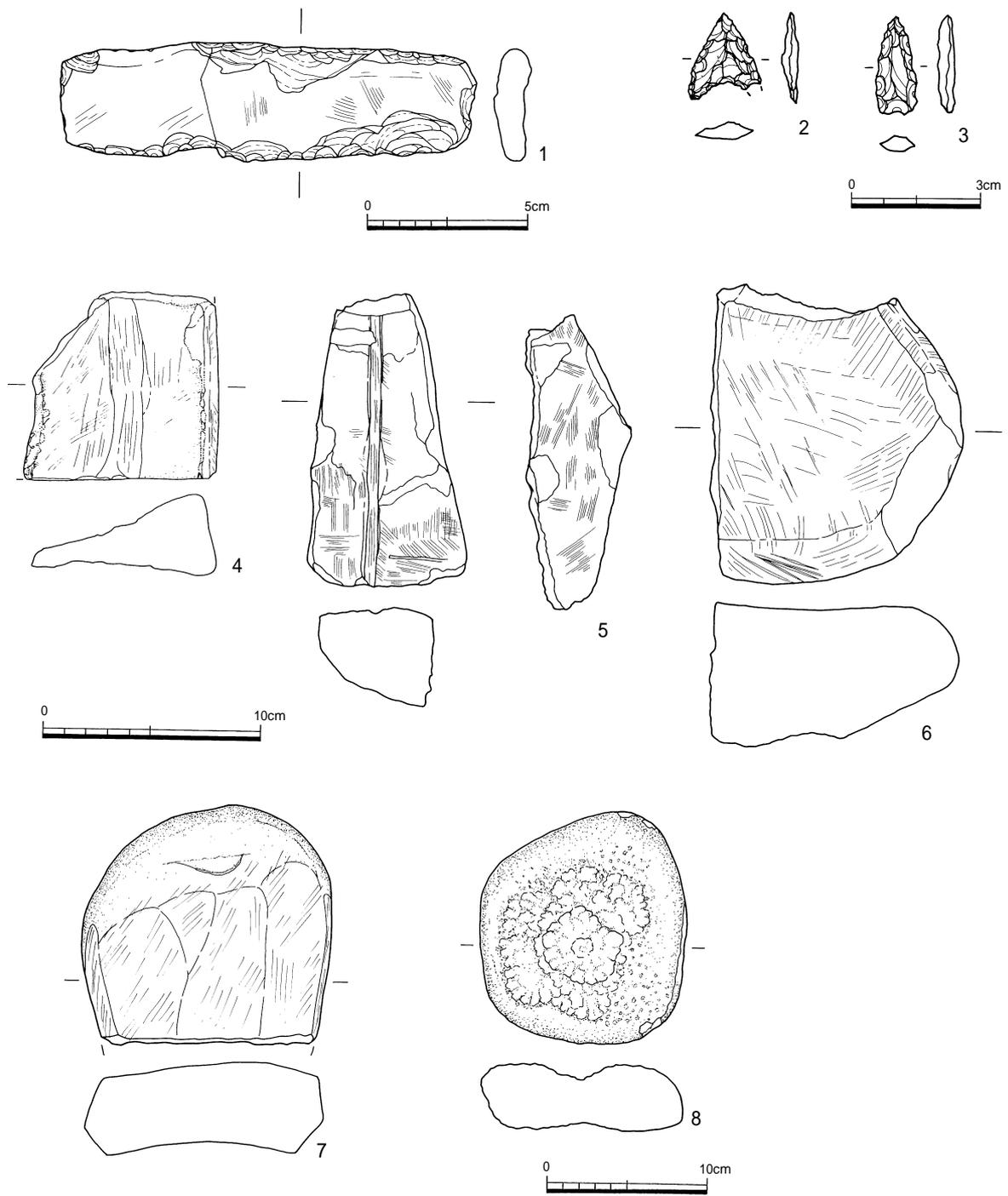
大溝4・5-16 図 F・K区(4)



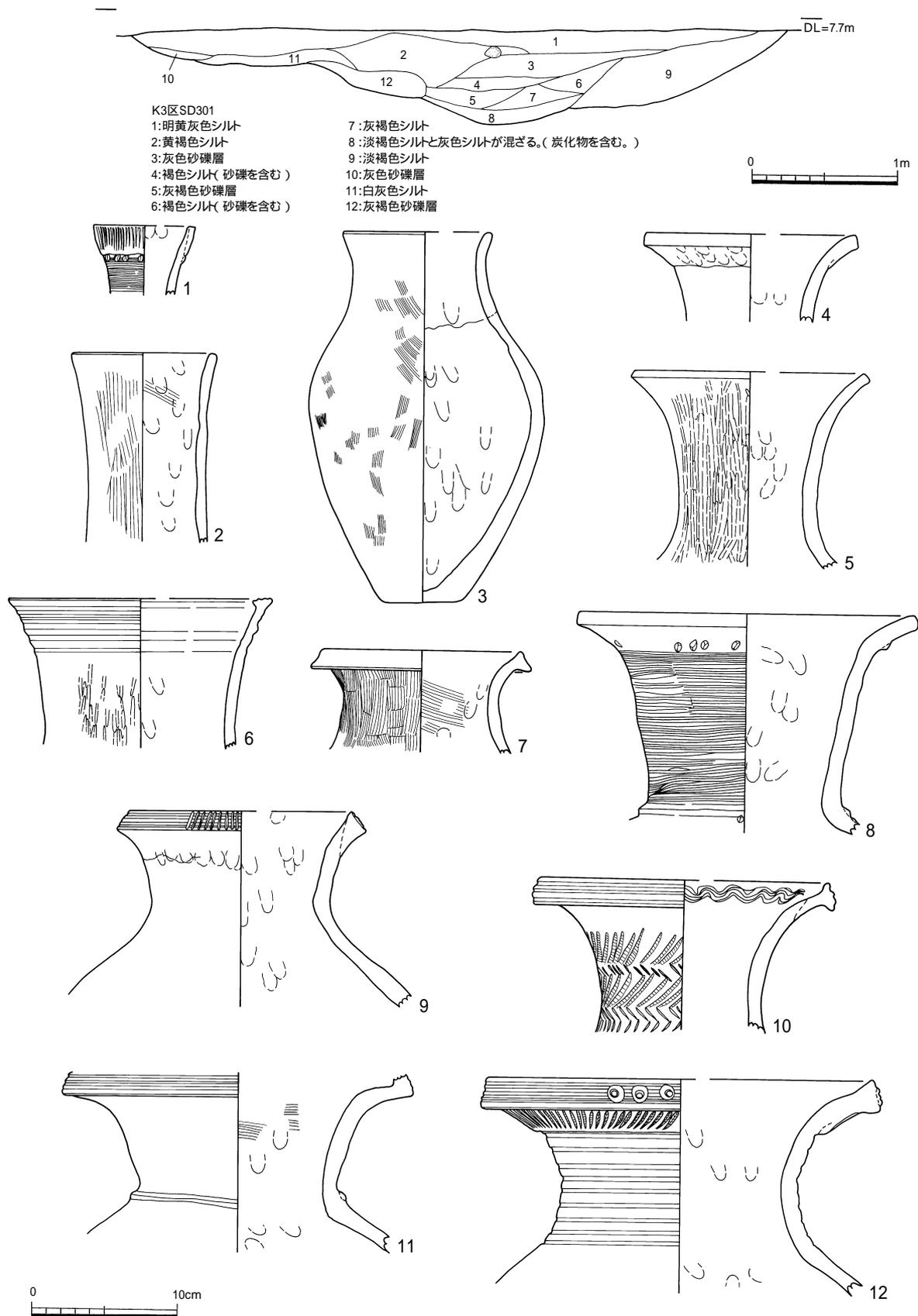
大溝4·5 - 17 图 F·K区(5)



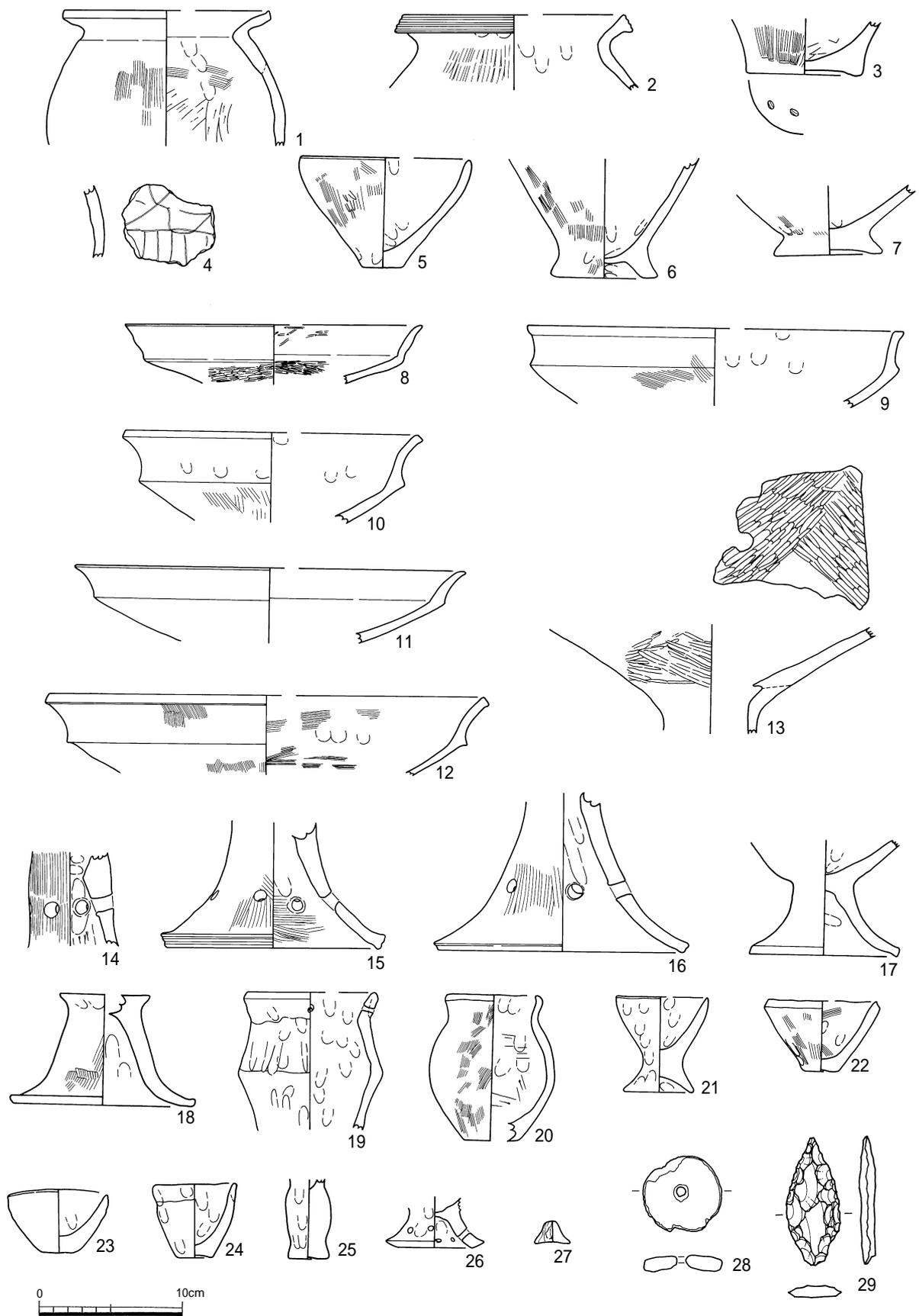
大溝4・5-18图 F・K区(6)



大溝4·5 - 19图 F·K区(7)



大溝4・5-20 図 K3区SD301(1)



大溝4·5 - 21 図 K3区SD301(2)

大溝6(大溝6-1～10図)

調査区 ; D1区(SD131)・D2区(SD131)・I2区(SD220)・J4区(SR401)・J5区(SR501)・O1区(SR101)・O2区(SR202)

時期 ; 弥生時代中期～後期・古代

規模 ; 195×3.5～5.4m **深さ** 0.5～1.1m

埋土 ; 礫層・砂礫層・砂層・シルト層・粘性土層

床面標高 ; 6.770～7.413m

接続 ;

所見 ; 今次調査範囲の北西部で検出したものであり、緩やかに蛇行はするものの、基本的には北東方向から南西方向に流れる。出土遺物は中期から後期の土器・石器が出土しており、その多くは後期初頭から中葉の段階のものである。他の大溝に比較するとやや新しい遺物が出土する傾向が認められる。大溝6-3図で図示したように古代の須恵器が認められる。I2区でも古代の土地改良の痕跡と考えられる礫集中が検出されていることから、弥生後期中葉段階にほぼ埋没したものの、一部は古代の段階まで流路的な様相を呈していたものと推定される。

D1区出土遺物(大溝6-2図)

1は壺である。口唇部を摘み上げ、凹線文を1条巡らせる。2は壺である。口縁部外面に粘土帯を貼付し、口唇部下端に刻目を施す。外面に赤色塗彩する。3は壺である。口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は平坦面をなす。口縁部外面に凹線文・波状文を施す。口唇部には凹線文・竹管文を施す。4は壺である。口縁部はややひらき気味に直線的にのびる。内面に赤色塗彩する。4は壺である。口縁部は大きくひらき、口唇部を拡張する。口唇部・内面に波状文を施す。外面には刻目を施す。7は甕であり、口縁部は緩やかに外反する。口唇部を僅かに拡張し、凹線文を2条施す。肩部に列点文を施す。外面に赤色塗彩する。讃岐からの搬入品である。8・9は甕である。口縁部は「く」の字に外反し、口唇部は平坦面をなす。外面はナデ調整であり、内面はハゲ調整である。また、内面には粘土帯接合痕跡が認められる。13は讃岐から搬入された高杯である。18は高杯である。裾部に円孔を穿つ。外面はミガキ調整であり、内面にはしぼり目が認められる。内外面に赤色塗彩する。

D2区出土遺物(大溝6-3図)

1は須恵器の蓋である。天井部中央に扁平な擬宝珠状のつまみをつける。天井部外面は回転ヘラケズリ調整を施す。内面はヨコナデ、仕上げナデ調整を施す。2は高台付き杯である。底端部からやや内側に高台を付す。内外面はナデ調整である。焼成不良であり、にぶい黄橙色を呈する。3は高台付き杯である。内外面ともヨコナデ調整を施す。底端部付近に幅が狭く、やや高めの高台を付す。また、底部外面には爪状圧痕が認められる。これらの杯は上層で検出された溝跡から混入したものと考えられる。

I2区出土遺物(大溝6-4・5図)

1は壺である。口縁部は内湾気味であり、端部は外反する。外面には楕円形浮文を、内面には櫛描波状文を施す。4は壺である。短い頸部から口縁部は大きくひらく。口唇部を上下に拡張し、凹線文を施す。6は壺である。やや長めの頸部から口縁部は外反する。口唇部を僅かに拡張し、刻目を施す。また、頸部と胴部の境目に列点文を施す。胴部外面は細かいハケ調整後、ミガキ調整である。10は小型の壺である。算盤玉形の胴部から口縁部が短く外反する。胴部外面は下半がハケ調整後、ミガキ調整であり、上半はハケ調整である。内面下半はケズリ調整であり、上半はナデ調整である。19は高杯である。脚端部は僅かに拡張し、2条の凹線文を施す。外面はヘラケズリ調整を施す。裾部には2孔1単位の円孔を穿つ。讃岐地域からの搬入品と考えられる。20は高杯である。端部を拡張し、2条の凹線文を施す。外面に鋭利な工具で施文する。21は高杯である。脚部高は低く、裾部は大きくひらく。4方向に円孔を穿つ。内面には布目状の圧痕が認められる。

J4区出土遺物(大溝6-6図)

6は壺である。口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付する。器壁は薄い。8は壺である。口唇部を拡張し、刻目を施す。さらに2個1単位の竹管文、刻目を施した棒状浮文を3個1単位で配する。9は壺である。口縁部は大きくひらき、口唇部は平坦面をなす。内外面ともハケ調整を施す。12は壺である。口縁部は直立し、口唇部は面をなす。口唇部には2条の凹線文を巡らせる。口縁部外面には3条の凹線文を施し、さらに波状文を巡らせる。13は壺である。頸部と胴部の境目に刺突文を施した粘土帯を貼付する。14・15は壺である。口縁部を上下に拡張し、口唇部に凹線文・竹管を施した円形浮文を貼付する。14はさらに口縁部内面に波状文を施す。16～18は甕である。口縁部は「く」の字に屈曲するが、内面の稜はあまい。16・17は外面にタタキ目が残存する。18は外面を丁寧にハケ調整しており、タタキ目をうっすらと確認できるのみである。また、18の口縁部は僅かに拡張する。19は大型の高杯である。杯部から口縁部が短く直立し、その後大きく外反する。外面はタテハケ後、ミガキ調整を施す。20は高杯である。「ハ」の字にひらき、端部にはルーズな面取りを施す。裾部には円孔を穿つ。外面はミガキ調整であり、内面はナデ調整である。21・22は蓋である。21の頂部は窪み、22は平坦である。

J5区出土遺物(大溝6-7図)

1は長頸壺である。直立した頸部から口縁部は僅かに外反する。外面はタテハケ調整であり、内面はハケ目が一部に認められるが、主としてナデ調整で仕上げられる。2は甕である。短めの頸部から口縁部が水平にのびる。口縁部内外面はハケ調整であり、体部外面はハケ調整、内面はナデ調整である。3は甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲する。口縁部外面はタタキ後、ナデ調整を施す。体部はタタキ後、ハケ調整を施す。器壁は相対的に薄い。4の口縁部は明確な屈曲部を持たずに緩やかに外反する。頸部に刺突文が2段巡る。5は甕である。口縁部は緩やかな「く」の字状に外反し、口唇部は平坦面をなす。7は甕である。体部中位に最大径を持ち、口縁部は強く外反する。口唇部は上下に拡張する。体部は最大径より上位は細かなハケ調整であり、下位はミガキ調整

である。また、最大径付近にタタキ目が認められる。内面は基本的にはナデ調整により仕上げられるが、上半部には指押えの痕跡が認められる。讃岐地域からの搬入品である。8は高杯である。「八」の字状にひらく。端部を僅かに拡張し、沈線文を施す。外面は、ミガキ調整、内面はケズリ調整である。裾部には3条の沈線文を施し、2孔1対の円孔を対極の位置に穿つ。ただし、それぞれ1孔は貫通しない。讃岐地域からの搬入品である。9は高杯である。「八」の字状にひらく。円孔を推定で6箇所穿つ。10は高杯である。脚部は緩やかにひらき、端部は上方に拡張する。外面はミガキ調整である。内面はナデ調整であり、しぼり目が認められる。また、外面に顔料塗布の可能性はある。

J7区出土遺物(大溝6-8図)

1は甕である。口縁部は緩やかな「く」の字状に外反し、口唇部は平坦面をなす。胴部外面はヨコハケ調整後、タテハケ調整を施す。

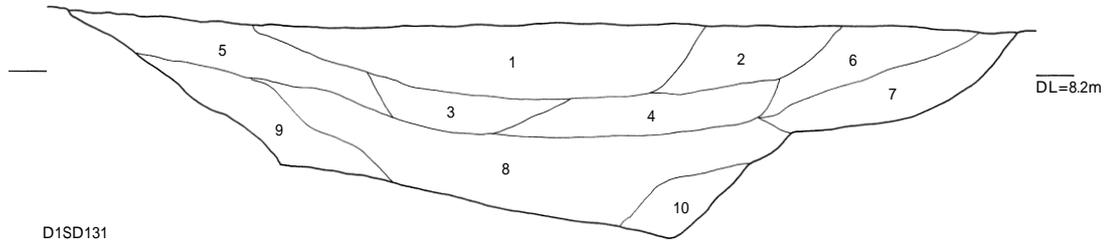
O1区出土遺物(大溝6-9図)

1は長頸壺である。直立気味の頸部から口縁部は僅かに外反する。外面はタテハケ調整であり、内面はナデ調整である。2は広口壺である。口縁部は頸部から緩やかに外反する。外面は粗いタテハケ調整であり、内面はナデ調整である。3は広口壺である。直立した頸部から口縁部は大きくひらく。口唇部は上下に拡張し、口唇部に鋭い工具により3条の沈線文を施す。口縁部外面はタタキ後、ハケ調整を施す。頸部内面は粗いヨコハケ調整である。4は複合口縁壺である。二次口縁は一次口縁端からやや内側から付く。二次口縁部外面には波状文を施す。頸部外面はミガキ調整であり、口縁部はハケ調整である。5は甕である。口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は僅かに拡張し、凹面状をなす。胴部内面には砂粒の移動痕跡が認められる。6は小型の甕である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部を摘み上げる。頸部内面には粘土の接合痕跡が明瞭に残存する。頸部内面には砂粒の移動痕跡が認められる。7は小型の甕である。口縁部は水平近くまで大きく外反する。口唇部は凹面状を呈する。胴部外面にはタタキ目が残存する。胴部内面、口縁部はナデ調整である。8は甕である。口縁部は「く」の字状に外反する。胴部外面には叩き目が残存する。内面上胴部には粘土接合痕跡が認められる。9は高杯である。口縁部杯部から大きく外反する。11は高杯である。脚部はあまりひらかない。端部を拡張し、強いヨコナデにより凹面状を呈する。外面は縦方向のヘラミガキ調整、内面はヘラケズリ調整である。12は高杯である。細身の脚部から裾部が大きくひろがる。内面にしぼり目が認められる。13は高杯である。脚端部を拡張し、3～4条の凹線文を施す。脚部外面にはハケ状工具による矢羽根状の刻目、櫛描直線文、円形の竹管文を施す。14は把手である。「C」の字状を呈し、断面形は長方形を呈する。

O2区出土遺物(大溝6-10図)

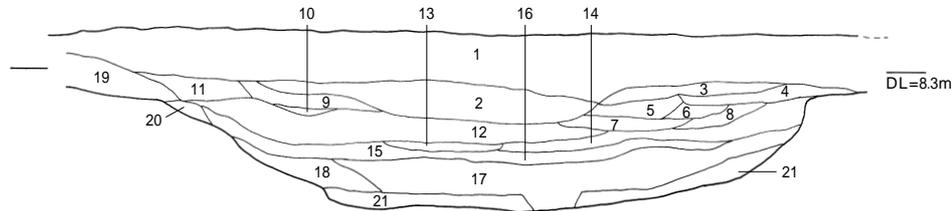
1は小型の甕である。口縁部は短く外反するが、屈曲度は緩やかである。口唇部は尖り気味におさめる。外面は右上がり方向のタタキ後、ナデ調整を施す。5は打製石包丁である。平面形は長方

形を呈し、両端に抉りを有する。一面には自然面を大きく残し、他面は剥離痕跡を大きく残す。6は磨製石斧である。刃部から基部にかけて徐々に幅が狭くなる。基部は丸い。刃部は片刃である。両面とも磨くがそれぞれ一部に敲打痕跡が残存する。断面形は中央部がやや膨らむ。



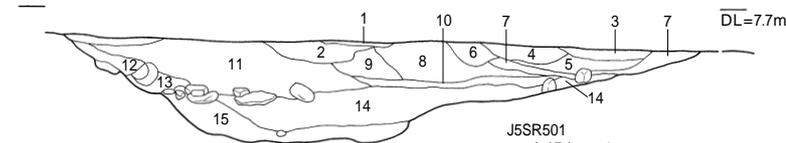
D1SD131

- | | | |
|------------------------|---------------------------------|---------------------|
| 1 灰褐粘質シルト20～25cm大礫混入 | 5 淡灰色砂質シルト(粗)礫入らず | 9 褐色粘土に15～25cm大礫混入 |
| 2 黒褐色粘土に5cm大礫混入(古代入る?) | 6 灰色粘土に小円礫混入 | 10 黄褐色1cm大砂礫層(粘土入る) |
| 3 灰色砂(粗)に7～15cm大礫混入 | 7 淡オリブ灰色砂質土1～2mm小礫、15～20cm円礫混入 | |
| 4 黄灰白シルト(やや粘質あり) | 8 暗褐色粘質土10～15cm礫混入(土器多)マ上層で取り上げ | |



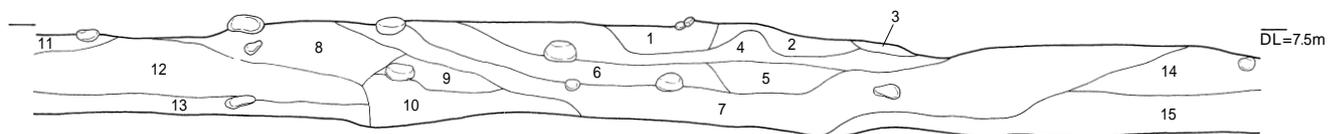
D2SD131

- | | | |
|------------------------|-----------------|-------------------------------|
| 1 表土 黄色粘質土に暗褐色粘性シルト混じる | 9 淡褐色シルト(砂質) | 17 灰色砂礫層(礫5mm大)土器多 褐色粘土ブロック入る |
| 2 黒褐色粘性土 | 10 褐色シルト | 18 オリブ灰色 粗砂 1cm大礫少し入る(土器入る) |
| 3 灰黄白色砂(粒子細い) | 11 淡灰褐シルト(砂質) | 19 暗褐色粘性シルト |
| 4 砂礫層(礫1mm) | 12 明黄色シルト(土器入る) | 20 灰褐シルト(地山の肩のくずれ) |
| 5 淡灰褐砂質シルト | 13 砂礫層 | 21 灰色細砂に褐色粘質土混じる |
| 6 褐色混じる灰色粗砂 | 14 淡灰色粗砂に黄橙色混じる | |
| 7 灰色砂質に小礫(1mm大入る) | 15 黄灰褐シルト(砂質) | |
| 8 褐色粘質土に小礫入る | 16 灰色砂に黄褐粘性シルト | |



J5SR501

- | | |
|----------------------|-----------------------------|
| 1 灰褐色シルト | 8 黄灰褐色シルト |
| 2 灰色砂土(微粒砂) | 9 黄褐色シルト |
| 3 灰褐色シルト(2～3mmの砂を含む) | 10 灰黄褐色シルト(1～3mmの砂がブロックで混入) |
| 4 灰褐色シルト | 11 黄灰褐色シルト(下層に微粒砂がたまる) |
| 5 灰色砂土(1～5mmの砂を含む) | 12 灰色砂土(微粒砂、黄褐色シルト混入) |
| 6 明黄褐色シルト | 13 褐色シルト |
| 7 暗黄褐色シルト | 14 灰色砂土(1～100mmの石が混入) |
| | 15 灰色砂土(1～5mmの石が混入) |

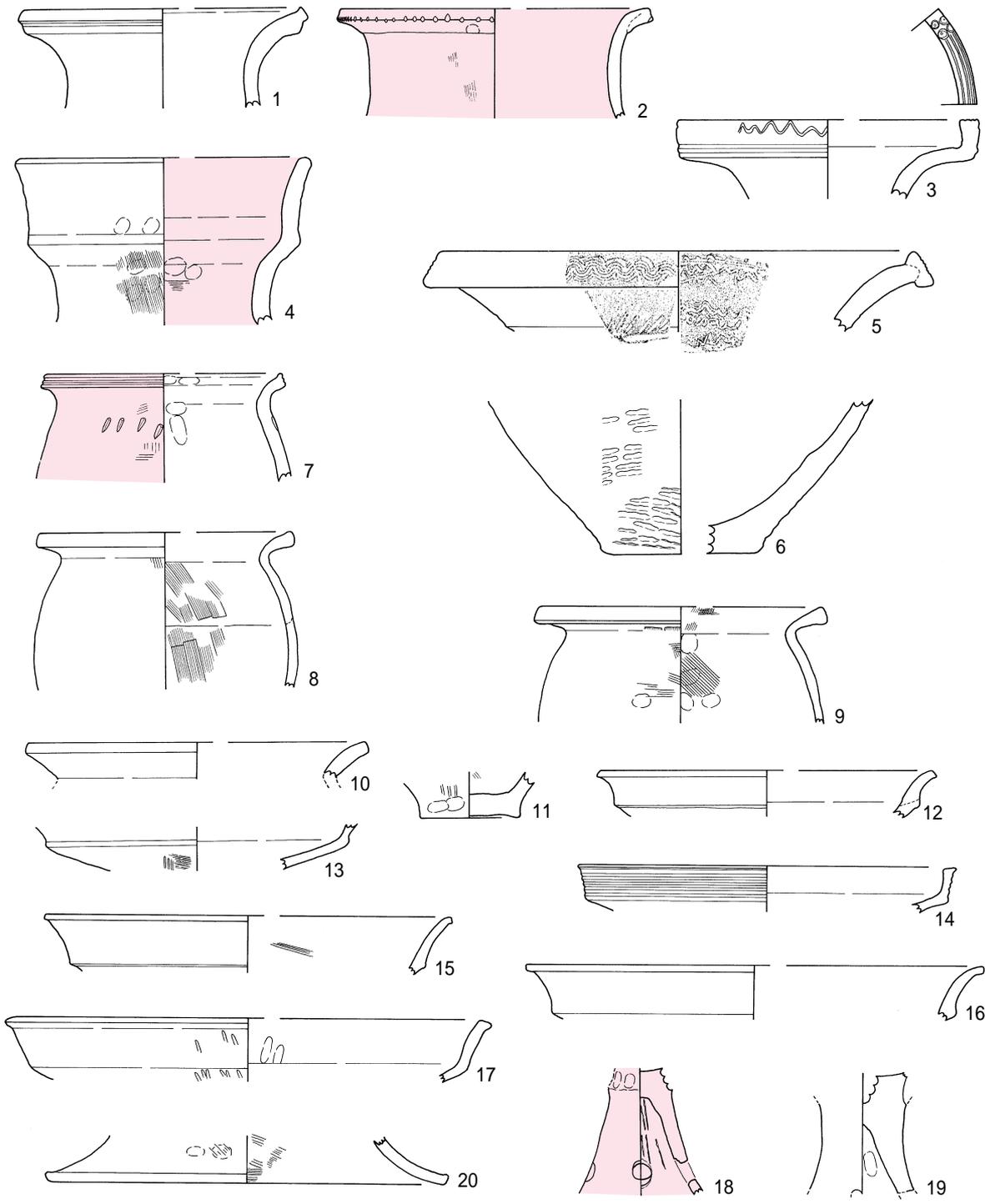


O2SR202

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1 砂礫層 | 9 黄灰色シルト(礫を多く含む) |
| 2 黒褐色シルト | 10 黒褐色粘性土(礫を含む) |
| 3 砂礫層 | 11 黄褐色シルト(礫を含む) |
| 4 灰黄色シルト(赤褐色粘性土を帯状に含む) | 12 黒褐色粘性土(赤褐色粘性土を帯状に含む) |
| 5 砂礫層 | 13 暗褐色粘性土 |
| 6 黄灰色シルト | 14 黒褐色シルト(礫を多く含む) |
| 7 黄灰色シルト(礫を多く含む) | 15 砂礫層 |
| 8 暗灰黄色シルト | |

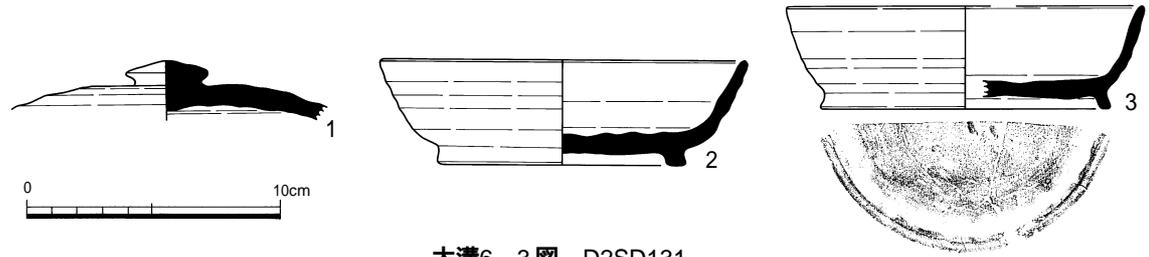


大溝6 - 1 図 セクション図



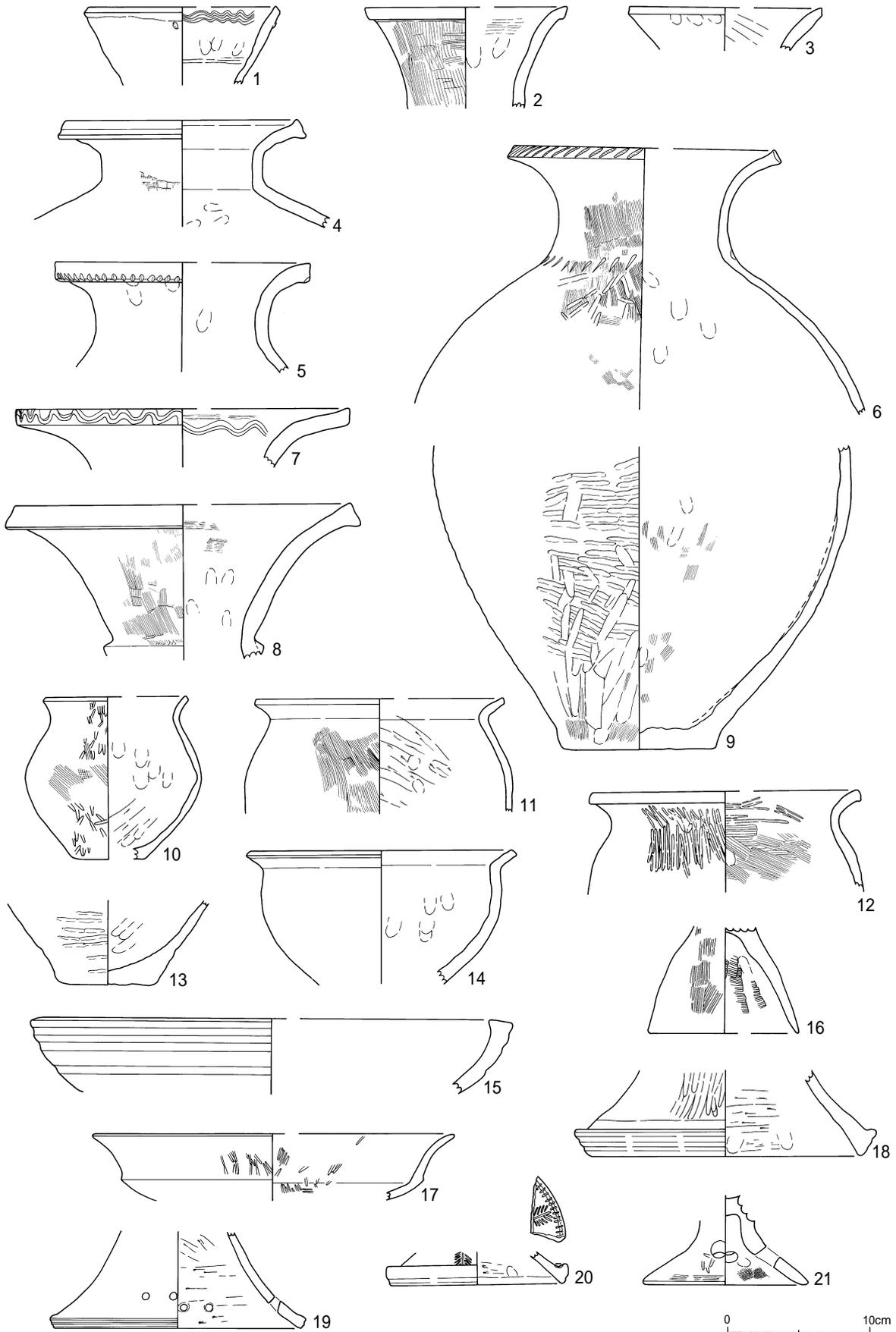
0 10cm

大溝6 - 2図 D1SD131(トーン部は赤色塗彩)



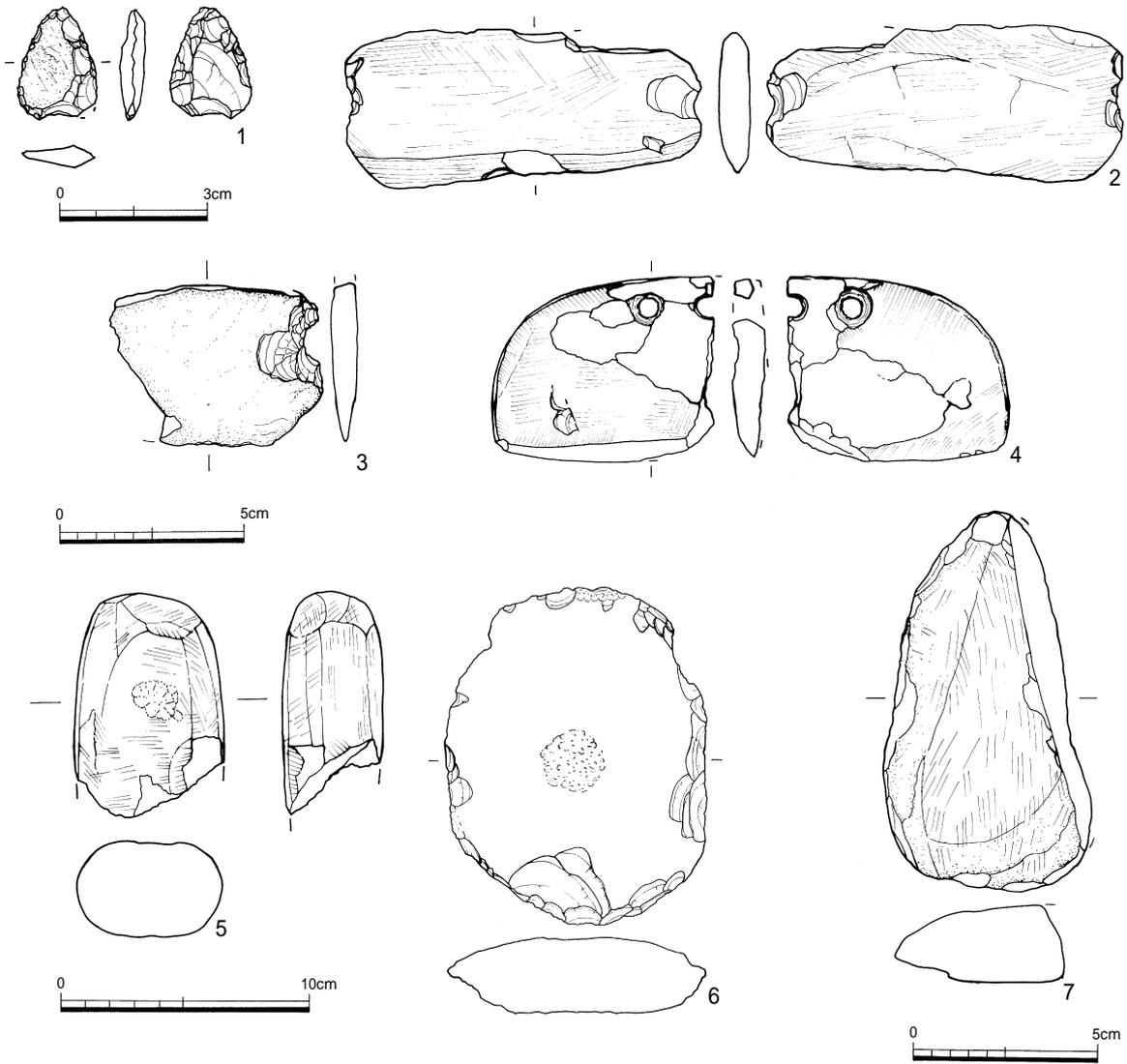
0 10cm

大溝6 - 3図 D2SD131

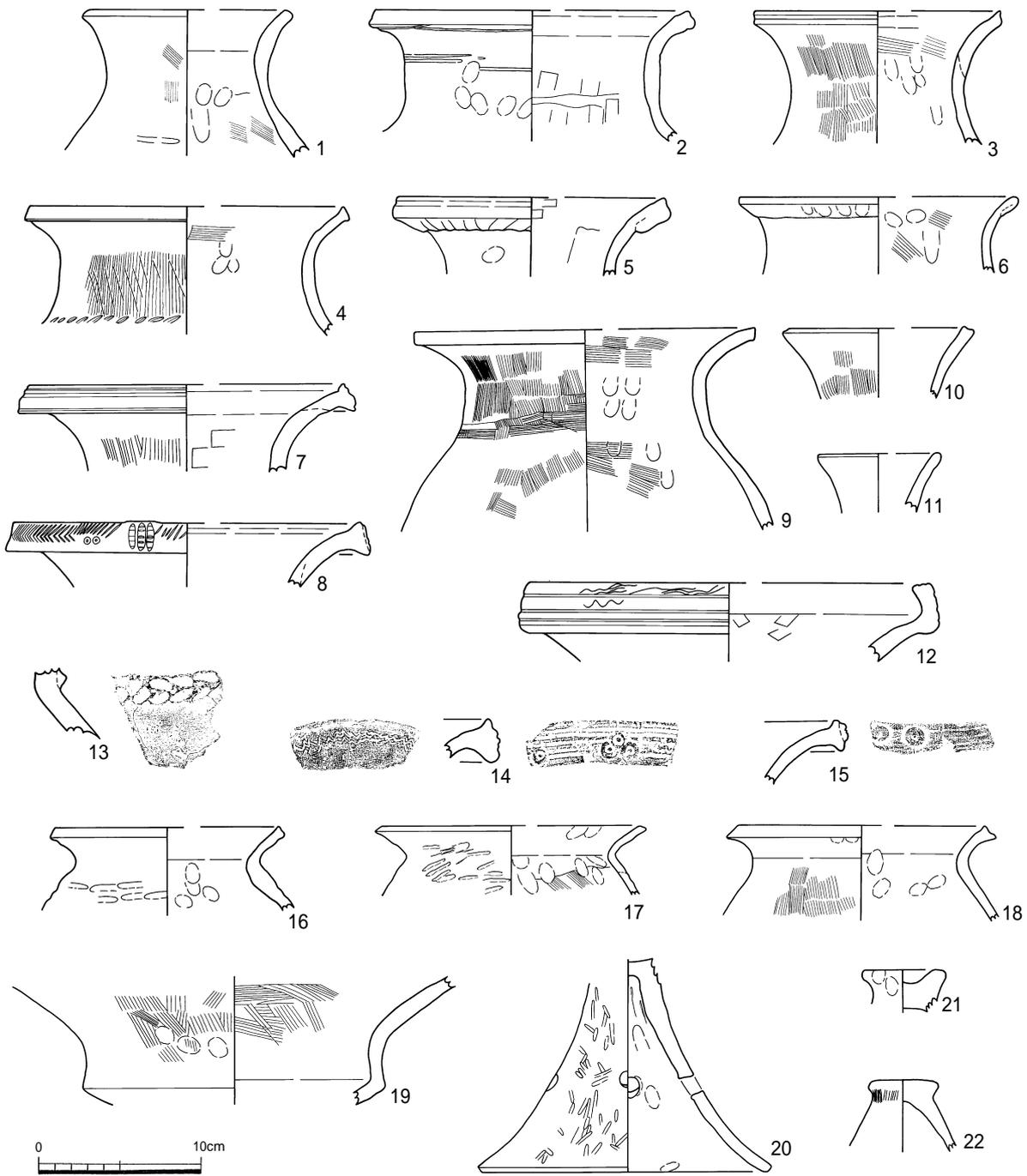


大溝6 - 4 図 I2SD220(1)

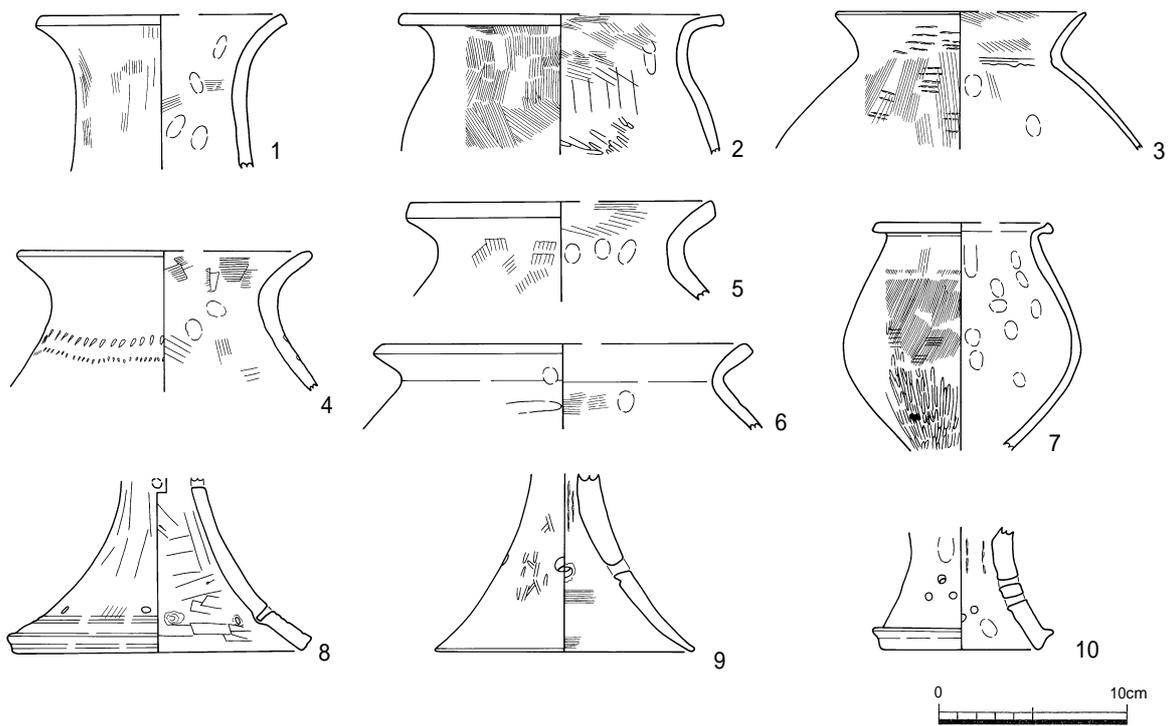




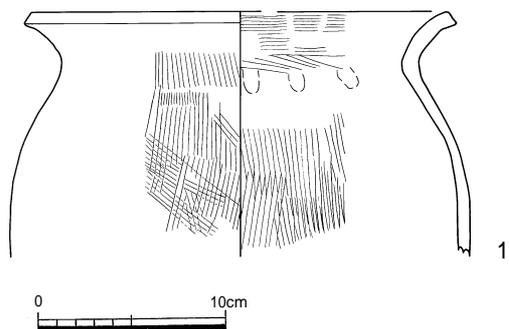
大溝6 - 5 図 I2SD220(2)



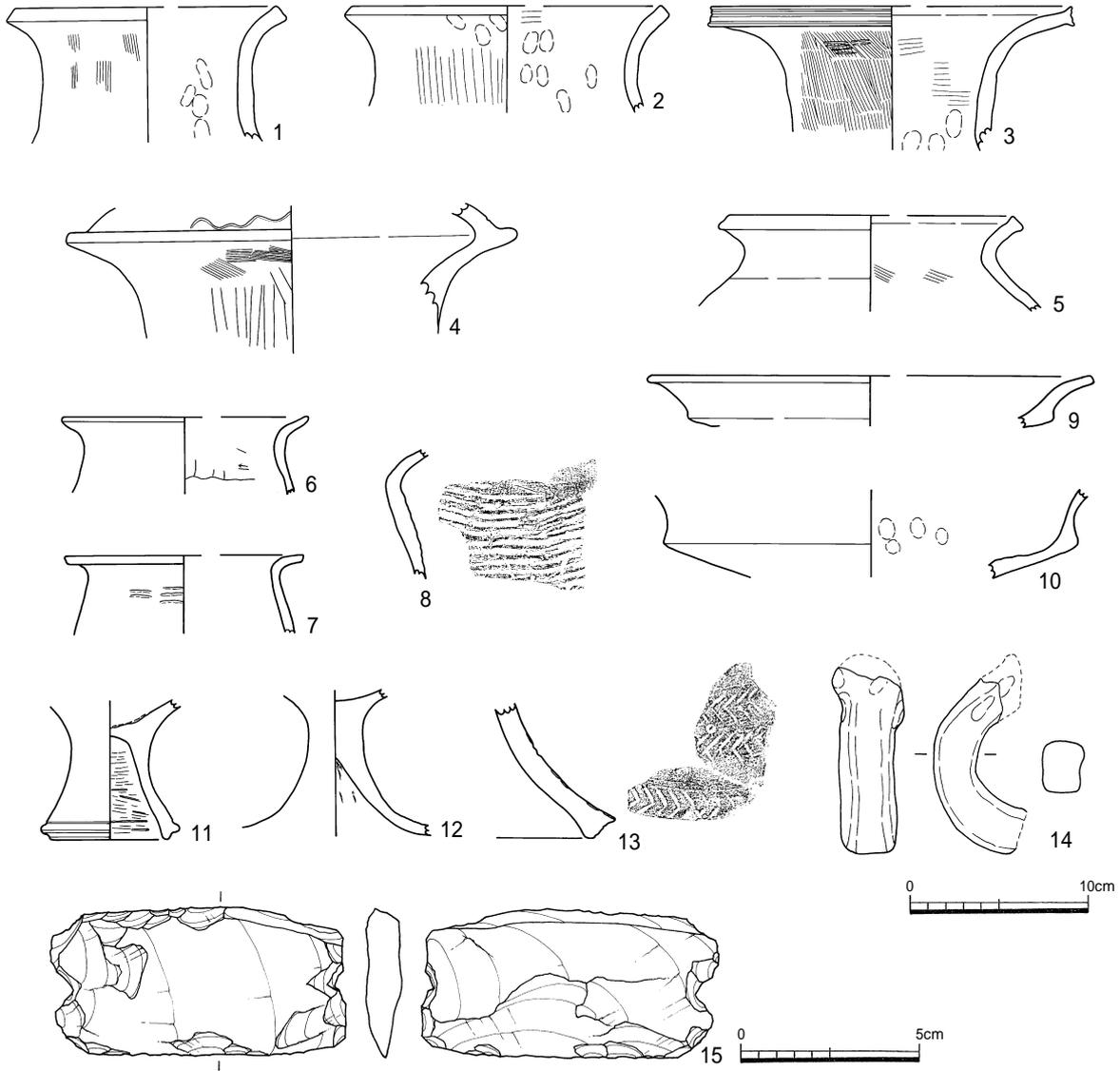
大溝6 - 6図 J4SR401



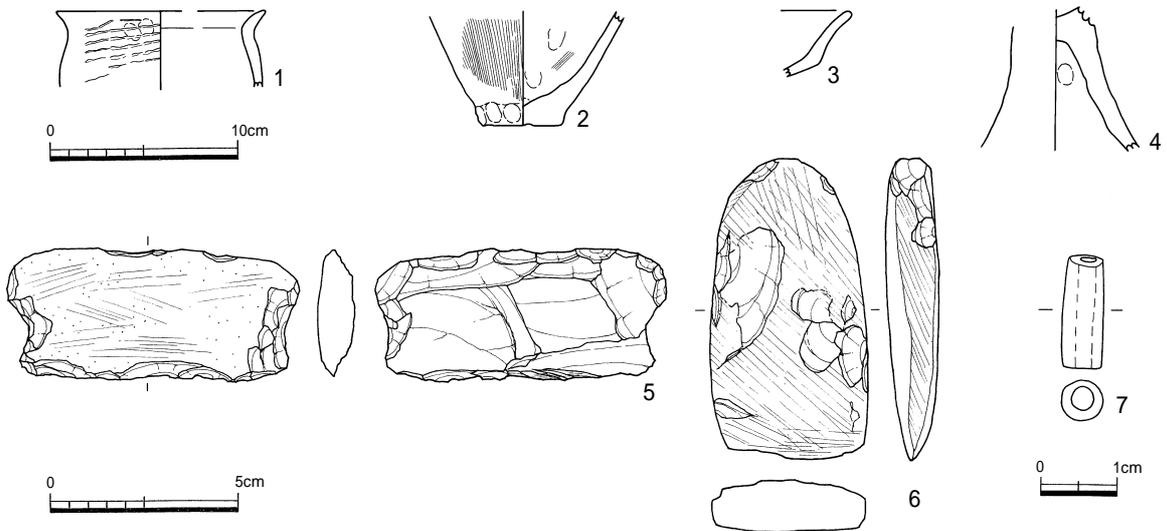
大溝6 - 7 図 J5SR501



大溝6 - 8 図 J7SR



大溝6 - 9 図 O1SR101



大溝6 - 10 図 O2SR202

大溝7(大溝7-1～3図)

時期；弥生 **方向**；東～西

規模；検出長 213.0m×幅 0.9～2.05m **深さ**；0.29～0.65m **断面形態**；逆台形～U字形

埋土；大溝7a 黒褐色シルト～粘土主体 大溝7b 灰褐色シルト～砂・砂礫主体

床面標高；大溝7a 7.8～7.9m、大溝7b 7.66～7.7m

接続；大溝7a I4SD102・I2SD102・I1SD102・N1SD102・N2SD102

大溝7b I4SD103・I2SD103・I1SD103・N1SD103・N2SD103

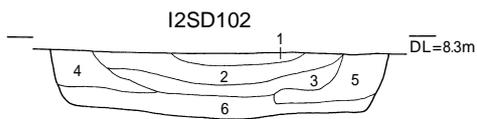
出土遺物；弥生土器(甕、壺、鉢、高杯、石鏃、石包丁、管玉)

所見；今次調査区の北部(I・N区)に位置する。大溝7はI4区東側では収束し1条であるがI4区西側からN2区にかけて2条が並行し、ほぼ東西方向に直線的に延びる。北側の溝を7a、南側の溝を7bと付し、以下に述べる。

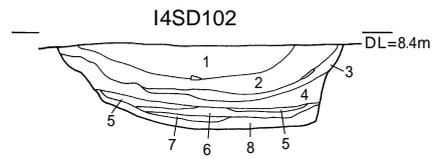
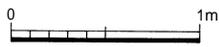
大溝7aは幅0.95～1.5m、深さ0.29～0.43mを測る。I4区では黒褐色粘土層上面で検出しており、検出面標高は8.3m前後を測る。ここでの堆積は黒褐色粘土質シルトを主体とし、砂、砂礫といった流水堆積土は認められない。断面形は北側が急な立ち上がりで底面はフラットな堆積を示す。2層までの上層部分はレンズ状の堆積を示しており、新しい段階の溝の堆積として捉えることが可能である。I2区では断面形は箱形を呈するがここでも流水堆積は認められない。N1区、N2区では断面形が浅いU字形を呈し、暗褐色から黒褐色を呈する粘土～シルト層が見られる。床面標高はI4区側が7.9m、西端部のN2区で7.8mを測り、高低差が10cm前後であり、堆積土もシルト～粘土であることから急激な流水は無かったものと考えられる。

大溝7bは幅1.73～2.05m、深さ0.44～0.65mを測る。I4区では断面形逆台形を呈し、大溝7bとの収束部の最上層には直径15～30cm前後を測る円礫が集中して検出された。大溝7を通して集石はこの部分のみであり、上面で古代の須恵器が出土している。性格は不明であるが、南部の大溝6で検出された集石と同じ状況であり、古代の段階に部分的に改修が行われた可能性がある。埋土は灰黄色シルト層であり、この堆積はI2区(大溝7-2図I2SD103セクション7層)まで上層に認められる。下層の逆台形部分の堆積は砂・砂礫の堆積が認められある一定の流水があったものと思われる。西端部のN2区(N2SD203)では浅いU字形を呈し、埋土は粘土質シルトであり、流水堆積は認められない。大溝7はN区西側の地形の低くなっている部分に流れ込んで終わるものと考えられる。

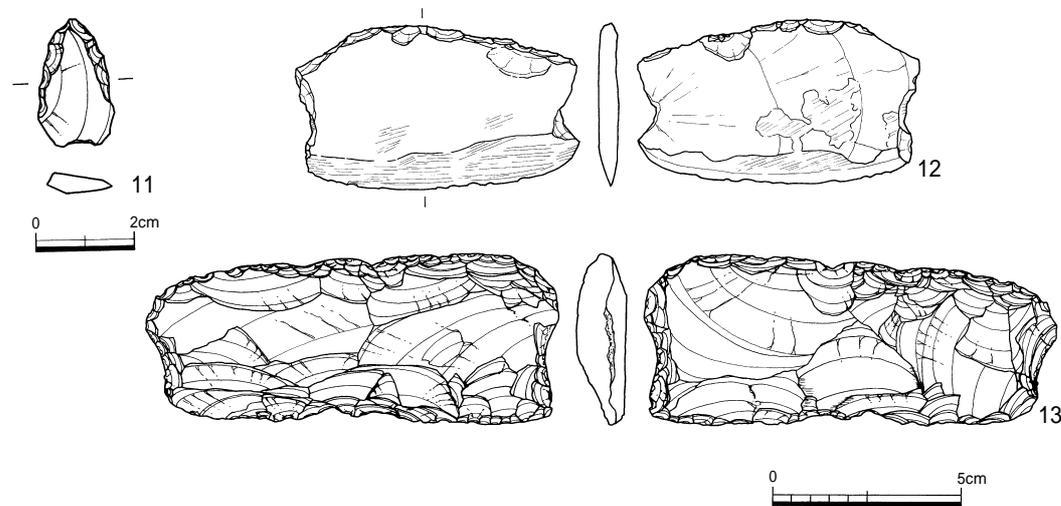
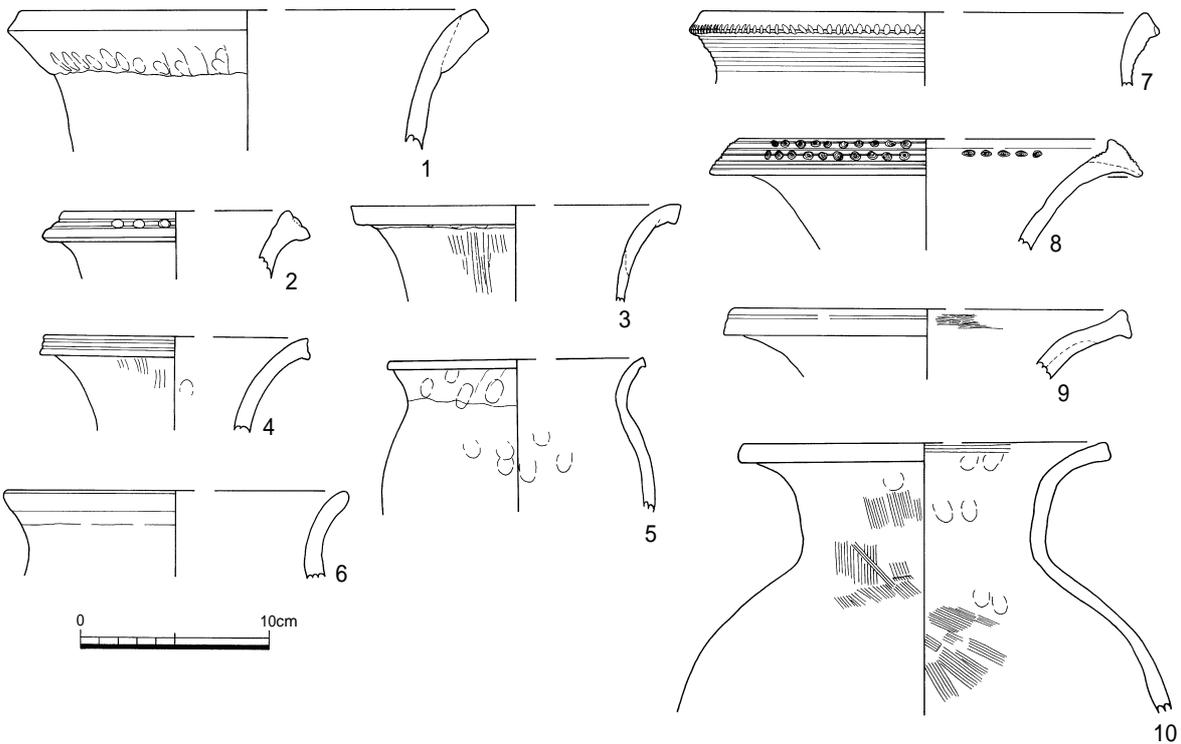
大溝7からの出土遺物は7a・7bを通じて弥生時代中期末～後期初頭のもので主体を占めており、特にI2・I4にかけて遺構の集中する部分でまとまって出土が見られた。7a・7bの遺物の時期差は殆ど見られず2条の溝は同時期に機能していたものと考えられる。また、前述した大溝7aのI4区の集石部分については古代の段階の改修が考えられ、溝の方向も条里ラインとほぼ同じであることから、古代の段階に区画溝として機能していた可能性も考えられる。



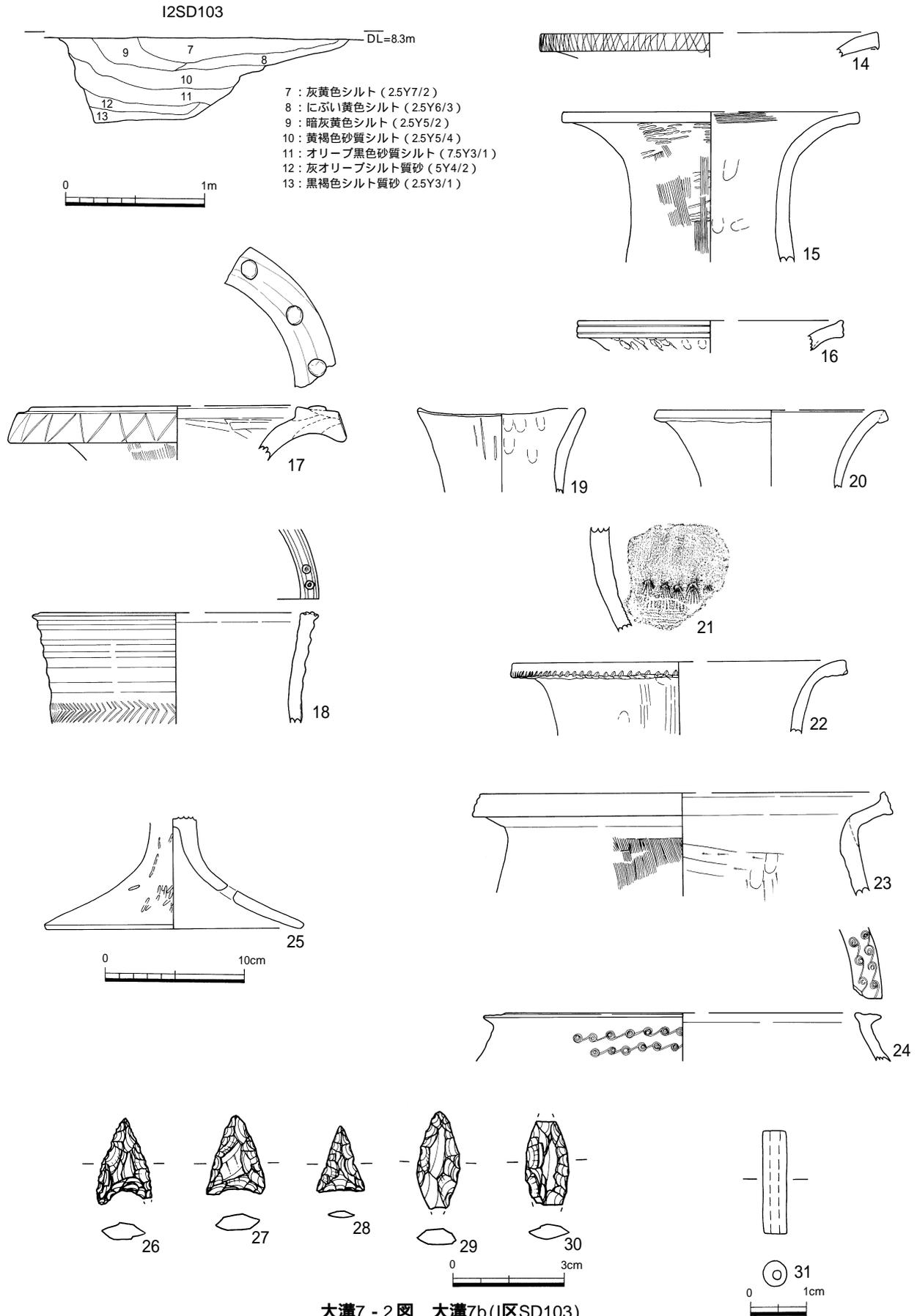
- 1: 褐灰色シルト(10YR6/1)
- 2: 灰黄褐色シルト(10YR5/2)
- 3: にぶい黄褐色シルト(10YR5/3)
- 4: 灰黄色シルト(2.5Y5/2)
- 5: 暗褐色シルト(10YR3/4)
- 6: 暗灰黄色シルト(2.5Y4/2)



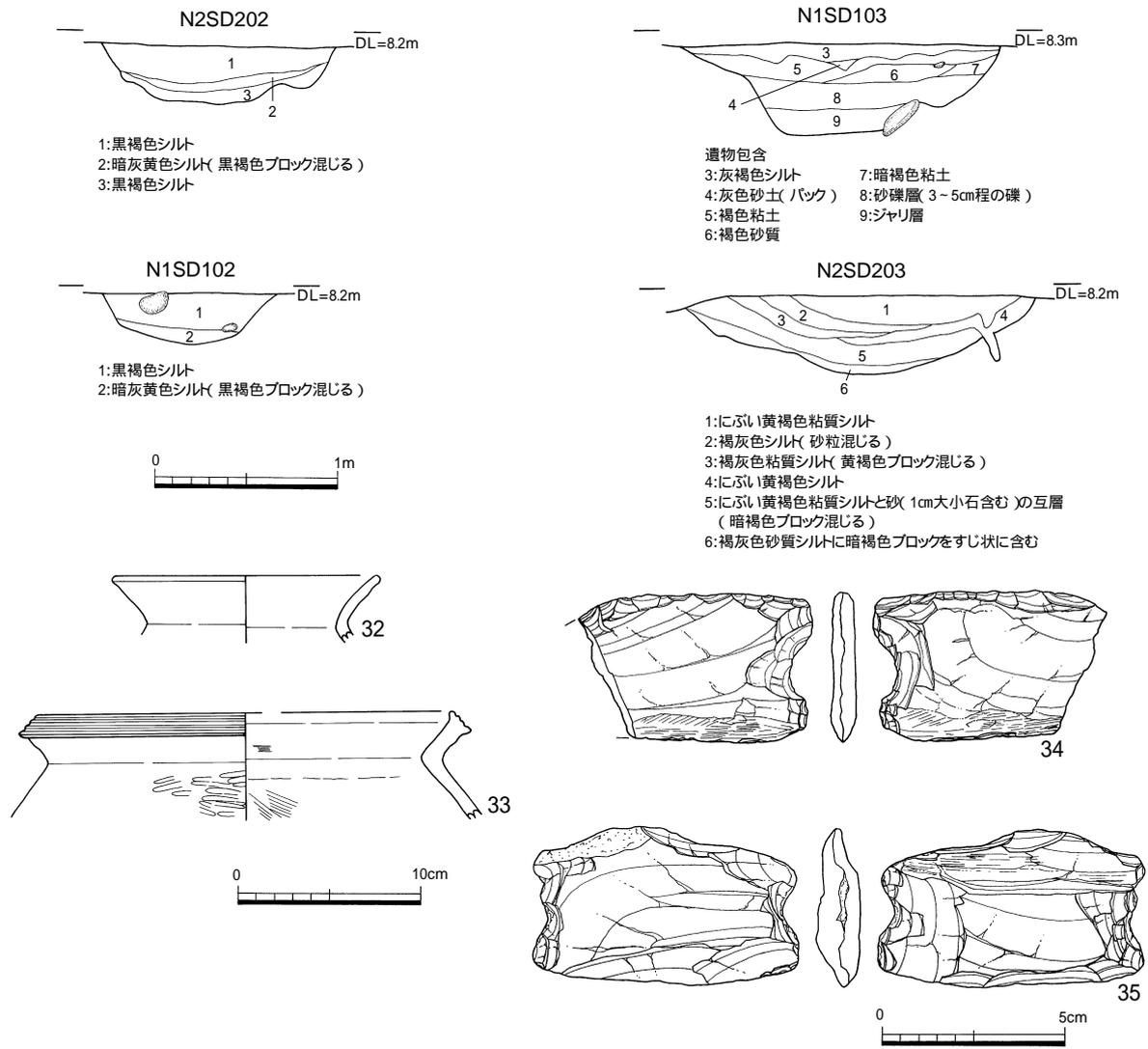
- 1: 黒褐色粘性土(10YR3/2) 遺物含む。
- 2: 黒褐色 " (10YR3/2) 褐灰色が混じる。
- 3: " (10YR3/2) 暗灰黄色シルトが混じる。
- 4: " 粘性土(10YR3/2) 灰黄褐色混じる。
- 5: 黒褐色粘性土(10YR3/1) 暗灰黄色シルトが全体に入る。
- 6: " (10YR3/2)
- 7: 黒褐色粘性土(10YR3/2) 黄灰色粘性土が入る。
- 8: " (10YR3/2) 褐灰色シルトの一部が入る。



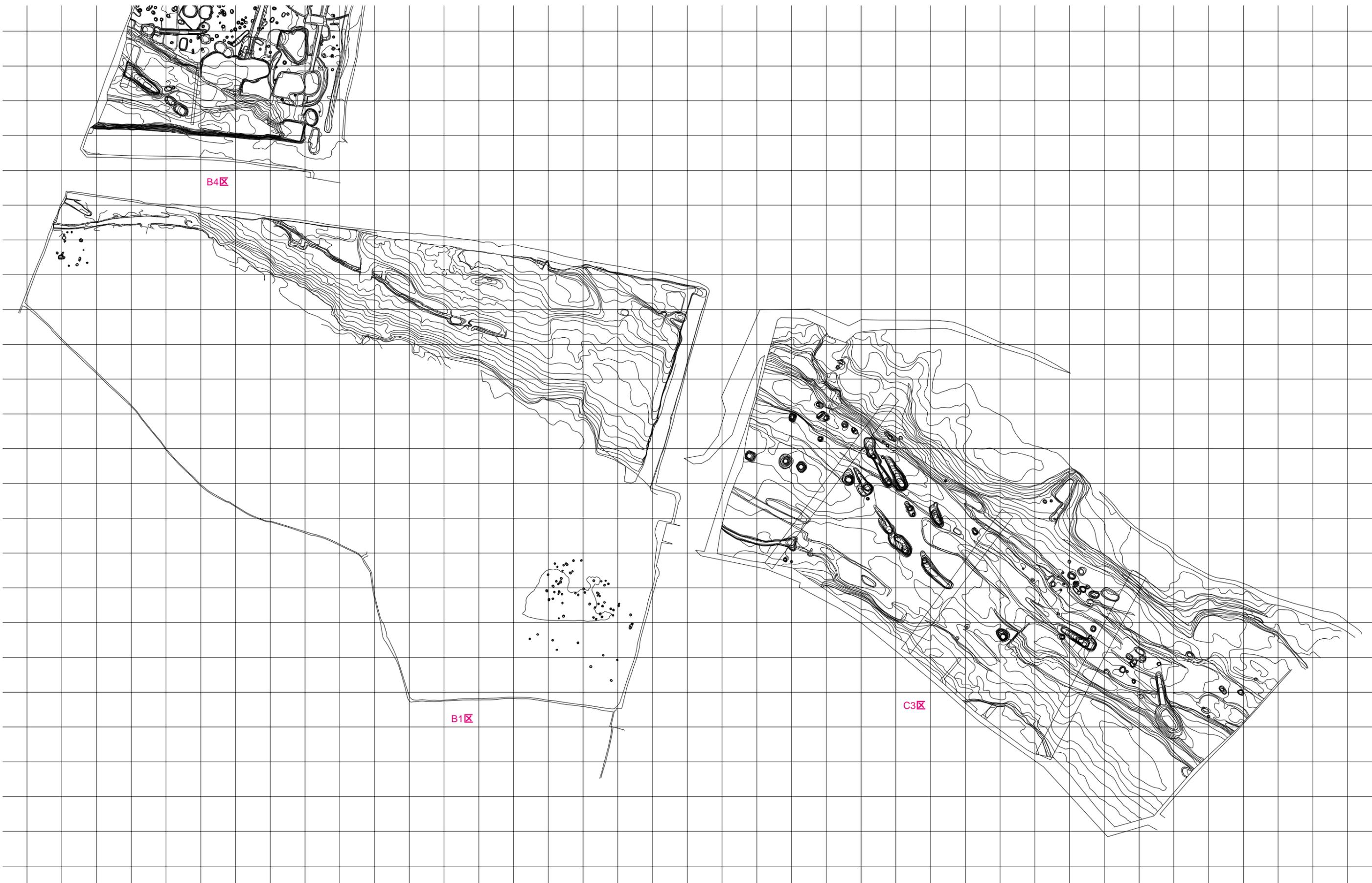
大溝7 - 1 図 大溝7a(I区SD102)



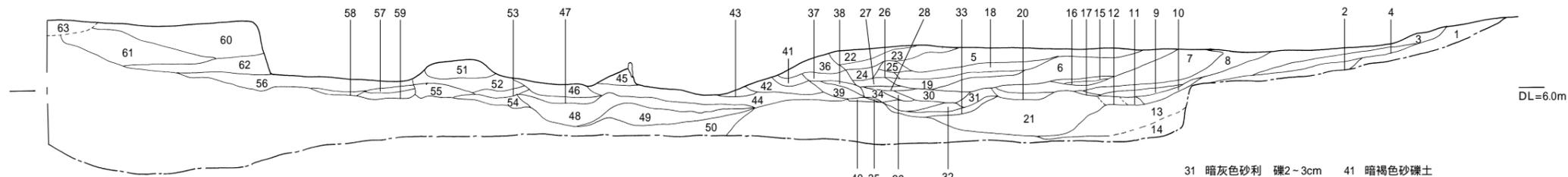
大溝7 - 2図 大溝7b(1区SD103)



大溝7 - 3 図 大溝7a(N区SD102・202)・大溝7b(N区SD103・203)

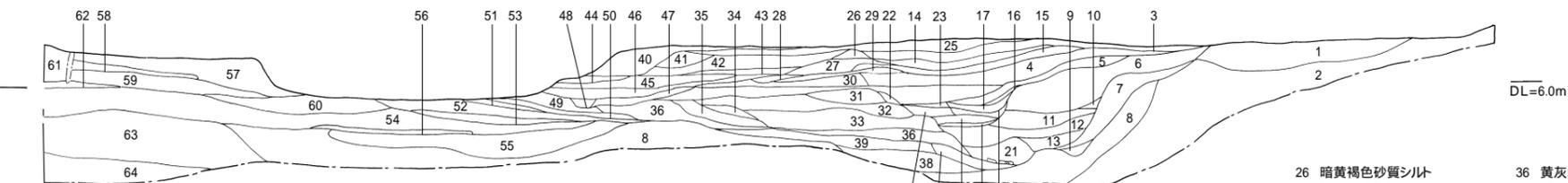


流路1 - 1 图 流路1



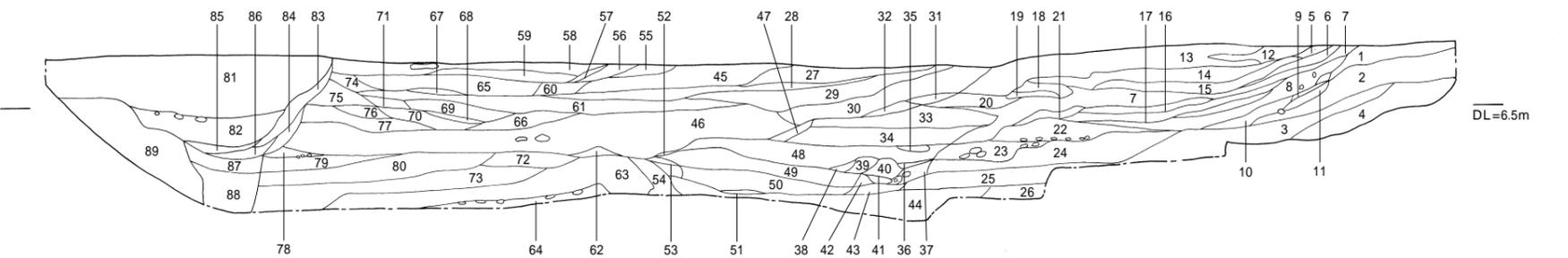
C3区 セクション1

- | | | | | | | | | | | | | |
|-------------------|--------------------|-------------------|---------------------|-----------------|-------------------|-----------------|-------------|-------------------------|--------------------------|-------------------------|-----------------|------------------|
| 1 黄褐色地山礫 | 6 暗灰色砂利 | 11 灰色砂礫土 礫5~10cm | 16 暗灰色砂 | 21 砂利 | 26 褐灰色シルト | 31 暗灰色砂利 礫2~3cm | 36 黄褐色砂礫土 | 41 暗褐色砂礫土 | 46 褐色砂礫土 鉄分付着 礫2cm大5~8cm | 51 暗灰色粘土 | 56 黄褐色砂礫土 礫5cm大 | 61 黒褐色シルト |
| 2 黄褐色地山礫 | 7 暗灰黄褐色シルト | 12 暗黄褐色砂礫土 礫2~3cm | 17 灰黄褐色粘性土 | 22 黄灰褐色シルト | 27 褐灰色砂礫土 礫5~10cm | 32 暗灰色砂利 鉄分付着 | 37 暗黄褐色細砂 | 42 黒褐色砂礫土 マンガン付着 礫1~2cm | 47 灰色粘土 | 52 灰黄色砂礫土 | 57 暗黄褐色砂利 | 62 灰色砂礫土 礫2~10cm |
| 3 灰褐色シルト | 8 オリーブ灰色細砂(黄色がかかる) | 13 地山 黄褐色砂質土 | 18 暗灰褐色シルト | 23 灰褐色シルト 土器入る | 28 青灰色砂 | 33 黄灰褐色粘性土 | 38 灰褐色シルト | 43 砂礫土 | 48 暗赤褐色砂礫土 鉄分付着 礫5cm大 | 53 明褐色砂礫土 礫10cm大 | 58 赤褐色砂礫土 鉄分付着 | 63 攪乱 |
| 4 黒褐色粘性シルト(前期包含層) | 9 暗灰色砂 | 14 地山 黄褐色粘性土 | 19 灰黄褐色礫混じる砂 礫1~2cm | 24 明灰褐色砂礫土 土器入る | 29 黄褐色砂礫土 礫1~2cm | 34 砂利 | 29 明黄色粘性シルト | 39 明黄色粘性シルト | 44 赤褐色砂礫土 鉄分付着 | 54 灰色砂礫土 礫7~10cm大 固く締まる | 59 暗灰色砂礫土 | |
| 5 褐灰色シルト | 10 明黄褐色粘性土 | 15 暗黄褐色砂 | 20 灰色粗砂 | 25 褐灰色シルト 鉄分付着 | 30 鉄分付着粗砂 | 35 黄褐色粗砂 | 40 鉄分付着粗砂 | 45 褐色粗砂 | 50 黄褐色粘性シルト | 60 明灰黄色シルト | | |



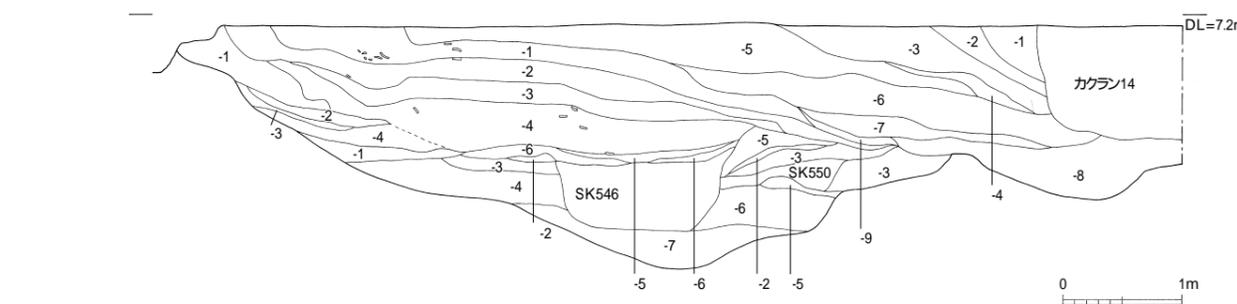
C3区 セクション2

- | | | | | | | | | | |
|------------------------------|-------------------|-----------------------|-------------|---------------------------|---------------|--------------------------|----------------------------|----------------------|------------|
| 1 黄褐色砂質シルト | 6 暗灰色砂礫土 粗い砂利礫混じる | 11 灰褐色粘性シルト | 16 オリーブ灰色砂礫 | 21 灰黄色シルト | 26 暗黄褐色砂質シルト | 31 暗灰色砂 | 36 黄灰白色砂質土 | 41 灰色粘性シルト | 46 砂礫土 砂多い |
| 2 黄褐色砂礫土 礫15~20cm | 7 黄褐色砂質シルト | 12 灰褐色粗砂 小礫混じる 礫1cm大 | 17 灰褐色粗砂 | 22 暗オリーブ灰色砂 粘土混じる | 27 暗褐色砂利 | 32 暗オリーブ灰色砂 | 37 暗灰色粘性シルト 礫混じる | 42 暗オリーブ灰色砂 | 47 灰色粗砂 |
| 3 暗灰褐色砂質シルト 礫混じる 礫10cm大 土器多い | 8 地山 黄灰褐色シルト | 13 黄褐色粘性シルト 礫3~10cm大 | 18 灰色粘土 | 23 砂礫土 礫2~3cm 15cm大礫少量混じる | 28 灰褐色粗砂 | 33 砂礫土 礫2~3cm多く混じる | 38 暗灰色砂 | 43 暗灰色粘性シルト 土器大量に混じる | 48 灰黄色砂利 |
| 4 灰色細砂 | 9 黄褐色粘性シルト | 14 暗灰褐色シルト 礫ほとんど混じらない | 19 灰褐色粗砂 | 34 砂礫土 礫2~3cm多く混じる | 29 褐灰色土 | 39 暗灰色砂礫土 礫2cm大 土器大量に混じる | 44 褐色色土 | 49 黄灰白色粘性土 | 54 黄灰白色粘性土 |
| 5 オリーブ灰色細砂粘土混じる | 10 灰褐色粘性土 | 15 灰色砂質土 | 20 灰色粘土 | 40 暗灰色砂礫土 礫2cm大 土器大量に混じる | 30 灰褐色砂利 粗砂多い | 41 褐色色土 | 45 灰色砂礫土 礫2~10cm大 土器大量に混じる | 50 灰色砂 下層粘土 | 55 黒色粘質土 |



C3区 セクション3

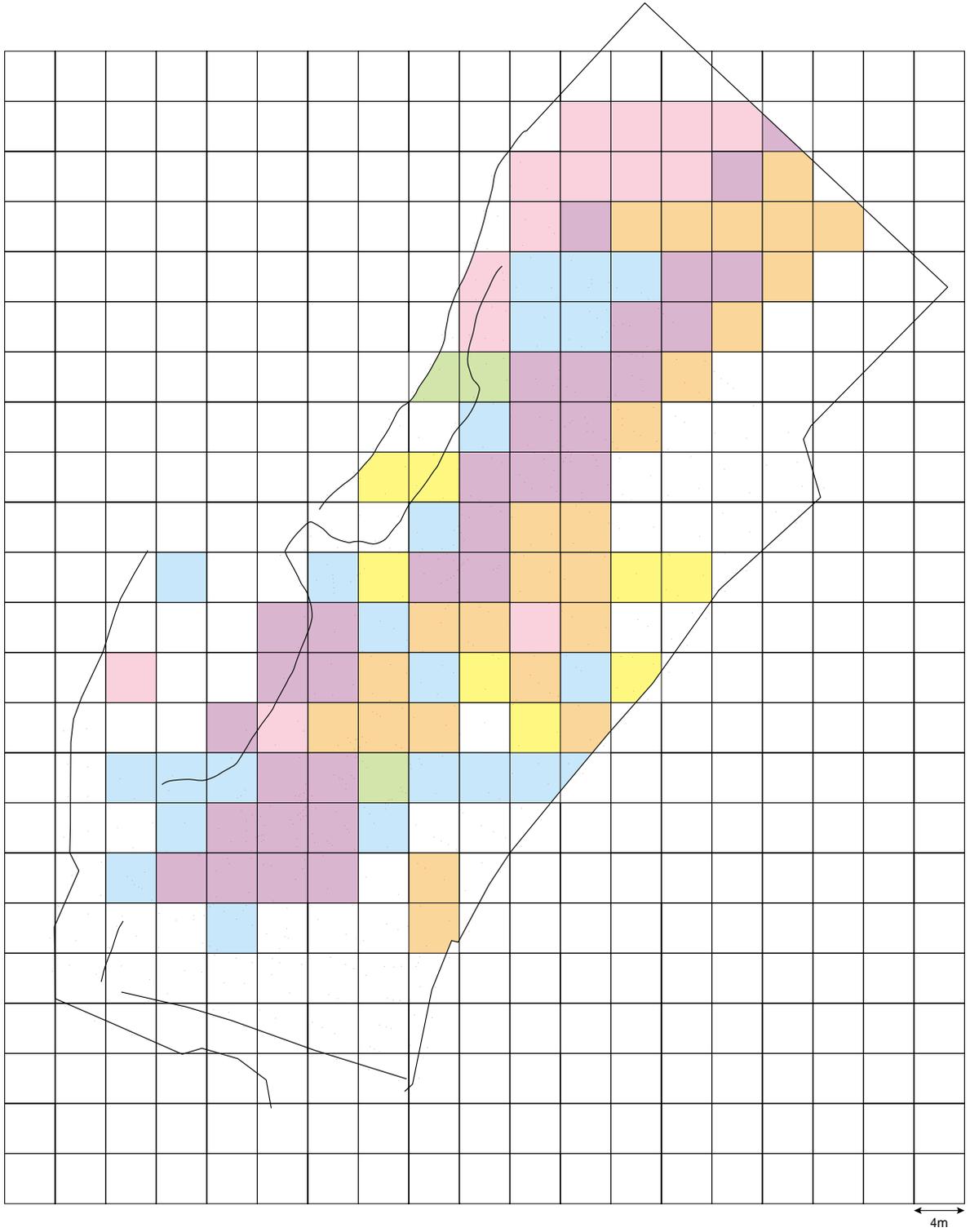
- | | | | | | | | | |
|----------------------|-----------------|------------------|---------------|--------------------|--------------|-------------------|-------------------|-----------------|
| 1 黄褐色シルト | 11 黄褐色に灰色混じる砂 | 21 暗灰褐色シルト | 31 暗オリーブ灰色粗砂 | 41 灰黄色細砂 | 51 淡灰色砂 | 61 暗灰色砂礫土 黄褐色砂混じる | 71 灰色に黄褐色少し混じるシルト | 81 暗灰色粘質土 |
| 2 灰色砂黄褐色シルト混じる | 12 黄灰白色シルト | 22 暗灰色砂礫土 | 32 暗オリーブ灰色砂礫土 | 42 黄灰色砂 | 52 砂 | 62 黄褐色砂 | 72 明黄褐色砂質土 粘性少しある | 82 灰色に少し緑混じるシルト |
| 3 地山 黄褐色砂質シルト 灰色砂混じる | 13 砂利 小礫1cm大 | 23 灰褐色粘礫土 礫多く混じる | 33 砂利 砂多い | 43 明黄色シルト | 53 黄褐色粘土 | 63 黄灰褐色砂 | 73 砂礫土 | 83 灰白色粘土 |
| 4 地山 黄褐色粘質土 | 14 黄灰褐色シルト 砂混じる | 24 黄褐色粘質土 | 34 砂利 小礫 | 44 暗黄褐色シルト | 54 灰色砂 土器混じる | 64 黄灰褐色砂礫土 礫は上層のみ | 74 灰色に黄褐色混じる粘質土 | 84 緑色砂 |
| 5 褐色シルト | 15 明黄褐色粘性土 | 25 黄褐色砂に灰色砂混じる | 35 砂 | 45 黄灰褐色粘性シルト 土器混じる | 55 灰黄褐色シルト | 65 暗灰色砂礫土 礫1~3cm | 75 黄褐色シルト | 85 灰色シルト 粘性ある |
| 6 暗褐色シルト | 16 灰褐色粘性シルト | 26 明黄褐色粘質土 | 36 砂 | 46 暗灰色砂利 礫3~5cm大 | 56 砂利 | 66 緑色砂礫土 | 76 暗黄褐色シルト | 86 粗砂 |
| 7 明黄色粘性シルト | 17 明灰褐色粘性シルト | 27 灰黄色砂 | 37 灰黄色粘礫土 | 47 細砂 | 57 砂 | 67 黄褐色粘土 | 77 暗灰色砂 | 87 シルト礫混じる |
| 8 灰褐色粘性土 | 18 砂利 小礫1cm大 | 28 灰黄色粗砂 | 38 灰色砂 | 48 砂利 小礫1cm大 | 58 明灰褐色シルト | 68 灰色砂 | 78 砂 | 88 細砂 |
| 9 灰色に黄色混じる粘質土 | 19 灰色砂 | 29 灰黄色砂礫土 土器混じる | 39 黄灰色シルト | 49 黄灰色砂 | 59 明灰色細砂 | 69 灰色粗砂 | 79 黄灰色粘質土 | 89 砂礫土 |
| 10 黄褐色粘質土に暗灰色粘土混じる | 20 暗灰色粗砂 | 30 オリーブ灰色砂 | 40 黄灰色粘質土 | 50 砂利 鉄分付着 礫3~8cm | 60 暗灰色砂 | 70 明黄褐色 | 80 明黄褐色砂礫土 | |



B4区セクション4

- [層 - 新河道(中期 洋式)]
- 1層: 灰褐色土(砂5mm~1cm大の礫を含む)
 - 2層: 暗黄灰色土(シルト)
 - 3層: 灰褐色土(砂質シルト)
 - 4層: 黄褐色土(シルト)
 - 5層: 黒褐色土(シルト)
 - 6層: 黄灰色土(シルト)
 - 7層: 黄灰色土(砂質シルト・黄色シルトに灰色砂が混じる)
 - 8層: 灰褐色土(砂礫粗砂に1~2cmの礫が混じる) 土器片多量(中期)ピーク
 - 9層: 黄灰色土(砂)
- [層 - 旧河道(-5期~中期)]
- 1層: 明黄灰色土(砂質シルト)
 - 2層: 黒褐色土(シルト・5mm~2cm大の礫を含む)
 - 3層: 黄褐色土(シルト)
 - 4層: 黄褐色土(砂質シルト)
 - 5層: 褐色土(砂礫・5mm~1cm大の礫と3~4cm大の礫を均一に含む)
 - 6層: 灰褐色土(細砂)
 - 7層: 黄褐色土(砂礫・3~5mm大の礫を含む)
 - 8層: 明灰褐色土(シルト・炭化物を含む)
 - 9層: 灰褐色土(砂質シルト)
 - 10層: 明黄灰色土(シルト)
 - 11層: 黄褐色土(砂礫・5mm~1cm大の礫を含む)
 - 12層: 赤褐色土(シルト)
 - 13層: 暗灰褐色土(砂礫・1~3cm大の礫を含む)
- 層 - 新河道 - 期に川床の砂レキ堆積と土器のピーク
 層 - 旧河道 - 期に川床の砂レキ堆積と土器のピーク 川床でSK546の祭祀
 層 - 旧河道 - -5期に川床の砂レキ堆積と土器のピーク 川床で土器来中の祭祀C
 層 - 旧河道 - -5期~それ以前特にハイキのピークはないが、その終期にSK550の祭祀がある

流路1-2図 流路1セクション図



流路1 - 3図 グリッド別遺物出土

1. 流路1の概要

調査概要

全体調査区の中では東側部分に位置し、C1区の東隣に位置する。調査は遺構の検出面が複数存在したことや、検出した流路跡の規模が大きかったこと、さらに水路付け替え等の事情が重なったことにより1997・1999～2001年度の4次に分け行った。

97年度は空港本体工事部分の調査を行った。調査では表土直下から遺構を検出したが、遺構検出面に弥生時代の遺物が多量に含まれており、弥生時代の流路跡の上に遺構が存在することを確認した。このため、最上面で確認した遺構を調査した後、この遺構検出面となっている流路跡埋土の掘削を調査区全域にわたって行った。

検出した遺構は中世～近現代のピット、土坑、弥生時代後期の住居跡、ピット、土坑、弥生時代前期の土坑、環濠の一部であった。流路跡の西側落ち口から検出した弥生時代前期の遺構を除いて遺構は、いずれも流路跡埋土から検出した。

流路跡は深さ約1.5～2.0m、幅約20mで延長は南北方向で調査区全域にわたる。

埋土中には弥生時代の遺物が多量に含まれており、調査区北側では遺物集中出土地点も検出され弥生時代に埋没した可能性が高いことが確認された。97年度の調査では、上面遺構と流路跡の埋土上層の掘削が行われたのみで、流路跡部分の完掘には至らなかった。

99年度は97年度調査区北側にあたる空港本体部分北側、場周道路部分を中心に調査を行い、若干空港本体部分の調査も行った。

調査結果は場周道路部分では黄褐色地山面で内濠から続く溝跡の延長部分、流路跡西側落ち口を確認し、流路跡埋土上からは弥生時代の住居跡、土坑を確認することができた。調査区東側部分では須恵器、中世の遺物の出土が見られ、古代以降の流路跡の存在を推定したがプランは確認できなかった。しかし、調査区東端部で中世の溝跡に関係すると考えられる人頭大以上の砂岩質の丸石の集石遺構を確認することができた。この他では近世墓を確認した。本体工事部分では、表面の再検出作業を行い、中央部で近世墓、南端部で弥生時代の住居跡を検出した。

99年度調査では場周道路部分、空港本体部分とも流路跡の埋土掘削までには至らなかった。

2000年度は場周部分の流路跡埋土掘削を行い流路跡を完掘した。遺物のみが出土し遺構が検出できなかった中世の遺構も溝跡の床面を検出する事ができた。弥生時代の流路跡からは前期、前期末～中期の土器だけでなく、後期中葉の土器も出土した。この結果、97年度調査当初より流路跡の埋没は、弥生時代中期前半までに終了したと考えられていたが、最終埋没は弥生時代後期まで下ることが明らかとなった。

2001年度は本体工事部分の流路跡完掘作業を行い、C3区の調査を全て完了した。

調査では流路跡の他、土坑を検出し、流路跡床面から弥生時代中期以前と考えられる階段状に降りてゆく構造の土坑などを検出した。また、弥生時代以降の遺構も検出し、調査区東側部分で古代～中世の溝跡および溝跡に関連すると見られる集石遺構を検出した。

流路 1 (流路1-1 図)

時期；弥生I～V **方向**；N-75°-E

規模；約125m×約20m **深さ**；約2 m **断面形態**；U字状

埋土；灰褐色砂礫土、砂利、暗灰色砂

床面標高；約4.5m

接続；南側B区、H区、1次調査Loc.32、33

出土遺物；弥生土器、石器

C3区の概要；今回の調査で検出した遺構の中で最も規模の大きなものである。幅約20mの間で埋没と開削を繰り返しながら弥生から近世まで断続的に同一地点を流れた自然流路と考えられる。

流路1の床面は標高約4.5mで透水性の弱い黄褐色粘性シルトである。この黄褐色シルトは東側調査区C2区、西側調査区C1区では弥生時代前期の遺構面になっていた。流路1の埋土はこの上に堆積しており灰褐色砂礫土、砂利、暗灰色砂が互層になっている状況であった。各層には量的差違は見られるものの全て遺物が含まれており、無遺物層は見られなかった。

埋土中から出土した遺物は多量でコンテナにして約900箱が出土しており、その内の約95%以上が弥生時代の土器、石器であり、その他では古代末～中世～現代の遺物が出土している。縄文土器が2点出土しており、1点は埋土中、1点は東側肩口の黄褐色シルト中からの出土である。

黄褐色シルトを開削したC3～B区での流路1は、弥生時代I期に始まったと考えられる。弥生時代ではI期末～期、期～期、期～IV期、IV期～V期と断続的に流路が存在し弥生終末期から古代までの流路は確認できず、古代末に規模を縮小し再びこの部分に流路が戻り、中世には溝に整えられ現在に至っている。

流路1からは、埋土上面を掘り込んだST301～303、ST3001～3002や埋土を除去した床面から階段状の土坑を検出しており、流路の消長と埋没後の土地利用のあり方を示す資料として重要である。

時期ごとの流路1の動態を調査最終年度の01年度の各グリッドから出土した最も新しい時期と考えられる遺物から作成した出土遺物分布図(流路1-3図)からみてゆきたい。最も古いと考えられる時期は弥生I-2～3でその遺物の分布は、東側、西側の黄褐色シルトの落ち口に残る状態で出土している。I期末～期は浅瀬状になっていた部分に集中して残存していた状況である。期～期は浅瀬状になっていた部分から出土したI期末～期の土器に重なるように出土し、最も分布にばらつきがみられる。期～IV期は最も遺物の出土量が少なく特にIV期の遺物は少ない状況であった。また、その分布域も狭く散漫な状況であった。IV期～V期の遺物はV期半ばを中心としたもので、遺物の分布は調査区中央部からやや東側に比較的直線的につながった分布を示している。一部調査区西側に分布がみられるものは、ST301～303に伴う可能性が考えられる。

これらのことから、I期は地形的に落ち込んだ部分の比較的広い範囲を流路が流れており、I期末～期では東側を中心に流路は流れたと考えられ、西側部分は水の枯れた状態で階段状の土坑が営まれたと考えられる。遺物が集中する浅瀬状の部分はこの時期、埋没が進み低い窪み状になり土器を投棄した可能性が考えられる。

期～期は流路が最も大きくなったと考えられ、調査区南側で西側に流れを変えC1区南部へ切り込んだのもこの時期と考えられ、埋没も規模が大きく進んだ時期と考えられる。

期～IV期特にIV期には流路の存在が希薄になり、埋没が進行し陸地化が始まったと考えられ、C3区で示した中期の遺構配置図の状態の可能性が高く、後期初頭から前半にかけて流路1埋土を遺構面にした遺構が営まれたと考えられる。再び規模の大きな流路となるのはV期前半～半ばで、調査区やや東側をほぼ直線的に南流している。

弥生時代終末期から古代前半までは流路の存在を示すものは無くなり、古代末に再び現れるが、調査区東側に規模を縮小し直線的に流れており、地形を利用した溝になっていた可能性が強く、本報告でも第3分冊C3区でSD301として報告している。

出土遺物について

出土遺物は約900箱出土しており、ほとんど弥生土器である。わずかに古代末～中世～現代の遺物が出土しているが、すでに第2分冊で報告しており、流路1では図示していない。

縄文土器は2点出土しており、4-2は鷹島式で中期の土器と考えられ口縁部の一部のみが出土している。田村遺跡群では調査区南部H区周辺で縄文時代後期の遺物がまとまって出土しているほか、散発的に縄文時代の遺物が出土している。4-1は縄文地の土器で緩やかな羽状口縁を持つ。東側肩口で出土しており流路床面を形成している黄褐色シルトの堆積時期を示している。

弥生土器は遠賀川系の土器からタタキが盛行する直前の時期のものまで出土しており、I期末～期末までの遺物をもっとも多くIV期の遺物は少なくなっている。

石器では石鏃、刃器、石包丁、石鎌、石斧、環状石斧、石錐、石皿、磨石、叩石、砥石、石製紡錘車など多種多様なものが出土している。

器種ごとに概観してゆく。層位による時期比定が行えなかったため、各器種の時期については1次調査の編年に準拠する。

土器図

壺(4図-1～10図-12)

壺ではI期は遠賀川系のものがほとんどで、口縁部に段部を持つものは大型のものが多く、大半を占める小型～中型のものは口頸間には沈線によるものが多い、沈線間に刺突文が施された5-1～3もみられる。また、薄い貼付突帯を巡らせ///-///文様を刻んだ4-4も出土している。5-6～9は口頸間の沈線の条数が増加し頸部が長く直立化しておりI期後半と考えられる。5-12は小型の壺であるが頸部に幅のある刻目突帯が巡っている。5-11は口縁端部内面に粘土帯が巡り鋤先状になった口縁部を持つもので、頸部にも大きな粘土帯を貼付け指によって上下に摘まれた刻目突帯が巡る。

6-1からが、I期末と考えられる。6-3・4は口縁内面に突帯が巡り突帯端部が蕨手状をなしている。頸部の沈線多条化は進行し、沈線に埋め込むような刻目突帯が数条ごとに施される。胴部にも同様の文様がみられる。

6-7～12は口縁内面を巡る貼付突帯が2～3条施され、4～7個1組の円孔が穿たれている。

I期末～期初頭は6-1～7-10が相当するがI期と期を分離する事は難しい。おおむね期の傾向として胴部は最大径が中胴部に上がり、長胴化の傾向がみられる。口縁部の形態は端部に強い横ナデが施され面をなし、刻目が施される。文様はヘラ描きから櫛描への変化がみられるが両者は同時併存していると考えられる。7-6は半裁竹管と考える双線により施文される。6-11は波状文がみられ、7-8は幅の広い押し引き状の簾状文が施されている。簾状文は期に出現するものと考えられる。

8-1～13は期～期初頭と考えられる。器形では口縁部が直立する長胴のものと、比較的短い頸部を持ち短胴の8-11のようなものがみられる。外面の文様は幅の狭い櫛描文様のみになるが沈線はしっかりしている。波状文、多重沈線文が隙間無く交互に施される。また、沈線文間には断面三角形のしっかりした貼付突帯が巡るものがみられる。

期9-1～11では、長頸化が進む一方9-8のような小型の壺がみられる。また口縁端部が広い面をなし、斜格子文が施されたものが出土している。口縁端部は粘土帯貼付のものがほとんどをしめる。

9-12～16は凹線文系の壺でIV期末の可能性が高い。9-14は胴部に貝殻による刺突文がみられ搬入の可能性ある。9-15は直立する口縁部に弱く幅の広い凹線が施され、口縁部下には横方向の把手が欠損した痕跡が残る。水差し形と考えられるが9-16と比べて粗製である。10-2・3は貼付口縁を持つ壺でIV期末～V期と考えられる。IV期末～V期と考えられる壺は最大径が中胴部または上胴に位置するものがほとんどで、胴部最大径から底部までが径に比して長い特徴がみられる。

10-4・5は広口壺で口縁部は面をなすが、凹線文はみられないV期前半と考えられる。

10-6は口縁端部のみが残存しているが割れ口から二重口縁と考えられる。口縁部は凹線を意識した沈線文の間に矢羽状の刺突文が施される。時期はV期と考えられるが出土例が少なく不明である。10-8は外面にタタキ目が残存する小型の壺である。甕では後期後半にタタキ調整が盛行するが流路1からはほとんど出土していないため、後期中葉までの時期と考えられる。

10-10・11は時期不明である。

甕(11図-1～16図-9)

11-1～12-8は如意形口縁を持つもので遠賀川式と考えられる。11-5は削り出しの段部を持つ甕である。12-1～8は口縁部に多条沈線が巡るもので12-4・5・8は多条沈線により間延びした口縁部下からふくらみを持つ胴部を有するものである。12-9～14は瀬戸内型甕で口縁部に突帯が巡る。12-9～11はヘラ描き沈線による多条沈線が巡る。12-13は明るい橙色の胎土で搬入土器と考えられる。

13-1～14-13は在地の甕の系譜になると考えられる土器である。瀬戸内型甕と同時期のものと考えられる。13-1～14-2は器壁がやや厚手で遠賀川式土器と同じ胎土を持つ、頸部状の部分に縦方向のハケが残る13-11・12などがみられる。14-3～13は器壁が薄く粒子の粗い粘土によって堅緻な器壁を有する。14-12は口縁部下に微隆起突帯がみられる。14-5・6は口縁端部に幅の狭い小さな粘土を貼付け刻むが、中期～後期の土佐型甕の粘土貼付けとは異なる。

15-1～12は在地系の甕である。形態は前段階から引き継いで頸部状の部分をもつもので、口縁部に粘土帯が貼付けられるものが大半を占めるようになる。形態変化は緩やかでⅤ期半ばまで同形態の甕は残存する。15-1・2は頸部状部分に縦方向の微隆起が施されたものでⅢ期の可能性が高い。15-4～6は中期末～後期初頭の可能性が考えられる。15-9～11は口頸間が不明瞭になり貼付け部分が曖昧になっており後期前半までの時期と考えられる。

15-13～19はⅢ期～Ⅴ期初頭の可能性が考えられる瀬戸内系の甕である。15-13は口縁部の屈曲がやや甘い、口縁端部がわずかに摘み上げられておりⅢ期の「く」の字甕の可能性が考えられる。15-15・16は口縁内面にしっかりした稜をもつものでⅣ期末と考えられる。15-18・19は口縁内面に稜が無く凹線も退化したものである。16-1～9は「く」の字に口縁が屈曲する甕の延長にある、後期半ばまでの甕と考えられる。

鉢(16図-10～17図-7)

16-10～15はⅠ期前半の鉢と考えられ、如意形口縁のものと直縁の2種類がみられ、直縁のものは16-12～14のような直線的に斜め上方に開くものと、16-15のように内腕する口縁部をもつものがある。16-15は外面には壺と同様の文様を持ち無頸壺の可能性が考えられるが鉢としておきたい。17-1・2は逆L状の口縁をもつもので瀬戸内型甕と同形態をもつものである。口頸部が30cmを越える大型のため鉢とした。17-3も大型で口縁端部を断面三角形の粘土帯を貼付けることによって拡張したもので甕の可能性も考えられる。出土例が少なく器種、時期ともに不明であるが胎土から前期の範疇で考えたい。

17-4は口縁部に微隆起突帯をもつものでⅢ期～Ⅳ期の高知県西部地域の甕にみられる文様をもつものである。出土例は少なく時期は不明であるがⅢ期～Ⅳ期と考えられる。17-5は大型の凹線文の鉢である。17-5・6は金魚鉢形のもので口縁端部は横ナデによって凹面状をなしている。

高坏(17図-8～18図-3)

高坏の出土は少なく図示できたものは7点のみでⅣ期末～Ⅴ期半ばまでのものである。17-8は水平口縁をもつものであるが坏部に凹線文はみられない。17-11は同じく水平口縁をもつもので水平口縁端部に凹線が施されている。直線的な坏体部をもつ。17-10はゆるやかな口縁部のもので、口縁端部は面をなすが凹線文は施されない。脚部内面は横方向へラ削りである。

18-1は外反する口縁の高坏であるが坏部は深くなっている。18-3はやや深い腕状の坏部をもつもので赤色塗彩が施されていた可能性がある。

蓋(18図-4～13)

18-4～13は蓋である。18-4・5は比較的大きな口径を持ちⅠ期の甕蓋の可能性が考えられる。18-8は薄手で口縁部に粘土貼付け痕跡が残り端部は刻まれる。出土例は少なく高知県西部地域の甕などに共通する特徴をもつ。18-9も口縁端部に粘土帯貼付けをもつものであるが胎土は粒子の細かな粘土を使っており高知県中央部のものである。18-11～13は小型鉢の可能性も考えられるが鉢とした

場合不安定であるため蓋とした。

擬朝鮮系無文土器(18図-14~21)

口縁端部が玉縁状になるもので比較的小型の甕と考えられる。形態は朝鮮系無文土器に似るが胎土は高知県中央部のものと大きな差違はみられないため、擬朝鮮系無文土器とした。18-20・21は玉縁にはならないが、正面から見た場合口縁部に突帯状に粘土帯が巡ることや器形が高知県内であまりみられないことから擬朝鮮系無文土器の一群とした。

その他(19図-1~31)

19-1・2はジョッキ形の土器である。19-1は張り出した底部に円孔を穿ち、19-2は貼付けた粘土に円孔を穿っている。

19-3は大型壺底部である。弥生土器の底部径としては高知県で最大級である。

19-4~11は小型器種またはミニチュアである。19-4は前期の小型壺の可能性が高い。19-11も前期の小型の高坏の可能性が高い。その他はミニチュアが多いⅡV期~Ⅴ期の可能性が高い。

19-12~23は紡錘車で19-20~23は土器転用のものである。

19-24~26は土錘である。

19-27は底部から穿孔されるが貫通していない。器種は不明である。

19-28は焼成前穿孔が施された土器である。土面の可能性を考えたが表面はミガキで鯨面の表現などがみられない。

19-30・31とも器種器形が不明なため展開図を掲載した。

古代中世の土器(20図-1~10)

詳細は第2分冊で述べているので図のみ掲載する。20-1~6は須恵器で20-7・8は青磁である。20-9は土師器鍋でいわゆる播磨型鍋である。20-10は石製の火鉢と考えられる。

石器

石鏃(21図-1~22図-37)

石鏃は21-1~14は磨製石鏃である。すべて粘板岩または頁岩製と考えられる。有茎である。21-9は鏃がなく側縁に刃部がつく。10-8は基部はしっかりした鏃が残存しており、先端部は不整形であるが擦痕が残っており、先端部が欠損した後研ぎ直しを行ったと考えられる。

打製石鏃は21-8のチャート製をのぞいてすべてサヌカイト製である。21-15~22-14までが凹基式で22-15~22-25までが平基式、22-26~37は凸基式である。

刃器(23図-1~9)

23-1~5はサヌカイト製刃器である。23-1・2とも中央部が厚いレンズ状で、縁辺部に刃部が作られる。23-5は中央部が厚い横長の刃器で刃部はこまかな調整が行われている。23-6・7は頁岩製の刃

器で縁辺部の調整を行っただけのものである。23-7は表面に一部擦痕が残っており石包丁未製品の転用または未製品の可能性も考えられる。23-8は砂岩で縁辺部に調整が行われている。当初、石鎌の可能性も考えられた。23-9は大型で青い発色の緑色岩で石核を大きく割ったもので、表面には表皮が残っており刃部と抉り部分のみを調整している。

楔(23図-10～15)

23-10～15は楔と考えられる。23-10はサヌカイト製でそれ以外はチャート製である。いずれも先端がとがる角錐形をしている。所属時期は不明である。

石包丁(24図-1～26図-15)

石包丁は磨製、刃部磨製、打製の3種類で石材は黒色の頁岩または粘板岩と考えられるものがほとんどで、例外的にその他の石材がみられる。

24-1～25-15は磨製石包丁である。24-1は両刃の大型石包丁で厚さも厚く側面は面取りがなされている。他のものはすべて片刃である。形態は直線刃で半月形、方形、不整形な方形または楕円形である。また紐孔は2穴のものと1穴のものがみられる。

25-18～26-2は紐孔はなく両端部に抉りのはいる打製石包丁の形態で刃部磨製のものである。25-20は表面に表皮が残り裏面に剥離面が残る三角形の断面形を持つ泥岩製のものでわずかに刃部に磨き痕が残るもので転用品の可能性も考えられる。26-3～10は打製石包丁である。石材は20-6が結晶片岩以外は頁岩または粘板岩と考えられる。26-4は両側から穿孔が行われている途中で終わっているが、刃部調整は行われており完形品と考えられる。

26-11・12は未製品である。26-13～15は石包丁と考えられるが紐孔、抉りともなく石包丁状の刃器とする。26-15は一見するとチャートに見えるが石英片岩製である。表面は表皮が残るが敲打後磨いて仕上げる。裏面は主剥離面で、磨かれるが完全でない。刃部は細かな剥離により調整されている。

石鎌(27図-1～12)

27-1～12は石鎌である。石材は黒色の粘板岩または頁岩と少量の緑色岩である。27-2は緑色岩製で身幅の狭いものである。刃部はいずれも両刃である。

石斧(28図-1～31図-10)

石斧は太型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧の定形的なものと小型の不定形なものに分かれる。

28-1～29-3は太型蛤刃石斧である。29-1の砂岩製をのぞいて緑色岩製で近接する物部川に転石でみられる御荷鉾緑色岩と考えられる。重量、全長、全幅、厚さに規格性をみいだせないため太型蛤刃石斧に適した転石を調整し作られた可能性が考えられる。

29-4～12は柱状片刃石斧、小型方柱状石斧である。石材は緑色片岩製のものがほとんどである。

29-5・6は泥岩製で25-6は高知県以外の石材の可能性が高い。形態では29-9は厚さが薄くなり断面形は方形に近づいている。身から刃部へ至る部分に稜がみられるものはない。

扁平片刃石斧は29-13～30-7までで、石材は黒色から暗青色で白色の部分が入るものが多く頁岩の可能性が高いものが多い。搬入品として白色の泥岩質の30-6・7がある。

大型のものもみられるが、5cm程度のもので多く、側面まで丁寧な研磨がなされている。30-4は小型で平面形が方形で薄く全体を研磨で仕上げておりやや様相が異なるが、扁平で片刃でありこの一群としておく。

その他定形以外の小型の石斧では、30-8・9は緑色岩製の基部が小さくなる形態のもので刃部は両刃で大きさに比して厚みがある特徴を持つ。細加工以外の用途を考えたい。

30-10～12は断面形が円形に近いもので刃部のみを研磨し作り出している。30-10は緑色岩30-11・12は砂岩製である。

30-13～31-10は小型の石斧である。石材は30-21、31-1・3が緑色岩以外は黒色の頁岩または粘板岩である。30-21・22は全体を研磨し整えられるがその他は、刃部のみ研磨される。刃部は両刃である。30-8～10は彫刻刀のように細かな加工に使用されたものとする。

環状石斧(31図-11～19)

31-11～19は環状石斧である。石材は31-11がシルト岩、31-16が千枚岩である以外は緑色岩である。31-11は算盤玉形で厚さも均一で、孔も中心にある。孔の断面形は鼓型で作りが丁寧なため搬入品の可能性が考えられる。31-17は未製品の可能性が高いが粗製である。31-12は完形品であるが、厚みも薄く重量は軽く不整形な円形である。

31-13～16は未製品で環状石斧の製作の過程が追える資料である。それから復元すると、環状石斧の製作は、まず物部川から円形で適当な緑色岩を採取し荒割、敲打で整えた後、中央部の孔を穿つ部分に敲打しドリルで穿孔する。その後研磨で整え完成に至った可能性が考えられる。

刺突具(32図-1・2)

32-1・2は先端を研磨により尖らせたもので頁岩製と考えられる。

穿孔具(32図-3～7)

32-3～7は穿孔具である。石材は32-3～5は砂岩、32-6は頁岩、32-7は石英粗面岩と考えられる。

砥石(32図-8)

32-8は砥石で砂岩である。

石皿(32図-9・10)

32-9・10は石皿で石材は砂岩である。中央部が凹む。32-10は朱が付着していた。

叩石、石杵(32図-11～33図-1)

32-11～13、33-1は叩石、石杵と考えられる。いずれも石材は砂岩である。32-11は欠損しており穿孔具の可能性も否定できない。32-12は全体の形が整えられており両端は大型蛤刃石斧の基部状に整えられる。表面の粒子は摩滅している。33-1は中央部が浅く凹み側面は敲打により面をなしている。

石錘(33図-2～14)

33-2～14は石錘と考えられる。33-2～9は有溝で33-9が球形であるのをのぞいて扁平な小判型である。33-13・14は両端打ち欠きである。33-10～12は両側縁が敲打により面をなしており叩石の可能性も否定できないが、扁平で側縁中央部に打ち欠きが見られることから石錘とした。

その他(33図-15～23)

33-15は石英製の磨石と考えられ、両端に面を持つ球形で面をなしている部分の表面の粒子は摩滅し、その他は敲打痕が残る。

33-18はサヌカイト剥片で刃部はみられない。

33-16は石製紡錘車で黒色の頁岩または粘板岩製である。33-17は未製品と考えられる。

33-19～23は管玉である。

鉄器(19図-32)

19-32は薄い板状の鉄器であるが、刃部は見られず器種は不明である。

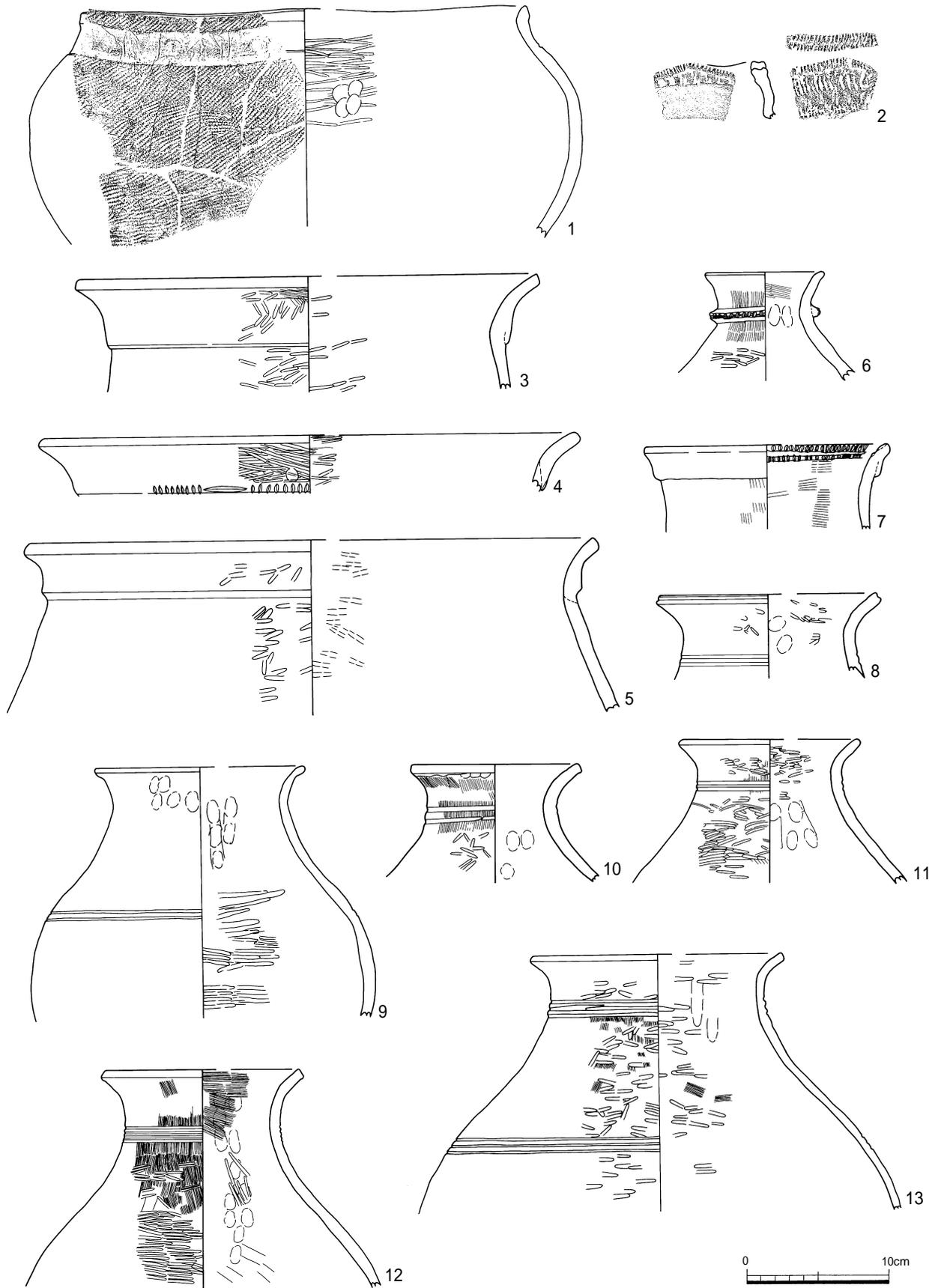
B区概要

流路1はC3区から南側調査区B区へ南流しているため、B1区、B4区でも検出している。B4区では、方向をやや西側に寄せている。流路1は現代の水路とほぼ同一の方向へ流れていたと考えられる。

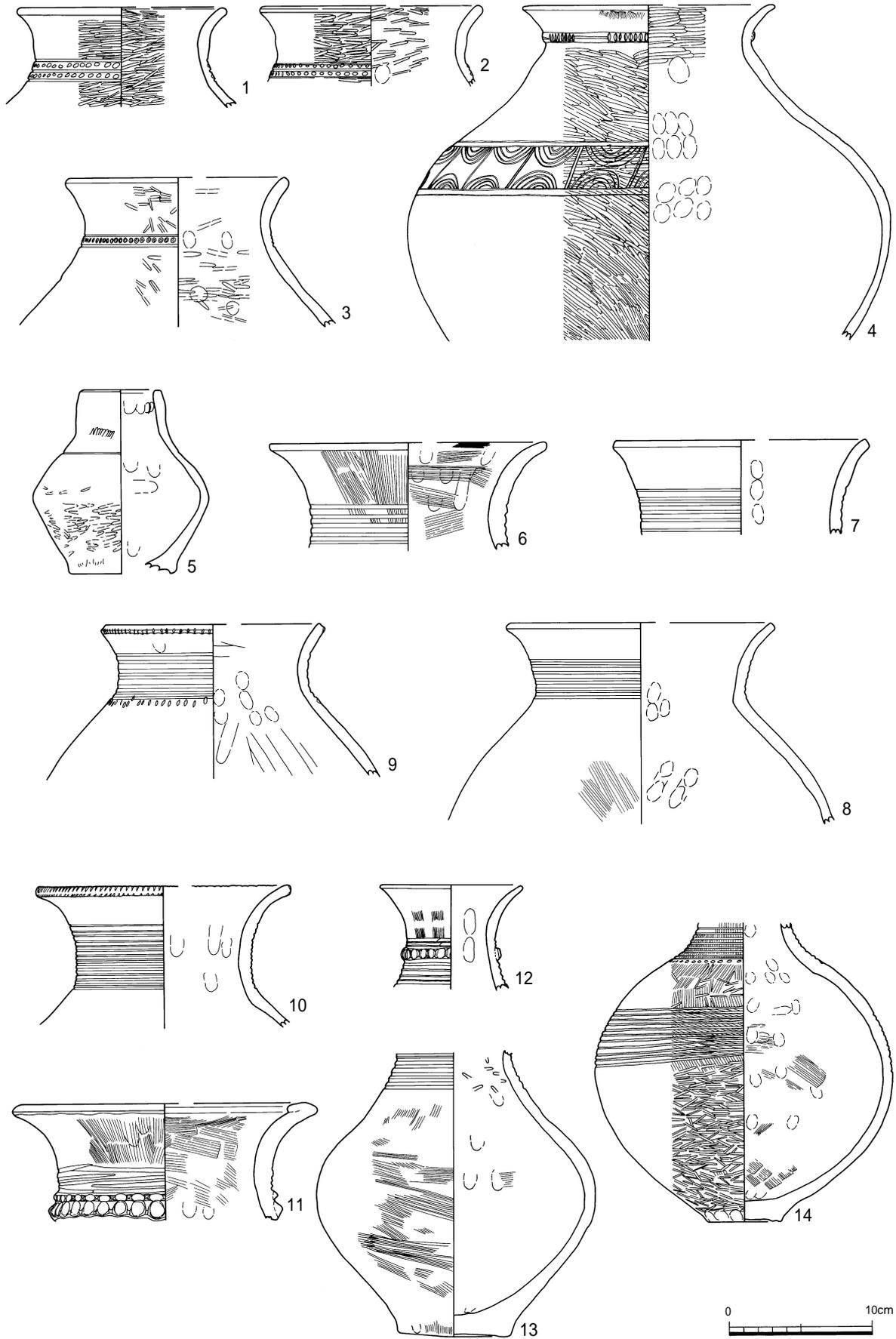
遺物

遺物はB1区、B4区でもC3区と同様に多量に出土しており、弥生I期から弥生V期半ばまでのものでC3区出土の遺物と同様の様相である。

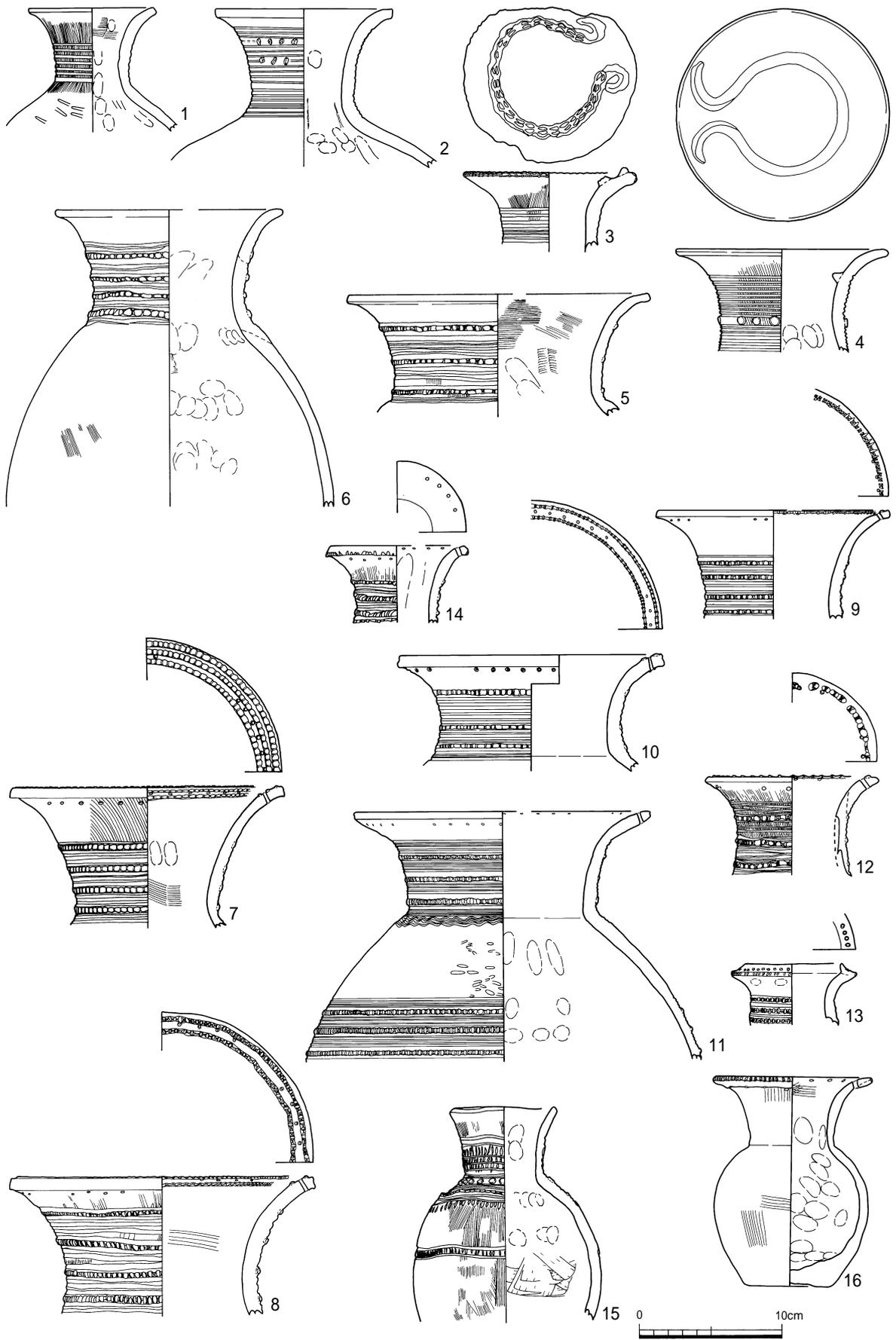
詳細については付属のCDの観察表に記す。



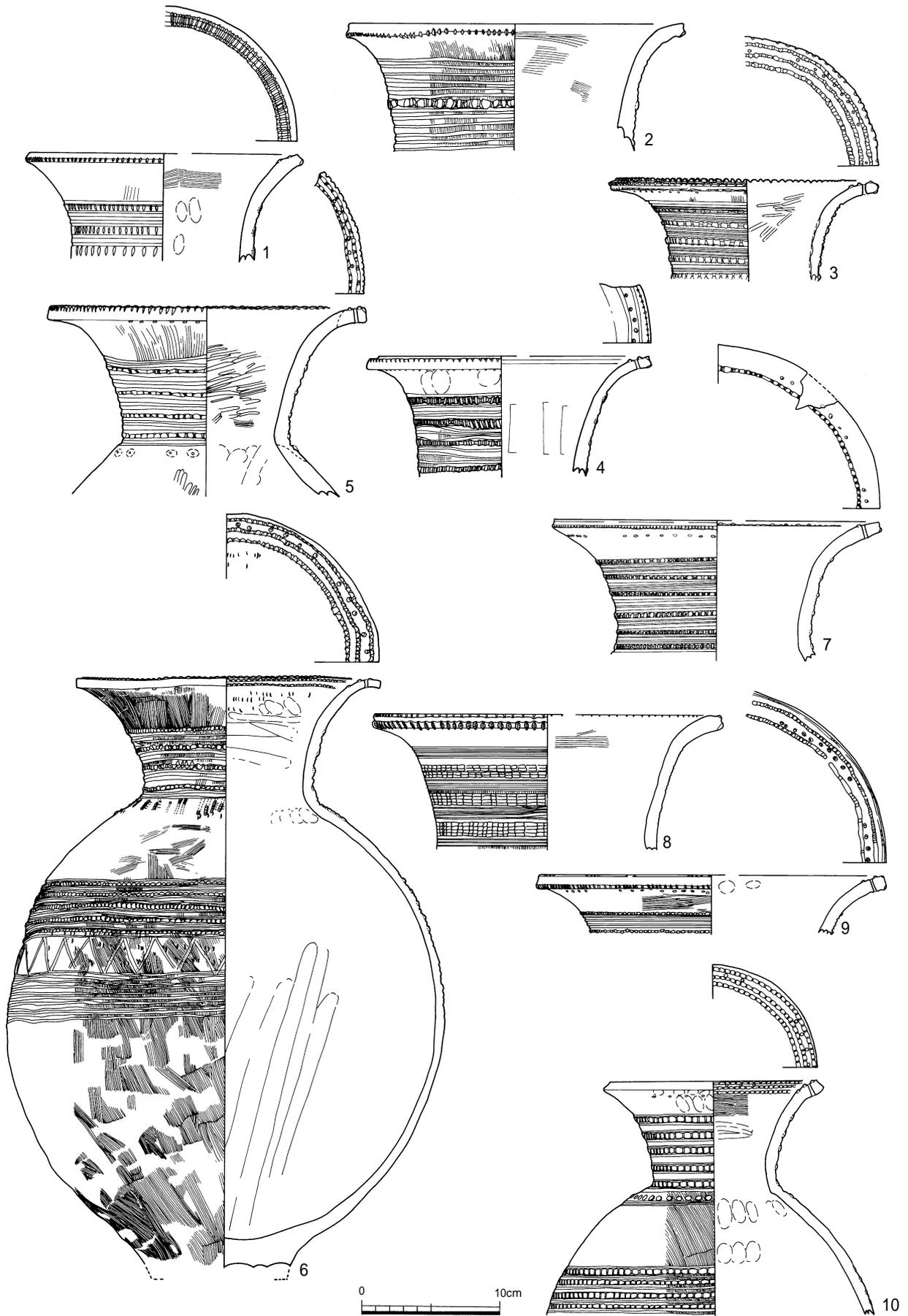
流路1-4图 流路1C3区部分出土土器



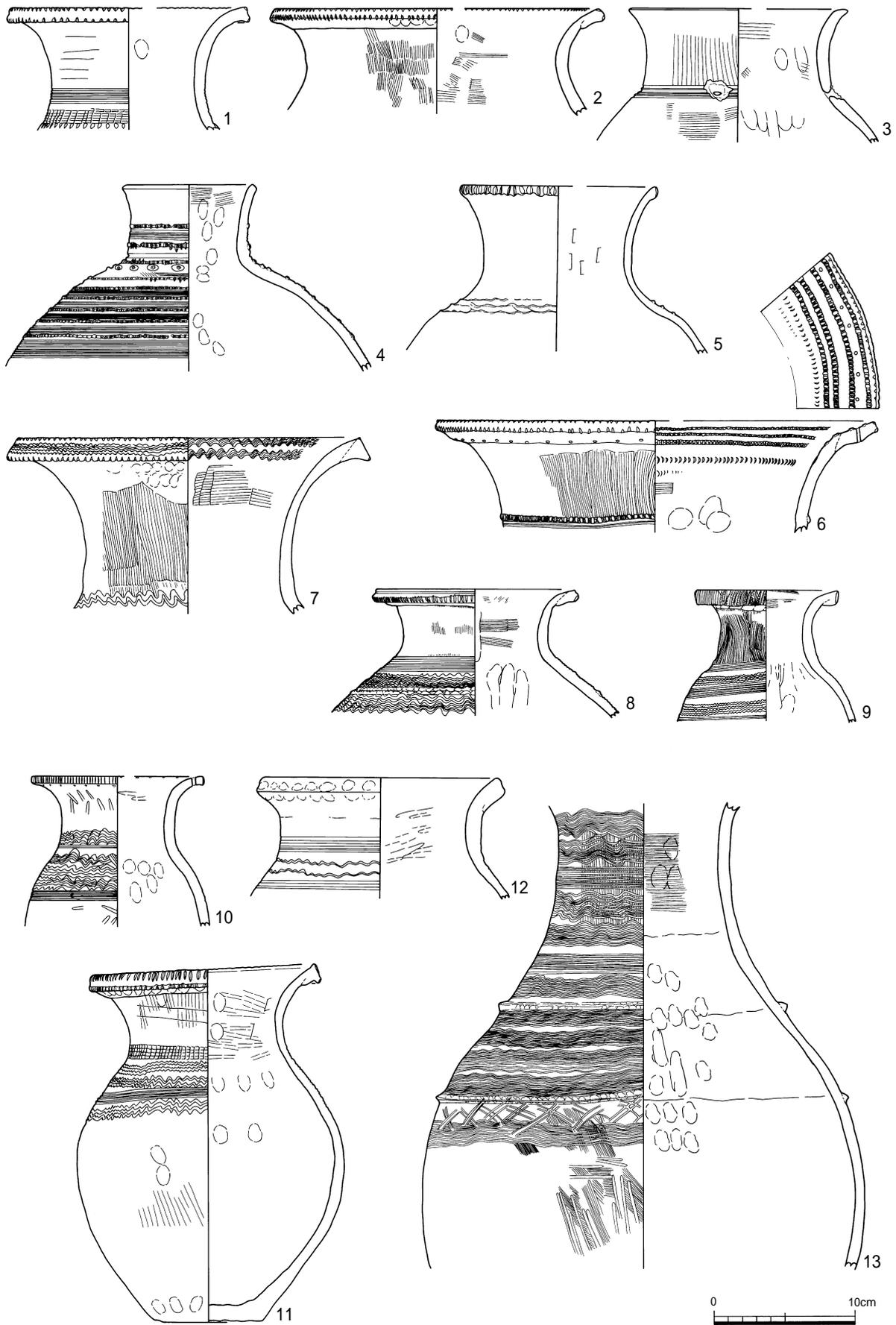
流路1 - 5 图 流路1C3区部分出土土器



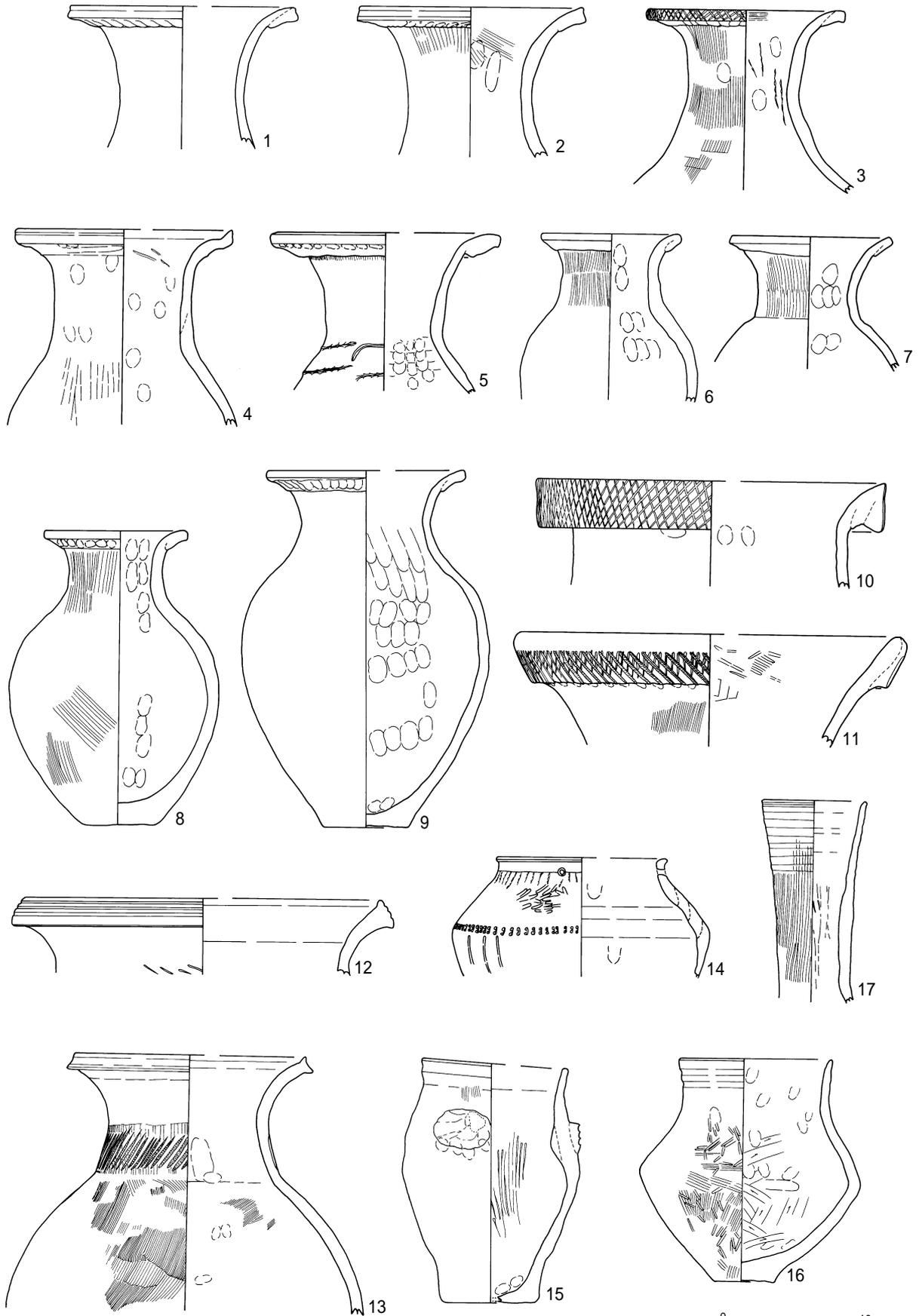
流路1 - 6图 流路1C3区部分出土土器



流路1 - 7 图 流路1C3区部分出土土器

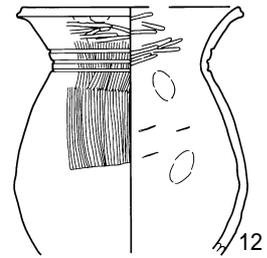
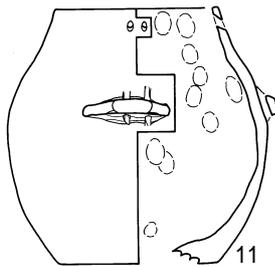
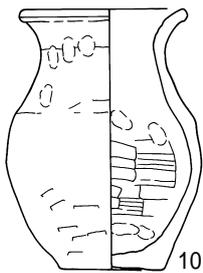
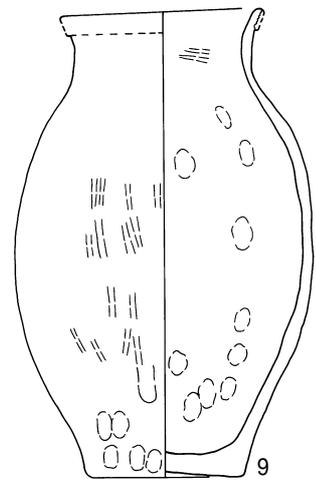
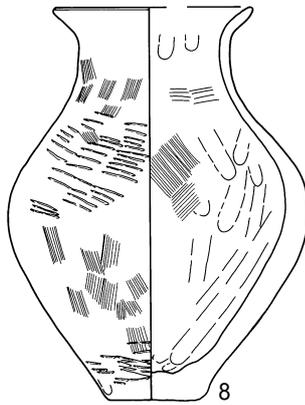
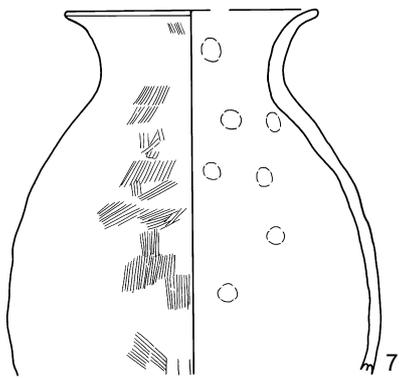
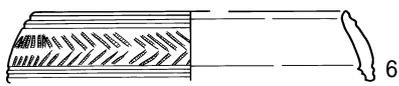
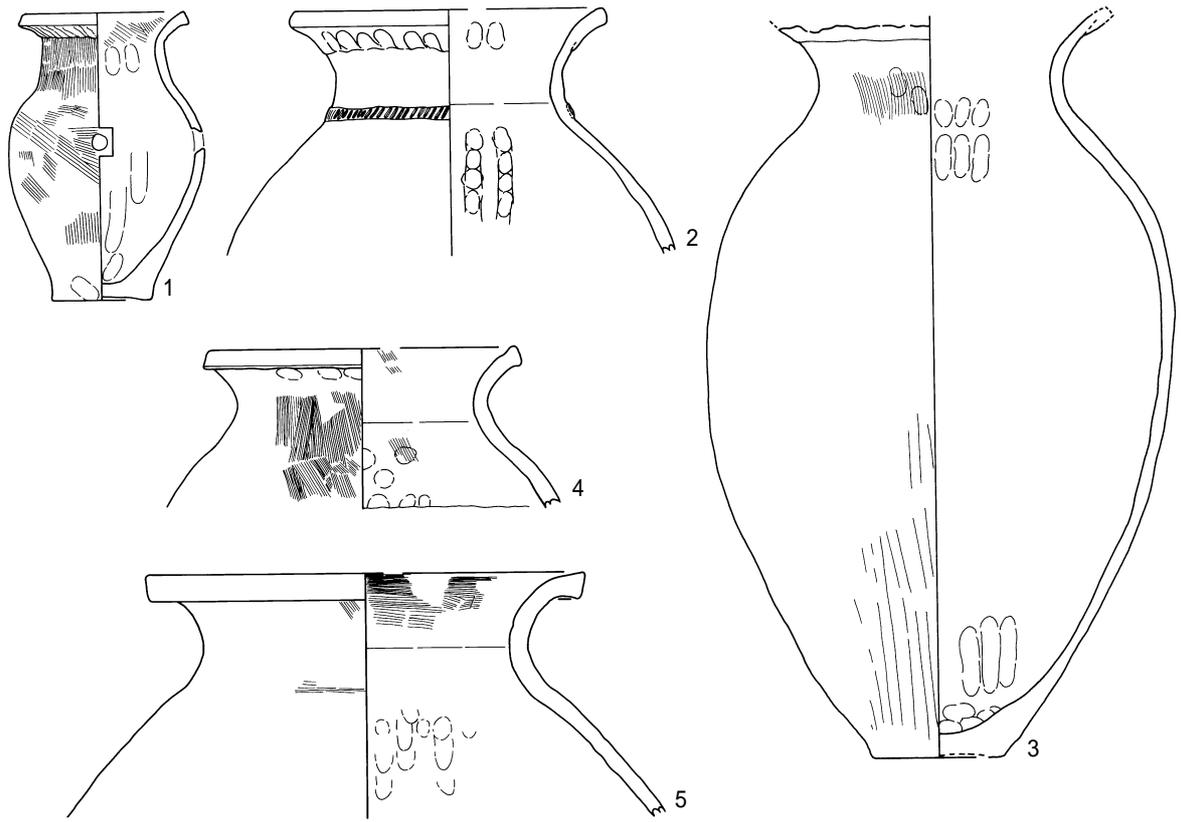


流路1 - 8图 流路1C3区部分出土土器

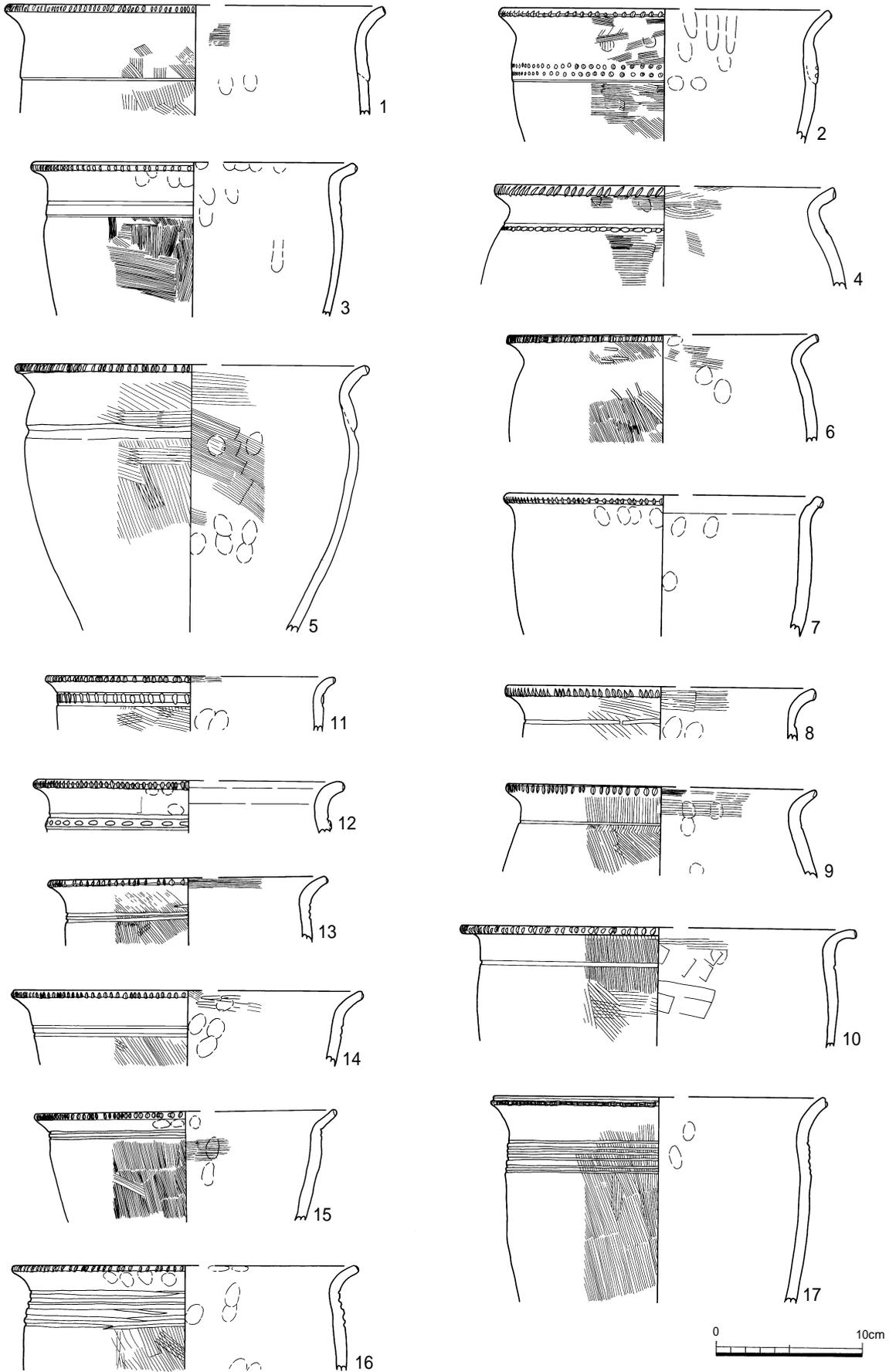


流路1 - 9图 流路1C3区部分出土土器

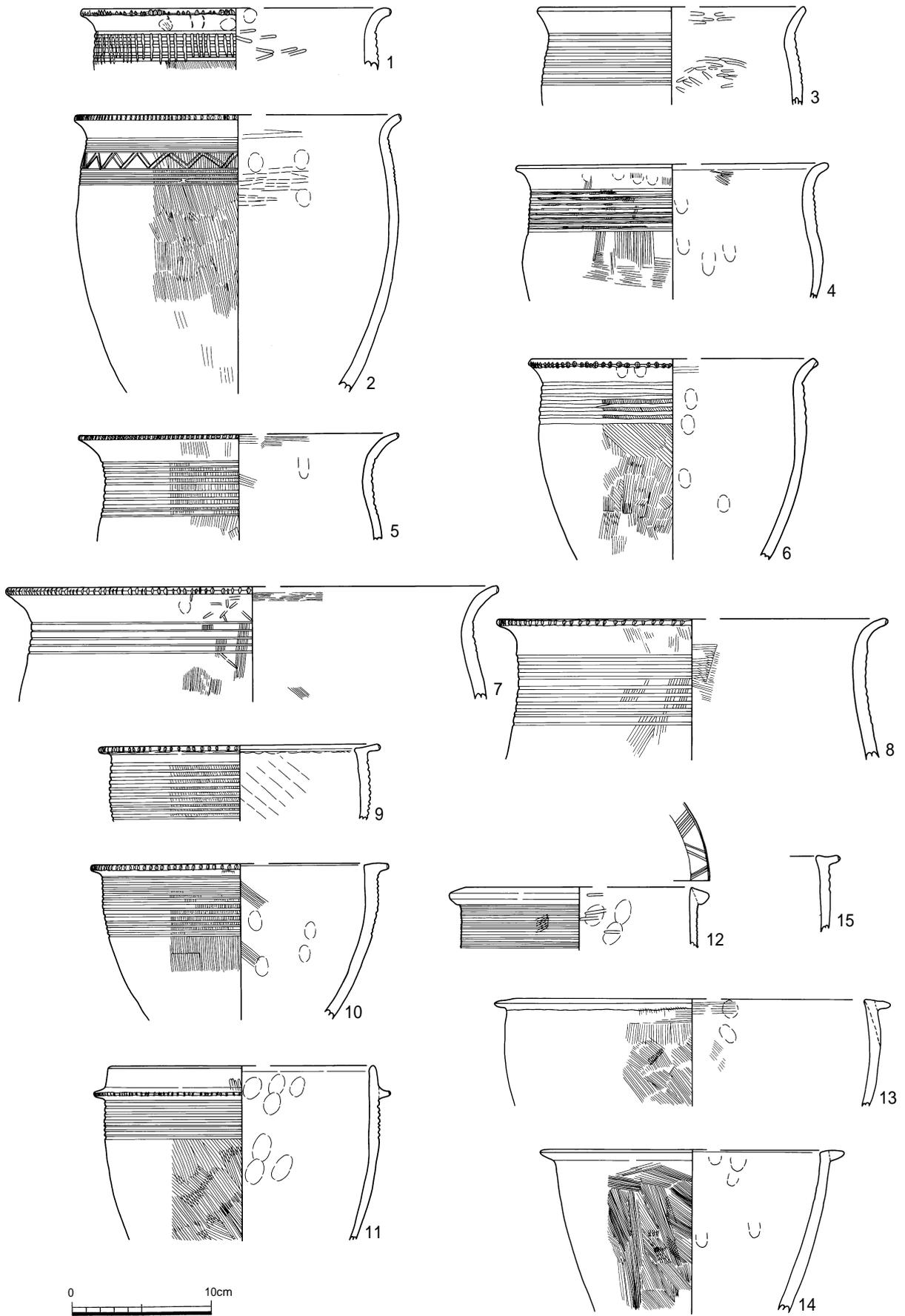




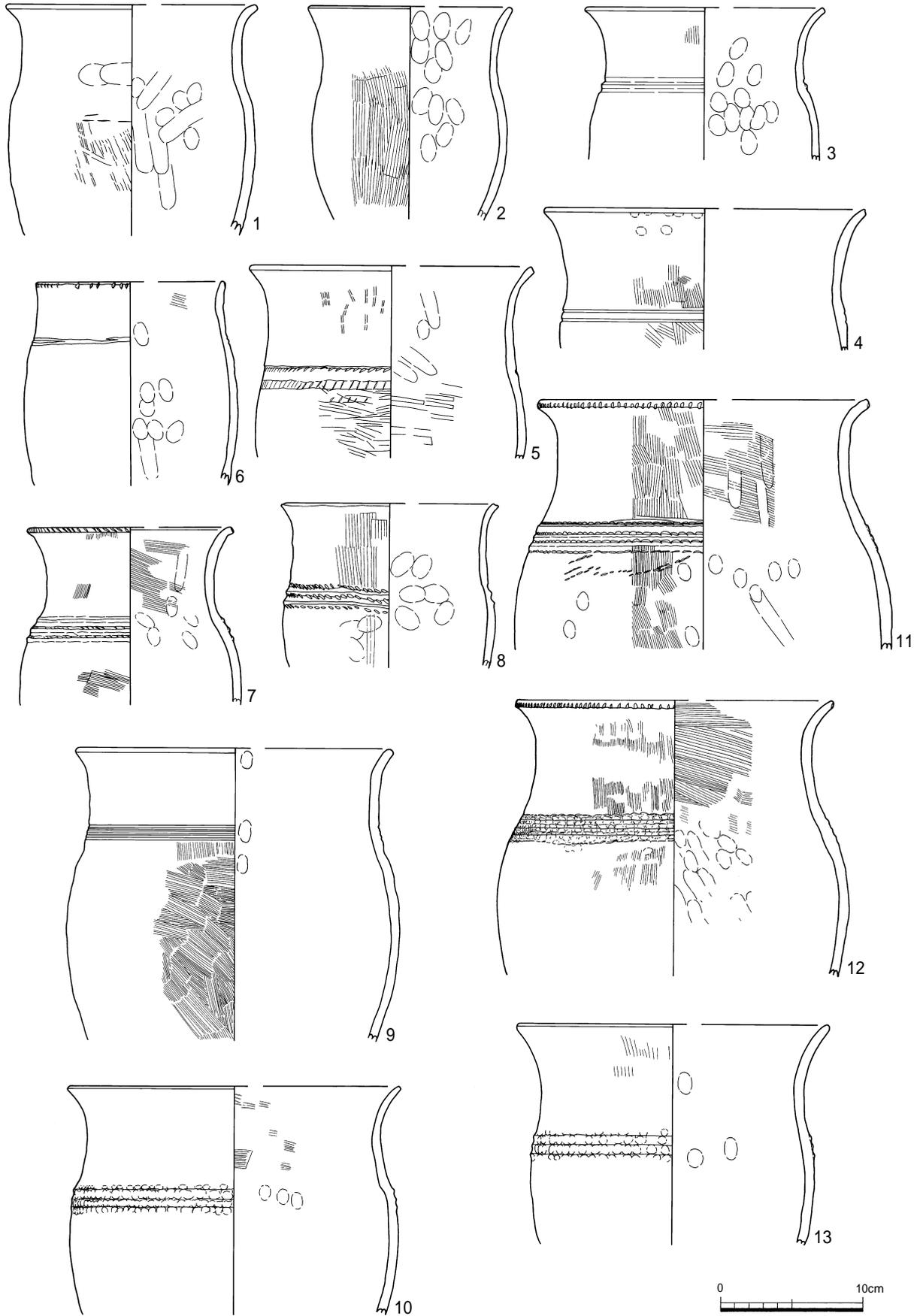
流路1 - 10图 流路1C3区部分出土土器



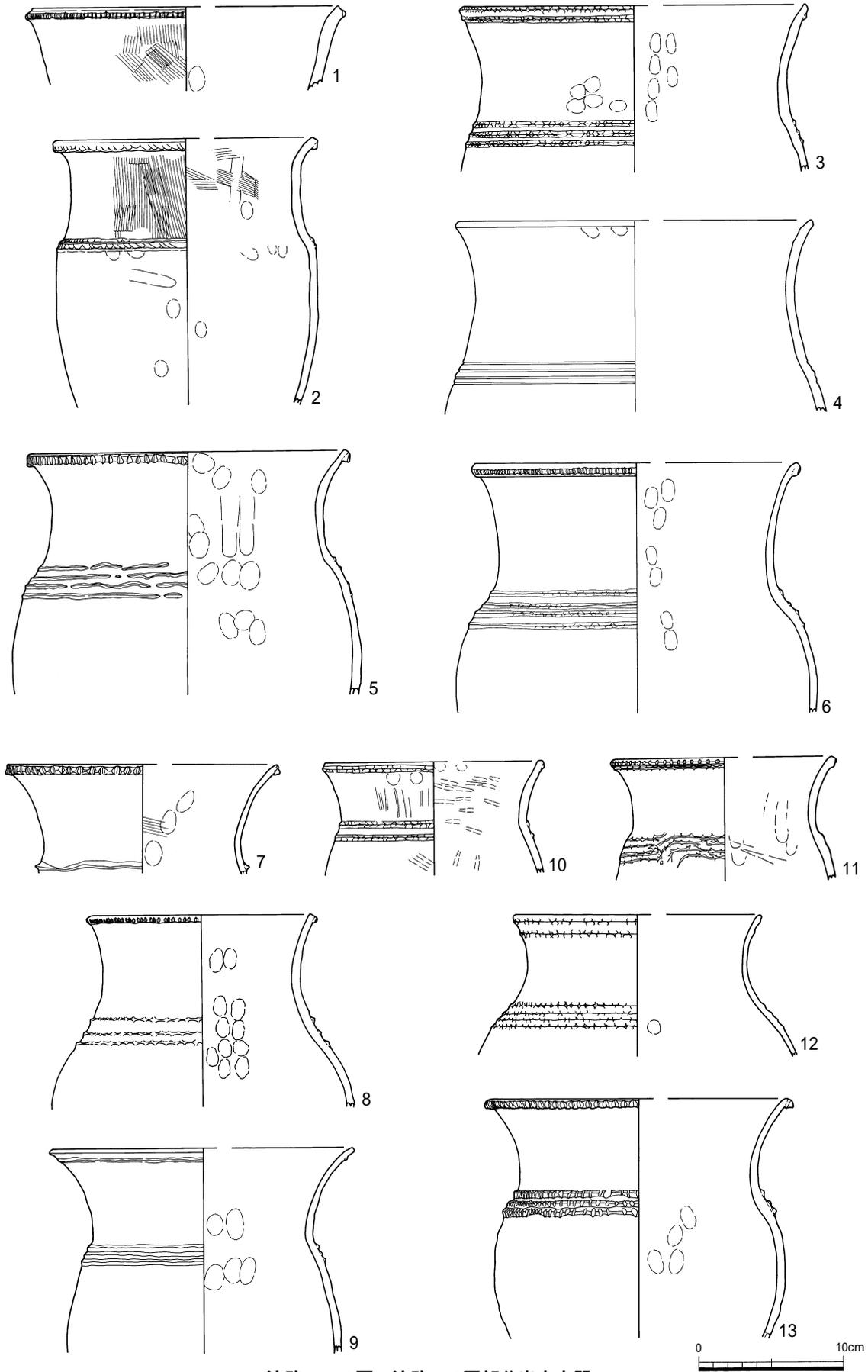
流路1 - 11 图 流路1C3区部分出土土器



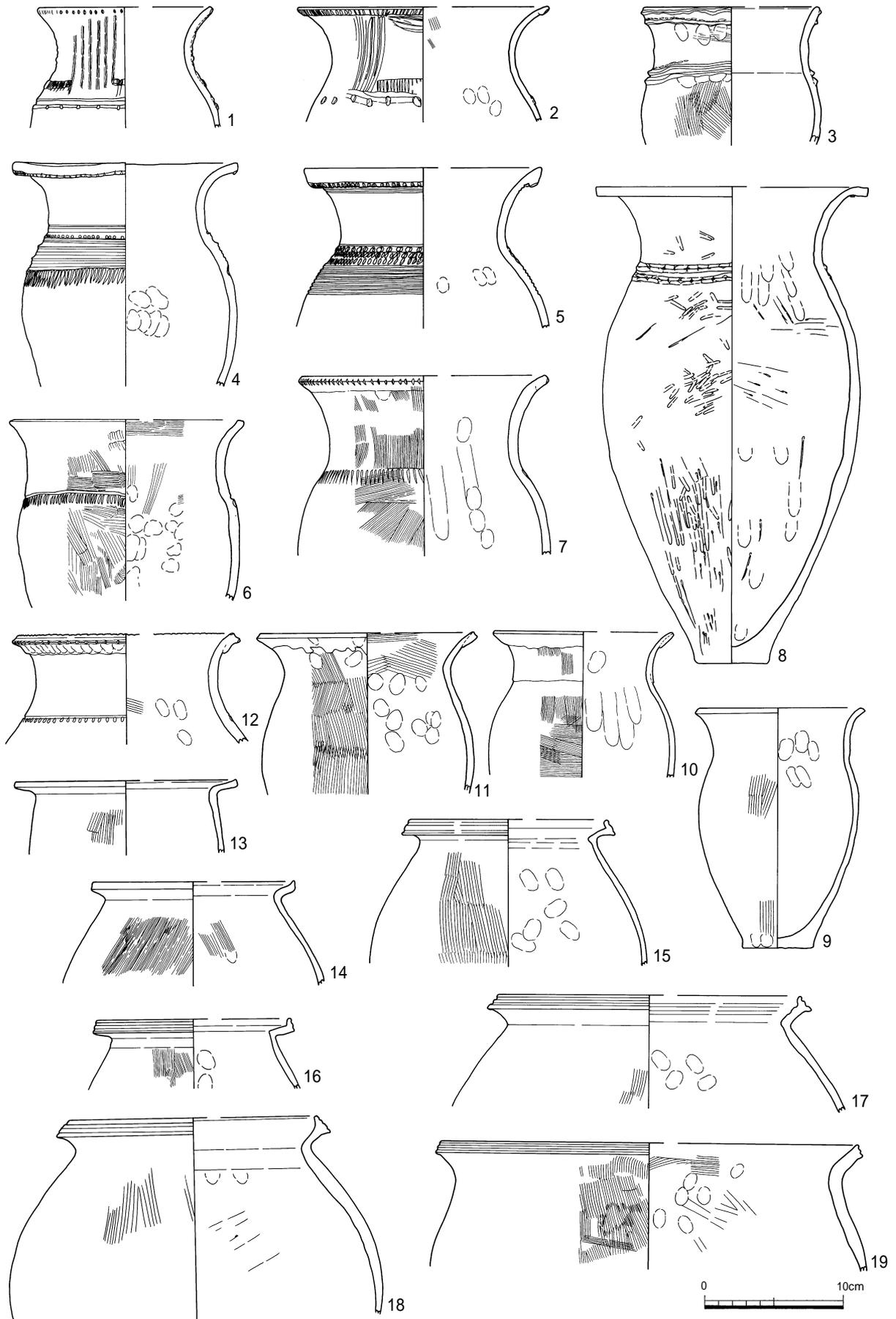
流路1 - 12图 流路1C3区部分出土土器



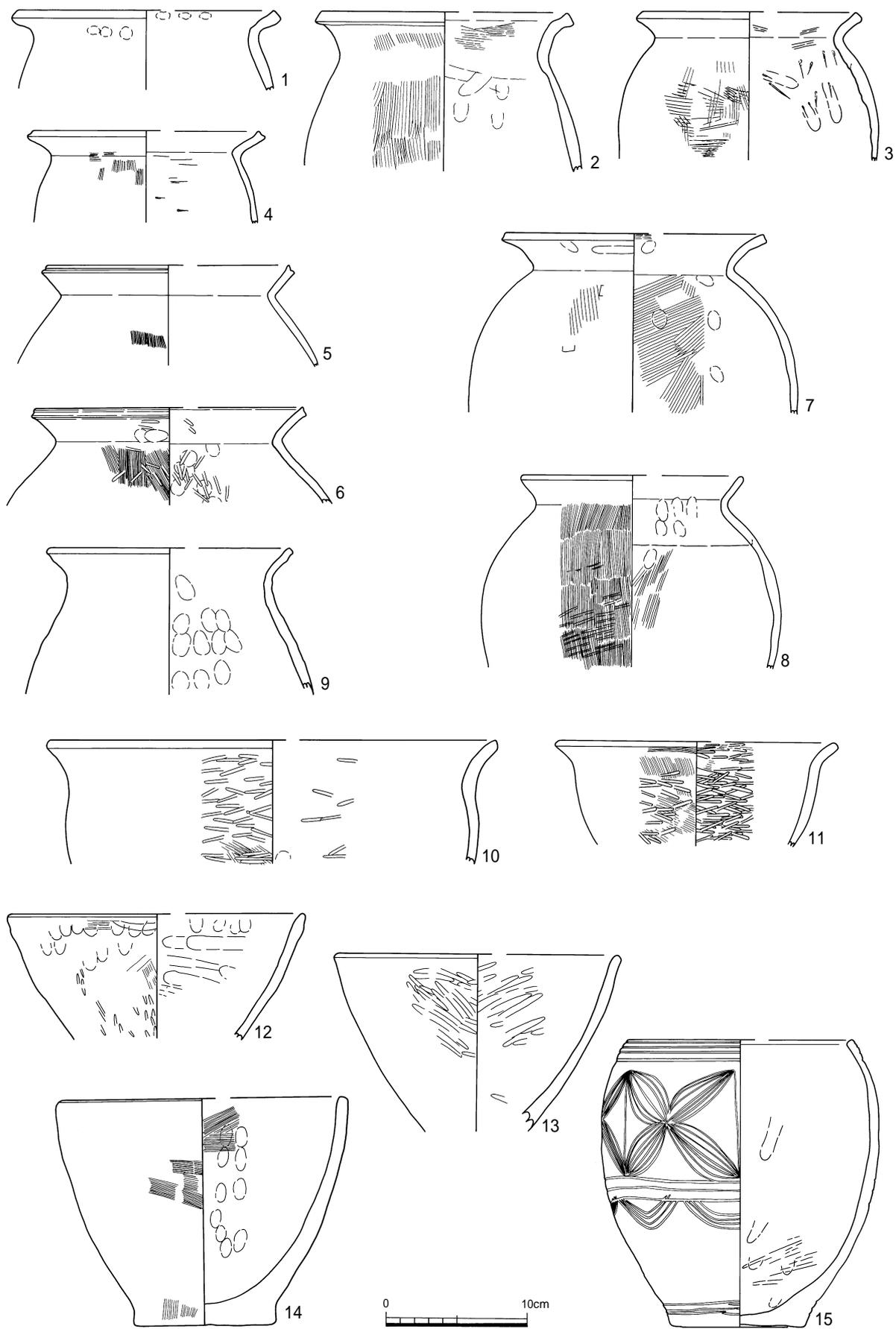
流路1 - 13图 流路1C3区部分出土土器



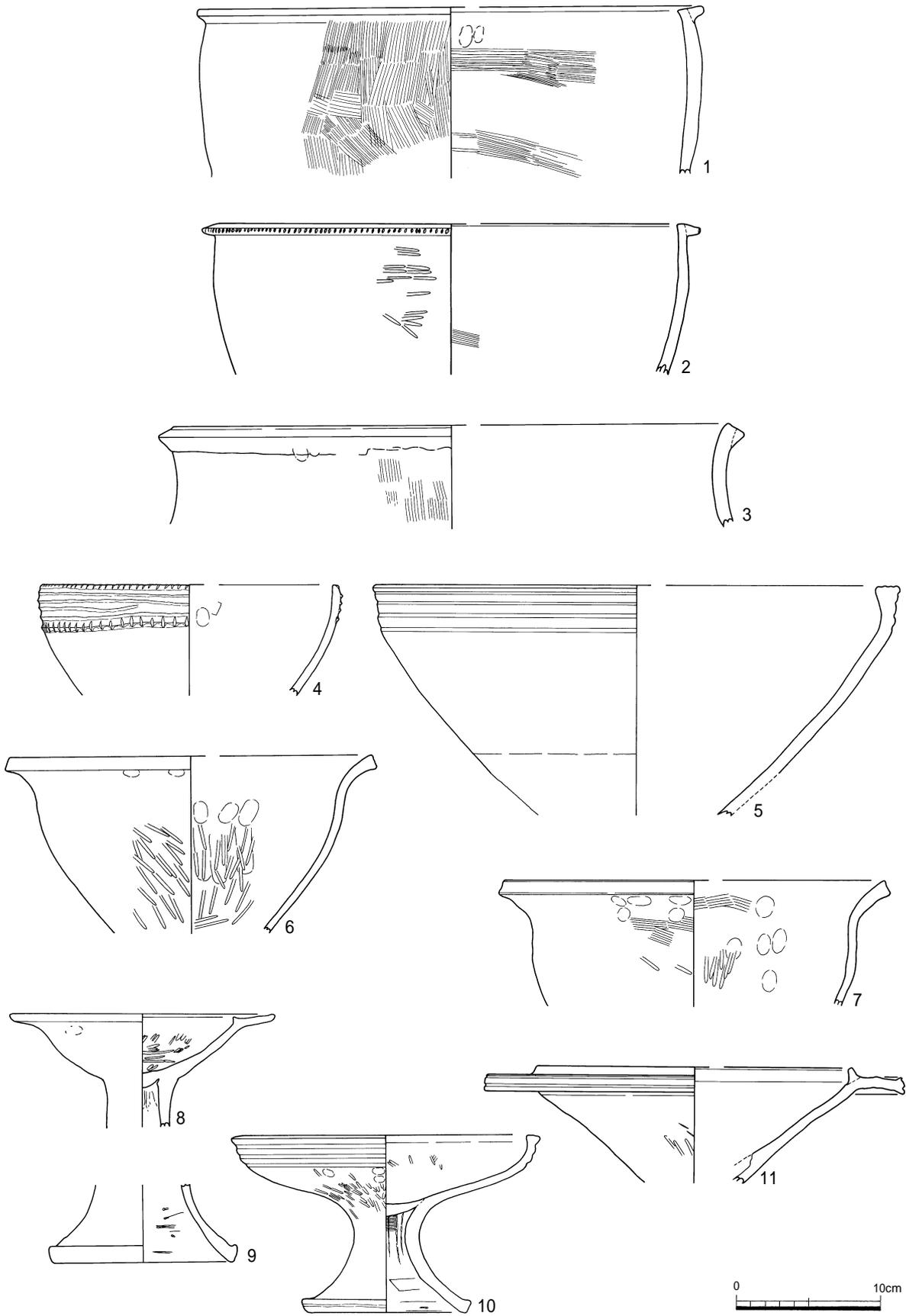
流路1 - 14图 流路1C3区部分出土土器



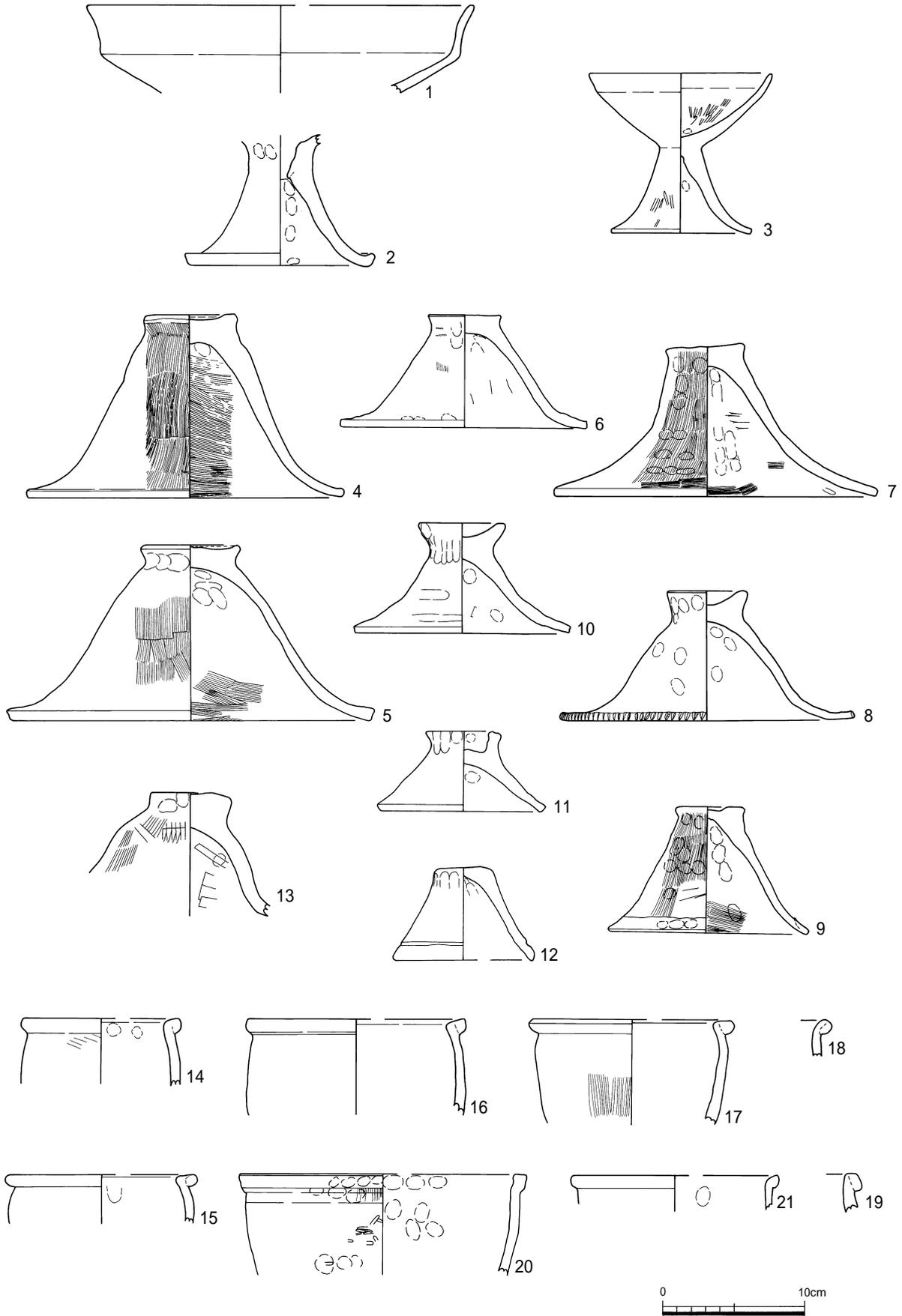
流路1 - 15 图 流路1C3区部分出土土器



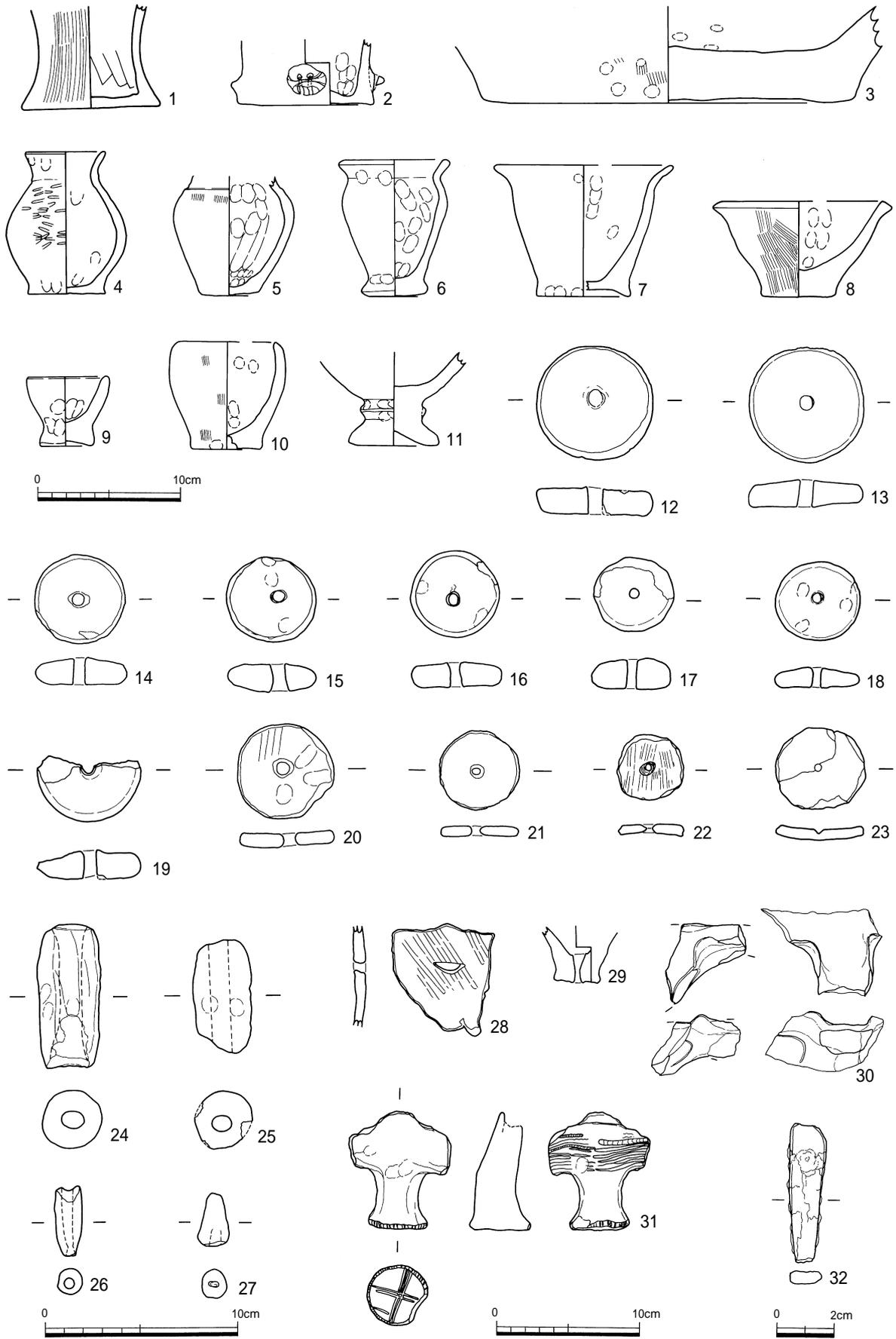
流路1 - 16图 流路1C3区部分出土土器



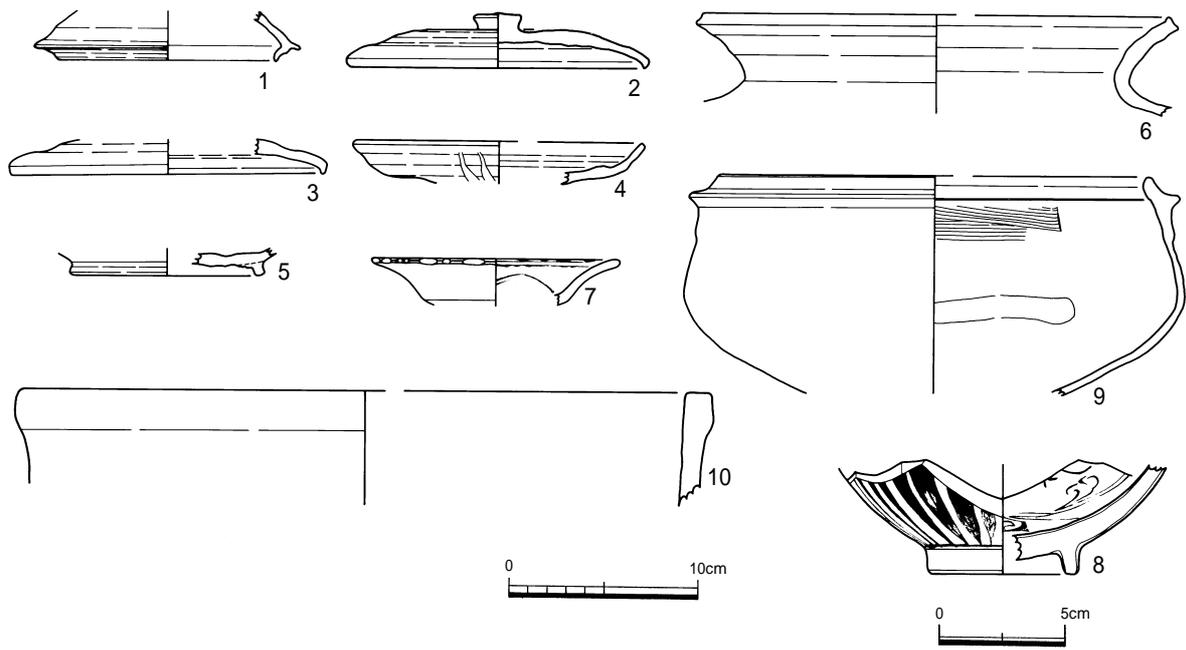
流路1 - 17图 流路1C3区部分出土土器



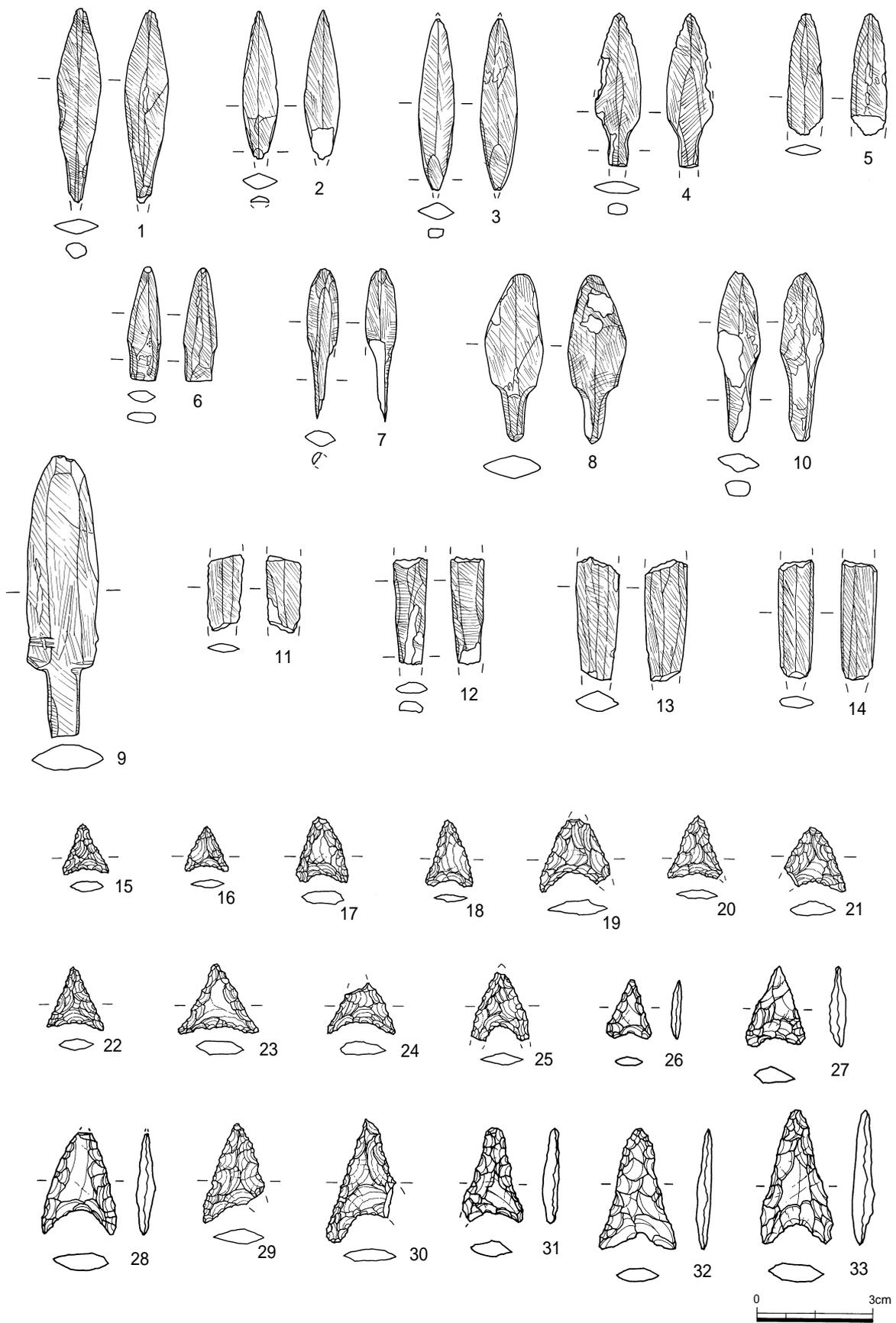
流路1 - 18图 流路1C3区部分出土土器



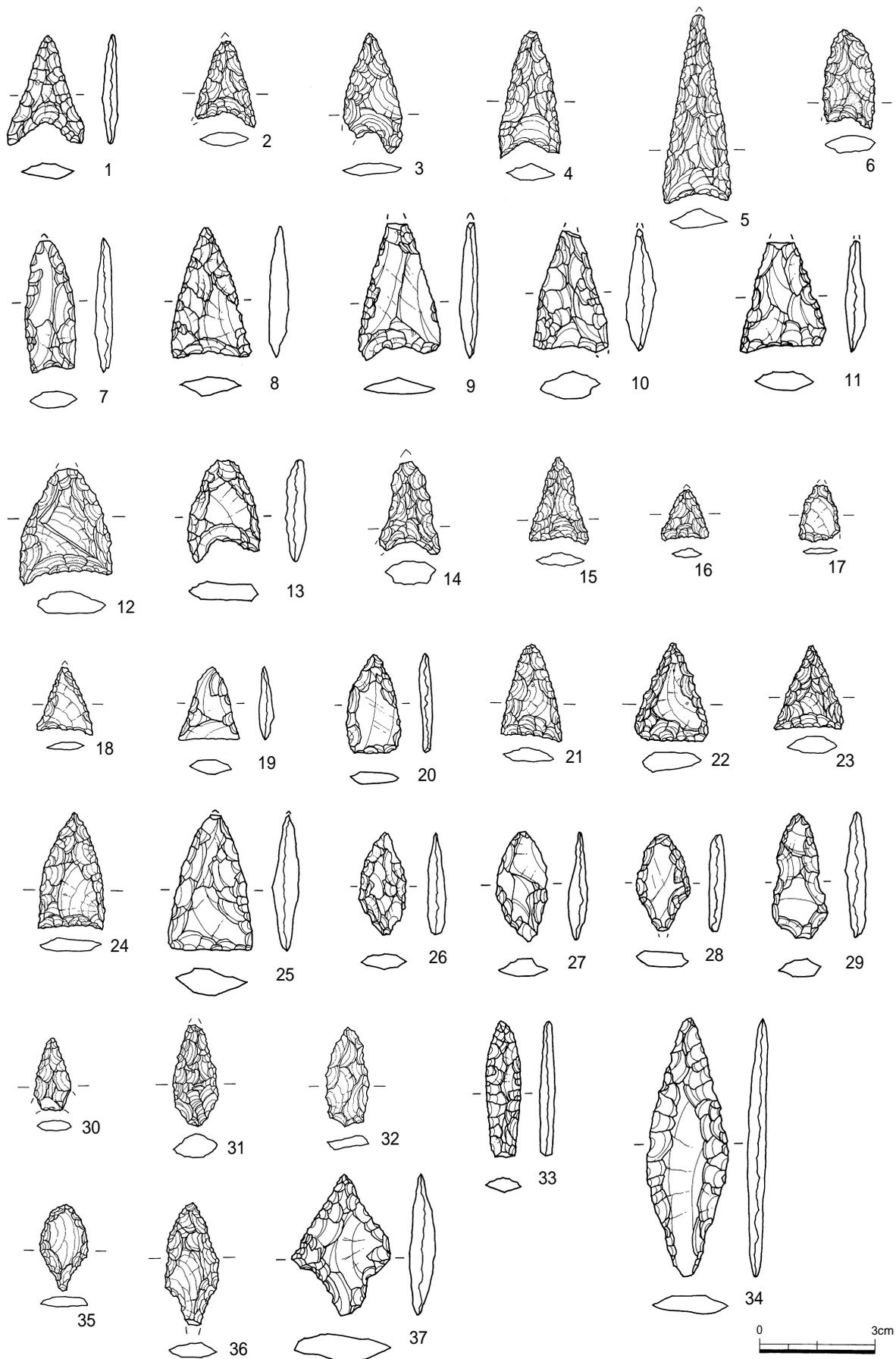
流路1 - 19图 流路1C3区部分出土土器



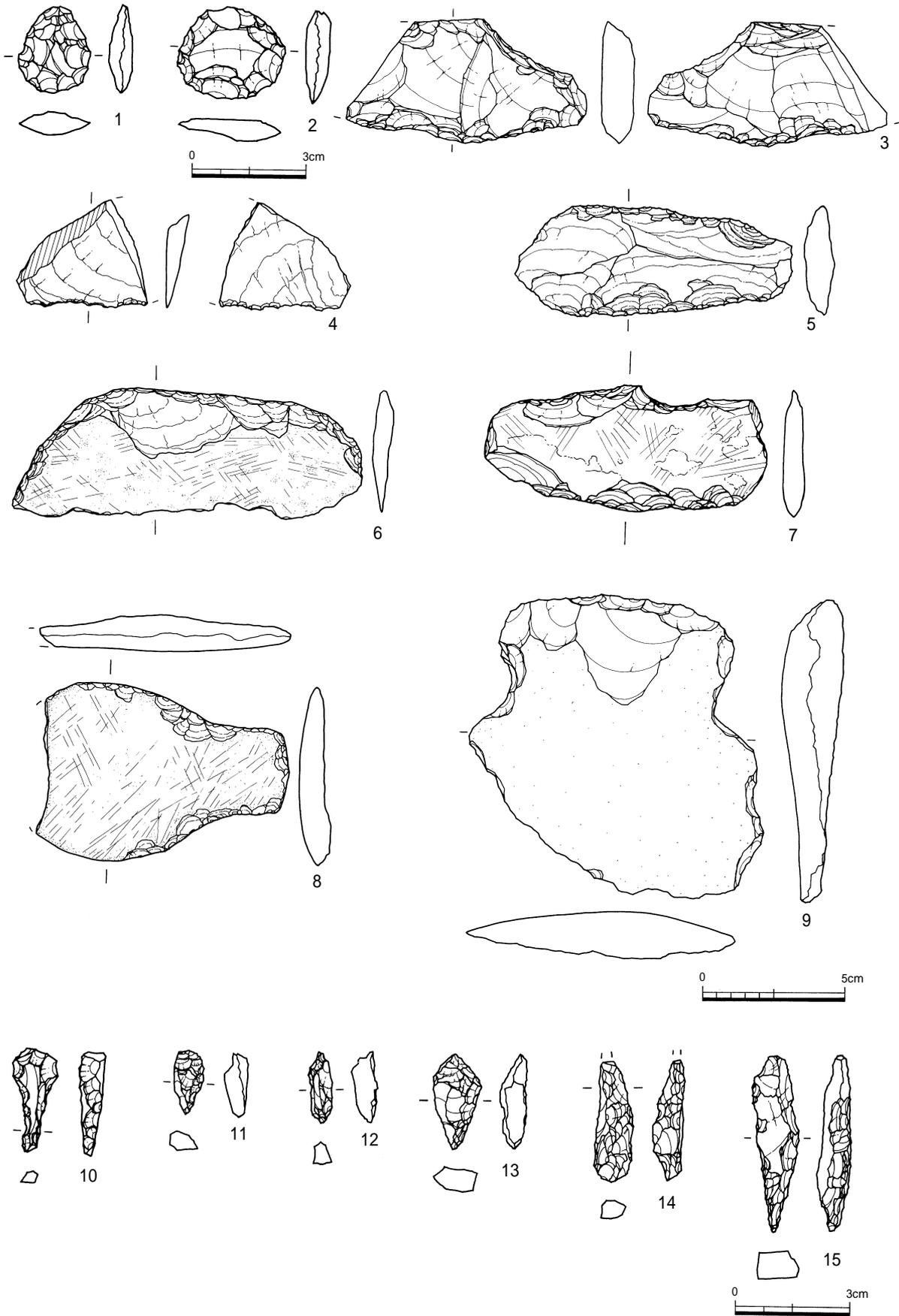
流路1 - 20 图 流路1C3区部分出土土器



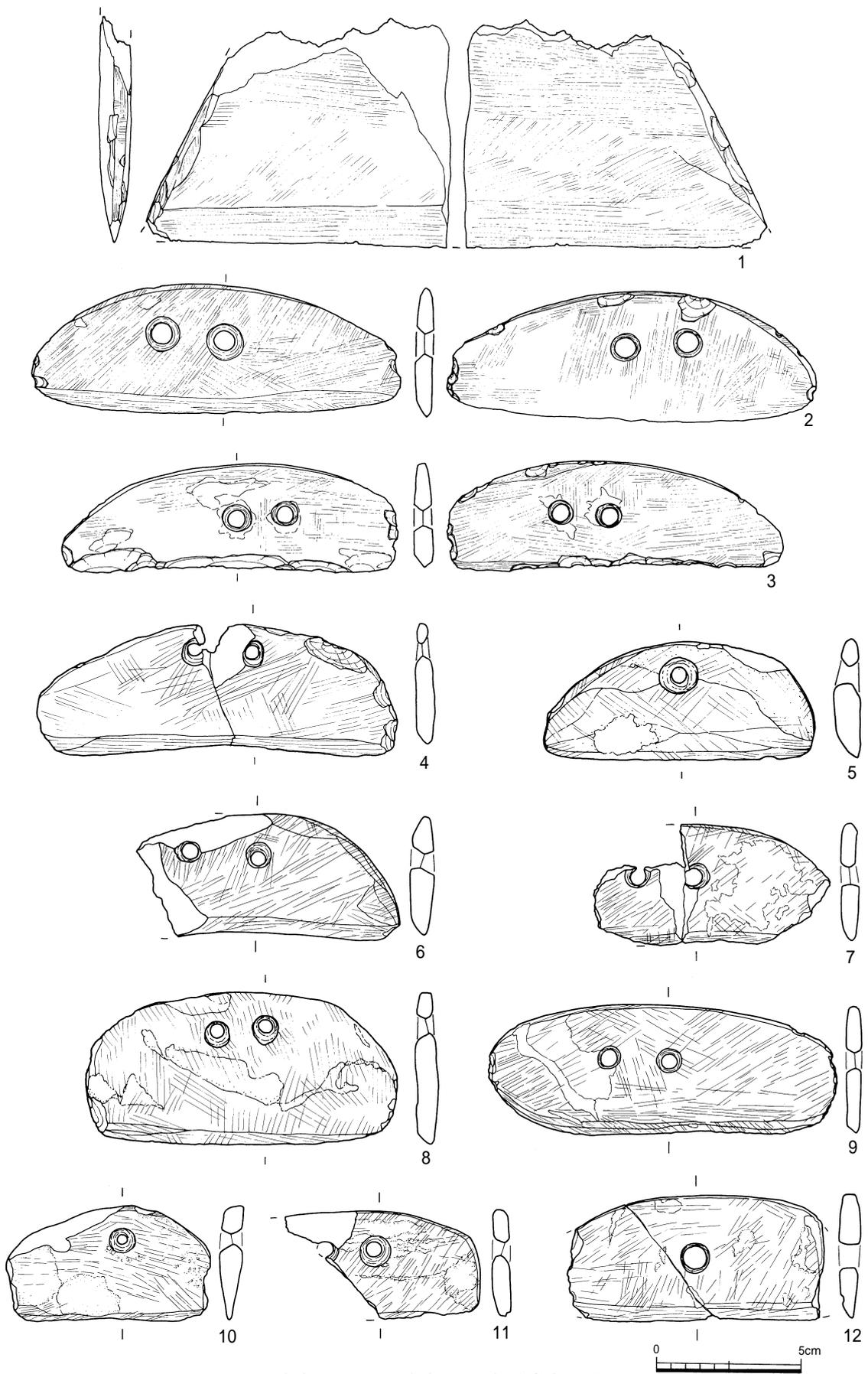
流路1 - 21 图 流路1C3区部分出土石器



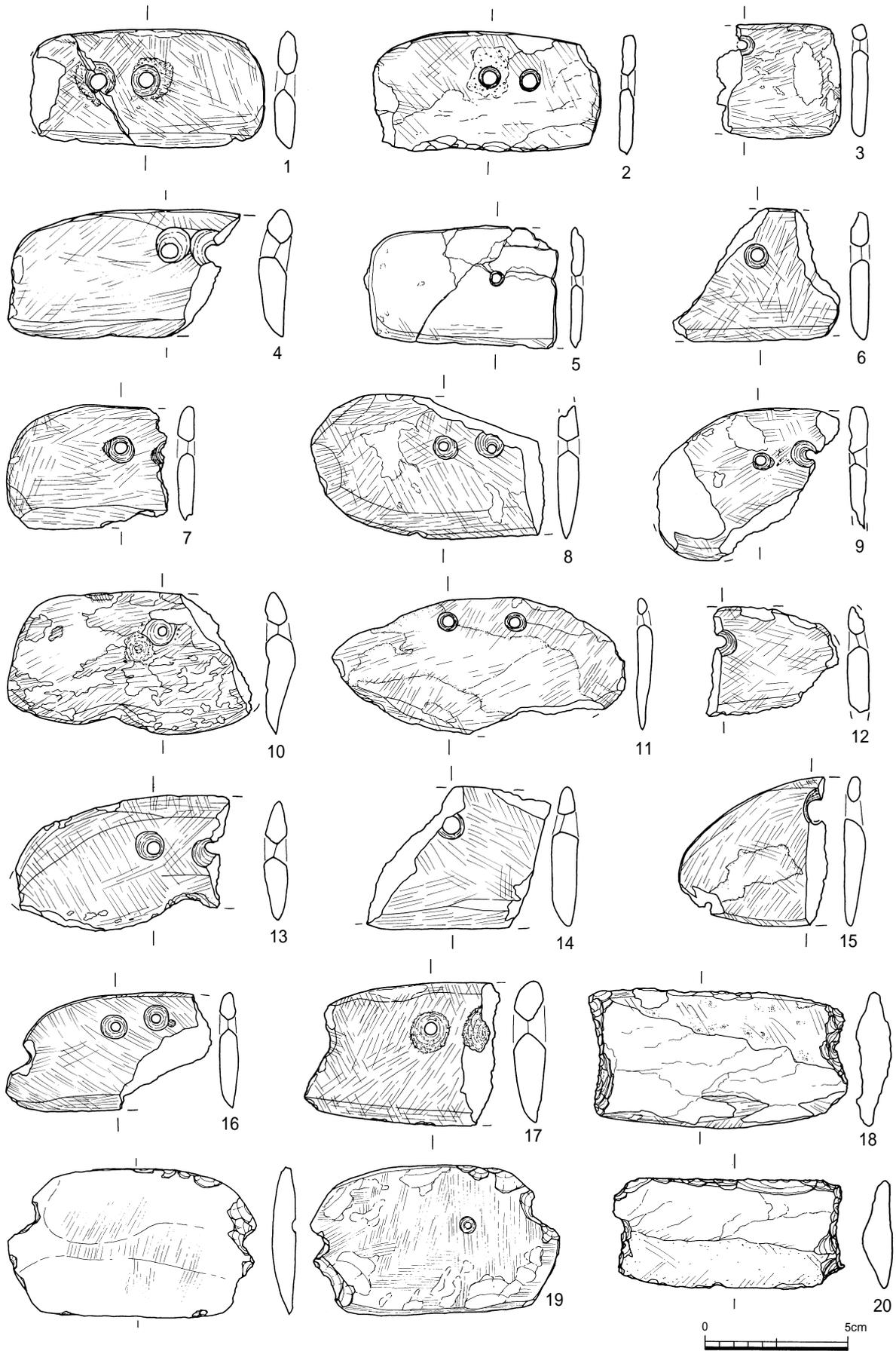
流路1 - 22 图 流路1C3区部分出土石器



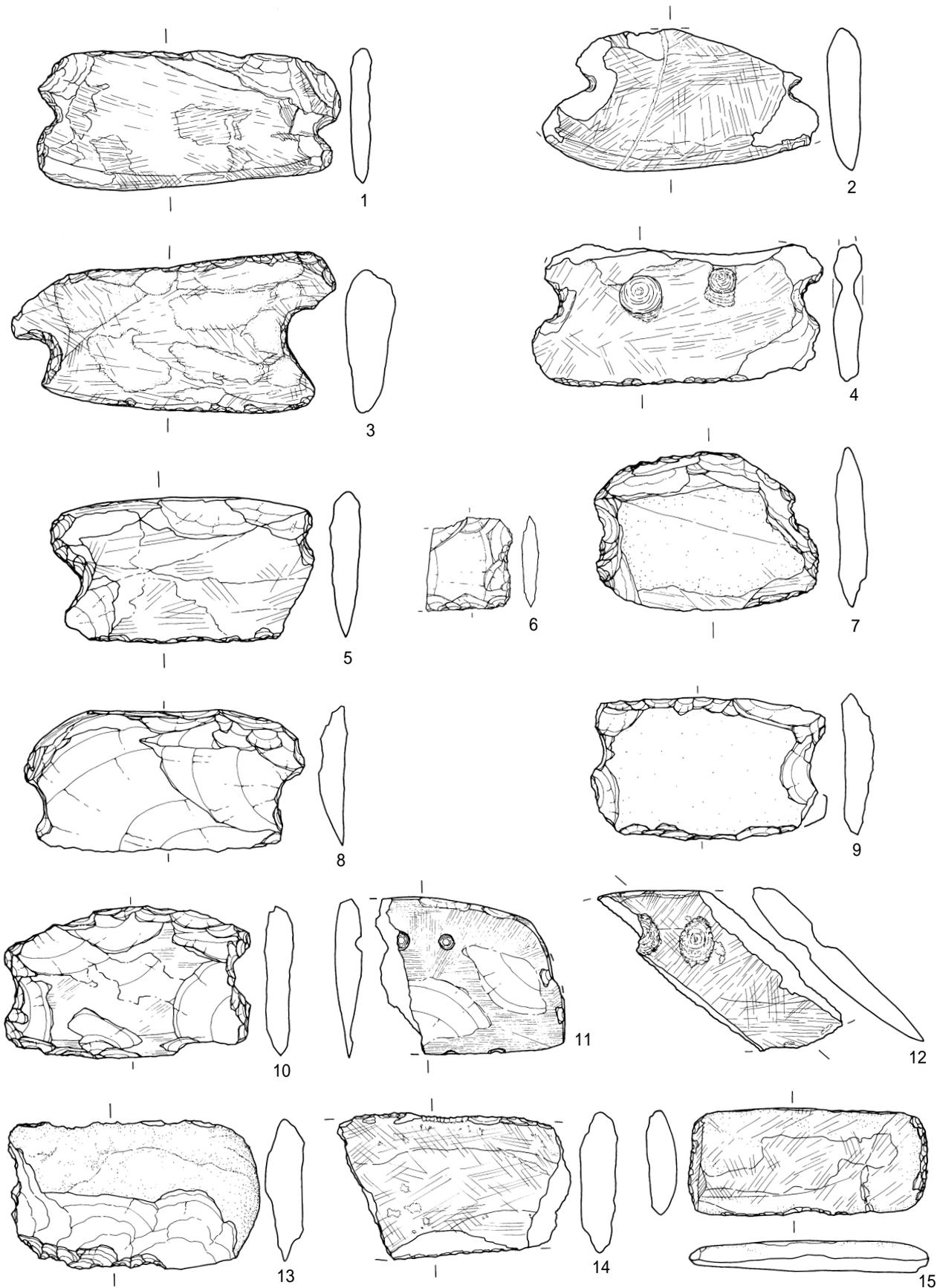
流路1 - 23图 流路1C3区部分出土石器



流路1 - 24图 流路1C3区部分出土石器

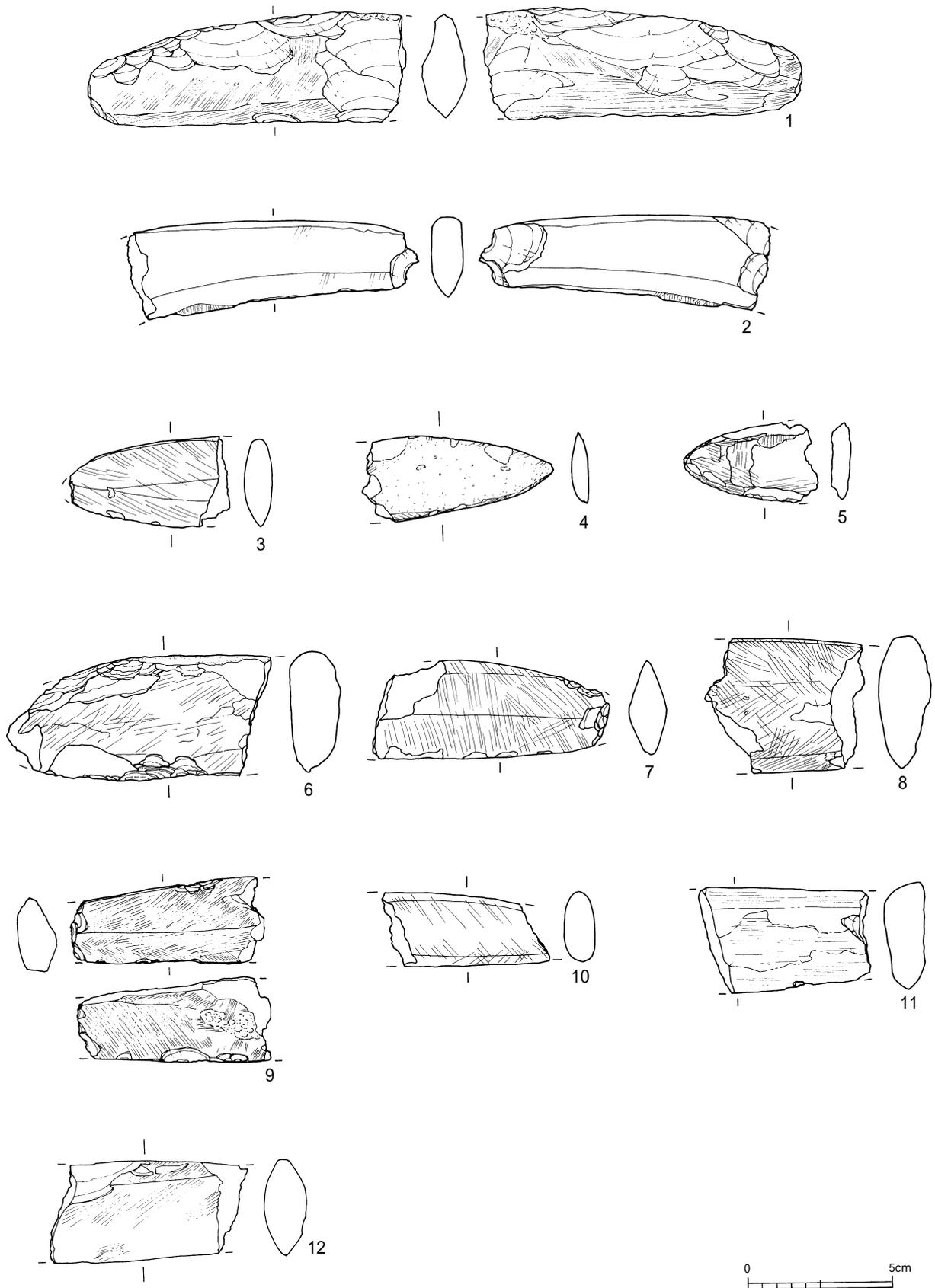


流路1 - 25图 流路1C3区部分出土石器

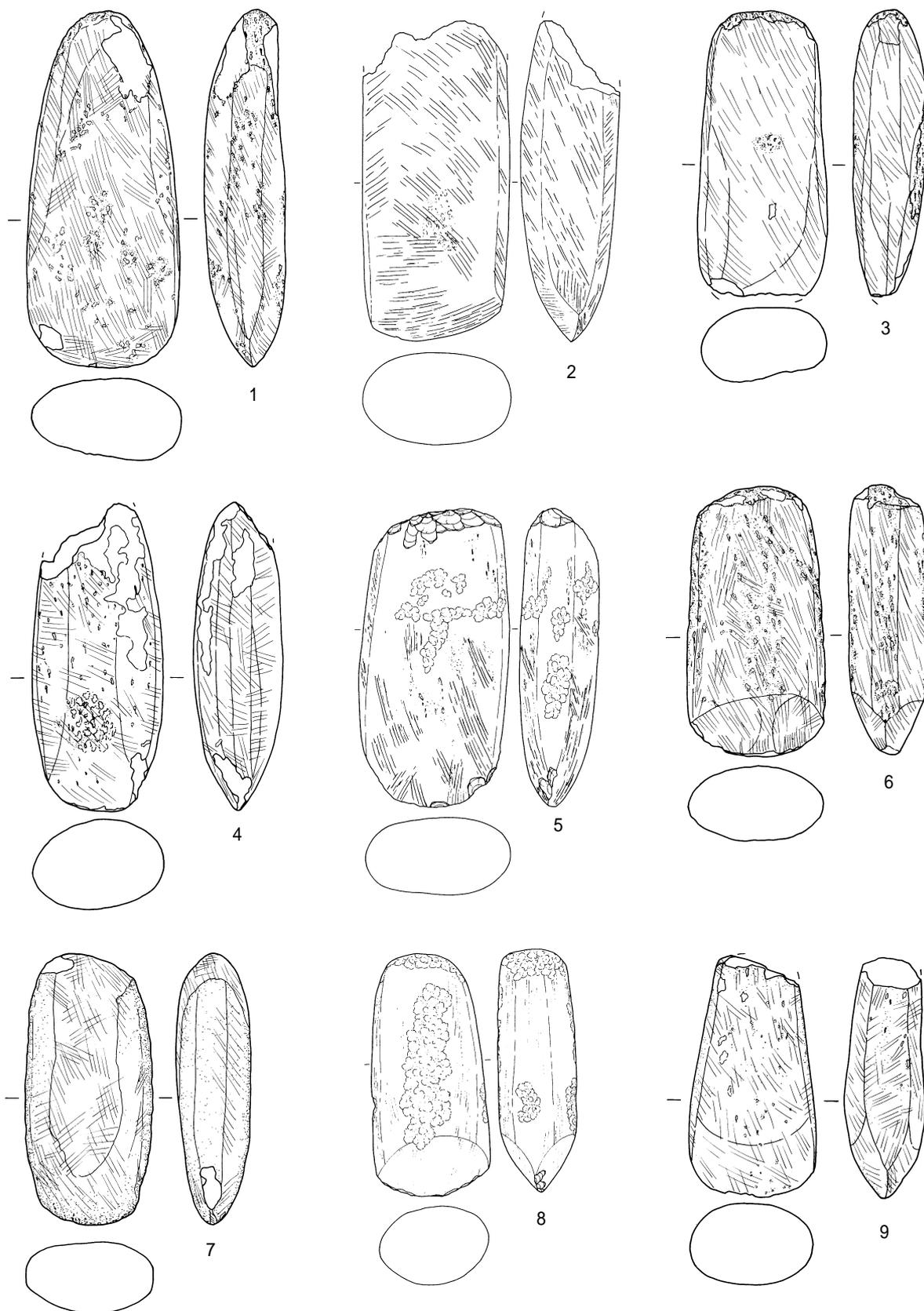


流路1 - 26图 流路1C3区部分出土石器

0 5cm
(6=2/3)



流路1 - 27图 流路1C3区部分出土石器

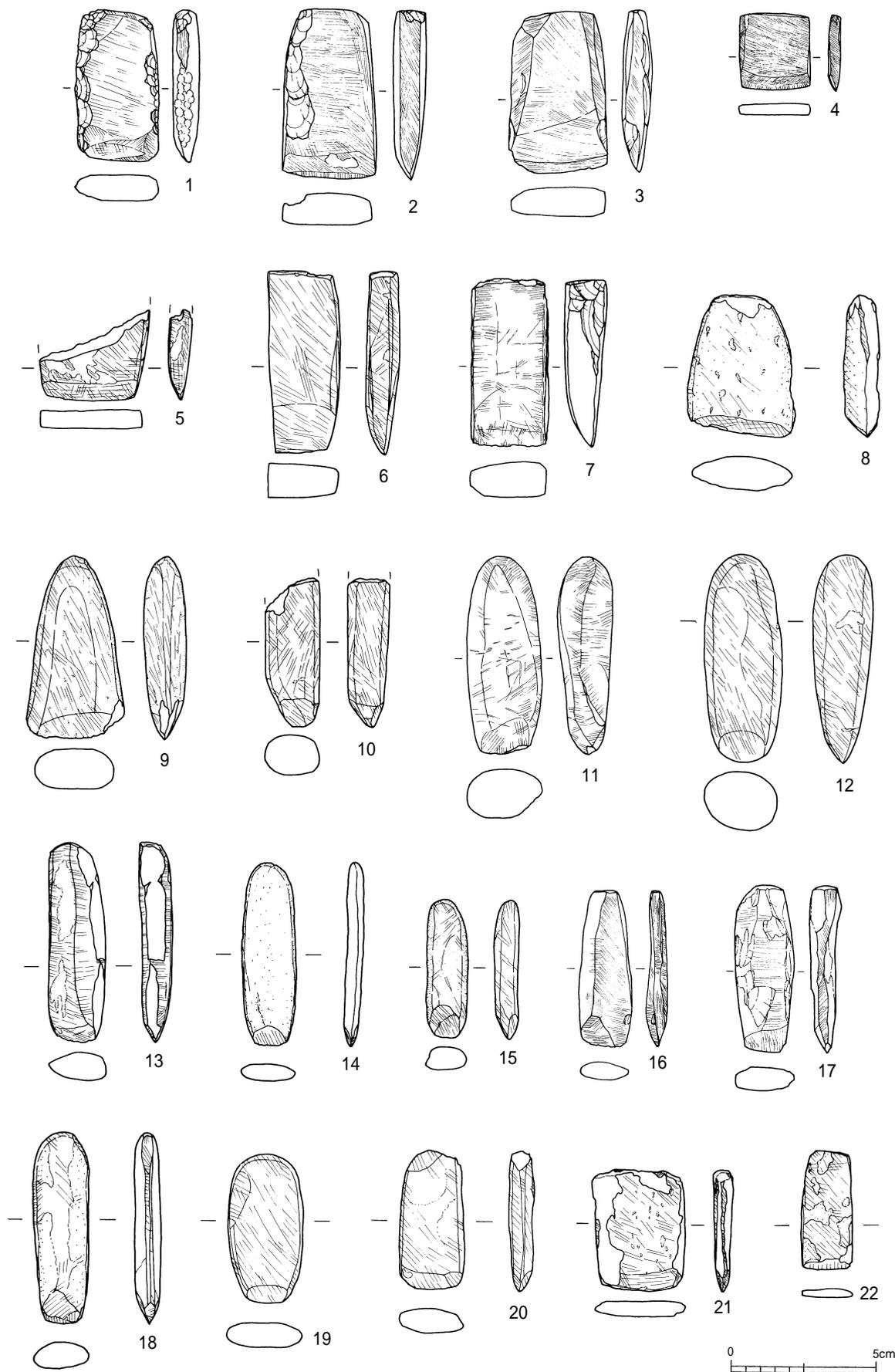


0 10cm

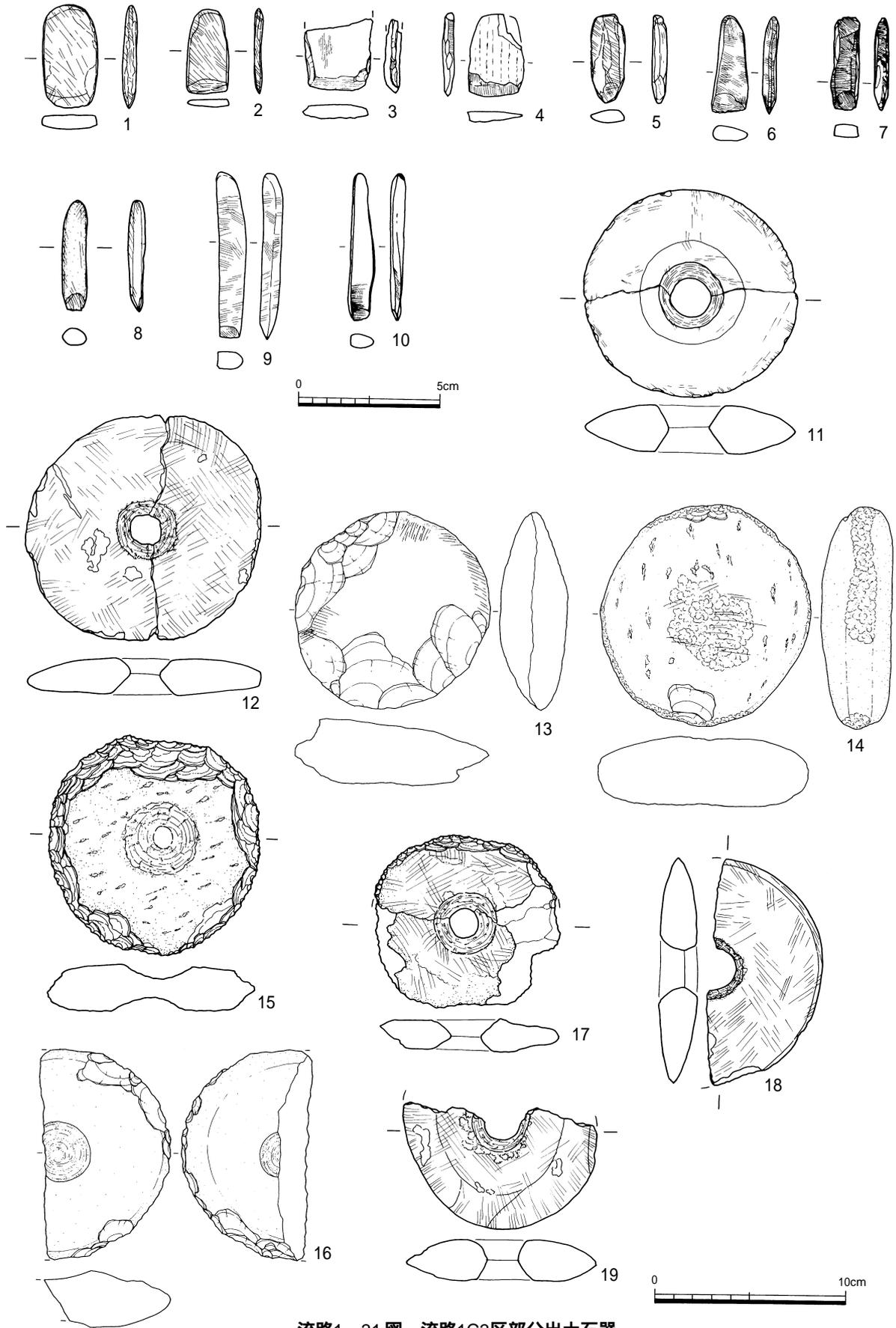
流路1 - 28图 流路1C3区部分出土石器



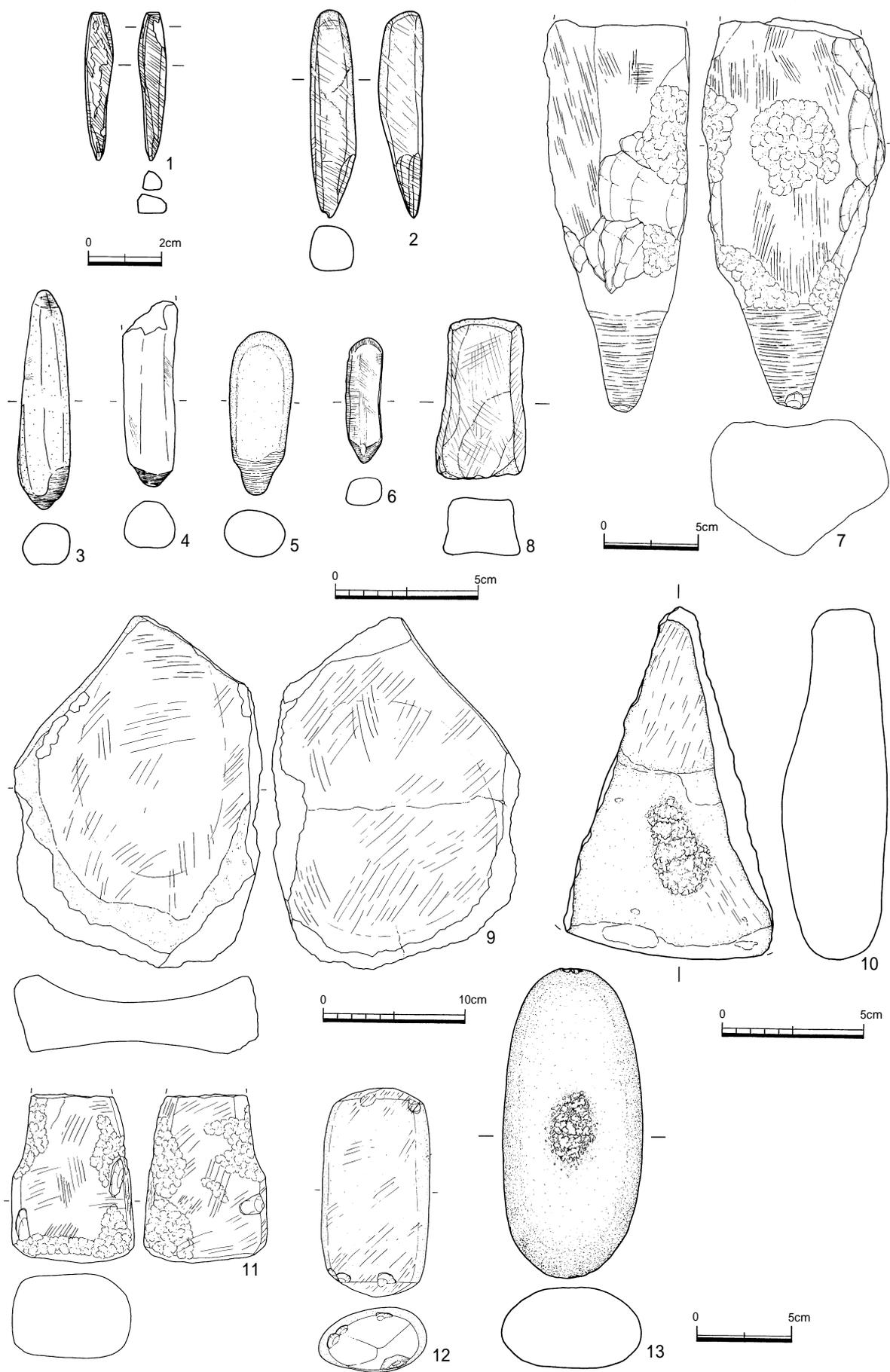
流路1 - 29图 流路1C3区部分出土石器



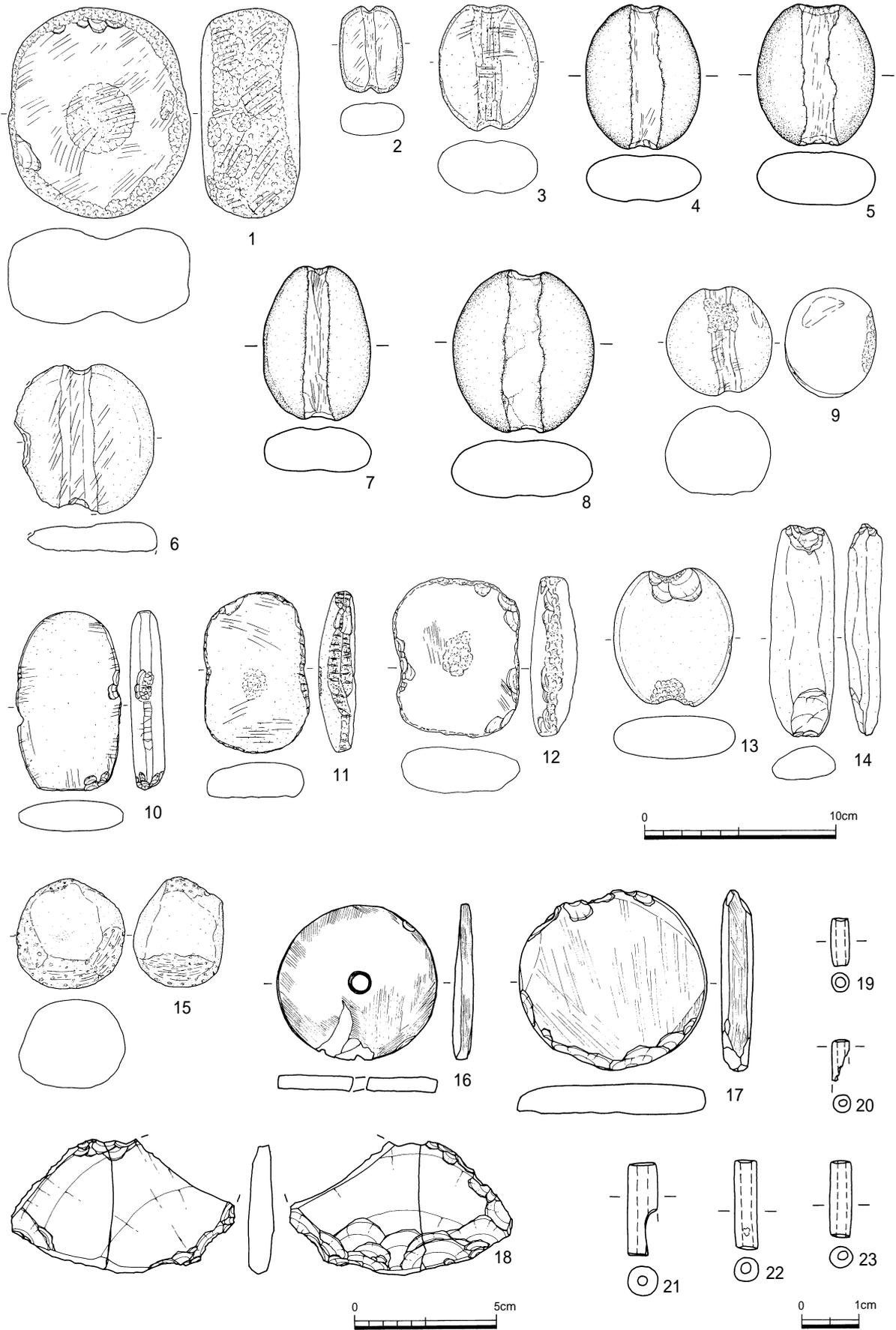
流路1 - 30图 流路1C3区部分出土石器



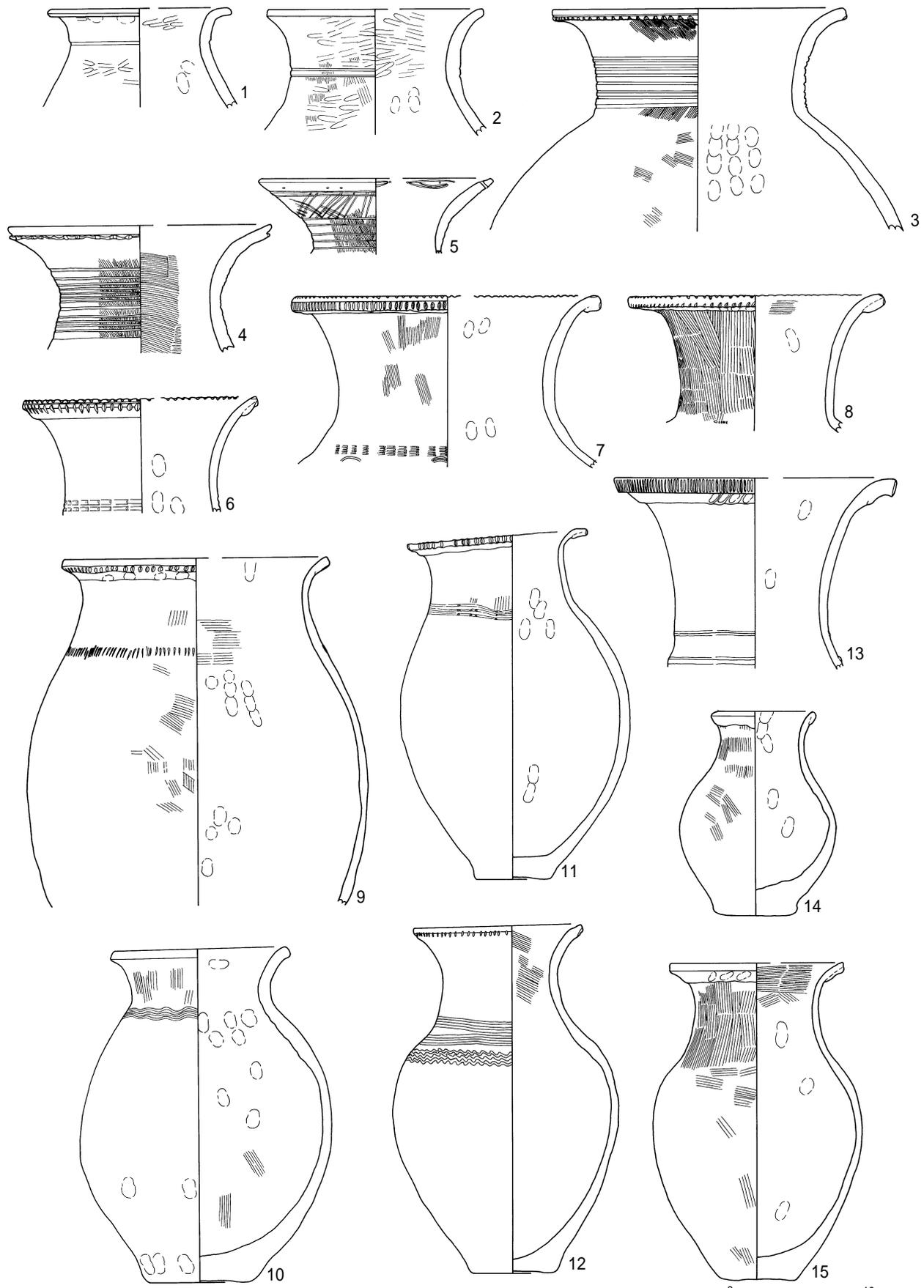
流路1 - 31图 流路1C3区部分出土石器



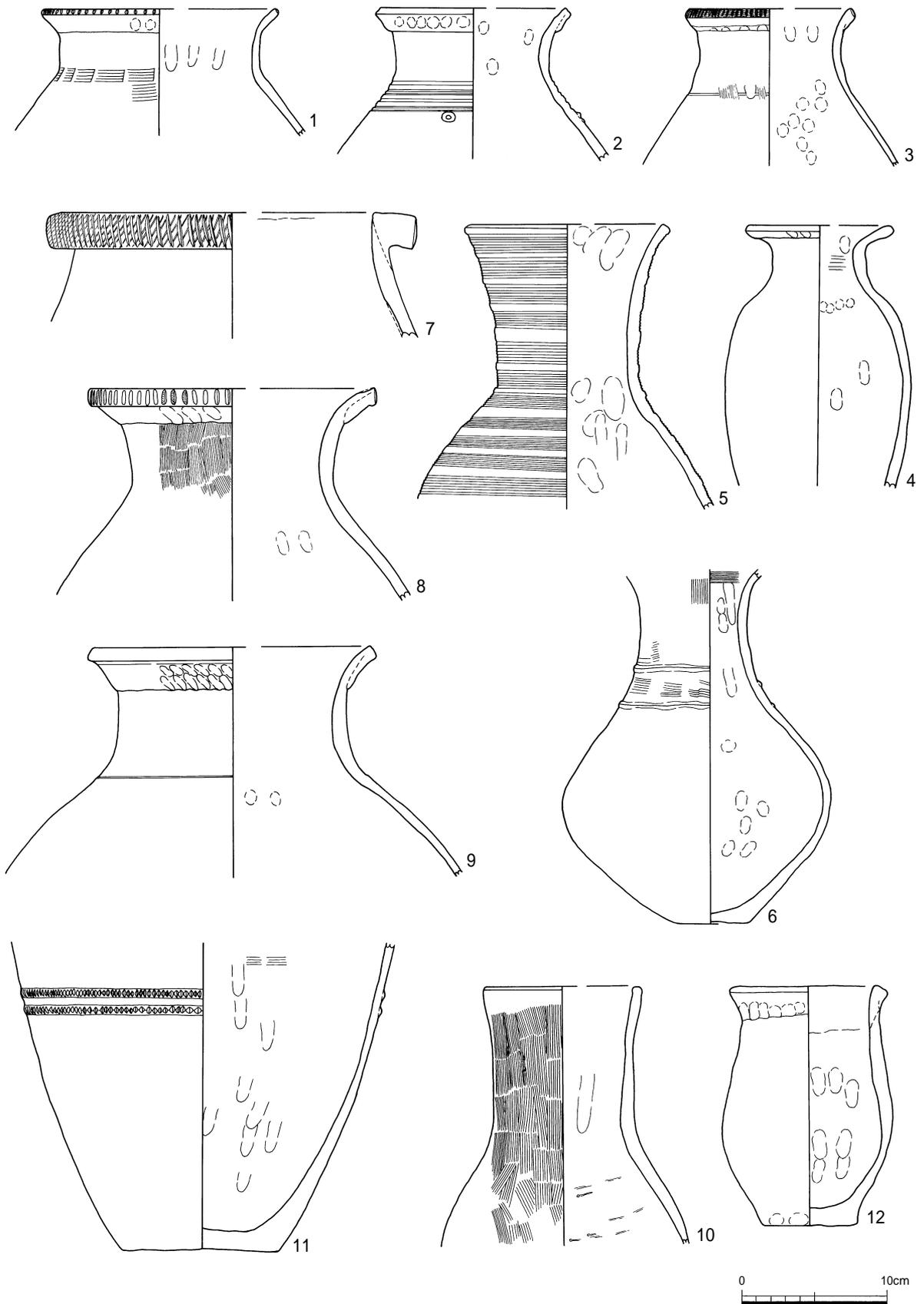
流路1 - 32 图 流路1C3区部分出土石器



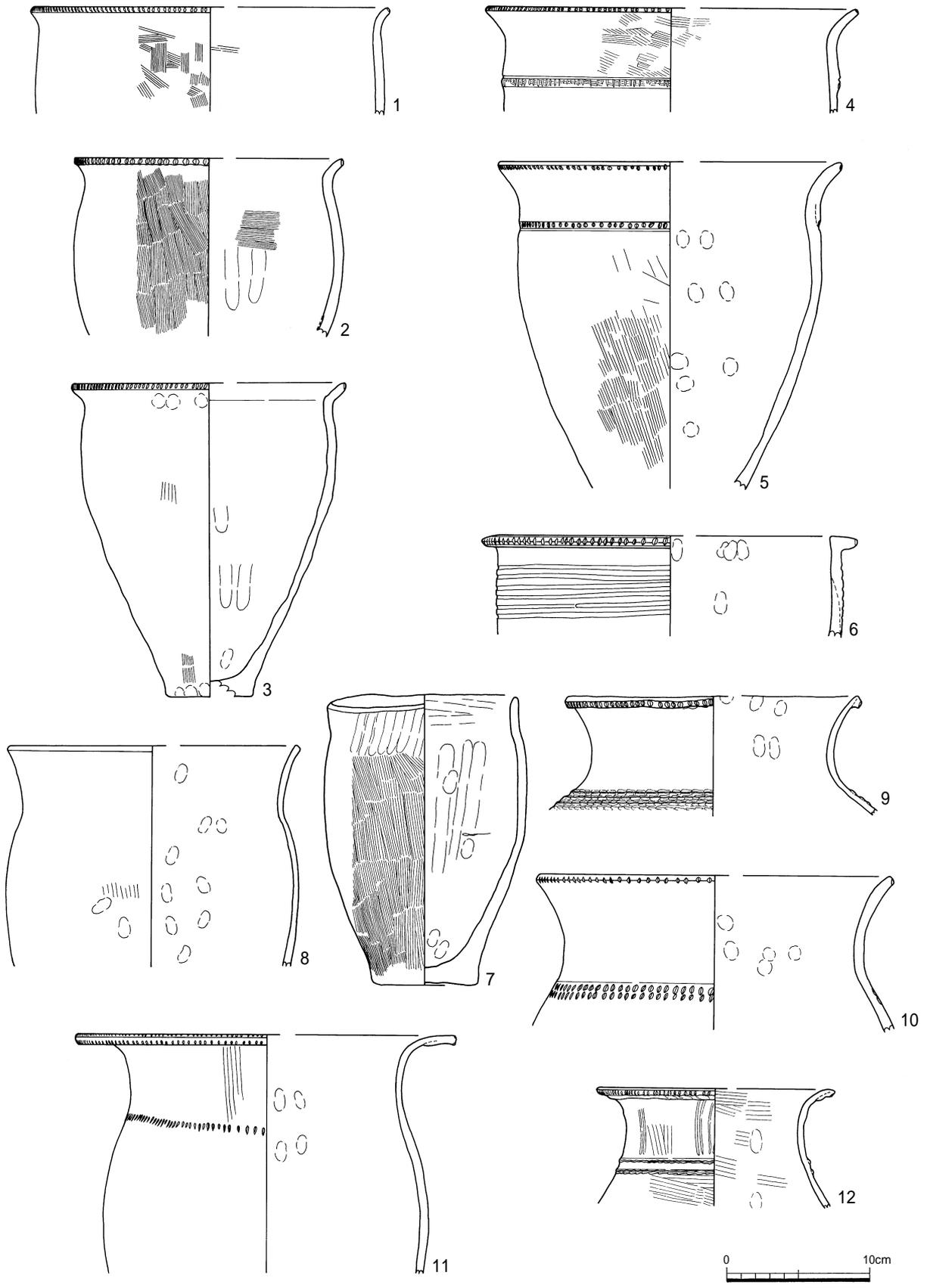
流路1 - 33图 流路1C3区部分出土石器



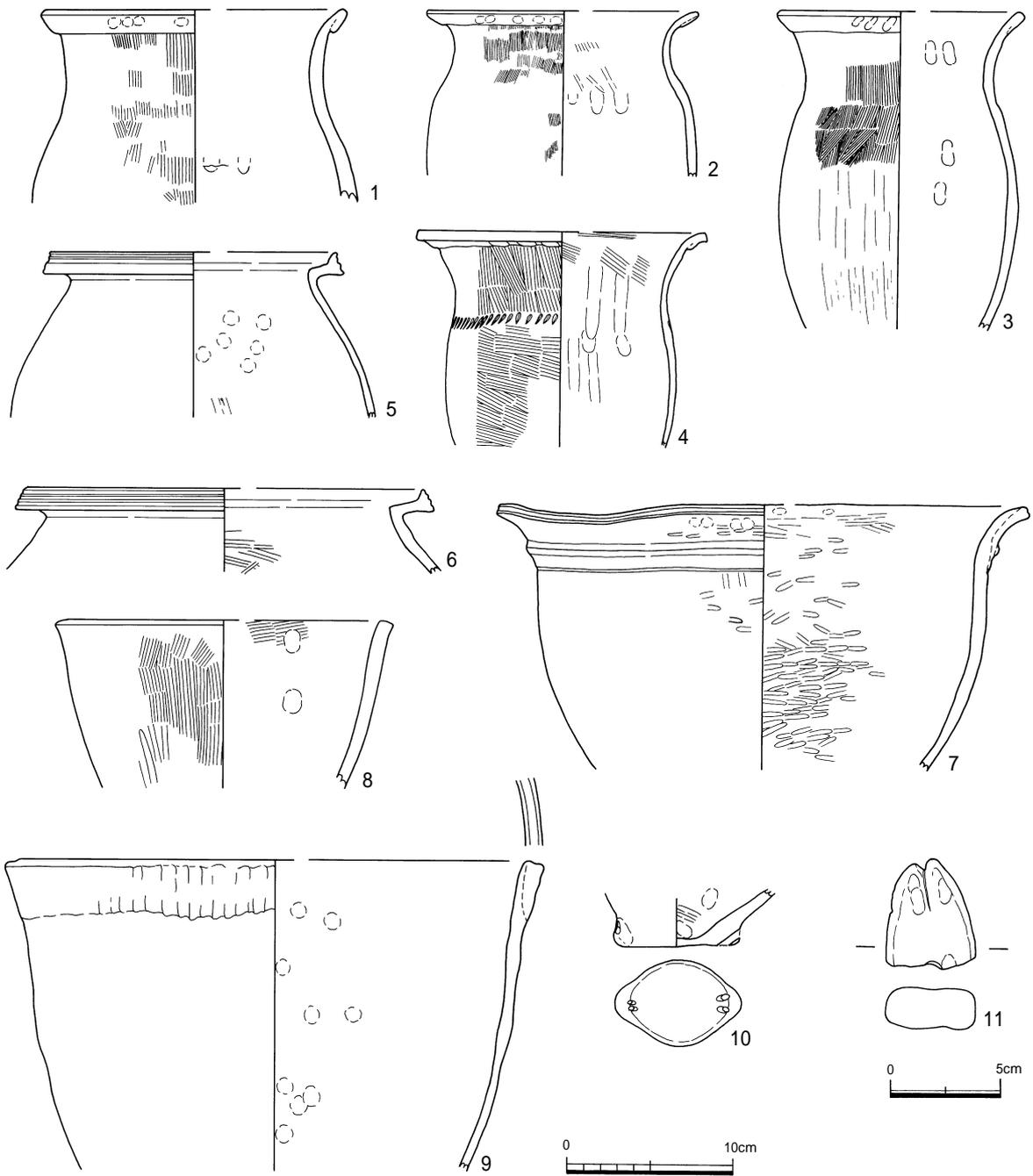
流路1 - 34图 流路1B1区部分出土土器



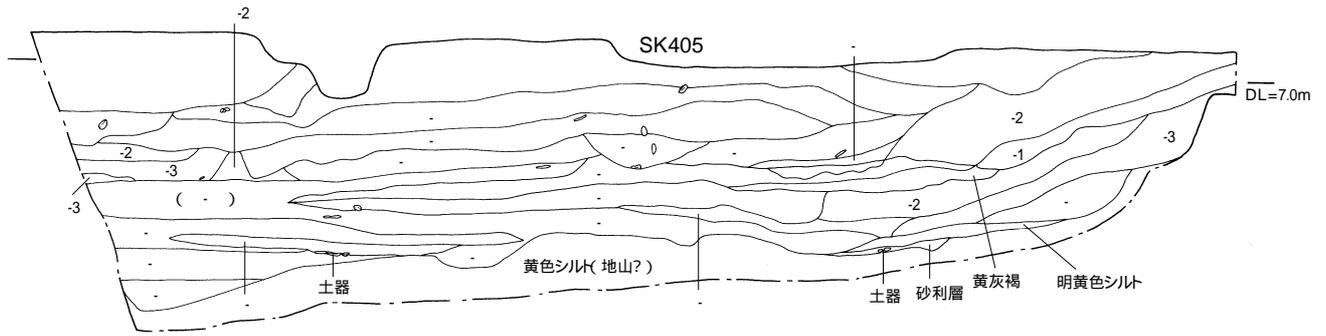
流路1 - 35图 流路1B1区部分出土土器



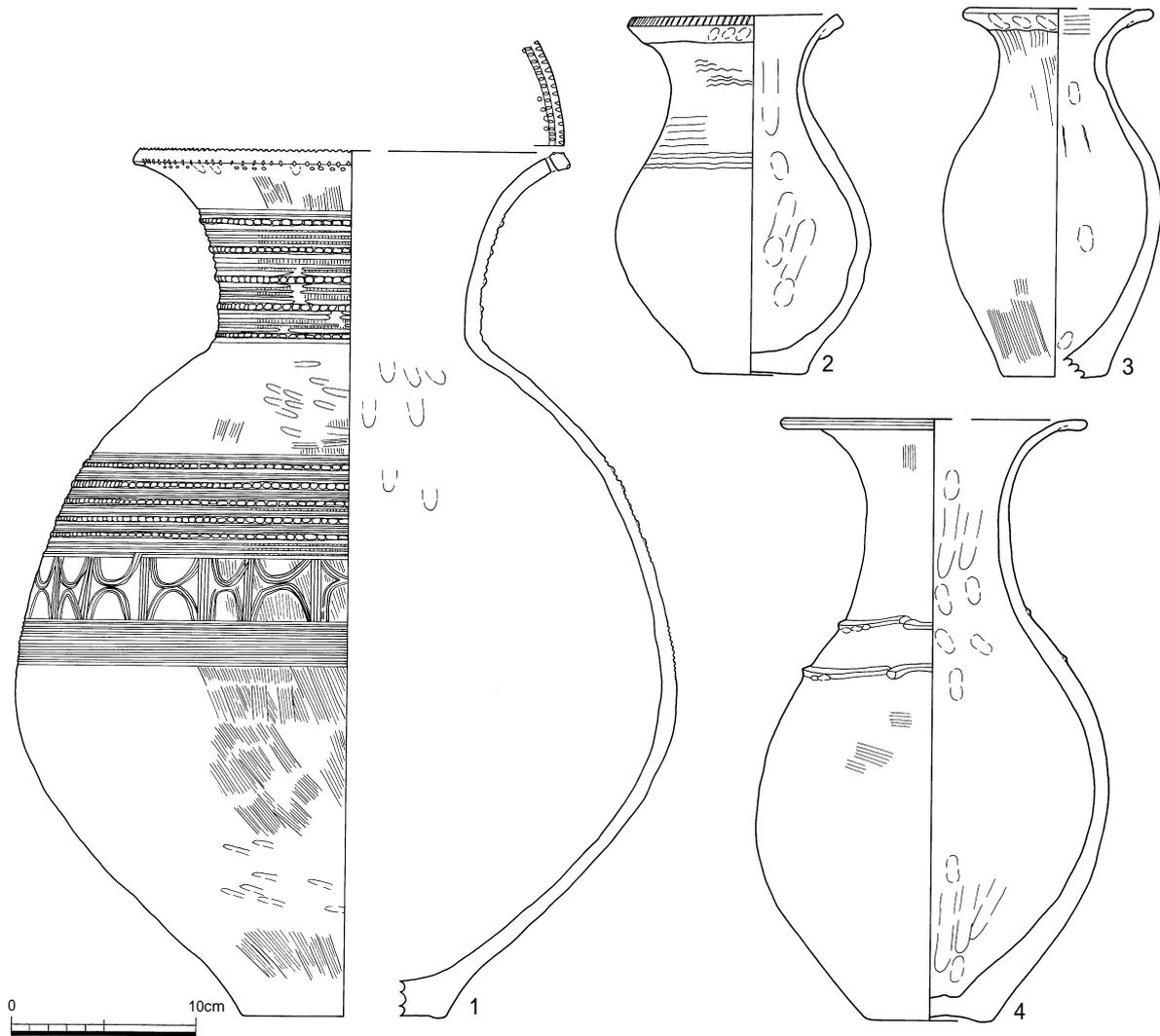
流路1 - 36图 流路1B1区部分出土土器



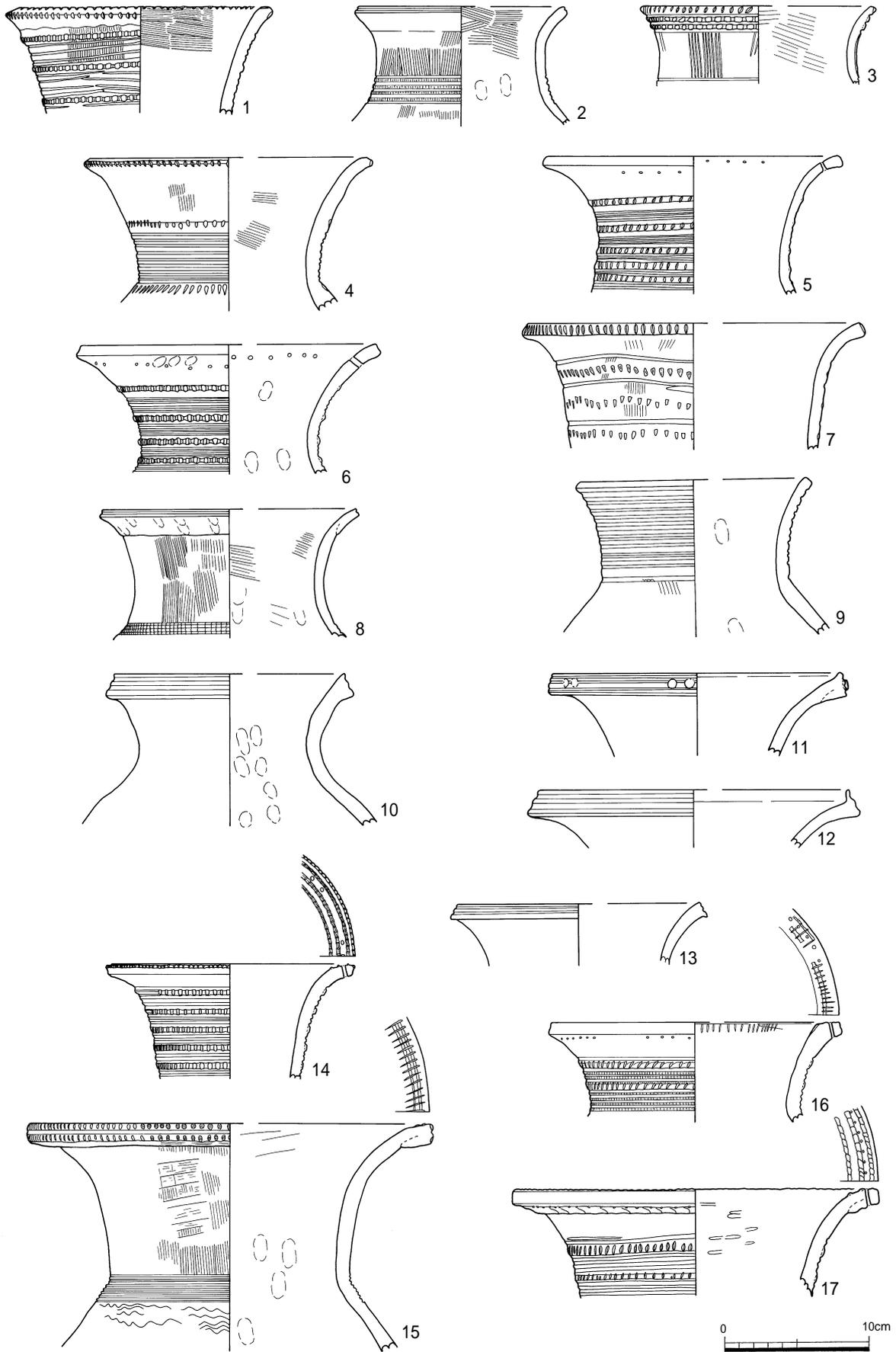
流路1 - 37图 流路1B1区部分出土土器



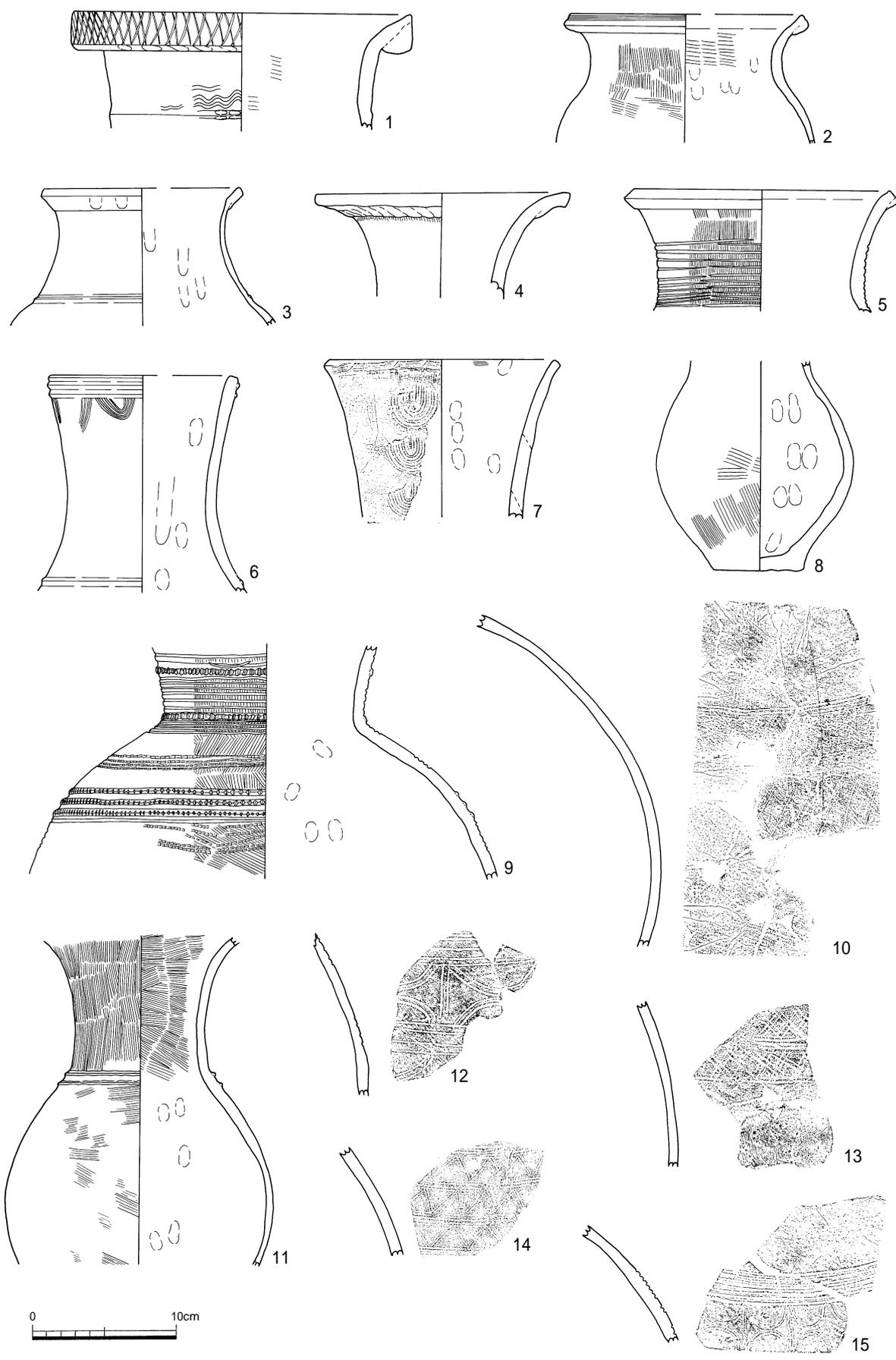
- 黒褐色シルト(10YR3/2)
- 2: 黒灰褐色シルト(礫式、微隆起帯、ヘラ描き、波線を包含する) 取り上げ
- について黄褐色シルト(マンガン含む10YR5/3) -1取り上げ
- " (に比べ砂質10YR5/3) -2取り上げ
- 1: 黄褐色シルト(粘性あり)
- 2: 灰褐色シルト(砂質) } 局部に堆積している包含層の堆積
- 3: 暗灰褐色シルト
- 灰褐色砂礫(1~3cm大の礫、粗砂)
- 暗灰色砂層(細砂、5mm~1cm大の礫含む) } -1取り上げ
- 褐灰色砂層(粗砂2~3mm大の礫、しまりあり)
- 暗灰色細砂層 } -2 "
- 灰褐色砂礫層(粗砂5mm~1cm大の礫)
- 灰褐色細砂層 } -3 " 集中 前期末
- 暗灰色砂礫層(大篠式土器一括)
- 暗灰色粘性シルト
- 灰褐色砂層(粗砂、Fe含む)
- 暗灰茶色砂礫層(粗砂5mm~1cm大の礫が均一に堆積)
- 灰色砂礫層(5mm~1cmの礫)



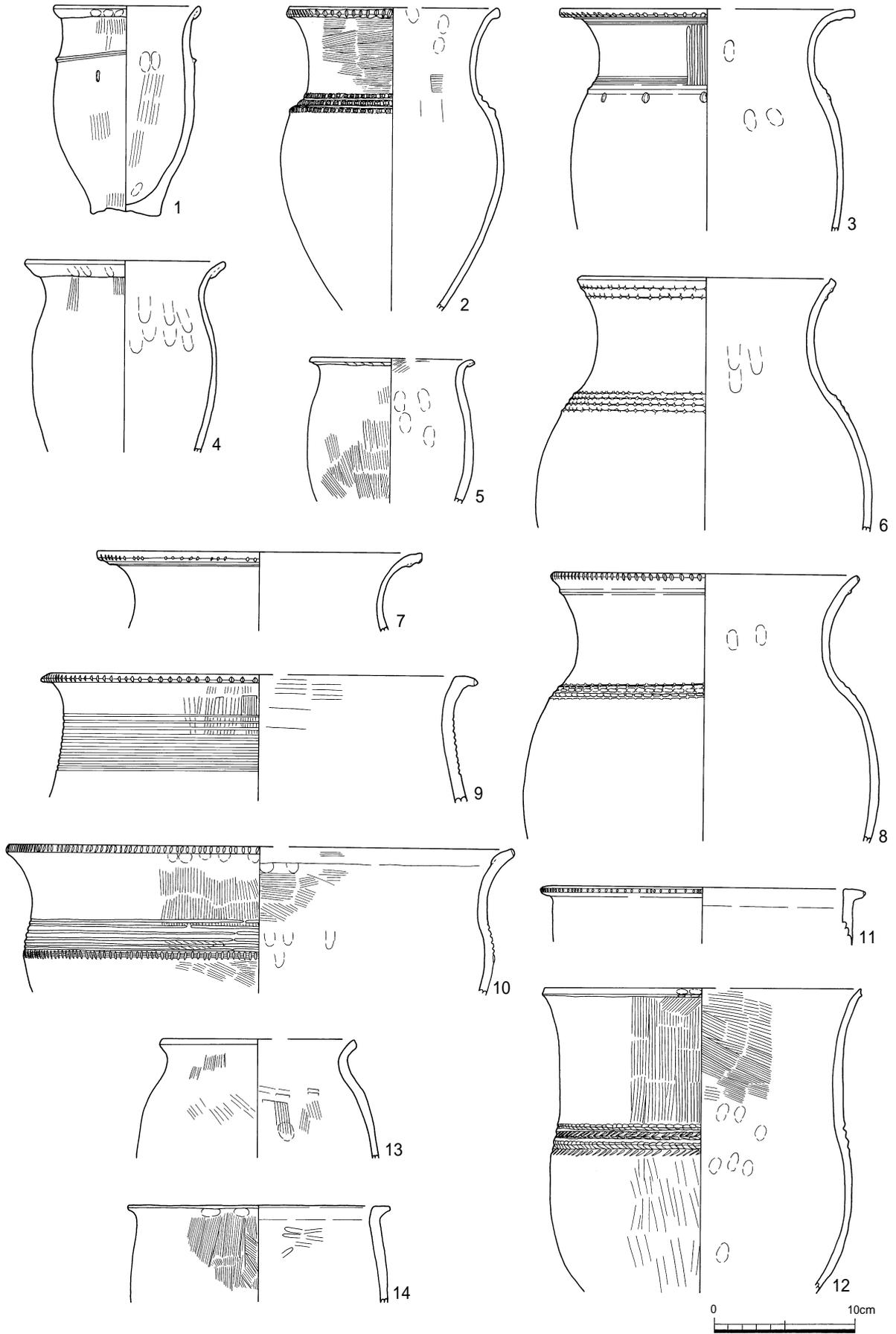
流路1 - 38 図 流路1B4区部分セクション図・出土土器



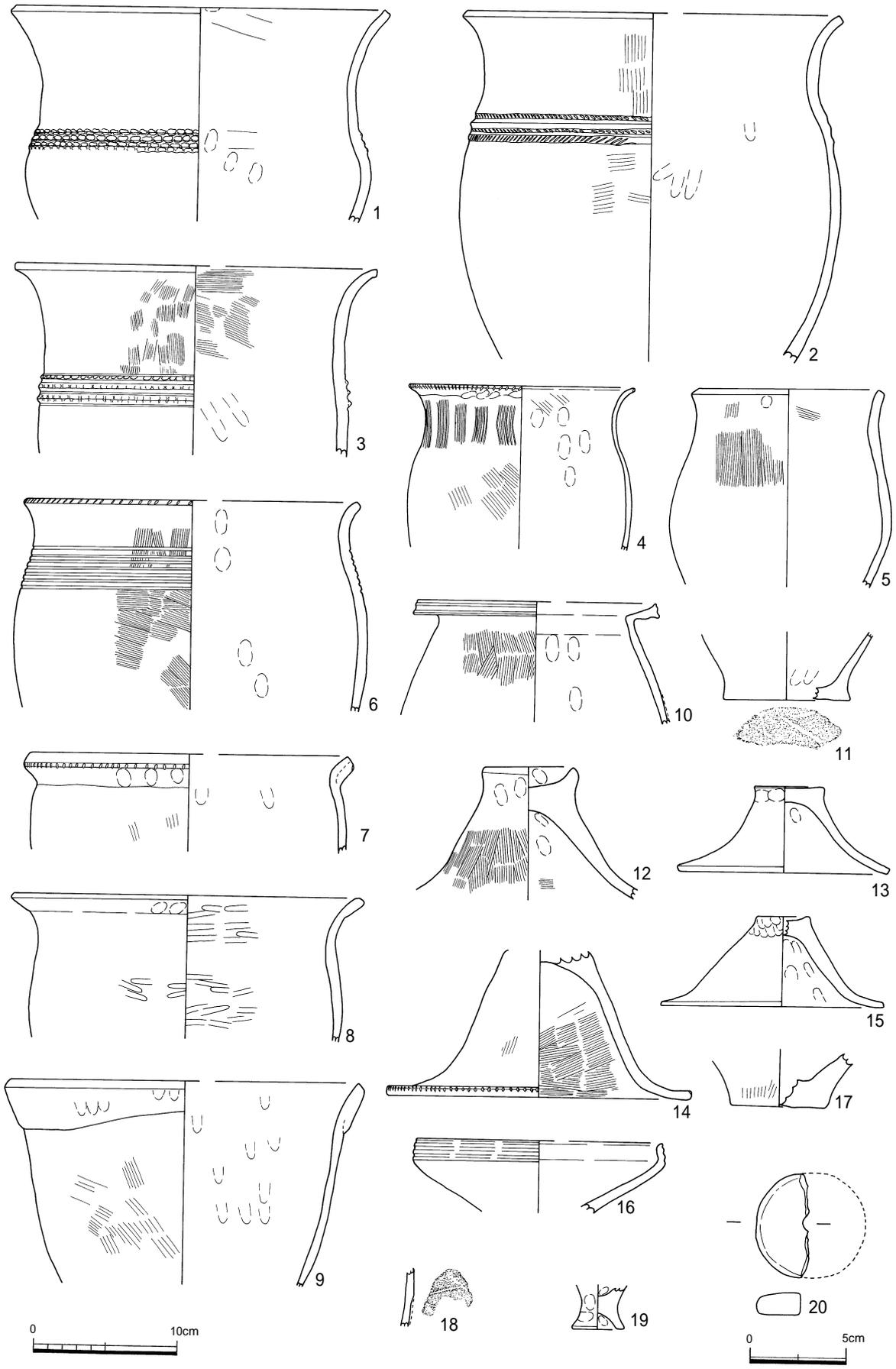
流路1 - 39图 流路1B4区部分出土土器



流路1 - 40图 流路1B4区部分出土土器



流路1 - 41 图 流路1B4区部分出土土器



流路1 - 42 图 流路1B4区部分出土土器

報告書抄録

ふりがな	たむらいせきぐん							
書名	田村遺跡群II							
副書名	高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第7分冊							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 85 集							
編集者名	吉成承三							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原1437-1 TEL 088-864-0671							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たむらいせきぐん 田村遺跡群	こうちけん 高知県 なんこくし 南国市 たむら 田村 ヤマシロ シマイテン スケ谷 コヨダ タカウジロウ	39204	040234	33° 33 8	133° 39 48	平成8年8月 ~ 平成13年12月 M-Q区調査期間 平成9年5月 ~ 平成13年7月	154,167m ² M-Q区総面積 34,751m ²	高知空港 再拡張整 備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
田村遺跡群 M~Q区	集落跡	縄文時代 中・後期	土坑7基 ピット35個 自然流路6条	縄文土器 石器		縄文時代中期と後期 の遺構・遺物の拡が りを確認した。		
	集落跡	弥生時代 前期~ 後期	竪穴住居跡26棟 掘立柱建物跡24棟 土坑96基 溝26条 流路・大溝14条 ピット約1100個	弥生土器 絵画土器 ミニチュア土器 石器 鉄器		弥生時代前期~後期 にかけての集落・大 溝を検出した。		
	集落跡	古代・ 中世	竪穴住居跡1棟 掘立柱建物跡3棟 土坑5基 溝19条 ピット39	古代 土師器 須恵器 中世 土師質土器		古代・中世の遺構・ 遺物の拡がりを確認 した。		

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集

田村遺跡群

第7分冊

編 集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

発 行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437-1

電話 088-864-0671

発行日 2004年3月31日

印 刷 株式会社 川北印刷